



國譯大藏經

論部

第十三卷

目次

以　上

國譯阿毗達磨俱舍論

卷の第二十七　（一）分別智品第七の二

本論第七　分別智品第二

第五章　十八不共法

第一節　十八不共法とは何ぞや

是の如く、已に諸智の差別を辯じつ。智所成の德を今當に顯示すべし。

中に於いて、先づ佛の不共の德を辯ぜん。且らく、（二）初の成佛の盡智の位に、不共佛法を修するに、十八種あり。何をか十八と謂ふ。

頌に曰はく、

注　十八不共

【一】此の品は前卷（第七の一）に於て、十智の差別を智そのものとして解明したるに對して、專らかくの如き智より得たる功德、換言せば智を體として成就せる功德を明にす。

【二】初の成佛云云。菩薩が有頂の第九解脱道を修して、初めて盡智を得したる位に修する德にして、他の二乘の有せざる所なるが故に不共佛法と名く。

(三)十八不共法は、謂はく、佛の十力等なり。

論じて曰はく、佛の十力と四無畏と三念住と及び大悲と、是の如きを合して名けて十八不共法と爲す。唯諸佛の盡智の時に於いて修す。餘の聖の無き所なるが故に、不共と名く。

不共の意義

第二節　十力

第一項　佛の心力

且らく、佛の(四)十力の相の別は云何。

頌に曰はく、

力の處、非處は十なり。業は八なり、滅道を除く。
定と根と解と界とは九なり。遍趣は九、或は十なり。
宿住と死生とは俗なり。盡は六、或は十智なり。
宿住と死生との智は、靜處に依る。餘は通せり。

【三】頌の舊譯
十八不共得、佛法、謂力等、

【四】十力(Daśabalāni)を明すに四段あり。初の六句は、その名と體とを明し、次の二句(七八句)は、依地を明し、次の一句(第九句)は、依身を明し、最後の一句は力の意義を明したるものなり。

頌の舊譯
處非處十智、業力有八智、
定根欲性力、九智遍行道、
或十智世智、於二六十滅、
宿住退生力、於定所餘力、
於諸地云何、力由此無礙。

十力の名と體（初六句）

贍部の男の佛身なり。境に於いて、礙無きが故に。

論じて曰はく、佛の十力とは。一には（五）處非處智力、具さに、如來の十智を以て性と爲す。二には（六）業異熟智力、八智を性と爲す。謂はく滅道を除く。三には（七）靜慮解脫、等持等至智力、四には（八）根上下智力、五には（九）種種勝解智力、六には、（一〇）種種界智力、是の如きの四力は、皆九智の性なり。謂はく、（一一）滅智を除く。

七には（一二）徧趣行智力なり。

〔頌の〕「或は」の聲は、此の義に二途有ることを顯はす。「謂はく」若し但だ能趣を緣じて、境と爲すと謂はゞ、九智なり。（一三）滅を除く。若し亦所趣をも緣じて、境と爲すと謂はゞ、十智を

【五】處非處智力(Sthānāsthāna-jñāna-bala)。道理に適ひ、道理に適はざること、即ち是處非處を辨別する智力。それは有爲無爲、有漏無漏の四に通す。

【六】業異熟智力(Karma-vipāka-jñāna-bala)。舊譯、於業及果報中智力。如是の業は如是の果を招得すと知る智力。

【七】靜慮解脫等持等至智力(Dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-jñāna-bala)。舊譯、定解脫三摩提三摩跋提智力。靜慮等を實の如く知る智力のこと。

【八】根上下智力。(Indriya-parāpara-vara(?)-jñāna-bala)。舊譯、轉轉根智力。根とは信勤念定慧の五根にして、此五根が上中下の別有るを以て、其根性の者の智の優劣を辨別する智。

【九】種種勝解智力。(Nānādhimukti-jñāna-bala)。舊譯、種種欲智力。一切有情の意樂の千差萬別せるを如實に知る智。

【一〇】種種界智力。(Nānā-dhātu-jñāna-bala)。舊譯、種種性智力。有情の過去の習慣より生ぜる志樂の差別を如實に知る智。

【一一】滅智を除く所以は上の四は凡て有爲を緣じて無爲を緣ぜざるを以てなり。

【一二】徧趣行智力。(Sarvatra-gāminī-pratipaj-jñāna-bala)。舊譯、遍行道智力。一切諸行の必定して果に趣向することを了知する智。

【一三】滅を除く。或はただ所趣にして、能趣にあらざればなり。

性と爲す。

八には(一四)宿住隨念智力、九には(一五)死生智力、是の如きの二力は、皆俗智の性なり。

十には(一六)漏盡智力なり。

「頌の」「或は」の聲は、亦義に二途有ることを顯はす。「謂はく」若し(一七)但だ漏盡を緣じて。境と爲すと謂はば、六智なり。道と苦と集と他心とを除く。若し漏盡の身の中の所得なりと謂はば、十智を性と爲す。

十力の依地（七八句）

已に自性を辯じつ。依地の別を云はば、(一八)第八第九は四靜慮に依り、餘の八は通じて、十一地に依りて起る。欲と四靜慮と未至と中間と並びに四無色とを、十一地と名く。

依身（第九句）

已に依地を辯じつ。依身の別を云はば、皆贍部の男子の佛身に依る。

力の意義（第十句）

已に依身を辯じつ。何故に力と名くるか。

一切の所知の境の中に於いて、智の無礙に轉ずるを以ての故に、名けて力と爲す。

十力は佛のみに依る

此れに由りて、十力は唯佛身のみに依る。唯佛のみ、已に諸の惑の

【一四】宿住隨念智力。(Pūrva-nivāsānusmṛti-jñāna-bala)。舊譯、宿住念智力。宿世のことを知る智力にして、念の心所が強勝なる故に隨念といふ。

【一五】死生智力(Cyuty-upapatti-jñāna-bala)。舊譯、同。未來に死生する處趣を知る智力。

【一六】漏盡智力(Āsrava-kṣaya-jñāna-bala)舊譯、流盡。漏盡とは擇滅のこと。

【一七】但だ漏盡を緣じて云云。漏盡その者は滅なるを以て、道と苦と集と他心とは關係せず。ただ位と法と類と滅と盡と無生智の六のみより成立す。

【一八】第八第九とは、宿明智を第八といひ、無生智を第九といふ。

(一九)習氣を除きて、一切の境に於いて、欲に隨ひて能く知ればなり。餘は此れと相違するが故に力と名けず。(二〇)舍利子の、度を求むる人を捨し、鷹の逐ふ所の鴿の前後二際の生の多少を觀知すること能はざる等の如し。

佛の心力

第二項 佛の心力

是の如く。諸佛は徧く所知に於いて心力無邊なり。

佛の身力

云何んが身力なる。

頌に曰はく、

(二一)身は那羅延の力あり。或は節節皆然なり。

象等の七の十增す。此れは觸處を性と爲

【一九】習氣(Vāsanā)。習慣的餘性。

【二〇】舍利子云云。初の因緣は佛在世の時、一の誓多門首といふもの有り。舍利子に就きて出家を求むと雖も、舍利子此人を見るに、八萬劫來曾て解脫分の善を種ゑず、出家の因緣無きを以て、捨して濟度せざりしが後、彼の人、佛に至りて法を獲、出家入道せり。舍利子怪しんで其の故を佛に質せるに佛の曰はく、我れ昔、迦維羅國に於いて街衢を掃灑し、定光如來を請じて供養せんと欲せしに、人有り城に入りて柴を賣る。因みに請佛のことを聞きて讃歎し、更に柴を取り來りて錢にかへ、佛に供養せんと欲し、山に入りしも蟲に食はれて死す。その死せんとせし時、佛の名號を稱せんと欲せしも忘れて憶せず。仍りて、南無城中に迎へられんと欲する者と唱せり。之れを順解脫分の善と爲す。昔、舍利子等は時の遠きが爲めに知ること能はざるなりと云云。(此の因緣は賢愚因緣經第四、參照)。次の因緣は婆沙論八十三に出づ。(大智度論十一、參照。)佛嘗て祇洹に住す。晡時經行するに一鴿有り。鷹に逐はれて佛の邊に飛來す。佛經行して佛影の鴿を覆ふや、鴿の怖畏則ち除き鴿復た鳴かず。然るに舍利子の影至りて佛影過ぐるや鴿は又復た聲を作して戰怖す。仍りて舍利子の佛に白さく、佛と我と共に三毒を除くに何を以てか是の如くなるぞと。佛卽ち曰はく、汝、三毒を除くも尚習氣の殘ること

す。

生身の力　論じて曰はく、佛の生身の力は、(二二)那羅延に等し。

異說の一　有る餘師の言はく、佛身の肢節一一に皆那羅延の力を具すと。

異說の二　法救の說　(二三)大德法救の說く。諸の如來の身力は無邊なり。猶し心力の如し。若し此れに異らば、則ち諸佛の身は、無邊の心力を持すること能はざるべけんと。

大覺獨覺及び輪等力の喩　大覺と獨覺と及び輪轉王との肢節は、相連ること、其の次第の如く、龍の蟠結すると、連鎖と相鉤とに似たり。故に三を相望むれば、力に勝劣有るなり。

那羅延の力量　那羅延の力は其の量如何。

第一說　(二四)十十に象等の七の力を倍增す。謂はく、凡象と香象と摩訶諾健那と鉢羅塞建提と伐浪伽と

有り。我れは則ち習氣も永く斷除せり。此に依りて然りと云云。尙佛は舍利子に命じて鴿の前生及び後生を觀ぜしめしも、舍利子は前後二際共に八萬大劫以上を觀ずること能はざりしと記せり。

【二一】頌の舊譯

身那羅延力、或節節百增、
象等七種力、此偈入爲レ性。

上に十の心力を擧げたる義便に乘じて佛の身力を叙せんと欲するものなり。第一句は身力の量を叙し、第二句は異說を叙し、第三句は那羅延の力量を叙し、第四句は身力の體を叙す。

【二二】那羅延(Nārāyaṇa)とは毘紐拏(Viṣṇu)の一異名にして、世界觀的には之を宇宙の創造主と見る說もあれど、ここにては專ら之を大力神として說くなり。

【二三】稱友は、大德とは譬喩者の上座なりと釋す。

【二四】十十に象等の云云。凡象(Prākṛta-hastin)即ち普通の象の力を十倍して香象(象の交尾期に至れば耳下より一種

遮怖羅と那羅延となり。後後の力は前前に增すること十倍なり。

第二說

〔二五〕有るは說く、前の六は十十に倍增して、那羅延の半身の力に敵す。此の力一倍して、那羅延を成ずと。

世親の評取

〔二六〕所說の中に於いて、唯多なるが理に應ず。

佛の身力の體

是の如き身力は觸處を性と爲す。謂はく、〔二七〕所觸の中の大種の差別なり。

異說

〔二八〕有るは說く、是れは造觸にして、七を離れて外に別にありと。

第三節　四無畏

佛の四無畏の相は云何。

頌に曰はく、

の液を流し其香高し。其時には最も狂暴性を發揮するを以て其時の象を斯く名けたるが如し、或は醉象とも云ふ）の力となり。香象の十倍が摩訶諸健那（Mahā-nagna神名）の力となり、その神力の十倍が鉢羅塞建提（Praskandi神名）の力となり、その神力の十倍が伐浪伽（Varāṅga神名）の力となり、その神力の十倍が遮怒羅（Cāṇūra神名）の力となり、その神力の十倍が卽ち那羅延の力量なり。

【二五】有るは云云の第二說にては前の六は次次に十倍して增すと前說の如きも、最後の遮怒羅の力は伐浪伽の力に十倍するも、尚那羅延の力に比しては、其の半に過ぎずといふ意なり。

【二六】所說の中云云。佛の身力に就て種種の異說あれど、とにかく之を多大に計算する方が眞なりとなり。

【二七】所觸の中の大種とは能造の大種をいふ、特別の力の大種ありと云ふ。

【二八】有るは說く云云。ここは、身力は所造の觸にして、而も普通の所造觸の七の外に別に力觸ありと。普通の所造觸とは滑澁色輕冷飢渴をいふ。（地水火風は能造觸）。

〔二九〕四無畏は次の如く、初と十と二と七との力なり。

列名

論じて曰はく、佛の四無畏は、〔三〇〕經に廣く說くが如し。一には〔三一〕正等覺無畏、十智を性と爲す。猶し初の力の如し。二には〔三二〕漏永盡無畏、六と十との智の性なり。第十の力の如し。第三には〔三三〕說障法無畏、八智の性と爲す。第二の力の如し。四には〔三四〕說出道無畏、九と十との智の性なり。第七力の如し。

無畏と智

如何にして、智に於いて、無畏の名を立つるか。

此の無畏の名は、怯懼無きに目く。智有るに由るが故に、他を怯懼せざるなり。故に無畏の名は、諸の智の體に目く。

論主の義

理實には無畏は、是れ智の所成なり。說いて體は卽ち是れ智とは言ふべからず。

【二九】頌の舊譯
無畏有₂四種₁、前二初十力、後二第二七。

【三〇】經とは增一阿含四十二（大正二、二四右）及び同十九（大正一、七八左）參照。

【三一】正等覺無畏(Samyak-sambuddha-vaiśāradya)とは、我は正等覺者なりとの大自覺ありて、他に非難せらるるも畏るることなきをいふ。その體は處非處智力と同じく十智を性とす。

【三二】漏永盡無畏(Āsrava-kṣaya-vaiśāradya)とは我は煩惱を永盡したりとの大自覺を有して畏るることなきをいふ。第十の漏盡智力と同じ。

【三三】說障法無畏(Antarāyika-dharmākhyāna-vaiśāradya)。染法は必ず障をなすと說いて、他の抗議に逢ふも恐るることなきをいふ。第二の業異熟智力と同じ。

【三四】說出道無畏(Nairyāṇika-pratipadākhyāna-vaiśāradya)。道を修すれば必ず苦を出づと說いて恐るることなきをいふ、第七遍趣行智力と同じ。

第四節　三　念住

佛の三(三五)念住の相の別は如何。

頌に曰はく、

(三六)三念住は念慧なり。　順と違と倶との境を緣ず。

第一念住　論じて曰はく、佛の三念住は、經に廣く說くが如し。諸の弟子衆、一向に恭敬して、能く正受行すれども、如來は之れを緣じて、歡喜を生ぜず、捨てて正念正知に安住す、是れを如來の第一の念住と謂ふ。

第二念住　諸の弟子衆、唯恭敬せず、正しく受行せざれども、如來は之れを緣じて、憂慼を生ぜず、捨てて正念正知に安住す、是れを如來の第二念住と謂ふ。

第三念住　諸の弟子衆の一類は恭敬して、能く正受行し、一類は敬せず、正受行せざれども、如來は之れを緣じて、歡慼を生ぜず、捨てて正念正知に安住す、是れを如來の第三の念住と謂ふと。

如來三念住の體　此の三は皆念と慧とを用つて體と爲す。

【三五】念住 (Smṛty-upasthāna)。
【三六】頌の舊譯　三念念慧住。　初句は三念住の體を明し、第二句は其所緣を明す。

諸の大聲聞も亦弟子の順と違と倶との境に於いて、歡感と倶とを離るるに此れのみを何ぞ名けて不共佛法と爲すか。

不共と名くる理由

（三七）唯佛のみ、此れに於いて、習を倂せて斷ずるが故なり。

論主の說

（三八）或は諸の弟子は、如來に隨屬す。〔彼等の〕順と違と倶とあるとき、應に甚だ歡感すると有るべし。〔而も〕佛は能く起さず、希奇と謂ふべし。諸のものは聲聞に屬するに非ざれば起さずとも奇特に非ず。故に唯佛に在りてのみ、不共の名を得。

第五節　大悲

諸佛の（三九）大悲は、云何なる相の別あるか。

頌に曰はく、

（四〇）大悲は唯俗智なり。資糧と行相と境と
平等と上品との故なり。悲と異ることは八因に由る。

【三七】唯だ佛のみ云云。諸大聲聞も一應は三念住的修養を積みあるも、習氣までは斷じ得ざるを、獨り佛陀のみは之をも斷ずるが故に不共佛法となすとなり。

【三八】或は諸の云云。諸の弟子は佛を師とし、佛は多の弟子を有す。然るに此等の弟子の順違倶非のことあるも歡感ともに無きは希奇と云ふべし。之に反して諸の聲聞には多の弟子あるに非ざれば、隨つて此等の順違等のことなし、故に聲聞に歡感無きは敢て奇とするに足らずとなり。

【三九】大悲（Mahā-karuṇā）。

【四〇】頌の積譯

大悲世俗智、由資糧行相、
境平等最上、差別有八種。

一に體を明し、二に立名の根

大悲の體（第一句）

論じて曰はく、如來の大悲は俗智を性と爲す。若し此れに異らば、則ち一切の有情を緣ずること能はず。亦た三苦の行相を作ること能はず、（四一）共有悲の如し。

立名の根據（二三句）

此の大悲の名は、何の義に依りて立つるか。

五義に依るが故に、此れに大の名を立つ。一には資糧に由るが故に大なり。謂はく、大福德智慧の資糧の成辦する所なるが故なり。二には行相に由るが故に大なり。謂はく、此の力は能く三苦の境に於いて、行相を作すが故なり。三には所緣に由るが故に大なり。謂はく、此は總じて三界の有情を以て所緣を爲すが故なり。四には平等に由るが故に大なり。謂はく、此は等しく一切の有情に於て、利樂を作すが故なり。五には上品に由るが故に大なり。謂はく、最上品にして、更に餘の悲の能く此に齊しき故なり。

二乘共有の悲と大悲との差別（第四句）

此れと悲と異なることは、八種の因に由る。一には自性に由る。（四二）無癡と無瞋と自性異なるが故なり。二には行相に由る。（四三）三苦と一苦と行相の異なるが故なり。三には所緣に由る。（四四）三界と一界との所緣の異なるに由る。四には依地に由る。（四五）第四靜慮と餘に通ずると異なるが故なり。五に

據を明し、三に二乘共有の悲を佛の大悲との八因による差別を明す。

【四一】 共有悲とは佛が聲聞等と共有してある悲心のことにして、そは無瞋を體とし、唯欲界の有情を緣じて苦苦の行相を爲すのみにして壞苦、行苦にまで及ぶ能はず。佛の大悲は俗智なるを以て一切に及び得となり。

【四二】 大悲は俗智にして卽ち無癡を體とすれど、普通の悲は無瞋を體となす。

【四三】 三苦と一苦。大悲は三苦を行じ、悲は苦苦の一苦のみを行ず。

【四四】 三界と一界。大悲は三界を緣じ、悲は一界を緣ず。

【四五】 第四靜慮と云云。大悲は第四禪により、悲は四靜慮全體による。

は依身に由る。〔四六〕唯だ、佛と餘身に通ずるとの異有るが故なり。六には證得に由る。〔四七〕有頂と欲とを離れて證得することの異なるが故なり。七には救濟に由る。〔四八〕事成と希望と救濟の異なるが故なり。八には哀愍に由る。〔四九〕平等と不等と哀愍の異なるが故なり。

第六節　諸佛の同異並に佛の三德に就て

已に佛の德の餘の有情に異ることを辯じつ。諸佛を相望するに、法は皆等しきか、不か。

頌に曰はく、

　〔五〇〕資糧と法身と、利他とに由れば、〔諸〕
佛は相似せり。
壽と種と姓と量と等は、諸佛に差別有り。

諸佛の等しきことの三因（前二句

論じて曰はく、三事に由るが故に、諸佛は皆等し。一には〔五一〕資糧の等しく圓滿するに由るが故に、二には〔五二〕法身の等しく成辦するに由

【四六】唯だ佛と云云。大悲は唯だ佛身により、悲は二乘身による。

【四七】有頂と云云。大悲は有頂を離するとによりて證得し、悲は欲界を離して證得す。

【四八】事成と希望。大悲は實際に於て實現せらるれど、悲は專ら希望を主とす。

【四九】平等と不等。大悲は三界の苦を拔き、悲は唯だ欲界の苦を拔く。

【五〇】頌の舊譯
由資糧法身、及行他利益、一切佛平等、非壽姓量等。
諸佛は三事によりて相等しきこと、四事等によりて差別あることを說明す。十八不共法を明すに因んで來れる文也。

【五一】資糧とは大悲を引起する資糧の意にして、三無數劫中に集めたる廣大なる福德と智慧との二をいふ。舊譯には一、因圓滿平等、由昔行福德智慧資糧同圓滿故とあり。

【五二】法身(Dharma-kāya)云云。

るが故に、三には利他等しく究竟するに由るが故に。

佛の差別する四因（後一句）

壽と種と姓と身量と等の殊るに由りて、諸佛を相望すれば、差別有る容し。

一、壽異 二、種異 三、姓異 四、量異

壽異るとは、謂はく、佛の壽に短長有ることなり。種異るとは謂はく、佛は（五三）刹帝利と（五四）婆羅門との種に生ず。姓異るとは、謂はく、佛は（五五）喬答摩（五六）迦葉波等を姓とす。量とは、謂はく、佛身に小大あることなり。「等」の言は、諸佛の法の住することの久近等を顯はす。

是の如く異有ることは、出世の時の所化の有情の機宜の別なるに由るが故なり。

三種の圓德

諸の有智の者は、如來の三種の圓德を思惟して、深く愛敬を生ず。

其の三とは何。

一には因圓德、二には果圓德、三には恩圓德なり。

四種の因圓德

初めの因圓德に復た四種あり。一には無餘修、福德と智慧との二種の資糧を修して、遺無きが故なり。二には長時修、三大劫阿僧企耶を經て修するに、倦むこと無きが故なり。三には無間修、精勤勇

舊譯には、二、果圓滿平等、由所得法身同具足成就故とあり。ここに法身といふは、戒、定、慧、解脫、解脫知見の所謂五分法身をいふ。

【五三】 刹帝利（Kṣatriya）。

【五四】 婆羅門（Brāhmaṇa）。

【五五】 喬答摩（Gautama）。今釋迦佛の姓。

【五六】 迦葉波（Kāśyapa）。過去佛の姓。

猛にして、刹那刹那に修して、廢すること無きが故なり。四には尊重修、所學〔の法〕を恭敬して、〔身命を〕顧惜する所無し、修するに慢無きが故なり。

四種の果圓德

次に果圓德に亦四種有り。一には智圓德、二には斷圓德、三には威勢圓德、四には色身圓德なり。

智圓德の四種

智圓德に四種有り。一には(五七)無師智、二には(五八)一切智、三には(五九)一切種智、四には(六〇)無功用智なり。

斷圓德の四種

斷圓德に四種有り。一には(六一)一切煩惱斷、二には(六二)一切定障斷、三には(六三)畢竟斷、四には(六四)幷習斷なり。

威勢圓德の四種(一)

智勢圓德に四種あり。一には(六五)外境の化と變と住持とに於ける自在の威勢なり。二には壽量を若くは促め若くは延ばすことに於ける自在の威勢なり。三には空と障と極遠とに於いて、速かに行じ、小大相入する自在の威勢なり。四には世間の種種の本性をして、法爾に轉じて、勝ならしむる希奇の威勢なり。

【五七】無師智(Anupadiṣṭa-jñāna)。三十四心の位に有漏無漏の智を無師にして證せること。

【五八】一切智(Sarvatra-jñāna)とは一切諸法の自相を知る智なり。

【五九】一切種智(Sarvathā-jñāna)とは四諦の理を照して一切の行相を發す智なり。

【六〇】無功用智(Ayatna-jñāna)とは佛の智の加行を起さずして任運に發すること。

【六一】一切煩惱斷(Sarva-kleśa-prahāṇa)。

【六二】一切定障斷(Sarva-samādhi-samāpatty-āvaraṇa-prahāṇa)。

【六三】畢竟斷(Atyanta-prahāṇa)

【六四】幷習斷(Sa-vāsana-prahāṇa)。

【六五】外境の化とは曾てあらざりし物を生ずること。變とは石等を黃金等に變化せしむること。住持とは長き間生存すること。或は壽の伸縮に於て自在なること。

威勢圓德の四種(二) 威勢圓德に復た四種有り。一には化し難きを必ず能く化す。二には難に答へて必ず疑を決す。三には教を立つるとき必ず出離す。四には、惡黨必ず能く伏す。

色身圓德の四種 色身圓德に四種有り。一には(六六)衆相を具し、二には(六七)隨好を具し、三には(六八)大力を具し、四には內に身骨堅くして、金剛に越え、外に神光を發して、百千の日に踰えたり。

恩圓德の四種 後の恩圓德にも亦四種有り。謂はく、永く三惡趣と生死とを解脫せしめ、或は能く善趣と三乘とに安置せしむ。

如來の圓德の別說 總じて如來の圓德を說けば是の如し。若し別して分析せば則ち無邊なることあり。唯佛世尊のみ能く知り、能く說くも、要ず命行を留めて、多くの大劫阿僧企耶を經、說くこと乃ち盡く可し。是の如きは則ち佛世尊の身の、具さに無邊の殊勝奇特の因果の恩德有ること、大寶山の如くなることを顯はす。

愚と智との失得 諸の愚夫有り。自ら衆德に乏しきは、是の如き佛の功德山と及び所說の法とを聞くと雖も、信重すること能はず。[然るに]、諸の有智の者は、斯の如く說くを聞きて、信重の心を生じ、骨髓に徹し、彼れは一念の極信の重心に由りて、無邊の不定の惡業を轉滅し、殊勝なる人天の涅槃を攝受す。故に如來の世に出現するや、諸の智者に、無上の福田と爲ると說く。之れに依りて不空、可愛、速疾、

【六六】衆相とは三十二大人の相のこと。
【六七】隨好とは八十隨好相のこと。
【六八】大力とは那羅延力。此卷の初參照。

究竟の果を引生するが故なり。(六九)薄伽梵の自ら頌を説いて言ふが如し。

(七〇)若し佛の福田に於いて、能く少分の善を植うれば、
初めに勝善の趣を獲、後には必ず涅槃を得。

第六章　他の凡聖と共通する功德

第一節　總說

已に如來の不共の功德を說きつ。(七一)共の功德を今當に辯ずべし。

頌に曰はく、

復た餘の佛法有り。餘の聖と異生とに共ず。
謂はく、無諍と願智と、無礙と等の德なり。

論じて曰はく、世尊に復た無量の功德あり。餘の聖者及び異生と共にす。謂はく、(七二)無諍と願智

【六九】薄伽梵とは增一含二十四參照。

【七〇】頌の舊譯
若人當來世、於レ佛行二少善一、受二諸天生一已、必得二不死足一。

【七一】共の功德云云。前章には佛獨特の功德を說きたるが、此章にては他の聖衆又は凡夫にも通ずる、所謂共德を明にするなり。今はその所說とす。
頌の舊譯
有二餘佛法共一二弟子及凡夫一、無諍及願智、無礙解等德。

【七二】無諍と願智云云。是等の德目を大體に分類すれば二種となる。聖者のみに通ずるものと、凡夫にも通ずるものとなり。前者は無諍、願智、四無礙解の三德にして、後者は他の九德なりとす。

と無礙解と通と靜慮と無色と等至と等持と無量と解脫と勝處と徧處等となり。其の所應に隨ふ。謂はく、前の三門は唯餘の聖と共にし、通と靜慮等は亦異生と共にす。

第二節　衆聖と共通するもの

第一項　無　諍　行

前の三門の中に、且らく無諍を辯せば、(七三)頌に曰はく、

無諍は世俗智なり。後の靜慮なり。不動なり。
三洲なり。未生の　欲界の有事の惑を緣ず。

論じて曰はく、無諍と言ふは、謂はく、阿羅漢が有情の苦の煩惱に由りて生ずることを觀じて、自ら己身の福田の中にて勝ることを知り、他の煩惱の、復た己を緣じて生ぜんことを恐れ、故思して是の如きの相の智を引發す。「此の方便に由りて、他の有情をして、己身を緣じて、貪瞋等を生ぜざらしめん」と。此の行は能く諸の有情

【七三】頌に曰く云云。無諍行を明にする段にして、第一句は其體を明にし、第二句は依地と種類を明にし、第三の前半は依身を明にし、其以後は功用を明にしたるものとす。
頌の舊譯
世俗智無諍、後定不壞法、

諍

所依

阿羅漢と無諍

四洲に於ける依身及び所緣

類の煩惱の諍を息むるが故に、無諍の名を得。

此の行は但だ俗智を以て性と爲す。第四靜慮を其の所依と爲す。(七四)樂通行の中に於て最も勝れたりと爲すが故なり。

不動の應果のみ能く起して、餘には非ず。餘は、尙ほ自ら惑を起すことを防ぐこと能はず。況んや能く他身の煩惱を止息せんや。

此れは唯三洲の人の身に依止して、欲の未來の(七五)有事の煩惱を緣ず。他の煩惱をして己を緣じて生ずること勿れ。諸の(七六)無事の惑を遮防す可からず。內に起りて、應に隨つて、總じて境を緣ずるが故なり。

第二項　願　智

無諍を辯じ已りつ。次に願智を辯ぜん。

頌に曰はく、

(七七)願智は能く徧く緣ず。餘は無諍に說く

人道生未生、欲有煩惑境。

【七四】樂通行とは四根本定は一般に止觀均等にして發すに大なる勞苦を要せず。故に樂通行と名く。第四定は中に於て是れ勝なるが故に能く無諍の所依と爲る。

【七五】有事の煩惱とは修所斷の煩惱なり。

【七六】無事の惑とは見所斷の惑なり。

【七七】頌の舊譯

願智亦如此、但緣一切境。

【七八】論じて云云。長行に四段有り。一に名を釋し、二に自

が如し。

釋名

(七八)論じて曰はく、願を以て先と為し、妙智を引きて起し願の如く了ずるが故に願智と名く。

(七九)此の智の自性と地と種姓と身とは、無諍と同じ、但だ所縁のみ別なり。一切の法を以て所縁と為すが故なり。

毘婆沙の異說

毘婆沙者は是の如きの言を作す。願智は、無色を證知すること能はず。(八〇)彼の因行及び彼の等流の差別を觀ずるが故に、知る、田夫の類の如くなりと。

願智を起す相

諸有の此の願智を起さんと欲する時は、先づ誠願を發して、彼の境を知ることを求む。便ち(八一)邊際第四靜慮に入りて、以て加行と為す。此より無間に入る所の定の勢力の勝劣に隨ひて、先の願力の如く、正智を引き起して、所求の境に於いて、皆な實の如く知るなり。

在、界地・種姓、身等凡べて無諍に同じく、唯所緣のみ廣きことを說き、三に婆沙中の異說を掲げ、四に願智を起す相を叙す。

【七九】此の智の自性と地等。俗智を性となし第四靜慮に依り三洲の不動種姓の聖者のみ起すことは無諍と同じとなり。ただ無諍は他をして己に對して煩惱を起さしめざらんとするに反し、願智はいかなる對象に對するも、その如實に了知せんと願求する點に於て無諍と異るものとす。

【八〇】彼の因行とは無色界に入る因即ち無色定のこと。その無色定及び等流の寂靜なるを觀じて、無色の果を比知するなりとの意。婆沙論一百七十九、參照。田夫の類とは田夫等が芽を見て種を比知し、及び其の逆なる等の如しとの意。

【八一】邊際第四靜慮に關しては次の第四項を見よ。

第三項　無礙解（四辯）

已に願智を辯じつ。無礙解とは、

頌に曰はく、

（八二）無礙解に四有り。謂はく、法と義と詞と辯となり。
名と義と言説と道とに　退無き智を性と爲す。
法と詞とは唯俗智なり。五と二との地を依と爲す。
義は十と六となり。辯は九なり。皆一切の地に依る。
但だ得すれば、必ず四を具す。　餘は無諍に説くが如し。

四種の無礙解

（八三）論じて曰く。（八四）諸の無礙解は總じて説くに四有り。一には（八五）法無礙解、二には（八六）義無礙

【八二】頌の舊譯
於法義方言、巧辯無礙解、
前三名義言、次第無礙解、
第四中理應、於言道自在、
此緣言道境、九智一切地、
十或六義解、遍處餘世智、
於言欲初定、若不具未得。

【八三】論じて云云。次下長行に七段あり。第一に名を列ね、第二に境と自性とを明にし、第三に體を明にし、第四に依地と及び其の十智に對する關係を明にし、第五に施設足論の文を引證とし、第六に加行を説き、第七に四無礙解の俱伴得を明にす。

【八四】諸の無礙解。無礙解を舊には辨といふ。

【八五】法無礙解（Dharma-prati-saṃvid）。

四無礙解の境と自性

解、三には(八七)詞無礙解、四には(八八)辯無礙解なり。

此の四は、總じて說くに、其の次第の如く、名と義と言と及び說と道とを緣じ、(八九)退轉すべからざる智を以て、自性と爲す。謂はく、無退智が、能詮の法の名句文身を緣ずるを、立てて第一と爲し所詮の義を緣ずるを、立てて第二と爲し、方の言詞を緣ずるを、立てて第三と爲し、正理に應ずる無滯礙の說を緣じ、及び自在の定と慧との二道を緣ずるを、立てて第四と爲す。

此れは則ち總じて無礙解の體を說き、兼ねて所緣を顯はす。

法詞無礙解の體

中に於いて、法と詞との二無礙解は唯俗智の攝なり。名身等と及び世の言詞との事の境界を緣ずるが故なり。

依地及び其の十智との關係

法無礙解は通じて五地に依る。謂はく、欲界と四靜慮となり。上地に於いては、名等無きを以ての故なり。

詞無礙解は唯二地に依る。謂はく欲界と初靜慮となり。上地に於いては尋伺無きを以ての故なり。

義無礙解は十と六との智に攝す。謂はく、若し諸の法を皆名けて義と爲すときは、義無礙解は則ち十智を攝し、若し唯涅槃を名けて義と爲さば、義無礙解は則ち六智に攝す。謂はく、俗と法と類と滅

【八六】義無礙解 (Artha-pratisaṃvid)。

【八七】詞無礙解 (Nirukti-pratisaṃvid)。

【八八】辯無礙解 (Pratibhāna-pratisaṃvid)。

【八九】退轉すべからざる智とは一度得れば退轉すること無き不動羅漢の智。

と體と無生となり。

辯無礙解は九智の所攝なり。謂はく、唯滅を除く。說と道とを緣ずるが故なり。

(九〇)此の二は通じて、一切の地に依りて起る。謂はく、欲界乃至有頂に依る。辯無礙解は說と道との中に於いて、隨ひて一を緣ずるに皆起ることを得と許すが故なり。

本論の證文

(九一)旅設足論に此の四を釋して言はく、名と句と文と、此の所詮の義と、(九二)即ち此一と二と多と男と女と等の言の別と、此の無滯の說と、及び所依の道とを緣じて退轉無き智に、次の如く、法と義と詞と辯との無礙解の名を建立すと。

此れに由りて、四種の次第を顯成す。

異說

(九三)有る餘師の說かく、詞は謂はく、一切訓釋の言詞なり。說いて、變礙有るが故に、名けて色等と爲すと言ふこと有るが如し。辯は謂はく、展轉して、言の滯礙すること無きなりと。

加行毘婆沙師の說

傳說すらく、此の四無礙解の生ずることは次の如く、(九四)算計と佛語と(九五)聲明と因明とを慣習す

【九〇】此の二とは義無礙・辯無礙の二をいふ。

【九一】旅設足論。舊譯、分別假名論、是れ玄奘不譯。今の施設論(法護譯、下卷惟淨等譯)は同本なり。之に從へば(一)名句文を緣ずるは法無礙(二)その義を緣ずるは義無礙(三)文法語を緣ずるは詞無礙(四)所依の道を緣ずるは詞無解なりとなり。

【九二】即ち此一と二と多云云。「此」とは上の「義」を指す。一と二等は凡て文法上の名稱なり。一とは單數のこと二とは兩數のこと、多とは複數のこと、男とは男性女とは女性、等の中に中性を含む。

【九三】有る餘師は詞辯共に言の上に無礙解を立つるも、其中に有りて、詞無礙解は一切の訓釋の言詞を云ひ、辯無礙解はその中に巧妙なる言說につきて名くる意。

【九四】算計(Gaṇita)。

【九五】聲明(Śabda vidyā)。文法學をいふ。因明(Hetuvidyā)。論理及び辯論學。

毘婆沙師の正義

るを前の加行と爲す。若し四處に於いて、未だ善巧を得ざれば、必ず無礙解を生ずること能はざるが故なりと。

四無礙の倶伴得

理實には、一切無礙解の生ずることは、唯佛語を學するを、能く加行と爲す。是の如く、四種の無礙解の中、隨ひて一を得する時は、必ず具さに四を得す。四を具せざるを、名けて得と爲す可きに非ず。

此の四の所緣と自性と依地とは、前の無諍と差別あること是の如し。種性と依身とは、諍に說くが如し。

第四項　無諍等と邊際定

是の如きの所說の無諍行等は、

頌に曰はく、

（九六）六は邊際に依りて得す。邊際に六あり。後の定なり。
徧く順ず、究竟に至る。佛の餘は加行得なり。

【九六】頌の舊譯
六遠際定得、此六、最後定、
隱ニ順一切地一、此至ニ增究竟一、
唯佛非ニ行得一。
無諍願智四無礙解の六の邊際定によりて得するとを明す。一に總說し、二に邊際定の六種を明し、三に第四定を邊際定と名くる理由を明し、四に邊際定の名義を明し、五に六を得するにつきての佛と餘の聖者との差別を明す。

邊際定の六種

論じて曰はく、無諍と願智と四無礙解との六種は皆邊際定に依りて得す。

(九七)邊際靜慮の體に六種有り。前の六に詞を除きて、餘の邊際を加ふ。詞無礙解は彼れに依りて得すと雖も、體は彼の靜慮の所收に非ず。邊際の名は但だ第四靜慮に依るが故なり。

第四定を邊際と名くる理由

(九八)此れは一切地の徧く隨順する所なるが故に、增して究竟に至るが故に、邊際の名を得す。

一切地が因として第四定を引く理由第一因故の說明

云何にして此れを徧く隨順する所と名くるか。

謂はく、正しく此の靜慮を修學する時に、欲界の心より、初靜慮に入り、次第に順入して、乃ち有頂に至る。復た有頂より、無所有に入り、次第に逆入して、乃ち欲界に至る。復た欲界より、次第に順入し、展轉して、乃ち第四靜慮に至るを、一切地の徧く隨順する所と名く。

第二因故の說明

云何にして此れを增して究竟に至ると名くるか。

謂はく、(九九)專ら第四靜慮を修習するとき、下より中に至り、中より上に至り、是の如き三品に復た各三を分ちて、上上品の生ずるを究竟に至ると名く。

【九七】邊際(Prāntakoṭika)靜慮の體云云。邊際定は無諍等の六を其の體とす。故に邊際定に六種を分つ。前の六中、詞無礙解は欲界初定に局る故に除きて、代りに留壽行捨壽行等を體とする邊際定を加へて六とす。

【九八】此れは云云。第一に欲界より有頂に至る十一地が因となりて第四定を引起し、又第二に增して究竟に至るが故に名く。

【九九】專ら云云。第四定を修するに初めは下下品の第四定起り、次に下中品の第四定起り、更に下上品と進みて最後に上上品の第四定に至る。此の上上品の第四定を便ち究竟と名くる意。

釋名

是の如きの靜慮に邊際の名を得す。

此の中の〔一〇〇〕邊の名は、無越の義を顯はす、勝れたること此れに越ゆるもの無きが故に、名けて邊と爲す。〔一〇一〕際の言は、類の義、極の義を顯はさんが爲めなり。〔一〇二〕四際及び實際の言を說くが如し

六を得するにつきての佛と三乘との相異

佛を除きて、所餘の一切の聖者にあつては、說く所の六種は唯加行得にして離染得に非ず。〔一〇三〕皆得するに非ざるが故なり。

唯佛のみ此れに於いて、亦離染得なり。諸佛の功德は、初めの盡智の時に、離染に由るが故に一切を頓に得す。後時には欲に隨ひて、能く引いて現前す。加行に由らず、佛世尊は一切法に於いて、自在に轉ずるを以ての故なり。

第三節　異生とも共通する德

第一項　八　通

已に、前の三は、唯餘の聖に共ずる德なることを辯じつ。亦凡に共ずる德に於いて、且らく通を辯すべし。

頌に曰はく、

【一〇〇】邊(Anta)。

【一〇一】際(Koṭi)。

【一〇二】四際(Catuṣkoṭika)。實際(Bhūta-koṭi)。

【一〇三】皆得するに非ず云云。離染得とは、誰にても離染の時、直ちに自在を得るをいふ。加行得は、ただそを得んと努力するによりて得するが故に、離染しても、直に自在を得るにあらず。

【一〇四】通に六あり、謂はく、神境と、天眼と耳と他心と
宿住と漏盡通となり。解脱道なり、慧の攝なり。
四は俗、他心は五なり。漏盡通は力の如し、
五は四靜慮に依る。自と下地とを境と爲す。
聲聞と麟喩と佛とは、二と三千と無數となり。
未曾は加行に由る。曾修は離染得なり。
念住は初めの三身なり。他心は三なり、
餘は四なり。
天眼と、耳は無記なり。餘の四通は、唯
だ善なり。

六通の名（初三句）

【一〇五】論じて曰く、通に六種有り。一には【一〇六】神境智證通、二には【一〇七】天眼智證通、三には【一〇八】天耳智證通、四には【一〇九】他心智證通、五には【一一〇】宿住隨念智證通、六には【一一一】漏盡智證通なり。

【一〇四】頌の舊譯

如意成耳心、宿住死生盡、
智證名通解、六種、解脱智、
此四世俗智、他心慧五智、
盡通慧如レ力、餘五於二四定一、
自下地境通、解、曾悉離得、
第三三念處、意成耳眼初、
天耳眼無記、餘通慧皆善。

【一〇五】論じて等。長行に十一段あり、一に名を列ね、二に六通と凡聖との關係を叙し、三に六通の所攝及び自性を叙し、四に六通と十智との關係を明し、五に六通の依地を述べ、六に前五果の無色に依らざる所以を叙し、七に諸通の加行を記し、八に前五通の境を縱橫に說明し、九に五通と離染加行二得との關係を解き、十に六通と四念住との關係、十一に六通の三性分別を叙す。

【一〇六】神境智證通（Ṛddhi-viṣaya-jñāna-sākṣātkriyābhijñā）。

【一〇七】天眼智證通(Divya-cakṣuḥ-jñāna-sākṣātkriyābhijñā)。

【一〇八】天耳智證通 (Divya-śrotra-jñāna-sākṣātkriyābhijñā)。

【一〇九】他心智證通 (Para-cetaḥ-paryāya-jñāna-sākṣātkriyābhijñā)。

六通と凡聖

六通の中の第六は、唯聖なりと雖も、然も其の前の五は、異生も亦得するを以て、總相に依りて說けば亦異生にも共ず。

六通の所攝と自性（第四句）

是の如きの六通は、解脫道の攝なり。慧を自性と爲す。沙門果の如し。［頌の］〔一二〕「解脫道」の言は出障の義を顯はす。

六通と十智（五六句）

神境等の四は、唯俗智の攝なり。他心通は五智の攝なり。謂はく、法と類と道と世俗と他心となり。漏盡通は力の如く說く。謂はく、或は六、或は十の智なり。

依地（第七句）

此れに由りて、已に漏盡智通は一切地に依りて、一切の境を緣ずることを顯はす。前の五通は四靜慮に依る。

前五通の無色に依らざる所以

何に緣りて、此の五は無色に依らざるか。

初めの三は別に色を緣じて境と爲すが故に。他心通を修するには、色を門と爲るが故に。宿住通を修するには、〔一三〕漸次に分位の差別を憶念して、方に成ずることを得るが故に。成ずる時に、能く處と姓と等を緣ずるが故に、無色地に依りては、是の如き能無し。

〔一〇〕宿住隨念智證通（Pūrve-nivāsānusmṛti-jñāna-sākṣātkriyābhijñā）。

〔一一〕漏盡智證通（Āsrava-kṣaya-jñāna-sākṣātkriyābhijñā）。

〔一二〕解脫道の言云云。無間道の位迄は通を障へる不染無智の障有り。其の障を斷じ已りたる位が解脫道なれば、解脫道といふは障を離得せる意を表はすの意。

〔一三〕漸次に等。自己の胎內の五位胎外の五位を憶念し宿住通を起す。又宿住通を成就したる位に於て彼此の方處を緣じ、及び種姓等を緣ずるも無色定にては、此れ等を緣ぜず。故に無色地によると無し。

他心通の加行

諸有の他心通を修せんと欲する者は、先づ審に己が身心の二相の、前後變異し、展轉して相隨ふことを觀じ、後に復た審に他の身心の相を觀ず。此れに由りて、加行漸次に成ずることを得、成じ已りては、自心の諸色を觀ぜず。他の心等に於いて、能く實の如く知る。

宿住通の加行

〔二四〕諸有の宿住通を修せんと欲する者は、先づ自ら審かに、次前に滅する心を察し、漸く復た逆に此の生の分位の前前の差別を觀じて、結生の心に至り、乃至能く中有の前の一念を憶知するを、自の宿住の加行已に成ずと名く。他を憶念せんが爲めにする加行も亦爾なり。

次第順起と超起

此の通の初起は、唯次第して知る。慣習して成ずる時には、亦能く超えて憶す。

諸の所憶の事は、要らず、曾て領受せる所なり。〔二五〕淨居を憶する者は、昔、曾て聞くが故なり。

無色より欲界に生ぜるものの宿住通

〔二六〕無色より歿して、此に來生する者は、他の相續に依りて、初めて此の通を起す。所餘は亦自相續に依りて起す。

【二四】諸有の宿住通を修せんとする者は、初め次前に滅せる心を觀じ、夫より漸漸に分位の差別を觀じ、老年より少年と逆觀し、遂に終りに生有の結生の心を觀じ、次に中有の五蘊を觀じ、宿住通の加行成滿す。

【二五】淨居云云。宿住通は必ず曾て受領したることのある境を憶念す。然るに淨居天は聖者の生ずる天にして、凡夫の曾て生じたること無く、從つて受領したる事無き所なり。而も之を憶するは淨居天のことを聞くに依るとの意。

【二六】無色より云云。無色界より欲色界に來り生ずるものが靜慮によりて起せる宿住智は無色は緣ずること能はざるが故に、先づ他人の前滅の心を審かに察し、乃至其宿住を憶し、而して慣習して後、自の宿住を憶念す。

前三通の加行

神境等の前の三通を修する時には、輕と光と聲とを思ひて、以て加行と爲す。成じ已れば自在に所應に隨ひて爲す。故に此の五通は無色に依らず。

前五通の無色に依らざることの第二釋

(二七)又、諸の無色は觀減じ止增す。五通は必ず止と觀との均しき地に依る。〔故に復た五通は無色に依らず。〕

未至等の地は此れに由りて已に遮す。

一、前五通の境地に約しての說明（第八句）

是の如き五通の境は、(二八)唯自と下となり。

且らく、神境の如きは隨ひて、何の地に依るも、自と下との地に於いて(二九)行と化と自在なり。上に於いては然らず。勢力劣なるが故なり。餘の四も亦爾なり。其の所應に隨ふ。

是の故に、能く、無色界の他心と、宿住とを取つて、二通の境と爲すこ無とし。

二、横的說明（九十句）

卽ち此の五通は、世界の境に於いて、作用の廣狹諸聖に不同あり。謂はく、大聲聞と麟喩と大覺との極めて作意せざるは、次の如く、能く一と二と三との千の諸世界の境に於いて、行と化と等の自在の作用を起す。若し極めて作意すれば、次の如く能く二千と三千と無數との世界に於いて、〔行と化との自在の作用を起す〕。

【二七】又諸の無色云云。無色定は觀減じ止增す、之れに反して、五通は止觀均等の定によつて發すものなり。故に無色定には依らず。同樣の理由によりて未至定中間定にも依ること無し。

【二八】唯自と下と云云。通の行らく處の境界は唯自地と下地とにして上地には通ぜず。

【二九】行とは自地と下地とに行くこと、化とは自地と下地との物を化作すること。

五通と得（十一十二句）

是の如きの五通にして、若し殊勝の勢用猛利なること有りて、無始より來た、曾て未だ得ざる者は加行に由りて得す。若し曾て慣習して、勝れたる勢用無きものと、及び彼れの種類とは、離染に由りて得す。若し起して現前するには、皆加行に由る。佛は一切に於いて、皆離染得なり。欲に隨ひて現前して加行に由らず。

六通と四念住

六の中、前の三は、唯身念住なり。但だ色を緣ずるが故に。謂はく、神境は通して、四の外處の色、香、味、觸を緣じ、天眼は、色を緣じ、天耳は、聲を緣ず。

問

〔三〇〕若し爾らば、何に緣りて、死生智は、有情類の現身の中に、身語意の諸惡行〔三一〕等を成ずるに由ることを知ると說くか。

釋答

天眼通は能く此の事を知るに非ず。別の勝智有り。是れは通の眷屬にして聖身に依りて起り、能く是の如く知る。是れは天眼通の力の所引なるが故に、通と合して、死生智の名を立つ。

他心智通は三念住の攝なり。謂はく、受と心と法となり。心等を緣ずるが故に。

【三〇】若し爾らば云云。若し天眼通が色を緣ずと云はば契經（增一阿含四十二、雜阿含廿六）に死生智にて有情の身語意の惡行を成就し、當來に惡趣に生ずるを知ると說くかの意。卽ち死生智は天眼通にして、語意の惡行を知るが故に單に色を緣ずるとは限らず（雜含は辰三、五二左）。

【三一】邪見を等收す。

六通の三性分別

宿住と漏盡とは、四念住の攝なり。通じて五蘊と一切の境とを緣ずるが故に。

此の六通の中、天眼天耳は無記性の攝なり。此の二の體は是れ眼耳識と相應する慧と許すが故なり。

問

(二二)若し爾らば、寧ぞ四靜慮に依ると說くか。

釋答

根に隨ひて說くが故に、亦失有ること無し。謂はく、所依止の眼耳の二根は、四靜慮の力の引起する所なるに由りて、卽ち彼の地の攝なり。故に四地に依る、通は根に依るが故に、四に依るとの言を說けり。

別釋

或は、此れは通の無間道に依りて說く。通の無間道は、四地に依るが故なり。

餘の四通の性

餘の四通はその性皆是れ善なり。

問

若し爾らば、何が故に、(二三)品類足に「通は云何、謂はく、善の慧なり」と言へるや。

彼れは多分に據る。或は勝に就きて說くなり。

第二項　三明

(二四)契經に說くが如くんば無學に三明ありと。彼れは六通に於いて、何を以て性と爲すか。

【二二】若し爾らばとは、第二定以上には眼識も耳識もなし、然らば此の二通は四靜慮に依ると說く可からず。

【二三】品類足論卷六、參照。

【二四】契經とは雜阿含三十一、(辰三、八三右左)參照。

頌に曰はく、

（二五）第五と二と六とは明なり。三際の愚を治するが故なり。

後は眞なり。二は假說なり。學は闇有れば明に非ず。

三明及び其の自性（第一句）

論じて曰はく、三明と言ふは、一には（二六）宿住智證明、二には（二七）死生智證明、三には（二八）漏盡智證明なり。其の次第の如く、無學の位に攝する第五と二と六との通を以て其の自性と爲す。

六通の中にて唯三通を明と立する所以（第二句）

六の中にて、三種を獨り明と名くることは、次の如く、（二九）三際の愚を對治するが故なり。謂はく、宿住智通は、前際の愚を治し、死生智通は、後際の愚を治し、漏盡智通は、（三〇）中際の愚を治す。

無學明（第三句）

此の三を皆無學明と名くるとは、倶に無學の身中に在りて起るが故なり。中に於いて、（三一）最

【二五】頌の舊譯
三明得前際、等無明對治、最後無學二、同名彼續生、於學不說明、續有無明故。
第一句は三明を列ね、並に自性を明し、第二句は六通の中唯三通を明と立つる所以を述べ、第三句は明の眞と假とを明し、第四句は無學のみ三明ありて有學に非ざるを明す。

【二六】宿住智證明（Pūrva-nivā-sajñāna-sikṣāt-kriyā-vidyā）。宿世のことを知る智。

【二七】死生智證明（Cyuty-upapā-da-jñāna-sikṣāt-kriyā-vidyā）。未來の有情の此に死し彼に生ずることを知る智。

【二八】漏盡智證明（Āsrava-kṣa-ya-jñāna-sikṣā-kriyā-vidyā）。煩惱の盡くるを知る智。

【二九】三際の愚とは三世の苦事に迷へること。

【三〇】中際とは現在のこと。現在の苦事に迷ひ樂と想ひ居る愚を斷ず。

【三一】最後は云云。最後の漏盡

有學の宿通通と死生通（第四句）

後は是れ眞なること有るべし。無漏に通ずるが故に、餘の二は假說なり。體は唯非學非無學なるが故なり。

有學の身中には、愚闇有るが故に、（三二）前の二有りと雖も、立てて明と爲さず。暫時愚闇を伏滅すること有りと雖も、後還た蔽はるるが故に明と名けず。

第三項　三示導

契經に說く、三種の（三三）示導有りと。彼れは六通に於いて、何を以て體と爲すか。

頌に曰はく、

（三四）第一と四と六とは導なり。敎誡導を尊と爲す。
定んで通に由りて成ずる所なり。利樂の果を引くが故なり。

明は六通を體とし又は十智を體として無漏に通じ、眞の無學法たるべしと雖、餘の二を無學明といふは假說にして、其の體は有漏の非學非無學法なり。唯無學の心中に起るが故に、無學法と假說するに過ぎず。

【三二】前の二とは三明中の前二即ち宿住及び死生の二なり。

【三三】示導(Prātihārya)。舊譯は唯「導」とあり。

【三四】頌の舊譯

一三六是導、三中正教勝、
非不決定故、生善愛果故。

一に名を列ね又自性を揭げ、二に功用を明し、三に名義を釋し、四に三中の輕重と其の理由とを述ぶ。

第一句は三示導の體を明し、第二句は敎誡示導の優れたることを示し、後の兩句は其の所以を明す。

三示導の名と其の自性（第一句）

論じて曰はく、三の示導とは、一には(一三五)神變示導、二には(一三六)記心示導、三には(一三七)教誡示導なり。其の次第の如く、六通の中の第一と四と六とを以て、其の自性と爲す。

示導の名義

唯、此の三種は、(一三八)所化の生を引きて、初めて發心せしむること最も勝と爲るが故に、或は此れは能く正法を憎背するものと、及び處中との者を引きて、發心せしむるが故に能く示し、能く導くを以て示導の名を得。

又は、唯此の三のみ、佛法に於いて、次の如く、歸伏し、信受し、修行せしむるが故に、示導の名を得。餘の三〔通〕は爾らず。

三示導の輕重及び其の理由（第二─四句）

三の示導に於いて、教誡は最尊なり。唯此れのみ定んで通に由りて成ずる所なるが故に。定んで能く他の利樂の果を引くが故に。謂はく、前の二導は、呪術も亦能くす、但だ通に由るのみにはあらざるが故に決定に非ず。〔例へば〕呪術あり、(一三九)建駄梨と名く、此れを持すれば、便ち能く空に騰ること自在なり。復た呪術あり、(一四〇)伊刹尼と名く。此れを持すれば、便ち能く

【一三五】神變示導（Ṛddhi-prātihārya）。境通を以て體とし、神變の事を現す。

【一三六】記心示導（Ādeśanā-prātihārya）。他心通を以て體とし他の心を能く知る。

【一三七】教誡示導（Anuśāsana-prātihārya）。漏盡通を以て體とし、出離の教法を立てて衆生を教へ誡む。

【一三八】所化の生云云。所化の有情を攝し、引きて發心せしむるに、一は神變の事を現じて他をして驚嘆せしめ、二は相手の心を能く洞見して、深く信を起さしめ、三は漏盡といふ出離の要道を立てて處中の人（背きもせず信じもせぬ人）を發信せしむ。

【一三九】健駄梨。（Gāndhārī ?）舊譯、乾陀梨。

【一四〇】伊刹尼。（Iṣaṇikā ?）舊

他の心念を知るが如し。教誡示導は、漏盡通を除きて、餘は爲すこと能はず、故に是れ決定なり。

又、前の二導は、但だ他をして、暫時廻心せしむること有るも、勝果を引くに非ず。教誡示導は、亦定んで他をして、當の利益、及び安樂の果を引かしむ、能く實の如くなる方便を以て説くが故に。是れに由りて、教誡のみ最勝にして、餘に非ず。

第四項　特に神境に就て

（四二）「神境」の二の言は、何なる義に目くと爲さんか。

頌に曰はく、

神の體は謂はく等持なり。　境は二あり。謂はく行と化となり。
行に三あり。意勢と佛なり。　運身と勝解とに通ず。

譯、伊叉尼柯。

【四二】神境(Rdbi-viaya)。

頌の舊譯

如意成定中、行レ空及化生、
心疾行唯佛、餘將レ身願成、
欲界化外入、四入類二種、
色二。

神境の二字を釋す。二頌あり、第一句は神の義を明し、第二句は境を釋し、第三第四句は境の中の行を明し、第五句は境の中の化を明し、第六句は其體性を明し、第七第八は其種類を明す。

化に二あり、謂はく欲と色となり。四と二との外處の性なり。
此れに各二種有り。謂はく、自と他との身に似たり。

神境の名（第一句）

論じて曰はく、(四二)毘婆沙の所說の理趣に依るに、神の名の目くる所は、唯勝れたる等持なり。此れに由りて、能く神變の事を爲すが故に。諸の神變の事を說いて名けて境と爲すなり。

神境の二種（第二句）

此れに二種有り。謂はく、行及び化なり。

行の三種（第三句前）

行に復た三種あり。一には(四三)運身、謂はく、空に乘りて行くこと、猶し飛鳥の如し。二には(四四)勝解、謂はく、極遠方に近の思惟を作せば、便ち能く速かに至る。三には(四五)意勢、謂はく、極遠の方を、心を擧げて緣ずる時、身卽ち能く至る。此の勢意の如くなれば、意勢の名を得す。

三行と三乘（第三句佛第四句）

此の三の中に於いて、意勢は唯佛のみなり。運身と勝解とは、亦餘乘に通す。謂はく、我が世尊は神通迅速にして、方の遠近に隨ひて、心を擧ぐる時、卽ち至る。此れに由りて、(四六)世尊は是の如きの說を作す。諸佛の境界は不可思議なりと。故に意勢行は唯世尊のみにあり、勝解は餘聖を兼ぬ、運身は並びに異生にもあり。

【四二】毘婆沙云云。毘婆沙の說に從へば、神の字は勝れたる定に名く。蓋し勝定に由つて種種神變のことを成し、その事も、成す所の用も共に神變なるが故に神と名け、その神變の事は卽ち定の境なるが故に、神は能かて卽ち境なり。此の神境を緣ずる通を神境通といふとなり。

【四三】運身。舊譯、引將身行。

【四四】勝解。舊譯、願成行。

【四五】意勢。舊譯、心疾行。

【四六】世尊は云云。增一阿含十八、參照。

化の二種（第五—六句）

化に復た二種あり。謂はく、欲［界］色界なり。若し欲界の化ならば、外の四處なり。聲を除く、若し色界の化ならば、唯二あり。謂はく、色と觸となり。色界の中には、香味無きを以ての故なり。

欲色界化の二種（七八句）

此の二界の化に、各二種有り。謂はく自身と他身とに屬するものの別なればなり。

神境の總計

故に身欲界に在りて化するもの四種有り。色に在りても亦然り、故に總じて八と成る。

難

（一四七）若し生じて、色［界］に在りて、欲界の化を作さば、云何にしてか、香味を成ずる失有らざらんや。

釋答一

（一四八）衣と嚴具とは作れども成ぜざるが如し。

釋答二

（一四九）有るは說く、色に在りては、唯二處を化すと。

第五項　能化所化

（一五〇）化事を化作するは、即ち是れ通なりと爲さんか。

爾らず。

【一四七】若し生じて云云。若し色界にありて欲界の化を作す時は、香味を并せて外の四處を化するものなるが、都べて化事は能化の人が得を起して自ら得するを定めとす。然るに今の場合に於て色界に能化の人有るに、色界には香味無し、此の場合には云何にするかとの難意。

【一四八】衣と嚴具とは云云。體に著する衣又は莊嚴具の如く、化作しても我身に成就せずとの答。

【一四九】有るは云云。第二釋にして、異說也。生れて色界に在りて欲界の化事を作すには、唯色界の化事に順じて色觸の二境のみを化して香味に及ばずとの意。

【一五〇】化事を化作するは云云。化事を化作するのは神境通が化作するものかとの問にして答意は、神境通に引起せられたる能變化心が化作すといふ意なり。

云何。

是れは通の果なり。

此れに幾種有るか。差別は云何。

頌に曰はく、

〔二五〕能化の心に十四あり。定の果は二より五に至る。所依の定の如く得す。淨と自とより二を生ず。化事は自地に由る。語通は自と下とに由る。化身と化主とは、說必ず倶なり。佛には非ず。先づ願を立て、身を留めて、後に餘の心を起して語す。死して堅き體を留むること有り。餘は說く、留むる義無しと。

【二五】頌の舊譯

由化心、　此心有十四、如次第定果、二至五、非上得如定、淨定、自生二從彼、由自地化生、言說由餘地、與能化、非佛、立願已別作、已死願事成、非虛、餘說無、初一由多心、已成翻此能、修得是無記、若生得有三、意成由咒藥、業生故五種。

神境を明す中の第二段、神境通が化事を化作する他作の因として引起する能變化心及び其所化との關係を叙す。長行には一に能變化心を總說し、二に十四を枚擧し、三に變化心の起る依を說き、四に得定と得化心との關係、五に所化事と化心との地的關係、六に所化の語と發語心との關係、七に化主の語と所化の語との關係並に化主の佛なる場合、八に發語心と化心との關係、九に化主の留命十に通を習ふとの初なると、數習すると、依る通の功用の差別、十一に十四變化心の得（修得生得等の別）と三性分別等を明す。

初は多心にして、一の化なり。成滿は此れと相違す。
修得は無記の攝なり。餘の得は三性に通す。

能變化心の十四（初二句）十四心

論じて曰はく、神境通の果の能變化の心の力は、能く一切の化事を化生す。此れに十四あり、謂はく、根本四靜慮に依りて生ずるに差別有るが故なり。初靜慮に依るに〔一五二〕二の化心有り。一には欲界の攝、二には初靜慮の〔攝〕なり。第二靜慮に三の化心有り、二種は前の如く、二靜慮〔の攝〕を加ふ。第三に四あり。第四に五あり。謂はく、〔一五三〕各自と下となり。理の如く、應に思ふべし。

能變化心の起る依

諸の果としての化心は、自と上地とに依る。必ず下に依ると無し。下地の定心は上果を生せず、勢力劣なるが故なり。

〔一五四〕第二定等の果としての下地の化心は、初定等の果としての上地の化心に對するに、依及び行に

【一五二】二の化心あり、一には初定にて欲界の化を作すこと。二には初禪にて初禪の化をなすこと。

【一五三】各自と下となりとは自地（第四定等）と第三定迄の四・（欲界攝と初靜慮、第二定と第三定との攝の四）との五なり。

【一五四】第二定等云云。第二定によりて、上の如く、欲界攝、初定、第二定攝の三化心あり、初定によりて欲界攝と初定攝との二化心有り。その初定によるものの中初定の能變化心を、欲界攝のものに對して上地の變化心といふ。第二定によるものも此に準ず。而して今、同一欲界攝の變化心なりと雖も、その第二定によりて起るものは初定によりて起るものよりも、依地と行とに於いて勝なりと名く。第二定の果の化は第二定地にまで至るも、初定の果の化は單だ初定に止まりて、第二定に至らず、第三定等も準知すべし。

由りて、亦勝と名くることを得。

得定と得化心との關係（第三句）

靜慮を得るが如く、化心も亦然なり。果と所依と俱時に得するが故なり。

（一五五）諸の靜慮より果の化心を起すに、此の心より必ず直ちに出觀する義なし。（一五六）謂はく、淨定より初の化心を起し、此の後後の心は、自類より起り、此の前前の念は、自類の心を生じ、最後の化心は還つて淨定を生ず。故に、此れは二より［生じ］、能く二心を生ず。定の果の心の無記性の攝なるもの、還つて定に入らずして、直ちに出づる義有るに非ず。門より入りて、還つて門より出づるが如し。

所化の事と能化の心との關係（第五句）

諸の所化の事は、（一五七）自地の心に由る。異地の化心は餘地の化を起すこと無きが故なり。

所化の言と發語心（第六句）

（一五八）［所］化の發する所の言は通じて自と下との［能］化の發する所に由る。謂はく、欲と初定との［能］化の發する所の言あり。此の言は、必ず自地の心に由りて起り、上の［所］化の語を起すは、初定の心に由る。上地に自ら表［業］を起す心無きが故なり。

【一五五】諸の云云。定より、その果としての變化心を起すときは、その變化心より直接に出觀すること無く、必ず復た本の定に還りて、然る後出觀すとの意。

【一五六】謂く淨定より云云。初め善の靜慮より、通果無記の化心を生し、その化心より更に後後の化心を生じ、かくして最後にその化心より再び善の靜慮を生ずるに至る。故に化心は淨定と前念の化心とより生じて、自ら亦後念の化心と淨定とを起すこととなる也。

【一五七】自地の心に由るとは、例へば色香味觸の四境を化するは、欲界の心を以てするが如し。初禪には四境なきを以ての故なり。

【一五八】（所）化の發する所云云。例へば欲界の能變化が人物を化作せる時、その化人の起す語は欲界の發語心に依りて起し（自地）、又は初定の變化心が初定の化人を生ずる時、其化人の起す所の語は初定の發語心に依る、然るに二定以上即ち上の變化心の起せる化人の發する語は二定以上に發語

能化主の語と所化の語との關係（七十八句）

若し一の化主が多くの化身を起さんには、要らず化主の語るとき、諸の化身も方に語り、言音の詮表は、一切皆〔化主と〕同じ。故に有る伽他に是の如き說を作す。

(一五九) 一の化主の語する時は　諸の所化皆語
一の化主若し默すれば諸の所化も亦然り。

佛の化主たる場合

此れは但だ餘〔の有情〕を說く、佛は則ち爾らず。佛の諸の定力は最も自在なるが故に、所化の語と俱時ならざる容し、言音の詮はす所も亦別有る容し。

發語心と化心（九十句）

(一六〇) 發語の心の起るときは化心は既に無し。〔爾れば〕化身も應に無かるべし。如何にして語するか。

先づ願力に由りて所化の身を留めて、後に餘心を起して、語表業を發す。故に化と語との二心は俱ならずと雖も、而も化身に依りて亦語を發することを得。

化主の留命（十一句）

唯化主の命の現在する時にのみ能く化身を留めて、久時に住せしむるのみに非ず。亦住して命終の後に至らしむることあり。即ち(一六一)尊者大迦葉波の骨鎖の身を留めて、慈尊の世に至るが如し。唯堅

心（尋伺と相應して發語心あるも、二定以上には尋伺無きが故に）無きによりて初定等の發語心に依る。

【一五九】一の化主云云の頌は長阿含五、闍尼沙經參照。眞諦の舊譯次の如し。
一人正說レ言、諸所化俱語、
一人若默然、諸所化亦爾。

【一六〇】發語の心云云。二心并起せずと云ふ原則より、此の難を起す。

【一六一】尊者大迦葉波云云。增一阿含四十四不善品參照。迦葉雞足山中に骨鎖の身を化して死後に止め、彌勒菩薩（慈尊）の世を待つといふ。本行集經四十七、大迦葉因緣品の三、阿育王經、付法藏傳等參照。

實の體のみ久しく留ることを得可きが故に迦葉波は肉等を留めず。

異說（十二句）　有る餘師の說かく、願力の身を留むること、必ず能く死後に至らしむること有ること無し。〔一三二〕飮光尊者の骨鎖の身を留むることは、諸の天神の持して、久住せしむるに由りてなりと。

初習と數習（第十三句）　初めて業を習ふ者は、多くの化心に由りて、方に能く一の所化の事を化生し、習の成滿する者は一の化心に由りて、化せんと欲するに隨ひて、多少の化事を生ず。

十四變化心の得及び性（第十四句）　是の如きの十四の能變化の心は、皆是れ修得にして無記性の攝なり、卽ち是れ通果無記に攝する義なり。

餘の能變化心（第十五句）　餘の生得等の能變化の心は、善不善無記の性に通じて攝む、天龍等の能變化の心の如し。彼れも亦能く自他の身の化を爲すに、十色處に於いて、九を化す。聲を除く。

〔一三三〕理實には、能く化して根と爲る者無し。然るに、所化の境が根を離れざるが故に、九處を化すと言ふも、亦失有ること無し。

第六項　特に天眼通と天耳通と就て

天眼耳の言は、何の義に因ると爲すか。

〔一三二〕欲光尊者とは大迦葉のこと。

〔一三三〕理實には云云。上の如く五根四境の九を化作すと雖も實際は根を化作すといふことは不可能なり。但だ化する所の香色觸の四境が根と不離なる故に根を化作すと云ふも過無しとの意。

頌に曰はく、

（二六四）天眼耳は、謂はく、根なり。即ち定地の淨色なり。
恆に同分にして、缺くること無く、障の細遠等を取る。

天眼耳（初二句）

論じて曰はく、此の言は、唯天の眼耳の根に因る。即ち四靜慮の所生の淨色なり。謂はく、光と聲とを緣じて、加行を修するが故に、四靜慮に依りて、眼耳の邊に於いて、彼の地の微妙の大種の所造の淨色と、淨色の眼耳二根とを引起して、色を見、聲を聞く。[之れを]天眼耳と名く。

天と名くる所以

是の如きの眼耳を、何故に天と名くるか。體即ち是れ天なり。定地に攝するが故、

天眼の三種

然るに、天眼耳の種類に三有り。一には（二六五）修得の天、即ち前に說くが如し。二には（二六六）生得、謂はく、天中に生ぜるものなり。三には（二六七）似天、謂はく、餘の趣に生ぜるものなり。勝業等の引生する所なるに由りて、能く遠く見聞すること、天の眼耳に似たればなり。（二六八）藏臣寶と菩薩と輪王と諸の龍と鬼神と及び中有

【二六四】頌の舊譯
天耳及天眼、清淨色定地、
等分具恆故、遠細等境界。
長行は一に總說し、二に天と目くる理由を明し、三に天眼の三種を明し、四に同分彼同分を分ち、五に天眼の功用を說く。

【二六五】修得の天。四根本定を修して其力にて得せるもの也。

【二六六】生得。不動業を修して色界天に生じて得せるもの也。

【二六七】似天とは傍生鬼畜等に生じて勝れたる業に引かれ生ぜるもの也。

【二六八】藏臣寶とは輪王の七寶の一にして、人趣に在りて、勝業力の爲めに遠處の色を見るをいふ（施設論上卷參照）。他は知るべし。

と等の如し。

修得の眼耳の同分彼同分（第三句）

修得の眼耳は、過現當の生に、恆に是れ（一六九）同分なり。現在するに至りて、必ず識と俱にして、能く見聞するを以ての故なり。（一七〇）處所は必ず具にして、翳すると無く、缺すると無し、色界に生じたる一切有情の如し。

天眼耳の功用（第四句）

能く所應に隨ひて、障隔せられたる極めて細遠等の諸方の色聲を取る。故に此の中に於いて、是の如きの頌あり。

（一七一）肉眼は諸方の障へられたると、細と遠との色に於いて、能く見る功用無し。天眼は見て遺す無し。

第七項　五通の種類

（一七二）前に化心は修と餘との得に〔由りて〕異ありと說きたり。神境等の五も各異ること有りや。

亦有り。

云何。

【一六九】色を見る目的にて化作せられたるも具て、三世何れにても必らず識と俱なり、卽ち同分なり。

【一七〇】處所とは扶塵根（感官を與ふる物）のこと。それは具して二處に生じ、翳障等に障らるることも無く、又缺くることも無し。

【一七一】頌の舊譯

遠住被障細、徧處色不見、
肉眼見對色、天眼則翻此。

【一七二】前に云云。舊譯には此の間に、

二三千無數、應供獨覺佛。

二句及び長行の釋文有り。新譯にては此を前の六通を明す段の中に說けり。

頌に曰はく、

(一七三)神境に五あり。修と生と、呪と薬と業との成なるが故に。
他心は修と生と呪とに、又、占相の成を加ふ。
三は修と生と業との成なり。修を除いて、皆な三性なり。
人は唯だ生得無し。地獄は初めには能く知る。

神境智の五種（初二句）

論じて曰はく、神境智の類に總じて五種有り。一には修得、二には生得、三には呪成、四には薬成、五には業成なり。(一七四)曼駄多王及び(一七五)中有等の諸の神境智は、是れ業成の攝なり。

他心智の四種（三四句）

他心智の類に總じて四種有り。前の三は上の如し。〔是に〕占相成を加ふ。

天眼耳宿住の三種（第五句）

餘の三は各三なり。謂はく、修と生と業となり。

三性分別（第六句）

修所得を除きては、皆善等に通ず。定の果に非ざるが故に通の名を得ず。

人趣と五通（第七句）

人の中には都べて生所得の者無し。餘は皆有るべし、其の所應に隨ふ。
(一七六)本性の生の念は業所成の攝なり。

【一七三】頌の舊譯 有餘生得、眼、中陰非二彼境一、他心智有レ三、觀明呪所作、地獄初能知、於レ人無二生得一。初の二句は神境智の種類を明し、次の二句は他心智の種類を明し、第五句は天眼、天耳、宿住智の種類を明し、第六句は三性を分別し、第七句は人には生得なきことを明し、第八句は地獄には唯だ初生の時にのみ他心宿住の二智あることを明す。

【一七四】曼駄多王(Māmphātṛ; Māndhāta)。舊譯頂生王。後に長じて金輪王と成るといふ。

【一七五】中有等の等に諸の龍、諸の鬼神等を等す。

【一七六】本性の生の念とは宿世の生を憶念する念のこと。

地獄の初生と他心宿住等の智（第八句）

地獄趣に於いて、初めて受生する時は、唯生得の他の心と宿住とを以て、他の心等及び過去の生を知る。苦受に逼られ已らば、更に知る義無し。

餘趣

若し餘趣に生ずるときは、應の如く、當に知るべし。

巻の第二十八　(分別定品第八の一)

本論第八　分別(一)定品第一

第一章　諸禪定の內容及び過程

第一節　四　靜　慮

(二)已に、諸智所成の功德を說けり。餘性の功德を、今次に辯ずべし。

中に於いて、先づ(三)所依止の定を辯ぜん。

且らく、諸定の內に於いて、靜慮とは云何。

頌に曰はく、

(四)靜慮に四あり。各二あり。中に於いて、
生は既に說く。
定は、謂はく、善の一境なり。伴を幷す

【一】定(Samāpatti)。心常に一境に住して、散亂せず、統一的なるを云ふ、定に七名あり(瑜伽鈔五)。
(一)等引(三摩呬多 Samāhita)。
(二)等持(三摩地 Samādhi)。
(三)等至(三摩鉢地 Samāpatti)。
(四)靜慮(馱衍那 Dhyāna)。
(五)心一境性(質多翳迦阿羅多 Cittaikāgratā)。
(六)止(奢摩多Samatha。)
(七)現法樂住(Dṛṣṭa-dharma-sukha-vihāra)。

【二】先きに賢聖品に於て無漏の果を明し、智品に於て其因を明せり。今此の定品に於て無漏の緣を明す。定によりて智を生じ、智の運用は諸の功德となる。故に智は因にして定は緣なり。又定それ自身も

れば、五蘊の性なり。
初めは、(五)伺と喜と樂とを具す。後は、
漸く前の支を離る。

說意　論じて曰はく、一切の功徳は、多く靜慮に依る。故に、先づ靜慮の差別を辯ずべし。

四靜慮　此れに總じて、四種有り。謂はく、初と、二と、三と、四となり。四に各二有り。謂はく、定と及び生となり。

生靜慮　(六)生靜慮の體は、世品に已に說く。謂はく、第四には八あり。前三には各三あり。

定靜慮　(七)定靜慮の體は、(八)總じて、之れを言はば、是れ善性に攝する心一境性なり。善の(九)等持を以て、自性と爲すが故に。若し助件を幷すれば、五蘊を性と爲す。

功徳の隨一なり。

【三】所依止の定とは、德所依の定なり。諸の功德は定によりて起るものなるが故に、先づその根本なる定の內容を明にするにあり。

此の所依の定に四あり。卽ち四靜慮、四無色定、八等至、諸等持、是れなり。今本文に於ては、此等の四科に分ちて所依の定を明にせり。

靜慮とは舊譯の禪那(Dhyāna)にして、之れに四有り、初禪、二禪、三禪、四禪と云ふ。禪は禪那の略名にして、共に三界の中、色界に攝む。

【四】頌の舊譯

四定有㆓二種㆒、生得定已說、修定善一類、共㆓伴類㆒五陰、有㆓觀及喜樂㆒、前前分所㆑離。

初めの一句は四靜慮の二種の體を明し、第二句は生靜は已に說けるを示し、三四句は定

靜慮の體を明し、五六句は因靜慮の次第あることを明す。

【五】伺(Vicāra)は尋(Vitarka)と共に心所法に攝す。尋は尋求の意にして、伺は伺察の意なり。前者は心の麤なる作用にして、後者は細なり。又覺及び觀とも譯す。(增一阿含經第二十三)參照。

【六】生靜慮(Kārya-dhyāna果定の義)とは色界の有情の異熟身なり。その體は五蘊なり。已に世間品に說く。第四禪に八あり、前の三禪に各各三あるが故に合して十七天あり。

【七】定靜慮(Kāraṇa-dhyāna因定の義)。各禪に各各一あり合して四あれども、今總じて體を出す時は、善の等持に攝むるなり。

【八】諸の特色を區別せずして全體として言へば善性なり、又は靜慮は五蘊より成れども

一境性 何をか一境性と名くる。

謂はく、一の所縁を專らにす。

論主の難 若し爾らば、卽ち、〔一〇〕心の一境に專なる位に、之れに依りて、三摩地の名を建立せば、別に、餘の心所法有るべきに非ず。

有部の釋 別の法の、心をして、一境に於いて、轉せしむるを三摩地と名く、體卽心には非ず。

論主復た難す(一) 豈に、諸の心は、刹那滅の故に、皆一境に轉ずるにあらずや、何ぞ等持を用ゐん。

論主復た難す(二) 若し心をして、第二念に於いて、散亂せざらしむるが故に、等持あるべしと謂はば、則ち、〔一一〕相應に於いて、等持の用無かるべし。

論主復た難す(三) 又、〔一二〕此に由るが故に、三摩地成せば、寧ぞ、則ち、斯れに由りて、心、一境に於いて、轉せざらんや。

論主復た難す(四) 又、〔一三〕三摩地は、是れ大地法なり。應に一切の心は、皆な一境に轉ずべし。

其中諸善應に亙りて差別なき等持の一について言はばと解するも可なり。

【九】 等持(Samādhi)。十大地法の中、三摩地の心所なり。心を平等に持して、一境に轉ぜしむるを云ふ。

【一〇】 心とは心王なり。心王が一の境に專らに緣ずるを三摩地と名けば、別に三摩地といふ心所を立つる要なかるべし。經部にては心が一境に專にして轉ずる位を假りに定と名くるが故に、論主此の意を以て有部を難す。

【一一】 初念の刹那に相應する心王に於ては、等持は無用なるべしとなり。

【一二】 此。餘の或ものを指す。三摩地に由るが故に、一境に於て轉ずと說かば、此の三摩地は何に由りて一境に於て轉するか、卽ち餘の或るものに由りて、三摩地をして一境に轉ぜしむるなくば寧ぞ、此の餘の或るものに由りて、心王一境に於て轉ぜざるか、別に等持を用ふる要なかるべし。

【一三】 此の三摩地は大地法に攝むる心所にして、一切の善惡無記の三性の心と相應す。

有部の敎

爾らず。餘品の等持は劣なるが故なり。

經部の義

有る餘師は說く、卽ち、心、一境に相續して轉ずる時を三摩地と名く。〔一四〕契經に、此れを說きて、「增上心學」と爲すが故に。「又」〔一五〕「心の淸淨最勝なるは、卽ち四靜慮」と〔爲す」が故なり。

靜慮の名を釋す

何の義に依るが故に、靜慮の名を立つるか。

有部の答

此れ寂靜にして、能く審慮するに由るが故なり。審慮は卽ち是れ實に了知する義なり。〔契經〕に、「心、定に在りて、能く實の如く了知す」と說くが如し。審慮の義の中に、〔一六〕地界を置くが故なり。

此の宗の審慮は、慧を以て體と爲す。

難

若し爾らば、諸の等持は、皆な靜慮と名くべし。

答

爾らず。唯だ〔一七〕勝れたるに、方に、此の名を立つ。世間に言ふが如く、光を發するを日と名け、螢燭等も亦た日の名を得るに非ず。

靜慮を如何ぞ獨り名けて、勝と爲すか。

諸の等持の內、唯だ此れのみ〔一八〕支を攝す。止觀均行にして、最も能く審慮す。現法樂住及び樂通行の名を得。故に、此の等持を獨り靜慮と名く。

【一四】雜阿含二十九十七丁（縮辰三、七十二右）曰、何等爲增上意學、若比丘離欲惡不善法、乃至第四禪具足住。

【一五】增一阿含第二十三、（縮伏二、十丁左）曰、有此四增上之心、我以此三昧之心淸淨無瑕穢、亦無結使得無所畏云云。

【一六】地（Dhi）は「審慮」と云ふ義の動詞なり。文は dhi と云ふ語根は審慮の義に用ゐられたるが故なりと云ふ意なり。

【一七】四靜慮は寂靜にして審慮する義が勝れたるが故に。

【一八】支とは十八禪支なり。此の事は次下支體性を明す節に於いて委しく說く。

問　若し爾らば、染汙は、寧ぞ、此の名を得んや。

答　彼れ、亦た、能く邪審慮するに由るが故なり。

難　是れ、卽ち、應に大過の失有るべし。

答　大過の失無し。要らず、相似の中に、方に、名を立つるが故に、(一九)敗種等の如し。世尊も亦た「惡の靜慮有り」と說く。

問　若し一境性、是れ靜慮の體ならば、何の相に依りて、初、二、三、四を立つるか。

答　伺と喜と樂とを具するを建立して、初と爲す。此れに由りて、已に亦た尋を具する義を明す。必ず倶に行ずるが故に。煙と火との如し。伺に喜樂有りて、尋と倶ならざるに非ず。漸く前の支を離するに、二、三、四を立つ。伺を離して二有ると、二を離して樂のみ有ると、具に三種を離ると、其の次第の如し。

結　故に、一境性を分ちて、四種と爲す。

第二節　四無色

已に、靜慮を辨じつ。(二〇)無色は云何。

頌に曰はく、

【一九】腐敗したる種子も生種に似たるを以て種と名く。

【二〇】無色(Arūpya)。四[illegible]……就して、色法の繫縛を脫した

〔二〕無色も亦是の如し。四蘊にして、下地を離る。
幷に上の三近分を、總て色の想を除くと名く。
無色は、謂はく、色無し。後の色は心より起る。
空無邊等の三の名は、加行に從へて立つ。
非想非非想は、昧劣なるが故に、名を立つ。

無色の數と體

論じて曰はく、此れと靜慮とは、數と自性と同じ。謂はく、四つ〔三〕各二なり。生は前に說くが如し。卽ち世品に、生に由つて四有りと說く。定無色の體は、總じて之れを言はば、亦た善の性に攝する心一境性なり。此れに依るが故に、「亦た是の如し」の言を說く。

四蘊

然るに助件の中に、此れは色蘊を除く。無色に隨轉の色有ること無きが故なり。

離下地

一境性にして、體相差無しと雖も、下地を離れて、生ずるが故に、四種を分つ。謂はく、若し已に

る境界なり。是れに四有り、空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處、是れなり。

【二】頌の舊譯
無色有四陰、寂離二下地生一、制二伏色想名一、共二三種近分一、更生レ色從レ心、空無邊、及識、無邊、無所有、由二加行一立レ名、昧故非想非。
初句と第二句とは四蘊の體性を明す。下地を離るとは生に約して四を分つ。第三、四句は色想を除くことを明す。第五句は總名を釋す。第六句は妨を釋す。第七句以下は別名を釋す。

【三】各二とは、四無色の各に生無色と定無色の二あることを云ふ。

第四靜慮を離れて生ずるときは、（三三）空無邊處を立つ。乃至、已に無所有所を離れて、生ずるとき、非想非非想處を立つ。

離の義を問ふ

離は何の義に名くるか。

答

謂はく、此の道に由りて、下地の惑を解脱す。是れ下染を離るる義なり。

四近分及び除色想を釋す

卽ち此の四の根本と、幷に上の三近分とを、總じて說いて名けて、色の想を除去すと爲す。空處の近分は、未だ此の名を得ず。（三四）下地の色を緣じて、色想を起すが故に。

無色

（三五）皆、色無きが故に、無色の名を立つ。

大衆部等の難

此の因成ぜず、（三六）色有りと許すが故に。

有部の返徵

若し爾らば、何故に無色の名を立つるか。

大衆部の答

彼の色、微なるに由るが故に無色と名く。微黄の物を亦た無黄と名くるが如し。

有部の責破、總責

彼の界の中の色、何の相有りと許すか。

【三三】 空無邊處（Ākāśānantyāyatana）。一切の色想を废し、有對の想を滅し、若干想を念ぜず、無量空なりと觀ず、是れ空無邊なり。處とは所依の義。識無邊處（Vijñānānantyāyatana）。一切の空無邊處を废して、無量識なりと觀ず、是れ識無邊處なり。無所有處（Ākiñcanyāyatana）。一切の識無邊處を废して、所有無しと觀ず、是れ無所有處なり。非想非非想處（Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana）。一切の無所有處を废して、想に非ず、非想に非ずと觀ず、是れ非想非非想處なり。

【三四】 第四定の色を謂ふ。

【三五】 皆とは無色の四根本定と上二近分なり。

【三六】 大衆部化地部等にては無色にも微細の色ありと立つ。故に有部に、色無きが故に無色と云ふは、普通的の所論にあらざるなり。詳しくは宗輪論述記上五十三丁左、及び婆沙論八十三、十六丁右、その他、大法鼓經上十三丁、大涅槃八十六丁右、實性論二、廿五丁右等參照。

別破、律義に約して破す

若し彼れに、唯だ(二七)身語の律儀有りと云はば、身語既に無し、律儀寧ぞ有らんや。又、大種無し何ぞ造色有らん。若し(二八)無漏の律儀有るが如しと謂はば、爾らず。無漏は有漏の大種に依るが故なり。

無色定に約して破す

又、(二九)彼は、定中に亦た有を遮するが故なり。

色根に約して破す

若し、彼れに於いて、(三〇)色根の身有りと許さば、如何ぞ、彼の色微少なりと言ふ可き。

牒破す

若し、彼れに於いて、身量少なるが故にと謂はば、(三一)水の細蟲の極めて微なるをも亦た、應に無色と名くべし。亦た、身量少にして見る可からざるが故なり。

救を牒して破す

若し、彼の身極めて(三二)淸妙なるが故にと謂はば、(三三)中有と色界とを應に無色と名くべし。若し、彼の身淸妙の中の極なりと謂はば、應

【二七】大衆部計す、無色界には餘の色は無けれども身語の無表色有り、而してその惡の無表色を防ぐ爲に身語の律儀ありと說くと。故に之れを破して曰はく、無色界には已に身語の表業なし、然ればその表業に伴ふ無表業の有る可き理なし。從つて律儀の用なかるべしと。

【二八】無漏の大種はなけれども無漏の無表色あるが如く、無色の大種はなけれども無色の無表はありと云ふ意味なり。

【二九】大種無くとも造色あり、無漏の大種無きも無漏の律儀あるが如しと言はば、是れ爾らず。有漏の大種は有なるを以て、所造の色あらば、是の大種は無色に有るべし、而して無漏の大種は無きを以て、何處に於て無漏の律儀が生ずとも、其れは有漏の大種に依るものならざる可からず、故に引例は不當なり。

【三〇】色は無色に生じたるものに無きのみならず、又其の因たる無色の定中にも無きものなり。

眼耳鼻舌身の五色根を有する身となり。

【三一】四分律十二(卄丁右)五分律六(卄九丁)僧祇十五(五丁)多論八(三丁)等に說く、就きて見るべし。

【三二】淸妙とは淸徹美妙なるを云ふ。

【三三】中有(Antara-bhava)。四有の一なり。現世に死したる後、未だ次の生を受けざる間なり。其間は或は極少時又は七日、七七日、及び無定限なり。

に唯だ(三四)有頂のみ、無色の名を得べし、(三五)定の如く、生身も勝劣有るが故なり。

不了見を例難す

又、静慮に生ずる所有の色身も、(三六)下地の根の能く取る所に非ざるが故に、(三七)彼と何の異ありて無色と名けざる。

救を破す

若し、欲色は、(三八)義に隨ひて、名を立て、無色は然らずと謂はば、此れ何の理有るか。

教證を牒して破す

若し、經に(三九)「壽煖合す」と説くが故に。又、(四〇)「名色と識と相依ること、二の蘆束の相依りて住するが如し」と説くが故に。又、(四一)「名色は識を縁と爲す」と説くが故に、又、(四二)「色を離れて、乃至、行を離れて、識に、來有り、去有ることを遮す」「と説く」が故に、此に由りて無色に色有る理成ずと謂はば、此の證成ぜず。應に審思すべきが故に。謂はく、所引の敎、應に共に審思すべし。

有部總じて非して思を勸む

【三四】 有頂(Bhavāgra)。無色界の最終の天。

【三五】 定に勝劣上下の不同有るが如く、生身にも勝劣上下不同あり。

【三六】 下地は欲界の意。欲界の眼根にては、静慮に生ぜる者の色身をも見ること能はず。

【三七】 彼とは無色界の身なり。

【三八】 欲界には欲あるが故に、色界には色あるが故に、此等の義によりて、欲色の名を立つ。無色は然らず、色ありと雖も、無色と名くと云はば、その理如何。

【三九】 中含五十八(昃七、八十四丁右)曰く、有三法、生身死已、身棄二塚間一、如木無レ情云何爲レ三、一者壽二者煖三者識。文の中巳に煖と云ふ、是れ色に非ずやとの意。

【四〇】 雜阿含十二(辰二、六十六丁右、中含五八、大拘絺羅參照)に曰く、然るに彼の名色識を縁じて生ず。而して今又名色識を縁ずと言ふ。此義云何……譬へば三蘆を空地に立つるが如し。展轉相依りて竪立することを得……識名色を縁ずるも亦復是の如く、展轉相依りて生長することを得。

【四一】 前の引經に明示せり。雜阿含二(辰二、十二丁右)若し所有の識あるは、彼れ一切の名色の縁となるが故に。

【四二】 雜阿含二(辰二、七丁左)に曰く、若し色受想行を離れて、識若は來若は去若は住若は生有らば、彼は但だ言數有るのみ。問巳りて知らず。

第一經を通ず　且らく契經に壽煖合すと言へるは、(四三)一切の界に約すと爲んや、欲界に約して說くと爲んや。

第二經を通ず　名色と識と相ひ依住すとは、一切の界に約すと爲んや、欲色に約して說くと爲んや。

第三經を通ず　所說の名色は識を緣と爲すとは、一切の識、皆名色の緣と爲ることを說くと爲んや。名色の生ずること、識を緣とせざること無しと云ふことを說くと爲んや。

第四經を通ず　(四四)色より行に至るまでを離れたる識に、來去有ることを遮すとは、隨つて一を離るるを遮すと爲んや、一切を離るるを遮すと爲んや。

有部の救を牒して第一經を破す　若し、契經の言に、(四五)簡別無きを以て、此れに於いて、更に審思を致すべからずと謂はば、此の說然るべからず。太過の失あるが故に。謂はく、應に(四六)外煖も亦た壽と合すべし。

第二第三經を破す　又、應に(四七)外の名色、識に依り、識を緣と爲すべし。

第四經を破す　又、(四八)四食を說く、四識住の如し。色無色界

【四三】一切の界とは欲、色、無色の三界なり。今此の經の意は唯だ欲界にのみ云へるなり。煖は色界に通ずれども、そは顯なるに非ず、故に今は顯に就きて云はば、欲界のみに關す。

【四四】有部は、此の經文は色受想行の四を離れては識去來なしと云ふ意なれども、無色には色蘊を缺くが故に、他の三蘊を離れては識去來なき黨と說くなり。

【四五】經に壽煖と云ふ。煖に就きて簡別し限定せざるを以ての意なり。

【四六】外煖とは日光、炭火等の煖を云ふ。

【四七】名色等に就きても、經の意は簡別せずして唯だ名色とあるが故に、無色界の識が名色に相依りて住すと云はば、外の非情の名色、即ち四相等も識と相依ると云ふ可し、名色が識を緣ずる場合も亦同じかるべし。

【四八】四食(Ahāra-catuṣka)。雜阿含第十五(七左)辰二(八十丁右)に曰く、四食有り、衆生を資益す、世に住し長養攝受を得せしむ。何等か四と爲すか、謂はく、麤摶色、細觸食、意思食、識食なり云云。即ち四食は普通段食(Kavaḍikārāhāra)。觸食(Sparśāhāra)。意思食(Manaḥ-sañcetanāhā-

經を引きて救を破す

に應に段色有るべし。

若し、經に「(四九)一類の天有り、段食を超ゆ」と說くが故に、又「(五〇)彼の天は喜を食と爲す」と說くが故に、斯の過無しと謂はば、則ち、無色界に色有るべからず。契經に「(五一)彼れ色を出離す」と說くが故なり。又、契經に言はく、「(五二)無色の解脫は最も寂靜たり、諸色を超ゆるが故に」と。又、契經に說く、「(五三)無色の有情は、一切の色想、皆な超越するが故に」と。

若し、無色界に實に色有らば、定んで彼の色の自相可知なるべし。如何ぞ、色想を超ゆる等と言ふ可けんや。

救を牒して破す

若し、(五四)下の麤色を觀ずるが故に說くと謂はば、則ち、段色に於いても、亦た然ることを許すべし。又、諸の靜慮も下の麤色を超ゆれば、亦た應に、出離色の言を說くべし。是れ則ち亦た應に無色界と名くべし。又、亦た應に受等を出離すと說くべし。(五五)彼も亦た、下の麤の受等を超するが故に。

na)。識食（Vijñānāhāra）也。今上記の文意を見るに四食經に簡別なく、四食が有情を持すと說けり。大衆部所引の第四の經文の四識住が色を持すと說けるが故に、無色の識にも色識住ありと云はば、色無色にも段食あるべし。

【四九】 中阿含經第五（四丁左）昃（五二十七左）身壞命終して摶食の天を過ぐとあり。

【五〇】 長阿含經第二十（十六左）昃九（百八右）曰く、自上の諸天は禪定の喜樂を以て食と爲す。

【五一】 雜阿含經第十四（十三右）辰二（七十八左）曰く、若し復寂靜解脫は色無色を起し、身作證具足住し諸漏を起さざれば心善解脫するや云云。ここに「起し」とあるは「超し」の誤字なるべく、超しならば此の經の文意も通ずべし。

【五二】 中阿含經第二十四（十二右）昃六（十八右）曰く、無色の衆生有り一切色想を度す。

【五三】 無色の色を離脫し超越すと說けるは、下の欲界色界の麤色に比して、色を超ゆると說きたるものにして、細色はあるべしと云はば……

【五四】 下の●●●色。欲界の麤色也。

【五五】 無色界は下の欲色二界の麤なる苦樂受等を離れてあれば、無色界は受等を出離すと說くべし。

經に既に說かず。知んぬ、無色の中に徧く色類を超えて、受等を超ゆるに非ざることを。

此れに由りて、定んで知んぬ、彼の界に色無きことを。

伏難を通釋す

然るに、(五六)契經の中に、「(五七)有は有を出でず」と說くことは、(五八)自地の有に於いて、出づる能はざるが故に。「又た」、徧く出づるに非ざるが故に、永く出るに非ざるが故に。

無色を證す

又、薄伽梵、「(五九)靜慮の中に於いて、色類乃至識類有り」と說き、「無色の中に於いては、受類乃至識類有り」と說きて、「色有り」と說かず。若し、無色の中に、實に色有らば、何ぞ靜慮の如く、「色類有り」の言を說かざる。

故に、所立の因、不成の過無し。

劫を釋す

彼の「無色界」に在りて、(六〇)多劫色の相續斷ず。後歿して下なる「欲色界」に生ずるとき、色、何に從りてか生ずる。

【五六】雜阿含經第十七(辰二、九十六右)曰く、若し色界の衆生及無色界に住し、滅界を識らざる者還りて復諸有を受く。

【五七】「有は有を出でず」とは、有に由つて有を出づることは不可能なりとの意なり。

【五八】已に無色は色を超ゆと云ふときは、經に「有は有を出でず」と說くに相違す、如何ぞ無色が色を超んやとの難に對して、三義を以て通釋す。第一は自地の有を出づる能はざる義にして、他地の有を出づること能はざるには非ず、第二は色有に由つて欲有を出づるも其に由つて無色有を出づること能はず、第三は欲有を出づと云ふも畢竟に非ず、再度還り來るが故に、是の如く無色に由つて色有を出づと云ふことも準じて知るべし。

【五九】本地經六(四十丁右)。

【六〇】婆沙論八三(十六丁左)曰く、若し無色界に全く色無くんば欲色界に死して無色界に生ずるに、或は二萬劫或は四萬劫或は六萬劫或は八萬劫にて諸色斷じ已りて、後死して還りて欲色界に生ずる時色云何が起る。若し色斷じ已りて還りて起るを得ば般涅槃せりと、諸行已に斷じ、亦た後時還りて諸行を起すべし。此の失有る勿れ、故に無色界決して色有り云云。

大衆部等の問

此れ心より生ず、色より起るに非ず。謂はく、昔、起す所の色の異熟因、熏習して心に在り、功能今熟す。是の故に、今の色彼の心より生ず。

有部反責す

彼に色身無くんば、心何に依りてか轉ずる。

大衆部等の答

身を離れて、何ぞ轉ぜざらん。

有部反責す

(六一)下に曾て見ざるが故に。

(六二)色界に段食無し、身復た何に依りてか轉ずる。(六三)下にも亦た、身、段食を離れて轉ずることを見ざるが故に。又、(六四)先に彼の心の轉ずる所依を說けり。

空無邊等を釋す

已に、總名を釋せり。空無邊等は、空等を、緣ずるに從ひて、別名を得るか。

爾らず。

云何。

三無色を釋す

下の三無色は、其の次第の如く、加行を修する時、無邊の空と及び無邊の識と無所有とを思ふが故に、三の名を建立す。

非想非非想を釋す

第四の名を立つるとは、想の昧劣なるに由る。謂はく、(六五)明勝の想無ければ、非想の名を得、

【六一】欲色の二界。

【六二】色界に段食無きも身の轉ずるより推して考ふるに、無色に身なきも心轉ずべし。若し欲色なる下界に身を離れて心の轉ずると無きを以て、無色に身を離れて心轉ぜずと言はば、欲界に段食を離れて身の轉ずること無きを以て、色界に段食を離れて身轉ずること無しとするか、理に應ぜざるべしとの意なり。

【六三】欲界を云ふ。

【六四】世間品（八二丁左）に、彼の無色の心の轉ずる所依は、謂はく命根と衆同分とに依りて轉ずと說けり。

【六五】下の七地の如き明勝の想無し。

（六六）味劣の想有るが故に、非非想と名く。加行の時も亦た是の念を作すと雖も、「謂はく」（六七）諸想は病の如く、箭の如く、癰の如し。若し、想、全く無んば、便ち癡闇に同ず。唯だ非想非非想の中に、上と相違せる寂靜の美妙なる有りと、而も此の加行に就いて、名を立てざるは、若し詰つて、何に緣りてか、加行に是の如きの念を作すと言はば、必ず應に答へて、（六八）彼の處に於いて、想、味劣なるを以ての故にと言ふべきを以てなり。此の味劣なるに由るが故に、是れ立名の正因なり。

第三節　八等至

第一項　總說

已に無色を辯じつ。云何が（六九）等至なる。

頌に曰はく、

（七〇）此の本の等至に（七一）八あり。前の七に各三有り。

謂はく、味と淨と無漏となり。後は味と淨との二種なり。

【六六】二無心定の如く、心全く無きにあらず、味劣の想有るなり。

【六七】諸想とは前七定の諸想なり。卽ち初二定の喜想は病の如く、三定の樂想は箭の如く、四、五、六、七地の捨想は癰の如しと云ふ意なり。

【六八】彼の處とは有頂の根本處なり。

【六九】等至(Samāpatti)。

【七〇】頌の舊譯

如﹅此根本定、八物有﹅三種七﹅有﹅噉淸淨、無流第八二、噉味相應定、有愛世間淨、淸淨是堪噉、出世定無流。

等至に根本等至あり近分等至あり。今は根本等至を說く。第一句は等至の體を明し、次の三句は八等の中にて、味、

味は、謂はく、愛と相應するなり。　淨は、謂はく、世間の善なり。
此れ即ち味著する所なり。　無漏は、謂はく、出世なり。

根本等至

論じて曰はく、此の上に辯ずる所の靜慮と無色との根本の等至に、總じて八種有り。中に於いて、前の七に各具さに(七二)三有り。有頂の等至は唯だ二種有り。(七三)此の地は味劣にして、無漏無きが故なり。

味等至

初の(七四)味等至は、謂はく、(七五)愛相應なり。愛は能く味著す、故に名けて味と爲す。彼と相應するが故に、此れ味の名を得す。

淨等至

(七六)淨等至の名は、世の善定に目く。無貪等の諸の白淨の法と相應して起るが故に、此れ

淨、無漏三種の具と不具とを明し、次の四句は上の三種の義を釋す。

【七一】八ありとは四靜慮と四無色となり。

【七二】三有りとは味定、淨定、無漏定なり。

【七三】婆沙論百六十二(十一左)には、欲界の有頂是れ根本有り、故に聖道有ること無しと說けり。

【七四】味等至(Āsvādana-samāpatti)。是れ貪煩惱と相應する定にして、前念の定に愛著す。此の貪は初定の貪にして欲界の貪にあらざれば退失することなし。
婆沙論百六十二(十左)曰く、初靜慮に三種有り、謂はく、味相應と淨と無漏となり。味相應とは、謂はく愛相應なり。能く心を持して境に於て流注す。其の相順定の故に。

【七五】愛相應に關して婆沙論百六十一に云はく、「問ふ何故に但だ愛と相應すると說きて、餘の煩惱に非ざる。有るは說く、此の中には相似する者を說く。謂はく、愛定と相似す餘の煩惱に非ず。所以は何ん、定は所緣に於いて、流注相續す、愛も、亦、是の如し」と云云。

【七六】淨等至(Śuddha-samāpatti)。婆沙論百六十二(十左)曰く、淨とは謂く善の有漏也。無漏は謂はく聖道なり。問ふ善有漏定に垢有り、濁有り、毒有り、刺有り、濁有り、過失有り、云何が淨と名く。答ふ、究竟淨に非ずと雖も、少分淨を以ての故に淨と名く。謂はく、煩惱に雜へざる故に、煩惱と相應する故に、無漏靜義淨を引發するが故に、聖道に順ずるが故に、無漏眷屬な

に淨の名を得。卽ち味相應の所味著の境なり。此の無間に滅するとき、彼の味定生ず。過去の淨を緣じて、染して味著を生ず、爾の時に、所味の定を出づと名くと雖も、能味の定に於いて、名けて入と爲すことを得。

無漏定

(七七)無漏定とは、謂はく、出世定なり。愛、緣ぜざるが故に、所味著に非ず。

第二項　靜慮の意義

(イ)　靜　慮　支

是の如きの所說の八等至の中、靜慮に(七八)支を攝す、(七九)諸の無色に非ず。四靜慮に於いて、各幾くの支有るか。

頌に曰はく、

(八〇)靜慮の初は五支あり。尋と、伺と、

ろが故に云云。

【七七】無漏定（Anāsrava-samāpatti）。婆沙論百六十二(十一右)曰く、問ふ、無漏の等至は是れ勝義淨なり、何故に名けて淨と爲さざる。乃至有るは說く、無漏は淨と名く、共に了知する所なり。有漏は淨と名く、共に知る所に非ず。是を以て偏に說く。有るは說く、名依差別の義を立つ。善有漏定は初は染汚法に違ふ、淨の義は勝と爲す。故に說いて淨と名く。聖道は漏を斷す、無漏の義は勝なり、故に無漏と名く云云。

【七八】支（Aṅga）。支分、部分、成分の義。

【七九】婆沙論八十(十一右)に曰く、問ふ、靜慮の近分及無色定は支を立つと爲んや、支を立つに若かざらんや、此れ何ぞ說かざる。乃至評して云はく、是の說を作すべし、靜慮の近分及び無色定は皆な支を立てず、功德少の故に、菩道の攝の故に云云。

【八〇】頌の舊譯

於初有五分、覺觀喜樂住、
喜等及內淨、於第二四分、
第三有五分、捨念慧樂住、

喜と、樂と、定となり。

第二は四支有り。內淨と、喜と、樂と、定となり。

第三は五支を具す。捨と、念と、慧と、樂と、定となり。

第四は四支有り。捨と、念と、中受と、定となり。

五支

論じて曰はく、唯だ淨と無漏との四靜慮の中にて、初に(八一)五支を具す。一には尋、二には伺、三には喜、四には樂、五には等持なり。此の中の等持を頌に說いて「定と」爲す。等持と定とは、名は異にして、體は同じ。故に、(八二)契經に說く、「心定と等定とを正等持と名く」と。此れを亦た名けて、「心一境性」と爲す。義は前に釋するが如し。

靜慮と支
初靜慮
論主の自義

傳說すらく、唯定のみ是れ靜慮にして、亦た靜慮支なり。餘の四支は是れ靜慮支にして、靜慮に非ず。如實義は、(八三)四支の軍の如し、餘の靜慮支も、應に知るべし、亦た爾なり。

最後有四分、中受捨念住。

【八一】順正理論七十七(十四右)曰く、此中支の名は何の義を目くとなすか。成の義を顯はす、何が顯成せらるる。謂はく此れ是初靜慮乃至第四靜慮を顯成す。或は此支の名は順の義に目く。拘櫞等の名隨の如く餘支と爲る。謂く十八支各各自地に順ず、或は資具の義を說きて名けて支と爲す。婆沙論八十(五右)曰く、寂靜思慮の故に靜慮と名く。此靜慮に隨順するが故に靜慮支と名く、隨順の義を以て重擔を負ふ義、大事を成ずる義・堅勝の義、分別の義、是れ支の義の故に云云。

【八二】雜阿含經二十八(廿一丁右)辰二(六十六左)曰く、若し心不亂不動に住して、寂止三昧一心を攝受す、是れを正定と名くと。

【八三】四支の軍とは象馬車步を云ふ、此の四支合して初て軍と名け得べし。卽ち總じて云へば軍なり、別して云へば支なり。故に別を攬りて總を成す、其故に軍は卽ち假法なり。靜慮の五支も亦た同じ、別すれば支なり、靜慮は總なり、故に靜慮は是れ假なり。

第二靜慮には、唯だ四支有り。一には（八四）內等淨、二には喜、三には樂、四には等持なり。第三靜慮には、具さに、五支を具す。一には（八五）行捨、二には正念、三には正慧、四には（八六）受樂、五には等持なり。（八七）第四靜慮には唯だ四支有り。一には行捨淸淨、二には念淸淨、三には非苦樂受、四には等持なり。

（ロ）支の體性

靜慮支の名、既に十八有り。中に於いて、實事は總じて幾種有るか。

頌に曰はく、

（八八）此の實事は十一あり。初二の樂は輕安なり。
內淨は卽ち信根なり。喜は卽ち是れ喜受なり。

【八四】內等淨（Adhyātma-saṃprasāda）。顯揚聖教論第十九（來七、八十二右）曰く、問ふ內等淨は何法を以て體と爲す。答ふ。念正知及び捨を以て體と爲すと云云。

【八五】行捨（Saṃskāropekṣā）。苦、樂、捨の捨に非ずして、心所の捨なることを行捨と云ふ。

【八六】受樂とは、婆沙論八十（四右）に曰はく、初二の靜慮は是れ輕安の樂、第三の靜慮は別して是れ受樂なり、初二の靜慮の樂は行蘊の攝なり、第三靜慮の樂は受蘊の攝なりと云云。

【八七】第四靜慮に限りて捨及念を淸淨と云ふは、婆沙論八十一に曰はく、問ふ、下地にも亦た無漏の捨念有り、何故に但だ第四靜慮を捨念淸淨と說くか、答ふ、第四靜慮の捨念は倶に八擾亂の事を離るが故に淸淨と名く。苦と樂と憂と喜との入息と出息との尋伺を名けて八擾亂事と爲す、此の中にのみ皆無ければ獨り淸淨と名くと云云。

【八八】頌の舊譯　實物有二十一、輕安樂前二、信根內淨、喜、適心由二證。初句は總じて實事の數を叙し下の三句は正しく體を明す。

實事

論じて曰はく、此の支の實事は、唯だ十一有り。謂はく、初の(八九)五支は即ち五の實事なり。第二靜慮の(九〇)三支は、前の如し、內淨支を增す、前に足して六と爲す。第三靜慮の等持は、前の如し、餘は(九一)四支を增す。前に足して十と爲す。第四靜慮の(九二)三支は、前の如し、非苦樂支を增す、前に足して(九三)十一と爲す。

四句分別

此れに由るが故に說く、是れ初支にして、第二支に非ざる有り、應に(九四)四句を作るべし。第一の句は、謂はく、尋伺なり、第二の句は、謂はく、內淨なり、第三の句は、謂はく、喜樂等持なり、第四の句は、謂はく、前を除きて餘の法なり。餘支は相對して、理の如く、應に思ふべし。

經部の問

何の故に、(九五)第三に樂受を增すと說くか。

有部の答

初二の樂は輕安の攝なるに由るが故なり。

經部の問

何の理を證と爲して、是れ輕安なることを知るか。

【八九】五支とは尋、伺、喜、樂、定なり。

【九〇】三支とは喜、樂、定なり。

【九一】四支とは捨、念、慧、樂なり。

【九二】三支とは捨、念、定なり。

【九三】十一とは尋、伺、喜、樂、定、內等淨、捨、念、慧、樂、非苦樂なり。若し種類によりて說かば九種有り、喜樂捨の三は同じく是れ受なり、九種とは、謂はく念、慧、受、信、輕安、行捨、尋、伺、定なり。

【九四】初句は、初支にして第二支に非ず、尋、伺なり。第二句は、第二支にして初支に非ず、內等淨なり。第三句は、初支にして亦た第二支なり、喜、樂、等持なり。第四句は初支にも非ず、第二支にも非ず、前の三の場合の法を除きて餘の法なり。

【九五】有部に於ては、初定及び二定の樂は輕安なり、第三定の樂は樂受なり。經部にては然らず、三定の樂を共に悉く身受の樂と立つ。故に第三定に於て樂受を增すといふは如何と問ふなり。

有部の答

(九六)初の二定の中には、樂根無きが故なり。初の二定には身受の樂有るに非ず。正しく定中に在りては、五識無きが故なり。亦た心受の樂無し、喜有りと說くを以ての故なり。喜は卽ち喜受なり。一心の中に、二受倶行すること無し。故に、樂受無し。喜と樂と更互に現前す可からず。(九七)五支及び四支を具すと說くが故なり。

經部の義【心樂無し

有るが說く、心受の樂根有ること無し。三靜慮の中に、樂支を說くことは、皆な是れ身受の所攝の樂根なりと。

有部經を引きて難す

若し爾らば、何が故に、(九八)契經に、「云何が樂根なる、謂はく、順樂觸の力の引生する所の身心の樂受なり。」と說くや。

經部の答　有部の經文を正す

(九九)有餘、此に於いて、心の言を增益す。諸部の經の中には、唯だ身と說くが故なり。又、第三定の所立の樂支を、(一〇〇)契經に自ら說きて、「身所受の樂なり」と爲すが故なり。若し、此に於いて、意を說きて、身と爲すと謂はば、此の身の名を說くは、何の德有りと爲すか。

經部難ず

又、第四定には、(一〇一)輕安倍增す、而も、彼

【九六】初定には眼耳身の三識の樂有りと雖も、定中には樂根無きが故に、初二定には身受の樂あらず。

【九七】初定は五支を具し、第二定は四支を具す。故に若し喜樂受更互に現前せば初定は四支を具し、第二定は三支を具すと云ふことになるべし。

【九八】中阿含經五十八(五丁左)(昃七、八十四左)に曰く、若し樂更樂の觸生する所、身心の樂善覺す、是の覺は謂はく樂覺なり。

【九九】有餘とは有部を指す。是れは經部の答なれば、ここに身心の樂受と云へるは有部の師が心の言を增益したるなりとの意なり。

【一〇〇】中阿含經四十二分別觀法經(十八丁)(昃七・九右)及び中阿含經四十三意行經(十五丁)(昃七・十三左)正念正智にして身覺の樂なりとあり。

に樂支有りと說かざるが故なり。

救を牒して難ず其の一

若し輕安は、要ず。(一〇二)樂受に順ずるを。方に名けて樂と爲すと謂はば、第三靜慮の輕安は、樂に順ず、應に是れ樂支なるべし。

其の二

若し彼の輕安は、行捨の爲めに損せらると謂はば、爾らず、(一〇三)行捨は、輕安を增すが故に。

又、彼の輕安は(一〇四)前の二に勝れたるが故に。

經部經を引きて證す

又、(一〇五)契經に說く、「若し爾の時に於いて、諸の聖弟子。(一〇六)離より生ずる喜に於いて、身に、作證し、具足して住す。彼れ爾の時に於いて、已に五法を斷じ、五法を修習し。皆な圓滿することを得。廣說して、乃至、何等を名けて、所修の五法と爲す。一には歡。二には喜。三には輕安、四には樂、五には三摩地なり」と。此れ輕安と樂とを別に說くが故に、初二の樂は即ち輕安に非ず。

有部の難を牒して破す(一)

若し、定中に寧ぞ身識有らんやと言はば、有るに亦た失無し。(一〇七)定中に在りて、輕安の風有り、勝

【一〇二】第四定の輕安は初二の輕安より遙に勝れて倍增せり。然るに第四定には樂支ありと說かず。故に初二の樂も輕安に非ざるべしの意なり。

【一〇三】樂受に順ずとは彼の初二の輕安は苦樂捨の三受に約すれば樂受に順ず。此場合は身心を分たず總じて樂受とす。五受に約すれば五識相應を樂受とし意識相應を喜受とす。今玆に樂受と云ふは初二定の喜受のこと也、卽ち初二の輕安は樂受に順ずるが故に輕安を立てて樂を名くと云ふ意也。

【一〇四】行捨は善法の心所にして輕安を增益することも損伐することなし。

【一〇四】前の二とは初二定。

【一〇五】雜阿含經十七(廿、廿四丁右)(辰二)曰く、若し聖弟子をして喜樂を遠離し、身作證を具足せしむれば、遠離の五法、修滿の五法を得、乃至云何か修滿の五法なる。謂はく、隨喜歡喜、猗息、樂、一心なり。

【一〇六】離より生ずる喜とは欲染を離れたるより生ずる喜を云ふなり。

【一〇七】是れ經部の所說なり。經部にては、定中に在りて輕安の風の觸有り、勝定の力によりて引發せらる。それが身識相應の五識の樂受を起して遍く身根に觸る。此の時身識が樂受を發して領納す。此の時の身識も樂受も輕安風の觸も皆な色界繫なりと。

定より起されて、樂受を順生して、徧く身に觸ると許すが故なり。

有部の難を牒して破す(二)

若し〔一〇八〕外散の故に、應に定を失壞すべしと謂はば、是の如きの失無し。此の輕安の風は、勝定より生じて、內身の樂を引きて、還つて能く順じて、三摩地を起すが故なり。

有部の難を牒して破す(三)

若し身識を起さば、應に出定と名くべしと謂はば、此の難、然らず、〔一〇九〕前の因に由るが故なり。

有部の難を牒して破す(四)

若し欲界の身根に依止して、色界の觸と識とを生ずることを得べからずと謂はば、〔一一〇〕輕安を縁ずる識生ずと許すに過無し。

有部難ず

若し爾らば、正しく無漏定の中に在りて、〔一一一〕觸及び身識は、應に無漏を成ずべし。〔一一二〕〔所以は〕所立の支、少分は有漏、少分は無漏なること勿れ。理に違する失を成ず。

經部答ふ

理に違する失無し。

有部徵す

所以は何ん。

經部答ふ

〔一一三〕身の輕安は是れ覺支の攝なりと說くことを許すが故なり。

【一〇八】外散とは五識は外界に轉じて散亂するものなれば、身識が樂受を起して、輕安の風の觸を領納する位には定を失壞すべし。

【一〇九】前の因とは此の輕安の風が勝定より生じて、內の身樂を引きて、還つて能く三摩地を順起するが故にと云ふ因を指す。

【一一〇】散心の位にては欲界の身根によりて色界の身識を起し色界の觸を緣ずること能はざれども、定中にありては輕安の風の觸を緣ずる身識は欲界の身根によりて生ずと許す。

【一一一】觸るべき輕安風と其を緣ずる身識は無漏なるべし。

【一一二】卽ち風觸と身識相應の樂とは有漏にして、意識相應の支は無漏なるとは理に違ふ。

【一一三】無漏に非ざるも無漏に順ずるが故に無漏を說く。

若し彼れに順ずるが故に、覺支と說くと謂はば、(二四)無漏も亦た是の如く說くことを許すべし。若し說くことを許さば、便ち契經に違す、(二五)契經に言ふが如し、諸の所有の眼、乃至廣說す。此の經の中に「十五界の全は、皆な有漏なり」と說くが故にと謂はば、經に違する過無し。此れは(二六)餘の觸及び身識に約して、密意を以て說くが故なり。

有部難ず

如何ぞ、無漏の靜慮現前するに、少支は有漏、少支は無漏なる。

經部答ふ

起ること俱時にあらざるを以て、斯れに何の失か有らん。

若し(二七)喜樂俱起せざるが故に、五支及び四支の理無かるべしと謂はば、此れも、亦た過無し。(二八)容有に約して、喜樂支有りと說く。(二九)尋伺有るが如し。

若し(三〇)尋伺も亦た俱起すと許すを以て、俱起せざるに於いて、喩と爲ること成ぜずと謂はば、此れ不成に非ず。(三一)心の麁細互に相違するが故に、俱起すべからず、又、(三二)俱起せざるに於いて、過を說くこと能はざるが故なり。

【二四】有部も亦た身の輕安を無漏七覺支に攝す。然らば少分は有漏、少分は無漏と云ふも失なかるべし。

【二五】雜含八(廿四丁左)、展二(四十五左)に曰く、云何が有漏の法なる、謂はく眼色、眼識、眼觸乃至不苦不樂、世俗の者是れを有漏法と名く云云。

【二六】餘とは散位の觸又は散位の身識に約して說けるなり。

【二七】樂支は有漏なり、喜支は無漏なり。

【二八】場合によりて喜又は樂有りと云ふ義なりとの意。

【二九】經部にては、初靜慮支に尋あり伺あり。されど尋伺俱起するに非ず、一時の前後に約して有りと云へるなり。

【三〇】有部にては尋と伺とは俱起するもの、喜と樂とは必ず俱起せず、故に俱起する尋伺を以て俱起せざる喜樂の喩となすを得ずと云ふならばとの意なり。

經部靜慮支を釋す

此れに由りて、說く可し、初の五支に依りて、二と三と四とを滅じて、第二等を立つ、卽ち此の理に由りて、初めに五支を說く、漸く前を離るるに擬して、後を建立するが故なり、漸減無きが故に。(三三)想等を說かず。

有部を難ず

或は應に說くべし、何故に初に唯だ五支を立つるか。若し此の五、初定を資すること勝れたるが故に、立てて支と爲すと謂はば、此れ理に應せず、念慧は能く資すること尋伺に勝れたるが故なり。

論を思ふべきを勸む

(三四)一類有りて、是の如きの說を作すと雖も、然も古昔の諸の軌範師の共に施設するに非ざるが故に、(三五)應に審かに思擇すべし。

內等淨

經部の答

說くべし、何の法を內等淨と名くるかを。

(三六)此の定は尋伺の鼓動を遠離すれば、相續して淸淨に轉ずるを、名けて內等淨と爲す。若し尋伺の鼓動有れば、相續は不淸淨に轉ず、河に浪有るが如し。

【三一】心の麤なるものは尋なり細なるものは伺なり。
【三二】根品第四を參照せよ。
【三三】想等の心所は初定にもありて漸減せず乃至第四定にもありて漸減せず故に靜慮支と立てず。
【三四】一類とは毘婆沙師を指し諸の軌範師とは經部自らを指す。
【三五】瑜珈師地論の見解に據りて思擇すべしとの意。
【三六】此の定とは第二定なり。鼓動とは動搖の意なり。婆沙論八十(十七右)に曰く、尋伺滅して內等淨の心一趣にして無尋無伺、安喜樂を生ず、第二靜慮具足して住す、乃至、尊者世友是の如き說を作す、尋伺は躁動擾亂なり、安心の位能く彼を除き心をして等淨ならしむ、彼の波息んで水則ち澄淸なるが如し。是の故に信を說いて內等淨と名く。舊論廿一(十二右)に曰く、彼の執應に思ずべし、何法か內澄淨と名く、覺觀の散動を滅離す、故に淸淨の流相續す、說きて內澄淨と名く、何を以ての故に江に浪有るが如し、覺觀に由て散動す、故に此れ相續生起して淸淨なるを得ず。

有部已宗を以て難ず

若し爾らば、(二七)此に別體有ること無かるべし。如何が十一の實事有りと許さん、是の故に、應に說くべし。(二八)此れは即ち信根なり。謂はく、若し第二靜慮を證得すれば、則ち定地の亦た離る可き中に於いて、深信生ずること有るを、內等淨と名く。

內等淨の意義

(二九)信は是れ淨相の故に、淨の名を立つ。(三〇)外を離れて均く流す、故に內等と名く。淨にして內に等なるが故に、內等淨の名を立つ。

經部の說を擧ぐ

(三一)有る餘師の言はく、此の內等淨と等持と尋伺と皆な別體無し。

有部難ず

若し別體無くんば、心所は應に成ぜざるべし。

經部答ふ

心の分位殊れば、亦た心所と名くることを得たり。

有部結歸す

此の理有りと雖も、我が宗とする所に非ず。

喜を問ふ

上に言ふ所の如き喜は、即ち喜受と、何を以て證と爲して、決定して然ることを知るか。

有部返責す

汝等豈に喜は喜受に非ずと言ふや。

答

(三二)餘部に許すが如く、我れも亦た然りと許す。

【二七】此にとは內等淨なり。此の定體尋伺を遠離するを內等淨と名けば、此の內等淨には別體無かるべし。

【二八】此れとは內等淨なり。初定の時は、散地の染を離れて、復た信を生ずと雖も、定地の染を離るるには未だ信を生ぜず、故に初定には信支を立てず。復た初定の染を離れて、定地の信を生ずるが故に二定に於いて信支を立つ。

【二九】信は澄淨の義にして澄淨を相とす、故に淨と云ふ。內とは內心なり。

【三〇】外門を離れて內門に轉じて、前念後念等しく相續するを云ふ。

【三一】有る餘師とは經部師也。經部にては心の分に心所を假立す。

【三二】餘部とは上座部を顯はす。此の部に於ては喜と云へる別の心所なり。下三定の樂は皆な喜受とす、それ故に初靜慮支の中、五支の中第四支の樂は喜受なり 第三支の喜は別の心所なり。

有部破す　餘部、云何ぞ喜受に非ずと許す。

答　謂はく、別に喜有り、是れ心所の法なり。三定の中の樂は皆な是れ喜受なり。故に、喜と喜受と其の體各異れり。

有部破す　三定の樂を喜受と名く可きに非ず。二の（一三三）阿笈摩に分別に證するが故なり。（一三四）辯顚倒契經の中に說くが如し、「（一三五）漸く餘無く、憂等の五根を滅す。第三定の中には餘無く、喜を滅す。第四定に於いては、餘無く、樂を滅す」と。又、（一三六）餘の經に、「第四靜慮に樂を斷じ、苦を斷じ、先に、喜と憂とを沒す」と說く。故に、第三定には、必ず喜根無し。此れに由りて、喜受は是れ喜にして、樂に非ず。

（八）染靜慮と支との關係

【一三三】阿笈摩（Āgama）。先口有り。ここに傳譯して傳といふ。三世の諸佛の所傳の說なるが故なりと云ふも、實に釋迦佛の說を其弟子等が次第に傳誦せし意義なり。

【一三四】辯顚倒契經とは舊譯に見波利多經と云へば其原語は、Viparīta なるべきも、出處不明なり。

【一三五】漸く餘無く憂等の五根を滅すとは初定の中に於て餘無く、憂を滅し、第二定に苦を滅し、第三定に喜を滅し、第四定に樂を滅す、斯く漸次に五根を滅するの意なり。經に既に第二定にのみ喜あり、第三定にのみ樂あることを說き、此の二を別說するが故に樂は喜に非ず。

【一三六】餘の經。中含經（四十二十八丁右（巳七））に曰く、「比丘樂を滅し、苦を滅し、喜憂は本已に滅す。不苦、不樂、捨念清淨にして、第四禪を得て成就遊す云云」。即ち經に、第三靜慮の樂を離るる時樂を斷じ、第二靜慮の樂を離るる時喜沒し、欲界の樂を離るるの時憂沒すと說く、既に樂後に斷じ、喜先に沒すと說くが故に、第三靜慮には喜なく、但だ樂のみあり。

是の如きの所說の諸の靜慮支は、染の靜慮の中に、皆な有と爲んや、不や。

爾らず。

云何。

頌に曰はく、

〔二三七〕染は次の如く、初めより。喜と樂と
內淨と、
正念と慧と捨と念と無し。餘は安と、捨
と無しと說く。

別して釋す上の三句を釋す

論じて曰はく、上の所說の諸の靜慮支の如き、〔二三八〕染靜慮の中に、皆な具さに有るに非ず。

凡らく一類有り、〔二三九〕相に隨ひて說きて曰はく、初の染の中には、離生喜樂無し。〔二四〇〕煩惱を離れて、生ずることを得るに非ざるが故なり。第二の染の中には、內等淨無し。彼れ、煩惱の爲めに、〔二四一〕擾濁せらるるが故なり。第三の染の中には、正念

【二三七】頌の舊譯「染汙無喜樂、內澄淨念慧、及捨念清淨、餘定無輕捨」。初三句に十八支の中染靜慮に除くべきものを明し、第四句には異說を叙す。

【二三八】染靜慮（Kliṣṭa-dhyāna）。婆沙論百六十（十五右）に曰く、初靜慮は皆五支ありや。答ふ、染汙ならざれば五有り、染汙には五無し。何等無きか。答ふ、離生喜樂無し。乃至、有るは說く、此文但だ說くべし、無樂とは輕安樂は染中に無なるを以ての故に、乃至、但だ樂無しと說く。此に由りて染には離生に從ふが故に、離生喜樂と名く云云とあり。

【二三九】相に隨ひて說くとは實を論ずれば染汙の定には靜慮支は無きもの也。然るに染汙の定には喜樂の二支は無けれども、染汙の尋と伺と定との三支の相あり、故に尋伺定の三支ありと說くが隨相の說也。

【二四〇】煩惱を云云。自地の煩惱を離れざる義なり。

【二四一】擾濁とは煩惱に由って澄まざるなり。

と慧と無し。彼れ、(一四二)染樂の爲めに、迷亂せらるるが故なり、第四の染の中には、捨と念との淨無し。彼れ、(一四三)煩惱の爲めに、染汙せらるるが故なりと。

異說　有る餘師の說く、(一四四)初の二の染の中には、但だ輕安無し。後の二の染の中には、但だ行捨無し。大善の攝なるが故にと。

(三) 不動の意義

(一四五)契經の中に、「三定には動有り、第四は不動なり」と說く。何の義に依りて說けるか。

頌に曰はく、

(一四六)第四を不動と名くることは、八災患を離るるが故なり。

八とは、謂はく、尋と伺と、四受と、入出息となり。

不動と八災患　論じて曰はく、下三靜慮を有動と名くることは、災患有るが故なり。第四靜慮を不動と名くること

【一四二】染樂云云。染汙の樂に迷亂せらるが故に、正念と慧と無し。

【一四三】煩惱の爲めに染汙云云。自地の煩惱のために染汙せらるるが故に、捨と念との淸淨無し。

【一四四】輕安と捨とは大善地に攝するが故に染汙の定になし、其の餘は染汙の定にも通ずと云へる說なり。之によれば、初染に四支あり、第二染に三支あり、第三染に四支あり、第四染に三支あり。

【一四五】中含經五十(十丁右)(長七、四十七左)に初禪を得て成就遊す、聖是れ移動と說く、乃至第三禪を得て成就遊す、是を聖移動と說く、乃至第四禪を得て成就遊す、是を聖不移動と說く云云とあり。

【一四六】頌の舊譯

離八過失故、說第四不動、覺觀及二息、餘樂等四種。

は、災患無きが故なり。

災患に八有り。

其の八とは何ぞ。

經に依りて釋す

尋と伺と四受と入息と出息となり。此の八災患は第四に都て無し。故に佛世尊說いて不動と爲す。然るに、契經には、「第四靜慮は、【一四七】尋伺喜樂の爲めに、動ぜられず」と說けり。

異說を叙す

有る餘師の說く、第四靜慮は、密室の燈の照して、動無きが如しと。

(ホ) 生受の意義

【一四八】定靜慮の所有の諸受の如く。生も亦た爾なりや、不や。

爾らず。

云何。

頌に曰はく、

【一四九】生靜慮は初より、喜と樂と捨受と、

【一四七】初定は尋と伺に動かされ第二定は喜に、第三定は樂に動かさるるも第四定は此等に動かさるることなし。經の此說は密意の說なり。論は盡理の說なり。故に論には、第四定は災患を離ると云ふ。

【一四八】定靜慮の所有の諸受とは上述の如く、初二に喜有り、第三に樂有り、第四に捨有るを云ふ。

【一四九】頌の舊譯

喜受樂捨受、捨受及喜受、樂捨及捨受、生得定諸受。

及び喜と捨と樂と捨と、唯捨受と有り。次の如し。

初靜慮 論じて曰はく、生靜慮の中に、初は三受有り。一は喜受意識相應なり、二は樂受（一五〇）三識相應なり、三は捨受（一五一）四識相應なり。

第二靜慮 （一五二）第二に二有り。謂はく、喜と捨とは意識相應なり。（一五三）樂受有ること無し。餘識無きが故に。心悅麤なるが故に。

第三靜慮 第三に二有り。謂はく、樂と捨とは意識相應なり。

第四靜慮 第四に一有り。謂はく、唯だ捨受の意識相應なり。

結 是れを定と生との受に差別有りと謂ふ。

（ヘ）上三靜慮

上三靜慮には、（一五四）三識身無く、及び尋伺無し。如何が彼に生じて、能く見聞觸し、及び表業を起すか。

（一五五）彼の地に生じて、眼識等無きに非ず。但だ彼の繫には非ざるなり。所以は何ん。

【一五〇】三識、眼耳身の三也。

【一五一】四識とは眼、耳、身、意の四識なり。

【一五二】婆沙論七十二（六左）に曰く、應に是の說を作すべし、後三靜慮は眼等の識無し。所以は何ん。尋伺無きが故に。眼等五識恆に尋伺と相應して起るが故に。

【一五三】第二定には樂受なし。五識無きが故に身受の樂無し。心悅麤なるが故に心受の樂無し。

【一五四】眼耳身の三識もなく、發表心と相應する尋伺もなし。

【一五五】彼の二定以上に生じては三識並びに發表心起らざるにあらず。されど此等は二定以上に繫屬するものに非ず。

頌に曰はく、

（一五六）上三靜慮に生じて、　三識を起すと、表を「起す」心とは、
皆な初靜慮の攝なり。　唯無覆無記なり。

所起の下心

論じて曰はく、上の三地に生じて、三識身を起すと、及び表を發す心はと、皆な初定の繫なり。上に生じて、下を起すは、化心を起すが如くなるが故に、能く見聞觸し、及び表を發す。

性類

此の四は唯だ是れ無覆無記なり。下染を起さず、已に染を離るるが故なり。下善を起さず、下は劣なるを以ての故なり。

【一五六】頌の舊譯
眼耳身三識、身口業緣起、
二等初定得、此無染無記。
初の三句は上三靜慮にて起す下心を明し、第四句は其類を明す。

第三項　三等至の意義

（イ）初得等至

是の如く、別に靜慮の事を釋し已りつ。淨等の等至を初めて得すること云何。

頌に曰はく、

(二五七)全く成ぜずして而も得るには、淨は離染と生とに由る、
無漏は離染に由る。　染は生及び退に由る。

淨定

論じて曰はく、(二五八)八の本の等至は、其の所應に隨ひて。若し全く成ぜずして、而も獲得する者は、淨は離染に由り、及び受生に由る。謂はく、下地に在りて、下地の染を離るると、及び上地より自地に生ずる時なり。下の七は皆な然なり。有頂は爾らず。唯だ離染に由る、(二五九)生ずるに由ること無きが故なり。

何を遮するが故に、〔頌に〕「全く成ぜず」と說くか。

淨定の四分は得と名づけざることあり

已に成じて、(二六〇)更に少分を得るを遮せんが爲めなり。(二六一)加行に由りて、順決擇分等を得、及び(二六二)退するに由りて、順退分定を得るが如し。

引證

卽ち此の義に依りて、是の問を作して言はく、

【二五七】頌の舊譯
不得得淸淨　由離欲及生、
無流由離欲、染汙退生得。

【二五八】八の本の等至とは四靜慮四無色の八の根本定なり。根本といふは近分定に簡ぶ。近分定は下地の染を離れずとも得すればなり。

【二五九】生ずるに由ること無しとは有頂は第四定非想非非想處なり。已に最上位にして上地なし、故に上地より下生する場合なし。

【二六〇】淨定に四種有り、卽ち一に順退分定、是れは煩惱に隨順する定也。二に順住分定、是れは定住に順ずる定なり。三に順勝進分定、是れは上地の定に順ずる定なり。四に順決擇分定、是れは無漏定に順ずる定也。此の中順退分と順勝進分と順決擇分とは、場合によりては、得と名けざることあり、其の義は次下の文に明らかなり。

【二六一】加行に由りて順決擇分等を得とは、ここに等と云へるは順勝進分を加ふるなり。順住分と順退分とを加へざるは先きに得るが故なり。卽ち先きに欲界九品の惑を離れて、初定の根本定の順住分定順退

頗し淨定を、離染に由りて得し、離染に由りて捨すること有るかと。退に由りて、生に由りて、問を爲すことも亦爾なり。

曰はく、有り。謂はく、順退分なり。且らく、初靜慮の順退分に攝するもの、欲染を離るる時得し、自の染を離るる時捨す。自の染を離るるを退して得し、欲染を離るるを退して捨す。上より自に生じて得し、自より下に生じて捨す。餘地の所攝も、應に理の如く、思ふべし。

(一六三)無漏は但だ離染に由るが故に得す。謂はく、聖、下染を離れて、上地の無漏を得す。此れも亦た但だ(一六四)全不成の者に據る。若し先に已に成ずるは、餘の時にも亦た得す。謂はく、(一六五)盡智の位に、無學道を得し、(一六六)練根の時に於いて、學と無學とを得す、(一六七)餘の加行と及び

分定を得たるもの、後に加行を起して、其の初定の根本定の勝進分定と順決擇分定を得るが如く、先きに初定の根本定を成就して、其の上に少分を得るなり。四分同じく一の淨定なるを以て、此の場合には得と名けず。

【一六二】自染を離するを退するに由りて退分を得す。先きに住分勝進分或は決擇分を得るを以て、今更に退分を得すと雖も名けて得となさず。卽ち初定の九品の惑を離れて、第二定を得る時、初定の順退分定の一は已に捨せり。初定の順住分、順勝進分、順決擇分定は未だ捨せず。然るに後に初定の惑を起して此初定の離染を退する時、先きに捨したる初定の順退分定を得す。是れ先きに順住分等の定を成就せるが故に、更に少分を得るなり。四分同じく一の淨定なるを以て、此の場合には得と名けず。

【一六三】無漏定は唯だ離染によりて得するのみにして、受生にては得せず。聖者が下地の染を離れ終る位に上地の無漏の根本定を得す。聖者が上地より下地に生ずることなければ受生にて得せず。但し欲界經生の未離欲の聖者が、欲界中に二生三生を受くることあれども、是れは一地の中にて經生するものなれば、上地より下地に生ずること全く無し。

【一六四】全不成の者とは先に已に成就したるものが、後に少分を得るを云ふ。

【一六五】盡智の位、無學果に至りて起る無漏智にして、有頂の第九品の修惑を斷じ終り、一切の煩惱を斷盡して、旣己に苦集滅道の四諦を證得せりと

退とは皆な理の如く應に思ふべし。

問　豈に（一六八）正性離生に入るに由りて、亦た初めて、無漏の等至を得と名くるにあらずや。

答　此れ決定に非ず、（一六九）次第の者は、爾の時、未だ根本定を得ざるを以ての故なり。此の中には但だ決定して、得する者を論ず。

染定　染は受生及び退に由るが故に得す。謂はく、上地より沒して、下地に生ずる時、下地の染を得し、及び此の地の離染に於て退する時、此の地の染を得す。

（ロ）等至の種類及び順序

何の等至の後にか、幾くの等至を生ずる。

頌に曰はく、

知る智なり。

【一六六】練根。修行者が加行位に於て、漸次に諸根を調練して增長せしめ、鈍根を捨てて利根を得るを云ふ。有學の練根なれば、利根の有學道に攝する無漏の靜慮を得し、無學の練根なれば、利根の無學道に攝する無漏の靜慮を得す。是等は皆先に無漏の靜慮を成就せるを今少分を得するなり。

【一六七】餘の加行とは例せば先に無漏の第四定を成就したる者後に加行を起して第四定の雜修靜慮の無漏を得す。雜修靜慮は離染得にあらず、必ず加行によりて得するが如し。退とは無漏を退して、有漏定を起す時、有學道に攝する無漏道を得す。此等は皆先きに成就せる上に、今尙ほ少分を得するなり。

【一六八】正性離生とは邪性を捨てて正性を得、異生の性を離れて聖性を得る位にして、入見道の位なり。此の時初めて無漏定を得す。世第一までは有漏なり。

【一六九】次第の者とは次第證の人が見道に入る時、無漏の未至定を得す、根本定は未だ得せず。今は定んで無漏の根本定を得るものを說く。

(二七〇)無漏の次に善を生ず。　上下第三に至る。
淨の次に生ずることも亦た然なり。　兼ねて自地の染を生ず。
染は自の淨と染と、　並に下の一地の淨とを生ず。
死の淨は一切を生ず。　染は自下の染を生ず。

無漏定より生ずるもの

論じて曰はく、(二七一)無漏の次に、自と上と下との善を生ず。善の言は、具さに淨及び無漏を攝す。然るに(二七二)上下に於いて、各第三に至る。遠きが故に、能く超えて第四を生ずると無し。故に(二七三)無漏の七等至の中に於いて、初靜慮より無間の六を生ず。謂はく、自と〔第〕二と〔第〕三との各淨と無漏となり。無所有處の無間に七を生ず。謂はく、(二七四)自と下との六と上地の唯淨となり。第二靜慮の無間に八を生ず。謂はく、(二七五)自と上との六と、幷に下地の二となり。識

【二七〇】頌の舊譯
從二第三上下一、無流後善生、
從レ淨生亦爾、兼二染汙自地一、
從レ汙自地淨、染、一下地淨、
退時從レ淨染、一切、染非レ上。
初二句は無漏等至より有漏善等至を生ずる可能性を明し、第三四句は有漏善等至より無漏、有漏善、染の等至を生ずる可能性を明し、第五六句は染等至より有漏善、染等至を生ずる可能性を明し、第七八句は生靜慮の有漏善、染等至より復た其等の等至を生ずる可能性を明す。

【二七一】無漏の等至は次第に自地の善の定と上地の善の定と下地の善の定とを生ず。

【二七二】上下に於いて各第三に至るとは、第四定に就いて云はば、無漏の第四定の無間に、上は識處までの定を生じ、無所有處の定を生ぜず、下は第二定まで生じて初定を生ずることなきが如し。

【二七三】無漏の七等至とは四靜慮と下三無色との七根本無漏定なり。

【二七四】自と下との六とは、自地の淨と、無漏の二と、下三地の淨と、無漏の四と合して六となる。

無邊處の無間に九を生ず。謂はく、(二七六)自と下との六と、幷に(二七七)上地の三となり。第三と四と空との無間に(二七八)十を生ず。謂はく、上下の八と、幷に自地の二となり。

差別を辯ず

(二七九)類智の無間に、能く無色を生ず。法智は然らず。依と緣と下なるが故なり。

淨定より生ずるもの

淨等至より生ずる所も亦た然なり。而るに(二八〇)各兼ねて、自地の染汙を生ずるが故に。

染定より生ずるもの

(二八一)有頂の淨の無間に六を生ず。謂はく、自の淨と染と、下の淨と無漏となり。初靜慮より無間に七を生ず。無所有は八なり。第二定は九なり。識處は十を生ず。餘は十一を生ず。

染等至より、自の淨と染とを生じ、幷に次下の一地の淨定を生ず。謂はく、自地の煩惱の爲めに逼られて、下の淨定に於いて、亦た尊重を

【二七五】自と上との六とは自地の二と上二地の四と合して六となる。

【二七六】自と下との六とは自地の二と下二地の四となり。

【二七七】上地の三とは上三地の淨なり。

【二七八】第三靜慮と第四靜慮と空無邊處とは各各無間に十を生ず、卽ち上二地の四と下二地の四と並に自地の二となり。

【二七九】靜慮は上地下地を緣ずるを以て、靜慮に依つて生ずる法智、類智は、ともに淨と無漏の無色を生ずべしと惟ふ人あらんも、爾らず。類智のみ、淨と無漏の無色を生じ、法智は生ぜず。所以は、法智の所依身は欲界なり、其の所緣は欲の苦等なり、斯くして中間に界色四地を隔つるが故に法智の無間に無色を生ぜず。

【二八〇】各兼ねて自地の染汙を生ずとは、淨等至は上には無漏に至り、下は染汙に接するが故に、卽ち無漏定の無間には染汙の定は起さざれども、淨定の無間に亦染汙の定を起す。卽ち淨定の中、順退分定起りて、其の無間に貪煩惱起りて、前念の淨定を愛味す、其の所愛味の定は淨定なり。

【二八一】有頂の淨に六あり。自の淨と染との二、及び下の無所有處と識處との淨と無漏との四なり。初靜慮より七を生ず。自地の三、上二地の淨、無漏の四也。無所有處より八を生ず。自地の三と上地の淨の一と下地の淨と無漏との四となり。第二定より九を生ず、自地の三と上地の淨と無漏の四と下地の淨と無漏との二となり。識處は十を生ず。自地の三と無所有處の淨と無漏と有頂の

問　生ず、故に、染より次下の浄を生ずること有り。若し染と浄とに於いて、能く正しく了知せば、能く染より轉じて、下浄を生ず可し。諸の染汙は能く正しく了知するに非ず。如何ぞ彼れ能く染より浄を生ずるか。

答　先の願力の故なり、謂はく、先に願じて言はく、寧ろ下浄を得とも、上染を須ゐじと。先の願の勢力、(一八二)相續に隨ひて轉ず。故に、後に染より下の浄定を生ず。先に願を立てて、方に睡眠に趣かば、所期の時に至りて、便ち能く覺寤するが如し。

無漏と染と必ず相生せず、浄と倶に相生ず。故に、三別有り。

三定相生の差別

(一八三)是の如きの所説の浄と染と、染を生ずるとは、但だ在定の浄及び染に約して説く。(一八四)若し生の浄と染との染を生ずることは、然らず。謂はく、命終の時、生得の浄の一一の無間より、(一八五)一切の染を生ず。若し生の染の一一の無間より、能く自地と一切の下との染を生じ、上を生ぜざるは、未だ下を離れざるが故なり。

生靜慮より生ずるもの

浄と上地の三と下地の浄と無漏との四なり。餘の第三定、第四定及び空處は十一を生ず。自地の三と、上地と下地とに各各四あり。前に準じて知るべし。

【一八二】相續とは身のことなり。

【一八三】是の如きとは、浄と染との無間に、唯だ自地の染を生ずと云ふことを指す。

【一八四】彼の地に生じて得たる靜慮を生靜慮と名づく。其の生じて得たる浄又は染を生浄生染と名く。

【一八五】一切の染とは命終の位の自地、下地、上地に結生非定の染汙心を云ふ。

(八) 順四分定

言ふ所の淨より無漏を生ずとは、(一八六)一切の種、皆な能く生ずと爲すか。

爾らず。

云何。

頌に曰はく、

(一八七)淨定に四種有り。謂はく、卽ち順退分と、
順住と順勝進と、順決擇分との攝なり。
次の如く、煩惱と、自と上地と無漏とに順ず。
互に相望して、次の如く、二と三と三と一とを生ず。

淨定四種

論じて曰はく、諸の淨等至は、總じて(一八八)四種有り。一には順退分の攝、二には順住分の攝、三には順勝進分の攝、四には順決擇分の攝なり。地ごとに各四有り。有頂には唯だ三あり。彼は更に上地の趣く可きと無きに由るが故に、彼の地

【一八六】一切の種とは淨定には種類あり、一切種の淨定が皆な無漏定を生ずるかの問なり。

【一八七】頌の舊譯

淸淨定有四、退分等次第、或生自上地、無流隨得故、二三三及一、從退等次第。

初四句は淨定の四種を明し、第五六句は地に望めて其定の相順することを明し、第七八句は其定の互に相生することを明す。

【一八八】四種定の梵名

(一) 順退分(Hāna-bhāgīya)。
(二) 順住分(Sthiti-bhāgīya)。
(三) 順勝進分(Viśeṣa-bhāgīya)。
(四) 順決擇分 (Nirvedha-bhāgīya)。

には順勝進分の攝有ること無し。

此の四の中に於いて、唯だ第四分のみ、能く無漏を生ず。

無漏を生ずる定

所以は何ん。

四定の釋名

此の四種に、是の如きの相有るに由る。〔謂はく〕順退分は、能く(一八九)煩惱に順じ、順住分は、能く(一九〇)自地に順じ、(一九一)順勝進分は、能く上地に順じ、順決擇分は、能く無漏に順ず。故に、諸の無漏は、唯だ此れより生ず。

四定相生

此の四、相望して互に相生ずることを云はば、初は能く二を生ず、謂はく、(一九二)順の退と住となり。第二は三を生ず、順決擇を除く。第三は三を生ず、(一九三)順退分を除く。第四は一を生ず、謂はく、(一九四)自なり、餘に非ず。

(三) 超等至

【一八九】煩惱云云。自地の煩惱なり。順退分定の無間に自地の染汙の味定起りて、前念の順退分定を緣じて愛味す。

【一九〇】自地に順ずとは自地の淨定のことなり。順住分定は自地の淨定に隨順す。

【一九一】順勝進分の定は上地の定に隨順す。例せば未至定を以て、欲界九品の惑を離れ終りて、初定の根本定の順住分定に隨順す。

【一九二】同一狀態を繼續する時は順退分を生じ、勝進する時は順住分を生ず。後の二分を生ぜざるは、隔遠なるを以ての故なり。

【一九三】順勝進分より退するものは、順住分を未だ捨せざるを以て、此の分生ずべき理なり、故に此を超えて順退分を生ずかべらず。

【一九四】同一狀態を繼續するが故に、唯だ順決擇分を生ず。

上に言ふ所の如きは、淨及び無漏、皆能く上下を超えて、第三に至る。行者、如何が超等至を修する。

頌に曰はく、

(一九五)二類の定を順と逆と、　均と間と次と及び超と、

間超とに至るを成と爲す。　三洲の利の無學なり。

超定の相

論じて曰はく、本の善等至を分ちて二類と爲す。一には有漏、二には無漏なり。(一九六)上に往くを順と名け、(一九七)下に還るを逆と名く。(一九八)同類を均と名け、(一九九)異類を間と名く、(二〇〇)相隣るを次と名け、(二〇一)一を越ゆるを超と名く。

【一九五】頌の舊譯
去來於二類、八地害超一、
修超諸定觀、行非等分三。
初三句は超等至の相を明し、第四句は能修の人を明す。

【一九六】先づ初定を起し、其の無間に第二定を起し、乃至有頂定を起す。

【一九七】先づ有頂定を起し、次に無所有所乃至初定を起す。

【一九八】例せば有漏の初定の無間に有漏の第二定を起し、乃至第四定を起す。同じく有漏なれば均と名く。

【一九九】有漏の初定の無間に無漏の二定を起し、其の無間に第三定を起す如きを云ふ。

【二〇〇】第二定の無間に初定を起し、又は第二定の無間に第三定を起すが如し。隣次に起るを云ふ。

【二〇一】初定の無間に第二定を超えて、第三定を起す如きを云ふなり。

婆沙論百六十五(十丁左)に曰く、超定を修する時、彼の修定者先づ欲界善心を起して此より有漏初靜慮に入り次に有漏第二靜慮に入り、乃至非想非非想處に入る。彼より還りて有漏無所有處に入り次第に乃至復た還りて有漏初靜慮に入る。此に於て諸地循環修習善をして淳熟せしむること王路の如し。已に復た無漏初靜慮に入り次に無漏第二靜慮に入り、次第に乃至無漏無所有處に入る云云。是の如く有漏順逆均次、無漏順逆均次、次に有漏順逆一を超え、次に無漏順逆一を超え、次に有漏無漏間にして一を超ゆ云云。

超定の加行と成滿

謂はく、觀行者の超定を修する時、先づ有漏八地の等至に於いて、順逆均次に現前して數習し、次に無漏の七地の等至に於いて、順逆均次に現前して數習す。次に有漏と無漏との等至に於いて、順逆間次に現前して數習す。次に有漏に於いて、順逆均超に現前して數習す。次に無漏に於いて、順逆均超に現前して數習す。是れを超を修習する加行の滿と名く。後に有漏無漏の等至に於いて、順逆間超に至るを、超定の成と名く。此の中の超とは、唯だ能く一を超ゆ、遠きが故に、能く超えて第四に入ること無し。

能修の人

超等至を修することは、唯だ人の三洲なり。〔二〇二〕不時解脫の諸の阿羅漢なり。定自在なるが故なり、煩惱無きが故なり。時解脫の者は、煩惱無しと雖も、定自在ならず。諸の見至の者は、定自在なりと雖も、餘の煩惱あり。故に、皆な超等至を修すること能はず。

【二〇二】不時解脫の諸阿羅漢の中無諍妙願智等の邊際定を得たるもののみ能く超す。

(ホ) 等至の依身

此の諸の等至は、何なる身に依りてか起る。

頌に曰はく、

例外

(二〇三)諸定は自と、下とに依る。上に非ず、用無きが故なり。
唯有頂に生ぜる聖のみ、下を起して、餘の惑を盡す。

論じて曰はく、諸の等至の起ることは、自と下との身に依る。上地の身に依りて、下を起すべきこと無し。上地にして下を起すことは、所用無きが故なり。自に勝定有るが故なり。下は勢力劣なるが故なり。(二〇四)已に棄捨するが故なり。厭毀す可きが故なり。總相は然りと雖も、若し委細に說かば、聖の有頂に生ずるは、必ず無漏の無所有處を起す。(二〇五)自地の所餘の煩惱を盡さんが爲めなり。自に聖道無ければ、欣樂して起すが故なり。唯だ無所有のみ、最も隣近なるが故に、彼を起して、現前して餘の煩惱を盡す。

(八) 等至の對境

此の諸の等至は、何なる境を緣じて生ずるか。

頌に曰はく、

【二〇三】頌の舊譯
自下地依止、色無色、非下。聖現無所有、入有頂流盡。
初二句は等至の依身を明し、後三句は例外を示す。

【二〇四】已に棄捨すとは有漏定に局る、下地の有漏定は已に棄捨してあるが故なり。

【二〇五】所餘とは無漏道にて下八地の修惑を斷ずるも、未だ自地の惑を斷ぜざる時の惑、或は有漏道にて下八地の惑を斷ずるも、有頂の修惑は無漏道にあらざれば斷じ得ず、故に聖者有頂に生じたる時、此煩惱を斷ぜんが爲に、自らの有頂には無漏道無きが故に、下地の無漏道を起すなり。上地の身にして下地の道を起すは有頂の聖者のみなり。

(二〇六)味定は自繫を緣ず。　淨と無漏とは徧く緣ず。
根本善の無色は、　下の有漏を緣せず。

味定

論じて曰はく、味定は但だ(二〇七)自地の有漏を緣ず。(二〇八)必ず下を緣ずること無し。已に(二〇九)染を離れたるが故なり。亦た(二一〇)上を緣せず、(二一一)愛地別なるが故なり。無漏を緣せず、應に(二一二)善と成るべきが故なり。

淨及び無漏定

淨と及び無漏とは倶に能く徧く、自と上と下との地の有爲無爲を緣じて、皆境と爲すが故なり。差別有ることは、無記の無爲は無漏の境に非ず。

根本善の無色

(二一三)根本地の攝の善の無色定は、下地の諸の有漏の法を緣せず。自と上との地の法は、能く緣せざること無し。亦た能く下地の無漏を緣ずと雖も、類智(二一四)品の道を緣じて、(二一五)法智品を緣

【二〇六】頌の舊譯
有愛自有境、善定徧有境、本善色無色、非有流下境。初句は味定の所緣を明し、第二句は淨と無漏との定の所緣を明し、終の二句は根本善無色の特色を明す。

【二〇七】自地の有漏とは前念の淨定なり。

【二〇八】若し下地の定を染汚定が緣ずるならば、離染とはならざるなり。

【二〇九】上地の法は上地の愛の境なり、下地の愛が上地の境を緣ずることなし、下地にして上地を緣ずる煩惱は九上緣の惑なり。

【二一一】味定が無漏を緣じて希求せば、それは善の心所にして貪煩惱にあらず。

【二一二】淨定と無漏定とは一切を緣ずれども、無漏定は無記の無爲を緣ぜざるを別とす。何となれば無漏定は必ず四諦を緣ずれど、虛空無爲非擇滅無爲は四諦の攝にあらず。故に無漏定には此を緣ぜず。

【二一三】善と云ふは淨定と無漏定となり。

【二一三】根本の言は近分を遮す。無色の近分は下の有漏地を緣ずるが故なり。善の言は味相

せず、亦た(三六)下地の法の滅を縁ずること能はず。無色の近分は、亦た下地を縁ず。彼の無間道は、必ず下を縁ずるが故なり。

(ト) 等至の惑を斷ずる作用

味と淨と無漏との三等至の中、何等の力か、能く諸の煩惱を斷ずる。

頌に曰はく、

(三七)無漏は能く惑を斷ず、及び諸の淨の近分なり。

論じて曰はく、諸の無漏定は、皆な能く惑を斷ず。(三八)本の淨すら尚は能はず、況んや、諸染能く斷ぜんや。〔又根本の淨定〕は下を斷ずること能はず、已に染を離れざるが故なり。(三九)自を斷ずること能はず、自に縛せらるるが故なり。上を斷

應を遮し且つ淨と無漏との二善を取らんが爲なり。無色の言は靜慮を遮す。根本靜慮は普く觀ずる性質のものなるが故に、有漏の下の事を縁ずるなり。有漏の言は無漏を遮す。諸の無漏の下地の法は根本善無色の所縁となる。下の言は上を簡ぶ。上地の有漏は所縁となるが故なり。

【三四】苦類智忍等と、其の倶有法とを此の品の字に顯はす。

【三五】欲界の苦等の所漏は隔遠なるが故なり。

【三六】既に下地の有漏法を縁ぜざれば、其の上の擇滅、非擇滅を縁ずる理なし。

【三七】頌の舊譯　由二無流一惑滅、及諸定近分。

【三八】有漏の根本善定より惑を斷ずる力なし。

【三九】婆沙論百六十二に曰く、問ふ・何故に有漏道は自地と及び上地を斷ずるを能はざるに、無漏道は則ち能く斷ずるや。答ふ、無漏道は是れ不繫の法なるを以て有漏の法に於て是れ勝に非らざるを無し。是の故に能く斷ず。又有漏道

すること能はず、己より勝れたるを以ての故なり。

若し淨の近分は、亦た能く惑を斷ず。皆な能く(二〇)次下の地を斷ずるを以ての故なり。(二一)中間に攝する淨も亦た斷ずること能はず。

(チ) 近分の種類

(一)近分に幾く有るか。(二)何の受と相應するか。(三)味等の三に於いて、皆な具と爲すか、不か。

頌に曰はく、

(二二)近分に八あり。捨と淨となり。初は亦た聖、或は三なり。

論じて曰はく、諸の(二三)近分定に亦八種有り。八の根本の與めに入門と爲るが故なり。

は十六行相を作し、下地を厭ひ、自地を欣ぶが故に、唯下を斷ず。無漏道は十六行相を作し、一切地を厭背するが故に能く遍斷す。問ふ、有漏道も亦十六行相を作す、何故に遍斷すること能はざる。答ふ、彼れ聖道の行相を作すことを學ぶと雖も、明了ならざるが故に、煩惱を斷ぜず。師子の子の未だ獸を害すること能はざるが如し。

【二〇】初定の近分は欲界の惑を斷じ、乃至有頂の近分定は無所有處の惑を斷ず

【二一】中間には近分無ければなり。

【二二】頌の舊譯
彼定近分八、清淨非苦樂、
初聖、餘說三、

初句は前三問に答へ、後句は中初に未至定の特色を舉げ、後に異說を出す。

【二三】近分(Sāmantaka)。

受相應

一切は、唯だ、一の捨受と相應す、(二二四)功用を作して轉ずるが故なり、(二二五)未だ下の怖を離れざるが故なり。

淨と無漏

此の八の近分は、皆な淨定の攝なり。唯だ(二二六)初の近分のみ亦た無漏に通ず。皆な味有ること無し。離染の道なるが故なり。(二二七)近分の心に結生の染有りと雖も、定染を遮するが故に、是の說を作す。

異說

有るが說く、未至定に亦た味相應有り。未だ根本を起さざれば、亦た此れを貪するが故なり。此れに由りて、未至には具さに(二二八)三種有りと。

(リ)　中間靜慮と近分との不同

(二二九)中間靜慮と諸の近分と別義無しと爲んか、亦た殊有りと爲んか。

義亦た殊有り。謂はく、諸の近分は下染を離るるが爲めにす、是れ入の初因なり。(二三〇)中定は然ら

【二二四】近分定は止觀均等にあらず、諸種の煩惱のみなり。故に功用を爲して起す。故に喜樂と相應せず。此の地極めて多くの煩惱の界に隣近するが故にと。

【二二五】近分定は下地の染を未だ離れざる前に起す。下の怖とは下染を離れざれば情に怖を懷くが故に喜樂と相應せず。

【二二六】初の近分は未至定なり、此は無漏にも通ず。未離欲の者近分定に依りて聖道を起すが故に。順正理論七十八（十七丁）に云く、上の七近分に無漏無きは、自地の法に於て厭背せざるが故に、唯だ初の近分の無漏に通ずるは自地の法に於て能く厭背するが故に、

【二二七】靜慮にても無色にても、其の近分に屬する人には、結生の定に非ざる染汙心あることは一般の宗義なれば、此の點よりせば、近分に染汙心なきに非ざるも、今は定中の染のみを遮して、近分に味定なしと云へるなり。

【二二八】三種とは味定と淨定と無漏定となり。

【二二九】中間靜慮(Dhyānāntara)。

【二三〇】中定は下染を離るるに非ず、入の初因に非ず、是れ初果なるが故に。

ず、復た別義有り。

頌に曰はく、

(三一)中靜慮は尋無し。　三を具す、唯だ捨受なり。

論じて曰はく、初の本と近分とは、尋伺と相應す。(三二)上の七定の中は、皆な尋伺無し。唯だ中靜慮のみ、伺有りて、尋無し。故に、(三三)彼れは初に勝れ、未だ第二に及ばず。此の義に依るが故に、中間の名を立つ。此れに由りて、上に中間靜慮無し。一地の升降の此の如きこと無きが故なり。此の定に具さに味等の三種有り。(三四)勝徳の愛味す可き有るを以ての故なり。

諸の近分に同じく、唯だ捨と相應す、喜と相應するに非ず。功用して轉ずるが故なり。此れに由りて、是れ(三五)苦通行の攝なりと說く。此の定は、能く大梵處の果を招く。多く修習する者は、大梵と爲るが故なり。

【三一】頌の舊譯
無覺中間定、三種無二苦樂一、
大梵王爲レ果。

【三二】上の七定とは第二定以上有頂までの七定なり。

【三三】彼れ中間定は初定に勝れ第二定に及ばず、中間にあるを以て中間定と名く。

【三四】此の定は大梵の勝果を得る因となるに依りて、此の勝れたる功徳を緣じて愛味の心を生ず。

【三五】功用をなして轉するが故に苦通行と名く。苦受有りと云ふには非ず。

第四節　諸　等　持

第一項　等持の種類(一)

已に等至を説きつ。云何が(三三六)等持なる。

(三三七)經に等持を説くに、總じて三種有り。一には有尋有伺、二には無尋唯伺、三には無尋無伺なり。

其の相は云何ん。

頌に曰はく、

(三三八)初と下とは尋伺有り。中は唯伺なり、上は無し。

論じて曰はく、有尋有伺三摩地とは、謂はく、尋伺と相應する等持なり。此れ初靜慮及び未至の攝なり。無尋唯伺三摩地とは、謂はく、唯だ伺と相應する等持なり。此れ卽ち靜慮中間地の攝なり。(三三九)無尋無伺三摩地とは、謂はく、尋伺

【三三六】等持(Samādhi)とは心を平等に持して所緣の境を專ら緣ぜしむる義なり、卽ち定の義なり。等持も等至も共に定の義なれども寬狹あり。等至は唯だ定に局る故に通ぜず、卽ち欲界の散に通ぜず、等持は定散に通ず。欲界の定の心所は心一性境なれば卽ち等持なり、是は散心に通ず、故に寬なり。然れども等持は唯だ有心に局りて無心定に通ぜず、然るに等至は有心定無心定に通ず。此の點に於いては等至は寬、等持は狹なり。

【三三七】中阿含經十七(廿二丁)戻

と相應するに非ざる等持なり。此れ第二靜慮の近分より、乃至非想非非想の攝なり。

第二項　等持の種類（二）

（二四〇）契經に復た三種の等持を説く。一には（二四一）空、二には無願、三には無相なり。

其の相云何ん。

頌に曰はく、

（二四二）空とは、謂はく、空非我なり。無相とは、謂はく、滅の四なり。無願とは、謂はく餘の十なり。諦の行相と相應す。此れは淨と無漏とに通ず。無漏は三脱門なり。

五（九十九左）に曰く、我當に三定を修學すべし、有覺有觀定を修學し、無覺少觀定を修學し無覺無觀定を修學す。若し我れ有覺有觀定を修學すれば、心便ち順じて無覺少觀定に向ふ云云。

【二三八】頌の舊譯
有覺觀此下、此上定無ㇾ二。

【二三九】婆沙論百四十五（六左）同五十二（六左）同九十二（二左）等に説く、譬喩者の説く、尋伺は有頂地に至りて皆な有り云云。然るに同百四十五（六左）に尋と伺とは有頂に至るに非ず、若し尋伺有頂に至ると説くは、三地差別有りと説かざるべし。

【二四〇】增一阿含經第十六（十五左）昃一（六十九右）曰く、此の三三昧、云何が三と爲す。空三昧無願三昧無想三昧なり。彼云何が名けて空三昧となす。

所謂空とは一切諸法を觀じて皆悉く空虛なりとす、是を名けて空三昧とす。彼れ云何が名けて無想三昧となす。所謂無想とは一切諸法に於て都て想念無く亦た見る可からず、是を名けて無想三昧とす。云何が名けて無願三昧と爲す。所謂無願とは一切諸法に於て、亦た願求せず。是を無願三昧といふ云云。

婆沙論百四（六左）曰く、問ふ、無量三摩地とは何を三摩地と建立するや。答ふ、三縁に由るが故に惟之を建立す、一對治の故に、二期心の故に、三所緣の故に。對治とは謂く空三摩地是れ有身見近對治の故に、乃至非我の行相を以て我の行相を對治し、空の行相を以て我所行相を對治す　乃至期心の故にとは謂く無願三摩地諸修行者の期心、三有法を厭は

空三摩地

論じて曰はく、空三摩地は、謂はく、空と非我との二種の行相と相應する等持なり。

無相三摩地

無相三摩地とは、謂はく、滅諦を緣ずる(二四三)四種の行相と相應する等持なり。涅槃は十相を離る、故に無相と名く。彼を緣ずる三摩地は、無相の名を得。

十相とは何。謂はく、(二四四)色等の五と、男女の二種と、(二四五)三有爲相となり。

無願三摩地

無願三摩地とは、謂はく、(二四六)餘の諦を緣ずる十種の行相と相應する等持なり。(二四七)非常と苦と因とは、厭患す可きが故に。(二四八)道は船筏の如し。必ず應に捨つべきが故に。能く彼れを緣ずる定は、無願の名を得。皆な(二四九)現の所對を超過せんが爲めの故なり。空と非我との相は、厭

ざるが故に、乃至聖道に於て全く願はざるに非らずと雖、後の則心三有を願はず、聖道は有に依るが故に。所緣の故にとは、謂はく無想三摩地は此の定の所緣は十相を離るが故に、謂はく色聲香味觸及び男女三有を相と爲す。乃至有るは是の說を作す、三の三摩地皆對治に由る、差別建立す。謂く空三摩地は近對治有身見なり。無願三摩地は近對治戒禁取なり、無相三摩地は近對治なり、疑此れに由りて先の爲めに一切を對治す云云。尙ほ長阿含衆集經（八ノ十二丁）を見るべし。

【二四一】三持等の梵名は
(一)空(Śūnyatā)。
(二)無願(Apraṇihita)。
(三)無相(Animitta)。

【二四二】頌の舊譯
無相唯レ靜相、空定無我空、無願定苦常、諦引相應故、彼害淨無漏、淨三解脫門。初四句は三等持の行相を明し後の二句は此の等持に淨と無漏との二あることを明す。

【二四三】四種の行相とは滅靜妙離の四行相を云ふ。滅とは生死の滅盡することを觀す。靜とは煩惱の爲めに心を亂さるることなきを觀ず。妙とは生死の三界を超過して殊妙なることを觀す、離とは一切の災難を脫離することを觀す。

【二四四】色聲香味觸の五境。

【二四五】生、異、滅の三相なり、四相の中住相を除く。

【二四六】無願三摩地は苦諦を觀じて非常苦の二行相を起し、集諦と道諦とを觀じて各各四行相を起す。總じて十種の行相と相應する定なり。

【二四七】苦諦を觀ずるに四行相あり、苦、空、非常、非我也。苦

捨する所に非ず。涅槃の相と相似するを以ての故なり。

此の三は、各各二種あり。謂はく、淨及び無漏なり。(二五〇)世、出世間の等持の別なるが故なり。

(二五一)世間の攝なる者は、十一地に通ず。出世の攝なる者は、唯だ九地に通ず。中に於いて、無漏なる者を三解脫門と名く。能く涅槃の與めに入門と爲るが故なり。

第三項　重等持

(二五二)契經に復た三の重等持を說く。一には空空、二には無願無願、三には無相無相なり。

其の相、云何。

頌に曰はく、

とは苦果は厭ふ可しと觀ず、空とは此の苦果は因緣所生にして不可得なりと觀ず、非常とは此の苦果は有爲にして生滅無常の法なりと觀ず、無我とは此の苦果は非我なりと觀ず。而して苦と非常と及び其因たる集は共に執すべからず厭患すべき法なり。

【二四八】聖道は涅槃を得る方便に過ぎざれば、目的を達したる以後は不必要なれば此を船筏に喩ふ。

【二四九】現前に對觀しつゝある苦集道の三諦なり、此の三諦を越えて涅槃に至るなり。

【二五〇】世間の等持を淨と名け、出世間の等持を無漏と名く。

【二五一】順正理論七十九(三十丁)曰く、世間の攝の者は十一地に通ず、出世の攝の者は唯九地に通ず。上の七定の邊は勝德無きが故に、中に於て無漏なる者は三解脫門と名く、能く涅槃の爲に入門となるが故に諸の有漏の法は是れ眞の解脫門にあらず、性世間に住して解脫に違するが故に云云とあり。

十一地とは欲と未至と八根本と中間となり。

九地とは未至と四靜慮と下三無色となり。

【二五二】契經とは此の經の出據未だ明かならず。婆沙論百五(五丁左)に廣く重空等を明せり。

三の重等持の梵名。

(一)空空(Śūnyatā-śūnyatā)。

(二)無願無願(Apraṇihitapraṇihita)。

(三)無相無相(Animittānimitta)

（二五三）重の二は、無學を緣じて、空と非常との相を取る。後は、無相定の、非擇滅を緣じて、靜と爲す。有漏なり、人の不時なり。上の七近分を離れたり。

三の重等持

論じて曰はく。此の三等持は、前の空等を緣じて、空等の相を取るが故に、空空等の名を立つ。

空空

（二五四）空空等持は、前の無學なる空三摩地を緣じて、彼の空相を取る。（二五五）空相は厭に順ずること、非我に勝るが故なり。

無願無願

無願無願は、前の無學なる無願等持を緣じて、非常の相を取る。（二五六）苦因等を取らざるは、無漏の相に非ざるが故なり。（二五七）道等を取らざるは、厭捨せんが爲めの故なり。

無相無相

無相無相は、卽ち（二五八）無學なる無相三摩地の

【二五三】頌の舊譯

空空等名レ定、復有ニ三別定一、二定緣ニ無學一、由ニ空無常相一、無相無相定、靜相非擇滅、有流人不壞、七近分所レ離。

重の二とは重等至の三の中初の空空と無願無願との二也。初四句は三の重等持の體性を明し、第五句は其性類と能修の人とを明し、第六句は所依の地を明す。

【二五四】顯宗論卅九（十二左）の文に喩を以て重空の義を明す。曰く、死屍を燒く時、杖を以て廻轉するに、屍既に盡き已りて杖も亦燒くべきが如し、是の如く空に由りて、煩惱を燒き已りて復た空定を起す。前空を厭捨す。卽ち復た還りて空行相と相應す云云。重空等持空行相後に起る、卽ち復た還りて空行相と相應す云云。

【二五五】五蘊は非我なりと觀ずるよりも、五蘊は空なりと觀ずる方が五蘊を厭ふに力あり。其厭心の勝れたる空の行相を取りて、此の三摩地も亦空なりと觀ず。

【二五六】苦の行相を取らざるは、苦は無漏法の行相にあらず、因集生緣の相を取らざるは、無漏は三有を招かざるものにして因集生緣に非ず。

【二五七】道等とは道如行出の四行相なり、今無願に無願の想を起すは、此を厭捨せんが爲なり。然るに道等の四行相は厭

三等持は有漏

能修の人

依地

非擇滅を緣じて、境と爲す。無漏の法には、擇滅無きを以ての故なり。但だ(二五九)靜相を取る。滅、妙、離に非ず、(二六〇)非常の滅に濫するが故なり。是れ(二六一)無記性なるが故なり。(二六二)離繫果に非ざるが故なり。

(二六三)此の三等持は、唯だ是れ有漏なり。聖道を厭ふが故に、無漏は然らず。

唯だ(二六四)三洲の人と、(二六五)不時解脫と、能く是の如きの重三摩地を起す。

十一地に依る、七近分を除く。謂はく、欲と未至と八の本と中間となり。

第四項　四修等持

(二六六)契經に復た四の修等持を說く。一には現法樂に住せんが爲め、二には勝知見を得んが爲

ふべき行相に非ざれば、此の行相をなさず。

【二五八】何故に無學の無相三摩地の非擇滅を緣するかと云ふに先づ無相三摩地の非擇滅あることを說かば、無學の無相三摩地より出でたる直ぐ後に、有漏の刹那又は他の無漏の刹那が經過すべし。若し此等の刹那が起らずんば無學の無相の刹那が起るべし。然るに此等の有漏及び他の無漏の諸刹那が起るを以て、無學の無相の刹那は緣闕不生の非擇滅を得するなり。此の非擇滅を靜の相となして緣ず。何故に擇滅を緣ぜざるかと云ふに、無漏法には擇滅なければなり。斯くして、無相三摩地には擇滅なく、又非擇滅は其の敵なるを以て、此を嘗嫌して此を緣ずるなり。例せば世人が怨敵と交を結んで怨害するが如きものなり。

【二五九】靜相を取るとは、顯宗論第三十九(十四右)に云ふ、靜は唯止息を顯はす、故に非擇滅得は靜相有り、聖道を修する久しきを經て劬勞を以て、彼の息中に於いて便ち樂相を生ずるが故に、重無相は靜を取る條に非らずと。

【二六〇】滅の言は無常滅と非擇滅とに通ず。故に無學の無相三摩地の非擇滅は滅の行相を以て緣ぜられず。若し斯く緣ぜらるるとせば、滅より勝れたる靜の行相を以て緣ぜらる可からず。云何となれば、非擇滅は無爲なれば、滅の行相卽ち無常滅の行相となすべきものに非ざれども、無學の無相三摩地は有爲法なれば、滅の行相をなして、差支なきものなればなり。

【二六一】非擇滅は無記法なれば妙

め、三には分別の慧を得んが爲め、四には諸漏を永に盡さんが爲めに三摩地を修すと。

其の相は云何。

頌に曰はく、

(二六七)現法樂を得んが爲めに、　諸の善靜慮を修す。
勝れたる知見を得んが爲めに、　淨天眼通を修す。
分別の慧を得んが爲めに、　諸の加行の善を修す。
諸の漏盡を得んが爲めに、　金剛喩定を修す。

論じて曰はく、(二六八)契經に說くが如し。(二六九)修等持有りて、若くは習、若くは修、若くは多所作、

にあらず。

【二六二】離とは雜染を離るゝ也。然るに非擇滅にては輪廻を離るゝこと能はず、如何なる善不善の法の非擇滅と雖も、其の得は斷ぜざれば、常に其等の法と相應してあるなり。

【二六三】此の三等持は無漏の聖道を緣じて厭ふものなり。若し無漏なれば無漏法を緣じて厭ふことなし。然るに無相無相は無爲を緣じ、靜の行相を作す、何ぞ厭道と名けん、此れ無學無相等持を欣ぶは不轉の因による、卽ち無學の無相三摩地が非擇滅を得れば緣缺けて起らず、故に不轉因の非擇滅を欣ぶは、無學の無漏の無相三摩地を厭ふとなる也。

【二六四】三洲とは北倶盧洲を除きたる後の三洲なり。北洲には

聖道を以て之を除く。

【二六五】不時解脫とに六種羅漢の中、後の不動阿羅漢の稱なり。時を俟つを要せずして自在に定に入り、煩惱の繫縛を斷ずるが故に、不時解脫と名く。

【二六六】契經。大集法門經（十三丁）（大十八、六四以下）。

【二六七】頌の舊譯

有二別修四定一、淨初爲二現樂一、爲二知見一眼通、爲二別慧一行生、金剛喩後定、能滅二有流一修。

【二六八】顯宗論三十九（十七）に、釋して云く、此の經の所說の若くは習、若くは修、若くは多所作の差別とは、習修得修所治、更に遠きを其の次第の如くなるを顯示せんと欲する爲めなり云云とあり。

【二六九】修等持（Samādhi-bhāvanā）。

現の樂住を得んが爲にすと。乃至、廣說す。

〔頌の〕「善」の言は、通じて、淨と及び無漏とを攝す。諸の善靜慮を修すれば、(二七〇)現法の樂に住することを得。而るに經に但だ初靜慮のみと說くことは、初を擧げて後を顯はす。現實には餘に通ず。(二七一)後法の樂に住せんが爲めなりと言はざることは、(二七二)後法の樂は定住に非ざるを以ての故なり、謂はく、或ひは退墮し、或は上に生を受け、或は般涅槃す。便ち住せざるが故なり。

若し諸定に依りて、天眼通を修すれば、便ち能く(二七三)殊勝の知見を獲得す。

若し三界の諸の加行善及び無漏善を修すれば、(二七四)分別の慧を得。

若し(二七五)金剛喩定を修すれば、便ち諸漏の永く盡くることを得。理實には此れを修することは、通じて(二七六)諸地に依る。而るに契經に但だ第四の靜慮を說くこと

【二七〇】現法(Dṛṣṭa-dharma)とは現在世と云ふと同じ。

【二七一】後法(Sāmparāya)とは直譯に非ず、現法に對して後法と譯せしのみ。原語の意義は「來世」なり。

【二七二】後法の樂の、定住に非ざるとは三の場合あり。第一に初定より退墮すると、第二定等に生ずると、涅槃に入るとなり。

【二七三】殊勝の知見とは是れ清淨の眼識と相應の慧なり。法蘊足論第八に四修を辨ずる中に云く、清淨の眼識相應の勝慧を說きて名けて知となす、亦名けて見と爲すと。卽ち天眼識相應の勝慧なり、彼彼の諸色を領受し、觀察するを以て殊勝なりとす。

【二七四】分別の慧とは諸法の性相を分別する有漏無漏の慧也。

【二七五】有頂の惑を斷ずる第九の無間道の定なり。此の定最も勝れ、一切の惑を斷ずる功力金剛に似たるを以て、金剛喩定とす。

【二七六】金剛喩定は未至・中間、四根本、下三無色の九地によりて起す。

【二七七】毘婆沙師傳說す、佛は第四定に於いて金剛喩定を修したり、故に佛自から金剛喩定

は、（二七）傳說すらく、世尊、自に依りて、說くが故なりと。

は第四定にて修すと說きたるなり。

六通の中に於て但だ二を說くとは、天眼通は能く生死を觀じ、漏盡通は能く涅槃を得るが故なり。

卷の第二十九（分別定品第八の二）

本論第八　分別定品第二

第二章　諸禪定の實際的功用

第一節　四無量

是の如く、已に所依止の定を說く。當に定に依りて、起す所の功德を辯ずべし。

諸の功德の中に、先づ無量を辯ずべし。

頌に曰はく、

二 無量に四種有り。瞋等を對治するが故なり。

慈と悲とは、無瞋の性なり。喜は喜なり。捨は無貪なり。

【二】頌の舊譯

無量定有レ四、由二瞋等對治一、
慈無瞋及悲、喜定謂適心、
捨無貪行相、有レ樂及有レ苦、
得レ喜及衆生、彼欲衆生境、
於二二定一喜餘、六地餘說レ五、
由レ彼惑不レ滅、人道生三無定一、

初句は名を標して數を擧ぐ。第二句は唯四有るを顯はす。第三句及び四句は體を出す。第五、六、七句は行相を明す。第八句は所緣を明す。第九、十句は所依を明す。第十一句は惑を斷ぜざるを明す。第十二句は處及び成を明す。

此の行相は、次の如く、樂を與へ、及び、苦を拔くと。
有情を欣慰すると等なり。欲界の有情を緣ず。
喜は初二靜慮なり。餘は六、或は五と、十となり。
諸惑を斷ずること能はず、人に起りて、定んで三を成ず。

四無量の名數

論じて曰はく、(二)無量に四有り、一には慈、二には悲、三には喜、四には捨なり。

無量と言ふは、無量の有情を所緣と爲すが故なり。(三)無量の福を引くが故なり。無量の果を感ずるが故なり。

此れ何に緣るが故に、唯だ四種有るか。

四種の多行の障を對治するが故なり。

何をか四障と謂ふ。

謂はく、諸の瞋と害と(四)不欣慰と(五)欲の貪瞋となり。此れを治するに、次の如く、慈等を建立す。

(六)不淨と捨と倶に欲貪を治す。斯れに何の別かある。

【二】無量(Apramāṇa)。

【三】無量の福とは光記にては自類の等流果を引き起すを云ひ、寶疏にては因無量と釋せり、因とは無量の福業のことにして、慈等の四無量と相應する思の心所なり。慈等の定は其無量の福業を引き起す、故に福業といふ。

【四】不欣慰(A-rati)とは嫉の心所を體とす。他の有情の苦を離れて、樂を得るを見て喜ばざる嫉の心所なり。

【五】欲の貪瞋とは欲界の貪と瞋となり。

【六】不淨觀は欲貪を退治す。今捨無量も欲貪を對治す。故に其差別は如何との意なり。

毘婆沙に說く。欲貪に二有り。一には（七）色、二には婬なり。不淨と、捨と、次の如く、能く治す。

論主の解

理實には、不淨能く婬貪を治す。餘の親友の貪は捨能く對治す。

其體

四が中、（八）初の二は、體、是れ、無瞋なり。

論主の解

（九）理實には、應に、悲は、是れ、不害なりと言ふべし。

喜は即ち（一〇）喜受す。

捨は即ち無貪なり。若し眷屬を並すれば、五蘊を體と爲す。

若し捨は無貪の性ならば、如何ぞ、能く瞋を治する。

此の所治の瞋は、（一一）貪の引く所なるが故なり。

【七】色とは、顯色と形色となり。

【八】慈と悲とは體共に無瞋なり。されど之を差別せば、順正理論に云ふが如し。種は別無しと雖も、然も慈は能く有情を殺す瞋を治す、慈行相に轉ず。悲は能く有情を惱ます瞋を對治す。悲行相に轉ず、是れを差別と云ふとあり。

【九】論主の意によれば、不害は無瞋に似たり、無瞋の名を以て說くが故に。順正理論七十九（十二丁）に云はく、有るが是の言を作す、悲は是れ不害なり、害を近治する故に。理實に是の如くんば、但害は瞋に似たれば瞋の名を以て說く。悲が行相も亦無瞋に似て無瞋の名を立つ、實に不害なり。（光記二十九、二右）

【一〇】喜無量は喜受を體とす。他の有情が苦を離れて樂を得たるを緣じて快く思うて喜ぶを喜受と云ふ。喜の體に關して諸說不同也。婆沙論百四十一に云ふ、喜は謂はく、慶慰、作意相應の喜根を性と爲すと云ひ、有る餘師は善の心所中の欣を以て自性と爲すと云云。正理論七十九（十二丁）によれば、三說を擧ぐ、一には喜受を以て體となし、二に欣を以て體と爲し、三に無貪を以て體と爲す。光記によれば、正理の文を以て正となし、次に俱舍を以て正となす、光師の意は正理の第二解を以て下となす。寶師は正理を引けど會釋せず。寶師は正理論の意を用ゐしならん。

【一一】貪の引く所とは例せば親友に於て三品の貪を起して、次に怨家を緣じて、親友を害せ

論主の解　理實には、（二）應に、二法を用つて、體と爲すべし。

行相　此の四無量の行相の別なることは、云何が、當に諸の有情類をして、是の如きの樂を得しむべき。是の如く思惟して、慈等至に入る。云何が、諸の有情類をして、是の如きの苦を離れしむべき。是の如く思惟して、悲等至に入る。諸の有情類、樂を得、苦を離るれば、豈に快からざらんやと。是の如く思惟して、喜等至に入る。諸の有情類、平等平等にして、親怨有ること無しと、是の如く思惟して、捨等至に入る。

行相の意義　此の四無量は、他をして實に樂等を得せしむること能はず、寧んぞ、顚倒に非ざらんや。彼をして樂等を得せしめんと願欲するが故なり。或は（三）阿世耶、顚倒無きが故なり。〔謂はく〕勝解と相應して起るが故なり。設ひ是れ顚倒なりとも、復た何の失か有らん。若し應に善に非ざるべしと云はば、理則ち然るべからず、此れ善と相應して起るが故なり。若し應に惡を引くべしと云はば、理亦た然るべからず。此の力に由りて、能く瞋等を治す　が故なり。

んことを恐れ、三品の瞋を起す。此の瞋は貪に由りて引起せらるるが如し。

【二】捨は無貪と無瞋とを以て體と爲す。そは貪と無瞋とを對治すればなり。されど、是れ一法に二の自性ある義と解すること勿れ。貪にも非ず、瞋にも非ざるものに捨の名を與へたるなり。

【三】阿世耶(āśaya)。意樂と譯す。何事か爲さんとする思念なり。則ち有情をして樂を得せしめ能はずと雖も、善の意樂に顚倒無きに由るが故なり。何故に意樂に顚倒なきかと云ふに、卽ち勝解想と相應して起るが故なり。勝解の想にして眞實と執するに非ず。故に顚倒にあらず。

所緣

(一四)此れ、欲界の一切の有情を緣ず。能く彼を緣ずる瞋等の障を治するが故なり。然るに、(一五)契經に、「慈等を修習するに、一方と一切の世界とを思惟す」と說くは、此の經は(一六)器を擧げて、以て器の中を顯はす。

依地

第三は但だ初二の靜慮に依る。喜受の攝なるが故なり。餘の定地には無し。所餘の(一七)三種は、通じて六地に依る。謂はく、四靜慮と未至と中間となり。

異說(一)

或は唯だ五地に依らしめんと欲する有り。謂はく、未至を除く。是れ(一八)容豫の德にして、已離欲の者の、方に能く起すが故なりと。

異說(二)

或は、有るは、此の四無量をして、其の所應に隨ひて、(一九)通じて十地に依らしめんと欲す。謂はく、欲と、四の本と近分と、中間となり。

【一四】 順正理論七十九(五丁)に曰く、皆欲界の有情を緣じて境となす。能く彼を緣ずる瞋等の障を治す。故に謂はく欲界に於て怨と親と中との三聚の有情有りて能く瞋等を生ず。中に於て怨親等の相を捨つるを有りて、便ち能く瞋等の煩惱を伏除す。是の故に此の境は唯欲の有情なり、必ず色界を緣ずること能はず。大悲の體は、是れ無癡善根なれば、此の力能に由りては通じて三界を緣ずと云云。

【一五】 中阿含二十一(十一右)長六(三右)に曰く、心慈と俱に遍滿して一方成就遊す。是の如く二三四方四維上下、普く一切に周し、心慈と俱に無結無怨無恚無諍極廣甚大無量修善し一切世間に遍滿し成就遊す。雜含二十二(十二左)辰三(二十右)に曰く、心慈と俱にして無怨、無憎、無恚、重心寬弘し、無量修習普く緣ず。一方に充滿す。是の如く、二方三方四方上下一切世間心慈と俱なり云云。

【一六】 器とは器界なり。一方乃至十方とは器界を顯はす。器の中とは器界中の有情を顯はすとなり。

【一七】 三種とは慈と悲と捨となり。

【一八】 此の四無量定は、欲界九品の惑を離れ終りたる已離欲の者の起す定にして、容豫即ち餘裕ある時に起す功德なり、故に未至定にては起さず。

【一九】 喜は三地に在り。謂はく欲と初と二となり、慈と悲と捨との三は十地に通ず。

（二〇）此の意は、（二一）定不定地の根本と加行とをして、皆な無量に攝せしめんと欲するなり。

力用

前に、此れ能く四障を治すと說くと雖も、而も諸惑の得を斷ぜしむること能はず。有漏と根本との靜慮の攝なるが故なり。（二二）勝解の作意と相應して起るが故なり。（二三）徧く一切の有情の境を緣ずるが故なり。

前文を會釋す。

（二四）此の加行の位に、瞋等を制伏し、或は（二五）此れ能く已斷をして、更に遠からしむるが故に、前に、此れ能く四障を治すと說く。謂はく、欲と未至とに、亦た（二六）慈等有り。修成する所の根本の無量に似たり。（二七）此れに由りて瞋等の障を制伏し已つて、斷道を引きて、生じて能く諸惑を斷ず。諸惑を斷じ已りて、（二八）離染の位の中に、方に

【二〇】加行に依らば、近分若くは欲界にまで通ずと許すと雖も、今は根本に依りて說く。而して等至にして能く惑を斷ずるは、無漏の根本と近分に限ることは、前第二十八卷に明せり。

【二一】六地、五地、十地通局の三種の因を擧ぐ。定地は色界なり、不定地は欲界なり。此の定の中、根本は根本定なり、加行は近分定なり。但し六地と云ふときは、初定の近分を特別に未至と名づく。

【二二】勝解作意は卽ち假設的思惟なるを以て惑を斷ずること能はず、惑を斷ずるは眞實を思惟するに限る。

【二三】惑を斷ずるには法の共相を思惟せざる可からず、故に有情を緣じては、惑を斷ずること能はず。

【二四】此の加行の位とは四無量を修する加行の位なり。是れは無量の根本に對して加行といふ。欲界未至定によりて起す加行の位を指す。

【二五】此れとは四無量なり。世間、又は出世間の無間道に由りて、瞋等の煩惱、隨煩惱と遠ざかるなり。

【二六】慈等とは悲と捨とを等取す。喜は但だ初二靜慮に依ること、前に已に明せり。

【二七】此れとは加行の位の慈悲捨なり。此の力によりて瞋等の四障を伏し終りて、未至定の能斷道を引き起して、欲界九品の貪を斷す。

【二八】離染の位とは第九の解脫道位なり。

根本の四種の無量を得す。此の後の位に於いて、〔二九〕強緣に遇ふと雖も、而も瞋等の蔽伏する所に非ず。

初修の相を明す。(一)慈

初習業の位に、云何が慈を修する。

謂はく、先づ自所受の樂を思惟し、或は佛、菩薩、聲聞、及び獨覺等の所受の快樂を說くと聞いて、便ち、是の念を作す。願はくは、諸の有情、一切等しく、是の如きの快樂を受けんことをと。

若し彼れ本來の煩惱增盛にして、是の如く、平等に心を運ぶこと能はざるは、應に有情に於いて、分ちて三品と爲すべし。所謂る、親友と〔三〇〕處中と怨讎となり、親に復た三を分つ、謂はく、上中下なり、中品は唯だ一なり。怨に亦た三を分つ、謂はく、下中上なり。總じて〔三一〕七品と成る。品の別を分ち已りて、先づ上親に於いて、〔三二〕眞實の與樂の勝解を發起す。此の願成じ已りて、中下の親に於いて、亦た漸次に是の如きの勝解を修す。親の三品に於いて、平等なることを得已りて、次に中品と下中上の怨とに於いて、亦た漸次に是の如

【二九】強緣とは惑を起すべき強き緣。蔽伏とは瞋等が起りて、四無量を覆ひ、四無量を制伏するの意なり。

【三〇】處中とは正理論によれば三品に分てり、上の處中とは昔より曾て見聞せざるもの、中の處中とは見聞すと雖も交住せず、下の處中とは交住すと雖も恩怨を離るるを云ふ。今は三を合して一品とす、即ち親友にあらず、怨家にあらざる人を云ふ。

【三一】是れを釋して七品修といふ。順正理論七十九（十八丁）には處中を三品に分つが故に合して九品とせり。

【三二】眞實の與樂勝解とは與樂勝解を眞實至誠心にてなすなり。

きの勝解を修す。數習力に由りて、能く上怨に於いて、與樂の願を起して、上親と等しからしむ。此の勝解を修し、既に無退を得。次に所緣に於いて、漸修して、廣からしむ。謂はく、漸く想を運らして、一邑と一國と一方と一切世界とを思惟して、與樂の行相、偏漏せずと云ふこと無し、是れを慈無量を修習すること成ずと爲す。若し〔三三〕有情に於いて、德を樂求する者は、能く悲定を修して、速疾に成ぜしむ。有情に於いて、失を樂求する者に非ず。〔三四〕斷善の者も、德の錄す可き有り。麟喩獨覺も失の取る可き有り。先きの福罪の果〔三五〕現に見る可きを以っての故なり。

(二)悲
(三)喜

悲喜を修する法も、此れに准じて、應に知るべし。謂はく、有情の衆苦の海に沒するを觀じて、便ち彼をして皆な解脫を得せしめんと願ひ、及び有情の樂を得、苦を離るることを想ひて、便ち深く欣慰して、實に樂なる哉と爲す。

(四)捨

捨を修する最初は、〔三六〕處中より起りて、漸次に乃至、能く上親に於いて、平等の心を起すこと、處中と等し。

【三三】有情の種類に二種あり、一には未來他人の德を樂求するものと、二は他人の失を求むるものとなり。

【三四】斷善の者とは斷善根の者也、此の人にも尚ほ德あり、故に德を求むるものは一切有情の德を求むべきなり。

【三五】現に見る可きを以っての故に、斷善根の者も德あり、麟喩獨覺にも失あるとは、現にその種類に於いて、斷善根の人に當來善の相を有するあり、獨覺に闕なる相を有するあるが故なり。

【三六】處中は親怨にあらざれば貪瞋を起さず捨し易し、故に初めに起す、次に下中上の怨を捨し、次に下中上の親を捨して平等心を起す。此の事は顯正理論七十九（十九丁）に委しく出でたり。

處及び處識

此の四無量は、[三七]人に起りて、餘に非ず、隨ひて一を得る時、必ず三種を成ず。第三定等に生じて唯だ喜を成ぜざるが故に「必ず四種を成ずと言はず」。

第二節　八　解　脱

已に無量を辯じつ。次に解脱を辯ぜん。

頌に曰はく、

[三八]解脱に八種有り。前の三は無貪の性なり。
二は二なり。一は一の定なり。四無色は定の善なり。
滅受想解脱は、微微の無間に生ず。
自地の淨心と、及び下の無漏とに由りて、
出づ。
三が境は欲の可見なり。四が境は類品の
道と、
自上の苦集滅と、非擇滅と虛空なり。

【三七】人の三洲なり。前述の如く、南贍部洲、東勝神洲、西牛貨洲の三洲なり。

【三八】頌の舊譯　解脱八前二、不淨觀二定、三後定無貪、淨無色定地、滅心定解脱、最後細後成、自地淨下聖、心從彼出觀、欲界可見境、前三四無色、是類智種類、自上地諦境。初句は總じて標す。二三句は別して三解脱を明し、第四句は別して次の四解脱を明し、第二頌は別して第八の解脱を

論じて曰はく (三九)解脫に八有り。(四〇)一には內に色想有りて、外色を觀ずる解脫、(四一)二には內に色想無くして外色を觀ずる解脫、(四二)三には淨解脫を身に作證し、具足して住す、(四三)四には無色定を次の四解脫と爲す。(四四)滅受想定を第八の解脫と爲す。

前三解脫の體

八の中に、前の三は無貪を性と爲す。近く貪を治するが故なり。然るに、(四五)契經の中に、「想觀」と說くは、想、觀の增するが故なり。三が中に、初の二は不淨の相に轉ず。青瘀等の諸の行相を作すが故なり。第三の解脫は淸淨の相に轉ず。淨光鮮の行相を作して轉ずるが故なり。「此の」三、助伴を並すれば、皆な五蘊の性なり。

其の他地

初の二解脫は一一に通じて、(四六)初二靜慮に依

明し、第三頌は總じて所緣を明す。

【三九】解脫(Vimokṣa)。

【四〇】一、內の色身に於て色想の貪有り。想貪を除かんが爲めに外の不淨の靑瘀等の色を觀ず、而して方に內身に貪をして起さざらしむ、初解脫と名く。

【四一】二、內の色身に於て色想の貪無し。已に貪を除くと雖も堅牢ならしめんが爲めの故に、外の不淨靑瘀等の色を觀じて貪をして起さざらしむ、第二解脫と名く。

【四二】三、淸淨の色を觀じて貪をして起らざらしむ。淨觀脫と名く。觀の轉勝を顯はす。此淨解脫は彼の觀行の者の身中に正得すれば身作證と名く。具足圓滿にして此の定に住することを得ば具足位と名く。

【四三】四、無色定は各各能く下地の貪を解脫す。故に次の四解脫となす。

【四四】滅受想定は受等を棄背す第八解脫と名く。婆沙論八十四(九丁)に曰く、棄背の義は是解脫の義なり。問ふ、若棄背の故に解脫と名くるは何等の解脫何の心を棄背するか。答ふ、初二解脫は色貪心を棄背し、第三解脫は不淨觀の心を棄背し、四無色處解脫は各自に次下地の心を棄背し、想受滅解脫は一切有所緣の心を棄背す、故に棄背の義は是解脫の義なり云云と。

【四五】中含經四十二(十五右)長阿含八(十九右)同九(四十三左)に曰く、復た七法有り、謂く七想なり。不淨想、食不淨想、一切世間不可樂想、無常想、無常苦想、苦無我想なり。

【四六】初二には亦近分と中間と

る。能く欲界と初靜慮との中に顯色の貪を治するが故なり。〔四七〕第三の解脫は後の靜慮に依る。〔四八〕八災患を離れて、心澄淨なるが故なり。〔四九〕餘地にも亦た相似の解脫有れども、而も建立せず、增上に非ざるが故なり。

次の四解脫の體

次の四解脫は、其の次第の如く、四無色の定善を以て、性と爲す。無記と染とに非ず。〔是れ〕解脫に非ざるが故なり。亦た散善に非ず、〔是れ〕性の微劣なるが故なり。

無色の散善

彼の散善とは、命終の心の如し。

其異說

有るが說く、〔五〇〕餘時にも亦散善有りと。

近分にも解脫あり

近分の解脫道にも、〔五一〕亦解脫の名を得。〔五二〕無間は然らず、下を緣ずるを以ての故なり。〔五三〕彼れは、要ず、下地に背きて、方に解脫と名くるが故なり。然るに、餘處に於いて、多分は唯だ

を攝す、能く欲界の眼識所引の顯色貪を治するが故に、又能く初定の眼識所引の顯色貪を治するが故に、故に初二解脫は初二定に依る。

【四七】第三の解脫は唯淨色を觀じて貪をして起らざらしむ。此れ極めて難と爲す。要ず勝定に依りて方に成ずることを得可し。故に第四定及び其の近分に依る。

【四八】第四定は八災患を離れて心澄淨なるを以ての故に、是れによりて欲界初定の顯色貪を對治す。

【四九】餘地とは第三定第四定及び欲界地なり。此等の餘地にも初二の相似解脫あり。然れども欲界の散心は實なり、又第三第四定は暗對治を去ること遠くして勢力微なり、故に建てて初二解脫とせず、初二解脫は欲界初定二定に局る。又餘の初二三定及び欲界地に亦た第三相似解脫有り。然れども下三定は八災患に擾亂せられて增上ならず、故に建てて第三解脫とせず、第三淨解脫は第四定に局る。

尚ほ正理論八十の一丁より七丁を參照すべし。

【五〇】餘時とは命終心の位以外を指す。此の說にては異熟生の心心所を、密意を以て說いて散となすなり。

【五一】單に根本に止まらざるが故に「亦」と云ふ。

【五二】無間道は必ず次下の地を緣ずるを以て解脫に攝せず。

【五三】後とは無色の近分なり、解脫は棄背の義にして下地に背きて此を緣ぜざることを也、近分の無間道は下地を緣じて麤苦障と觀ずるが故に解脫に攝せず。

又正理論八十(二丁)には他の

彼の根本地のみを說きて、解脫と名くることは近分の中は、(五四)全分に非ざるを以ての故なり。

第八解脫の體

第八の解脫は、卽ち滅盡定なり、彼の自性等は、先に已に說くが如し。

無想の解

受想を厭背して、而も此れを起すが故に、或は總じて(五五)有所緣を厭背するが故に、此の滅盡定に、解脫の名を得。

異說

有るが說く、此れに由りて、(五六)定障を解脫すと。

無想定の入出心

微微心の後に此の定現前す。前は想心に對して、已に微細と名く。此れ更に微細なり。故に、微微と曰ふ。是の如きの心に次ぎて、滅盡定に入る。滅定より出でて、或は有頂の淨定の心を起し、或は卽ち能く無所有處の無漏の心を起す。是の如きの(五七)入心は、唯だ是れ有漏なり。通じて有漏無漏の心より出づ。

解脫の所緣

八の中に、前の三は唯だ欲界の色處を以て、境と爲す。差別有ることは、(五八)二の境は可憎なり。(五九)一の境は可愛なり。(六〇)次の四解脫は、各

一說を擧ぐ、諸近分地の九無間道八解脫道は、亦解脫に非ず、下地に背かざるが故に、下道を緣じて雜するが故に、又全く下地の染を解脫せず、故に契經に彼れ下を超過すと云云。

【五四】近分中の解脫道のみ解脫にして、無間道は解脫に非ず、故に全分に非ずと云ふ。

【五五】有所緣。諸の心心所也。

【五六】定障とは不染無知の定障を云ふ。此の障滅盡定を障ふ、故に此の滅盡定によりて、此の障を解脫す。

【五七】入心とは滅盡定の寂靜を緣じて、方に能く此の定に入るが故に有漏なり。出心は必ずしも滅定を緣ぜず、故に有漏無漏に通ず。

【五八】二の境とは初二の解脫なり。

【五九】一の境とは第三の解脫なり。

【六〇】光記には婆沙論八十四の文を引用して細說せり、卽ち所緣とは初三解脫は欲界の色處を緣す、第四解脫は四無色

第三定に解脱なきことを明す

(六二)自と上との苦集滅諦と及び一切の類智品の道と、彼の非擇滅と、及與び虚空とを所縁の境と爲す。

第三定に解脱なきことを明す

第三靜慮に寧んぞ解脱無からんや。

(六三)第三定の中には、色貪無きが故なり。自地の妙樂に、動亂せらるるが故なり。

淨解脱を修する意義

行者、何によりてか淨解脱を修する。心をして暫く欣悦せしめんと欲するが爲めの故なり。前の不淨觀は、心をして沈感せしむ、今淨觀を修して、策發して欣ばしむ、或は審かに他の(六四)堪能を知らんが爲めの故なり。謂はく、前の所修の不淨の解脱は、成せりと爲んや、成せずとせんや。若し淨相を觀ずるに、煩惱起らざれば、彼れ方に成ずるが故なり。

修意を明す

二縁に由るが故に、諸の瑜伽師、解脱等を修

及び彼の因彼の滅の一切類智品と、若くは四無色及び類智品道の非擇滅と、並に虚空とを縁す。若くは所謂一物若くは所謂多物一切皆縁す。乃至第七解脱は非想非非想處及び彼の因彼の滅一切類智品、若くは非想非非想處及類智品の非擇滅、並に虚空を縁す。若くは所謂一物、若くは所謂多物一切皆縁す。相受滅解脱は所縁無し。有るは是の說を作す、空無邊處解脱は亦第四靜慮の非擇滅を縁す、餘の所縁は前の所說の如し。乃至非想非非想處の解脱も亦無所有處の非擇滅を縁す、餘の所縁は前に說くが如し云云。

【六二】 自と上との苦集等を縁じて、下の苦集等を縁ぜざるは下は劣なるが故に、亦已に下に背けるが故なり。類智品の道は依地に由りて勝劣あるに非ず。又一切の類智品の道の非擇滅は依地によりて勝劣あるに非ず、又自と上との苦集と一切の類智品の道との非擇滅を無色の解脱が縁するは、此れ無相無相三摩地を自性とすることあればなり。先の第二十八巻の無相無相三摩地を明す處に「是の如きの重三摩地を起す。十一地に依る、七近分を除く。謂はく、欲と未至と八の本と中間となり」とあり。

【六三】 第二定地に屬する顯色貪あらば此を對治すべき要あるも、第二定以上には五識皆無の法相なれば、顯色貪無し。故に第三定に依て解脱すべき理なし。

【六四】 堪能とは業持して能く貪を起さしめざる能力。

す。一には諸惑の已斷をして、更に遠からしめんが爲の故に、二には定に於いて、勝自在を得んが爲の故に、能く(六四)無諍等の德と、及び聖神通とを引起す。此れに由りて、便ち能く諸事を轉變して、(六五)留捨等の種種の作用を起す。

妨難す　何の故に、(六六)經の中に、第三と第八とに身作證と說きて、餘の六に非ざるや。

答　八の中に於いて、(六七)此の二、勝れたるを以ての故なり。二界の中に於いて、各邊に在るが故なり。

第三節　八勝處

已に解脫を辯せり。次に勝處を辯せん。

頌に曰はく、

【六四】無諍等の德とは先きに二十七卷に出づ。聖神通は同卷に出づ。

【六五】留捨等とは、留壽行捨壽行なり。

【六六】中阿含第二四大因經（昃六、十八左）に曰く、復次に淨解脫身作證成就遊す。是を第三解脫といふ。復次に一切非有想非無想處を度して、滅解脫を知り、身作證成就遊す、及び慧諸漏を觀じて盡知す是を第八解脫といふ云云。

【六七】倶舍光記廿九（十三丁、十四丁）に婆沙と正理の文を擧げて二の理由を示せり。婆沙論二百五十二（十二）に曰く、有るは說く、淨解脫は淨相を取りて煩惱を起さず、殊勝なるを以ての故に、世尊身作證の名を安立す。相受滅解脫は無心なるを以ての故に身に在り心に非ず、身力の起す所にして、心力の起す所にあらず。是の故に世尊說きて身證と爲す云云。順正理論八十（九）に曰く、唯第三と八とに身證を說くとは二邊際を擧げて顯して齊等を顯はす。色解脫の中には淨を邊際と爲す、諸の無色に於ては滅定を邊と爲す。有るは說く、第三は初て身色に於て勝解力を以て清淨相を取り、後漸く遣除して解脫成滿す。滅身解脫は此を究竟と爲す、故に獨に此に於いて身證の名を立つ。滅定は無心なり、唯だ身に依りて住するが故に。亦彼に於いて身證の名を立つ。勝に就いての故に云云。稱友の釋に依らば、勝れたるを以ての故とは、有色の解脫の障を全く斷ぜるより、所依の轉するが故に、第三に作證の

(六八)勝處に八種有り。二は初の解脫の如し。次の二は、第二の如し。後の四は、第三の如し。

勝處の名數

論じて曰はく、勝處に八有り。一には(六九)內に色想有り。外色少を觀ず。二には內に色想有り。外色多を觀ず。三には(七〇)內に色想無し、外色少を觀ず。四には內に色想無し、外色多を觀ず。(七一)色想無し、外の青と黃と赤と白とを觀ずるを四と爲す。前に足して八を成ず。

解脫に同じ

八の中に、(七二)初の二は初の解脫の如し。次の二は第二の解脫の如し。後の四は第三の解脫の如し。

若し爾らば、八勝處は、何ぞ三解脫に殊らん。前の解脫を修するに、唯だ能く棄背す。後に(七三)勝處を修するは、能く所緣を制す。(謂は

言を置く。又無色の解脫の障を全く斷ぜるより、所依轉ずるを以て、第八に作證の言を置く。又各邊に在るが故にとは第四定は色界地の邊に在り滅盡定の依地なる有頂は無色界地の邊に在るが故なり。

【六八】頌の舊譯

制入有二八種一、二如二初解脫一、後二如二第二一、餘如二淨解脫一。初句は名を標して數を擧ぐ、下の三句は解脫に同じきを顯はす。勝處(Abhibhvāyatana)。

【六九】內の色身に於て色想の貪有り、彼を對除せんが爲に、外の少色を觀じて青瘀等の相を爲す。第二は准じて知れ。

【七〇】內の色身に於て色想の貪無し、但だ堅牢の爲に、外の少色を觀じて青瘀等の相を作して貪をして起らざらしむ。第四は准じて知れ。

【七一】內身に於て色想の貪無し但だ心を策し、或は勝備を試せんが爲に、外の青黃赤白の四色を觀じて貪をして起らざらしむ。

【七二】初の二は自性も依地も所緣も、第一の解脫に同じく無貪を體とし、初定二定によりて欲界の色處を緣す。

【七三】勝處とは能く境を制伏し心起處に勝つが故に勝處と名く。謂はく或る觀者には青と觀じ、又或る觀者には黃と觀

く」樂ふ所に隨つて觀ず。［又」惑終に起らず。

第四節　十　徧　處

已に勝處を辯じつ。次に徧處を辯ぜん。

頌に曰はく、

(七四)徧處に十種有り。八は淨解脱の如し。
後の二は淨の無色なり。自地の四蘊を緣ず。

徧處の意義

論じて曰はく、(七五)徧處に十有り。謂はく、(七六)周徧して地水火風と、青黄赤白と、及び空と識との二の無邊處を觀ず。一切處に於いて、周徧觀察して、間隙有ること無し、故に徧處と名く。

徧處の體

十が中に、前の八は淨解脱の如し。謂はく、八が自性は皆な是れ無貪なり。若し助伴を並すれば、五蘊を性と爲す。

する等、又不可意の青瘀等に於て、可意を觀する等意のままになるなり。又雜染の事物も、清淨の行相を作して觀ずれば煩惱起らず、此の理に據りて能く所緣を制すと言ふなり。

【七四】　頌の舊譯　十徧入、無貪、八、後定、後境、欲。二淨無色、自地四陰境。初句は徧處の數を出し、第二三句は其の體を明し、第四句は所緣を明す。

【七五】　徧處（Kṛtsnāyatana）。瑜伽論十二（七左）中阿含經五十五（廿七丁）集異足論十九（七左）婆沙論八十五（十左）等に說けり、今婆沙の文を擧ぐれば、謂はく青黄赤白、地水火風、空無邊處識無邊處に徧處すと。

【七六】　一に周遍して地を觀ず。之は地が一切處に遍じてありと觀ずるなり。所觀の境が一切處に遍じてあれば、能觀の行相も一切處に遍じて觀ず、故に周遍觀といふ。此の地は四大種の中の地大にあらず、顯形色を體とする假の地大なり。以下九に就きて一切處に遍ぜりと觀ずるなり。

異說

差別を明す

第四靜慮に依りて、欲の可見の色を緣ず。

有る餘師の說かく、唯だ（七七）風の徧處のみ、所觸中の風界を緣じて境と爲す。

後の二徧處は、次の如く、（七八）空と識との二の淨無色を、其の自性と爲す。（七九）各各自地の四蘊を緣じて境と爲す。

應に知るべし。此の中に、觀行を修する者は諸の解脫より、諸の勝處に入る。諸の勝處より、諸の徧處に入る。後後に起るは、前前に勝れたるを以ての故なり。

第五節　解脫の方法及び順序

此の解脫等の（八〇）三門の功德は、何に由りて得と爲んや。何の身に依りて起すか。

頌に曰はく、

（八一）滅定は先きに辨せるが如し。餘は皆な二門に通す。

【七七】風の中に色處ありと許さざる人は、風徧處は可見の色を緣ずるに非ずして、所觸の中の風界を緣ずと言ふ。

【七八】空と識との二は淨無色を其の自性とす。前の八は正しく貪を治す。故に自性は無貪を以て體と爲す。

【七九】假想思惟して無邊の空の解を爲し、無邊の識の解を作す、是れ加行位なり、根本位に非ず、根本位は四蘊を緣ず。

【八〇】三門とは解脫、勝處、徧處の三なり。此三門の功德は離染得なりや、加行得なりや又何の身に依りて起すか。

【八一】頌の舊譯

滅心危已說、餘離欲行得、三界依無色、餘人直修得。

無色は三界に依る。餘は唯人趣にして起す。

論じて曰はく、第八の解脱は、（八二）先に已に辯せるが如し。卽ち是れ前の滅盡定なるを以ての故なり。（八三）餘の解脱等は、通じて二に由りて得す。謂はく、離染と及び加行とに由りて得す。（八四）曾習、未曾習有るを以ての故なり。

四無色の解脱と、二の無色の徧處とは、一一に通じて、（八五）三界の身に依りて起す。（八六）餘は唯だ人にして起す。敎力に由るが故なり。（八七）異生及び聖は皆な能く現起す。

第六節　起定の因緣

（八八）諸有の、色無色界に生在して、靜慮と無色とを起すは、何等の別緣に由るか。

【八二】本論五卷（五丁右）に說けり、佛は離染得なり、餘の聖者は加行緣なりと。滅定の依身は同卷（六丁右）に欲色二界の身を起すと說けり、此の滅盡定はただ聖者のみ起して異生は起さず。

【八三】餘の解脱等とは七解脱と八勝處と十徧處となり。

【八四】曾習とは曾て起したるものは離染得にて得す、未だ起さざる者は加行得にて得す。

【八五】下地の身に依りて上地の定を起し得べきが故なり。

【八六】前の三解脱と、八勝處と八徧處とは唯だ人身に依る。此は敎力に由るが故なり。而して敎は唯だ人にのみ有ればなり。

【八七】滅定を除いて餘の七解脱八勝處、十徧處は凡聖ともに能く現起す。

【八八】婆沙論百五十三（六左）に曰く、問ふ、何故に色界中に生じて能く初は靜慮無色を起して滅定に非ざるか。答ふ、靜慮は三緣に由るが故に、乃至自力に由るとは、謂く餘生に於て曾て近起し此の靜慮を滅するが故に。業力に由るとは、謂く彼地順決定業の已に造作し增長して果とならんとするが故に。法術力とは、謂く世界壞時下地の有情必ず上に生ずるが故に、無色は二緣に由るが故に初起す、一に因力に由る、一に業力に由る。因力に由るとは、謂く餘生中曾て近起し此の無色を滅するが故に。業力に由るとは、謂く彼の地順決定受業已りて造作增長して果とならんとするが故

頌に曰はく。

(八九)二界は因と業とに由りて、能く無色定を起す。

色界にして靜慮を起すは、亦、法爾力に由る。

進んで色無色の定を起す總說

論じて曰はく。上二界に生じて、總て三緣に由りて、能く進みて、色無色の定を引生す。一には因力に由る。謂はく、先時に於いて、(九〇)近と及び數との修を起因と爲るが故なり。二には業力に由る。謂はく、先に曾て、上地の生を感ずる順後受業を造りて、彼の業の異熟、將に起りて現前せんとする勢力、能く進みて彼の定を起さしむ。若し未だ下地の煩惱を離れざれば、必定して、上地に生ずべき無きを以ての故なり。三には(九一)法爾力なり。謂はく、器世界將に壞せんと欲する時、下地の有情、法爾として、能く上地の靜慮を起す。此の位に於いては、所有の善法、法爾の力に由りて、皆な增盛なるを以ての故なり。

上二界中色無色定を起す

諸有の、上二界の中に生在して、無色定を起すは、因と業との力に由る、法爾の力に非ず。無雲等

に法爾力に由らずと云云。

【八九】頌の舊譯

因業力二界、生ニ色無色定ー、於ニ色界ー色定、由ニ二法爾ー得。

【九〇】近修に由るとは人あり無色定を起し、而して退して直に色界に生れたりとせんに、無色定の同因類の力、強きを以つて、色界に於ては、彼は能く無色定を起す。數修に由るとは、人あり、無色定を數修して、夫より退して色界に生ぜんに、無色定の同類因の力、强きを以て色界に於て、能く無色定を起す、斯の如く或は下地に生れ、或は上地に生るる場合も準知すべし。

【九一】法爾力に關しては本論十二(三丁左)に詳說せり。

色界にて靜慮を起す

欲界に生じて上定を起す

の天は、三災の爲めに、壞せられざるが故なり。

色界に生在して、(九二)靜慮を起す時、上の二緣と及び法爾力とに由る。

若し欲界に生じて、上定を起す時は、一一應に知るべし、教力に由るを加ふ。

第三章　定品結語

第一節　正法の住世

前來に、種種の法門を分別せるは、皆な世尊の正法を弘持せんが爲なり。何をか正法と謂ふ。當に幾の時に住すべき。

頌に曰はく、

(九三)佛の正法に二有り。　謂はく、教と證とを體と爲す。

持と說と行との者有れば、　此れ便ち世間に住す。

論じて曰はく。世尊の正法は、體に二種有り。

【九二】　即ち下の三定中にて上地の靜慮を起すなり。

【九三】　頌の舊譯　世尊正法二、教修得爲レ體、

一には教、二には證なり。教とは、謂はく、(九四)契經と、調伏と、對法となり。證とは、謂はく三乘の菩提分法なり。

能く受持し及び正說する者有らば、佛の正教法便ち世間に住す。能く教に依つて正しく修行する者有れば、佛の正證法便ち世間に住す。故に (九五)三人の住世の時量に隨ひて、應に知るべし、正法、爾所の時に住す。(九六)聖教には、總じて唯だ千載に住すと言へり。

有るは釋す、證法は唯だ千年に住す、教法の住する時は、復た此れに過ぎたりと。

第二節　造論の主旨

此の論は、(九七)阿毘達磨に依攝す。何なる理に依りて、對法を釋すと爲んや。

頌に曰はく、

於ㇾ中有㆓能持、能說及能行㆒。

【九四】 契經と調伏と對法とは經律論の三藏なり。

【九五】 三人とは持者、說者、行者の三人なり。

【九六】 雜阿含經廿五(初左)辰三(四四左)に曰く、我今當に正法を以て人天諸天世人に付囑す、共に法を攝受する者あらば我が教法は則ち千歲不動なり。中含經廿八瞿曇彌經(辰六、三八左)曰く、正法當に住するを千年、今五百歲を失す、餘は五百年有り、阿難當に知るべし、女人五事を行するを轉ず。五分律廿九(三右)に曰く、尼をして八敬を行ぜしむ、故に千年に復す云云。雜含卅二(三左)に曰く、迦葉如來正法滅せんと欲する時、相似像法有り、相似像法を生ず。出世間已りて正法則ち滅す乃至五因緣有り云云。

【九七】 此俱舍卽ち藏論は阿毘達磨に依りて、阿毘達磨に攝するとなり。

(九八)迦濕彌羅の義理成せり。我れ多く彼れに依りて對法を釋す。少しく貶量有るは、我が失と爲す。法の正理を判ずることは、牟尼に在り。

論じて曰はく、(九九)迦濕彌羅國の毘婆沙師の、阿毘達磨を議することは、理善く成立せり。我れ多く彼れに依りて、對法宗を釋す。少しく貶量有るは、我が過失と爲す。法の正理を判ずることは、唯、世尊、及び、諸の如來の大聖の弟子に在り。

(一〇〇)傷歎及び勸學

(一〇一)大師なる世眼は、久しく已に閉ぢたり。

(一〇二)證となるに堪へたる者は、多く散滅せ

【九八】頌の舊譯
罽賓毘婆沙理成、
我多隨ﾚ彼說ニ此論一、
正法僞執是我失、
判ニ法正理一佛爲ﾚ量。

【九九】迦濕彌羅國の毘婆沙師(Kaśmīra-vaibhāṣika)。迦葉彌羅、迦濕彌衞、羯濕弭羅等ともいふ。北印度健駄羅國の東北ヒマラヤ山麓の山間にありし大國なり。支那、古は罽賓國といふ。毘婆沙師とは毘婆沙(Vibhāṣā)論を遵奉するが故に此の名あり。迦濕彌羅國の毘婆沙師と言ふは、迦濕彌羅の人にして毘婆沙師に非ざるあり、毘奈耶の學者等と經部の大德(Bhadanta)等なり。又毘婆沙師にして、迦濕彌羅の人に非ざるあり、外國の毘婆沙師の如し。今は以上兩者を簡ぶなり。

【一〇〇】頌の舊譯
大師世眼已閉、
又證ﾚ教人稍滅散、
不ﾚ見ニ實義一無ﾚ制人、
由ニ不ﾚ如ﾚ思一動ニ亂法一、
自覺已入ニ最寂靜一、
荷負教人隨入滅、
世間無ﾚ主壞ﾚ德、
無ニ鉤制一惑隨ニ意行一。
若知ニ佛法命一將ﾚ盡至ﾚ喉、
見ニ惑力盛時一、求ﾚ脫勿ニ放逸一。

【一〇一】大師とは三界の大師なり即ち如來なり。如來は世の眼目なり。されど寂滅に入りて已に多時なり。故に久しく已に閉ぢたりといふ。

【一〇二】證となるに堪へたる者とは世尊は道と非道とを知れりと云ひて、證明をなし得る者即ち實義を證得せる人を指すの語なり。

り。
(一〇三) 眞理を見ずして、制すること無き人は、
鄙しき尋思に由りて、聖教を亂る。
(一〇四) 自覺せるもの、已に勝寂靜に歸り、
(一〇五) 彼の教を持する者、多く隨ひて滅す。
(一〇六) 世に依怙無くして、衆德を喪す。(一〇七) 鉤
の〔惑を〕制する無くして、惑は意に隨ひて
轉ず。
既に知りぬ、如來の正法の壽は (一〇八) 漸次に
も淪亡して、喉に至るが如く、
〔又〕是れ諸の煩惱の、力の增する時なる
を、應に、解脫を求むべし、放逸なること
勿れ。

【一〇三】凡夫愚癡にして慧眼有ること無し、四諦の眞理を觀ずること能はず、起惑して情に任せて自制すること無し、故に制すること無きといふ。

【一〇四】以下第一頌に言へることの因を明すために更に一頌を加ふ。自覺とは無師自悟するをいふ、即ち二乘と異れり。此の覺有る者を即ち大師といふ、大師今已に最勝寂靜常樂涅槃に歸れり、先きの第一句を重釋す。

【一〇五】彼の教を持する者とは、諸大弟子を云ふ。此等の人人多く隨ひて滅せり。先の第二句を重釋す。

【一〇六】世間の有情、如來及び諸弟子の衆德を喪ふに由りて、歸依する所なく持悟する所無し第四句を重釋す。

【一〇七】正法の鉤能く諸惑の象を制すること有ること無く、意に隨ひて惑を起す。第四句を重釋す。又此の句は第三句に相應し、前句即ち第七句は第四句に相應するの說あれども、意味に於いては大差なかるべし。

【一〇八】如來の正法の壽命が漸次に淪亡し、人の終らんとする時氣臨んで喉に至りて即ち斷滅するが如し、即ち如來の正法一千歲なりと說かれたり。世親の出世は佛滅九百年代なり、故に正法將に盡きんとせる時なり。

本論第九　破執我品第一（破執我品第九の一）

第一章　總說破我

【一〇九】此れを越えて餘に依るに、豈に解脱無からんや。

理必ず有ること無し。

所以は何。

虛妄の我執に、迷亂せらるるが故なり。謂はく、此の法の【一一〇】外の諸の所執の我は、卽ち蘊の相續に於いて、假立するに非ず。眞實の離蘊の我有りと執するが故なり。我執の力に由りて諸の煩惱生じて、三有に輪廻す、解脱すべきこと無し。

離蘊の我

離蘊の我なき證如何

何を以て證と爲して、諸の我の名は、唯だ蘊

【一〇九】前段の頌の末に「應に解脱を求むべし、放逸なること勿れ」と言へるは、此のみが解脱の方便なり。此の外に解脱の方便無し。故に解脱を求むるものは、此の所說に於て放逸なること勿れとの意義なれば、問者ありて「此を越えて」云云と言へるなり。

【一一〇】外の諸の所執の我とは本論の意によれば、次下に明すが如く（佛教中に在りては犢子部なり。是は五蘊の外に、非卽非離蘊の我を立つ、故に論主は之を汝釋子に非ずと破せり。その他の外道は勝論は實句義を立てて我の存在を許し、數論は自性と並べて我を說く。何れも五蘊の外に實我あることを說く。佛教は然らず、此色受想行識の五蘊の全體的活動の上に於て、我に似たる相を現ずるなり。此五蘊を離れて別に實我あるにあらず。我と云ふは五蘊の相續の上に假立する也。佛教は無我なり、從つて我なりと執し我が所有なりと執するをなし、故に諸煩惱生ずるをなし。生死の根本は諸の煩惱の業作なり、今其業作なし、從つて生死を離れ解脱を得るなり。外道

現比二量を以て證す

の相續を召んで、別に我體に因るに非ざることを知るや。

彼の所計の離蘊我の中に於いて、(二二)眞實の現比量有ること無きが故なり。謂はく、若し我體別に實物有らば、餘の有法の如くなるべし。若し障緣無くんば、應に、現量に得すること、(二三)六境と意との如く、或は、比量に得すること、五色根の如くなるべし。

(二三)五色根の比量得と云ふは、世の現見の如し。衆緣有りと雖も、(二四)別緣を闕くに由りて、果便ち有るに非ず。闕かざれば、便ち有り。種の芽を生ずるが如し。是の如く、亦た見に、現の境と作意と等の緣有りと雖も、諸の盲聾と、不盲聾と(二五)等の識の起らざると、起るとあり。定で知りぬ、別緣に闕と不闕と有ることを。此

は然らず、實我を執するが故に、諸煩惱を生じ、三有を輪廻して解脫することなし。

【二二】眞實の現比量とは眞現量眞比量にして聖教量と共に因明の三量と稱せら、卽ち佛教論理の三形式なり。

現量（Pratyakṣa）とは直接外界の事象を覺知するを云ふ。花を花と見人を人と見る如き所謂西洋論理學の直接的知識是れなり。

比量（Anumāna）とは一の事象によりて他の事象を正しく推知することにして正しき推理作用なり。煙を見て其下に火あることを推知するが如き、所謂間接的知識是れなり。

聖教量（Āgama）とは自派の信仰せる聖賢の言を絕對的眞理とするを云ふ。聖教量は比量の中に在るを以て、今は別に言はず。

【二三】六境とは認識の對境卽ち色、聲、香、味、觸、法の六境なり。色等の五境は五識が現量に證得す。法境の觀行者（瑜伽師）の境界なるは、現量に證得せら、意の現量に得らるものとは、等無間滅の意は、無間生の意に由りて了別せらる。卽ち貪著せりとか、憎惡せりとか、樂相應せりとか、苦相應せりとか云ふがごとし。

【二三】五色根とは眼根耳根鼻根香根身根なり。

【二四】別緣とは草木に就きて云はば種子なり。人に就きて云はば五色根なり。水土人工等の衆緣有りと雖も、種子の別緣無くんば所果生ぜず。色等の現境及び作意等の緣有りと雖も、五根無くんば五識の作用を爲さず、故に五識の作用あるは五根あることを證す。

【二五】等とは、毀損せると、毀

の別緣とは、即ち眼等の根なり、是の如きを、名けて色根の比量と爲す。離蘊の我に於いては、二量都て無し、此れに由りて證知す。眞我の體無しと。

第二章　犢子部を破す

第一節　論理的批判

第一項　假實の說

犢子部の執

然るに、(一六)犢子部は、補特伽羅有り。其の體、蘊と一ならず、異ならずと執す。

論主觀思

此れ應に思擇すべし、實と爲んや、假と爲んや。

犢子部問ふ

實有と、假有と、相別なること云何ん、

論主答ふ

別に事物あるは、是れ實有の相なり。色聲等の如し。但だ聚集のみ有るは、是れ假有の相なり。乳酪等の如し。

犢子部問ふ

實と計し、假と計するに、各何の失か有る。

損せざる鼻根等を攝む。

【一六】犢子部(Vatsiputriya)。南傳の所謂、跋闍子部(Vajjiputtaka)に相當する派なり、その詳しき地位に關しては國譯異部宗輪論附錄を見よ。此派にては五蘊と即するにもあらず、離するにもあらざる一種の我(Pudgala)を立てて、轉迴及び解脫の主體となす。經部の細意識などに近き考なれど、外道の有我說に似たりといふ點にて、論主は之れを駁するなり。

論主過を出す

體若し是れ實ならば、應に蘊と異るべし、別性有るが故なり。別別の蘊の如し。又、(二七)實體有らば必ず應に因有るべし。或は、應に(二八)是れ無爲なるべし、便ち外道の見に同じ。又は(二九)應に用無かるべく、徒らに實有を執するのみならん。

犢子救

體若し是れ假ならば、便ち我が說に同じ。

(三〇)我が所立の補特伽羅は、仁が徵するが如き實有假有には非ず。但だ、內の現在世に攝する有執受の諸蘊に(三一)依りて、補特伽羅を立つ可し。

論主正破

是の如きの謬言は、義に於いて、未だ顯はれず。我れ猶ほ了せず。如何が依と名くる。若し諸蘊を(三二)攬るを、是れ此の依の義なりと云はば、既に諸蘊を攬りて、補特伽羅を成ずる時は則ち補特伽羅は應に假有と成るべし。(三三)乳酪等の色等を攬りて成ずるが如し。若し諸蘊に(三四)因るを、是れ此の依の義なりと云はば、既に諸蘊に因りて、補特伽羅を立つるときは、則ち補特伽羅も亦た此れに同じき失あり。

【二七】實體あらばそは必ず因より生ずべし。因より生ずる法なれば是れ無常の法にして、常住の實體にあらざるべし。

【二八】若し因より生ぜずと云はば、是れ無爲なるべし。因生に非ざるが故に、虛空等の如し。若し無爲なくば、外道の常住の我に同じ。

【二九】我の體無爲ならば、作用無かるべし。作用無くんば徒らに實有と執するも、益なきことなるべし。

【三〇】我が所立云云。これ犢子部の救釋なり。犢子部の所謂我といふは、別に事物ある者とか、ただ聚集のみある者とかいふが如きものにあらず、ただ現に身體の內部にありて感覺しつつある要素に依存して、その中心となる者を指すとなり。

【三一】依りて(Upādāya)。

【三二】攬る(Gṛhītvā)とは、觀待する(Apekṣya)義なり。

【三三】色等を離れて乳酪無し。

【三四】因る(Pratītya)とは、得る(Prāpya)といふ義なり。

犢子部問ふ　是の如く立てず。

論主徵す　所立に云何。

犢子部答ふ　〔二二五〕此れ世間の薪に〔二二六〕依りて、火を立つるが如し。

論主問ふ　如何ぞ、火を立てて、薪に依ると說く可き。

犢子部答ふ　謂はく、薪を離れて、火有りと立つ可きに非ず。而も薪と火とは異にも非ざれば、一にも非ず、若し火が薪に異ならば、薪は應に熱せざるべく、若し火と薪と一ならば、所燒卽ち能燒ならん。是の如く、蘊を離れて、補特伽羅を立てず。然るに補特伽羅と蘊とは、異と一とに非ず。〔二二七〕若し蘊と異ならば、體、應に是れ、常なるべく、若し蘊と一ならば、體、應に斷を成ずべし。

論主責す　仁、今此に於いて、應に且らく定說すべし。何者をか火と爲し、何者をか薪と爲す。我をして、火の薪に依る義を了知せしめよ。

犢子部答ふ　何の應に說くべき所ぞ。若し說かば、應に所燒は是れ薪、能燒は是れ火なりと言ふべし。

論主問ふ　此れ復た應に說くべし。何者か所燒、何者か能燒にして、薪と名け、火と名くるや。

犢子部答ふ　且らく、世、共に了ず。諸の炎熾にあらざる、所然の物を所燒の薪と名く。諸の光明有り、極

〔二二五〕我は火の如く、諸蘊は薪の如く、別なりと雖も亦離れずとなり。

〔二二六〕依りて(Upādāya)。

〔二二七〕若し云云。我の體若し蘊と異らば之れ有爲に攝すべからず、之れ無爲なるべし。然らば常なるべし。若し蘊と我と同一なりとすれば、諸蘊は滅するを以て我も滅するととなり、卽ち斷ずべしとなり。

熱炎熾なる能然の物を、能燒の火と名く。此れ能く彼の物の相續を燒然して、其の後後をして、前前に異ならしむるが故なり。此彼、倶なる（二八）八事を體と爲すと雖も、而も、薪も緣とするが故に、火方に生ずることを得。（二九）乳と酒と酪とを酢として、緣とを生ずるが如し。故に世、共に薪に依りて、火有りと說く。

論主破す（一）

若し此の理に依らば、火は則ち薪に異なり。後の火は、前の薪と、時各別なるが故なり。

論主破す（二）

若し汝が計する所の補特伽羅は、火の薪に依るが如く、諸蘊に依ると云はば、（三〇）則ち定んで應に、蘊を緣として生ず。體諸蘊に異なり、無常の性を成ずと說くべし。

論主破す（三）犢計を破す

若し卽ち炎熾なる木等に於いて、煖觸を火と名け、（三一）餘事を薪と名くと謂はば、是れ則ち、火と薪とは倶時にして起りて、異を成ずべし。體相異有るが故なり。應に依の義を說くべし。此れ既に倶に生ず。如何ぞ、薪に依りて火を立つと言ふ可き。謂はく、此の火、薪を用つて因を爲るに非ず。（三二）各、自因より、倶時に生ずるが故なり。亦た此の火の名、薪に

【二八】八事とは地水火風、色香味觸を云ふ。

【二九】前念の乳を緣として後念に酪を生じ、前念の酒を緣として後念に酢を生ずるが如く前念の薪を緣とするが故に、後念に火を生ずとなり。

【三〇】我は、火の薪の緣によりて生ずるが如く、蘊によりて生ずと云はば、ここに三事を生ずべし。卽ち一には我は蘊を緣として生ず、二には我の體は蘊に異れり、三には本無にして今有り、生滅に互り無常の性を成ずべし。然る時は汝の我は蘊に異なるに非ず、又無常に非ずと云ふに反す。

【三一】餘事とは先の八事の中煖觸を除ける他の七事なり。

【三二】此の火は薪を因として生ずるにあらず。薪は薪の因より生じ、火は火の因より生ず。各自の過去の同類因に從ひて倶時に生ずるなり。故に火は薪を因と爲して生ずるにあらずとなり。

因つて立つるに非ず、火の名を立つること、煖觸に因るを以ての故なり。

轉計を破す

若し、所說の、火は薪に依ると言ふは、倶生或は依止の義を顯はさんが爲めなりと謂はば、是れ則ち、應に補特伽羅、蘊と倶に生じ、或は蘊に依止すと許すべし。已に分明に（三三）體蘊と異なりと許す。理として則ち、應に若し諸蘊無ければ、補特伽羅の體も亦た有に非ず。薪有に非ざれば、火の體も亦無なるが如しと許すべし。而るに然ることを許さず。故に、釋すること理に非ず。

犢子部薪火不異を破す

然るは、彼れ此に於いて、自ら難を設けて言はく、若し火、薪に異らば薪、熱せざるべしと。

論主破す

彼れ應に定んで說くべし、熱の體は何を謂ふか。若し彼れ釋して、熱は謂はく、煖觸なりと言はば、則ち薪は熱に非ず、體相、異なるが故なり。若し復た釋して、熱は、謂はく、煖と合すと言はば、則ち、應に異體も亦た熱の名を得べし、實を以てするに、火の名は唯だ煖觸に目くれども。（三四）餘の煖を合するもの皆な熱の名を得べし。是れ則ち分明に、薪を熱と名くと許す。薪と火と異なると雖も、而も過成ぜず。如何ぞ、此の中に、擧げて以て難と爲す。

轉計を破す

若し木等の徧く炎熾せる時を、說きて名けて薪と爲し、亦た名けて火と爲すと謂はば、是れ則ち應

【三三】補特伽羅は蘊と倶生し、或は蘊に依止すと云はば、明かに我の體は蘊に異れることを許すこととなるべし。

【三四】餘とは煖觸以前の餘の七事なり。卽ち餘の色香味等も煖と合すれば、熱の名を得ることとなる。之れ分明に七事の薪を亦た名けて熱と爲すなり。

に說くべし、(一三五)依の義は何を謂ふか。補特伽羅と、色等の蘊と、定んで應に是れ一なるべし。理として能く遮すること無し。故に彼れが言ふ所の、薪に依りて火を立つるが如く、是の如く蘊に依りて、補特伽羅を立つべしと云ふは、進退推徵するに、理成立せず。

第二項　五法藏の說

又、彼れ若し、補特伽羅と蘊と、一異なること、俱に說く可からずと計せば、則ち彼れが許す所の三世無爲及び不可說の五種の(一三六)爾焰も、亦た應に不可說なるべし。補特伽羅は第五とも及び第五に非ずとも說く可からざるを以ての故なり。

【一三五】木等の遍く燃ゆる時を薪とも名け、火とも名く。火に異なるものの熱するに非ずと云はば、依の義は如何。火の自體が、火の自體に依ると云ふことあるべからず。

【一三六】爾焰(Jñeyam)。所知と譯す。舊に知母と云ふは不可也。犢子部には所知の法藏を立つるに總じて五種あり。卽ち過現未の三世を三となし、無爲を第四と爲し、不可說は第五なり。補特伽羅は此の不可說藏に攝む。彼の宗に我を立つるに、若し生死に在りては三世の五蘊と定んで一異と說く可からず、若し生死を捨して無餘涅槃に入る時は無爲と定んで一異と說く可からず故に此我を說きて第五の不可說法藏と爲す。若し爾らば、彼れ我と五蘊と若くは一、若くは異、俱に說く可からずと計すれば、則ち彼の所許の五種の所知も亦具に五種有りと說く可からざるべし。我と前の四法藏と異すべからざるを以てなり。故に第五法藏と爲ると說く可からず、前の四法藏と一と爲す可からざるを以ての故に、第五にあらずと爲すと說く可からず。第五に非ずとは、卽ち是れ第四法藏也。旣に第五と第五に非ざると俱に說く可からず、俱に前の四法藏を建立すべし、別に第五法藏を立つ可からず。

倘ほ五法藏に付きては成實論三(十三左)に說きて曰はく、論者言はく、犢子道人說きて我有りとす、餘者說きて無とす、乃至實に我法無し、所以は何ん。衆經中の如し。佛比丘に語りて但名字を以てし、但

第三項　〔一三七〕所託の說

又、彼の施設せる補特伽羅を應に更に確陳すべし、何の所託と爲すかと。若し蘊に託すと言はば、假の義已に成ず、施設せる補特伽羅に託せざるを以ての故なり。若し此の施設せるものは、補特伽羅に託すと言はば、如何ぞ、上に諸蘊に依りて立つと言ふや。理として則ち「上に」但だ補特伽羅に依ると說くべし。既に然りと許さず、故に〔一三八〕唯だ蘊に託す。

救を破す

〔一三九〕若し蘊有らば。此れ則ち知る可し。故に我れ上に、此れは蘊に依りて立つと言ふと謂はば、是れ則ち〔一四〇〕諸の色は、眼等の緣有りて、方に了知す可し。故に「諸の色は」、眼等に依ると言ふべし。

假りに施設す、但用有るを以ての故に、名けて我と爲す。但名聞等を以ての故に知る眞實無しと云云。同(十九丁右)又汝法中可知の法を說くは、謂はく五法藏なり。過去未來現在無爲及び不可說なり。我は第五法中に在り、則ち四法に異なり、汝四法に異らしめんと欲して、第五に非ずとす。是れ則ち若し我有りと言はば、此等の過有るべからず云云。智度論一(十三右)、唯識疏一末(二右)、成實論二(二十左)十住毘婆沙論九(十四丁)等を見る可し。

【一三七】前段依に約して破するは其の存在の仕方より破するなり、いま所託に約して破するは、我を立つる根據より破するなり。

【一三八】唯だ蘊に託するものならば、假の義已に成ずること、前述の如し。

【一三九】蘊有らば、能く我を知り得るが故に、我を知らしむる意味に於て、我は蘊に依ると云ふ意ならばとなり。

【一四〇】諸色は眼根空明等の緣有りて初めて知ることを得、故に汝の救釋の如くんば、色は眼等に依りて立つと云ふ可し。爾るに汝は色は眼根等に依ると說かず、故に此の救釋は成らず。

問ふ　又、且らく應に說くべし。補特伽羅は、是れ六識の中に、何の識の所藏なるか。

答ふ　〔四一〕六識の所識なり。

徴す　所以は何ん。

釋す　若し一時に於いて、眼識色を識る。茲に因りて、補特伽羅有ることを知る。此れを說いて、名けて眼識所識と爲す。〔四二〕而も色と一なり異なりと說く可からず。乃至、一時、意識、法を識る。茲に因りて、補特伽羅有ることを知る。此れを說いて、名けて意識の所識と爲す。而も法と一なり異なりと說く可からず。

論主例して破す　若し爾らば、所計の補特伽羅は、應に乳等に同じく、唯だ假の施設なるべし。謂はく、眼識の諸色を識る時の如き、此れに因りて、若し能く乳等有ることを知らば、便ち乳等は眼識の所識なりと說く、而も色と一なり異なりと說く可からず。乃至身識の諸觸を識る時に、此れに因りて、若し能く乳等有ることを知らば、便ち乳等は身識の所識なりと說く、而も觸と一なり異なりと說く可からず。〔四三〕乳等は四と成り、或は、四の所成に非ざること勿

〔四一〕眼耳鼻舌身意の六識の所識なり。

〔四二〕色相なきが故に、色と一なりと說く可からず、又不可說なるが故に、色と異なりとも說く可からず。

〔四三〕若し乳等と色香味觸と一なりと云はば、乳等は色等と成ると云ふ失あり。若し色等と異なりと云はば、乳等は色等の所成に非ざるべし。

れ。此れに由りて、應に總じて諸蘊に依りて、假りに施設して、補特伽羅有ることを成ずべし。猶ほ世間の總じて、色等に依りて、乳等を施設し、是れ(一四四)假にして實に非ざるが如し。

牒して破す

又、彼の說く所の、若し一時に於いて、眼識色を識る。玆に因りて、補特伽羅有ることを知るは、此の言何の義なるか。諸色は是れ補特伽羅を了ずる因なりと說くと爲んや、色を了ずる時に、補特伽羅も亦た了ず可しと爲んや。

若し諸色は是れ此れを了ずる因なり。然れども、此れ色に異なりと言ふ可からずと說かば、是れ則ち諸色は、眼と及び明と作意等との緣を以て、了因と爲すが故に、(一四五)應に色眼等に異なりと說く可からざるべし。

若し色を了ずる時に、此れも亦た了ず可しと云はば、(一四六)色の能了卽ち此れを了ずと爲んや、此の中に於いて、別に能了有りとせんや。

若し色の能了卽ち能く此れを了せば、(一四七)則ち應に此の體卽ち是れ色なり。或は、唯だ色に於

【一四四】光記三十卷(八丁左)によれば、假を說くに成實論の文を引用す。文に曰く、若し成實論に依らば總じて四假有り。一に相續假なり。身語業色聲を以て成ずるが如し。一念の色聲は身語業を成ぜず、要らず色聲相續して、方に身語業を成ず。二に相待假なり。是の如き長短等相待するが故に立つ。三に緣成假なり。五蘊を攬りて人を成じ、四境を攬りて乳等を成ずるが如し。四に因生假なり、一切の有爲法は因より生ずる所なり、皆無性なり云云。今此の文の中に緣成假を以て例して緣成假を破す云云。

【一四五】諸色は眼等の緣を以て了因となすが故に色は眼等に異りと說く可からず、然らば花を見れば、花と眼とは異なると云ふ可からずと云ふ可きなり。之れ道理にあらず。

【一四六】色の能了とは色を了ずる能了の眼識なり。

【一四七】眼識に了せらるるは是れ色なるを以て、此の眼識所了の我は是れ色なりとすべし。或は色に非ずと云はば、色に於て假立せるものとすべし。

救を牒して破す

いて、此れを假立すと許すべし。或は、應に是の如く、是の如きの類は是れ色なり、是の如きの類は是れ此なりと分別すると有る可からず。

若し是の如きの（二四八）二種の分別無くんば、如何ぞ、色有り、補特伽羅有りと立つるや。（二四九）有性は必ず分別に由りて立つるが故に。

若し此の中に於いて、別に能了有らば、（二五〇）了ずる時別なるが故に、此れ應に色に異なるべし（二五一）黄は青に異なり、前の後に異なる等の如し。

（二五二）乃至、法に於いて、徵難することも、亦た然なり。

若し彼れ救して、此れと色との如き、定んで是れ一なり、是れ異なりと說く可からず。（二五三）二種の能了を相望するも、亦た然なりと言はば、能了は應に是れ（二五四）有爲の攝なるべからず。若し爾りと許さば、便ち（二五五）自宗を壞す。

或は了ぜらるる物は一なるが故に、是は色、是は我と云ふ區別ある可からず。

【二四八】是は色なり、是は我なりと云ふ二種。

【二四九】有性。實體有る法なり。即ち實體ある法は、現量比量の分別によりて、立つるものなり、現量比量にて分別せざれば、實體の有無は判ずべからず。

【二五〇】色を了する眼識と我を了する眼識とは二心並び起らざるを以って、時を異にして起るべし、故に我は色に異なるべし。

【二五一】黄と青とは別別に了ずべし、黄を了する時は青は了ぜず。

【二五二】耳識乃至意識が法を知るは、我のあることを知る所以なりと云ふ義を徵難するも、又眼の如く然り。即ち前の、「又彼は說く所の、若し一時に於て」以下云云の文を聲香味觸法の五境に就て、一一配釋すべしとなり。

【二五三】我の能了と色の能了とを相望するも亦爾り、一異と說くべからず。色の能了即ち我の能了も說かれず、色の能了の外に我の能了ありとも說くべからず。

【二五四】能了は我と同じく不可說なるが故に、我の如く有爲法とすべからず。

【二五五】唯た我のみ不可說なりと云ふ宗義を壞す。

第二節　教證的批判

第一經無我經に違する失

又、若し實に補特伽羅有り、而も色なり、非色なりと説く可からずと云はば、世尊、何の故に是の如きの言を作せるか。(一五六)「色乃至識皆な我有ること無し」と。

第二經眼識の所得を破す

又、彼れ既に補特伽羅は眼識所得なりと許す。是の如きの眼識は、色と此と倶とに於いて、何を縁じて起ると爲んや。

(一五七)若し色を縁じて起ると云はば、則ち應に眼識能く補特伽羅を了ずと説くべからず。此れ眼識の縁に非ず、聲處等の如くなるが故なり。

若し識有り、此の境を縁じて起る。卽ち此の境を用つて、所縁縁と爲さば、補特伽羅は、眼識の縁に非ずと謂はば、如何ぞ、(一五八)説いて眼識が所縁と爲す可き。(一五九)此れに由りて、定んで眼識の所了に非ず。

若し眼識起りて、(一六〇)此れ或は倶を縁ずと云は

【一五六】己に「我有ること無し」と明言するを以て、我は唯だ可説なり、不可説に非ずとなり。雜含經十卷七丁右(辰二、五四右)に曰く、受想行識は無常なり、一切行無常なり、一切法無我なり云云。雜含經一(十五右)辰二(四左)に曰く、云何が見る、我は此識身及び外境界一切相能く我我所見我慢をして繫著せしむるを有ることなからしむ云云。增一含經十(七左)昃一(四十右)に曰く、若し比丘有り、一切諸法空無所有亦無所著を解知し、一切諸法を盡解して所有無しと了す云云。

【一五七】若し色を縁じて起ると云はば、眼識は我を縁ず・は云ふを得ず。眼識は色を縁じて聲を縁ぜず、されば聲は眼識の所縁にあらざるべし。

【一五八】如何ぞ前に我を眼識の所縁と爲すと説くや。

【一五九】若し眼識の所縁にあらずんば、眼識の所了にあらざるべし。

【一六〇】此れ或は倶を縁ずとは眼識起る時、此の我を縁じて起り、或は色と我との二を縁じ

ば、便ち經說に違しぬ、【一六一】契經の中に、定んで「識起るは二緣に由る」と判ずるを以つての故なり。

第三經を引きて證す

又、【一六二】契經に說く、「苾芻、當に知るべし、眼は因、色は緣にして能く眼識を生ず。諸の所有の眼識は、皆眼と色とを緣とするが故に」と。

第四經因緣無常の難

又、【一六三】若し爾らば、補特伽羅は應に是れ無常なるべし。契經に說けるが故に。謂はく、【一六四】契經に說く、「諸の因、諸の緣、能く識を生ずる者は、皆無常の性なり」と。若し彼れ遂に補特伽羅は、識の所緣に非ずと謂はば、應に所識に非ざるべし。若し所識に非ずんば、所知に非ざるべし。若し所知に非ずんば、如何ぞ、有と立てん。若し有と立てずんば、便ち自宗を壞す。

第五經六識の所識を破す

又、若し【一六五】六識の所識爲りと許さば、眼識の識るが故に、應に聲等に異るべし。猶は色の如し。

て起るとの意なり。

【一六一】契經とは雜含八（十八左）辰二（四十四右）に曰く、二因緣有り識を生ずと云へり。若し、此れ即ち我を緣じて、識起れば、眼識は色と根とに由りて起ると云ふに違す。若し倶を緣じて、識起れば、眼識は、色と我と根との三に由りて起ると云ふことになり、亦た二緣に由ると云ふ經說に違す。

【一六二】契經とは增阿含九（六丁右）辰一（四十七右）に曰く、佛比丘に告ぐらく、眼は色を緣ずるに因りて眼識生ず。所以は何ん。若し眼識生ずるは一切眼と色と因緣となるが故に云云と云へり。

【一六三】若し我が緣となりて眼識を生ぜばの意。

【一六四】雜含經一（五丁）辰二（二右）に曰く、若くは因、若くは緣、諸識を生ずる者は彼れも亦常なり云云。

【一六五】六識の各別所緣に關して、婆沙論には譬喩師即ち經部の說を擧げたり。即ち婆沙論八十七（五丁左）に曰く、譬喩者是の如き說を爲す、眼等の六識身は所緣の境各別也。彼れ說く意識は別に所緣なり。眼等の五識の所緣を緣ぜず。又說く六識は唯外境を緣す、內根を緣ぜず、亦た識を緣ぜず。彼の意を顯ぜんが爲めに前五識を顯はす、各別所緣なり。唯外境を緣す、根識を緣ぜず、意識所緣は五識と境は同有り異有り、亦た內根を緣じ亦た諸識を緣す云云。

耳識の識るが故なり。應に色等に異るべし。譬へば聲の如し。餘の識の所識も難を爲すこと此れに準ずべし。

理に違する失を擧ぐ

又、此れを立てて、六識の所識と爲さば、便ち經說に違す、(一六六)契經に言ふが如し。「梵志、當に知るべし。五根の行處と境界と各別なり。各唯だ自の(一六七)所行の處、及び自の境界を受用す。異根も亦た能く異根の行處と及び異の境界を受用すること有るに非ず」と。五根は、謂はく、眼耳鼻舌身なり。(一六八)意は兼ねて五根の行處及び彼の境界を受用す。彼れ意に依るが故なり。

經に違する失を擧ぐ

或は、(一六九)補特伽羅は是れ五根の境なりと執すべからず。是の如く、便ち五識の所識に非ざるとき、違宗の過有り。

宗に異する失を擧ぐ

若し爾らば、意根の境も亦應に別なるべし、

犢子部の難

(一七〇)六生喩契經の中に言ふが如し。「是の如く六根の行處と、境界と各差別有り。各別に自所行の處及び自境界を(一七一)樂求す」と。

論主の通釋

此の中、眼等の六根を說くに非ず。眼等の五

【一六六】中阿含經五十八（十二丁）昃七（八十六右）に曰く五根異行異境界也。各自ら境界を受く、眼根耳鼻舌身根、此五根異行異境界也、各各自境界を受く、意は彼の爲に境界を盡受す、意は彼の依と爲る云云。

【一六七】所行の處（Gocara）とは五識の活動する範圍なり。

【一六八】五根は五識の別依、意は五識の總依なる故に、五根と意根との作用の通局を示す。

【一六九】經を標準として、我は五根の境界に非ずと云ふ時、經に違する失を免かると雖も、我は五識の所識に非ざるを以て、汝の我は五識の所識と云ふに反すべし。

【一七〇】雜含經第四三（辰四、四八丁左）に曰く、是の如く六根種種境界各自ら所業の境界を求む、餘の境界を樂まず云云。

【一七一】經文には已に前五根のみならず、第六意根も各別の所行處と境界とありと云ふ。されど意は單に法境を緣するのみならず、前五根の對境をも緣ず。此に例して前五根も、自所行處、自境界を受用すと說く經文ありと雖も、亦た餘

第六經所達知の經に達する失

根及び所生の識は、【一七二】勢力の見んと樂ふ等有ること無きが故なり。【一七三】但だ眼等の增上の勢力に引かれたる意識を說いて、眼等の根と名く。【一七四】獨行の意根の增上の勢力に引かれたる意識は、眼等の五根所行の境界を樂求すること能はず。故に、此の經の義、前に達するの失無し。

又、【一七五】世尊の說く、苾芻當に知るべし。吾れ今も汝の爲めに具足して、一切の所達所知の法門を演說すべし。其の體、是れ何ぞ。謂はく、諸の眼色と眼識と眼觸となり。眼觸を緣と爲る內の所生の受は、或は樂、或は苦と不苦不樂と、廣說し、乃至、意觸を緣と爲る內の所生の受は、或は樂と、或は苦と不苦不樂となり、是れを一切の所達所知と名くと。

此の經の文に出りて、一切の【一七六】所達所知の

緣することありと許すべしとのなり意。

【一七二】五根は色を自性とし、五識は無分別なるが故に、何れも見る等の樂ひあることなし。

【一七三】眼等の門に由りて、眼識等の生ずること無んば、分別する性ある意識の生じ得る理なし。故に眼等の根に由りて眼等の識を生じ、此より引いて意識を生ず、今は其の意識を根と名づけたるのみ。

【一七四】眼等の根の勢力に引起せられたる意識に非ずして、唯だ法境のみを緣じて起りたる意根の勢力に引かれたる意識は、唯だ法境のみを緣ず、六生喩經は此の點より、意根は自境(法境)を樂求すと說けるものなれば、前經と相違するに非ず。

【一七五】雜含八(廿一左) 辰二(四五丁右)に曰く、云何が一切法、一切識法なる。諸比丘眼は是れ知法識法なり。若し色眼識眼觸と、眼觸因緣受生すれば內に覺す。若くは苦、若くは樂、若くは不苦不樂なり、彼の一切是れ知法識法なり、耳鼻舌身意亦復た是の如し云云。

【一七六】所達所知とは、所達とは無間道なり、所知とは解脫道なり。或は所達とは慧の所達なり、所知とは智の所知なり。皆な是れ智慧の所達所知の法にして眼目の異名なり。此の經に所達所知を說くに、唯[illegible]所のみありて我體有ること無し、故に我體は亦た所[illegible]にあらず、達と智とは共に[illegible]にして[illegible]に非ざれども、[illegible]・[illegible]とは必ず同一境を緣ず。

法を決判するに、唯だ爾所のみ有り。此の中に、補特伽羅有ること無し。故に、補特伽羅も亦た所識に非ざるべし。慧と識との境は必ず同なるを以ての故なり。

第七經假各說を以て惡見を破す

諸の「眼、補特伽羅を見る」と謂ふは、應に知るべし。眼根（一七七）此の所有を見るなり。非我を見るに於て、我を見ると謂ふが故に、彼れ便ち惡見の深坑に顚墜す。故に佛、經の中に、自ら此の義を決す。謂はく、唯だ諸蘊に於いて補特伽羅を說く。（一七八）人契經に是の如き說を作すが如し。「眼及び色を緣と爲して眼識を生ず。三和合の觸と倶に受想思を起す。中に於いて、後の四は是れ無色の蘊なり、初めの眼及び色を名けて色蘊と爲す。唯だ此の量に由りて、說いて名けて人と爲す。卽ち此の中に於いて、義の差別に隨ひて、名想を假立して、或は、（一七九）有情、不悅、意生、儒童、養者、命者、生者、補特伽羅

【一七七】此の所有とは此の所有の色なり。

【一七八】雜含經十三（四丁左 辰二（七一右）に曰く、眼色を緣じて眼識を生ず、三事和合して觸す。觸と倶に受想思を生ず。此の四は無色陰なり、眼と色と此等の法名けて人と爲す。斯等の法に於て人想を作して衆生、那羅摩㝹闍摩那婆士其福伽羅、耆婆禪頭とす。又是の如く說く、我が眼色を見、乃至我が意法を識る。彼れ施設して又是の如く言說す。是れ尊者、如是の名、如是の生、如是の姓、如是の食、如是の受苦樂、如是の長壽、如是久住、如是壽分齊し、是れ則ち想と爲す。是れ則ち誌と爲す、是れ則ち言說す、此の諸法皆な悉く無常有爲思願緣生なり云云。

【一七九】有情（Sattva）とは情識を有するものと云ふ意なり。不悅（Nara）とは原語の俗的解釋なり。正しくは「人」と云ふ義なり。意生（Manu-jo）とは意に從ひて生を受くるが故に名く。儒童（Manavaka）とは儒は美好の義なり善子といふ義なり。養者（Posa）とは能食者の義。命者（Jiva）は能く活かす者の義なり。生者（Jantu）は能生者の義なり。

此等の異名に關しては瑜伽論八十三（十六右）及び樞要上本

第八經無我を顯はし實我を破す

と謂ふ。亦た自ら稱して、我が眼、色を見ると言ふ。復た世俗に隨ひて、此の具壽、是の如き名、是の如き種族、是の如き姓類、是の如き飲食、是の如き受樂、是の如き受苦、是の如き長壽、是の如き久住、是の如き壽際を有すと說く。苾芻、當に知るべし。此れ唯だ名想なり。此れ唯だ自稱なり。但だ世俗に隨ひて、假りに有を施設す。是の如きの一切の無常有爲は、衆緣より生じて、思の所造に由る。」と。世尊、恆に勅して、了義經に依らしむ。此の經は了義なり、異釋すべからず。

又、(一八〇)薄伽梵、梵志に告げて言はく、我れ說く、(一八一)「一切の有は唯だ是れ十二處なり」と。若し(一八二)數取趣是れ處の攝に非ざる時は、無體の理成ず、若し是れ處の攝なるときは、則ち是れ不可說なりと言ふ可からず。

第九經有體を破す

彼の部の所誦の(一八三)契經に亦た言はく、諸の所有の眼、諸の所有の色、廣說す。乃至、苾芻、當に知るべし。如來此に齊りて、一切を施設し、一切の自體有る法を建立す。此の中、補特伽羅有ること無し。如何ぞ、此れ實體有りと說く可き。

(四十六左)等に出づ。

【一八〇】薄伽梵(Bhagavān)。尊敬せらるべきものと云へる意味にして佛の尊稱なり、世尊又は聖者の意なり。

【一八一】雜阿含經十三(十二丁右)辰二(七四右)に曰く、一切とは謂はく十二入處なり。眼色耳聲鼻香舌味身觸意法、是れを名けて一切とす云云。

【一八二】數取趣とは、補特伽羅の譯語。

【一八三】雜阿含第十三(十六丁右)辰二(七四右)に曰く、若し復說きて此れ非一切法と言はば沙門瞿曇所說の一切は、我今捨てて餘の一切を立てんとは彼れは但言說有るのみ云云。

第十經假名を我と執するを顯はす

（一八四）頻毘娑羅契經に亦た說く、諸の愚昧無聞の異生、假名に隨逐して、計して我と爲す者有り、此の中、我我所の性有ること無し。唯だ一切衆苦の法體のみ有りて、（一八五）將と正と已とに生ず。乃至、廣說す。

第十一經妄に我を執するを顯はす

阿羅漢の苾芻尼有り（一八六）世羅と名く、魔王の爲めに說く。（一八七）汝、惡見趣に墮して、空行聚の中に於いて、妄に有情有りと執す。智者は有に非ずと達す。卽ち衆分を攬りて、假想して、立てて車と爲すが如し。世俗に有情を立つ。應に知るべし。諸蘊を攬ることをと。

第十二經我の無體を顯はす

世尊、（一八八）雜阿笈摩の中に於いて、婆羅門婆柁梨の爲めに說く。婆柁梨よ、諦かに聽け、能く諸の結を解く法を。謂はく、心に依るが故に、染なり。亦た、心に依るが故に、淨なり、我は實に我の性無し。顚倒の故に、有と執す。有情無く、我無し、唯だ有因の法のみ有り。謂はく（一八九）十二有支所攝の（一九〇）蘊處界なり。審かに此の

【一八四】中阿含經頻鞞娑邏王迎佛經（昃五、七七右）に曰く、愚癡凡夫所聞するをあらず、我是れ我なりと見て我に著す、但我無く我所無し、空我、空我所なり。法生すれば則ち生じ、法滅すれば則ち滅す、皆因緣に由る云云。

【一八五】將とは將來卽ち未來。正とは現在。已とは過去なり。

【一八六】世羅（Selā）は雜含四十五（辰四、六左）には尸羅、巴利文には（雜五の九參照）Celaに作る。

【一八七】雜含經第四五（六丁左）辰四（六〇左）に曰く、汝衆生有りと謂ふ。此れ則ち惡魔の見なり。唯だ空陰聚有り、是れ衆生なるもの無きなり。衆材の和合して、世之れを名けて、車と爲せるが如し。諸陰因緣合して、假りに名けて衆生と爲す。其れ生ずれば、則ち苦生ず。住も亦た卽ち苦住なり、餘法の生苦無ければ、苦生ずるも苦自ら滅す、一切の愛苦を捨し、一切の闇黑を離れ已に寂靜を證し。諸の漏盡に安住す。已に汝惡魔を知る、則ち自ら消滅して去れ云云。

【一八八】別譯雜阿含經の文なりと傳ふれども、現存せる本に是

一切を思ふに、補特伽羅無し。既に内に是れ空なりと觀ず。外の空を觀ずることも、亦た爾なり。能く空觀を修する者も、亦た都て得可からず(一九一)。

第十三經我執の五失を擧ぐ
犢子部非す

經に說く、我を執するに五種の失有り。謂はく、(一)我見及び有情見を起して、惡見趣に墮す(二)諸の外道に同じ、(三)(一九二)路を越えて行く、(四)(一九三)空性の中に於いて、心、悟入せず、(一九四)淨信なること能はず、安住すること能はず、解脫を得ず、(五)聖法、彼れに於いて、淸淨なること能はずと。

第三節　對決批判

犢子部答ふ

此れ皆な量に非ず。

論主責む

所以は何。

犢子部答ふ

我が部の中に於いて、曾て誦せざるが故なり。

論主徵す

汝が宗に是れ(一九五)量なりと許すは、部と爲んや、佛言と爲んや。若し部是れ量ならば、佛は汝の師

の如き頌文を見す。

【一八九】十二有支とは十二因緣のことなり、即ち無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死なり。

【一九〇】蘊處界とは五蘊十二處十八界なり。

【一九一】引文中正しく證とする所は第七句、第十二句、第十五句、第十六句是なり。

【一九二】涅槃の正路を越えて邪路を行す。

【一九三】空性とは五蘊の中に我なきをいふ、我を執するものは空性を悟り得す。

【一九四】空性を信ずる能はす。

【一九五】量(Pramāṇa)とは標準、憑據、權威の義なり。

犢子部答ふ　に非ざるべし、汝は釋子に非ず。若し佛言ならば、此れ皆な佛言なり。如何ぞ、非量ならん。

論主非す　彼れが謂はく、此の說は皆な〔一九六〕眞の佛言に非ずと。

犢子部答ふ　所以は何。

論主徵す　我か部に誦せざるが故なり。

犢子部問ふ　此れ極めて理に非ず。

論主答ふ　理に非ずとは何ん。

是の如きの經文は、〔一九七〕諸部皆な誦して、〔一九八〕法性及び餘の契經に違せず。而るに敢て、中に於いて、輙く非撥を興して、我れ誦せざるが故に、眞の佛言に非ずと云ふ。唯だ縱に凶狂す、故に極めて理に非ず。

論主彼の部の經に就いて徵破す　又、彼の部に於いて、豈に此の〔一九九〕經の「一切の法は皆な我性に非ず」と謂ふこと無からんや。

徵破す　若し彼れが意に、補特伽羅は所依の法と一ならず、異ならず、故に一切の法は皆な我に非ずと說くと謂はば、既に爾らば、應に意識の所識に非ざるべし。〔二〇〇〕二緣識を生ずることは經に決判するが故なり。

論主經を擧げて徵責す　又、餘經に於いて、如何が會釋する。謂はく、〔二〇一〕契經に、說く、「非我

【一九六】此等の經は後人の增廣せる所のものなりとの意。

【一九七】銅葉部（Tāmraparṇīya-nikāya)等。

【一九八】緣起の法性（Pratītyasamutpāda-dharmatā)。

【一九九】雜阿含經第十（七丁)辰二（五十四右)に曰く、一切行は無常なり一切法は無我なり。

【二〇〇】眼と色乃至意と法との二緣によりて識を生ずと經に說けり。若し我識を生ぜば識は三緣より生ずべし。

【二〇一】雜阿含經二(十四右)(辰二、九丁右)に曰く、色に於て是れ我我所として取る、取り已りて彼の色若しは變若しは異、心に隨ひて變異す。心に隨ひて變異するが故に則ち心住を攝受す。乃至、受想行識亦復

を我と計すれば、此の中、具さに想と心と見との倒有りと。

犢子部答ふ

我を計して、倒を成ずとは、非我に於いてするを說くなり。我に於いてするを言ふにはあらず。何ぞ煩はしく會釋せん。

論主問ふ

非我とは何ぞ。

犢子部答ふ

謂はく、蘊處界なり。

論主前説に違する過を出す

便ち前に補特伽羅と色等の蘊と一ならず、異ならずと說けるに違す。

經に違する過を出す(一)

又、〔二〇二〕餘經に說く、苾芻、當に知るべし。一切の沙門、婆羅門等の、諸有の我を執するものは、一切を等隨觀見するに、唯だ五取蘊に於いて起すと。故に、我に依りて、我見を起すこと無し。但だ非我の法に於いて、妄に分別して我と爲す。

經に違する過を出す(二)

又、〔二〇三〕餘の經に言はく、諸有の〔二〇四〕已憶正憶當憶の種との宿住は、一切、唯だ五取蘊に於いて起ると。故に、定んで補特伽羅有ること無し。

第四節　犢子部に對する辯明

第一項　我過去に於いて色有り等と云ふ難を辨す

是の如し云云。

〔二〇二〕雜阿含經第二(十五右)辰二(九右)に曰く、若し諸の沙門婆羅門、我有りとする者を見るに、一切皆な此の五受際に於いて我を見ると云云。

〔二〇三〕雜阿含經第二(十五丁左)(辰二、九右)に曰く、若し沙門婆羅門宿命智を以て自ら種種の宿命を識る、已識當識今識皆此の五受際に於てす。

〔二〇四〕已憶正憶當憶とは過、現、未の三世の記憶を云ふ。

犢子經を引きて難ず

若し爾らば、何に緣りてか、此の（二〇五）經に、復た「我れ過去世に於いて、是の如きの色を有す等」と說くや。

論主經を通ず

此の經は能く宿生の一相續の中に、種種の事有ることを憶するを顯はさんが爲めなり。若し實に補特伽羅有りて、過去世に於いて、能く色を有す等と見ば、如何ぞ、身見を起す失に墮するに非ざらん。

救を擧げて辯ず

或は、（二〇六）應に非撥して、此の經無しと言ふべし。是の故に、此の經は（二〇七）總の假我に依りて色を有す等と言へり。（二〇八）聚の如く、流の如し。

犢子部難ず

若し爾らば、世尊は一切智に非ざるべし。（二〇九）心心所は、能く一切の法を知ること無し。剎那剎那に異の生滅あるが故なり。（二一〇）若し、我有りと許さば、能く徧く知る可し。

論主難を通ず

補特伽羅は則ち應に常住なるべし。心滅する時、此れ滅せずと許すが故なり。是の如くならば、便

【二〇五】雜阿含經第二（十五丁右）（辰二、九丁右）に曰く、我れ過去に經る所、是の如き色、是の如き受、是の如き想、是の如き行、是の如き識あり。

【二〇六】經に我と云ふ語あるを以て有身見を起す失あるを以て汝は此の經典無しと言はん。

【二〇七】有身に二十種ありとの說あり。謂く色は我なり、我は色を有す、色は我に屬す、色中に我あり、乃至識に就ても亦是の如し。今は此等の個別の法につきての我に非ずして五蘊の總體につき、其假我に依つて我の言を立てて、此が色を有す等と言へり。

【二〇八】我は穀聚の如く因緣和合して生じたる假法なり、故に體一にあらず。又暴流の如く相續假なり、常住にあらず。

【二〇九】心心所が一切法を知るといふことなかるべし、剎那剎那に前念が滅し後念が生じて、剎那に異れる心が生滅す。彼の法を知るは前念の心が知り此の法を知るは後念の心が知る、一の心心所にして遍く一切法を知ることなし。

【二一〇】若し我有りと許さば、我は常住にして生滅に涉らず、遍く一切法を知る。

ち　(三一)汝が所許の宗に越ゆ。我等は、佛は一切に於いて、能く頓に徧く知るが故に、一切智者と名くとは言はず。但だ　(三二)相續して、堪能有るに約するが故なり。謂はく、佛の名を得ることは、諸蘊の相續に、是の如きの殊勝の堪能を成就して、纔かに作意する時、知らんと欲する所の境に於いて、(三三)無倒の智起る、故に一切智と名く、一念に於いて、能く頓に徧く知るに非ず。故に此の中に於いて、是の如き頌有り。

(三四)相續、能有るに由る。火の一切を食するが如し。
是の如く、一切智は、頓に徧く知るに由るに非ず。

【三一】我は常とも說く可からず、非常とも說く可からず、我は不可說なりといふ汝の宗に違ふ可しとの意なり。

【三二】一切智といふは只だ佛の前後相續の依身に多時に渡りて、勝れたる堪能ありて如何なることをも能く知ることに約して一切智といふ。

【三三】婆沙論九(十八丁左)に曰く、頗し一智有りて一切法を知るや。答ふ、有り。謂はく、世俗智、乃至此の智初刹那の頃、其の自性相應俱有を除きて餘は悉く能く知る。雜心論(八初右)に曰く、一切を知るが故に一切智と說く。一切とは謂はく十二入なり。彼の自相共相に於いて、一切悉く知る。宗輪疏上(四九右)に曰く、此れ佛慧一刹那の時、心と相應す、亦能く諸法を知解す、皆な盡くすことを明す、圓滿惡の故に云云。斯の如く諸論一切智を說くと雖も一刹那に一切を知るの意に非ず、但し此宗輪論は大衆部等の一刹那の心相應の智、一切法を知ると云へる意を明せり。

【三四】相續の依身に一切法を知る堪能有るを一切智と名く。例せば火の一切を食す、即ち燒くと云ふは頓に一切を燒くに非ざれども、漸次に燒き盡す種あるよりて、一切を食すと云ふが如し。

頌の舊譯

由㆓相續有㆑能、稱㆔火食㆓一切㆒、
說㆓徧知㆒亦然、不㆑由㆓俱悉解㆒。

犢子部問ふ　如何ぞ、相續に約して、一切の法を知ると說いて、我の徧知に非ずと云ふことを知るを得ん。

論主答ふ　佛、世尊に三世有りと說くが故なり。

犢子部問ふ　何れの處に於いて說けるか。

論主答ふ　〔三五〕有る頌に言ふが如し。

若くは過去の諸佛、　若くは未來の諸佛、
若くは現在の諸佛、　皆な衆生の憂を滅す。

汝が宗は、唯だ蘊に三世有り、數取趣には非ずと許す。故に、定んで、〔三六〕應に爾るべし。

【三五】雜阿含經第四(廿左)(辰二、二十三丁右)に曰く、佛過去世を見る、是の如く未來を見る、亦た現在世を見る、一切行起滅す。乃至、是の故に名けて佛と爲す、乃至、等覺の故に佛と名く。

頌の舊譯
是過去諸佛、是未來諸佛、
是現在世佛、能除衆生憂。

【三六】若し我が遍知するならば佛に三世ある可からず。佛に三世あるを以て、一切を遍知するは、三世の蘊の相續にあることを知るべし。

巻の第三十（破執我品第九の二）

本論第九　破執我品第二

第二項　能荷者の難を辨ず

犢子部經を引きて難ず

若し唯五取蘊を補特伽羅と名けば、何故ぞ世尊是の如き説を作す、（一）「吾れ今汝の爲に、諸の重擔と重擔とを取捨し、重擔を荷ふ者とを説かん」と。

論主反徴す

何に縁りてか、此に於いて、佛説くべからざらん。

犢子部答ふ

重擔をば即ち能荷と名づくべからず。所以は何ん。曾て未だ見ざる故なり。

論主未だ見ずと云ふ因故を難ず

（二）不可説の事も、亦た説くべからず。所以は何ん（亦た未だ見ざるが故なり）。又、重擔を取ることは、應に蘊の攝に非ざるべし。重擔自ら取ることは、曾て未だ見ざるが故なり。

正しく釋す

然るに經に、愛を説きて、「取擔者」と名く。既に即ち蘊の攝なり、荷者も應に然るべし。即ち諸蘊に於いて、數取趣を立つ。然るに、此の補特伽羅は、是れ不可説の常住實有なりと謂はんことを恐る

【一】雜阿含經第三（十四右）（辰二、十五左）に曰く、我れ今當に説くべし。重擔と取擔と捨擔と擔者となり。云云重擔（Bhāra）とは五取蘊なり。五取蘊は有情を苦しむるものなるが故に此の名あり。

【二】犢子部にては我を不可説といふ。此の不可説なる物は見る可からざるが故に、亦た説くべからず。

るが故に、此の經の後に、佛自ら釋して言はく、但だ世俗に隨ひて、此の具壽是の如きの名有りと說くと。乃至廣說す。上に引ける所の人經の文句の如し。此の補特伽羅は可說無常にして、實有の性に非ざることを了ぜしめんが爲めなり。即ち五取蘊自ら相逼害するに、重擔の名を得。(三)前前の刹那、後後を引くが故に、名けて荷者と爲す。故に、實に補特伽羅有るに非ず。

第三項　化生を撥無する難を辨ず

犢子部經を引きて難ず

補特伽羅は定んで應に實有なるべし。(四)契經に、「諸の化生の有情を撥無すること有るは邪見の說なり」と說くを以ての故なり。

論主難を通ず

誰か化生の有情有ること無しと言ふ。佛の所言の如く、我れ有りと說くが故に。謂はく、蘊相續して能く後世に往いて、(五)胎卵濕に由らざるを化生の有情と名く。此を撥して無と爲す、故に邪見の攝なり。化生の諸蘊は、理實に有るが故なり。

復た徵す

又、(六)此の邪見、補特伽羅を謗ずと許さば、

【三】五蘊の念念生滅する中、前念が因となりて後念の果を取るを名けて、能荷者と云ふなり。

【四】契經とは、本事經なり。化生に關して婆沙論百九十八(一左)に曰く、此世無く他世無く化生有情無し、此れ因を謗する邪見なり、乃至化生有情無しとは諸の外道有り、是の如き說を爲す、諸の有情生は皆因は現在精血等の事なり緣無くして忽然生ずる者有ること無し、乃至或は有る說者は化生有情は所謂中有にして此世他世無しとする者は、無生を謗す、有るは化生の有情無き者は中有無しと謗す。

【五】生に四生あり、胎生、卵生、濕生、化生なり。

【六】化生の有情は諸蘊相續の上に於いて、有なれども、實

汝等應に言ふべし。是れ何の所斷ぞ。見修の所斷、理並びに然らず。補特伽羅は、諦の攝に非ざるが故なり。邪見は修所斷なるべかざるが故なり。

犢子部の救

第四項　一我の難を辯す

若し(七)經に「一の補特伽羅有り、世間に生在す」と說く、「此は」應に蘊に非ざるべしと謂はば、亦理に應ぜず。此れ(八)總の中に於いて、假りに一と說くが故なり。世間に一麻、一米、一聚、一言と說くが如し。

論主徵す

或は、(九)補特伽羅に應に有爲の攝なりと許すべし。契經に「世間に生ず」と說くを以ての故に。

犢子部答ふ

此の生と言ふは、蘊の新に起るが如くなるに非ず。何の義に依りて、世間に生在すと說かん。此の、今時、(一〇)捌蘊を取る義に依る。世間に(一一)能祠者生ず。(一二)記論者生ずと說くが如し。

我の化生有情無し。されど此の見を以て邪見と爲さば、此の邪見は見修二斷の內何れの斷なるか。見所斷の邪見は四諦の理に迷ひて起る、然も我は四諦に攝するものに非ず、又修所斷にも非ず、修所斷の惑は凡て迷事のものなり、故に修所斷に適ぜず。

【七】 增一阿含經三(十五)(昃一、十二左)に曰く、若し一人有り世に出現す。便ち一人有り、道に入りて世間に在り。

【八】 五蘊總合せる物を假に一の我と名くとの意。增一阿含第五(十二右)(昃一、十九左)に曰く、若し一人有り、世に出現する時、諸天人民魔及び魔天乃至云何が一人と爲す。所謂、多薩阿竭阿羅呵三耶三佛云云。

【九】 補特伽羅世間に生ずと云ふは、我有ることなりと云はば、我は有爲法なるべし、世間に生じて生滅するものなればなり。

【一〇】 我の體新に生ずるに非ず前世の五蘊をすてて、今別の五蘊を取るを、生ずと云へるなり。

【一一】 祠祭を習學し成就し得たるものを能祠者が生ぜりと云ふと云へる意なり。

【一二】 記論者(Vaiyākaraṇa)。

論主の破

經を引きて能取を破す(一)

「これ」(一三)明論を取るが故なり。又、世に苾芻生ずること有り。外道生ずること有りと說くが如し。(一四)儀式を取るが故なり。或は世に、老者生ずること有り、病者生ずることも有りと說くが如し。別位を取るが故なり。

佛、已に遮せるが故に、此の救成せず。(一五)勝義空契經の中に說くが如し。業有り、異熟有り、作者は得可からず。謂はく、(一六)能く此の蘊を捨て、及び能く餘の蘊を續くるなり、唯だ(一七)法假を除くと。

故に、佛已に遮せり。

經を引きて能取を破す(二)

(一八)頗勒具那契經に亦た說く。我れ終に能取の者有りと說かずと。

故に、定んで一の補特伽羅、能く世間に於いて、諸蘊を取捨することなし。

生ずとは文典を名けて記論となす。是れ卽ち謂ゆる聲明論なり。此の記論を習學して成就し得たるものを記論者生ずといふ。

【一三】明論とは學問のこと。能祠者も記論者も別にその體を生ぜしにあらず、其等の學問をなしたることなり。

【一四】儀式を取るが故とは、具足戒を受けて苾芻となり、又外道の儀式によりて外道の門に入るが如きを云ふ。

【一五】雜阿含經第十三(廿一右)(辰二、七十五右)に曰く、諸比丘、眼生する時來處有るを無し、滅する時去處有ること無し、是の如く、眼は不實にして生ず、生じ已りて盡滅す。業報有り而して作者無し。此陰滅し已りて異陰相續す、俗の數法を除く、耳鼻舌身意も亦是の如く說く、俗數法を除くと。俗數法とは謂はく此れ有るが故に彼れ有り、此れ起るが故に彼起る、無明行を緣するが如し云云。

【一六】蘊を捨て又は取る主體は有らずとなり。

【一七】法假(Dharma-saṃketa)とは、五蘊の法の上に假立せる物。

【一八】頗勒具那(Phalguna)。雜阿含經第十五(五右)(辰二、八三右)に曰く、佛頗求那に告ぐ、我れ取者有りと言說せず、我れ若し取者有りと言ふを說かば、汝問言すべし、誰か取と爲さん、汝問言すべし、何緣の故に取有るか。我れ應に答言す可し、愛緣するが故に取有り、取有を緣す云云。

論主所引の喩を破す(一)

又、汝の所引の祠者等生ずと云ふは、其の體是れ何にして、而も能く此れに喩ふる。若し(一九)此れ我なりと執せば、(二〇)彼れ極成せず。若し心心所ならば、彼れ念念に滅し、新新に生ずるが故に(二一)取捨成せず。(二二)若し是れ身なりと許さば、亦た心等の如し。

論主所引の喩を破す(二)

又、(二三)明等の、身と異なること有るが如く、蘊も、亦た應に補特伽羅に異るべし。〔又〕老病二身各各前と別なり。數論の轉變は(二四)前に已に遮るが如し。故に彼れが所引は、喩と爲ること成ぜず。

許を縱して破す

又、(二五)蘊は生ずるも、數取趣に非ずと許すと云はば、則ち定んで此れ蘊に異なり、及び常なりと許すべし。又、此れは唯だ一なり、蘊の體は五有り。寧ぞ此れ蘊と異有りと說かざらんや。

犢子部反責す

(二六)大種は四有り。造色は唯一なり。寧ぞ造色、大種に異ならずと言はんや。

論主答ふ

是れ(二七)彼の宗の過なり。

犢子部徵す

何をか彼の宗と謂ふ。

【一九】此れとは祠者なり。

【二〇】彼れとは喩なり。

【二一】心心所は念念に滅して念念に生ずるが故に、彼を捨てて此れを取る間を有せず、卽ち取捨成ぜざるなり。

【二二】若し、是れ身なりと云はば、色身は心心所と同じく、念念に生滅すれば、取捨成ぜざるべし。

【二三】明等とは明論等なり卽ち明論は名句文を體とすれば能取の祠者等の色身と異れり、所取の五蘊は能取の我と異なるべし、然らば不一不異といふを得ざるべし。

【二四】論第二十卷を見よ。

【二五】蘊の生ずる云云　五蘊は生滅す、然るに我は生滅せずと許さばの意なり。

【二六】是れは犢子部が有部の覺天の說を擧げて自家の說を辯ぜるなり。覺天は四大種の外に造色なし、色聲香味觸の造色は四大種を取りて體と爲す故に四大種に異らず、卽ち大種は四有り造色は一也、故に蘊は五、我は一なりと云ふも不可なかるべしと云へる意なり。覺天の所說は有部中の異

論主答ふ

諸の造色即ち大種と計する論なり。設し彼の見の如くんば、是の質を作すべし。諸の造色即ち四大種なるが如く、亦た五蘊に即して、補特伽羅を立つべし。

第五項　佛不記の難を辯す

犢子部徴す

若し補特伽羅即ち諸蘊ならば、世尊、何ぞ〔二八〕命者即身と記せざるや。

論主の答

〔二九〕能問者の阿世耶を觀るが故なり。〔三〇〕問者、一の內用の士夫の體は實にして虛に非ず、名けて命者と爲すと執す。此に依りて、佛に問ふ。身と一なりや、異なりやと。此れ都て無なるが故に、一異成ぜず。如何ぞ、身と一異を記すべき。〔三一〕龜毛の硬軟を記す可からざるが如し。

答を指す

古昔の諸師已に斯の結を解く。昔、大德有り

說とす。婆沙論百廿七(三左)に曰く、覺天所說の色は唯大種なり、心所は卽ち心なり。彼れ是の說を作す、造色は卽ち是れ大種の差別、心所は卽ち是れ心の差別なり。乃至彼れ是の說を作す、諸の四大種は、有なり、是れ能見なり。乃至彼れ是の說を作す、所造の聲は、四大種を離れて、別に所因有るに非ず、卽ち大種に於て、所造の聲を立つ云云。同百四十二(七左)に曰く、覺天是の如き說を作す、名は廿二なり、實體は唯一なり、所謂意根なり。乃至、有爲法に二の自性有り、一は大種、二は心なり。大種を離れて所造の色無し、心を離れて心所無し、諸色は皆な是れ大種差別なり、無色は皆な心の差別なり云云。

【二七】彼の宗とは覺天の所說なり。有部の正義にあらざるが故に邊と云ふ。

【二八】雜阿含經卅四(十六右)に曰く、佛婆蹉種に告げたまはく、出家若し是の見を作して世間常、此れ則ち眞實、餘は則ち虛妄なりとせば、此れ是れ倒見、此れ是れ觀察見なり、乃至世間常、無常、常無常、非常非無常、有邊、無邊、非有邊、非無邊、是れ命、是れ身、命異、身異、如來後死有り、後死無し、有無の後死、非有非無の後死あり、此れ是れ倒見あり云云。

【二九】能問者の阿世耶（Āśaya）を觀ずるが故なりとは、佛が問者の意樂を觀見せらるるが故なり。

【三〇】問者一の內用の士夫等。問者は內身に在りて、作用を起す、一の士夫と名くべき體實有なるものあり、之れ虛に

名けて(三二)龍軍と曰ふ。(三三)三明六通あり、(三四)八解脫を具す。時に一の(三五)畢鄰陀王有りて、大德の所に至りて、是の如きの說を作す。我れ今來る意は、所疑を請はんと欲す。然るに諸の沙門は性、多語を好む。尊能く直答したまはば、我れ當に請問すべし。大德請を受く。王卽ち問うて言はく、命者と身と、一とや爲ん、異とや爲ん。大德答へて言はく、此れ記すべからず。王の言はく、豈に先に要有るにあらずや。今何ぞ言を異にして、所問に答へざる。大德質して曰はく、我れ疑を問はんと欲す。然るに諸の國王は、性多語を好む。王能く直答せば、我れ當に發問すべし。王便ち敎を受く。大德問うて言はく、大王の宮中の諸の(三六)菴羅樹の所生の果の味は、醋と爲んや、甘と爲んや。王の言はく、宮中に本と、此の樹無し。大德復た責む、先きに

あらずして實有なる命者と名くるものありと執す。

【三一】龜毛の硬鞕を記すべからずとは、龜毛は本來無なるものなり、無につきて、その硬鞕之より論ずべからずとの意なり。

【三二】龍軍 (Nāgasena) 那伽犀那又は那伽斯那といふ。(述記一本四右、義林一本卄左) 翻譯して龍軍といふ。那先といふはその訛なり。中天竺の人後に北天竺舍竭國に至る。時に大秦國（希臘）の王子畢隣陀その國を領せり。屢屢王と法を議す。那先比丘經巴利の Milinda-pañha は之れを記せるものなり。

【三三】三明六通の名目、意義は第二十七卷に出づ。

【三四】八解脫は第二十九卷に出づ。

【三五】畢鄰陀王 (Milinda)。彌蘭陀、彌蘭(彌)難陀と音譯す。希臘領土臾那 (Yona) 國王の名、希臘名メーナンドロス (Menandros) に相當す。發掘貨幣によれば西曆紀元前百八十年代の出世なるべし。印度の僧那先 (Nāgasena) 比丘卽ち龍軍論師と佛敎に關して問答し遂に信服したりと云ふ。其結果を編纂したるものとして彌蘭陀王問經 (Milinda-pañha) なる巴利經典現存す。その異本より漢譯したるもの那先比丘經なり。

【三六】菴羅樹 (Āmra)。Mango-tree。

要するに無からんや。今何ぞ言に異にして、所問に答へざる。王の言はく、宮內に此の樹旣に無し。寧ぞ答へて、果味の甘醋を言ふ可けんや。大德誨へて曰はく、命者も亦た無し。如何ぞ、身と一異なりと言ふ可けんや。

都無不記を通ず

佛、何ぞ、命者は都て無なりと說かざる。

犢子經に依りて難す

亦た、問者の阿世耶を觀ずるが故なり。

論主答ふ

問者或は諸蘊の相續に於いて、命者と爲すと謂ふ。之れに依りて發問す。世尊、若し命者都て無と答ふれば、彼れ〔三七〕邪見に墮す、故に佛說かず、彼れ未だ〔三八〕緣起の理を了ずること能はざるが故なり。〔又〕〔三九〕正法を受くるの器に非ず、爲めに假有なりと說かず。理必ず爾るべし。

經と頌とを引きて證す

世尊の說くが故に。〔四〇〕世尊、阿難陀に告げて

經を引く

言ふが如し。姓は〔四一〕筏蹉なる出家外道有り、我が所に來至して、是の問を作して言はく、我は世間に於いて、有なりと爲んや、非有なりやと。我れ爲めに記せず、所以は何ん。若し記して、有と爲さば、法の眞理に違すべし。一切の法は皆な無我な

【三七】 諸蘊の相續をも撥無し、都無の邪見に墮す。

【三八】 緣起とは有情緣起の理卽ち十二緣起の理を云ふ。

【三九】 正法とは無我の敎を言ふ。

【四〇】 雜阿含經第三四(十五右)(辰二、百一右)に曰く、一時佛王舍城迦蘭陀竹園に住したまへり、時に婆蹉種出家有り、佛所に來詣し合掌問訊す。乃至。云何瞿曇、我有りと爲すや。爾の時世尊默然答へず。是の如く再三す。爾の時世尊亦た再三答へず。乃至、佛阿難に告げたまはく、我れ若し答へて我有りと云はば則ち彼れ先來の邪見を增す。若し答へて無我と言はば、彼れ先づ癡惑す、豈に互に癡惑を增さざらんや先に我有りと言はば、今に斷滅せん、若し先來我有れば則ち是れ常見なり、今に於いて斷滅すれば則ち斷見なり。如來二邊處中を離れて法を說く所謂是の事有るが故に、是の事有り、是の事起るが故に此の事生ずと云云。

【四一】 筏蹉(Vatsa)。

頌を引く

るを以ての故なり。若し記して無と為さば、彼れが愚惑を增す。彼れ便ち、我は先に有り、今は無しと謂はん、有と執する愚に對するに、此の愚更に甚し、謂はく、我有りと執する時は、則ち常邊に墮す。此の二つの輕重は經に廣く說くが如し。

是の如きの義に依るが故に、有る（四二）頌に曰はく、

（四三）見の為めに、傷けられ、　及び諸の善業を壞することを觀ずるが故
故、佛の正法を說く、　牝虎の子を御するが如し。
眞我を執して、有と為れば、　則ち見の牙の為めに傷つけらる。
俗我を撥して、無と為れば、　便ち（四四）善業の子を壞す。

前正重ねて此頌を作る

復た、頌を說きて曰はく、

（四五）實の命者無きに由りて、　佛一異なりと言はず。
假我を撥無せんことを恐れて、　亦都て無なりと說かず。

【四二】此の頌は經部の鳩摩羅羅多(Kumāralāta)の頌なり。

【四三】頌の舊譯

觀ニ見牙傷レ身、及棄ニ捨善業一、
諸佛說ニ正法一、如ニ雌虎銜レ子、
若信說ニ有我一、見牙傷ニ徹身一、
若棄ニ假名我一、善子卽墮落。

【四四】善業は子の如し故に善業の子と云ふ。卽ち善業を先きの牝虎の子に喩ふ。

【四五】頌の舊譯

由人實無故、佛不記一異、
亦不得說無、勿執無假我、
是陰相續中、有善惡果理、
說命者撥無、由說無命者、
彼人未堪受、正說眞空理、
問有我無我、故不答我無、
若由觀問意、於有何不記、
同前無涅槃、墮鑊故不記。

謂はく、蘊の相續の中に、業と果と命者と有り。
若し命者無しと說かば、彼れ此れを撥して、無と爲ん。
諸蘊の中、假名の命者有りと說かざることは、
發問者の、眞空を解するに、力無きを觀ずるに由りてなり。
是の如く、筏蹉が、意樂の差別を觀ずるが故に、
彼れ有無の我を問へども、佛、有無を答へず。

常等の不記を通ず

犢子經に依りて難ず

論主の答

（四六）何に緣りてか、（四七）世間の常等を記せざる。

亦た問者の阿世耶を觀ずるが故なり。問者若し我を執して、世間と爲れば、我體都て無の故に、（四八）四記皆な理に非ず。若し生死を執して、皆な世間と名くれば、佛の四種の記も亦た理に非ず。若し常ならば、涅槃を得ると無けん。若し是れ非常ならば、便ち自ら斷滅すべし。功力に由らずして咸く涅槃を得ん。若し說いて、常にして亦た非常なりと爲さば、定んで應に一分は涅槃を得ること無く、一分の有情は自ら圓寂を證すべし。若し非常非非常なりと記せば、則ち涅槃を得るに非ず、涅槃を得ざるにあらず。決定相違して便ち戲論を

【四六】 雜阿含經第三十四（十八右）（辰三、百二右）に曰く、婆蹉佛に白す、瞿曇、何法を知るが故に是の如く見す、是の如く說く、世間常此れ是れ眞實、餘は則ち虛妄、乃至後死有にあらず、無にあらずと。佛婆蹉に告ぐ、色を知る故に是の如く見せず是の如く說く、世間常此れ是れ眞實、乃至、後死非有非無なり。愛想行識を知る故に是の如き見を作さず是の如く說く、世間常此れ是れ眞實餘は則ち虛妄、乃至、後死非有非無なり云云。

【四七】 世間の常等のことは論第十九卷の末に出づ。

【四八】 四記のことも前と同處に出づ。卽ち常、無常、亦常亦無常、非常非無常の四句なり。

成ぜん。然るに、(四九)聖道に依りて、般涅槃す可し。故に四の定記は皆な理に應ぜず。

(五〇)離繋子の雀の死生を問ふが如し。佛、(五一)彼の心を知る、爲めに定んで記せず。

論主例釋す

(五二)有邊等の四も亦た記せざることは、常等に同じく、皆な失有るを以ての故なり。

犢子部問ふ

寧ぞ此の四の義、常等に同じきことを知らんや。

論主答ふ

外道有り、(五三)温底迦と名く。先に世間の有邊等の四を問うて、復た方便を設けて、(五四)矯りて世尊に問ふ。諸の世間皆な聖道に由りて、能く出離を得と爲んや。一分なりと爲んやと。尊者阿難、因りて彼に告げて曰はく、汝此の事を以て、已に世尊に問へり。今復た何に縁りてか、名を改めて重ねて問へると。故に知んぬ、後の四は、義前と同じきことを。

如來死後有等と不記を通す

復た、(五五)何の縁を以て、世尊、如來死後有等

【四九】聖道とは無漏の聖道なり。是によりて惑を斷ずれば般涅槃すべし。

【五〇】離繋子（Nirgrantha-śrāvaka）。尼犍子、尼犍弗怛羅、尼犍陀子等ともいふ。離繋子は其譯なり。今言ふ子は弟子の義。苦行を以て涅槃に入るの勝因と爲し苦行乞食す。謂ゆる耆那（Jaina）教徒なり。

【五一】彼の心を知るとは、佛死せりと答ふれば手より離して放ち、生けりと云はば握り殺す。此の心中を知れるが爲めに定んで說かず。

【五二】雜含經第三十四（廿三丁右）辰三（百三丁右）曰く、云何が瞿曇。世は有邊なりや。佛鬱低迦に告ぐらく、此は是れ記する無し。鬱低迦佛に曰く、云何が瞿曇世は無邊なるや、有邊無邊なるや、非有邊非無邊なるや。佛鬱低迦に告ぐらく、此は是れ記すべからずと云云。

【五三】鬱底迦（Uttiya）。前經の鬱低迦と同じ外道の名也。

【五四】雜含經第三十四（廿三丁右）辰三（百三丁右）前經の以下の文。曰く、一切世間は、此の道より出づとせんや、少分と爲さんや。爾の時世尊默然として答へず、乃至尊者阿難、鬱低迦外道出家に語る、汝前に已に此の義を問へり。今復た異義を以て問ふ。此の故に世尊記說せず云云。

【五五】雜阿含經第三十四（十一

犢子經によりて問ふ

の四を記せざる。

論主答ふ

亦た、問者の阿世耶を觀ずるが故なり。問者妄に已に解脫せる我を名けて如來と爲すと計して、而も發問するが故なり。

論主反詰す

今、應に有我を計する者を詰問すべし。佛、何に緣りてか、現の補特伽羅有りと記して、如來死後に亦た有と記せざる。

犢子の答を擧ぐ

彼れ、(五六)常の失に墮すること有らんことを恐るが故にと言はん。

論主の難

若し爾らば、何に緣りてか、(五七)佛は、慈氏、汝來世に於いて、當に作佛を得べしと記し、及び(五八)弟子、身壞命終せる、某甲、今時某の處に生ずと記するや。此れ豈に常に墮するの過失有るに非ずや。

救を擧げて破す

若し、(五九)佛、先には補特伽羅を見る、彼れ涅槃し已りて、便ち復た見ず。知らざるを以ての故に、有りと記せずと云はば、則ち大師の一切智を具することを撥す。或は應に、記せざることは、我體都

丁左）辰三（百丁左）曰く、如來後死有りや、後死無きや、後死有にして無なるや、後死非有非無なるや、而して記說せず云云。

【五六】常の失とは犢子部は我を常に非ず、非常にも非ずと計す。故に我は死後に滅せずと云ふ常見の失に墮するを恐れて佛答へざるなりと言ふ。

【五七】中阿含經第十三（十五丁左）辰五（七十七右）に曰く、佛諸比丘に告ぐらく、未來久遠人壽八萬歲時、佛有るべし、彌勒如來と名く、無所著等正覺なり云云。

【五八】雜阿含經第三十（四丁右）辰三（七五右）。世尊離車難陀に告げて言はく、若し聖弟子成就せば、不壞淨者なりと曰ふ、壽命を求めんと欲せば卽ち壽命を得す、好んで色を求む。乃至謂はく佛不壞淨成就、法僧不壞淨聖戒成就す、我れ見る是の聖弟子此に於て命終して天上に生ず、天上に於て十種の法を得す云云。

【五九】我が未だ解脫せざる間は補特伽羅を見るを以て汝が主張するが如く、補特伽羅ありと記し、解脫して如來となりて後は其を見ざるが故に、如來の死後の有を記せずと言はば云云の意。

て無に由ると許すべし。

若し世尊、見れども説かずと謂はゞ、則ち（六〇）離蘊及び（六一）常住の過有り。

（六二）若し見非見倶に説く可からずと云はゞ、則ち應に、（六三）漸く、佛は是れ一切智なり、［又］一切智に非ずと説く可からずと言ふべし。

第六項　惡見處の難を辯ず

若し、實に補特伽羅有りと謂ふは、（六四）契經に「（六五）諦の故に、住の故に、定んで無我を執する者は、惡見處に墮す」と言ふを以ての故なりといはゞ、此れ證と成らず、［所以は如何となれば］、彼の經に亦た、定んで有我を執する者は、惡見處に墮す」と説くが故なり。

（六六）阿毘達磨の諸論師言ふ。我の有無を執すれば、倶に邊見の攝なり。次の如く、常斷の邊に墮在するが故にと。彼の師の所説深く理に應ず。有我を執すれば、則ち常邊に墮し、若し無我を執すれば便ち斷邊に墮するを以てなり。前の筏蹉經に分明に説くが故に。

【六〇】我が涅槃に入りて蘊を滅すれども、我は滅せずと云ふが故に離蘊の我となる、離蘊の我は彼の立てざる所なり。

【六一】是れ我は五蘊と異にあらず常にあらずと云ふことを得ず、故に過なり。

【六二】佛は我を見るとも、見ずとも言ふ能はずと云はばの意なり。

【六三】漸くとは、結極とか「ツマリ」とか云ふと同じ。

【六四】漢譯中に有無不明なり。

【六五】諦の故に住の故にとは單に決定してと云ふと同じ。

【六六】婆沙論八（十二丁左）に曰く、復次に我見を起す者、猶是れ邊鄙なり、世の訶責する所なり、況や復我に於て斷常有りと執するをや。此執邊鄙なり、極めて訶す訶し、故に邊執見と名く云云。倘ほ雜阿含五（九左）、同十一（廿五右）、同卅四（十五丁）、婆沙論四十九（十三丁左）、等に出づ。

第七項　能流轉の難を辯ず

犢子經を引きて難ず

若し定んで補特伽羅有ること無くんば、何の誰か、生死に流轉すと說く可しと爲さん。生死自ら流轉すべからざるが故なり。然るに薄伽梵、(六七)契經の中に於いて、「諸の有情、無明に覆はれ、貪愛に繫せられて、生死に馳流す」と說くが故に、應に定んで補特伽羅有るべし。

論主の問

此れ復た如何が生死に流轉する。

犢子部の答

前蘊を捨てて、後蘊を取るに由るが故なり。

論主破す

是の如きの義宗は前に已に徵遣す。

勝義を述ぶ

原を燎く火の刹那に滅すと雖も、而も相續に由りて、流轉有りと說くが如く、是の如く、蘊聚を假りに有情と說き。〔而して其の有情は〕(六八)愛取を緣と爲して、生死に流轉す〔と說く〕。

第八項　今昔身の難を辯ず

犢子經を引きて難ず

若し唯だ蘊のみ有らば、何故ぞ、世尊、(六九)是

【六七】雜阿含經第六(十五丁左)辰二(三十三丁左)に曰く、我は衆生をして無明に蓋せしめ、愛其の首を繫し、長道を馳驅し生死輪廻し、生死流轉し、本際を去らざらしむ云云。

【六八】愛取。愛とは愛欲也。取とは愛欲を要求するを云ふ。又は煩惱の意にして三有生死の法の果を執取するを取と云ふ。共に十二緣起中の支也。

【六九】妙眼(Sunetra)。中阿經第二(九丁左)辰五(十一丁右)に曰く、比丘、昔大師有り、名けて善眼といふ。婆沙論八十二(十一丁右)に曰く、佛苾芻に告ぐらく、妙眼弟子諸學處に於て若し一切及び一切種、善く圓滿なる者有らば、身壞命終して梵世に生

の如きの説を作す。今の我は、昔に於いて、世の導師と爲る。名けて妙眼と爲すと。

論主反責す

此の説何の咎かある。

犢子答ふ

（七〇）蘊の各異なるが故なり。

論主の問

若し爾らば、是れ何物ぞ。

犢子答ふ

謂はく、補特伽羅なり。

論主報す

（七一）昔の我、即ち今［の我］ならば、體應に常住なるべし。

論主正釋

故に、今の我れ、昔、師と爲るとの言を說くことは、昔と今と、是れ（七二）一の相續なることを顯はす。此の火の曾て彼の事を燒くと言ふが如し。

論主計を牒して破す（一）

若し決定して、眞實の我有りと謂はば、則ち應に唯だ佛のみ能く明了に觀ずべし。觀じ已りて、應に堅固の我執を生ずべし。斯の我執より、（七三）我所の執生ずべし。此より應に我我所の愛を生ずべし。故に薄伽梵、是の如きの言を作す。若し我有と執すれば、便ち我所を執す。我所を執するが故に、諸

す。乃至又即ち世尊昔し菩薩の位に梵志の師と作る、名けて妙眼といふ。彼を以て世尊を格量するを怨みす云云。

【七〇】蘊の各各異なるが故とは念の五蘊は念念に生滅す、前後の五蘊は各各異れど、然らば今の五蘊は昔の妙眼と名く可からず。

【七一】昔の我云云とは汝昔の妙眼は是れ補特伽羅なりと云はば、昔の妙眼は即ち今の釋迦の我ならば、其我は常住なるべし、然るに汝の宗にては我は第五法藏に攝し、常と說くべからずと云へり。是れ宗義に異すべし。

【七二】一の相續とは昔の五蘊と今の五蘊と一の相續なる義を顯はす。妙眼と云はれたる昔の五蘊と、釋迦と云はれたる今の五蘊の相續せる相が、恰も我有るに似たり。即ち昔の五蘊を因として生れたる今の釋迦の五蘊なく、是れ一の相續の義を現はせるものにて、彼の事物を燒くは前念の火にして、今の火にあらず。されど一の相續となすが故に、此の火、彼の事物を燒けりと云ふに等し。

【七三】我所（一二三（三））とは我が所有、又は我がものといふ意なり。

蘊の中に於いて、便ち復た我我所の愛を發生す。(七四)薩迦耶見の我愛に縛せらると云ふは、則ち(七五)佛を謗すと爲す。解脱を去ることを遠し。

論主計を牒して破す(二)

若し我に於いて、我愛を起さずと謂はば、此の言義無し。

犢子部徵す

所以は何ん。

論主答ふ

(七六)非我の中に於いて、横に計して我と爲さば、我愛を起すべし。實我の中に非ずと云ふは是の如きの所言、理の證と爲る無し。故に彼れ佛の眞の聖教の中に於いて、因緣有ること無しと(七七)見の瘡皰を起す。

第五節　諸部に對する辯明

第一項　三計を破す

是の如きの一類、不可説の補特伽羅有りと執す。復た一類有り、總じて(七八)一切の法體皆非有なりと撥す。(七九)外道は別の眞我の性有りと執す。此等の一切の見は理の如くならず。皆な解脱無き過を免るること能はず。

【七四】薩迦耶見 (Satkāya-dṛṣṭi) 有身見と譯す。五見中の隨一、五蘊の假に和合せる體を執著して、眞實の我有りと謂つて種種愛著を起すを云ふ。

【七五】若しかかる見を爲すものあらば、佛は煩惱有るものとなり、佛を謗るものとなり、かかる人は解脱することを得ずとの意。

【七六】非我の中には横に我を計して我愛を生ずべきも、實我を計するは横計に非ざるを以て我愛を起すこと無しと云ふとの意。

【七七】惡見の瘡皰を起して實我有りと計するなり。瘡皰とは身を破るもの、卽ち犢子の我見は佛の眞聖教を亂るものなりとの意なり。

【七八】一切の法體皆な非有なり云云。中觀主義者 (Madhyamaka-citta) を指す。

【七九】外道云云。數論勝論等の神我及び眞我の性ありと計するを云ふ。

第二項　憶知の意義

犢子の難

(八〇)若し一切の類の我體、都て無くんば、剎那滅の心は、曾所受と及び相似せる境とに於いて何ぞ能く憶し知らんや。

論主の答

是の如きの(八一)憶と知とは、(八二)相續の、內の念の境の想類ある、心の差別より生ず。

犢子部の問

且らく初の憶念は、何等の心の差別の無間より生ずと爲んや。

論主の答

(八三)彼を緣ずる作意と、相似すると、「又」相屬するとの想(八四)等を有する「心の差別と」、依止の差別と、愁憂と散亂と等の緣に功能を損壞せられざる心の差別とより(八五)起る。是の如きの(八六)作意等の緣有りと雖も、若し(八七)彼の類の心の差別無くんば則ち能く此の憶念を(八八)修する

【八〇】若し一切の類の我體等。是れ犢子部の問なり。即ち、一切の類の我體が、都て無くんば、剎那に滅する心は、過去に生じたる事象を憶知すること能はざるべし。又今春の花は、昨春の花と相似せりと再認識すること能はざるべしとなり。

【八一】憶(Smaraṇa)は記憶すること、知(Pratyabhijñāna)又は記知を云ふ。再認識することなり。

【八二】相續とは一期の相續にして一有情の一期存續を云ふ。而して念の境とは曾て經驗せられたる物なり。想類とは經驗する際に、境に對して想を起し、其想が原因となりて後に結果を引く、其の結果を有する特殊の心を云ひ、心の差別とは稱するなり。是を憶念の因力とす。

【八三】憶念せらるべき物を緣ずる作意あると、或は其の作意と相似せる想等あると。或は其の作意を連絡せる想等ある特殊の心と、身體が病氣、愁憂、散亂等に擾亂せられ、其が爲に能力を損害せられざる特殊の心とより憶念は起る。

【八四】等とは、同時の心所等と及び願力の要期、或は數習等を指す。

【八五】即ち、憶念は其が障害となる物無き時は、四緣より起る。第一、作意するより起り、第二、類似の想等より起り、第三、類似なくとも連絡せる想等より起る、烟等を見て火等を憶念するが如し、第四、願力の要期して記憶せんとするより、又は或る事を記憶す

に堪へたること無し。彼の類の心の差別の因有りと雖も。若し是の如きの（八九）縁無くんば、亦た能く修する理無けん。要ず。二種を具して、方に能く修す可し。諸の憶念の生ずること、但だ此れに由る。此れを離れて功能有ることを見ざるが故なり。

犢子部の難

如何ぞ、（九〇）異心見て、後の異心能く憶せんや。（九一）天授の心曾て見る所の境を、後の（九二）祠授の心、憶念する理有るに非ず。

論主の答

此の難理に非ず、相屬せざるが故なり。謂はく、彼の二心互に相屬せず。（九三）一相續因果の性有るが如きには非ざるが故なり。我等は、異心境を見て、異心能く憶す。相續一なるが故にと言はず。然るに過去の彼の境を縁ずる心より、今時の能く憶念する識を引起す。謂はく、前に說くが如し。（九四）相續の轉變と差別との力の故に、念を生ずるに、何の失かあらん。此の憶念の力に由りて、後の記知生ずること有り。

ることを數習せるより等の事情より起る。

【八六】作意等とは、作意の外に想等あり、又諸の障害を蒙らざるを云ふ。

【八七】彼の類とは、念の境に對せる想に續いて起るもの卽ち因力。

【八八】修とは生と云ふに同じ。

【八九】縁とは、作意等を云ふ。

【九〇】異心とは若し我無くんば前時の異心境を見るに、後時の異心能く彼の境を憶せんやの意なり。

【九一】天授とは梵に提婆達多(Devadatta)と云ふ。

【九二】祠授とは梵に延若達多(Yajñadatta)といふ。以上兩名は、俗に太郎、次郎と言ふが如く、一般的固有名詞なり。天授の心、曾て見る所を、後の祠授の心が憶念すること能はざるは、兩人を一貫する我無ければなりと云ふ意。

【九三】一相續因果云云。一人の相續身中に於ては、因果の性ありて前後相續するが故に、前心曾て見、後心能く憶す。

【九四】相續の轉變と差別とは本論四(十六丁左)に云ふ。謂く相續何なるか轉變と名く。謂く相續の中の前後の異性なり。何なるか相續と名く。謂く、因果の性の三世の諸行なり。何なるか差別と名く。謂く、無間に果を生ずる功能有るなり云云。

第三項　能憶の意義

犢子部の問　我體既に無くんば、孰れをか能憶と爲さん。

論主の反問　能憶とは是れ何の義なるか。

犢子部の答　念に由りて、能く境を取るなり。

論主の反責　此の境を取る、豈に念に異らんや。

犢子部の答　念に異らずと雖も、但だ作者に由る。

論主宗を述べて通釋す　作者は卽ち是れ前に說く念の因なり。謂はく、彼の類の心の差別なり。然るに世間に言ふ所の（九五）制怛羅能く憶すとは、此れ蘊の相續に於いて、制怛羅の名を立つ。先の見し心より、後の憶念起る、是の如きの理に依りて、彼れ能く憶すと說く。

第四項　念の所屬

犢子部の問　我體若し無くんば、是れ誰れの念ぞ。

論主の反問　何の義に依りて、（九六）第六の聲を說くと爲さん。

【九五】制怛羅（Caitra）とは是れ星の名なり。正月に出現するが故に、正月を此の星より名く。故に正月に生れたるもの此の星の名を以て名と爲す。俗名なり。

【九六】第六の聲とは屬格なり。

犢子部の答　此の第六の聲は、屬主の義に依る。

論主復た徴す　如何なる物、何の主にか屬する。

犢子部答ふ　(九七)此は、牛等の制怛羅に屬するが如し。

論主反問す　彼れ如何が牛主と爲る。

犢子部答ふ　謂はく、彼彼の所乘と、(九八)搆と、役等との中に、彼れ自在を得るに依る。

論主復た問ふ　何の所に於いて、念を驅役せんと欲して、而も勤めて方便して、念の主を尋求するや。

犢子部答ふ　所念の境に於いて、念を驅役す。

論主復た問ふ　念を役すること何の爲めぞ。

犢子部答ふ　念をして起らしめんが爲めなり。

論主徴釋す　奇なる哉、自在に無理の言を起すや。寧ぞ、此れ生ずるが爲に、此れを驅役せん。又、我、念に於いて、如何ぞ驅役する。念をして起らしめんとや爲ん。念をして行ぜしめんとや爲ん。

犢子部答ふ　念は行無きが故に、但だ應に起らしむべし。

正義を示す　則ち因をば主と名け、果をば能屬と名く。因の増上に由りて、果をして生ずることを得しむ。故に因をば主と名け、果生ずる時に於いて、是れ因の所有なり。故に能屬と名く。即ち念を生ずる因、念

【九七】此は云云。手等が制怛羅といふ人に屬するが如しの意なり。

【九八】搆とは牛乳を搆ること。

の主と爲るに足れり、何ぞ勞はしく我を立てて、念の主と爲んや。卽ち諸行の聚の一類相續に於いて世共に制怛羅と牛とを施設す。制怛羅を立てて、名けて牛主と爲す。(九九)是の牛の相續、異方に於いて生じ、〔又〕變異して生ずる因の故に、名けて主と爲す。此の中、一實の制怛羅無く、亦實の牛無し。但だ假りに施設す。故に牛主と言ふ、亦因を離れず。

第五項　記知を例釋す

憶念既に爾れば、記知も亦た然なり。憶知を辯ずるが如く、孰れをか(一〇〇)能了と爲し、誰の識ぞ等と云ふこと、亦應に例釋すべし。且らく、(一〇一)識の因緣、前と別なる者は、謂はく、根境等應の如く、當に知るべし。

第三章　(一〇二)語典家の我論に就て

第一節　其の主張及び批評

有るが是の言を作す。決定して我有り。(一〇三)事用は必ず(一〇四)事用者を待つ

【九九】是の牛の相續云云。牛の五蘊の相續が異處に生じ、卽ち他處に行き、又變異して生じ、卽ち刹那生滅に由りて、次第に變化して生ずる因の性ある故に主と名く。

【一〇〇】能了(Vijñātṛ)。等とは受と想とを指す。

【一〇一】六識の生ずる因緣は、前の憶知の生ずる因緣とは、差別あり、卽ち識の種子を因とし、根境を緣として識を生ずるなり。

【一〇二】語典家(Vaiyākaraṇa)。

【一〇三】事用(Bhāva)とは或る行

批評

が故なり。謂はく、諸の事用の事用者を待つは、天授の行の、必ず天授を待つが如し。行は是れ事用なり。天授を者と名く。是の如く、(一〇五)識等の所有の事用は、必ず所依の能了等の者を待つと。

今應に彼れを詰すべし。天授とは何を謂ふか。若し是れ實の我ならば、此れ先に破するが如し。若し假の士夫ならば、體一物に非ず。(一〇六)諸行の相續に於いて、假りに此の名を立つるが故なり。天授の能行の如く、識の能了も亦た爾なり。

第二節　辯明及び顯正

第一項　人能行の意義

語典家難す

何の理に依りて、(一〇七)天授の能行を説くか。

論主答ふ

謂はく、剎那生滅の諸行の不異の相續に於いて、天授の名を立つ。愚夫は中に於いて、執して一體と爲し。自相續の異處に生ずる因と爲す。(一〇八)異處に生ずるを行と名け、因を即ち行者と名く。此の理に依りて、天授能く行くと説く。焰及び聲の異處に相續するに、世此れに依りて、焰聲能く行くと説くが如し。

狀を云ふ。

【一〇四】事用者(Bhavitṛ)。

【一〇五】識等云云。識又は受等の作用あるは、必ず所依の能了者を待ちて用あるものなり、即ち能了者の我有りてそれが識を發して境を了す。

【一〇六】諸行とは五蘊を云ふ、五蘊の相續の上に假りに我を立てしなり。

【一〇七】若し作者の我無くんば、何によりて、天授（太郎といふが如し）の能行を説くとの意なり。

【一〇八】五蘊の刹那刹那に相續しつつあるものが、異なれる處に於て生ずるを行と名づく。其の生ずる因即ち前刹那の五蘊を行者と名づく。五蘊の外に行者の體あるに非ず。

是の如く、天授の身能く識の因と爲るが故に、世間亦た天授能く了ずと謂ふ。然るに諸の聖者も世間言說の理に順ずるが爲めの故に、亦た是の說を爲す。

第二項　認識の意義

語典家問ふ　(二〇九)經に、「諸識能く所緣を了ず」と說く、識所緣に於いて、何の所作を爲すか。

論主答ふ　都て所作無し。但だ(二一〇)境に似て生ず。果の因に酬ゆるが如し。所作無しと雖も、因に似て起るを、說いて酬因と名く。是の如く、識の生ずるに、所作無しと雖も、而も境に似るが故に、說いて境を了ずと名く。

語典家問ふ　如何が境に似る。

論主答ふ　謂はく、(二一一)彼の相を帶ぶ。是の故に、(二一二)諸識亦た根に託して生ずと雖も、根を了ずと名けず。但だ名けて、境を了ずと爲す。或は識、境に於いて、相續して生ずる時、前の識を因と爲して、後の識を引きて起すを識能く了ずと說くも、亦た失有ること無し。世間、因に於いて、作者を說くが故なり。

【二〇九】經とは中阿含經第五十八(九丁左)昃七(八十五左)。曰く、識とは何等か。色を識し聲香味觸法を識す。識は識るなり、是の故に識と說く云云。

【二一〇】境に似て生ずとは識には却て所作無し、刹那滅の識が生ずる時に前境に似て生ずるなり。

【二一一】彼の相を帶ぶ（Tad-ākāratā）とは主觀の識の上に客觀の事物の行相を帶するを云ふ。例せば香色を認識する場合。主觀の識の上に香色の表象を現じて、識それを認識するものなれば、主觀の上表象は、彼の事物の相を帶して現したる譯なり。

【二一二】諸識の認識を起す時に於ても、諸根卽ち眼耳等の六根そのものの活動によりて、識よく認識するものなれども、此の場合識には根に似ざるが故に、諸識が根を了ずとは云はず、但だ境を了ずと云ふなど云へる意なり。

世間に（二三）鐘鼓能く鳴ると說くが如し。

語典家問ふ　或は燈の能く行くが如く、識の能く了ずることも亦た爾なり。何の理に依りて、燈の能行を說くとや爲ん。

論主答ふ　焰相續の中に、假りに燈の號を立つ。燈の異處に於いて、相續して生ずる時を、說いて燈行と爲す、別の行者無し。是の如く、心の相續するに假りに識の名を立つ。（二四）異境に於いて生ずる時を、說いて能了と名く。或は色の有、色の生、色の住の如し。此の中、別の有する〔者〕、生ずる〔者〕、住する者無し。識の能了を說くことも、理亦た應に然るべし。

第三項　自我の持續を辯ず

語典家難す　若し後識の生ずること、識によりて、（二五）我に〔よるに〕非ずんば、何によりてか後識恆に前に似ざる、及び定んで次ありて生ずること、芽莖葉等の如くならざるや。

論主初難に答ふ　有爲は皆な住異の相有るが故なり。謂はく、諸の有爲は、自性法爾として、微細に相續して、後必ず前に異す。若し此れに異ならば、意を縱にして、定に入り、身心相續し

【二三】鐘鼓は鳴るといふ作用とは別なり、されど鳴るといふ作用の原因となるものなり、されば鐘鼓能く鳴るといふなり。

【二四】異境に於いてとは境界は刹那に生滅しつゝあるに、其の前後相異なれる境の上に於て、識の相續が生じ、斯して若干時の間連續して、始めて了別の用を完うす。

【二五】識の相は差別なきを以て若し後の識は前の識より生ずとせば、其の識は恆に前に似るべし。之に反して、若し我より生ずとせば、我の欲樂に隨うて差別を來すべし。故に後識が前識に恆に似ざるを見れば、我あることを許すべしとなり。

第二難に答ふ

相似して生ずるに、後念初めと差別無きが故に、應に最後の念、自然に定より出づべからず。

諸の心の相續も亦た定まれる次で有り。若し此の心の次に彼の心應に生ずべきときには、此の心の後に於いて、(二六)彼れ必ず生ずるが故なり。

亦た少分の行相等しき心有りて、方に能く相生す。(二七)種姓別なるが故なり。(二八)女心の無間に嚴汙身の心を起し、或は、彼の夫、彼の子の心等を起すが如き、後時に此の諸心の相續の轉變の差別により、還つて女心を生ず。是の如きの女心は、後の所起の嚴と汙との心等に於いて、生ずる功能有り。此れに異なるは、功能無し、種姓別なるに由るが故なり。

女心の無間に多心を起すべし。然るに、多心の中に、若し先に數數起ると、明了に近く起るとは、先づ起る。餘には非ず。(二九)是の如きの心の修力強きに由るが故なり。唯だ將に起らんとする位の、身と(三〇)外との緣の差別を除く。

譬喩家難す

諸の修力最も強盛なるを有する者、寧ぞ、恆時に自果を生ぜしめざらんや。

論主答ふ

此の心に、(三一)住異の相有るに由るが故なり。「且つ」此の住異の相は、(三二)別修の果の相續して

【二六】論第七、二十心相生の項を見よ。

【二七】種姓別とは、別別の種類と云ふと同義にして、習慣せること各別なりとの意なり。即ち習慣に別あれば聯想にも別ありとなり。

【二八】女を緣じ已りて、直に彼の女の身を、或人は美にして貪ふべしとなし、又或人は不淨にして厭ふべしとなす心を起す。

【二九】是の先に起る如き心は慣習力強きに由る。

【三〇】身體の狀況、或は外部的特別の境遇を除く。

【三一】此の修力の強き心にも住異の相ありて、漸劣ならしめて生起せしめざることあり。

【三二】別修の果とは修力によつ

唯だ佛のみ能く了知す

生ずる中に於いて、最も隨順するが故なり。諸心の品類の、次第に相生する因縁の(二三)方隅を、我れ已に略して說く。委悉に了達すること唯だ世尊に在り。〔彼は〕一切の法の中に、智自在なるが故なり。(二四)是の如き義に依るが故に有る頌に曰はく、

(二五)一の孔雀の輪に於ける　一切種の因相は、
餘智の境界に非ず。　唯だ一切智のみ知る。

色の差別の因すら、尚ほ了じ難しと爲す。況んや、心心所の、諸の無色の法の、因縁差別は、了知し易かる可けんや。

第四章　勝論師の我論に就て

第一節　其の主張及び其の論理的批判

て起る諸種の心心所なり。此の住異の相は、心の强き修力を抑へて、別の修の果の心の起るに隨順して、夫れを生ぜしむるものなり。故に修力の强きものをも恒時に自果を生ぜしめざるなり。

【二三】方偶とは一端の意。

【二四】長老羅怙羅(Sthavira-Rāhula)の作。

【二五】頌の舊譯
於下孔雀一尾、具二一切相一因上、餘人不レ能レ知、此智是佛力。
此の頌の意は一の孔雀の廣げたる尾輪の青黃赤白等の諸の色彩に於ける所有ゆる原因は餘の智の境界にあらず、一切智者のみよく知るなりとの意なり。

第一項　勝論の我

宗を敍す

（二二六）一類の外道、是の如きの執を作す。諸の心の生ずる時、皆な我よりすと。

前難を指す

（二二七）前の二難彼れに於いて最も切なり。「謂はく」若し諸の心生ずること、皆な我よりすと云はば、何に縁りてか、（二二八）後識恆に前に似ず、及び定んで次ありて生ずること、芽莖葉等の如くならざるや。

第二項　我と意

合の義を破す

若し（二二九）意と合する差別を待するに由りて、異識生ずると有りと謂はば、理定んで然らず、我と餘と合すること（二三〇）極成に非ざるが故なり。

合の義の縱破

又、「たとひ、合といふことを許すとも」二物

【二二六】一類の外道。勝論（Vaiśeṣika）なり。
本宗の宗義は一切の現象を實德、業、有、和合、同、異の六句義に分類して萬有を網羅し、その成立要素を明かにせんとするにあり。後に慧月は、更に有と有能と無能と俱分とを加へて十句義と爲せり。句義とは即ち範疇の意也。然れどもそは客觀的に法爾に存在する原理にして一種の形而上學的實在と見んとする傾向ありそれ故に萬有を分類して六句義と爲すと云ふよりも、寧ろ萬有をして然あらしむる原理として六句義を立てしものなれば從つて飽迄實在論の立場に在るものにして、本宗の特長とする極微論も此立場より演繹せらるべきものなり。故に實在論にして極微說を持する點に於いて最も有部の宗義と相似せる點ありて世親論師の如き經部の唯心論的眼光を以てこれに對する時は全く反對の立場に在るものなり。以下論難する義理に關しては木村著印度六派哲學の勝論の部を參考せよ。

【二二七】前の二難。前の語典家の二難。

【二二八】若し諸心の生ずるは一の我より生ずと云はば前念の心と後念の心と同じかるべし、然るに後識恆に前識に似ず、又一の我より生ずるが故にその生ずる次第も一定せらるべし、然るに事實不定なるは如何の意なり。

【二二九】意と合す云云。心の生ずるは我よりすることは同じと雖も、我は時としては、意を合することあるを以て、心は必ずしも前に似ず、又必定し

我有分の難

合すること分限有るが故なり。

(二三一)彼の自類、合の相を釋して言はく、非至を先と爲し、後に至るを合を名くと。(二三二)我と意と合すれば、應に分限有るべし。

我移轉の難

(二三三)意移轉するが故に、我も移轉すべし、或は(二三四)應に意と倶に壞滅有るべし。

轉救を破す

若し一分合すと謂はば、理定んで然らず。一の、我體の中に於いて、分別無きが故なり。設ひ合すること有りと許すも、我體既に常なり。(二三五)意に別異無し。合すとも、寧ぞ、別有らんや。

第三項　我と覺

若し(二三六)別の覺を待すと言はば、難を爲すことも亦た同じ、謂はく、覺何に因りてか、差別有ることを得ん。

て順序次第あるに非ずと言はばの意。

【二三〇】勝論は我と意との外に合(Samyoga)と云ふ別法を立つれども、是れは我が宗に許さざる所なり。故に我と餘と合すと云ふことは成立せず。

【二三一】彼の勝論が自宗に云ふ所の合の義を釋す。

【二三二】勝論の宗義に依れば、我と意と合すと云ふは、我ある處に意なく、意ある處に我なくして、此二が相合ふものなり。然らば我にも分限あり一切處に遍滿すと云ふ可からず。果して無らば彼の宗に背く。

【二三三】彼の宗に依れば、意には大さあり、故に意移轉して、身の或る部分に行くときは、我も亦隨って行くべし、猶影の形に從ふが如し。然らば我は作用なしと云ふ宗義に違す。

【二三四】意が移轉すれば我隨って其の處に滅すべし、然らば我は常住なりと云ふ宗義に違す。

【二三五】我體已に別異なきを以てそれと合せる意も亦た別異なし。

【二三六】別の覺とは、諸種の覺なり。即ち諸種の心の生ずるは此の覺德の諸種の差別を待ちて、種種の心を生ずといふなり。

第四項　我意と行と合すること

若し（二三七）行の別なるに待する我と意と合すと云はば、則ち應に但だ心、行の差別に待して、能く異識を生ずべし。何ぞ我を用ふることを爲ん。我識の生ずるに於いて、都て用有ること無し。而るに諸識皆な我より生ずと言ふ。藥事成じて能く痼痾を除くに、誑醫矯と（二三八）普莎訶との言を說くが如し。

第五項　我の意義

若し（二三九）此の二、我に由るが故に有りと謂はば、此れ但だ言のみ有りて、理の證と爲る無し。

正しく救を破す

若し此の二、我を所依と爲すと謂はば、誰れが誰れの爲めに所依と爲る義の如くなるや。（二四〇）心と行とは畫の如く、果の如く、我を能持と爲すこと壁の如く、器の如くなるに非ず。是の如くならば、便ち更に相礙ふる失有り、及び或る時は別に住する失有るが故なり。

【二三七】我と意とは差別無しと雖も、德句義の中の、修習の差別なる行の差別なる行の差別に待するにより覺に差別あり。

【二三八】普莎訶(Phuḥ svāhā)は吉祥と飜譯す、病を治する呪語なり。

【二三九】此の二とは心と行との二なり。

【二四〇】心と行とは畫の如く、果の如く云云。所依の義を現はせるものにして、畫の壁を所依とし、果の器を所依とせる如く、心行も我を所依とし、我はその能持たりと云ふも不當なり。若し爾らば、我と心行とは互に相障ふべく、又兩者共に各別に存在する時あるべし。然らば我は一切處に遍在すといふべからず。

勝論の救　壁と器との如く、我を彼の依と爲るに非ず。

論主の徵　若し爾らば如何ん。

勝論の答　此れ但だ（一四一）地の能く香等の四物の所依と爲るが如し。

論主の答　彼れが是の如き言は、無我を證成す。故に我れ此に於いて、深く喜慰を生ず。世間の地の香等を離れざるが如し。我も亦た應に爾るべし。心行を離れたるに非ず。誰れか能く、地の香等を離れたることを了せん。但だ香等聚集の差別に於いて、世俗流布して、立つるに地の名を以てす。我も亦た應に然るべし。但だ心等の諸蘊の差別に於いて、假に我の名を立つ。

勝論の難　若し香等を離れて、別に地有ること無くんば如何ぞ說いて地に香等有りと言ふや。

（一四二）地の體、香等の別有ることを顯さんが爲めなり。故に卽ち地に於いて、香等有りと說いて、他をして、（一四三）是れは此れにして、餘に非ずと云ふことを了達せしむ。世間に（一四四）木像身等

【一四一】地の能く香等の四物の所依と爲るが如しとは、勝論に於ては、實句義の地は色香味觸の四德の所依と爲ると云へり。我の心行の所依となることも此の如しと云ふなり。唯識疏一末(四十一丁左)に曰く、九の實體は若し色味香觸有らば地と名け德を以て地を顯す也。若し色味觸及び液潤有らば水と名く、若し色觸有らば火と名く、若し觸有らば風と名く、唯聲のみならば空と名く、別に空大有り、空無爲に非ず、亦空界色に非ず云云。

【一四二】地の體香等の別有ることを顯はさんが爲めなり云云。經部に依らば假の地は色香味觸の積集したるものなれば、地の體の上に色香味觸の差別あり、その差別あることを顯はさんがためなり。

【一四三】是れは此れにして云云。此の地の體は、色香味觸にして、餘物にはあらざることを知らしめんが爲めなり。

【一四四】木像身等云云。此像は是れ木なり餘物にあらずと云ふ

計を牒して破す
勝論答ふ
論主復た徴す
勝論答ふ
論主の難

と言ふが如し。

第六項　我と行との關係

又、(一四五) 若し我有りて、行の差別を待せば、何ぞ倶時に一切智を生ぜざる。

若し時に此の行の功用最も強ければ、此れ能く餘を遮して、果を生ぜざらしむ。

寧ぞ強き者より、(一四六) 果恆に生ぜざる。

答ふ、此れは前の修力の道理の如く。(一四七) 行は常に非ず、漸く變異すと許すが故なり。

若し爾らば、我を計すること、則ち唐捐と爲らん。行の力、心をして差別して生ぜ(一四八) しむるが故なり。(一四九) 彼れの行と、此の修と、體異なること無きが故なり。

第七項　批判の歸結

必定して應に我體實に有なりと信ずべし。(一五〇)

ことを知らしめん爲めなり。

【一四五】若し我有りて行徳の差別を待ちて法を生ずと云はば、此行徳は數習を性とし一切の智慧の種子なれば、倶時に一切の智を生ずべしの意なり。

【一四六】即ち彼としては、劣れる果を生ずることありや。

【一四七】行は常に非ず云云。行徳は常住にあらず、漸漸に變るものなり、故に強者より果恆に生ぜず。

【一四八】しむる(令)とは、底本には念の字に作る、今は義によりて私に改ためたり。

【一四九】彼れの行とは勝論の行徳は現量智昔下智を退して屢屢數習する差別より種子を引發す、又此の修とは佛教の修は現量比量智を數屢起して數習するを修といふ、然らば彼の行と此の修と體別なることなし、されば行の徳を以て種種の心を生ずれば我は無用なりとの意なり。

【一五〇】念等の德句義云云。德句義(Guṇa padārtha)とは實體に附屬する性質、屬性を抽象して屬性概念と成し、之れより誘導して原理としたるものなり。之れに、色味香觸等の二十四種あり。その第二十一の行に二種有り、一には念因、

論主の破

念等の徳句義有るを以ての故なり。(一五一)徳は必ず實句義に依止するが故なり。(一五二)念等の餘に依ること、理成ぜざるが故なり。

此の證は理に非ず、極成せざるが故なり。謂はく、念等は徳句義の攝にして、(一五三)體皆な實に非ずと說く義は、極成せず。(一五四)別體有るは皆な實と名くと許すが故なり。經に(一五五)六の實句を說きて、沙門果と名くるが故なり。

彼れ實我に依ると云ふ理亦た成ぜず。依の義は(一五六)前に已に遮遣するが如くなるが故なり。

此れに由りて、所立は但だ虚言のみ。

第二節　辯明

第一項　先業所爲を辯ず

諍論の難

若し我實に無くんば、何の爲めにか業を造る。

二に作因なり。今は此の念因を指して念と言ふ。

【一五一】徳は必ず實句義に依止するが故云云、實句義（Dravya-padārtha）とは萬有を觀察して實體概念に到達し、之に應ずる範疇を實句義とす、即ち萬有の實體をあらしむる原理なり。それ故に念等の行徳の徳句義は實體の屬性を意味するものなれば必ず實句義に依止す、而して我は實句義なり、それ故に彼の念等の徳句義の所依止となる、故に我體有りその實有なることを知ると云ふ意なり。

【一五二】念等の餘に依るとは、念等が我に依らずして餘の地水火風等の八實に依ること。

【一五三】體皆な實に非ず云云。念等は徳句義の中に攝む、是れ實の上の徳なり、故に體は皆な實に非ずと說くことは義極成せず。

【一五四】我が宗に於ては念等の如き別體あるは實なりとし無體にあらず。

【一五五】六の實句とは六の實物なり、即ち無漏の五蘊と無爲となり。五蘊の中に於て念等の心所法は行蘊の中に攝す、故に既に念等は實物と說かれあるを以て、皆な實體有り實我に依止すること成ぜず。

【一五六】前に已に遮遣すとは前に晝の壁に依り果の器に依る喩に於て遮遣せり。

論主の答　我の當に苦樂の果を受くべきが爲めの故なり。

勝論の問　我の體は是れ何ぞ。

論主の答　謂はく、我執の境なり。

勝論の問　何をか我執の境と名くる。

論主の答　謂はく、諸蘊の相續なり。

勝論の問　云何が然ることを知る。

論主の答　(二五七)彼れを貪愛するが故なり。白等の覺の同處に起るが故なり。謂はく、世に言ふと有り。我れは白、我れは黑、我れは老、我れは少、我れは瘦、我れは肥なりと、現に世間を見るに白等を緣ずる覺と、我を計する執と同處にして而も生ず。所計の我に此の差別有るに非ず。故に知んぬ、我執は但だ諸蘊を緣ずることを。

勝論の通釋　身は、我に於いて、防護の恩有るを以ての故に、亦た身に於いて、假說して我と爲す。(二五八)臣等は卽ち是れ我が身なりと言ふが如し。

論主の難　有恩の中に於いては、實に我を假說す。而るに諸の我執の所取は然らず。

勝論の難　若し身を緣じても、亦た我執を起すと許さは、寧ぞ、我執の、他身を緣じて起ること無からんや。

【二五七】彼れを貪愛する云云。我を執するものは、彼の五蘊を貪愛するが故に、又我執と彼の五蘊の體の上の白黑等の覺と同處に起るが故に、同處といふは我執の起る處と同處を云ふ。

【二五八】臣等とは臣は王を防護す王は防護の恩有り、故に此の臣は我が身なりと云ふが如しの意なり。

縁に依りて轉ず、因縁展轉して、自の因縁に依る。(一六二)中に於て、一の自在に起る者無し。(一六三)一切の有爲は因縁に屬するが故なり。汝が所執の我は因縁を待たず。亦た所作無きが故に、自在に非ず。此れに由りて彼れが、能く自在に爲すを作者と名くと說く、相は、求むれども得べからず。

論主正義を述ぶ

然るに諸法の生ずる因縁の中に於いて、若し勝用有るをば、假りに作者と名く。所執の我に少用有ることを見るに非ず、故に定んで名けて作者と爲すべからず。

勝論の問

能く身業を生ずる勝因とは何ぞや。

論主の答身業

謂はく、(一六四)憶念より樂欲を引生し、樂欲より尋伺を生じ、尋伺より勤勇を生じ、勤勇より風を生じ、風身業を起す。汝が所執の我は、此の中に何の用ぞ。故に、身業に於いて、我は作者に非ず。

語業意業を例釋す

語意業の起るも、此れに類して思ふべし。

受者を破す

我は復た云何ぞ能く業果を領せん。若し果に於いて、我能く了別すと謂はば、此れ定んで然らず。

【一六二】中に於てとは因縁相續展轉するが故に、其中に於て一の自在なるものありて思ふままに身業を起すにあらず。

【一六三】一切の有爲は因縁に屬すとは一切の有爲の法は各各自己の因縁に繫屬して、因果の法則を離れず、決して自在なるものにあらず。

【一六四】憶念より云云。過去の身業を憶念し我も斯くあらんと思ふ樂欲を起し、其より尋伺を起し、次ぎて勤勇の努力を生じ、かくてその努力心が身中の風を起して、風が身業の形色を引發して活動せしむ。ここに風と云へるは衝動を意味す、卽ち身業を引起せんとする衝動なり。爰に謂ふ尋伺は、瑜伽師の宗義に依れば、造作することを相とする特殊の思或は特殊の慧なり。併しながら毘婆沙師の宗義に依れば計度分別を相とする別法なり。尋伺の事は前の心所の段に出でたり。

我は了別に於いて、都て用有ること無し。前の識を生ずる因を分別する中に於いて、已に遮遣するが故に。

第四項　非情と罪福との關係

勝論の難

若し實に我無くんば、如何ぞ、諸の(二六五)非情處に依りて、罪福生長せざる。

論主の答

彼は(二六六)受等の所依止に非ざるが故なり。唯だ內の六處のみ。是れ(二六七)彼の所依なり。我は彼の依に非ざることは、(二六八)前に已に說くが如し。

第五項　業と果との關係

勝論の難

若し實に我無くんば、業已に滅壞す。云何ぞ、復た能く未來の果を生ぜん。

論主の反實

設ひ實我有るとも、業已に滅壞す。復た云何ぞ、能く未來の果を生ずる。

勝論の答

我に依止する(二六九)法非法より生ず。

【二六五】非情處とは有情に對して云ふ、即ち草木瓦石の如く情なきものを云ふ也。若し我無くんば有情に局らず、非情に於ても罪福の諸業を生ずべしとの意なり。

【二六六】受等とは受想等の諸蘊なり、彼の非情は受想等の所依止にあらず。

【二六七】彼の所依とは彼の受等の所依止なり。次の彼の依も亦受等の所依止を云ふなり。

【二六八】前とは論第二卷の「根の變するに隨つて識異なり、故に眼等を依と名く」と云ふ半頌二句を指す。

【二六九】法非法とは勝論の廿四德の中第廿二第廿三に法と非法とを立つ。法とは二種有り、一には能轉、謂はく可愛の身を得る因即ち生死の勝身を得るの因也。二には能還、謂はく業緣を離れたる正智の喜因也、即ち出世間の因、正智の正因也。非法とは能く生死の不可愛の身の苦と邪智の因なり。即ち勝論にては業が過去に入りて壞滅せる時、此法非法ありて我に依止して未來の善惡の果を生ずるが故に、業は過去に入りて滅するも不可なしと說く。法非法のことは論の第十三卷の第二第三第四頌の釋の中に出づ。

論主の破

（二七〇）誰れが誰れに依るが如くなる。此れ前に已に破しぬ。故に、法非法は應に我に依るべからず。

自らの正義を示す

然るに、聖教の中に、是の說を作さず、已壞の業より、未來の果生ずと。

勝論の問

若し爾らば、何れよりする。

論主の答

（二七一）業の相續と轉變と差別とよりす。種の果を生ずるが如し。世間に果、種より生ずと說くが如し。然るに、果、已壞の種より起らず、亦た種より無間に卽ち生ずるに非ず。

勝論の問

若し爾らば、何よりするか。

論主の答

種とする所の相續と轉變と差別とより、果方に生ずることを得。謂はく、次に芽莖葉等を生じ、花を最後と爲して、方に果を引いて生ず。

勝論の問

若し爾らば、何ぞ種より果を生ずと言ふ。

論主の答

（二七二）種展轉して、花中の果を生ずる功能を引起するに由るが故に、是の說を作す。若し此の花の內の生果の功能、種を先と爲して、引起する所に非ずんば、所生の果相は、種と別なるべし。是の如く、業より果を生ずと雖も、彼の已壞の業より生ずるに非ず、亦た業より無間に果を生ずるに非ず。

【二七〇】誰れが誰れに云云。法非法が我に依止すと謂はば誰れが誰れに依止するが如くなるか。此の法非法の依止は畫と果の壁と器とに依止するが如く我に依止するものに非ず、喩の物は色法なれば更に相礙ふる失あり、又或時は別に住する失あり云云の意。此の依止の義は前述の如し。

【二七一】業の相續と轉變と差別とよりすとは、業の熏じたる種子の生滅相續し轉變して差別を生じ、ここに種の果を生ずるなり。

【二七二】種展轉して云云。種子の無間に芽を生じ、芽の無間に葉を生じ、葉の無間に花を生ず、而して花の上には果を生ずる功能を有せり、斯くの如く展轉して生果の功能を引起するが故に、種が果を生ずと言ふなり。

勝論の問

但だ業の相續と轉變と差別とより生ず。

何をか、相續、轉變、差別と名くる。

論主の答

謂はく、(一七三)業を先と爲して、後に色心起る。中に、間斷無きを名けて相續と爲す。即ち此の相續の後後の刹那前前に異にして生ずるを、名けて轉變と爲す。即ち此の轉變、最後の時に於て、勝れたる功能有りて、無間に果を生じて、餘の轉變に勝れたり。故に差別と名く。

第六項　業の作用の區別

先受業を明す

(一七四)有取識正しく命終する時の如き、衆多の後有を感ずる業に引かれたる熏習を帶すと雖も而も、(一七五)重と近起と數習とに引かるること明了なり。餘には非ず。(一七六)有る頌に言ふが如し。

【一七三】業を先と爲す云云。現に起れる業が最初にありて、色心に種子を熏成す、此の色心中の種子の間斷なきを相續といふ云云の意なり。

【一七四】有取識 (Sopādāna-vijñāna)とは取は煩惱の總名なり、諸の煩惱を有する識の意にして有漏の識を云ふ。

有取識が命終の時には後有を感ずる多くの業に引かれたる種子を有すれども、その中、重と近起と數習とに引かるること明かなり、決して餘の種子にあらず。

【一七五】重とは重業所引の種子なり。五逆罪の如きを重業といふ。

近習とは近起所引の種子也。命終に近く起したる業なり。命終の際善惡の友に遇ひて善惡の業を造る其の種子の如し。

數習とは數習業所引の種子なり。平常屢屢習修したる業の種子なり。

【一七六】有る頌とは、長老羅怙羅(Sthavira-Rāhula)の頌なり。

頌の舊譯

若重近數習、及昔作諸業、

先先先後熟、於輪轉有識。

業の極めて重と、近く起ると、數習と先きの所作とは、(一七七)前と、前と、前と、後とに熟し、生死に輪轉す。

謝滅の別を辯ず

此の義の中に於いて、差別有ることは、異熟因の所引は、異熟果を與ふる功能あり、異熟果を與へ已りて、卽ち便ち(一七八)謝滅す。同類因の所引は等流果を與ふる功能あり。若し染汙の者は、對治の起る時、卽便ち謝滅す。不染汙の者は、(一七九)般涅槃の時、方に永く謝滅す。色心の相續、爾の時に永く滅するを以ての故なり。

第七項　異熟果の意義

勝論の問

何に緣りてか、異熟果は、異熟「果」を招くこと、種の果より、別の果生ずること有るが如くなること能はざるや。

論主の答

且らく、(一八〇)譬喩と是れ法と皆な等しきに非ず。(一八一)然るに種の果より別の果生ずること無し。

勝論の問

若し爾らば、何よりするか。

【一七七】前と前と前と後とに熟す　最初に極重業熟し、次に近習業熟し、次に數習業熟し、次に他の諸業熟するの意なり。

【一七八】謝滅とは前念の種子過去に落謝して、後念の種子續きて起らず、種子の永く滅無するを云ふ。

【一七九】不染汙の者は能對治道が起りて能縛を斷ずとも、種子の體は滅せず、矢張り與果の功能を起す、後に無餘涅槃に入る時始めて種子の滅して無となる。

【一八〇】譬喩は是れ一分なり。一切法と齊しきものにあらざることを示す。

【一八一】喩と法と同じき部分につきて言へば、種の果より別の果生ずることなしとなり。

論主の答

後果を生ずるは、後の熟變の差別より生ずる所なり。謂はく、後時に於いて、即ち前の種果、水土等の諸の熟變の緣に遇ひて、便ち能く熟變の差別を引生す。正しく芽を生ずる位に、方に種の名を得。〔一八二〕未だ熟變せざる時は、當の名に從ひて說く。或は種に似たるが故に、世說いて種と爲す。此れも亦た是の如し。即ち〔一八三〕前の異熟、正邪を聞く等の諸の善惡を起す緣に遇ひて、便ち能く諸の善の有漏、及び諸の不善を引生して、〔一八四〕異熟の心有り。此れより引生せる相續の轉變展轉して、能く轉變の差別を引く。此の差別より後の異熟生ず。餘より生ずるに非ず、故に喩、法に同ず。

別喩を引く

或は、別法に由りて、此れに類して、知る可し。〔謂はく〕〔一八五〕拘櫞花に〔一八六〕紫礦の汁を塗るが如し。相續轉變の差別を因と爲して、後の果生ずる時、瓤便ち色赤し、此の赤色より更に餘を生せず。是の如く、應に知るべし。業の異熟より、更に餘の異熟を引いて生ずること能はず。

【一八二】水土等の熟變の緣に逢ひて、前の未熟の位より後の熟變の位を引起して、諸種の熟變の時機を經過し熟變し已りて芽生ずる時、初めて種と名く可く、未熟の位は種にあらずして單に果と釋すべきものなり。されど遠からずして芽を生ずべき果なれば種と名くと云へる意なり。

【一八三】前の異熟とは前の異熟の五蘊は是れ業の果なり、之れが正邪の法を聞きて善惡の緣に逢ひて善不善の有漏の異熟心を引起す。

【一八四】異熟の心有りとは異熟を感ずる心有るなり。之れを熟變せりといふ。

【一八五】拘櫞(Mātuluṅga 'Citron')

【一八六】紫礦の汁(Lākṣā)は赤色の染料なり、波羅奢樹(Palāśa)の液汁又は臙脂蟲(Cochineal)等より取りて製す。

第八項　結論

前來は且らく（一八七）自らの覺慧の境に隨ひて、諸の業と果とに於いて、略しく麤相を顯はす、其の間の異類の差別の功能、諸業の所熏の相續轉變、彼彼の位に至りて、彼彼の果生ずることは、唯だ佛のみ證知して、餘の境界に非ず。是の如きの義に依るが故に、（一八八）有る頌に曰はく、

此の業と、此の熏習と、此の時に至りて、與果すとの、
（一八九）一切種の定理は、佛を離れては、能く
知るもの無し。

道を讃め惡見を捨つるを勸む

已に善く此の（一九〇）淨因の道を說く、
謂はく、（一九一）佛の至言は眞の法性なり。
應に闇盲の諸の（一九二）外執の、
惡見の所爲を捨てて、（一九三）慧眼を求むべし。

道を見ざることを讃す

此の涅槃宮の「唯」一の廣道は、

【一八七】自らの覺慧とは論主自らの覺悟の慧力に隨ひて、諸の業と果との關係を略述せりと云ふ論主謙讓の意なり。

【一八八】頌の舊譯
業熏習勝類、果報位及淨、由二一切種一理、離レ佛餘不レ知、佛經理互廳、解二眞義一勝量、依レ二說無レ傷、何用二雜隨レ身

【一八九】一切種とは、あらゆると云ふに同じ。

【一九〇】淨因の道とは清淨涅槃に至る因の道なり。

【一九一】此の淨因の道は自己の私見にあらず佛の至言にして眞の法性なり、眞の法性とは一切法無我は、卽ち是れ四諦の理にして、是れ實に諸法眞實の性なり。

【一九二】外執とは數論、勝論等。

【一九三】慧眼とは一切法無我の眞法を照す智慧眼を云ふ。

【一九四】諸佛は是れ日の如く言教は光の如し。

略を顯はし學を勸む

千聖の遊ぶ所にして、無我の性なり。
(一九四)諸佛の日のごとき言の光の照す所なり
(一九五)開くと雖も、昧眼は觀ること能はず。
(一九六)此の方隅に於いて、已に略して說く。
智者の(一九七)慧毒門を開かんが爲めなり。
庶くは、各各己が力の堪能に隨ひて、
徧く所知を悟りて勝業を成ぜよ。

國譯阿毗達磨俱舍論 終

【一九五】外道凡夫の昧眼は、無我の大道開くと雖も見ることを得ず、唯だ佛日の言教の光によりてよく之れを觀るを得るなり。

【一九六】此の方隅云云。廣大なる阿毗達磨論の中、略して一分を說くの意。

【一九七】慧毒の門云云。身體の瘡口に毒を塗れば、毒氣直ちに全身に遍滿す。是の如く、上來略說せる一端論によつて、智者が自己の力量に應じて慧解を增廣展開し、實義を悟らしむとなり。

入阿毘達磨論解題

塞建地羅阿羅漢造
三藏法師玄奘譯

傳へ曰ふ、印度迦濕彌羅國の塞建地羅論師、嘗て親しく世親菩薩に見え、問難觀察して頗る有部の宗旨を悟り、後に其の要目を述べて斯の論を著はし、以て初學入理の門閫と爲すと。

世には阿毘達磨俱舍論を以て、印度に於ける一切有部宗 (Sarvāstivādin) の所依の聖典なるが如く信じ且つ言ふものあれど、俱舍論は所謂、理長爲宗、即ち當時の佛教諸學派の長所を採つて自家の宗旨となせるものであつて、專ら有部宗の教義を述べたものではない。換言せば、俱舍論を述作される當時の世親菩薩は、最早、正統派の有部宗將ではなかつたのである。で、正統派の有部哲學の宗義を知るには、俱舍論以外の小乘の阿毘達磨論中、特に此の入阿毘達磨論を研究するのが最も捷徑である。

然るに我が國の學佛者間に於いては、何日頃から起つた傾向か知らないが、有部の哲學を研究する初入の門として、先づ七十五法名目を課するのが普通の道程のやうになつて居る。然し七十五法名目といふ書は、斯の入阿毘達磨論に比べたら、洵に天下の愚作であつて、其の義、其の文ともに、成つ

てゐない方に屬する書籍である。故に、冠註入阿毘達磨論科本例言の一節に、

『上總の沙門某、嘗て七十五法名目一卷を著はして、之を初學の徒に授く、其の擧固より嘉すべしと雖も、其の義、其の文、未だ慊なき能はず。又、七十五法記三卷あり、尾野山の僧、宗禎の記する所、稍前者に勝ること有りと雖も、亦未だ美を盡せりと謂ふ可らず。是に於いてか、播磨の沙門智暉奮然として斯の論を校し、寶曆九年八月を以て世に布く』

と言つてゐるのは、決して自讃毀他の言でも何でもなく、頗る肯綮に當つた言である。然も此の論が、七十五法名目などに比して、普く世に行はれなかつたのは、偶以て學佛者間に、如何に近眼者の多かつたかを立證して餘りありと言ふも過言ではあるまい。が、幸ひに具眼の學佛者、豐山の沙門慈光師が、之を講ずるに方つて、疏記二卷を著はし、寬政六年印行して之を後昆に貽してくれたので、學者の間に有門の寶鑰として之を珍襲し、明治の上半期の中葉頃、雲根居士、溪口一藏氏が、斯の論の版木の磨滅を慨き、公務の暇、之が校訂重刊を謀られたが、果さずして沒せられたので、大內青巒居士が其の遺緒を繼いで、明治十九年の夏、曹洞宗大學林藏版として出版された。吾吾は前記數氏の護法愛敎の熱心なる美擧に對して、大いに感謝する所がなくてはならぬ。蓋し斯の書は勿論大藏經の中に編入されてあるけれども、分科明晰解義詳密なる慈光の疏記、即ち顯宗記二卷があるので、後世の學佛者の斯の論を精讀研究するに、非常に大なる便宜を與へてくれるのである。

最後に一言注意して置きたいことは、倶舎論では、諸法の分類が『七十五』となつて居るが、斯の論では、心所の部に『厭の心所と欣の心所』と二つの心所があるから『七十七法』となつてゐること、並に倶舎論以前の有部宗では、必らずしも七十五法に限ると執した跡方のないことである。

譯者 山上曹源識

國譯(一)入阿毘達磨論

卷の上

(二)一切智の(三)佛日、無垢輪の言光、人天(四)惡趣の本心の闇を破するを敬禮す。

諸の(五)對法の理を以て、(六)法相の愚を拔除す、我れ斯の如き一切智の言藏を頂禮す。

(七)劣慧妄說の闇(八)牟尼の言を覆蔽す、照了すると明燈に由る、燃燈の者を稽首したてまつる。

(九)聰慧の者あり、能く具さに諸の牟

【一】入とは能入通達の義なり。通達とは淨慧なり。一切法を以て所通達と爲す。阿毘達磨(Abhidharma)は所入の名、譯して對法といふ。對とは無漏の淨慧と其の屬性と此の淨慧を得たる聞思修の慧と發智六足等の論とをいふ。法とは涅槃と四聖諦となり。此の淨慧等は能く涅槃に對向し、又能く四聖諦を對觀す、かるが故に對法といふ。

【二】一切智とは佛の異名、無上正等菩提を證得せるをいふ。謂ふ意は、佛は知らんと欲する所の對象に於いて、如實の智、消極的にいへば無倒の智起るが故に一切智といふ。以下序論中の三寶に歸敬する頌なり。

【三】佛日とは、佛は日輪の如く、無漏の說法は其の光照に似たり。そは能く惡趣を惑するの本心と倶なる無明の闇を破るが故なり。

【四】惡趣とは、下は地獄道より上は天上道に至るまで、生死輪廻を免かれざるが故に惡趣といふ。

【五】對法とは本書頭註の一を見よ。

【六】法相。諸法卽ち萬有は性を一にし、相を殊にす。殊別の相、外より見るべきを法相と名づく。

【七】劣慧とは、下劣の智慧の義にて、貪等の煩惱の如く、積極的の勢力あるにあらず。

【八】牟尼とは、梵語 Muni の

尼尊教の文義を受持すれども、(一〇)事業に拘はるに由りて、(一一)未だ得退せざるあり、劣慧の者あり、對法の中の名義の稠林を聞きて、便ち怖畏を生ず。

音譯なり。飜して聖者といふ。

【九】以下序論中の第二段にて所被の機根を示す。

【一〇】事業に拘はるとは、種種の事業に障礙せらるるをいふなり。

【一一】未だ得退せずとは、名と色とに耽著するが故に、精勤して正方便、卽ち四善を修するを能はず、四眞諦に於いて未だ現觀を得ず、聖慧の眼に於いて未だ得退せざるあり、未だ三乘不退の根を得ざるをいふ。

【一二】以下、序論中の第三段にして、此の論を作る理由を明す。

【一三】洞澓とは水の逆流して上るを洞といひ、水の回流するを澓といふ。

【一四】以下本論卽ち正宗分なり。

【一五】善逝とは梵語 Sugata の譯名、釋尊の十號の一なり。

【一六】句義とは、梵語の Pada の飜譯なり。

(一二)然れども倶に恆に解了を求むる心あり、彼をして阿毘達磨法相海の中の深き(一三)洞澓の處に於いて、欣樂して入り易からしめんと欲す、故に斯の論を作る。

(一四)謂く、(一五)善逝の宗に八(一六)句義あり、一に色、二に受、三に想、四に行、五に識、六に虚空、七に擇滅、八に非擇滅なり。此れ總じて一切の義を攝す。

(一七)色に二種あり、

【一七】色句義の說明。色(Rūpa)〜とは質礙といひ、今日謂ふ所〜の物質の義なるも、佛教哲學

謂く(一八)大種と及び(一九)所造色となり。大種に四あり、謂く(二〇)地〔界〕と(二一)水〔界〕と(二二)火〔界〕と(二三)風界となり。(二四)能く自共相と或は諸の所造色とを持つが故に名づけて界と爲す。

(二五)此の四大種は其の次第の如く、堅、濕、煖、動を以て自性と爲し、持、攝、熟、長を以て業と爲す。

(二六)大にして而も是れ種なるが故に大種と名づく。此に由りて虚空は大種の攝に非ず。能く自果を生ず。是れ種の義なるが故に、所造の色に遍ずるが故に名づけて大と爲す。

(二七)是の如く大種に惟四ある者は、更に用無きが故に、堪能無きが故に、牀座の足の如し。

にては、特殊の意味あることを忘る可らず。即ち(一)可見可對の色、(二)不可見可對の色、(三)不可見不可對の色の三種に分つ。その說明は本文に就て味ふべし。

【一八】大種とは 梵語の Mahā-bhūta の譯語。

【一九】所造色の名數。

【二〇】地は堅を性とし、物を支持す。

【二一】水は濕を性とし、物を收攝す。

【二二】火は煖を性とし、物を調熟す。

【二三】風は動を性とし、物を生長す。

【二四】界の義を明す。

【二五】四大の自性と其の業とを明す。即ち地の自性は堅、地の業は持、水の自性は濕、水の業は攝、火の自性は煖、火の業は熟、風の自性は動、風の業は長なり

【二六】大種と名づくる理由を明す。

【二七】四大を廢立す。大種に唯四なる理由は、四に過ぐれば色等を造るに於いて更に用なく、四より少なければ持攝等に於いて堪能なきを以つてなり。

(二八)所造の色に十一種あり、一には眼、二には耳、三には鼻、四には舌、五には身、六には色、七には聲、八には香、九には味、十には觸の一分、十一には無表色なり。大種に於いて〔體〕有なるが故に所造と名づく、卽ち是れ大種に依止して起る義なり。

(二九)此の中、眼とは謂く、(三〇)眼識の所依なり、色を見るを以て用と爲し、(三一)淨色を體と爲す。耳、鼻、舌、身も此に准じて應に說くべし。

(三二)色に二種あり、謂く顯と及び形となり、世尊の惡顯惡形と說きたまふが如し。此の中、顯色に十二種あり、謂く青、黃、赤、白、雲、煙、塵、霧、影、光、明、闇なり。形色に八種あり、謂く、長、短、方、圓、高、下、正、不正なり。

(三三)此の中、霧とは謂く、地水の氣、日焰を光と名づけ、月、星、火藥、寶珠、電等の諸焰を明と名づく。光と明とを障へて生じ、中に於いて餘色の見る可きを影と名づけ。此に翻るを闇と名づく。方は謂く、界方なり。圓は謂く、團圓なり。形平等なるを正と名づけ、形不平なるを不正と名づく。餘の色は了り易きが故に今は釋せず。

(三四)此の二十種は皆是れ眼識、及び所引の意識所了別の境なり。

(二八) 所造色の說明。
(二九) 五根を辨ず。
(三〇) 眼識とは視覺の義なり。
(三一) 淨色とは、清淨微細なる物質の義。
(三二) 色處を辨ず。
(三三) 前段中の難解の語を釋す。
(三四) 色處の說明の結末。

(三五)聲に二種あり。

(三六)謂く、(三七)有執受と及び(三八)無執受との大種を因と爲す、差別あるが故なり。自體に墮する者を有執受と名づく。是れ有覺の義なり。此れと相違するを無執受と名づく。前の所生の者を有執受大種を因と爲すと名づく。謂く語手等の聲なり。後所生の者を無執受大種を因と爲すと名づく。謂く風林等の聲なり。此に有情名と非有情名との差別を四と爲す、謂く前聲の中、語聲を有情名と名づけ、餘聲を非有情名と名づく。後聲の中、化の語聲を有情名と名づけ、餘聲を非有情名と名づく。此れ復た(三九)可意と及び不可意とに差別して八と成る。

(四〇)是の如き八種は、皆是れ耳識及び所引の意識所了別の境なり。

(四一)香に三種あり、一に好香、二に惡香、三に平等香なり。

(四二)謂く能く諸根大種を長養するを好香と名づけ、若し能く諸根大種を損害するを惡香と名づけ、若し倶に相違するを平等香と名づく。

(四三)是の如き三種は皆な是れ鼻識、及び所引の意識所了別の境なり。

【三五】聲處を辨ずる中の總標。
【三六】聲處の細釋。
【三七】有執受とは、感覺あるものの義、即ち有情物なり。
【三八】無執受とは、感覺なきものの義、即ち無情物なり。
【三九】可意とは、吾人の心に快適の感あらしむるもの、不可意は其の反對なり。
【四〇】聲處の結末。
【四一】香處の總釋。
【四二】香處の細釋。
【四三】香處の結末。

(四四)味に六種あり、謂く甘と、酢と、鹹と、辛と、苦と、淡との別あるが故なり。是の如き六種は皆な是れ舌識、及び所引の意識所了別の境なり。

(四五)觸の一分に七種あり、謂く滑性と、澁性と、重性と、輕性と、及び冷と、飢と、渴となり。

(四六)柔軟を滑と名づく、是れ喜觸の義なり。麤强を澁と名づけ、稱る可きを重と名づけ、此に翻るを輕と名づく。

(四七)此の逼る所に由りて煖欲の因を冷と名づけ、食欲の因を飢と名づけ飲欲の因を渴と名づく。此れ皆な因に於いて果の名を立つ、故に是の如き說を作す、諸佛出現樂等と說くが如し。

(四八)大種聚の中、水火增すが故に滑性あり、地風增すが故に澁性あり、地水增すが故に重性あり、火風增すが故に輕性あり、水風增すが故に冷あり、風增すが故に飢あり、火增すが故に渴あり。

(四九)無表色とは、(五〇)謂く、能く自ら諸の心心所轉變の差別を表す、故に名づけて表と爲す。彼と同

【四四】味處を辨ず。
【四五】所觸の總釋。
【四六】所觸の細釋。
【四七】所觸とは果に從つて名を立つ。
【四八】偏增に約して釋明す。
【四九】無表色を提起す。
【五〇】無表色の意義。

類なれども、而も表すること能はず。故に無表と名づく。此れ相似に於いて遮止の言を立つ。刹帝利等に婆羅門等に非ずと説くが如し。

(五一)無表の相とは、謂く、表と心と大種の差別に由りて、睡眠と、覺と、亂と、不亂と、心と、及び無心との位に於いて、善、不善の色相續して轉ずるあり。積集す可らざれども、是れ能く苾芻等を建立するの因是れ無表の相なり。此れ若し無なれば、應に苾芻等ありと建立すべからず。

(五二)世尊の説きたまへるが如し(五三)有依福業の事に於いて彼れ恆常に福增長すと。

(五四)是の如き無表に總じて三種あり、謂く(五五)律儀と、(五六)不律儀と、(五七)俱相違との所攝の故なり。

律儀に三種あり、謂く、(五八)別解脫と、(五九)靜慮と、(六〇)無漏との律儀、別なるが故なり。

別解脫律儀に復た八種あり、一に苾芻律儀、二に苾芻尼律儀、三に勤策律儀、四に正學律儀、五に

【五一】無表の相、善不善を明す。
【五二】無表の處中を明す。
【五三】有依福業。羈客、行人、病人、侍病に施すに園林を以てし、寺等に施すに、常食及び風寒等、隨時の衣藥を以てす。是の如きは所依の事あるが故に有依と名け、善の故に福と名け、作の故に業と名く。
【五四】無表色を細說す。
【五五】律儀とは、制惡の法にて無表の戒體に名く。蓋し戒體が人の身中に在つて他に表示せざれば無表といふなり。
【五六】不律儀とは、善事を防遏する事業をいふ。
【五七】俱相違とは、律儀にも不律儀にもあらざる者をいふ。
【五八】別解脫律儀とは欲界に於て戒法を受けて發生する戒體なり。
【五九】靜慮律儀とは、色界の諸定に入つて自ら發生する戒體なり。
【六〇】無漏律儀とは、無漏定に入つて發生する戒體なり。

(四四)味に六種あり、謂く甘と、酢と、鹹と、辛と、苦と、淡との別あるが故なり。是の如き六種は皆な是れ舌識、及び所引の意識所了別の境なり。

(四五)觸の一分に七種あり、謂く滑性と、澁性と、重性と、輕性と、及び冷と、飢と、渇となり。

(四六)柔軟を滑と名づく、是れ喜觸の義なり。麤强を澁と名づけ、稱る可きを重と名づけ、此に翻るを輕と名づく。

(四七)此の逼る所に由りて煖欲の因を冷と名づけ、食欲の因を飢と名づけ飲欲の因を渇と名づく。此れ皆な因に於いて果の名を立つ、故に是の如き說を作す、諸佛出現樂等と說くが如し。

(四八)大種聚の中、水火增すが故に滑性あり、地風增すが故に澁性あり、地水增すが故に重性あり、火風增すが故に輕性あり、水風增すが故に冷あり、風增すが故に飢あり、火增すが故に渇あり。

(四九)無表色とは、(五〇)謂く、能く自ら諸の心心所轉變の差別を表す、故に名づけて表と爲す。彼と同

【四四】味處を辨ず。
【四五】所觸の總釋。
【四六】所觸の細釋。
【四七】所觸とは果に從つて名を立つ。
【四八】偏增に約して釋明す。
【四九】無表色を提起す。
【五〇】無表色の意義。

類なれども、而も表すること能はず。故に無表と名づく。此れ相似に於いて遮止の言を立つ。刹帝利等に婆羅門等に非ずと說くが如し。

〔五一〕無表の相とは、謂く、表と心と大種の差別に由りて、睡眠と、覺と、亂と、不亂と、心と、及び無心との位に於いて、善、不善の色相續して轉するあり。積集す可らざれども、是れ能く苾芻等を建立するの因是れ無表の相なり。此れ若し無なれば、應に苾芻等ありと建立すべからず。

〔五二〕世尊の說きたまへるが如し〔五三〕有依福業の事に於いて彼れ恆常に福增長すと。

〔五四〕是の如き無表に總じて三種あり、謂く〔五五〕律儀と、〔五六〕不律儀と、〔五七〕俱相違との所攝の故なり。

律儀に三種あり、謂く、〔五八〕別解脫と、〔五九〕靜慮と、〔六〇〕無漏との律儀、別なるが故なり。

別解脫律儀に復た八種あり、一に苾芻律儀、二に苾芻尼律儀、三に勤策律儀、四に正學律儀、五に

【五一】無表の相、善不善を明す。
【五二】無表の處中を明す。
【五三】有依福業。羈客、行人、病人、侍病に施すに園林を以てし、寺等に施すに、常食及び風寒等、隨時の衣藥を以てす。是の如きは所依の事あるが故に有依と名け、善の故に福と名け、作の故に業と名く。
【五四】無表色を細說す。
【五五】律儀とは、制惡の法にて無表の戒體に名く。蓋し戒體が人の身中に在つて他に表示せざれば無表といふなり。
【五六】不律儀とは、善事を防遏する事業をいふ。
【五七】俱相違とは、律儀にも不律儀にもあらざる者をいふ。
【五八】別解脫律儀とは欲界に於て戒法を受けて發生する戒體なり。
【五九】靜慮律儀とは、色界の諸定に入つて自ら發生する戒體なり。
【六〇】無漏律儀とは、無漏定に入つて發生する戒體なり。

勤策女律儀、六に近事男律儀、七に近事女律儀、八に近住律儀なり。是の如き八種は惟欲界の繫なり。

靜慮律儀とは、謂く、色界の三摩地隨轉の色、此れ惟色界の繫なり。

無漏律儀とは、謂く、無漏の三摩地隨轉の色、此れ惟不繫なり。

不律儀とは、謂く、諸の屠兒と及び諸の獵獸と捕鳥と捕魚と劫盜と(六一)典獄と(六二)縛龍と煮狗と(六三)罝弶と(六四)魁膾と、此等の身中に不善の無表色相續して轉ず。

非律儀、非不律儀とは、謂く、(六五)毗訶羅と(六六)窣堵波と(六七)僧伽羅摩等とを造ると、及び(六八)制多を禮すると、燒香と散華と讃誦願等並に捶打等の所起、種種の善と不善との無表色相續して轉ず。

亦た無表の惟一刹那なるあり、總ての種類に依るが故に相續と說く。

別解脫律儀は、誓願に由りて受得す、前七は命盡に至り、第八は一晝夜なり。

又前七種は捨すること四緣に由る。[謂く]一には所學を捨するが故に、二には命盡の故に、三には善根斷の故に、四には(六九)二形生の故なり。

【六一】典獄とは、獄を守り以て生活するものをいふ。

【六二】縛龍とは、龍蛇を咒ふを習うて、戲樂し、生活するをいふ。

【六三】罝弶とは、生活のために恆に罝を設けて、諸の衆生を取るをいふ。

【六四】魁膾とは、人を殺すを主さどり生活するをいふ。

【六五】Vihāra は寺と譯す。

【六六】Stūpa は塔、又は高顯と譯す。

【六七】Saṅghārāma は大衆の樂んで住する處なり。

【六八】Caitya は、直譯すれば、積集といふべし。蓋し土石等を積集して成せる塔廟などをいふ。義譯せば靈廟といふべし。

【六九】二形生とは、半月男性、半月女性の形になるをいふ。

第八律儀は卽ち前四と及び夜盡とに由りて捨す。

靜慮律儀は色界の善心を得るに由るが故に得し、色界の善心を捨つるに由るが故に捨す。彼の心に屬するが故なり。

無漏律儀の得捨も亦た爾なり、無漏心に隨つて而も得捨するが故なり。

不律儀を得するは、(七〇)作と及び(七一)受とに由る。四緣に由るが故に不律儀を捨す、一には律儀を受くるが故に、二には命盡の故に、三には二形生の故に、四には法爾に色界の善心を得るが故なり。

(七二)處中の無表は、或は作に由るが故に得す。謂く殷淨の心と猛利の煩惱とを以て制多を禮讃すると、及び捶打する等なり。或は受に由るが故に得す。謂く是の念を作す、若し佛の爲に曼荼羅を造らずんば終に先んじて食せず、是の如き等の願なり。或は捨に由るが故に得す。謂く寺舍敷具園林を造り、慈粥等に施すなり。

此の無表を捨するは、等起心と及び所作事と倶に斷壞するに由るが故なり。

是の如き無表、及び前所說の眼等の五根は、惟だ是れ意識所了別の境なり。

此に齊つて名づけて初の色句義と爲す。

【七〇】作に由るとは不律儀の家に生れて、其の家法として、殺生等の惡法を行ずる時、此の不律儀を得するをいふ。

【七一】受に由るとは、律儀の家に生るれども、生活のために、我れ一生涯、殺生業に從事せんなどの誓をなす時、此の不律儀を得するをいふ。

【七二】處中は、中に處するの義にて非律儀、非不律儀の無表を處中無表といふ。

然るに諸の法相に略して三種あり、一に自共相、二に分共相、三に偏共相なり。

自共相とは、變壞の故に、或は變礙の故に、說いて名づけて色と爲すが如し。是の如きは卽ち可惱壞の義を說くなり。

法王の說きたまへるが如し、（七三）「苾芻當に知るべし變壞に由るが故に色取蘊と名く。誰れか能く變壞す。謂く手觸の故に卽便ち變壞す」と。乃至廣く說く。

能く疾行するが故に名けて馬と爲し、能く行くを以ての故に說いて名けて牛と爲す等の如し。

分共相とは、（七四）非常性と及び苦性と等の如し。

偏共相とは、非我性と及び空性と等の如し。

此の方隅に由りて、一切法に於いて、應に三相を知るべし。

（七五）受句義とは謂く、三種の（七六）領納なり、一に樂、二に苦、三に不苦不樂なり。

（七七）卽ち是れ三隨觸を領納する義なり。

（七八）愛と非愛と非二との觸より生ず。

【七三】雜阿含經二の十五を看よ。

【七四】非常性とは、常住性の反對にて、變遷常なきものをいふ。

【七五】以下受の意義を說く。受は感覺なり。

【七六】領納とは受け容れるの義、卽ち感覺の性は苦、樂、不苦不樂を領納するにあり。

【七七】感覺の作用を明す。

【七八】感覺の起る原因を明す。

(七九)身心の分位差別して起る所なり。
(八〇)境に於いて歡感と非二とを相と爲す。
能く(八一)愛の因と爲るが故に說いて受と名づく。
世尊の說きたまへるが如し。「觸は受を緣じ、受は愛を緣ず」と。
(八二)此れ復た識の(八三)義別に隨つて六あり、謂く眼觸所生の受、乃至意觸所生の受なり。
五識と俱に生ずるを身受と名づけ、意識と俱に生ずるを心受と名づく。根の差別に由りて五種を建立す、謂く樂根と苦根と喜根と憂根と捨根となり。諸の身悅の受と、及び第三靜慮の心悅の受とを樂根と名づく、悅は是れ攝益の義なり。諸の身不悅の受を苦根と名づく。不悅は是れ損惱の義なり。第三靜慮を除きて餘の心悅の受を喜根と名づけ、諸の心不悅の受を憂根と名づけ、諸の身及び心の非悅非不悅の受を捨根と名づく。此れ廣く分別すること根等の處の如し。
(八四)想何義とは謂く、能く相と名との義を假合して解す。

【七九】義別を示す。身とは眼耳鼻舌身の五識をいひ、心とは第六の意識をいふ。
【八〇】行相を辨ず。境とは所緣の境、卽ち客觀なり。
【八一】愛とは、愛欲の義なり。
【八二】他本には、義を差に作る。
【八三】以下六種の受、卽ち六感覺を明す。謂はく、視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺、意覺なり。
【八四】以下想の意義を明す。想とは客觀的の事物を想像する心的作用なり。

即ち青黃長短等の色と、螺鼓等の聲と、沈麝等の香と、鹹苦等の味と、堅軟等の觸と、男女等の法の相と名との義の中に於いて假合して解し、(八五)尋(八六)伺の因と爲るが故に名づけて想と爲す。此れに識の別に隨つて六あること受の如し。小と大と無量との差別に三あり、謂く小境を緣ずるが故に小想と名づけ、妙高等の大法の境を緣ずるが故に大想と名づけ、空無邊處等に隨つて無量想と名づく、或は三界に隨つて此の三名を立つ。

(八七)行に二種あり、謂く相應行と不相應行なり。

相應行とは、謂く、思、觸、欲、作意、勝解、念、定、慧、尋伺、信、精進、慚愧、不放逸、輕安、不害、捨、欣、厭、不信、懈怠、放逸、善根、不善根、無記根、結、縛、隨眠、隨煩惱、纒、漏、暴流、軛、取、身繫、蓋、及び智、忍等の諸の心所法なり。

此れ皆な心と、所依と、所緣と、行相と、時と、事との五義等しきが故に、說いて相應と名づく。此と相違するを不相應と名づく。謂く、得、非得、無想定、滅定、無想事、命根、衆同分、生、住、老、無常、名身、句身、文身等なり。

是の如き相應と不相應との行を總じて行蘊と名づく。故に大仙の說く、行蘊は聚集す、芭蕉の莖の

【八五】尋（Vitarka）とは、事理を尋求する麁性の作用なり。
【八六】伺（Vicara）とは、事理を伺察する細性の作用なり。
【八七】以下行の意義を說く。行とは、客觀に對して、瞋り貪る等の善惡に關する一切の心的作用なり。

如しと。

（八八）思は謂く、能く心をして造作あらしむ。卽ち是れ意業なり。亦た是れ心をして運動せしむるを義と爲す。此れ善と不善と無記と異るが故に三種の別あり。

（八九）觸は謂く、根と境と識と和合して生じ、心をして境に觸れしめ、能く心所を養活するを以て相と爲す、樂受等に順ひて差別するに三あり。

（九〇）欲は謂く、所作の事業を希求し、精進に隨順す、謂く「我れ當に是の如きの事業を作すべし」と。（九一）作意は謂く、能く心をして警覺せしむ。卽ち是れ心を引いて境に趣くを義と爲す。亦た是れ（九二）曾受の境等を憶持す。此れに三種あり、謂く學、無學、非學非無學なり。（九三）七有學身中の無漏の作意を學と名づけ、阿羅漢身中の無漏の作意を無學と名け、一切有漏の作意を非學非無學と名く。

（九四）勝解は謂く、能く境に於いて印可す。卽ち是れ心をして所緣の境に於いて怯弱無からしむるの義なり。

（九五）念は謂く、心をして境に於いて明記せしむ。卽ち是れ（九六）已今當作の諸の事業を忘れざ

【八八】思(Cetanā)の義解。
【八九】觸(Sparśa)の義解。
【九〇】欲(Chanda)の義解。
【九一】作意(Manaskāra)の義解。
【九二】曾受の境とは、曾て受け入れたる感覺の對象なり。
【九三】七有學とは、未だ學すべきもの有する七種の階級にある人の意にて、小乘の謂ゆる七聖のことなり。聖とは正なり、正智を以て眞理を照見する者に名く。見道以上の者これなり。其の聖者の位次を差別して八種とす、四向四果これなり。七聖とは第四果の阿羅漢を除ける四向三果の位にある人をいふ。
【九四】勝解(Adhimokṣa)の義解。
【九五】念(Smṛti)の義解。
【九六】已今當作とは過去(已)と

るの義なり。

(九七)定は謂く、心をして一境に專注せしむ。卽ち是れ猨猴の如き心を制して、惟だ一境に於いて轉ずる義なり。(九八)毗婆沙者は是の如きの說を作す、「蛇の筒に在りて行くに、便ち曲らざるが如し」と、心若し定に在れば正直にして轉ず。

(九九)慧は謂く、法に於いて能く揀擇あり。卽ち是れ攝と、相應と、成就と、諸の因と、緣と、果と自相と、共相との八種の法の中に於いて、其の所應に隨つて觀察するを義と爲す。

(一〇〇)尋は謂く、境に於いて心をして麤ならしむるを相と爲す、亦た分別と名づく。思惟想風に擊せられ麤動にして轉ず、此の法は卽ち是れ五識の轉因なり。

(一〇一)伺は謂く、境に於いて心をして細ならしむるを相と爲す。此の法は卽ち是れ意識に隨順して境に於ける轉因なり。

(一〇二)信は謂く、心をして境に於いて澄淨ならしむ。謂く三寶と因果相屬と有性等の中に於いて現前忍許す。故に名づけて信と爲す。是れ能く心の濁穢の法を除遣す。淸水珠を池內に置くに濁穢の水をして皆な澄淸ならしむるが如し。是の如きの信珠、心池の內に在れば、心の諸の濁穢皆な卽ち

現在(今)と未來(當)とに作すことの義なり。

【九七】定(Samādhi)の義解。音譯して三摩地ともいふ。

【九八】毗婆沙者とは、大毗婆沙論を編輯せる人人の義なり。

「蛇の筒に在りて云云」は同論百八十卷に出づ。

【九九】慧(Mati)の義解。

【一〇〇】尋(Vitarka)の義解。

【一〇一】伺(Vicāra)の義解

【一〇二】信(Śraddhā)の義解。

除遣す。佛は菩提を證すと信じ、法は是れ善說なりと信じ、僧は妙行を具すと信じ、亦た（一〇三）一切外道の迷ふ所の緣起と法性とを信ず、是れ事業を信ずるなり。

（一〇四）精進は謂く、善と不善との法の生滅する事の中に於いて勇悍なるを性と爲す。卽ち是れ生死の泥に沈溺する者をして、能く心を策勵して速に出さしむるの義なり。

（一〇五）慙は謂く、正理に隨順し、（一〇六）自と（一〇七）法との增上の所生にして、愛の等流に違す。心自在の性は、此の勢力に由りて、諸の功德、及び有德の者に於いて恭敬して住す。

（一〇八）愧は謂く、功德を修習するを先と爲し、癡の等流に違し、劣法を訶毀す。此の勢力に由りて、罪に於いて怖を見る。

（一〇九）不放逸は謂く、諸の善法を修し、放逸に違害し、心を守護するの性なり。

（一一〇）心堪任の性を說いて輕安と名づく。惛沈に違害し、善法に隨順す。

（一一一）心堅善の性を說いて不害と名づく。此の勢力に由りて他を損惱せず、能く他に於いて樂んで損事を爲すに違す。

【一〇三】凡ての外道は、十二緣起と、法性と、因果相屬とに迷ふが故に、斯くいへるなり。
【一〇四】精進(Vīrya)の義解。
【一〇五】慙(Hrī)の義解。
【一〇六】自とは、自身の義。
【一〇七】法とは、佛法に定むる法律の義。
【一〇八】愧(Apatrapā)の義解。
【一〇九】不放逸(Apramāda)の義解。
【一一〇】輕安(Praśrabdhi)の義解。
【一一一】不害(Ahiṁsā)の義解。

(二二)心平等の性を說いて名づけて捨と爲す。非理に背き、及び理に向ふことを捨するが故なり。此の勢力に由りて、心をして理に於いて、及び非理に於いて、向無く背無く、平等にして住せしむること、秤を持する縷の如し。

(二三)欣は謂く、〔滅道を〕欣尙し、(二四)還滅品に於いて功德を見已つて心をして欣慕し、隨順して善を修せしむ。心此にあるが故に涅槃を欣樂す。此れを相應するを欣の作意と名づく。

(二五)厭は謂く、厭患なり。(二六)流轉品に於いて過失を見已つて心をして厭離して離染に隨順せしむ。心此にあるが故に生死を厭惡す、此れと相應すると厭作意と名づく。

(二七)心淸淨ならざるを名づけて不信と爲す。是れ前に說く所の信と相違する法なり。

(二八)心勇悍ならざるを名づけて懈怠と爲す。前に說く所の精進と相違す。

(二九)善法を修せざるを名づけて放逸と爲す。前に說く所の不放逸の性に違す。卽ち是れ心を守護する能はざるの義なり。

是の如く說く所の不信等の三を、隨眠及び纏垢に立てざるは、過失輕きが故なり。除遣し易きが故

【二二】捨(Upekṣa)の義解。

【二三】欣の義解。この心所は俱舍論になし。

【二四】還滅品とは滅に還るといふ意味にて、道を修して人生の苦を滅ぼし、涅槃を證して、本家鄉に還るの義。

【二五】厭の義解。この心所は俱舍論になし。

【二六】流轉品とは、諸業を造りて、生死の果を受け六道の間に流轉する義なり。

【二七】不信(Aśraddha)の義解。

【二八】懈怠(Kausīdya)の義解。

【二九】放逸(Pramāda)の義解。

なり。

(二二〇)善根に三種あり。

一に(二二一)無貪、是れ貪法に違す。二に(二二二)無瞋、是れ瞋法に違す。三に(二二三)無癡、是れ癡法に違す。即ち前に說く所の慧を自性と爲す。

是の如き三法は是れ善の自性なり。亦能く根と爲りて餘の善法を生ず、故に善根と名づく。安穩の義は是れ善の義なり、能く可愛の有及び解脫の芽を引くが故なり。或は已に習學して巧便を成ずるの義は是れ善の義なり、此に由りて能く妙色像を辨ずるが故なり。彩畫師の妙色像を造るを、世稱して善と爲すが如し。

(二二四)不善根に三種あり、即ち前所治の貪瞋癡の三なり。貪は謂く、欲界五部の貪なり。瞋は謂く、五部の瞋なり。癡は謂く、欲界三十四の無明なり、(二二五)有身見と、及び(二二六)邊執見との相應の無明を除く。

是の如き三法は、是れ不善の自性なり。亦た能く根と爲りて、餘の不善を生ず、故に不善根と名づく。不安穩の義は是れ不善の義なり、能く非愛の諸有の芽を引くが故なり。或は未だ習學せず、巧便に非ざる義は是れ不善の義なり。此に由りて能

【二二〇】三種の善根の義解。
【二二一】無貪 Alobha)とは、順境に於いて貪著なきをいふ。
【二二二】無瞋(Adveṣa)とは、逆境に於いて瞋恚せざるをいふ。
【二二三】無癡とは因果の法を信じて、愚癡ならざるをいふ。
【二二四】三種の不善根の義解。
【二二五】有身見は身見ともいふ、これ五見の一、身に實我ありと執する邪見なり。
【二二六】邊執見は邊見ともいふ。前の身見を起し、「我は常住なり」、若くは斷滅す」と一方に偏する惡見にて、これ又五見の一なり。

く惡色像を辨ずるが故なり。彩畫師の所造妙ならざれば、世不善と稱するが如し。

（二七）無記根に四種あり、謂く愛と見と慢と無明となり。愛は謂く、色、無色界の各五部の貪なり。見は謂く、色、無色界の各十二見、及び欲界の有見と邊執見となり。慢は謂く、色、無色界の各五部の慢なり。無明は謂く、色、無色界の一切の無明、及び欲界の有身見と邊執見との相應の無明となり。此の四無記根は是れ自の許す所にして、靜慮を修する者に三種の異あるが故なり、一に愛上靜慮者、二に見上靜慮者、三に慢上靜慮者なり。此の三は皆な無明の力に因りて起る。

毘婆沙者の無記根を立つるに惟だ三種あり、謂く無記の愛と無明と慧との三なり。

疑は堅住せず、慢の性は高擧す、根法に非ざるが故なり。

（二八）善、不善の義に於いて、倶に記せざるが故に無記と名づく。又愛、非愛の果を記すること能はざるが故に無記と名づく、（二九）異熟果を招くこと能はざるを以ての故なり。

是の無記性は亦た能く餘の無記の染法、或は諸の無記法を生ずるが故に無記根と名づく。

（三〇）結に九種あり、謂く愛結。恚結、慢結、無明結。見結、取結、疑結、嫉結、慳結なり。

【二七】四種の無記根の義解。
【二八】無記と名くる理由。
【二九】異熟果とは、果が因の性質に異りて成熟するをいふ。
【三〇】九結の義解。

(一三一)愛結とは謂く、三界の貪、是れ染著の相なり。融たる膠漆の如し、故に名づけて愛と爲す。愛卽ち是れ結なるが故に愛結と名づく。

(一三二)恚結とは謂く、五部の瞋、有情等に於いて、樂みて損害を爲す。不饒益の相なり。辛苦の種の如し、故に名づけて恚と爲す。恚卽ち是れ結なるが故に恚結と名づく。

(一三三)慢結とは謂く、三界の慢なり。自を以て他の德類に方りて差別する心、恃擧の相を說いて名づけて慢と爲す。傲逸の者の他を凌蔑するが如し。

此れに復た七種あり。(一三四)一に慢、二に過慢、三に慢過慢、四に我慢、五に增上慢、六に卑慢、七に邪慢なり。

謂く、族姓・財位・色力・持戒・多聞・工巧等の事に因りて、若しは劣に於いて己れ勝ると謂ひ、或は等に於いて己れと等しと謂ふ、此に由りて心をして高擧ならしむるを慢と名づく。若しは等に於いて己れ勝ると謂ひ、或は勝に於いて己れと等しと謂ふ、此に由りて心をして高擧ならしむるを過慢と名づく。若しは勝に於いて己れ勝ると謂ふ、此に由りて心をして高擧ならしむるを慢過慢と名づく。若しは五取蘊に於いて我我所を執し、此に由りて心をして高擧ならしむるを我慢と名づく。若しは未だ預流果等の殊勝の德を證得せざる中に於いて已に證得すと謂ひ、此に由りて心をして高擧ならしむるを增上慢と名づく。若しは多分族姓等の勝の中に於いて

【一三一】愛結の義解。
【一三二】恚結の義解。
【一三三】慢結の義解。
【一三四】七種の慢。

己れ少劣なりと謂ひ、此に由りて心をして高擧ならしむるを卑慢と名づく。若しは實に德無きに、己れ德ありと謂ひ、此に由りて心をして高擧ならしむるを邪慢と名づく。是の如き七慢を總じて慢結と名づく。

〔一三五〕無明結とは謂く、三界の無知なり、解了せざるを以て相と爲す、盲瞽者の如し。明に違害するが故に無明と名づく。此れ遮止の言、對治の義に依る。非親友と不實等の言は、卽ち怨家虛誑語等を說くが如し。無明卽ち是れ結なるが故に無明結と名づく。

〔一三六〕見結とは謂く、三見なり、卽ち有身見、邊執見、邪見なり。五取蘊の中に我我所無し、而も實に我我所の相ありと執す。此の染汙の慧を有身見と名づく。身は是れ聚の義なり。有にして而も是れ身の故に有身と名づく。卽ち五取蘊此に於いて見を起すを有身見と名づく。卽ち五取蘊は斷に非ず常に非ざれども、中に於いて斷常の二相ありと執す。此の染汙の慧を邊執見と名づく、二邊を執するが故なり。若し決定して業無く、業果無く、解脫無く、解脫を得る道無しと執して實事を撥無せば、此の染汙の慧を邪見と名づく。是の如き三見を見結と名づく。

〔一三七〕取結とは謂く、二取なり、卽ち見取と戒禁取となり。謂く、前の三見と及び五取蘊とに、實に是れ勝に非ざれども、而も取りて勝と爲す。此の染汙の慧を見取と名づく。取は是れ推求及び堅執の義

〔一三五〕無明結の義解。
〔一三六〕見結の義解。
〔一三七〕取結の義解。

なり。戒は謂く、諸の破戒の悪を遠離す。禁は謂く、烏と雞と、鹿と狗と、露形と抜髪と、断食と臥灰とを受持し、或は妄に福を生じ罪を滅すと執し、諸の河池の中に於いて数数澡浴し、或は根果草薬物を食して以て自ら活命し、或は復た灰を塗り頭髻を持する等皆な名づけて禁と為す。此の二倶に能清浄道に非ざるに、而も妄りに取りて能清浄道と為す、此の染汙の慧を戒禁取と名づく。

諸の婆羅門多聞なる者あり、多く此の法を執して以て浄道と為す。而も彼れ畢竟浄を得ること能はず。是の如きを名づけて取結と為す。

【三八】疑結の義解。
【三九】嫉結の義解。
【四〇】慳結の義解。

(三八)疑結とは謂く、四聖諦に於いて心をして猶豫ならしむ。岐路に臨んで結草を見、八躊躇して決せざるが如し。是の如く、苦に於いて、心に猶豫を生じ、是と為し非と為し、乃至廣く説く。疑即ち是れ結なるが故に疑結と名づく。

(三九)嫉結とは謂く、他の勝事に於いて心をして忍ばざらしむ。謂く、他の恭敬・供養・財位・多聞、及び余の勝法を得るに於いて、心に妬忌を生ず、是れ不忍の義なり。嫉即ち是れ結なるが故に嫉結と名づく。

(四〇)慳結とは謂く、己が法と財とに於いて、心をして怖惜ならしむ。謂く、我が所有を他に至ること勿らしめんと。慳即ち是れ結なるが故に慳結と名づく。

〔四一〕結の義は此れ縛の義なり。世尊の說きたまふが如し。眼、色を結するに非ず、色、眼を結するに非ず、此の中、欲貪を說いて名づけて結と爲す。黑牛、白牛を結するに非ず、亦た白牛、黑牛を結するに非ざるが如し。乃至廣く說く。

先に說く所の結は亦た卽ち是れ縛なり、卽ち結の義は是れ縛の義なるを以ての故なり。然るに契經の中に復た三縛を說く、一に貪縛、謂く一切の貪を愛結相の如く說く。二に瞋縛、謂く一切の瞋を恚結相の如く說く。三に癡縛、一切の癡を無明結相の如く說く。

〔四二〕隨眠に七種あり、一に欲貪隨眠、二に瞋隨眠、三に有貪隨眠、四に慢隨眠、五に無明隨眠、六に見隨眠、七に疑隨眠なり。此の七の別相は結の中に已に說けり。

然れども應に界と行相と部との別に依りて、是の如き七種の隨眠を分別すべし。謂く諸欲を貪るが故に欲貪と名づく。此れ唯だ欲界の五部を五と爲す、謂く見苦所斷乃至修所斷なり。瞋隨眠も亦た唯だ欲界の五部を五と爲す。有貪隨眠は唯だ色、無色界に各五部を十と爲す、內門轉の故に、靜慮と無色との解脫の想を遮せんが爲めの故に、二界の貪を說いて有貪と名づく。慢隨眠は三界に通じて各五部あり、十五と爲す、無明隨眠も亦た爾り。見隨眠は三界に通じて各十

【四一】結の意義。

【四二】七種の隨眠を說く。隨眠とは、貪瞋等の煩惱、有情に隨逐して離れず、而も煩惱の狀態幽微にして了知し難きこと、猶ほ睡眠の狀態の如くなるをいふ。

二あり、三十六と爲す。謂く欲界見苦所斷に五見を具し、見集滅所斷に唯だ邪見及び見取の二あり、見道所斷に唯だ邪見及び見取と戒禁取との三あり、總じて十二と爲す。上二界も亦た爾り、三十六と爲す、疑隨眠は三界に通じて各四部あり、十二と爲す、謂く見苦集滅道所斷なり。

此の中、欲貪及び瞋隨眠は、唯だ部別のみありて界と行相との別無し。有貪と疑と慢と無明との隨眠は、界と部との別ありて行相の別無し、見隨眠は具に界と行相と部との別あり。

〔一四三〕行相の別とは謂く、我我所の行相に轉ずる者を有身見と名づけ、斷常の行相に轉ずる者を邊執見と名づけ、無の行相に轉ずる者を邪見と名づけ、勝の行相に轉ずる者を見取と名づけ、淨の行相に轉ずる者を戒禁取と名づく。

〔一四四〕微細の義は是れ隨眠の義なり。彼れ現起する時、覺知し難きが故なり。

或は隨縛の義は是れ隨眠の義なり。謂く身心の相續に隨つて轉ず。空行の影は水行に隨ふが如くなるが故なり。

或は隨逐の義は是れ隨眠の義なり。油の麻にあり、膩の摶に在るが如くなるが故なり。

或は隨增の義は是れ隨眠の義なり。謂く、五取蘊に於いて、所緣と相應とに由りて、隨增するが故なり。隨增と言ふは謂く。所緣と及び相應との門に隨つて增長するが故なり。

【一四三】行相の別の意義。

【一四四】以下隨眠の種種の義を釋明す。一に微細の義、二に隨縛の義、三に隨逐の義、四に隨增の義。

是の如き七種の隨眠は界と行相と部との差別に由るが故に九十八隨眠を成ず。謂く、欲界見苦所斷に十隨眠を具す、卽ち有身見、邊執見、邪見、見取、戒禁取、疑、貪、瞋、慢、無明なり。見集所斷に七隨眠あり、前の十の中に於いて有身見と邊執見と戒禁取とを除く。見滅所斷に七隨眠あるも亦た爾り。見道所斷に八隨眠あり、謂く卽ち前の七に戒禁取を加ふ。修所斷に四隨眠あり、謂く貪、瞋、慢、無明なり。是の如く、欲界に三十六隨眠あり、色界に三十一隨眠あり。謂く、欲界三十六の中に於いて五部の瞋を除く。無色界も亦た爾り。故に九十八隨眠あり。

(一四五)中に於いて八十八は見所斷、十は修所斷なり。

(一四六)三十三は是れ遍行なり。謂く、界界の中、見苦集所斷の諸見と疑と及び彼の相應と不共との無明なり。餘は皆な遍行に非ず。

(一四七)十八は是れ無漏緣なり。謂く、界界の中、見滅道所斷の邪見と疑と及び彼の相應と不共との無明なり。此の十八種は滅道を緣ずるが故に無漏緣と名づく。餘は皆な有漏緣なり。此の中、有漏緣は所緣と相應とに由るが故に隨増す。無漏緣は但だ自聚に於いて相應に由るが故に隨増す。

(一四八)九は是れ無爲緣なり。謂く、界界の中、見滅所斷の邪見と疑と及び彼の相應と不共との無明滅道を緣ずるが故に無爲緣と名づく。餘は皆な有爲緣なり。

【一四五】見修分別。
【一四六】遍非遍分別。
【一四七】漏無漏緣分別。
【一四八】爲無爲緣分別。

〔一四九〕十種の隨眠の次第に生ずることは、先づ無明に由りて〔四〕諦に於て了せず、謂く、苦に於て欲せず、乃至道に於いて欲せず。了せざるに由るが故なり。次に疑を引生す。謂く、邪正二品を聞いて便ち猶預を懷き、苦非苦と爲んや、乃至道非道と爲んやと。此の猶預より邪見を引生す。謂く、惡友に遇うて邪の聞と思とに由りて邪決定を生じ、施與無く愛樂無く祠祀無し、乃至廣說す。此の邪見よりして有身見生ず。謂く、取蘊の中、苦の理を撥無して、便ち我あり我所ありと執す。有身見より邊執見生ず。謂く、我は斷常の邊ありと執す。邊執見より戒禁取生ず。謂く、此の邊執を能淨と爲すが故なり。戒禁取より見取を引生す。能淨の者、是れ最勝と謂ふが故なり。此の見取より次に貪を引生す。謂く、自見の中、情深く愛するが故なり。此の貪より後、次に慢を引生す。謂く、自見の中、深く愛著し已つて恃んで高擧を生じ、他を淩蔑するが故なり。此の慢より後、次に瞋を引いて生ず。謂く、己見を恃んで他見の中に於いて情忍ぶ能はず、必ず憎嫌するが故に、或は自見取捨の位の中に於いて憎嫌を起すが故なり。十種の隨眠の次第、是の如し。

【一四九】隨眠の生起する次第。

【一五〇】隨眠生起の三類の因緣を辨す。

〔一五〇〕三の因緣に由りて諸の煩惱を起す。一には未だ隨眠を斷せざるが故に、二には非理の作意の故に、三には境界現前の故なり。因と加行と境界との三力に由りて煩惱現前す、此れ具する者を說く。亦た唯だ境界の力に依りて煩惱を起すとあり、身心の相續を擾亂し、逼惱するが故に煩惱と名づく、

此れ即ち隨眠なり。

〔一五一〕隨煩惱とは即ち諸の煩惱を亦た隨煩惱と名づく。復た隨煩惱あり、謂く、餘の一切行蘊所攝の染汙の心所と、諸の煩惱と同蘊に攝するが故なり。

此れ復た云何ん。謂く、誑・憍・害・惱・恨・諂等無量種あり、〔一五二〕聖教に說くが如し。誑は謂く、他を惑はすなり。憍は謂く、自身所有の色力・族・姓・淨・戒・多聞・巧辯等に染著し已りて心をして傲逸して顧る所無からしむる性なり。害は謂く、他に於いて能く逼迫を爲す、此に由りて能く打罵等の事を行ふ。惱は謂く、諸の有罪事を堅執す、此に由りて如理諫誨を受けず。恨は謂く、忿所緣の事の中に於いて數數尋思して怨を結んで捨てず。諂は謂く、心曲なり。是の如き六種は煩惱より生じて穢汙の相、麤なるを煩惱垢と名づく。

此の六種の煩惱垢の中に於いて誑、憍の二種は是れ貪の等流。貪の種類なるが故なり。害、恨の二種は是れ瞋の等流、瞋の種類なるが故なり、惱垢は即ち是れ見取の等流、己見勝ると執する者は自他を惱亂するが故なり。諂垢は即ち是れ諸見の等流、諸見增する者は諂曲多きが故なり。諂曲は謂く、諸の惡見なりと說くが如し。

〔一五三〕此の垢及び纏並に餘の染汙は行蘊の所攝なり、諸の心所の法は煩惱より生ずるが故に皆な隨煩惱と名づく。

【一五一】隨煩惱の義解。
【一五二】聖教とは、法蘊足雜事品中に八十九種を說く。
【一五三】十種の纏を明す。

纏に十種あり、謂く、惛沈と、睡眠と、掉擧と、惡作と、嫉と、慳と、無慚と、無愧と、忿と、覆となり。

(一五四)身心の相續に堪任無き性を名づけて惛沈と爲す、是れ昧重の義なり。

(一五五)身心の相續を任持する能はず、心をして昧略ならしむるを名づけて睡眠と爲す。此れ纏の名を得るは唯だ染汙に依る。

(一五六)掉擧は謂く、心をして寂靜ならざらしむ。

(一五七)惡所作の體を名づけて惡作と爲す。別の心所ありて惡作を縁じて生ず、惡作の名を立つ、是れ追悔の義なり。此れ果體に於いて因の名を假立す。空を縁ずるを空と名づけ、不淨を縁ずるを不淨と名づくるが如し、世間亦た處を以て處に依る者を說いて一切村邑來等と言ふが如し。此の纏の名を立つることは亦た唯だ染に依る。

嫉、慳の二相は結の中に已に說きたり。

(一五八)諸の功德及び有德者に於いて心をして不敬ならしむるを說いて無慚と名づく。即ち是れ恭敬に敵對する所の法なり。

(一五九)諸罪の中に於いて怖畏を見ざるを說いて無愧と名づく、能く惡趣を招きて善士に訶せらるるを

【一五四】惛沈の義解。
【一五五】睡眠の義解。
【一五六】掉擧の義解。
【一五七】惡作の義解。
【一五八】無慚の義解。
【一五九】無愧の義解。

說いて名づけて罪と爲す。

(一六〇)瞋及び害を除いて情非情に於いて心をして憤發せしむるを說いて名づけて忿と爲す。

(一六一)自罪を隱藏するを說いて名づけて覆と爲す。

此の十は身心の相續を纏縛するが故に名づけて纏と爲す。

此の中、惛沈と、睡眠と、無愧とは、是れ無明の等流、惡作は是れ疑の等流、無慚と、慳と、掉擧とは、是れ貪の等流、嫉と忿とは、是れ瞋の等流、覆は是れ貪と無明との等流なり。

諸の心所法の行相は微細にして、一一の相續分別すら尙ほ難し、況んや一刹那に倶時にして而も有るをや。微密なる智者は佛の所說に依りて、果の差別を觀じて、其の性の異を知り、諸の學者の爲めに無倒に宣說す。劣慧の者あり、未だ親しく無倒に佛語を解釋する諸師に承事せざるが故に、心所に於いて迷謬誹撥し、或は唯三と說き、或は全く有に非ずと云ふ。

(一六二)漏に三種あり、謂く欲漏、有漏、無明漏なり。

欲界の煩惱並に纏は無明を除いて欲漏と名づく、四十一物あり。謂く、三十一隨眠と並に十纏となり。色、無色界の煩惱、並に纏は、無明を除いて有漏と名づく、五十四物あり。謂く、上二界の各二十六隨眠と、並に惛沈と掉擧となり。同無記の故に、內門轉の故に、定地に依るが故に、二界合して

【一六〇】忿の義解。
【一六一】覆の義解。
【一六二】三種の漏を明す。

一の有漏の名を立つ。三界の無明を無明漏と名づく、十五物あり。無明は是れ諸有の本なるを以ての故に別に漏等を立つ。

(一六三)有情を稽留して三界に久住せしめ、解脱に趣くを障ふるが故に名づけて漏と爲す。或は流轉して有頂天より無間獄に至らしむ、故に名づけて漏と爲す。或は彼の相續は六瘡門に於いて、過を泄し窮無きが故に、名づけて漏と爲す。

(一六四)暴流に四あり、謂く、欲と有と見と無明との暴流なり。欲漏の中に見を除いて欲暴流と名づく、二十九物あり。有漏の中に見を除いて有暴流と名づく、三十物あり。三界の諸見を見暴流と名づく、三十六物あり。三界の相應と不共との無明を無明暴流と名づく、十五物あり。

(一六五)一切有情の勝事を漂奪するが故に暴流と名づく、水の暴流の如し。

(一六六)軛に四種あり、暴流に說くが如し。有情を和合して諸界、諸趣、諸生、諸地に於いて、苦を受けしむるが故に名づけて軛と爲す。卽ち是れ和合して種種輕重の苦を受けしむるの義なり。

【一六三】漏の義解。
【一六四】四種の暴流を明す。
【一六五】暴流の義解。
【一六六】四種の軛を明す。

卷の下

（一）取に四種あり。謂く欲取と、見取と、戒禁取と、我語取となり。即ち欲暴流に無明を加へて欲取と名づく。三十四物あり。謂く、貪と瞋と慢と無明との各五と、疑の四と、纏の十となり。即ち有暴流に無明を加へて我語取と名づく、四十物あり。謂く、貪と慢と無明とは各十、疑に八、及び惛沈と掉擧となり。諸見の中、戒禁取を除きて餘を見取と名づく、三十物あり。戒禁取を戒禁取と名づく、六物あり。此は獨り聖道の怨の爲めに由り、雙に在家出家衆を誑すが故なり。五見の中に於いて、此に別に取を立つ、謂く、在家の衆は此の誑惑に由りて自ら餓ゑ氣を服し、及び山巖等より墜ちて天道爲りと計し、可愛の境を捨し（二）杜多の功德を受け淨道なりと計するが故なり。

（三）薪の義は是れ取の義なり。業火をして熾然として相續して生長せしむるが故なり。薪あるが故に火熾然を得るが如し。是の如く煩惱あるが故に有情の業生長することを得。又猛利の義は是れ取の義なり。或は纏裏の義是れ取の義なり。蠶の繭に處り、自ら纏うて死するが如し。是の如く、有情の四種纏せられ、生死に流轉して慧命を喪失す。

【一】四種の取を明す。
【二】杜多(Dhūta)は洮汰又は修治と飜じ、或は斗藪又は棄除とも譯す。
【三】取の義解。

【四】四種の身繫を明す。
【五】五種の蓋を明す。
【六】界、趣、生、地を分別す。
【七】欲界の二十處を明す。

(四)身繫に四種あり、謂く、貪欲身繫、瞋恚身繫、戒禁取身繫、此實執身繫なり。欲界の五部の貪を初身繫と名づけ、五部の瞋を第二身繫と名づけ、六の戒禁取を第三身繫と名づけ十二見取を第四身繫と名づく。種種に有情の自體を纏縛するが故に身繫と名づく。是れ等しく有情の身を羂網する義なり。

(五)五蓋に五種あり、謂く、貪欲蓋、瞋恚蓋、惛沈睡眠蓋、掉擧惡作蓋、疑蓋なり。欲界の五部の貪を初蓋と名づけ、五部の瞋を第二蓋と名づけ、欲界の惛沈及び不善睡眠を第三蓋と名づけ、欲界の掉擧及び不善惡作を第四蓋と名づけ、欲界の四部の疑を第五蓋と名づく。聖道と及び離欲染と、並に此の二種の加行の善根を覆障するが故に名づけて蓋と爲す。

(六)前に說ける諸界、諸趣、諸生、諸地の受苦を應に說くべし。云何んが界趣生地なる。界に三種あり、謂く、欲界、色界、無色界なり。

(七)欲界に二十處あり、謂く、八大地獄——一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に號叫、五に大號叫

六に炎熱、七に極炎熱、八に無間――幷に傍生鬼界を十と爲す。四洲人あり、一に瞻部洲、二に勝身洲、三に牛貨洲、四に俱盧洲なり。六欲天あり、一に四大王衆天、二に三十三天、三に夜摩天、四に覩史多天、五に樂變化天、六は他化自在天なり、合して二十處なり。

（八）色界に十六天處あり。謂く、初靜慮に二處あり、一に梵衆天、二に梵輔天なり。第二靜慮に三天あり。一に少光天、二に無量光天、三に極光淨天なり。第三靜慮に三天あり、一に少淨天、二に無量淨天、三に遍淨天なり。第四靜慮に八天あり、一に無雲天、二に福生天、三に廣果天、四に無煩天、五に無熱天、六に善現天、七に善見天、八に色究竟天なり。合して十六處なり。大梵無想は別の處所無きが故に十八に非ず。

（九）無色界には、上下處所無しと雖も、而も四種の生處の差別あり。一に空無邊處、二に識無邊處、三に無所有處、四に非想非非想處なり。

（一〇）趣に五種あり、一に捺洛迦、二に傍生、三に鬼界、四に天、五に人なり。

（一一）生に四種あり。謂く、卵、胎、濕、化なり。

（一二）地に十一あり、謂く、欲界と、未至と、靜慮の中間と、四靜慮と、四無色とを十一地と爲す。欲界の有頂は一向有漏なり。餘の九地は有漏及び無漏に通じ、前の界趣生は一向有漏なり。

【八】色界の十六處を明す。
【九】無色界の四處を明す。
【一〇】五趣を明す。
【一一】四生を明す。
【一二】十一地を明す。

（一三）智に十種あり、謂く、法智、類智、世俗智、他心智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智なり。

（一四）欲界の諸行と、及び彼の因と滅と加行と無間と解脱と勝進との道と、並に法智地との中に於いて所有無漏智を法智と名づく。

無始時來常に我執を懷き、今創めて法を見るが故に法智と名づく。

（一五）色無色界の諸行と、及び彼の因と滅と加行と無間と解脱と勝進との道と、幷に類智との中に於いて、所有無漏智を類智と名づく。

法智に隨つて生ずるが故に類智と名づく。

（一六）諸の有漏の慧を世俗智と名づく。

此の智多く瓶衣等の世俗の事に於いて轉ずるが故に世俗智と名づく。

（一七）此に二種あり、一に染汚、二に不染汚なり。染汚なる者に復た二種あり、一に見性、二に非見性なり。見性に五あり、謂く有身見、邊執見、邪見、見取、戒禁取なり。非見とは、謂く、疑と貪と瞋と慢と無明と忿と害等と相應の慧なり。不染汚なる者に亦た二種あり、一に善、二に無覆無記なり。無覆無記とは見に非ず、推度せざるが故なり、是れ慧及び智なり。善なる者は若し五識と倶なるは亦た見に非ず、是れ慧及び智なり。若し意識と倶なるは是れ世俗の正見にして亦た慧亦た智なり。

【一三】十智を辨ず。
【一四】法智を釋明す。
【一五】類智を釋明す。
【一六】世俗智を釋明す。
【一七】二種の世俗智。

【一八】諸定より生ずる智の能く他の欲色界繫と、一分の無漏の現在相似の心心所法を了知するを他心智と名づく。

【一九】此に二種あり、一に有漏、二に無漏なり。有漏とは能く他の欲色界繫の心心所法を了知す。無漏とは二種あり、一に法智品、二に類智品なり。法智品は法智品の心心所法を知る、類智品は類智品の心心所法を知るなり。此智は色と爲無と不相應行とを知らず、及び過去と未來と無色界繫と一切根と地と補特伽羅との勝れたる心心所は皆な知る能はず。

【二〇】五取蘊の果分に於いて無漏智あり、非常と苦と空と非我との行相を作して轉ずるを苦智と名づく。

【二一】五取蘊の因分に於いて無智漏あり、因と集と生と縁との行相を作して轉ずるを集智と名づく。

【二二】彼の滅に於いて無漏智あり、滅と靜と妙と離との行相を作して轉ずるを滅智と名づく。

【二三】彼の對治の涅槃を得る道に於いて無漏智あり、道と如と行と出との行相を作して轉ずるを道智と名づく。

【二四】無漏智あり、是の思惟を作す、「苦は我れ已に知れり、集は我れ已に斷じ、滅は我れ已に證し、

【一八】他心智を釋明す。
【一九】二種の他心智。
【二〇】苦智を釋明す。
【二一】集智を釋明す。
【二二】滅智を釋明す。
【二三】道智を釋明す。
【二四】盡智を釋明す。

道は我れ已に修す」と、盡の行相に轉ずるを盡智と名づく。

(二五)無漏智あり、是の思惟を作す、「苦は我れ已に知れり、復た更に知らず、乃至道は我れ已に修す、復た更に修せず」と、無生の行相に轉ずるを無生智と名づく。

(二六)此の後の二智は推度せざるが故に見性に非ず、他心智は惟だ見性のみ、餘の六智は見性非見性に通ず。

(二七)世俗智は唯だ有漏、他心智は有漏及び無漏に通じ、餘の八智は唯だ無漏なり。

(二八)滅智は唯だ無爲緣、他心、苦、集、道智は唯だ有爲緣なり。餘の五智は有爲無爲緣に通ず。

(二九)苦集智は唯だ有漏緣、滅道智は唯だ無漏緣なり、餘の六智は有漏無漏緣に通ず。

(三〇)法智は六地にあり、謂く、四靜慮と未至と中間となり。類智は九地に在り、謂く、前六地と下三無色となり。他心智は四地に在り。謂く、四靜慮なり。世俗智は一切地に在り、餘の苦集滅道盡無生の六智なり。法智品なる者は六地に在り、類智品なる者は九地に在り。

【二五】無生智を釋明す。
【二六】一に見非見門。
【二七】漏無漏を明す。
【二八】有爲無爲緣。
【二九】漏無漏緣を明す。
【三〇】依他門。

〔三一〕忍に八種あり、謂く、苦集滅道の法智忍と、及び苦集滅道の類智忍となり。此の八は是れ能く決定智を引き、勝慧苦等の四聖諦理を忍可するが故に名づけて忍と爲す。諸忍の中に於いて此の八は唯だ是れ觀察法忍なり、是れ見及び慧にして智の自性に非ず。決定の義は是れ智の義なり。此の八は推度意樂未だ息まず、未だ審決する能はざるが故に智と名づけず。苦法智忍は欲界見所斷十隨眠得と倶に滅し、苦法智は彼の斷の得と倶に生ず。忍を無間道と爲し、智を解脱道と爲し、欲界見苦所斷十種隨眠を對治す。二人あり、一は舍內に在りて賊を驅つて出でしめ、一は門を關閉して復た入らしめざるが如し。苦類智忍は、色無色界見苦所斷十八隨眠得と倶に滅し、苦類智は彼の斷の得と倶に生ず、餘は前說の如し。是の如き四心能く三界に於いて、苦諦現觀して、集滅道に於いて各四心あること應に知るべし、亦た爾りと。此の十六心は能く三界四諦に於いて現觀に見所斷の八十八結を斷し預流果を得。

〔三二〕餘の修所斷の十種の隨眠は、謂く、欲界の四と色無色界の各三とを十と爲す。欲界の四種は譬へば束蘆を總分して九と爲すが如し。謂く上上より乃ち下下に至るまでなり。彼の對治道の無間と解脱とに亦た九品あり、謂く、下下品の道、能く上上品の隨眠を對治す。乃至上上品の道、能く下下品の隨眠を對治す。六品盡くる時、一來果を得、九品盡くる時、不還果を得。欲界の四を總分し

〔三一〕八種の忍を辨ずるに四項あり、第一に見道を明す。

〔三二〕第二に修道を辨す。

て九と爲し、亦た九品の無間と解脱との能對治道あるが如く、色無色界各四地あり、一一の地の中能治と所治と各九品あること應に知るべし、亦た然なりと。

〔三三〕漸次に彼の八地の隨眠を斷じ、乃至有頂の下下品盡くる時阿羅漢果を得、四果の中間の所有諸道と及び前の見道とを名づけて四向と爲す、隨つて彼の果の前に在れば即ち彼の果の向と名づく。是の如く八補特伽羅あり、謂く四向を行じ、及び四果に住す。

〔三四〕是の如き向果は、種性の別に由り、分ちて六種あり。謂く、鈍と利と根の種性の異生なり。若し見道に入りて十五の頃を隨信行及び隨法行と名づく。即ち此の二種は修道位に至る。謂く、第十六心より乃至金剛喩定に至るまでを信勝解脱と名づけ、及び見至と名づく。即ち此の二種は無學位に至る。謂く、初めの盡智より乃ち最後の心に至までるを時解脱及び不時解脱と名づく。

等は謂く、心所の種類差別に無量種あり、心の有なるに依るが故に心所法と名づく、猶は我所の如し。是の如き心所を相應行と名づく。

〔三五〕不相應行は〔三六〕此れと相違す。謂く諸の得等なり。

【三三】第三に向果を立つ。
【三四】第四に六聖を明す。
【三五】不相應行を辨ず。
【三六】此れとは、心所を指す。心と相應せざるが故に不相應行といふ。

〔三七〕得は有法者を稱說する因なり。法に三種あり、一に淨、二に不淨、三に無記なり。淨は謂く、信等なり。不淨は謂く、貪等なり。無記は謂く、化心等なり。若し此の法を成ずれば有法者と名づけ、此れを稱說する定の因を得獲成就と名づく。

〔三八〕得若し無なる者は貪等の煩惱現在前の時、有學既に無漏心無きが故に應に聖者に非ざるべし。異生若し善無記心を起さば爾の時應に已離染者と名づくべし。又諸の聖者と諸の異生と、涅槃の得無きこと、互に相似の故に應に倶に異生と名づけ、或は倶に聖者と名づくべし。法王の說くが如く、「得を起し、十無學法を成就するが故に聖者と名づく、永く五支を斷ず」と。――乃至廣く說く――。又世尊の說きたまはく、「苾芻よ、當に知るべし、若し善不善の法を成就するあらば、我れ是の如き諸の有情の類の心相續の中、善と不善との得、增長無邊なるを見ん」と。是の如きの說を作す、「汝等苾芻、應に有情の勝劣を校量すべからず。應に妄りに補特伽羅の德量淺深を取すべからず」と――乃至廣く說く――故に知りぬ法の外定實の得あることを。

此に二種あり、一には未得と已失とを今獲るなり。二には得已りて失はざるの成就なり。應に知るべし。非得は此れと相違することを。何の法の中に於いて得非得ありや。自相續と及び二滅との中に於いて得非得あり。他相續に非ず、他身の法を成就すること有ること無きが故なり。非相續に非ず、

〔三七〕得の名義。
〔三八〕得の實在する理由。

非情の法を成就すること有ること無きが故なり。亦た虚空に非ず、虚空を成就する者あること無きが故なり。彼れ得無きが故に非得も亦た無し。

〔三九〕得に三種あり。一には影の形に随ふが如きの得、二には牛王の前に引くが如きの得、三には犢子の後に随ふが如きの得なり。初得は多分は無覆無記法の如し。第二の得は多分は上地没して欲界に生じ、結生の時、欲界の善法の得の如し。第三の得は多分は聞思所成の慧等の如く、倶生を除いて所餘の得なり。此の中、應に略して毘婆沙を作すべし。謂く、欲界繋善不善の色は、前生の得無く、但だ倶生及び隨後得あり、眼耳通慧及び能變化心を除き、並に少分若くは威儀路、若くは工巧處極數習せる者を除きて、諸餘の一切の無覆無記の法、及び有覆無記表色は唯だ倶生の得あり、勢力劣るが故なり。前後得無き所餘の諸法は一一前後倶得あるべし。

【三九】三種の得を明す。
【四〇】得の三性門。
【四一】得の繫不繫門。

〔四〇〕善法得は惟だ善なり、不善法得は惟だ不善なり、無許法得は惟だ無記なり。

〔四一〕欲界法の得は惟だ欲界なり、色界法の得は惟だ色界なり、無色界法の得は惟だ無色界なり。無漏法の得は三界及び無漏に通ず。無漏法とは、謂く、道諦と三無爲と倶に不繋なるが故に道諦の得は惟だ無漏なり。非擇滅の得は三界に通ず。擇滅の得は、色無色界の道力より起れば、即ち彼の界に隨ひ、無漏の道力より起れば、是れ無漏なるが故に、無漏法は總じて說くに四種あり。

(四二)學法の得は惟だ學なり、無學法の得は惟だ無學なり、非學非無學法の得は三種あり。非學非無學法とは、謂く、諸の有漏と及び無爲となり。有漏と及び非擇滅の得は惟だ非學非無學なり。擇滅の得は學の道力より起れば惟だ學なり、無學の道力より起れば惟だ無學なり、世間の道力より起れば惟だ非學非無學なり。

(四三)見所斷法の得は惟だ見所斷なり、修所斷法の得は惟だ修所斷なり、非所斷法の得に二種あり、謂く、修所斷と及び非所斷となり。非所斷の法とは、謂く、道諦と及び無爲となり。道諦の得は惟だ非所斷なり。非擇滅の得は、惟だ修所斷染汙なるが故に、是れ有漏の故に、擇滅の得は世間の道力より起れば惟だ修所斷なり、無漏の道力より起れば惟だ非所斷なり。

(四四)一切の非得は皆な惟だ無覆無記性の攝なり。前の得の差別の義あるが如きには非ず。

(四五)然るに過去と未來との法は一一各三世の非得あり。現在の法には現在の非得無し、得と非得とは、性相違するが故に、現在成就すべき法成就せざることあること無きが故なり。然も過去未來には非得あり。

(四六)欲と色と無色との界及び無漏の法に一一皆な三界の非得あり。

【四二】得の三學門。
【四三】得の三斷門。
【四四】非得の意義。
【四五】非得の三世。
【四六】非得の三界繫。

【四七】非得の是れ無漏なる者あること無し。非得の中異生の性あるが故なり。【四八】說くが如し、「云何んが異生性なる、謂く、聖法を獲ざるなり」と。不獲とは即ち是れ非得の異名なり。又諸の非得は惟だ無記性なるが故に無漏に非ず。

【四九】已に第三靜慮の染を離れ、未だ第四靜慮の染を離れず、第四靜慮地心心所滅は不相應法あり、無想定と名づく。

一切の心心所の法を滅すと雖も、此の定を起すことは專ら想を除かんが爲めなり。故に無想と名づく、他心智の如し。

【五〇】此の無想定は、是れ善く第四靜慮の所攝なり。惟だ非聖者は相續の中に起りて解脫を求むる想を此の定に起すが故なり。聖者は此に於いて惡趣の想の如く深心に厭離す。

【五一】此れ惟だ順定受なり、謂く、順次の生に受く。

是れ加行の得にして離染得に非ず。

【五二】滅定とは、謂く、已に無所有處の染を離れ、有頂の心心所法の滅に不相應の法あり、能く大種をして平等に相續せしむるが故に、名づけて滅定と爲す。

【四七】非得の漏無漏。
【四八】發智論の二を看よ。
【四九】無想定の名義。
【五〇】無想定の三性。
【五一】無想定の感果。
【五二】滅定の名義。

(五三)是れ有頂地加行善の攝なり。

(五四)或は順次生受、或は順後次受、或は順不定受なり。此の定を起し已つて未だ異熟を得ず、便ち般涅槃するが故に定受せず、此の定能く有頂地の中の四蘊異熟を感ず、彼に色無きが故なり。

(五五)聖者能く起すことは諸の異生に非ず。聖道の力に由りて此の定を起すが故なり。聖者現法樂住を得んが爲めに求めて此の定を起す、異生は此に於いて斷滅を怖畏して聖道の力無きが故に起す能はざるなり。

聖者此に於いて加行に由りて得す、離染の得に非ず。惟だ佛世尊は此の滅定に於いて離染得と名づく。初盡智の時、已に此の定に於いて、能く自在に起すが故に、名づけて得と爲す。諸佛の功德加行に由らず、欲に隨ひ即ち起りて現在前するが故なり。

(五六)若しは無想情天の中に生じ、法あり能く心心所をして滅せしむるを無想事と名づく。

(五七)是れ實有の物なり。

是れ無想定の異熟果の故に異熟生と名づく。無記性の攝なり。即ち廣果天中に一勝處あり、中間の靜慮の如し、無想天と名づく。生の時、死の時、倶に心想あり、中間無きが故に無想の名を立つ。

【五三】滅定の三性。
【五四】滅定の感果。
【五五】滅定の凡聖。
【五六】無想事の名義。
【五七】無想事の假實。

彼れ將に死せんとする時、久睡の覺めたるが如く心想を起す、起し已りて久しからずして卽使ち命終りて欲界に生ず。將に彼を生ぜんとする者。必ず欲界の順後次受決定の業あるが故に、將に彼れ北倶盧洲に生ぜんとして、必ず能く生天を感ずるの業あるが如し。

(五八)先業所引の六處相續して間斷無し、之に依りて四生五趣を施設す。是れを命根と名づけ、亦たは名づけて壽と爲す。故に對法に說く、「云何んが命根なる、謂く、三界の壽なり」と。

(五九)此に實體あり、能く煖識を持つ、伽陀に言ふが如し。「壽と、煖と、及び識との三法、身を捨る時、所捨の身僵仆すること木の思覺無きが如し」と。契經にも亦た說く、「異熟を受け已れば那落迦と名づく。乃至非想非非想處も應に知るべし亦た爾なり」と。

若し命根を異にせば、別に法あり。是れ根の性に攝し、三界に遍在し、一期相續間斷の時無く、依として四生五趣を施設すべく、無色界に生じ、自と上地との善と染汙との心を起し、或は下地の無漏心を起す時、何に依りて化生と天趣とを施設するや、善染を起す時應に名づけて死と爲すべし。若し無記を起さば、應に復た生と名づくべし。命根を撥無すれば斯の大過あり。

【五八】命根の名義。
【五九】命根の假實。

(六〇)諸の有情の類同作の事業同欲の因を衆同分と名づく。

(六一)此に復た二種あり、一に無差別、二に有差別なり。無差別とは、謂く、諸の有情皆な我愛あり、同じく食に資し、樂欲相似する、此の平等因を衆同分と名づく、一一の身內各別に一あり。有差別とは、謂く、諸の有情界、地、趣、生、種姓、男、女、近事、苾芻、學、無學等の種類差別の一の身內に事業と樂欲とを同じうする定因あるを衆同分と名づく。此れ若し無くんば、聖非聖等世俗の言說は應に皆な雜亂すべし。

諸の異生性と異生同分と何の差別あるや。同樂欲等の因を說いて彼同分と名づく。異生性とは能く一切無義利の因と爲る。契經に說くが如し、「苾芻當に知るべし、我れ愚夫無聞の異生は、少分の惡不善の業として彼れ能く造らざることあること無しと說く」と。又世尊の說きたまふ、「若し人中に來れば人同分を得、異生性は死生の時に於いて捨得の義あるに非ず、故に異生性は同分と別なり」と。

【六〇】衆同分の名義。
【六一】二種の衆同分。
【六二】生相の名義。

(六二)諸法生ずる時、內因力あり、彼をして各別の功能を獲得せしむ。卽ち此の內因を說いて生相と名づく。謂く、法の生因に總じて二種あり、一は內、二は外なり。內は謂く生相、外は謂く六因或は四緣の性なり、若し生相無くんば、諸の有爲法は應に虛空等の如く、外の因緣を具すと雖も、亦

た生ずる義無かるべし。或は應に虛空等も亦た可生の義ありて、有爲性を成ずべし、是れ大過失なり。此れに由るが故に知りぬ別に生相あることを。

(六三)能く別果を引きて暫時住する因を說いて住相と名づく。謂く、有爲の法は暫住時に於いて各勢力あり、能く別果を引いて暫時住せしむ。此の別果を引く勢力の內因を說いて住相と名づく、若し住相無くんば、諸の有爲の法は、暫住の時に於いて、應に更に別果を引施すること能はざるべし。此れに由るが故に知んぬ別に住相あることを。

(六四)老は謂く、引果の功能を衰損し、其をして重ねて別果を引くこと能はざらしむ。謂く、有爲の法、若し異相の功能を衰損すること無くんば、何に緣りてか別果を引き已りて、更に亦た重ねて引くこと能はざらん。引いて復た引かば應に無窮を成ずべし。若し爾らば又應に刹那の性に非ざるべし。此に由りて知りぬ別に異相あることを。

(六五)無常とは、謂く、功能損し已つて現在の法をして過去に入らしむる因なり。謂く、別法あり、名づけて滅相と爲す。現在より過去世に墮せしむ、此れ若し無くんば、法は應に滅せざるべく、或は

【六三】住相の意義。
【六四】異相の意義。
【六五】滅相の意義。

虛空等も亦た滅の義あるべし。

此の四は有爲の有爲の相なり。若し此の四の有爲の相ある者を便ち有爲と名づく、虛空等に非ず。然るに世尊二有爲の有爲の相あり、有爲の起る亦了知す可く、盡及び住異亦了知す可しと說きたまふことは、所化の生に有爲を厭ふ爲めの故に、黑耳と吉祥と倶なりと示すが如し。住異二相合說して一と爲す、是の故に定に四有爲の相あり。卽ち所相の有爲法體に非ず、若し卽ち所相有爲體は所相の體と無相と一なるが如し。能相亦た應に展轉して異無かるべし。若し爾らば諸法滅する時應に生ずべく、生の時應に滅すべく、或は全く生ぜざるべし。

此の四の本相も是れ有爲なり、故に所相の法の如く四の隨相あり。謂く、生生乃至滅滅と名づく、然も無窮に非ず。四の本相は各八法を相とし、隨相は惟だ能く各一を相とするを以ての故なり。謂く、法の生ずる時、其の自體を幷せて九法倶起す。自體を一と爲し、相と隨相と八なり。本相の中の生は、其の自體を除き、餘の八法を生ず。隨相の中の生は、九法の内に於いて、惟だ本生を生ず、勢力劣なるが故なり。住異滅相も應に知るべし亦た爾なることを　本相は法に依り、隨相は相に依り、法は相に依るが故に作用あるを得。相は隨相に因るを以て作用あるを得。作用とは何ぞ、謂く、所生等を生住異滅する者なり、謂く、果を引く功能あるが故なり。有爲の法體は恆有なりと雖も、而も用は常に非ず、茲の四相を假り、内外の因力を以て、用成ずるを得るが故なり。

（六六）名身句身文身等とは、謂く、語に依りて生ず、智の義の影像を帶びて現ずるが如し。能く自義を詮するを名句文と名づく。卽ち是れ想章字の異目の眼識等の眼等に依りて生じ、色等の義の影像を帶びて現じ、能く自境を了るが如し、名等も亦た爾なり。

卽ち語音親ら能く義を詮するに非ず。火を說く時、便ち口を燒くこと勿し、要は語に依るが故に火等の名生ず。火等の名に由りて火等の義を詮す。詮とは、謂く、能く所顯の義に於いて他の覺慧を生ず、義と合するに非ず、聲に礙あるが故なり。

諸記論とは、所執の常の聲理成ぜざるが故に、應に此の名句文の三を離れて、法として能く義を詮するとありと執すべからず。然るに四種の法は同一相に似て一聲二名三義四智あり。此の中、名とは、謂く、色等の想なり。句とは謂く、能く義を詮し究竟す、諸惡莫作等の頌を說くが如し。世間亦た提婆達多白牛を駈りて來り、乳を轂取す等と說く。文とは卽ち是れ褭壹等の字此の三各別なり。同類を合集すれば之を說いて身と爲す。

（六七）大仙の說きたまへるが如し、「苾芻よ。當に知るべし、如來世に出づ、便ち名身句身文身の了知す可き者あり」と、「此の經の」意は、諦實と、蘊と、處と、界と、沙門果と、緣起等の法に名句文身あり」と說く。

【六六】名、句、文、三身の意義。
【六七】大仙とは釋尊の異名なり。

又世尊は「如來は彼彼の名句文身を得」と說きたまへり。「此の經の」意は、如來は彼彼の不共佛法名句文身等「を得たまへり」と說く。謂く、此の中義類差別なり。

諸行の句義此に齊りて應に知るべし。

(六八)識句義とは、謂く、總じて色等の境事を了別す、故に名づけて識と爲す。卽ち色等の六種境の中に於いて、眼等の根、伴助するに由りて、現在の作用を起す。惟だ總じて色等の境の事を分別するを說いて名づけて識と爲す。若し能く差別の相を分別すれば、卽ち受等の諸の心所の法と名づく。識は彼の用無く但だ所依と作る。識の用は但だ現在世に於いて、一刹那の頃能く了別することあることあり、此れ亦た意と名づけ、亦た名づけて心と爲す、亦た是れ有情を施設し、本事は色等の境に於いて了別するを用と爲す。根境の別に由りて六種ありと說く。謂く。眼識乃至意識と名づく佛、經中に於いて自ら彼の相を說く、謂く了別するが故に識の名を立つと。此に由るが故に知りぬ了別を相と爲すことを。

(六九)前に有爲の相を思擇する中に於いて法の生ずる因に總じて二種あり、一は內、二は外なり、內は謂く、生相、外は謂く、六因或は四緣性なりと說けり。今應に思擇すべし。因緣とは、何の因か六

【六八】識蘊の意義。
【六九】六因を明す。

種なる。一には相應因、二には倶有因、三には同類因、四には遍行因、五には異熟因、六には能作因なり。

(七〇)心心所の法展轉相應して同じく一境を取るを相應因と名づく。心と受等と、受等と受等と、受等と復た心との如し。

(七一)各其の自性を除き、諸の有爲法は更に互に果と爲る、或は同一果を倶有因と名づく。諸の大種と所相と能相と心と心隨轉と更互に相望む。二因の別とは、諸の商人更に相助力し、能く嶮路を過ぐるが如し、是れ倶有因なり。諸の飲食する所、展轉して同の義あり、是れ相應因なり。心隨轉とは、謂く、諸の心所及び諸の靜慮と無漏の律儀と、諸の有爲の相と、彼と心と倶に一世。一起、一住、一滅、一果、一等流、一異熟に墮し、善に同じ不善に同じ無記に同ずるを以て、此の十因に由りて心隨轉と名づく。

(七二)自地自部前生の諸法の種子法の如きと、後の相似とを同類因と爲す。

(七三)自地前生の諸の遍行法と後染法とを遍行因と爲す。

(七四)一切の不善と有漏の善法と自の異熟とを異熟因と爲す。

諸法生ずる時其の自性を除き、一切法を以て能作因と爲し、或は惟だ障無く、或は能生の故なり。

【七〇】相應因の義解。
【七一】倶有因の義解。
【七二】同類因の義解。
【七三】遍行因の義解。
【七四】異熟因の義解。

（七五）是の如きの六因は、總じて一切有爲を以て果と爲す、是れ所生の故なり。

（七六）謂く、相應と倶有との因は士用果を得、此の勢力に由りて彼に生を得るが故に此の士用と名づく、彼を名づけて果と爲す。

（七七）同類と遍行との因は等流果を得。果は因に似るが故に説いて名づけて等と爲し、因より生ずるが故に復た説いて流と爲す、果即ち等流なれば等流果と名づく。

（七八）異熟因は異熟果を得、果は因に似ざるが故に説いて異熟と爲す。謂く、成熟受用に堪ふるが故に、果は即ち異熟果と名づく、惟だ有情數の攝にして無覆無記の性なり。

（七九）能作因は增上果を得、此の增上力は彼れ生を得るが故に眼等の根の眼識等に於ける、及び田夫等の稼穡等に於けるが如し。前の增上に由りて後法の生を待つ增上の果を增上果と名づく。

（八〇）擇滅無爲を離繫果と名づく、此れ道に由りて得れども道の所生に非ず、果は即ち離繫なるを、離繫果と名づく。

（八一）緣に四種あり、謂く、因と等無間と所緣と增上との緣なり。能作を除いて餘の五因を因緣と名

【七五】五果を明す。
【七六】士用果の義解。
【七七】等流果の義解。
【七八】異熟果の義解。
【七九】增上果の義解。
【八〇】離繫果の義解。
【八一】四緣を明す。

づく。過去現在の心心所の法は阿羅漢の最後心等を除き、等無間緣と名づけ、一切法を所緣緣と名づけ、能作因の性を增上緣と名づく。

【八二】虛空の意義と實在なる理由。

【八三】擇滅の意義。

（八二）有礙物を容る、是れ虛空の相なり。此の增上力を以て彼に生を得るが故に能く所容受あり、是れ虛空の性の故なり。此れ若し無くんば諸の有礙の物は應に生ずるを得ざるべし。容者無きが故なり。世尊の說きたまふが如し、「梵志よ、當に知るべし。風は虛空に依る」と。婆羅門の曰く、「虛空は何をか依とする」と。佛、復た告げて言はく、「汝が問は理に非ず、虛空は無色無見無對なり、當に何をか所依とすべき、然も光明あり、虛空了ず可し」と。故に知りぬ、實に虛空無爲あり、此の體、若し無くんば風は何を依として住し、無色等と說くも、何をか所依とすと言ふや、光明あるに因る、何の了別する所ぞ。龜毛等を了ずる、此れを因とせざるが故なり。

（八三）衆苦永く斷ずるを說いて擇滅と名づく。衆苦とは何ぞ、謂く、諸の生死なり。世尊の說きたまふが如し、「苾芻よ、當に知るべし、諸有若し生ずれば卽ち說いて苦と爲す、諸有は卽ち是れ生死の

別名なり」と。有若し生ぜざれば苦永く斷ずと名づく、堤の水を堰くが如く、壁の風を障ふるが如し。苦をして生ぜざらしむるを名づけて擇滅と爲す。擇は謂く、簡擇なり、卽ち勝の善慧、四聖諦に於いて數擇簡す、彼の所得の滅に擇滅の名を立つ。

此れは所斷に隨つて無量あり、所斷の法無量無邊なるを以ての故なり。若し體一ならば初道已に得す。後の諸道を修することは便ち應に無用なるべし。若し初めに少分を證り、全に非ずと言はば、卽ち一滅體、應に多分あるべし、理と相違す。有漏法は爾所の量あるに隨ふ、滅擇無爲も應に知るべし亦た爾なることを。此の說を善と爲す、正理に應ずるが故なり。此れは道の別に隨つて八十九を立つ。斷遍知に隨つて九種ありと立つ。若し五部に隨へば五種ありと立つ。又果の別に隨つて總じて立つるに四と爲す、謂く、預流等なり。斷と離と滅との界に由り別に三を立て、苦集を斷じ、及び(八四)有餘依と(八五)無餘依との別に由りて總じて二種を立て、生死の斷に約して總じて立てて一と爲す。

(八六)是の如きの擇滅に多くの異名あり、謂く盡とも離とも滅とも涅槃等とも名づく。人經に說くが如し、「苾芻よ、當に知るべし、四無色蘊及び眼色等總じて名づけて人と爲す、中に

【八四】有餘依(Sopadhiśeṣanirvāṇa)とは、舊譯に有餘涅槃といひ、二種涅槃の一にして、生死の因たる惑業を盡して、猶ほ有漏の依身の苦果を餘すを云ふ。

【八五】無餘依(Nirpadhiśeṣanirvāṇa)とは、舊譯に無餘涅槃といひ、二種涅槃の一にして、有餘依を得て、更に依身の苦果を滅し、餘すところ無きを云ふ。

【八六】擇滅の異名。

於いて假想を說いて有情と名づけ、亦た意生と名づけ、亦たは名づけて(八七)摩納婆等と爲す。此の中自ら我が眼等の色等を見ると謂ひ、種種世俗の言論を發起す。謂く、此の(八八)具壽は是の如き名、是の如き族姓あり。——乃至廣く說く——苾芻よ、當に知るべし、此に惟だ想あり、惟だ言說あり」と。

是の如く諸法は皆な是れ無常有爲の緣より生ず、此に由るが故に苦なり、謂く生ずる時苦なり。住等も亦た苦なり。此の衆苦に於いて永く斷じて餘無く、染を除棄し變吐し盡く離滅し、寂靜隱沒して餘續起せざるを永不生と名づく。此れ極靜妙なり、謂く、一切依を除棄し、愛を盡し、離し、滅し、涅槃するなり。

言ふ所の一切依を除棄すとは、謂く、此の滅の中永く一切五取蘊の苦を捨つるなり。愛盡と言ふは、此の滅の中、現に諸愛を盡す。此の滅を得已れば永く染法を離するが故に名づけて離と爲す。此の滅を證し已れば衆苦皆な息むが故に名づけて滅と爲す。此の滅を證し已れば一切の災患煩惱の火滅す、故に涅槃と名づく。

(八九)非擇滅とは、謂く、別法あり、畢竟して未來法の生を障礙す、但だ緣を闕くに由り、擇に由る

【八七】摩納婆(Mānavaka)。具には摩納縛迦とも呼び、略して摩納とも記す。通常に儒童と翻じ、又特に勝我と譯すこともあり、年少者の意なり。

【八八】具壽(Āyusmin)とは、世俗界の生理的壽命及び眞諦界の法身的慧命とを具有するの義也。舊譯には單に慧命と呼び、後者の義のみを採れり。比丘の通稱にして、師長より子弟を呼ぶに用ふる語なり。

【八九】非擇滅の意義。

得に非ず。

眼と意と一色を專らにする時の如し、餘の色聲香味觸等の謝するを以て彼の境界を緣ず、五識身等は此の滅を得るに由りて、能く永く障ふるが故に、未來世に住して畢竟不生なり。緣の闕くる亦た此滅の勢力に由る、故に非擇滅は決定して實有なり。世尊の說きたまふが如し、若し爾の時に於いて、樂受現前し、二受便ち滅す。彼れ滅と言ふは此を除いて是れ何ぞ、定んで無常と及び擇滅に非ざるが故なり。又契經に說く、苾芻よ、當に知るべし、若し預流を得ば已に地獄を盡し、已に鬼界を盡し、已に傍生を盡す。此に盡と言ふは是れ非擇滅なり。爾の時、異熟法未だ擇滅を得ざるが故なり。

【九】以下流通分、卽ち結論なり。

(九)初業の者の愛樂し勤學するが爲めに諸の問答を離れ、略して斯論を制す、諸の未だ阿毘達磨深密の相を遍知せざる者は、自の意樂に隨つて諸の戲論聚を現前に置き、妄りに邪難を構へ、相誹毀せんと欲す。彼れ卽ち佛所說の至敎を謗す。世尊の說きたまふが如し、「二種の人あり、佛の至敎を謗す、一には不信にして憎嫉を生じ、二には信ずと雖も、而も惡しく受持す」と。

國譯入阿毘達磨論　終

天親菩薩造
菩提流支等譯

十地經論解題

十地經論は華嚴經の中の十地品の別行たる十地經を解釋したもので、略して十地論或は單に地論と稱せらる。十地經は菩薩の修道を十地に分つて修行の進展する相狀を說き示したものである。想ふに印度に大乘佛敎の興起した當初は、小乘二乘に對して大乘菩薩乘の名に依りて盛んに宣傳せられてゐたやうに、大乘佛敎は菩薩の思想を中心として發展したものである。而して此十地經の如きは菩薩の修道の內容を組織的に說示して、濟世利民の本義を顯揚し、小乘獨善の行者と異なる所以を明かにしたものであるから、菩薩乘の根本精神は此經に依つて宣揚せられたものといへる。殊に此經は印度に大乘敎の勃興した頃には華嚴經の一部分としてではなく、獨立した一部の經典として廣く流布してゐた所から見れば、大乘敎の基礎を爲せる原始的經典の一たりしことも明かである。又支那の譯經史に徵するに佛敎東漸の最初に竺法蘭に依りて十地斷結經が傳譯せられ、其後覺賢三藏に依つて華嚴經が翻譯せらるるまでに、幾度か十地經の傳譯があつた事實に依つても、此經が最も古く且つ最も廣く行はれて

ゐた大乘經典の一であつたことが推知せらる(譯經のことは國譯華嚴經解題參照)、それで若し華嚴宗の敎權を離れて歷史的に大乘經典の成立といふ如き問題に觸れるならば、十地經を中心として前後に追加補足し、菩薩道の始終を愈精細に顯示して、整然たる組織を與へたものが卽ち華嚴經の大成となつたものと見ることが出來よう。後世、大乘佛敎が發達して種種の宗派が分立するやうになつてからは諸宗各據る所があつて、特に此の經論が一般に硏究せらるるといふ如きこともなく、今日では專門の學者でなければ其の名も知られぬほどになつてゐるのであるが、印度に於ては大乘敎の眞意を鼓吹した大切な經典であるし、支那に傳つては天台宗や華嚴宗の如き宗派の興る以前に、敎理硏究の根柢をなした主要なる論部の一であるから、佛敎敎理史の上からは輕視することのできない大切な經典である。

十地經が印度で廣く行はれたとは前に述べた如くであるが、其の註釋として現に傳はつてゐるのは、龍樹の十住毘婆舍論と天親(梵名は婆藪盤豆(Vasubandhu)舊譯では天親といひ新譯では世親といふ)の十地經論とのみである。十住毘婆舍論は後秦の代に傳譯せられたけれども、極めて小部分の翻譯であるのみならず、此論には難易二行の別を立てて他力易行を勸めてあるので、淨土門では之を依用してゐるが、十地經の本系たる華嚴宗では之を顧みない、從つて十地經の本旨は天親の十地論に依りて始めて發揚せられたものとして此の論を依用す。

本論の著者天親菩薩は小乘に五百部大乘に五百部の著作を爲したので、千部論師と稱せられたといふほどの偉人であつて、現に傳つてゐる著書も少くない。其はいづれも佛教學上重要なものであるが、中にも本刊行に收められたる倶舍論、唯識論を始めとし、淨土論、涅槃論、法華論と云ふ如く各方面に亙つての著述がある。

之等の著述は論師が佛教を研究せられた經歷を示してゐるに相違ないのであるが、餘りに多方面に亙つてゐるので、果していづれが論師の最後の主張であり其の安心の歸趣する所であるかは判定に苦しむのである。それで後世の學者は各其の宗派の見地によつて、涅槃宗からは涅槃論であるといひ、攝論宗からは攝論、又法相宗よりは唯識論であるといひ、淨土教よりは往生淨土論が論師の本懷を披瀝したものといひ、各宗で見方を異にしてゐる。若し華嚴宗の見地に立つて之を見るならば、淸涼大師の判定せられた如く、此の十地論が論師の眞精神を顯はしたものと主張せざるを得ない。傳に依ると論師が小乘より轉じて大乘に歸し、大いに菩薩乘を鼓吹せらるるに至つたのは、或僧が十地經を讀むを聽いたに在るといふ。已に廻心向大の動機が十地經に在りといふほどであるから、論師が此の經に依つて大いに啓發する所があつて、之が研鑽を重ね特に釋論を造つて、大乘菩薩道の精神を宣揚せられたものであることは疑なきことである。(世親論師の傳記は本刊行唯識論の解題に見ゆ)

此の十地論が支那に傳譯せられたのは崔光の序文によると北魏の永平元年(西紀五〇八)に菩提流

支（Bodhiruci道希と譯す）、勒那摩提（Ratnamati寶意と譯す）、佛陀扇多（Buddhaśānta覺定と譯す）の三人が勅を奉じて合譯したことになつてゐるが、續高僧傳の留支の傳には三人各師習を異にして意見の一致を缺いたので、三師に命じて各別に之を譯せしめたとあり、或は又勒那と流支の二人が別譯したと傳ふる說もあるが、三人各別に譯したとしても、意見の衝突は主として流支と勒那の二人の間に在つたので、二師別譯の說が傳へられたのかも知れない。何れにしても十地論の翻譯には譯者の間に意見の相違があつて調和がとれなかつたのであるが、其の譯場に列して兩師の說を十分に會得するを得た惠光が、後二師の間に斡旋して其意のある所を酌んで、相互の諒解を求め爭點を調和し、兩譯を合糅して一本となしたものが現行の十地論である。

惠光は齊國の國統に任ぜられ四分律の宗祖である所から光統律師と稱せらる。師は宗派から云へば律宗に屬するのであるが、敎理の造詣に於ても當代獨步の碩德である。殊に此の十地論に就ては前に云へる如く其翻譯に參加して譯者の論爭を調停した程の人であるから、其後も地論の宣傳には力を竭された。其の門下に英才多く輩出して當時敎界の大勢を占むるに至つて、地論の研究も亦從つて大いに興り、一の學風をなして地論宗と稱せらるるに至つた。さきに譯者の傳習より起つた學說の相違は惠光によつて一度調和せられたのであるが、尙師習を繼承する者があつたと見えて、地論宗に南道派と北道派の別があつて、流支の下を南道派といひ、摩提の下を北道派と稱へ、相州の南北二道に分れて

各其の說を主張したことが諸處に散見してゐる。而して惠光は摩提の流を汲める正統派の宣傳者であつて、後世地論宗の宗祖と仰がるる人である。惠光の門下多士濟濟たる中にも學德一世を風靡し後世まで其の門葉の權なりしは淨影寺の慧遠である。師は光統の教學を繼承した出藍の英才で、其の著はせる章疏も頗る多方面に亙つてゐるが、中にも華嚴系統の宣揚に力を盡され、地論には義記七卷を作つて之を弘めた。これ十地論の疏として現存する唯一のものであるが、惜い哉第五卷第四地以後は佚失して傳はらない。それで現行の義記は前四卷のみであるが後に各卷を本末に分つて八卷となし、續藏第一輯第七十一套に收められてある。

慧遠の義記が出でてより地論の宗風は愈愈揚り、其の結果として自然本經たる華嚴經の研究が盛に行はれ、遂には杜順門の華嚴宗の開立となり、惠光の法系に屬する智儼、賢首の二師に依りて大成せられてからは、地論宗は自ら華嚴宗に攝せられ、其の一部分として研究せらるるに至つた。(華嚴經傳播の概略は國譯華嚴經の解題參照)

本論の註釋としては前述の義記の他に單行のものはないが、華嚴經の釋家たる賢首、清涼の二師は華嚴經十地品を釋するに、多く本論を引證して再釋を下してあるから、探玄記、及び大疏鈔の十地品の註釋は本論研究には缺くべからざる參考書である。殊に義記の後半が缺けてゐるのであるから、此の論の始終を通じて研究するには是非とも二師の釋を指南とせざるを得ない。

本論は倶舍論や唯識論の如き組織の立つた達意論でなく、十地經の語句を逐うて精細に解釋を下した經釋の論であるから、單に論文のみを通讀しても其の意を解することは出來ない、是非とも經文を精讀して一通り經旨を解し、然る後に經文と相對照して論文を精讀し、始めて經旨と論意とに通曉することを得るのである。論が經文の逐語釋になつてゐるのであるから、經文には別に註解を施してない。若し單獨に經意を解せんとするならば國譯華嚴經の十地品を對覽せらるればよい。勿論翻譯が同じでないから、語句の異同具略は免れないが、大體の趣旨には異りはないのである。

大正十年一月十日

豆州修善寺客舍に於て

譯者　衞藤卽應識

國譯十地經論

卷の第一

初歡喜地第一の一

此の法門を說く者、及び諸の法を勸請し、義藏を分別する人、受持し流通する等、法門等の最勝なるを、頂禮して妙義を解す。法をして久しく住せしめ、自ら利し他を利せしめんと欲するが故に

十地の法門にて、初地に攝する所八分なり。一に序分、二に三昧分、三に加分、四に起分、五に本分、六に請分、七に說分、八に校量勝分これなり。

經に曰く、是の如きを我れ聞きき。一時、婆伽婆成道したまひて未だ久しからざる第二七日に、他化自在天の中の自在天王宮の摩尼の寶藏殿に在して、大菩薩衆と俱なりき。一切のもの不退轉にして、皆一生に阿耨多羅三藐三菩提を得、他方の佛世界より俱に來りて集會せり。此の諸の菩薩は一切の菩薩の智慧の境界に悉く自在を得、一切の如來の智慧の境界に悉く皆入ることを得、勤行して息ま

す。善く一切の世間を教化し、時に隨ひて普く一切の神通等の事を示し、刹那の中に於て、皆能く成辦し具足し、一切の菩薩の起す所の大願を捨てずして、一切の世、一切の劫、一切の國土に於て、常に一切諸の菩薩の行を修し、菩薩の福德智慧を具足し、如意神足にして窮盡すること無く、能く一切のものの爲めに饒益を作し、能く一切の菩薩の智慧方便の彼岸に到り、能く衆生をして世間の道に背き涅槃の門に向はしむ。一切の菩薩の所行を斷たず、善く一切の菩薩の禪定、解脫、三昧、神通明慧に遊び、諸の施爲する所は善く一切の菩薩の無作の自在、如意の神足を示現し、皆悉く已に得、一念の頃に於て、能く十方の諸佛の大會に至り、一切諸佛の法輪を勸發し、諮請し、受持し、常に大心を以て、諸佛を供養し、常に能く諸の大菩薩の行ずる所の事業を修習し、其の身は普く無量の世界に現じ、其の音は徧く聞えて至らざる所なく、其の心は通達して明かに三世を見、一切の菩薩の所有る功德を具足し修習せり。是の如きの諸の菩薩摩訶薩の功德は無量無邊にして、無數劫に於て、說くとも盡すべからず。其の名を金剛藏菩薩、寶藏菩薩、蓮華藏菩薩、勝藏菩薩、蓮華勝藏菩薩、日藏菩薩、月藏菩薩、淨月藏菩薩、照一切世間莊嚴藏菩薩、智慧普照明勝菩薩、妙勝藏菩薩、栴檀勝藏菩薩、華勝藏菩薩、俱蘇摩勝藏菩薩、優鉢羅華勝藏菩薩、天勝藏菩薩、福德勝藏菩薩、無礙清淨智藏菩薩、功德藏菩薩、那羅延德藏菩薩、無垢藏菩薩、離垢藏菩薩、種種樂說莊嚴藏菩薩、大光明網照藏菩薩、淨明勝照威德王藏菩薩、大金山淨光明威德王藏菩薩、一切相莊嚴淨勝藏菩薩、金剛

焰勝胸相莊嚴藏菩薩、焰熾藏菩薩、宿王光照藏菩薩、虛空庫無礙智藏菩薩、無礙妙音遠藏菩薩、陀羅尼功德持一切世間願藏菩薩、海莊嚴藏菩薩、須彌勝藏菩薩、淨一切功德藏菩薩、如來藏菩薩、佛勝藏菩薩、解脫月菩薩と曰ふ。是の如き等の菩薩摩訶薩は、無量無邊、阿僧祇、不可思議、不可稱、不可量にして、分齊あること無く、不可說不可說の、種種の佛國土に集れり。金剛藏菩薩を、而も上首となす。

論に曰く、時處等の校量は勝れたることを顯示せんが故なり。此の法は勝れたるが故に、初時及び勝處に在りて說く。此の處の宮殿等の勝れたるは是れを處勝ると名く。㈠何故に色界にて說かざるや。此の處は果を感ずるが故なり。何故に初七日に說かざるや。思惟行、因緣行の故なり。本と〔法を說いて〕他を利せんが爲めに成道す、〔しかも今〕何故に七日思惟して說かざるや。自ら大法樂を樂むことを顯示せるが故なり。何故に己が法樂を顯はすや。㈡衆生をして如來の所に於て、愛敬の心を增長せしめんが故なり。復た是の如きの妙樂を捨つるは、衆生を悲愍して法を說かんが爲めの故なり。何故に

【一】本經の說處他化自在天は欲界六天の最勝なれども尙色界に劣る。勝處の說といはば何ぞ更に上勝の色界にて說かざるやの疑問に對する答なり。感果とは感は機感にして、施されたる敎の効果あるをいふ。色界は長壽にして宗教的信念を發すこと難し、欲界は苦樂相半して敎果を感ずること最も勝るるが故にこの意なり。

【二】佛の自受法樂は一に衆生をして佛の妙樂を知りて內證の法門を愛敬渴仰せしむると、二には此妙樂を捨てて利他の行に出づる大悲深重を知らしめ、聖恩を感荷して法を聞き行を勵ましめんが爲也。

【三】因緣の義は佛法の正說に

唯因緣行を行ずるや。是の因緣行は是れ（三）不共の法なることを顯はさんが故なり。（四）何故に菩薩は此の法門を說くや。諸の菩薩の力をして增長せしめんが爲めの故なり。何故に唯金剛藏のみ說くや。一切の煩惱は壞し難きも此の法は能くこれを破り、善根の堅實なること猶ほ（五）金剛の如きが故に、異名のもの說かざるなり。何故に金剛藏と名くるや。藏とは卽ち堅きに名く。其れ猶ほ（六）樹藏のごとし。又（七）懷孕の藏に在るが如し。是の故に堅きこと金剛の如く、金剛藏の如し。是の諸の善根は一切の餘の善根の中にて、（八）其の力最上なること猶ほ金剛の如く、亦能く人天の道行を生成す。（九）諸の餘の善根の壞ること能はざる所なり。この故に金剛藏と名く。已に序分を說けり。次に三昧分を說かん。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて菩薩の（一〇）大乘光明三昧に入れり。

して外道の邪說と簡ふべく、又、生死の本性は卽ち是れ如來藏となりと說く大乘の因緣は小乘の知らざる所、又因緣の實性、緣起の本源は唯佛のみ窮盡して餘の知らざる所なれば不共の法といふ。

【四】既に此法は不共といふ、佛自ら說き給ふべきに、何ぞ菩薩をして說かしむるやとの意。

【五】金剛に二義あり、體に約すれば堅實、用に約すれば銳利の義なり。

【六】樹藏とは樹皮に藏せられたる樹心は堅實にして能く枝葉華果を生成するに喩ふ。

【七】子孕の母胎に在る、能く胎を破つて出づる力に喩ふ。

【八】菩薩所業の內德に餘善に比して破障の力勝れたるが故なり。

【九】劣を擧げて勝を顯はす。凡夫二乘の善根にては力微弱にして菩薩の智の對治する煩惱を破ること能はずとの意なり。生成の義も亦凡夫二乘の及ばざる所なるも之を略して說かず。

【一〇】大乘の教理行果を照了する智慧の光明といふ義にして、定中に發す所の無漏智の無明を破する力を光明といひ、二乘の智より勝るが故に大乘といふ。

論に曰く、三昧に入るとは此の法は〔一〕思量の境界にあらざることを顯示せんが故なり。已に三昧分を說けり。次に加分を說かん。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩は是の菩薩の大乘光明三昧に入りて、卽時に十方十億の佛土の微塵數に等しき諸佛の世界を過ぎて、十億の佛土の微塵數の諸佛有りて、皆其の身を現じ、同じく金剛藏と名く。是の諸佛は是の如く讃めて言はく、善い哉、善い哉、金剛藏。乃ち能く是の菩薩の大乘光明三昧に入れりと。復た次に、善男子よ、是の如きの十方、十億の佛土の微塵數に等しき諸佛は皆同一の號にして、汝に威神を加したまへり。此れは是れ盧舍那佛の本願力の故に加す。

論に曰く、何が故に多くの佛加したまふや。〔二〕法及び法師を顯して、恭敬の心を增長せしめんが故なり。何が故に同じく金剛藏と號するや。加は本願の力なるが故なり。何が故に如來は是の如きの願を作したまふや。〔三〕多佛を顯示せんが故なり。此の三昧は是れ法の體、本と菩薩を行せし時皆金剛藏と名け、同じく此の法を說けり。今正覺を成ずるときも亦金剛藏と名く、故に〔四〕異名に加せず。又是の菩薩は諸の如來は己が名に同じきことを聞き已

〔一〕二義あり、一には自證の境界にして聞思の分齊にあらざること、二には自力にて之を說くこと能はざるが故に、三昧に依りて佛力を受け、宣說に堪ふることを示す。

〔二〕多佛の加は所說の法の勝れたると、能說の師の尊重すべきことを顯はす。

〔三〕多佛は皆同じく此の十地金剛の法に依ることを顯示するの意。古今を通じて同證同說の十地の法體なり。

〔四〕能加と所加と同號なるは過去に說く所の法と今の所說の十地の法と同一なることを表す。

りて（三五）踊悦を增すが故なり。何が故に無量の世界を過ぐと言はざるや。方便をもつて多佛なることを顯さんが故なり。何が故に定んで十億の佛土と言ふや。十地を説かんが爲めの故に、此の經は是の如く多く十の數を説く。彼の佛先に是の願を作し、今復た自ら加し、後に餘佛加するが故に、盧舍那佛の本願力の故に加すと言ふ。何が故に加するや。此の法を説かんが爲めの故に加するなり。

復た云何んが加するや。

經に曰く、又一切の菩薩の不可思議なる諸佛の法明を説く、智慧地に入らしめんが故に、一切の善根を攝せんが故に、善く一切の佛法を分別し選擇せんが故に、廣く諸法を知らんが故に、善く決定して諸法を説かんが故に、無分別智は清淨にして不雜ならんが故に。一切の魔法も染すること能はざるが故に、出世間の法、善根の清淨ならんが故に。不可思議の智の境界を得んが故に。乃至一切智人の智境界を得んが故なり。又菩薩の十地の始終を得んが故に、如實に菩薩の十地の差別方便を説かんが故に、念じて一切の佛法に隨順せんが故に、無漏の法を觀達し分別せんが故に、善擇の大智慧光明の方便の故に、具足せる智門に入らしめんが故に、所住の處に隨ひて正しく説く無畏の辯才明の故に、大無礙智地を得んが故に、憶念して菩提心を忘れざらんが故に、一切衆生を教化し成就せんが故に、一切處の法に通

【三五】 踊悦に二意あり、一には佛は金剛の智を讃して金剛藏と名く、我今此定に入りて佛と同一の境界に到ると知る故に悦ぶ。二には此定に入りて將に説法せんとして佛自ら同名なることを説くが故に、衆皆説者金剛藏は佛の所讃と同じきを知つて信受するが故に踊悦す。

達し分別することを得んが故なり。

論に曰く、此の二十句は一切の菩薩自利利他に依るが故に加す「との意を顯はす」。是の如く、初の十句は自利の行に依り、後の十句は利他の行に依る。是の中、一切の菩薩とは、〔六〕住と信と行と地とを謂ふ。不可思議なる諸佛の法とは是れ出世間の道品をいひ、明とは見智にて證を得るをいひ、說とは中に於て分別するなり。入るとは信樂して證を得るなり。智慧地とは十地の智を謂ふ。本分の中に說くが如し。此は是れ根本の入なり。經に「又一切菩薩の不可思議なる諸佛の法明を說く智慧地に入しめんが故に」といへるが如し。此修多羅の中に說く根本の入に依に九種の入あり。一には攝入、聞慧の中に一切の善根を攝するが故に、經に「一切の善根を攝せんが故に」といへるが如し。二には思義入、思慧は一切の道品の中に於て、智の方便なるが故に經に「善く一切の佛法を分別し選擇せんが故に」といへるが如し。三には法相入、彼彼の義の中に無量種種に知るが故に經に「廣く諸法を知らんが故に」といへるが如し。四には敎化入、思議する所に隨ひて名字具足し善く法を說くが故に經に「善く決定して諸法を說かんが故に」といへるが如し。五には證入、一切法に於る平等の智は〔七〕見道時の中に善く清淨なるが故に、經に〔八〕「無分別智清淨にして不雜ならんが故に」といへるが如し。菩薩の衆生を敎

〔六〕十信、十住、十行、十地の四位の菩薩をいふ。

〔七〕菩薩の修行位にて初めて理を照し二空の理を證する位を見道といふ。

〔八〕無分別智とは平等智なり。見道に入りて無分別智正しく眞如を證し能取所取の二相を離る、故に清淨にして不雜といふ。

化するは即ち是れ因に佛法を設すなり。是の故に利他も亦自利と名く。六には不共智入、〔一八〕聲聞時の中に於て、一切の煩惱障を遠離するが故に、經に「一切の〔一九〕魔法も染すること能はざらんが故に」といへるが如し。七には〔二〇〕地地轉入、出世間の道品〔二一〕は資糧に、善根淨きが故に、經に「出世間の法、善根清淨ならんが故に」といへるが如し。復善根の熾し、出世間の道品の因と爲るが故なり。八には〔二二〕菩薩盡入、第十地の中に於いて、一切の如來の〔二三〕祕密智に入るが故に、經に「不可思議の智境界を得んが故に」といへるが如し。九には〔二四〕佛盡入、〔二五〕一切智に於て智に入るが故に、經に「乃至一切智人の智境界を得んが故に」といへるが如し。是の諸入は智義の差別を校量せんが爲に、次第に轉た勝る。〔二六〕根本の入に「此の差別あるに」あらず。一切の所說の十句の中に皆〔二七〕六種の差別相の門あり。此の言說解釋は應に知るべし、〔二八〕事を除く。事とは陰界入等を謂ふなり。六種の相とは、〔二九〕總相、別相、同相、異相、成相、壞相な

【一九】情意の煩惱を斷ずる法を修道といふ。
【二〇】魔法とは煩惱のこと。
【二一】修道位中に於て惑障智障の智と行とが地地轉進することを明かす。
【二二】菩薩の最終なる第十地を菩薩盡といふ。
【二三】佛の境界の深微なるを祕密といふ。
【二四】因位成滿して果海を窮め盡すが故に佛盡といふ。卽ち究竟位なり。
【二五】一切智は所入の佛智、人の智は能入の智なり。
【二六】上に說く所は本に就いて末を開くものにして地地轉勝の差別は行布門の漸次的施設也。根本の入には非ず、無別の中に別を立つ故に別にして而も無別なりとの意を顯す。
【二七】華嚴の六相圓融說を以て上の十句を釋するに差別と平等、圓融と行布と相即無礙なることを知らしむるなり。
【二八】五陰、十八界、十二處等の差別の事象は別相總にあらざるが故に六相の差別を立つることを許さず、蓋し事象に隨つて執取せしめざるの意。陰

り。總相とは是れ根本の入なり。別相とは餘の九入なり。別は本に依止して彼の本を滿ずるが故に。同相とは(三〇)入の故なり。異相とは(三一)增相の故なり。成相とは(三二)略說の故なり。壞相とは(三三)廣說の故なり。(三四)世界の成壞の如し。餘の一切の十句の中には義類に隨ひて知れ。第二の十句は所謂る菩薩の十地の始終を得るが故に、此れ根本の始終なり。是の中に(三五)始とは信欲親近等なり。(三六)終とは諸地を念持するなり。(三七)復た(三八)阿含及び證あり。是の如きの次第は(三九)初相に依りて臨に知るべし。(四〇)根本の始終に依るに十種の始終あり。一には(四一)攝始終、思慧の地は所聞の義に隨ひて受持して說くが故に。經に「如實に菩薩の十地の差別方便を說くが故に」と

界等の體に六相を具せずといふには非ず。

【二九】總相とは一の中に多くの德を含有する義、別相とは多德各別の義、同相とは多義互に相違せざる義、異相とは多義相似せざる相、成相とは此の諸義に由りて緣起を成ずるをいひ、壞相とは諸緣各自性に住して移動せざるをいふ。

【三〇】十句皆入と名けらるる邊を同相といふ。

【三一】增相とは九句前劣後勝の次第にて各相似せざる邊を異相といふ。

【三二】九入を集めて一入を成ずるが故に、一入といへば略說なり。

【三三】一入を分ちて九となし、九種の義の不同を示すは廣說なり。

【三四】世界の成壞とは[illegible]るは、多塵集つて共に一世界を成ずる邊は成相、諸塵一一分離するに各自相に住するは壞相なり。

【三五】始とは求法の初を明す。信なければ求めず、欲なければ苦を忍んで法を求めず、信と欲とを起すが故に、能く善友に親近して得法の方便をなす。

【三六】終とは諸地の法を得て忘れず、能く憶念して任持不失の故に念持といふ。教行相對に就て始終の義を明かす。前の入の十句は自利、今の始終の十句は利他なり。

【三七】次には教證相對に就て始終を顯す、阿含を始とし證を終とす。

【三八】阿含(ニ[illegible])は譯して教又は傳と譯す、[illegible]傳して古今相傳の言教をいふ。此教證相對に種種の義あり、教と行、地前と地上、解と眞、相と實、[illegible]

いへるが如し。二には〔四二〕欲始終、一切の佛法を證せしめんが故に、經に「念じて一切の佛法に隨順せんが故に」といへるが如し。三には〔四三〕行始終、〔四四〕觀分時の中には無漏の道品を分別して相覺を修するが故に、經に「無漏の法を觀達し分別せんが故に」といへるが如し。四には證始終、見道時の中に法無我の智の方便なるが故に、經に「善根の大智慧光明の方便の故に」といへるが如し。是の中、善根とは〔四五〕擇の中の最勝なり。最勝とは法無我の智なるが故なり。大智慧とは小乘に過ぐるが故に、光明とは無明を對治するが故に。〔四六〕此の事の中にも彼の時の中にも、皆善く知るが故なり。五には修道始終、〔四七〕出世間智の智力をもつて〔四八〕法義に入ることを得るが故に、經に「〔四九〕具足せる智門に入らしめんが故に」といへるが

と用といふが如し。

【三九】以下所說の始と終とは、初に明かしたるが如く、前は始、後は終なることを知るべしとの意なり。

【四〇】前說根本の始終に依りて十種の別義を開說す。中に於て初の三は地前、次の一は見道、餘の六は修道なり。

【四一】攝は攝持又は攝取の義、思慧の智を以て所聞の教を攝持し、如實に說法して他を攝取することを明かす。

【四二】欲とは出世間の法を希念するの意。思慧の上品增上の求心なり。他をして證せしむるを其の功能となす。

【四三】行とは修行なり、思慧より修慧に進む

【四四】觀分時とは初地に對して三賢位の比觀の分齊を云ふ、未だ全く無相を學せざるが故に一分の觀なり。

【四五】擇とは簡擇の意にして智用なり。

【四六】此前を傳ずる古來三釋あり。且らく一義を擧げんに、此事の中とは後智相見道の中なり、彼時の中とは根本智眞見道の中なり、巧みに後得と根本の二智の用を具へ以て自ら嚴るを皆善く知るといふ、卽ち方便の義なり。

【四七】出世間智とは二地以上修道の解にして智體を擧ぐ、次の智力とは漸增の智用なり。

【四八】法義とは法は教法、義は義理なり

【四九】具足とは教義圓滿せる義なり。

如し。(五〇)此の處の菩薩は菩提に於て五種の障あり、一には諸の邪論を破ること能はざるの障、已に正義を說くも他の言能く壞り、復た眷屬離散す。二には難に答ふること能はざるの障、他の問の中に於て、茫然として對ふること無く、設ひ言說することあるも人信受せず。三には小乘に樂著する障、自ら大菩提を得ること能はず、復た衆生を利益することを捨つ。四には衆生を化することを懈怠するの障、中に於て利他の行を捨てて他の善を助けず、復た自らの善根增長せざるが故に。五には方便智無き障、善く衆生を化すること能はず、復た自らの菩提の行滿足せざるが故に。是の障を對治するに五の始終あり。一には能く邪論の障を破する始終、彼の著する所に隨ひ、己が正義を顯して邪執を對治し、無畏辯才の性闇からざるが故に、經に「所住の處に隨ひて正しく說く無畏の辯才明の故に」といへるが如し。二には能く難に答ふる始終、大無礙智の地を證するが故に、經に「大無礙智の地を得んが故に」といへるが如し。三には小乘に樂著するを對治する始終、大菩提の願と、大菩提の念とを忘失せざるが故に、經に「憶念して菩提心を忘れざらんが故に」といへるが如し。四には衆生を化する懈怠を對治する始終、衆生を利益して疲倦なきが故に、經に「一切の衆生界を敎化し成就せんが故に」といへるが如し。五には方便智無きを對治する始終、(五一)五明の處に於て、通達し分別せんが故に、經に「一切

【五〇】 次に後の五句を釋するに初に五障を辨じ後に經文を擧げて對治行を顯はす、八地より佛地に寄せて說く。

【五一】 五明とは內明(敎理學)聲明(文法等)工巧明(工藝)醫方明(醫學)因明(論理辯論の學)也。明は學の意にして古代印

處の法に通達し分別せんが故に」といへるが如し。(五二)已に何の故に加するやを說けり。復た云何んが加するや。謂く口と意と身とをもつて加するなり。云何んが口加なる。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝當に此の諸の法門の差別の方便法を辯說すべきが故に、諸佛の神力を承け、如來の智明加の故に、自の善根清淨なるが故に、法界淨の故に、衆生界を饒益するが故に、法身智身の故に、正しく一切の佛位を受くるが故に、一切世間にて最も高大の身を得るが故に、一切世間の道を過ぐるが故に、出世間法の道清淨なるが故に、一切智人の智の滿足を得るが故に。

論に曰く、此の十句の中、辯才とは所得の法義に隨ひて憶持し忘れずして說くが故なり。諸の法門とは十地の法を謂ふ。差別とは種種の名相あるが故なり。此の法を善巧に成ず、是の故に方便と名く。根本の辯才に依るに二種の辯才あり。一には他力の辯才、二には自力の辯才なり。他力の辯才とは佛の神力を承くるが故に。云何んが佛の神力を承くるや。如來の智力は闇加せざるが故に、經に「諸佛の神力を承け如來の智明加の故に」といへるが如し。(五三)自力の辯才とは四種あり。

度に於ける學藝一般を五種に分類せるもの。

【五二】以上五障の次第は初は他の邪宗を破することを能はず、二は能く他を破するも自己の正宗を立つること能はず、三は能く立破するも小乘に樂著し、四は小乘を樂はずと雖化他の事を忘り、五は化他を爲すと雖其方便を知らず、此の五障を破して化他の行を完うす。

【五三】自他の因緣に因りて說あるが故に自力を因となし他力を緣となす。自力の辯才を四種に分つ、一には有力能作の

一には〔五四〕有作善法淨辯才、經に「自の善根清淨なるが故に」といへるが如し。二には〔五五〕無作法淨辯才、經に〔五六〕「法界淨の故に」といへるが如し。三には化衆生淨辯才、經に「衆生界を饒益するが故に」といへるが如し。四には身淨辯才、是の身淨中に三種の〔五七〕盡を顯はす。一には菩薩盡、二種の利益あり。二には聲聞、辟支佛不同盡、三には佛盡なり。菩薩盡とは法身は心意識を離れ唯智の依止なり、經に「法身智身の故に」といへるが如し。二種の利益とは一には現報の利益、〔五八〕佛位を受くるが故に。二には後報の利益、〔五九〕摩醯首羅の智處に生るるが故に、經に「正しく一切の佛位を受くるが故に」といひ、一切世間にて最も高大なる身を得るが故に」といへるが如し。〔六〇〕二乘不同盡とは〔六一〕五道を度り、復た涅槃の道淨き

義、二には無力不作の義、三には二力を具するが故に能く衆生を引攝す、四には二力の相を泯するが故に理に稱うて德を成す。又、初の二は教行（相）と證（體）とに當り、自利に屬す、次の一は利他、後の一は二利成滿なり。

【五四】有作とは教行也。修生の故に有作といふ、本具の理性は教行に依りて修顯せらる。而も本に順ずるが故に善といひ、法體垢染を離るるが故に淨といふ。自性清淨の心體に隨順せる教行の意。

【五五】無作とは證行なり、自體本具にして修成にあらず、故に無作といふ。

【五六】法界とは無作の法にして不變の眞心なり。眞心は染を離るるが故に淨といふ。

【五七】盡とは究竟滿の意。

【五八】第十地には佛の灌頂を受け佛位を受く、因位を改めず此益あるが故に現報といふ。

【五九】摩醯首羅（Maheśvara）。大自在天なり。此の處は十地の菩薩の生處、報身佛の淨土なるが故に智處といふ、因位を轉じて成果の處に至るが故に後報の利益といふ。

【六〇】二乘は五道の生死を厭ひて之を離れんとし、涅槃の清淨を欣びて之を求むるも菩薩は生死を厭はず涅槃に住せざるが故に二乘不同盡といふ。

【六一】五道とは地獄、餓鬼、畜生の三惡道と人界と天界となり、此五道の因を斷ち果を離るるを度又は過といふ。

が故に、經に「一切の世間道を過ぐるが故に、出世間法の道淸淨なるが故に」といへるが如し。（六二）佛盡とは一切智智に入りて滿足するが故に、經に「一切智人の智の滿足を得るが故に」といへるが如し。この（六三）自力辯才は轉た勝れて上上なることを校量せんが故なり。

已に口加を說けり。云何んが意加なる。

經に曰く、爾の時に諸佛は金剛藏菩薩に眞實の無畏身を與へ、無障礙の樂說辯才を與へ、善淨智差別の入を與へ、善憶念不忘の加を與へ、善決定意方便を與へ、偏至一切智處を與へ、諸佛の不壞力を與へ、如來の無所畏不怯弱を與へ、一切智人の智無礙をもつて法を分別する正見を與へ、一切如來の善く分別する身口意の莊嚴起を與へんが故なり。

論に曰く、此の十句は（六四）意加なり。無畏身とは二種あり。一には無上の勝れたる威德の身を與ふ。王の衆に處して自在無畏なるが如し。二には辯才無畏の身を與ふ。前は（六五）色身勝れ、後は（六六）名身勝る。是の名身に九種あり。一には不著の辯才、說法して（六七）斷せず滯礙なきが故に、經に「無障礙の樂說辯才

【六二】佛盡とは佛果圓滿の位なり。

【六三】此句は疑難を防ぐ、金剛藏菩薩は未だ佛位を成ぜざるに、何故に此の自力辯才の中に佛盡を說くやといふに、自力辯才の轉勝の相を比較して示さんが爲に、佛位に寄せて殊勝の極を彰すとの意なり。

【六四】佛は意中にて冥冥に加被して智力を與ふるものなれば都て言說なし、今の經說は集經者の言なり。

【六五】色身とは前の威德無畏の身。

【六六】名身とは後の辯才無畏の身、言說は名字なるを以て名身といふ。

【六七】說法に停廢なく、言辭流るるが如く事理に滯らざるの

を與ふる故に」といへるが如し。二には(六八)堪辯才、善淨の堪智に四種あり。一には(六九)縁、二には法、三には作、四には成、善く此の義の(七〇)成不成の相を知るが故に、經に「善淨智の差別入を與ふるが故に」といへるが如し。三には(七一)任放辯才、說くに(七二)次を待たず、言辭斷せず、處處意に隨ひて名義を忘れざるが故に、經に「善く憶念する不忘の加を與ふるが故に」といへるが如し。是の不忘の加は意力の加なるが故なり。四には能說辯才、應に度すべき所に隨ひて種種の譬喩をあげ、能く疑を斷つが故に經に「(七三)善決定の意(七四)方便を與ふるが故に」といへるが如し。五には不雜辯才、(七五)三種の同相智常に現前するが故に、經に「偏至一切智處を與ふるが故に」といへるが如し。六には(七六)敎出辯才、佛の十力の不壞を得て度すべき者に於て、煩惱を斷せしむるが故に、經に「諸佛の不壞力を與ふるが故に」といへるが如し。七には不畏辯才、佛の決定無畏を得て他の言說に於て、怯弱ならざ

意。經文の無障礙を釋するなり。

【六八】 諸法を知るに堪へ、言說を起すに堪ふるが故に堪辯といふ。

【六九】 縁とは因縁の法、法とは法爾の法、作とは二法の作用、成とは正理の例を引て前の三を證成す。此の四種に就ては多釋あり、今解し易き一義を擧ぐるのみ。

【七〇】 此の四に順ずるを成といひ、乖くを不成といふ。

【七一】 任放とは意に任せて自在に說くの意。

【七二】 次とは次第順序のこと。

【七三】 他の信心を發し決定して疑なからしむるを善決定の意といふ。

【七四】 方便とは譬喩を擧げて說く等のここ。

【七五】 三種の同相智とは多釋あり、空、無相、無願といひ、自相(個體の特殊相)共相(諸法共通の相)不二相といひ、世諦、眞諦、一實諦といふ等なり。三種の義雜亂せざるが故に不雜といふ。

【七六】 敎法を說きて衆生の煩惱を斷じ、生死を出離せしむるの意に依りて敎出といふ。

るが故に、經に「如來の無所畏不怯弱を與ふるが故に」といへるが如し。八には無畏辯才、一切智に於て、隨順して修多羅等の法の（七七）六種の正見を宣說するが故に、經に「一切智人の智無礙をもつて法を分別する正見を與ふるが故に」といへるが如し。九には（七八）同化辯才、一切の佛の無畏身等の（七九）三種の敎化を得て度すべき所の者に隨ひて、殊勝なる三業の（八〇）神化を顯示するが故に、經に「一切如來の、善く分別する身口意の莊嚴（八一）起を與ふるが故に」といへるが如し。又諸佛には力あり、慈悲あり、何が故に十種の無畏身を以て、唯金剛藏のみに加して、餘の者に加せざるや。

經に曰く、何を以ての故に、菩薩の大乘光明三昧法を得るを以ての故なり。亦是れ菩薩の本願より起るが故に、善淨の深心の故に、善淨の智圓滿なるが故に、善く助道の法を集むるが故に、善く本業を修するが故に、無量の法を念持するが故に、淸淨の光明法を信解するが故に、善く陀羅尼門の不壞を得るが故に、法界智印善く印するが故なり。

論に曰く。是の菩薩は大乘光明三昧法を得、餘の者は得ざるを以て

【七七】六種の正見とは金剛仙論に依るに、一には眞實智正見、能く理法を知る。二には行正見、能く行法を知る。三には敎正見、能く敎法を知る、四には二邊を離れたる正見、前の理法を知りて情取に同ぜざるなり。五には不思議正見、前の行法を知つて德を成し情を離る。六には根欲性正見、前の敎法を知つて機根に應じて說法す。

【七八】同化とは說者金剛藏菩薩の三業をして如來の敎化と同一ならしむること。

【七九】記心輪（意業）神通輪（身業）正敎輪（口業）を三種の敎化といふ。

【八〇】殊勝にして測り難きを神化といふ。

【八一】起とは神力にて事を起すこと。

の故なり。三昧法を得るに二種あり。一には本願成就し現前するが故に、經に「亦是れ菩薩の本願より起るが故に」といへるが如し。二には三昧の身は功德を攝するが故に、此の三昧の身、功德を攝するに（八二）八種有り。自利と利他とに依るが故なり。一には因淨、深心は菩薩地の盡に趣きて淸淨なるが故に、經に「善淨の深心の故に」といへるが如し。深心とは信樂等は復た是れ一切善法の根本なるが故なり。二には智淨、菩薩地の盡に趣くは修道の眞如觀の智の故に、經に「善淨の智圓滿なるが故に」といへるが如し。此の眞如觀の內智圓滿にして普く法界を照すこと猶ほ日輪の光の世界に徧きが如くなるが故なり。三には（八三）身轉淨、生生に轉勝して善行成滿するが故に、經に「善く助道の法を集むるが故に」といへるが如し。四には（八四）心調伏淨、善く煩惱と習とを斷ずるが故に、經に「善く（八五）本業を修するが故に」といへるが如し。五には聞攝淨、一切の如來の說きたまふ所の祕密の法を能く受持するに堪ふるが故に、經に「無量の法を念持するが故に」といへるが如し。六には通淨、勝通自在を得るが故に、經に「淸淨の光明法を信解するが故に」といへるが如し。決定の信力を以て通を攝取するが故なり。七には辯才淨、善く（八六）陀

【八二】前の四は自利、後の四は利他なり。

【八三】助道の善法を修して出世の報身を得、而かも初地以上は屢受身するが故に生生といひ、後生の身は前生の身に勝る故に轉勝といふ。

【八四】有に著せざるが故に麤惑を斷じ、無に住せざるが故に惑の細習を斷ずるを心調伏といふ。

【八五】無住にして而かも惑を斷じ能く功德智慧の助道を起すを本業といふ。蓋し凡夫の如く有に著せず、二乘の如く無に住せざるを菩薩の正道と爲すが故に本業といふ。

【八六】陀羅尼（Dhāraṇī）は總持

羅尼門の相違せざることを知るが故に、經に「善く陀羅尼門の不壞を得るが故に」といへるが如し、中に於て所有る（八七）初章字は是の陀羅尼門なり、一一の字門に無量の（八八）名句字身を攝取するが故に。不壞とは前後相違せざるが故なり。八には離慢淨、謂く眞實智をもつて教授して〔照理の平等相に〕異らざるが故に、經に「法界智印をもつて善く印するが故に」といへるが如し。中に於て三昧身の功德を攝するに（八九）四種の自利に依る因有り。〔經に〕「善淨の深心の故に、善淨の智圓滿なるが故に、善く助道の法を集むるが故に、善く本業を修するが故に」とあり。此の修多羅の中の四句は次第に、精進の因、不忘の因、勢力の因、彼の不染の因を說く。復た利他に依る因に四種有り。無量の法を念持するが故にとは斷疑の因なり。淸淨の光明法を信解するが故にとは敬重の因なり。神通力を以て不思議の處に示現し、諸の見る者をして決定して信入せしむるが故なり。善く陀羅尼門の不壞を得るが故にとは（九〇）轉法理の因なり。法若し壞する時は餘尊の法を假りて誦持するが故なり。法界智印をもつて善く印するが故にとは、教授出離の因なり。是の如く〔他を〕化する者は自利の不忘を得るが故なり。已に意加を說けり。云何んが身加なるや。頂を摩して覺せんが故なり。

と譯す。一字一句に無量の字句と義趣とを含み、而かも前後相違せざるが故なり。

【八七】初章字は梵字の母音。

【八八】名は事物の自性を詮す名稱、句は名を連ねて思想を顯はす句なり。字は文字。

【八九】行能く因となる義を明かす。

【九〇】深き法理を淺に從へて說き、又は眞を轉じて妄に從へて說き、而かも其の深と眞とを失はざるは陀羅尼なり、故に轉法理の因といふ。

經に曰く、爾の時に十方の諸佛は本處を離れず、神通力を以て皆右の手を伸べ、善く金剛藏菩薩摩訶薩の頂を摩したまへり。

論に曰く、本處を離れずして摩す。此れは、殊勝の神力なることを顯示するなり。若し、(九一)此の處に來れば、奇異にあらず。此れ(九二)如意の通力にして、餘の通等には非らず。已に加分を說けり。云何んが起分なるや。

經に曰く、諸佛は金剛藏菩薩の頂を摩し已りぬ。爾の時に金剛藏菩薩は卽ち三昧より起てり。

論に曰く、卽ち三昧より起つとは三昧の事の訖れるを以ての故なり。又(九三)勝力を得て說く時復た至る。定には言說なきが故に。已に起分を說けり。云何んが本分なるや。

經に曰く、三昧より起ち已りて、諸の菩薩に告げて言はく、諸の佛子よ是の諸の菩薩の願は善の決定なり、雜無く、見るべからず、廣大なること法界の如く、究竟して虛空の如く、未來際を盡し、一切の衆生界を覆護す。佛子よ、是の諸の菩薩は乃ち能く過去の諸佛の智地に入り、乃ち能く未來の諸佛の智地に入り、乃ち能く現在の諸佛の智

【九一】本處を離れ此處に來つて摩すれば不思議の事に非ず、特に奇異を顯はすは法の殊勝を示さんが爲なり。

【九二】如意の通とは自在に自身を轉變すると、餘の通とは幻通(外事を轉變すると)、法智通(智法無碍なると)、聖自在通(苦の中に樂想を生じ、樂の中に苦想を生ずること)をさす。今は自身を變じて延促一多なるが爲に、餘の通に非ずといふなり。

【九三】今や勝力を得て說法の時至れり、而も定中には言說なきが故に定を出づとの意也。

地に入る。諸の佛子よ、此の菩薩の十地は是れ過去、未來、現在の諸佛已に說き、今說き、當に說きたまふべし。我れ是の事に因るが故に是の如く說く。何等をか十と爲す。一に歡喜地と名く。二に離垢地と名く。三に明地と名く。四に燄地と名く。五に難勝地と名く。六に現前地と名く。七に遠行地と名く。八に不動地と名く。九に善慧地と名く。十に法雲地と名く。諸の佛子よ、此の菩薩の十地は過去、未來、現在の諸佛、已に說き、今說き、當に說きたまふべし。佛子よ、我れ諸佛の世界に是の諸の如來の此の菩薩の十地を說きたまふを嘆ぜざる者あることを見ず。何を以ての故に、此は是れ菩薩摩訶薩の增上勝妙の法なるが故なり。亦是れ菩薩の光明の法門なり。所謂十地の事を分別す、諸の佛子よ、是の事不可思議なり、所謂菩薩摩訶薩の諸地の智慧なり。

論に曰く、何が故に請はざるに說くや。若し自ら說かざれば衆は爲めに說くか說かざるかを知らず。又復た何の法を說かんと欲するやを知らざればなり。(九四)願は善の決定とは初地の中に說ける發菩提心の(九五)如し。卽ち此れ本分の中の願なり、應に知るべし。(九六)善決定とは眞實智の攝なるが故に、(九七)善決定とは卽ち是れ善決定なり。(九八)此は已に初地に入る。信地の

【九四】願と發菩提心とは名異ると雖も體一なり。出世眞證の善根は、能く增長して菩提に趣順するを以て、之を願と爲し、亦發心と名くるなり。

【九五】如しとは譬の意に非ず、直に法を指す辭にして、願は卽ち發心なりとの意なり。

【九六】善決定。善卽決定にして善の意を解す。證智相應の願は能く理に隨ふが故に善といふ。

【九七】善決定とは經文を擧げ、決定を釋す。

【九八】初地に入れば證決定にして、地前の信地所攝の願に非

所攝に非ず、此の善決定に六種あり。一には觀相善決定、眞如觀は一味の相なるが故に、經に「雜無し」といへるが如き故に。二には眞實善決定、一切世間の境界に非ず、出世間なるが故に、經に「見るべからず」といへるが如き故に。三には勝善決定、大法界の故に、一切の佛の根本なるが故に、經に「廣大なると法界の如し」といへるが如き故に。(九九)大勝と高廣とは、體一にして名を異にす、法相の義なるが故なり、(一〇〇)一切の法は法爾なるが故なり。復た法界の大眞如觀は諸の凡夫二乘智等の淨法に勝る。法爾なるが故なり。復た法界の大方便集地は謂く、大乘の法を說く法爾なるが故なり。復た法界の(一〇一)大白法界の善法は法爾なるが故なり。四には(一〇二)因の善決定に二種あり。一には(一〇三)無常愛果の因を成ずる善決定、是の因は虛空の如く是に依りて諸の(一〇四)色を生じて、色盡きざるが故に、經に「究竟して虛空の如し」

す、故に善決定は正しく地上の攝なり。

【九九】體は普遍にして、處として在らざるなきを大といひ、相は情取に非らざるを勝といひ、理は數量を超ゆるを高となし、用は該ねざるなきを廣といふ。體一にして、名を異にす、義差別するが故なり。

【一〇〇】前は廣大の義を釋す、次は法界の名を釋す。法爾とは界の義を釋す。法の本性なるが故に法爾と云ふ。以下大と勝と廣と高とを次第に釋す。

【一〇一】無漏の善法は世表に出づるが故に高の義なり。

【一〇二】因の善決定の二種とは初は菩提有爲の果の生因、後は涅槃無爲の果の了因なり。又初は所依となつて機に應じて應化の用を起すが故に依因なり、後は用を攝して眞に歸するが故に攝因なり。又初は機に應じて斷盡あることを示し、後は相續して未來際を盡す。又初は外に外用を起し、後は內に眞性を證す。

【一〇三】佛菩薩は大涅槃を得て而かも世間を捨てず、世に隨つて生滅するを無常といひ、此の生死は大悲の作用なれば苦果に非ず、故に愛果といふ。

【一〇四】色とは有爲の諸法にして前に云へる愛果なり。

といへるが如き故に、二には常果の因の善決定、涅槃の道を得ればなり、經に「未來際を盡すといへるが如き故に。五には(一〇五)大善決定、隨順して他を利益する行を作す、經に「一切の衆生界を覆護す」といへるが如き故に。(一〇六)次前の善決定と(一〇七)此の願とは世間と涅槃との中に(一〇八)一向に住するに非ざるが故に。六には不怯弱の善決定、一切諸佛の智地に入りて怯弱ならざるが故に、經に「佛子よ、諸の菩薩乃至現在の諸佛の智地に入る」といへるが如き故に。復た此の十地は成佛の智を生じて住持するが故に、經に「諸の佛子よ、是れは此れ、菩薩の十地、是れ過去、未來、現在の諸佛、已に說き、今說き、當に說きたまふべし」といへるが如き故に。中に於て、善決定とは是れ總相、餘は是れ別相なり。同相とは善決定、(一〇九)異相とは別相なるが故に、成相とは是れ略說、壞相とは廣說の故に。(一一〇)世界の成壞の如し。

(一一一)何が故に定んで菩薩の十地を說くや。十種の障を對治せんが故なり。何をか十種となす。一には凡夫我相の障、二には邪行の衆生身等に於ける障、三には(一一二)闇相ありて、聞思修

【一〇五】廣く他を利する德なれば大善と名く。

【一〇六】前の因善を次前と指す。

【一〇七】願と決定とは同意なれば今の大善決定を此願と云ふ。

【一〇八】前の決定中の常果の因は涅槃を得るが故に全く世間に住するに非ず。又前の無常果の因と此の大善決定とは世間に隨ふ利他の行なれば、一向に涅槃に住するにも非ず。大智は生死に住せず、大悲は涅槃に住せずとの意なり。

【一〇九】六種の相の差別に依つて異名を立つ、故に異相とは別相なりといふ。前の總別の別とは同じからず。

【一一〇】此の六相の配釋は前に已に說けり、之に准じて知るべし。

【一一一】以下十障を擧げて十地を說く所以を明かす。此障あれば十地を得ず、此障を對治する智は卽ち十地なり。故に十障は十地の德を顯はす。

【一一二】闇相とは心に慧明なきを

等の諸法に於て忘るる障、四には（二三）解法慢の障、五には（二四）身淨我慢の障、六には（二五）微煩惱習の障、七には（二六）細相習の障、八には無相に於て、（二七）行有るの障、九には善く衆生を利益し能はざるの障、十には諸法の中に於て自在を得ざるの障なり。何が故に十地は初を歡喜と名け、乃至、十を法雲と名くるや。無上の自利利他の行を成就して初て聖處を證し、多く歡喜を生ずるが故に歡喜地と名く。能く誤心を起すと犯戒と煩惱垢等とを離れ、清淨の戒具足するが故に離垢地と名く。聞思修等に隨ひて照法顯現するが故に明地と名く。不忘の煩惱の薪を智火能く燒くが故に燄地と名く。出世間智の方便善巧を得て、能く度し難きを度するが故に難勝地と名く。般若波羅蜜の行の（二八）有間に大智現前するが故に現前地と名く。善く無相の行を修し功用究竟して、能く世間と二乘の出世間の道とに過ぐるが故に遠行地と名く。（二九）報

いふ。

【二三】解法慢とは前の闇相を離れて能く法を知ると雖も、相を取つて解するが故に障と爲す。前三地は世間行なれば、福を以て罪を捨するも、四地以上は出世間なれば、智を以つて相を捨つ、此の故に解法慢の障あり。

【二四】身淨我慢とは前四地に淨法身を得るも、身淨の相を取るが故に此の障あり。慢とは道に隨つて執取するの障をいふ。

【二五】慢に上中下を分つに、四地は上慢、五地は中慢、六地に微細なる下品の慢障あるを微煩惱習といふ。六地の十平等の法に對して、五地の中に染淨の法を取る分別の慢心を障となす。

【二六】七地の十方便慧の勝行を發すに對すれば、六地中に空を説くを障となす。蓋し空に即して勝行を起すを能はざればなり。有を取するを麁となし、空を取するを細となす。細狀の習氣なれば細相習といふ。

【二七】八地の無功用の行に對すれば、七地の中に説く功用を障とす。

【二八】有間とは間斷あるの義、七地以上の念念無間斷なるに對して、劣るが故に有間といふ。

行純熟して（二〇）無相無間なるが故に不動地と名く。無礙力をもつて法を說き利他の行を成就するが故に善慧地と名く。大法身を得て自在を具足するが故に法雲地と名く。是の如く法王の位を受くるは猶太子の諸王子に於て自在を得るが如し。是の處に微智の障有るが故に自在ならず、此の障を對治するが故に佛地と說く。（二一）又懷孕の藏に在るが如し。菩薩の十地も亦復是の如し。諸地に障有るを以ての故に、子の生るる時の如く佛時も亦爾り、事究竟なるが故に、又生るる時諸根覺了するが如く、佛も亦是の如く一切の境界に於て、智明了なるが故に。藏に十時あり。一には（二二）陀羅婆身の時、二には（二三）捭羅婆身の時、三には（二四）尸羅他身の時、四には堅身の時、五には形相似色身の時、六には（二五）性相似身の時、七には業動身の時、八には滿足身の時、中に於て三種あり。（二六）根滿足せる時、（二七）男女の相別の滿足せる時、廣長の諸種の滿足せる時なり。是の如きの十時は諸地と相似するが故なり。佛

【一九】所有る行德は前の修に由りて起る故に報行と名く、果報の義には非ず。今成就するが故に純熟といふ。

【二〇】功用の相を離れ相の爲に動ぜられざるを無相といひ、無相觀常に現前するを以て煩惱の爲に動ぜられざるを無間といふ。

【二一】以下譬を擧げ、十地の次第に障を離れて、佛果に到ることを示す。

【二二】陀羅婆とは乳なり。受胎一ヶ月の身は微薄なると乳の如し。初地中に始めて眞如を證し佛智の微薄なるに喩ふ。

【二三】捭羅婆は薄酪なり。二地中に入りて修道に進み、解心轉た强く、乳の酪となれるが如し。

【二四】尸羅他は稠酪なり。三地中に入りて禪定智慧方便を具し、利他の善根已に稠厚な礙に喩ふ。

【二五】性とは根等の諸根の相現ずるをにて、六地中に無障礙の智開明現前するに喩ふ。

【二六】根滿足とは八地中に報行純熟せるに喩ふ。

【二七】男女の相別とは九地中に自利利他の二行の相分るるに喩ふ。

子よ、我は諸佛の世界に是の諸の如來の此の菩薩の十地を說くとを歎せざる者あるを見ずとは、此の勝法なると顯はし、時衆をして渴仰を增さしめんが爲めの故なり。佛世界とは中に於て成佛す。喩へば（二八）稻田の如く、往いて佛事を作す者も亦佛世界と名く。說を歎ずとは中に於て二種あり。一には（二九）阿含の義を說くが爲め、二には（三〇）證入の義の爲なり。摩訶薩とは三種の大あり。一に願大、二に行大、三に利益衆生大なり。勝妙の法とは諸の法門の中にて最も殊勝なるが故なり。光明とは此の大乘の法は一切の餘の法門を顯照するが故なり。（三一）法門とは名けて法と爲すが故なり。十地の事を分別すとは世間智の知る所の法を顯示するが故なり。是の事は不可思議なり、所謂菩薩摩訶薩の諸地の智慧とは出世間の智を顯示するが故なり。此れ世間の分別地の智の能く成ずるに非ず、菩薩の清淨道なるが故なり。已に本分を說けり。如何んが請分なるや。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩は、諸の菩薩の十地の名を說き已りて、默然として住し復た分別せず、是の時に一切の菩薩衆は菩薩の十地の名を說くを聞き已りて、咸皆渴仰して解說を聞かんと欲し、各是の念を作さく、「何の因、何の緣ありてか、是の金剛藏菩薩は、諸の

【二八】稻を種うる處を稻田といふが如く、佛の出世する處を佛世界と名く。

【二九】阿含の義とは諸大衆の爲に宣說せられたる因分可說の言敎なり。

【三〇】證入の義とは微妙にして言思を絕したる果分不可說の境界にして、人をして證契せしむるなり。

【三一】法門を釋して法と名くとは直に法體を指斥したるものにして、名義を釋したるにあらず、法は能く人を通じて出世間に趣入せしむるが故に法門と名く。

菩薩の十地の名を說き已りて、默然として住し、更に解釋せざるや」。時に大菩薩衆の中に、菩薩あり、解脫月と名く。諸の菩薩の心を知り、深く疑を生じ已りて、即ち偈頌を以て、金剛藏菩薩に問うて曰く、

何が故に淨覺の人、念智功德具はり、諸の上妙地を說き、力ありて解釋せざるや。
決定せる此の一切の、菩薩は大名稱あり、何が故に地の名を說きて、而も其の義を演べざるや。
此の衆は皆聞かんこと樂ふ、佛子の智は無畏なり、是の如きの諸地の義を、願はくは爲めに分別して說け。
此の衆は皆淸淨にして、懈怠を離れて嚴淨に、堅固の中に安住して、功德と智とを具足す。
迭ひに共に相瞻て住し、一切咸恭敬す、蜂の熟蜜を欲するが如く、渴の甘露を思ふが如し。

論に曰く、何が故に默然として住するや。大衆をして渴仰して說を請はしめんと欲するが故なり。復た菩薩の法を尊敬することを增さしめんが故なり。何が故に解脫月菩薩は初めに請ふや。彼の衆の上首なるが故なり。餘のもの問ふときは則ち亂る。衆調伏せるが故に。何が故に偈頌をもつて請ふや。字少くして、多義を攝するが故に。諸の讃歎する者は多く偈頌を以てするが故なり。此の五偈は何等の義を說くや。說く者も聽く者も諸過なきことを顯示せんが故に。若し過ある者は則ち說

に應せず。是の中に說く者は淨覺にして過なきことを顯示せんが故なり。復た聽く者も同法決定せることを顯さんが故に。聞かんことを樂ふが故に。復た餘の者の淨心なることを示さんが故なり。又此の衆は皆法を聞くに堪へたることを顯さんが故に、偈に、「(一三一)迭ひに共に相瞻て住す」と言へる故なり。が云何んが說く者を歎ずるや。偈に言はく、

何が故に淨覺の人、念と智と功德と具はり、諸の上妙地を說き、力ありて解釋せざるや。

何が故に唯淨覺を歎ずるや。淨覺は是れ說の因なるが故なり。覺は覺觀に名く。是れ口言の行なり。淨說の因ありて、何が故に說かざるや。淨覺を歎ずるに、二種あり。一には對治を攝し、二には諸過を離る。是の中、念と智と具はるとは(一三三)對治を攝するが故なり。所治に二種あり。一には(一三四)雜覺、二には雜覺の因なり。憶想分別の故に。念とは(一三五)四念處なり、雜覺を對治するが故に、智とは眞如無相の智なり。雜覺の因たる憶想分別を對治するが故に。餘は諸過を離るることを顯示す。是の過に三種あり。三過ある者には說くこと能はざるなり。何をか三となす。一に(一三六)慳嫉、二に說法懈怠、

【一三一】是れ諸菩薩の法を求むる心齊しく、情に乖異なきことを表す。

【一三三】能治の行現前して、所治の障を起らざらしむることを明かす。

【一三四】雜覺とは常樂我淨の四倒の見。思求の力を覺といふ、此の顚倒の見にて淨心を穢濁するが故に雜覺といふ。雜は雜染、覺は尋伺の義なり。

【一三五】淨樂我常の四倒を對治するを四念處の慧といふ。身は不淨なりと觀じて淨の倒想を治し、受は苦也と觀じて樂の倒想を治し、心は無常也と觀じて常の倒想を治し、法は無我也と觀じて我想を治す。

【一三六】慳は法を慳しむの義、己の知る所を惜しみて人に說か

三に（二三七）不樂說なり。慳とは其の心に法を悋む、嫉とは他の勝智を忌むなり。功德の具はるとは（二三八）不瞋等の功德の具はることにして、初過なきことを示さんが故に、上地を說くとは第二過無きことを示さんが故に。（二三九）力ありとは第三過無きことを示さんが故なり。是の如きの二種の淨覺をもつて說者を歎じ已り、次に聽者を歎ず。偈に言はく、

決定せる此の一切の、菩薩は大名稱あり、何が故に地の名を說きて、而も其の義を演べざるや。

決定とは（二四〇）黠慧明了なるが故なり。決定に三種あり。一に上決定、大菩提を願ふが故に。二に名聞決定、他の人善く敬重するが故に。三に攝受決定、彼の說者は善く知るが故に。偈に菩薩と言ふが故に、大名稱といふが故に、地の名を說くといふが故に。是の如く次第して應に知るべし。決定して受法に堪ふるの器ありと雖も、心に聞くことを欲せざれば、亦た說くことを得ず。偈に言はく、

此の衆は皆聞かんことを樂ふ、佛子の智は無畏なり、是の如きの諸地の義を、願はくは爲めに分

ざるなり、嫉は他の勝智あるを忌み己に過ぐることを欲せざるが故に說かざるなり。

【二三七】勸めて說くと雖も巧慧なきが故に、人は其の言說する所を聞くを欲せざるの意。

【二三八】慳嫉は貪瞋癡の三毒に攝はれる過なれば、不貪不瞋不癡に依りて對治せらる。

【二三九】力とは方便を具て巧說する力なり。此の力あるが故に人皆其の說を聞かんと樂ふ、乃ち不樂說の過なし。

【二四〇】決定は根器にして其體は智なり。智の中、敎を知るを黠といひ證に入るを慧といふ。

別して說け。

決定とは是の中に阿含決定のみにて證決定に非ざるものあり。(四一)非現前決定無きもの有り。是の如き決定の法器は滿足せざるが故に、聽受すること能はず。此の衆は(四二)具足して決定せる故に、能く聽受することを示現す。偈に「佛子の智は(四三)無畏なり」と言へるが故に。智に二種あり、一には(四四)法を證するが故に、二には現に受くるが故に。是の如く善く法器の滿足せるを知りて、金剛藏に是の如きの諸地の義を願はくは爲めに分別して說かんことを請ひ已りて同法衆の決定樂聞の功德を歎ず。次に復た異衆を歎ず。偈に言はく、

此の衆は皆清淨にして、懈怠を離れて嚴淨に、堅固の中に安住して、功德と智とを具足す。

清淨とは不濁の故なり。濁に六種あり。此の諸濁を離るるが故に清淨と言ふ。何をか六と爲すや。一に不欲濁。二に威儀濁。三に蓋濁。四に異想濁、勝心を妬み心を破壞するが故に。五に不足功德濁、善根微少なるが故に。六に癡濁、謂はく愚闇等の故に。此の對治に六種の不濁あり。堅固に安住すとは所說の法に於て修行堅固なるなり。是の如く次第に相對す。懈

【四一】阿含と證の二決定あるも是れ菩薩の根器に就ていふのみ、現前の欲樂希望なければ說を爲すことを得ず、故に現前と相對す。

【四二】教證決定の根器と現前の欲樂とを具備せること。

【四三】無畏とは怯弱なき義。理に契ふの心卽ち智なるが故に無畏といふ。

【四四】前の根に應じて法を證すと云ひ、欲樂に應じて現に受くと云ふ。

忘を離るとは（一四五）不欲濁に對す。嚴とは（一四六）威儀濁に對す。淨とは（一四七）蓋濁に對す。堅固とは（一四八）異想濁に對す。功德具はるとは不足功德濁に對す。智具はるとは癡濁に對す。此の（一四九）六句に示現す。（一五〇）是の二偈は同生衆の淨を顯はし、次の一偈は異生衆の淨を顯はし後の一偈は二衆の淸淨を顯はす。偈に言はく、

迭ひに共に相瞻て住し、一切咸恭敬す。蜂の熟蜜を欲するが如く、渴の甘露を思ふが如し。

迭ひに相瞻るとは雜染の心なきとを示すが故なり。咸恭敬すとは法を敬重して妬心に非ざることを示すが故なり。下の半偈は敬法轉た深きに喩ふ。此の偈の迭ひに共に相瞻るとは是れ總相にして、一切咸恭敬すとは是れ別相なり。是の如く餘の偈も初句は總相にして、餘句は別相とす。同異成壞は上に說く所の如し。偈に言はく、

大智無所畏なる、金剛藏聞き已りて、大衆をして悅ばしめんと欲し、即時に頌を說きて言はく、

「難きこと第一にして希有なり、菩薩の所行を示し、地事に上を分別するは、諸佛の根本なり。

【一四五】欲樂希望の向上進修の心なき不欲濁をば、懈怠を離るるに由りて之を治す。

【一四六】恭肅ならざる威儀濁をば嚴整に由りて之を治す。

【一四七】名利を貪る蓋濁をば、潔淨の心によりて之を治す。

【一四八】貢高、輕慢等の異想濁をば、堅固の修行によりて之れを治す。

【一四九】六句の中初の二と第四とは欲樂に約し、餘は根器に約す。

【一五〇】以下結文にして是の二偈とは前の二偈なり、次の一偈とは今の偈文を指す。

微にして見難く念を離る、心地に非ざれば得難く、境界の智は無漏なり、若し聞かば迷悶せん。
心を持すること金剛の如く、深く佛の智慧を信じ、心地無我の智「あるもの能く聞く」、能聞の智は微細なり。
虛空に彩畫するが如く、虛空の風相の如く、智は是の如く分別す、見難きは佛の無漏なり。
我れ佛の智慧を念ずるに、第一にして世に知り難く、信じ難き希有の法なり、是の故に我れ默然たり。

論に曰く、此の初めの偈の中に、大衆をして悅ばしめんと欲すとは、是れ總じて正しく訓答する相なり。訓答に二種あり。一に堪訓答、二に不怯弱訓答なり。(一五一)偈に大智と言ふが故に。無所畏といふが故に、(一五二)不堪答を離れ、(一五三)不正答を離る。此の二は自他過なきことを示現するが故なり。何をか是の正答の相となすや。此の法は說き難く復た聞き難きが故に、云何んが說き難きや。偈に言はく、

難きこと第一にして希有なり、菩薩の所行を示し、地事に上を分別す、これ諸佛の根本なり。

【一五一】金剛藏の默して說かざるを視て大衆は、說者無智にて說に堪へざるに非ざるか、又は大衆不德にして聽受するに堪へざるかとの二種の疑惱を生ぜり。故に今大智ありといひて、說者に能說の力あるを示し(堪訓答)次に無所畏といひて、大衆の聽受に堪へざるを畏るるに非ざるを示し(不怯弱訓答)、大衆の二種の疑惱を除きて悅ばしむる也。

【一五二】說者に能說の智あるが故に。

【一五三】聽者に聽受に堪ふる力あるが故に。

難しとは得難きが故なり。難に二種あり。一に最難、二に未曾有難なり。偈に第一と言ふが故に、希有といふが故に、此の二は所說の難を示現す。何者か是れ難きや。偈に菩薩の所行を示し、地事に上を分別すと言へり。菩薩の行とは是れ出世間の智にして、示すとは顯示するの故なり。地事とは諸地の菩薩の行事を謂ひ、上を分別すとは勝れたることを說くが故なり。何者か菩薩の行なる。偈に諸佛の根本なりと言へり。佛といふは佛智を覺するが故なり。已に難說と說き、復た難き所以を說く。何者か是れ難きや。彼の菩薩の行事は(二三四)義住して是の如く說くべからず。云何んが彼の義住なるや。偈に言はく、

　微にして見難く念を離る、心地に非ざれば得難く、境界の智は無漏なり、若し聞かば迷悶せん。

【二三四】菩薩の行と事とは理に卽して成ずる故に義住と名く。

此の偈の中に得難しとは是れ總、餘は是れ別なり。得難しとは證し難きが故なり。是の得難しに四種あり。一に微難得、二に難見難得、三に離念難得、四に非心地難得なり。微難得とは聞慧の境界に非ざるが故に麤事は思惟を須ゐず。難見難得とは思慧の境界に非ざるが故に。離念難得とは世間の修慧の境界に非ざるが故に。三界の心心數の法の分別と、世間の修道智とは境界に非ざることを示現するが故なり。非心地難得とは報生善く修道智を得るも境界に非ざることを示現するが故に。此に心境界とは是れ心地なることを示現す。是れ誰の境界ぞや。偈に智の境界と言へり。何となれ

ば是の智見は實義なるが故に、何が故に餘の境界に非ざる。無漏なるが故なり、無漏とは出世間の義なり。是の義は世間智の境界に非ず。是の如き甚深の義は是の如く解すべく、是の如く不可說なり。若し聞かば迷悶せんとは、云何んが迷悶せん。聞に隨ひて取著するが故なり。聞とは即ち聞にして是れ不聞に非ず。已に難說を辯ぜり。復た聞き難きを顯はす。偈に言はく、

　心を持すること金剛の如く、深く佛の智慧を信じ、心地と無我の智と
　にて［能く聞く］、能聞の智は微細なり。

金剛の如しとは堅きこと金剛の如きなり。堅に二種あり。一に決定信の堅、二に證得の堅、此の二句の示現する堅は是れ總、餘は是れ別なり。云何んが深く信ずといふや。佛の智慧は唯佛のみの知る所にして、我れの境界に非ず。佛の菩提は無邊にして、佛の衆生を化せんがために說きたまふ所の法門の種種なるを信ずるが故なり。何者か是れ（一五五）心地なる。云何んが（一五六）無我の智なるや。心地とは心に隨ひて受くる所の（一五七）三界の中の報なり。又（一五八）心の所行に隨ふ一切の境界も亦心地と名く。無我の智とは二種あり。我空と法空となり。如實に知るが故に能く聞く、能聞の智微細なりとは、知り難きなり。是の如きの微細なるは前に說く所の如し。復た譬喩を以て微細の義を顯はす、偈に言はく、

【一五五】心地とは所證の法を示す。
【一五六】無我とは能證の智を示す。
【一五七】三界報生の有情の主體をいふ。是れに依りて我空を證す。
【一五八】心識所緣の萬象をいふ。是に依りて法空を證す。

虛空に彩畫するが如く、虛空の風相の如く、智は是の如く分別す、見難きは佛の無漏なり。

此の偈の示現するは虛空の畫色の如く壁の如しとなり。是の中〔壁上の畫は壁に住するが故に見ることを得べきも、(一五九)空中の畫は〕不住の故に見るべからず。空中の風の如く、樹葉の如し。是の中〔樹葉上の風は葉に住するが故に見ることを得べきも、空中の風は〕不住の故に見るべからず。此の(一六〇)動と作とは、空中に是の二事有らざるにあらず。是の如き虛空の(一六一)處と事とは說くべからざる處なり。(一六二)此の畫と風とは說の如し、自性に非ざるを以て見ることを得べからず。是れ不住なるを以ての故に。其の(一六三)客たるを以ての故なり。(一六四)中に於て此の言說、所說の十地有らざるにあらず。是の如く佛智の言說は地の校量して勝れたることを顯示し分別するも見ること難し。畫とは名字句身に喩ふ。何を以ての故に、(一六五)相に依りて說くが故なり。風とは以て音聲に喩ふ。說とは此の二事を以

【一五九】空中の彩畫と空中の風相とは依住する所なきが故に見るべからずとの喩の意を明かにせんが爲に、論には壁上の畫と樹葉上の風との依住する所ありて見る可きを擧げて對辯す。喩の意明了なり。

【一六〇】動と作とは風動と畫作と也。依住なきが故に見る可らずと雖無にあらずとの意。

【一六一】處と事とは風畫の所依の虛空を處といひ、風畫の相を事といふ。

【一六二】此の風畫は不可見の故に有といふべからず、動作あるが故に無ともいふべからず、此の故に不可說に喩ふ。不可見とは聽に約し、不可說は說に約す

【一六三】客とは風畫の處を虛空に望むるに、本有に非ず、是の故に客といふ、客なるが故に不住にして無性、見る可からざるなり。

【一六四】此の句は前說の非無の意に合す。以下重ねて法と喩とを合す。

【一六五】聲は名字等の相に依りて說くことを得との意。

て說く。聽とは此の二事を以て聞くなり。若し是の如く說くべく、是の如く聞くべくんば、是の如く見難きを、何が故に說かざるや。

我れ佛の智慧を念ずるに、第一にして世に知り難く、信じ難き希有の法なり、是の故に我れ默然たり。

知り難しとは證し難きが故なり。信じ難しとは決定の心を生じ難きが故なり。此の偈は證有り信有れば說くべく聞くべきも、世間は證信を得ること難きが故に我れ說かざることを示現す。

經に曰く、爾の時に解脫月菩薩此れを說くを聞き已りて、金剛藏菩薩に請うて言はく、佛子よ、是の大菩薩に善淨の衆集る。善く深心を淸淨にし、善く諸念を淸淨にし、善く諸行を集め、多く諸佛に親近し、善く助道の法を集め、無量の功德を具足し、癡と疑悔とを離れて、染汙あることなく、善く深心の信に住し、佛法の中に於て他の敎に隨はず。善い哉、佛子よ、此の義を敷演せよ、是の諸の菩薩は是の如きの深法を皆能く證知せん。

論に曰く、聖者解脫月は何が故に復此衆を嘆ずるや。上には世間の證信の者は得難しと言へり。此の衆は堪能有ることを示現せんが故なり。善淨の深心とは是れ總なり。此の善淨の深心に二種あり。一には(二六六)阿含淨、二には(二六七)證淨なり。是の阿含淨に(二六八)五種あり。一には(二六九)欲

【二六六】阿含淨とは敎に順じて修行するをいふ。

【二六七】證淨とは理を證して行を起すをいふ。

所念の阿含に隨ひて、方便(一七〇)念覺淨を得、經に「善く諸念を淸淨にす」といへるが如き故に。二には(一七一)求淨、隨順して身口の敬行を得るなり、經に「善く諸行を集む」といへるが如き故に。三には受持淨、無量世に於て多く聞いて憶持して謬らざるが故なり、經に「多く諸佛に親近す」といへるが如き故に。四には(一七二)生得淨、(一七三)上上の生勝を得ることを願ふ、(一七四)念勝なり、經に「善く助道の法を集む」といへるが如き故に。五には行淨、(一七五)善證の法を求め、少欲、(一七六)頭陀等を習ひ、多くの功德を成就するなり、經に「無量の功德を具足す」といへるが如き故に。證淨とは四種あり。一には得淨、現智善く決定するが故に、經に「癡と疑悔とを離る」といへるが如き故に。二には不行淨、(一七七)修道の中に一切の煩惱行せざるが故なり、經に「染汙有ること無し」といへるが如き故に。三には無厭足淨、小乘を樂はずして上勝の希望心を得るなり、經に「善く深心の信に住す」といへるが如き故に。深心とは希ひ欲するの故に。信とは決定の故に。復た

【一六八】五種の中、前三は聞慧、第四は思慧、第五は修慧なり。

【一六九】欲淨の欲は求法の心なり。

【一七〇】念は欲念、覺は思覺にして法を求むの心なり。

【一七一】求淨とは三業敬順して求法の行を起すこと。

【一七二】生得淨とは正しくは得生淨といふべし、出世の勝報を生といふ。

【一七三】初地已上は生報漸く勝る故に上上といふ。

【一七四】念勝とは、勝生を求めん爲の思慧の助道を起すことをいふ。

【一七五】地前に在つて地上の眞證を求めんが爲に少欲頭陀等を修行す。

【一七六】頭陀(Dhūta)。抖擻、修治等と譯し、煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。閑處に住し乞食を節し、弊衣を著くる等十二種の頭陀行あり。

【一七七】二地以上七地までを修道といふ。

(一七八)彼の功德を念持するが故なり。四には(一七九)不隨他教淨、(一八〇)趣盡道の中に(一八一)自ら正しく行ずるが故なり、經に「佛法の中に於て他の教に隨はず」といへるが如き故に。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、此の菩薩衆は善く深心を淸淨にし、善く諸念を淸淨にし、善く諸行を集め、多く諸佛に親近し、善く助道の法を集め、無量の功德を具足し、癡と疑悔とを離れて染汙あることなく、善く深心の信に住して、佛法の中に於て他の教に隨はずと雖も、其の餘の小法を樂ふ者は是の甚深難思議の事を聞いて多く疑惑を生ぜん。是の人長夜に諸の無利衰惱を受けん。我れ此等を愍む、是の故に默然たり。

論に曰く、是の聖者金剛藏彼の解脫月菩薩の嘆せし所の衆の淸淨の功德を頌し已つて、(一八二)所說の法の中に於て法器を見ず。聞くも疑惑を增さん。是の故に說かず。(一八三)一法の中に於て二種の過有り。疑とは正行相違して猶豫する義の故に。惑とは心迷ふの義の故に、(一八四)能く善法を壞り善法を(一八五)遠離するが故に。是の如く不受行の因と受行退の因とを顯

【一七八】彼功德云云とは無上佛果の德相を心に現ずること、前の善く住すといふを釋す。
【一七九】不隨他教とは十地の智起るは菩薩自心に在りて師教に由らざるの意なり。
【一八〇】趣盡道とは無上道の究竟地にして菩薩の極位なり。
【一八一】他の教を假らずして所證の自心開顯するを自ら正しく行ずといふ。
【一八二】小乘を樂欲する衆生は十地の法を受くる法器無きが故に、之を聞くとも却つて疑惑を增すべしとの意。
【一八三】一法とは所說の一地の法なり。
【一八四】疑有るが故に先に修する所の善法を壞るとの意。
【一八五】惑あるが故に一向に行ぜざるを遠離すといふ。

示す。

經に曰く、爾の時に解脫月菩薩に請うて言はく、善い哉、佛子よ、重ねて此の事を請はん。願はくは佛の神力を承けて、善く此の不可思議の法、佛の護念したまふ所の事を分別して人をして信解し易からしめよ。所以は何ん。善く十地の義を說かば、十方の諸佛は法として應に護念すべし。一切の菩薩は是の智地を護りて、勤行方便せん。何を以ての故に、此は是れ菩薩最初の所行にして、一切の諸佛の法を成就するが故なり。佛子よ、譬へば一切の書と字と數と說とは皆初章に攝せられ初章を本と爲す。書字數說の初章に入らざる者あること無きが如し。是の如く佛子よ、十地は是れ一切佛法の根本なり。菩薩は具足して是の十地を行じ能く一切の智慧を得るなり。是の故に佛子よ、願はくは此の義を說け。諸佛護念し加するに神力を以てしたまひ、人をして信受して破壞すべからざらしめん。

論に曰く、聖者解脫月は何が故に復た重ねて請ふや。彼の疑惑は此に避くべからざることを示すなり。若し說かざれば多く過咎あらん。一切の佛法を成就することを得ざるが故に。是の義を以ての故に重ねて金剛藏菩薩に請ふなり。若し諸佛に力ありて能く信を生ぜしめば、何が故に衆生は彼の法の中に於て猶ほ謗意を起すや。二種の定あり。一には(一八六)感報定、二には(一八七)作業定なり。此の二種の定は諸佛の威力も轉ずること能はざる所なり。最初の所行とは阿含行に依るが故に

【一八六】感報定とは業感の果報として決定せるの意。

【一八七】作業定とは宿罪の熏習力にて今惡を爲すこと決定せる

一切の佛法を成就すとは謂く是れ證智なり。(一八八)書とは是れ字相、斷字の師子の形相等の如し。字とは惡阿等の音なり。數とは名句なり。此の二は是れ數の義、說とは是れ語なり、一切の書字數說等は皆(一八九)初章を本と爲す。經に曰く、爾の時に諸の菩薩衆は一時に同聲に偈頌を以て金剛藏菩薩に請うて言はく、

上妙なる無垢の智は、無量の義辯に堪ふ、美妙の言を演說して、眞實の義と相應す。
念堅き清淨の慧は、十力と淨心との爲めに、無礙に義を分別し、此の十地の法を說く。
定戒深くして正意あり、我慢と妄見とを離る、此の衆に疑心無し、唯だ願はくは善說を聞かん。
渴けるものの冷水を思ふが如く、飢ゑたるものの美食を思ふが如く、病めるものの良藥を思ふが如く、衆蜂の蜜に依るが如し。
我等も亦是の如し。願はくは甘露の法を聞かん。
善い哉清淨の智、勝地の無垢なるを說け、十力の無礙を具へて、善逝の道を盡く說け。

論に曰く、初めの偈は證力辯才の成就を嘆ず。第二の偈の上の句は阿含力辯才の成就を嘆ず。證

の意。
佛の力と雖も此二の罪障を轉じて信を生ぜしむるを能はずとの意なり。

【一八八】以下梵語(悉曇)の文字を喩に擧げて解す。書とは書記したる文字にして、梵語の斷字は其の形獅子に似たりと例を擧ぐ。字とはア、アー、イ、イー等の梵字の音なり、此字母二以上集りて一語をなす故に數を名句といひ、之を釋して名と句との二は數の義なりといふ。

【一八九】初章とは梵字母の中の十二の母音也。凡ての文字語句は此の母音を根本となす。菩薩の十地は猶此の母音の如く一切諸佛の法は之を根本として生ずと經意を釋せる也。

力と阿含力とを以ての故に能く說く所有り。是の故に讃嘆するなり。上は是れ總なり。又復た上は證力を顯す。辯才勝るが故に。辯才を嘆ずるに三種有り。一には眞實智、二には體性、三には果なり。眞實智とは是れ無漏の智、聲聞緣覺の智等に勝る、偈に「妙無垢の智」と言ふが故に。體性とは無量の義辯才を成就す、偈に「無量の義辯に堪ふ」と言ふが故に。果とは〔一九〇〕字義の成就するなり。復た是れ〔一九一〕滑利〔一九二〕勝上にして字義成就す、偈に「美妙の言を演說し眞實義と相應す」と言へるが故に。第二偈の上の句は阿含力を嘆ず。偈に言はく、

　念堅き清淨の慧ある者は、十力と淨心との爲めに、無礙に義を分別し、此の十地の法を說く。

念堅しとは受持し顯說するが故なり。是の菩薩は阿含の中に於て淨慧ありて疑無きが故なり。是の如く證力と阿含力とを嘆じ已り、次に聽者をして證に入り阿含に入らしむ。是の故に說を請ふ。云何んが證に入るや、已に地に入れる者には佛力を得せしめんが故に、未だ地に入らざる者には地に入るとを得せしめんが故なり。偈に十力の爲と言ふが故に、淨心の爲といふが故に。云何んか阿含に入りて無礙に義を分別すとならば、十地の法を受持せしめんが故なり。是の如く說者の證力と阿含力とを成就することを嘆じ已り、次に復た聽衆の阿含及び證力を受くるに堪へたることを嘆ず。故に偈に言はく、

【一九〇】前の智と辯とに依りて說を起すを字義の成就といふ。
【一九一】滑利とは言辭の流調なるをいふ。
【一九二】勝上とは言辭の巧妙なるをいふ。

定戒深くして正意あり、我慢と妄見とを離る、是の衆に疑心無し。唯だ願はくは善說を聞かん。

此の偈の中に、唯だ願ふとは是れ總なり。唯だ願ふに二種あり。一に阿含を求め、二に正證を求む。二種の妄想有らば阿含を聞くに堪へず。一には我、二には慢なり。我と慢とを以ての故に、(一九三)法と法師とに於て恭敬を生ぜず。復た二種の(一九四)妄想有らば證を得るに堪へず。一には見、二には疑なり。見とは顚倒の見の故に、疑とは不思議の處に於て信を生ぜざるが故に、(一九五)妄とは謂く妄想なり。見の中、同じく(一九六)使なるが故に。二種の對治有らば阿含を聞くに堪ふ、一には定、二には戒なり。定とは心調伏するが故に、戒とは善く威儀に住するが故に。次に二種の對治有らば、能く證を得るに堪ふ、一には正見、二には正意なり、(一九七)正見とは善く義を思ふが故に、(一九八)正意とは歡喜を得るが故なり、深とは細意善く思惟するが故なり。復た諸の喩を以て大衆の法を求むること轉た深きを顯示す。偈に言はく、

【一九三】內に我を執するが故に法を敬せず、高慢心あるが故に外に儀禮を失して法師を敬せず。

【一九四】妄想とは理に迷ひ相を執するをいふ。此には妄體を指斥す、見と疑とに通ず。

【一九五】妄想は根本にして見と想とは末なれば、別なるべきに今は妄想の二種となして、見疑を擧げたるは何ぞやといふに、心想見の三倒の中にて、同じく使なるが故に、見に攝すと釋せるなり。

【一九六】使は心を驅使するの意にて、煩惱の異名なり。

【一九七】正見は偈文に無きも、邪見を對治する智見として、之を擧ぐ。

【一九八】正意とは生死涅槃の義を正思して顚倒の見を離るるなり、是に由りて正信を得て、疑惱なきが故に歡喜を得といふ。

渇けるものの冷水を思ふが如く、飢ゑたるものの美食を思ふが如く、病めるものの良藥を思ふが如く、衆蜂の蜜に依るが如く、我等も亦是の如く、願はくは甘露の法を聞かん。

此の四喩は四種の義門に喩へ、正しく彼の所說の義を受くるとを示現す。何等をか四となす。一には受持、二には助力、三には遠離、四には安樂なり。此の義云何ん。水は嚼まずして得るに隨ひて飲むが如く、是の如く聞慧は初め聞きて卽ち受け、聞くに隨ひて受持す。食は咀嚼して身力を助成するが如く、是の如く思慧は所聞の法を嚼みて智力を助成す。良藥を服するに藥行けば病を除くが如く、是の如く聞思慧を具へ、正義に隨順し、法の如く修行せば、一切の煩惱習の患を遠離す。蜜は衆蜂の依る所、樂行の住處なるが如く、是の如く聞思修の慧は果聖の所依の處、現法愛味の愛樂の行なるが故なり。是の如く說者と聽者とを讚歎して說を請ひ已り、次に所說の法の利益を嘆じ、咸く皆共に請ふ。偈に言はく、

善い哉清淨の智、勝地の無垢なるを說け、十力の無礙を具へて、善逝の道を盡く說け。

善い哉とは所說の法の中に善く具足するが故なり。善哉に三種有り。一には所依、二には體性、三には果なり。所依とは謂く淨慧なり。(一九九)體性とは謂く諸地の未だ嘗て說法せざるを說くなり。勝地とは地校量して勝れたるなり。無垢とは說くこと義に違はざるなり。義に違ふの說とは三種の垢有り。一には倒說、二には如來を謗り、三には

【一九九】體性とは所說の十地の法體にして未だ他の契經中に宣

聞者を誑かすなり。(二〇〇)果とは謂く十力無障礙を具ふる佛の菩提なるが故に。是の如く請ひ已りて猶ほ故らに説かず。何が故に説かざるや、請ふこと滿せざるが故なり。

説せざる所を今此に説く。

【二〇〇】今の所説に依りて成する所の佛果なり。

卷の第二

初歡喜地第一の二

論に曰く、此の菩薩は前に同生衆の上首請ひ、次に大衆請ひ、復た諸佛法王の加請を待つ。何を以ての故に、法を敬重せんことを增さしめんが爲めの故なり。

經に曰く、爾の時に、釋迦牟尼佛は眉間の白毫より菩薩の力明光焔を放ち阿僧祇阿僧祇の光を以て眷屬と爲す。斯の光を放ち已りて、普く十方諸佛の世界を照して周徧せざるなし。照し已りて還つて本處に住し、三惡道の苦は皆休息することを得、一切の魔宮は隱蔽して現せず、悉く十方諸佛の衆會を照し、如來の境界の不思議力を顯現せり。是の光は徧く十方の世界を照して一切如來の所を加し、說法者と及び諸の菩薩衆とを加し、上の虛空の中に於て大光明雲網臺を成じて住せり。彼の十方の諸佛も亦復た是の如く、眉間の白毫より倶に菩薩の力明光焔を放ち、阿僧祇阿僧祇の光網を以て眷屬と爲せり。斯の光を放ち已りて、普く十方諸佛の世界を照して周徧せざるなし。照し已りて還つて本處に住し、三惡道の苦は皆休息することを得、一切の魔宮は隱蔽して現せず、悉く十方諸佛の衆會を照し、如來の境界の不思議力を顯現せり。是の光遍く十方世界を照して、一切の如來の所を加し、

說法者と及び諸の菩薩衆とを加して、如來の境界の不思議力を顯現し、竝びに釋迦牟尼佛の大會の衆、及び金剛藏菩薩の身を照し、上の虛空の中に於て亦復た大光明雲網臺を成じて住せり。爾の時に釋迦牟尼佛は眉間より白毫の光明を放ち、彼の十方世界の諸佛大會の諸菩薩の身と、及び師子座とを照したまへり。此の諸の大衆は皆悉く現見し、彼の十方世界の諸佛は眉間より白毫の光明を放ちて、此三千大千の娑婆世界の釋迦牟尼佛の大會と竝びに金剛藏菩薩の身と、及び師子座とを照したまへり。彼の諸の大衆は皆悉く現見せり。時に大光明雲網臺中の諸佛は神力の故に、頌を說いて曰く、

論に曰く、何が故に如來は神通力を現じ、光を放ちて同じく請ひたまふや。是の如來は前に已に意をもつて加せるも、未だ身口をもつて加せず、餘佛に異れり。是の故に今身口を具して加せんと欲するなり。何が故に常の口、常の身を以て加せざるや。法を重ぜんが爲めの故に、自身を輕んぜざる故なり。此の光に八種の業と二種の身有り。云何んが八種の業なる。一には覺業、是の光諸菩薩の身を照し已りて自ら如來力の加を覺る。經に「菩薩力明光焰を放つ」といへるが如き故に。二には因業、阿僧祇の光は皆無量の光明の眷屬有り、經に「阿僧祇阿僧祇の光を以て眷屬となす」といへるが如き故に。三には卷舒業、舒れば則ち徧く阿僧祇の世界に至り、卷けば則ち還つて常光に入る、經に「斯の光を放ち已りて普く十方諸佛の世界を照し周徧せざるなく、照し已りて還つて本處に住す」と

いへるが如き故に。四には止業、一切の惡道の種種の苦惱を除滅す、經に「三惡道の苦皆休息することを得」といへるが如き故に。五には降伏業、一切の魔宮をして威光現ぜず、驚怖恐懼して化すべき衆生を壞亂すること能はざらしむ、經に「一切の魔宮は隱蔽して現ぜず」といへるが如き故に。六には敬業、不思議なる佛の神力を現ずるが故に、經に「悉く十方諸佛の衆會を照し、如來の境界の不思議力を顯現す」といへるが如き故に。七には示現業、十方世界の諸佛の所を加し、菩薩の大會を加して、此の衆をして見せしむ、經に「是の光遍く十方の世界を照して一切如來の所を加し、說法者と、及ひ諸の菩薩衆とを加す」といへるが如き故に。八には請業、聲を發し偈を說く、經に「時に大光明の雲網臺の中の諸佛は神力をもつて頌を說いて曰く」といへるが如き故に。云何んが二身なるや、一には流星の如き身、他方の世界に往くが故に。二には日の如き身、虛空に處するがゆゑなり。經に「上の虛空の中に於て大光明の雲網臺を成じて住す」といへるが如き故に。一切の處に於て、一時に徧く照すが故に。是の如く彼此の諸の衆生は迭互ひに相ひ見ること、猶ほ一會の如く、聽說も亦爾り。是を身加と名く。何者か口加なる。偈に曰く、

諸佛は無等等にして、功德は虛空の如く、十力無畏等あり、無量の諸衆の首なる、
釋迦姓は法より生ず、「この」天人上は加を作す。
諸佛の神力を承けて、爲めに法王の藏を開け、諸地の上妙の行をとき、智地の義を分別せよ。

是の諸の如來は加して、諸の菩薩を護りたまふ、此の人能く是の如きの、微妙の法を聞持せん。
諸地は淨くして垢無く、漸次に而も滿足して、佛の十種の力を證し、無上の菩提を成ず。
大海及び劫盡の火の中に、在りと雖も、決定して信じて疑ふこと無くば、必ず此の經を聞くことを得ん。
諸地の勝智の道に、入地し住し展轉し、漸次にして無量の、行境界を演說す。

論に曰く、是の初の二偈半は能加者と及び加の所爲とを顯はす。此の二加は何の義を示現するが故に加するや。若し請ふこと（一）尊者にあらず法殊勝にあらざれば、聖者は則ち說かず。云何んが、初偈に能加者を顯はすや。偈に「天人上は加を作す」と言へるが故に。何者か（二）「天人上なる、諸佛如來を謂ふ。此に何の義ありや。法王の義あるが故に。云何んが彼は是れ法王なることを知るや。四種の勝を成就するが故なり。一には自在勝、二には力勝、三には眷屬勝、四には種姓勝。何者か諸佛の自在勝なる。煩惱障と、智障とに於て解脫自在を得。彼は此の處に於て心智無礙にして意に隨つて受くる所の無上の樂なるが故に。此れ云何んが知るや。偈に「諸佛は無等等」と言へるが故に。「一切智」と謂へるが故に。復虛空の如く世間の法は染むること能

【一】尊者云云。諸佛を斥す、佛加して請ふにあらざれば法の殊勝なること顯はれず、人をして新に敬重の信心を起さしむるを得ず、此の故に聖者金剛藏菩薩は默して說かず。今に是に反するが故に金剛藏は方に宣說することを肯ふべし。
【二】天人上とは人間界、天上界に於て最上殊勝の身といふ意。

はず、無明煩惱の習氣滅するが故なり。無等とは諸佛は餘の衆生に比するに等にあらざるが故に、等とは此彼の法身等しきが故なり。何が故に但だ無等と說かざるや。㊂等正覺を示現するが故なり。何者か諸佛の力勝なる、十力を具足するが故に、能く一切の邪智を伏し、魔怨を壞るが故なり。此れ云何んが知るや、偈に「十方無畏等あり」と言ふが故に。何者か諸佛の眷屬勝なる。具さに菩薩聲聞の諸衆を攝するが故なり。此れ云何んが知るや。偈に「無量の諸衆の首」と言へるが故に。彼の菩薩は是れ初衆なるが故に。無量とは阿僧祇の故に。諸衆の首とは佛は世間に於て最も勝上なるが故なり。何者か佛の種姓勝なる。謂はく、家姓勝るが故なり。此れ云何んが知るや。偈に「釋迦姓は法より生ず」と言へるが故に。何が故に唯此の佛の種姓を嘆ずるや。現に見るを以ての故なり。復法を以て家と爲すは但だ生家のみにあらず、法家とは如法の中に住するが故なり。加を作すとは是れ總相なり。加に二種あり。一には㊃具身の加、法身に依るが故に、二には㊄具果の加、佛果を證するが故に。㊅天人上とは亦は總、亦は別なり。餘は唯別なり。云何んが第二偈は加の所爲を顯はすや。此の菩薩に彼の諸佛の法王は法藏の義を開現せしめんが爲めの故に

【三】佛は諸佛の正覺と同等なることを示す。蓋し諸賢聖は下地に望むるに皆無等なるも未だ必ずしも上に向つて佛の正覺と齊等ならざるが故なり。

【四】釋尊の相好圓滿の身は法の所依なるが故に身を以て加するを具身の加といふ。

【五】具果とは佛果の德を具して加すること。未成佛の時、已に相好身具はるが故にあらず、佛德四義は彼の身上に修顯せるを以て之を果となす。

【六】天人上とは次の四義に對すれば總なるも、加を作すといふに對すれば別なり。

加す。偈に言はく、

　諸佛の神力を承けて、爲めに法王の藏を開け、諸地の上妙の行をとき、智地の義を分別せよ。

此の法藏を嘆ずるに二種あり。一には義藏成就、二には字藏成就なり。云何んが義藏なるや。偈に「諸地の上妙の行」と言へり。行とは諸の菩薩行にして、所謂る助道の法の故に、妙とは眞實智の故に、上とは神力勝れたるが故に。是の如く深妙にして勝上なることを顯示するが故なり。云何んが字藏なる。偈に「智地の義を分別せよ」と言へり。分別とは十地の差別を說くが故なり。此の偈の中に何が故に佛の神力を承けて說くことを顯はすや。或は衆生あり、如來の所に於て輕慢の想を生じ已りて、自ら他に請うて說くと能はず、(七)此れを遮せんが爲の故なり。是の如く說法を請ひ已りて、次に法を說きて他を利するに三時の益あることを顯はす。中に於て三偈有り。三時の益とは一には聞時の益、二には修行時の益、三には轉生時の益なり。何をか聞時の益といふ。偈に言はく、

　是の諸の如來は加して、諸の菩薩を護りたまふ、此の人能く是の如きの、微妙の法を聞持す。

菩薩の聞持とは佛力に加せらるるが故なり。是を聞時の益と名く。何をか修行時の益といふ。偈に言はく、

【七】佛にあらずんば、此の勝藏を開示すること能はざるを示さんが爲めに、神力を承くといふ。

諸地は淨くして垢無く、漸次に而も滿足して、佛の十種の力を證し、無上の菩提を成ず。

漸次に十地を滿じ、自身に十力を得、無上の菩提を成ずるが故に、是れを修行時の益と名く。何をか轉生時の益といふ。偈に言はく、

大海及び劫盡の火の中に、在りと雖も、決定して信じて疑ふこと無くんば、必ず此の經を聞くことを得ん。

惡道、善道、難處に生ずるも必ず此の法を聞くことを得。龍の世界の長壽なるも亦此の經を聞くとを得、偈に「大海に在りと雖も」と言へるが故に。色界の光音天等に在りと雖も亦此の經を聞くとを得、偈に「及び劫盡の火の中」にと言へるが故に。此の法を聞く者は皆利益を得んが爲めなり。得ざる者ありや不や。何者か能く得る。決定して疑はず、此の法を信ずる者、是の人は能く得るなり、偈に「決定して信じて疑ふこと無ければ必ず此の經を聞くことを得ん」と言へるが故に。是の如く説を請ひ利益を顯示し已る。上に「智地の義を分別せよ」と言へるは此の所説の法に三種の漸次あり。第六偈は此の事を分別することを教ふ。偈に言はく、

諸地の勝智の道に、入地し住し展轉し、漸次にして無量の、行境界を演説す。

何をか〔八〕三漸次といふ。一には觀漸次、二には證漸次、三には修行漸

【八】觀とは觀解なり、解に依りて法を得るを證といひ、法に依りて德を成するを修行と爲す。之を三位に配すれば解行位を觀となし、初地を證と

なり。次に第一と第二と第四句とは皆漸次を說く。勝智道とは謂はく十地の勝智道なり。此の十地を說くに若しくは觀、若しくは依止あり。能く諸地の智を生ずるが故に。入とは入地の故に。住とは未だ餘地に轉向せざるが故に。展轉とは智地に所住の處を轉ずるが故なり。行とは謂はく入住展轉を成就するが故に。境界とは此の行は種種の異行の境界なるが故に。漸とは次第の故に。說とは授與の故なり。是の如く說を敎ふるは何の義の故なるや。一切は如來に能く所說有るに因りて後の正信を生ずる義を顯はさんが故なり。

經に曰く、爾の時に、金剛藏菩薩摩訶薩は十方を觀察し、大衆をして重ねて踊悅を增し正信を生せしめんと欲するが故に。偈を以て頌して曰く、

微にして知り難き聖道は、分別にあらず念を離る。得難くして垢濁なき、智者の所行の處は、
自性常に寂滅して、不滅にして亦不生なり。自體本來空、有にして不二不盡、
諸趣を遠離し、等同に涅槃の相なり。初にあらず中後にあらず、言辭の所說にあらず、
三世を出過す、其の相は虛空の如し。寂滅は佛の所行にして、言說も及ぶこと能はず、
地行も亦是の如く、說き難く復た聞き難し。念及び心の道を離れ、智は佛の境界より起り、
陰界入の「如く」說くに非ず、心意の及ばざる所なり。空中の鳥跡の、說き難く見るべからざるが

なし、二地以上を修行となす。又地に隨つて分てば一一の地にて初入を觀と名け、住地を證と云ひ、地滿を修と名く。然れども實に據れば、此の三各漸次ありて皆始終に通ず、故に今三漸次を說く。

如く、

十地の義も是の如く、說聞することを得べからず。我れ但だ一分を說くのみ、慈悲及び願力にて、漸次に心の境にあらず、智滿は淨心の如し、是の境界は見難く、說き難く自心に知るのみ。我れ佛力を承けて說く、咸共に恭敬して聽け、是の如きの智入の行は、億劫に說くとも盡きず。今是の如く略して說く、如實に滿足して住す、一心に恭敬して待て、佛力を承けて善く說き、上法を說くに妙音をもつてし、喩は相應し善字〔による〕、是の言說は甚だ難し、無量の佛の神力にて、光焰我が身に入る、是の力にて我れ能く說かん。

論に曰く、何が故に十方を觀察するや。我慢なく、偏心なきことを示さんが故なり。大衆をして重ねて踊悅を增し深く正信を生ぜしめんと欲す。是の故に偈を說きて正地を示說し、聞者を增益して義を受くるに堪へしめんが故なり。踊悅とは心淸くして濁らざるが故なり。踊悅に二種あり。一には義大の踊悅、義を得んが爲めの故に、二には說大の踊悅、此の說大に因りて能く彼の義を得んが故なり。是の中、前の五偈は義大の踊悅を顯はす。云何んが義大なる。彼の義の深きが故なり。何者か深義なる。偈に言はく、

微にして知り難き聖道は、分別に非ず念を離る。

此の偈は何の義に依りて說くや。智地に依るが故なり、云何んが智地に依るとを知るや。上來說

く所は皆智地に依る。後に復た說く所も亦智地に依る。第四の偈に「智は佛の境界より起す」と言へるが故なり。微とは云何んが微なる。偈に「知り難き聖道」と言へるが故に。云何んが知り難きや、謂はく說く時知り難きなり。復た云何んが知り難きや、大聖の道は知り難し。大聖とは所謂る諸佛なり。是の故に微と言ふ。道とは是れ因に此の道を修行して能く聖處に、到るが故に知り難き聖道と云ふ。此の微に二種あり。一には說時の甚微、二には證時の甚微なり。是の如く次第して何が故に復た知り難きや。偈に「分別に非ず念を離る」と言へるが故なり。分別に非らずといふは分別の境界を離るるが故に、念を離るといふは自體念無きが故なり。是の如きの聖道を名けて甚微と爲す。何が故に甚だ得難きや。得難しといふは證し難きが故なり。是を甚微と名く。何が故に復た甚だ得難きや。偈に言はく、

得難くして垢濁なき、智者の所行の處は、自性常に寂滅して、不滅にして亦不生なり。

垢濁無しといふは智の中に無明無きが故なり。無明有るは雜智にして是れを名けて濁と爲す。智者の所行の處といふは自證智の故なり。自證智とは彼「智者」に依りて生ずるが故に、中に於て智者は實諦の義を見る故に、復た善の解法を增上するが故に、善の寂滅を增上するが故なり。復た世間智あり、聞くに隨ひて明了に知るが故なり。自性常に寂滅といふは自性煩惱を離るるが故に、先に染ありて後時に離るるにあらざるが故なり。不滅といふは一往の滅に非ず、衆生を利益することを捨て

ざるが爲めの故なり。不生といふは出世間の故なり。是の如く此の智は涅槃に住せず、世間の中なるが故に。是の如く觀行甚だ微、依止甚だ微、清淨甚だ微、功德甚だ微なるが故に、甚だ得難しと言ふなり。中に於て第一の甚微は世間の三昧に同じからざるが故に、第二と第三とは〔九〕外道の自ら尊しと言ふに同じからざるが故に、第四は聲聞辟支佛に同じからざるが故なり。此の偈の中に於て、微とは是れ總、二種の微は是れ別なり。復た得難きことを顯はすに、得る時甚だ微なりとは、是れ總、餘の四種の甚微は是れ別なり。此の甚微の智は復た何の相かある。偈に言はく、

自體本來空、有にして不二不盡、諸趣を遠離し、等同に涅槃の相なり。
初に非ず中後に非ず、言辭の所說に非ず、三世を出過す、其の相は虛空の如し。

是の〔一〇〕智相に二種あり。所謂同相と不同相となり。是の中同相とは云何んが〔一一〕相なる。彼の智相の故に、偈に「自體本來空」と言ふ、智自ら空なるが故なり。云何んが〔一二〕同相なる。一切の諸法は自體空なりと說くが如し。〔一三〕自體空とは是の如く取るべきか、兎角の如くなるや不やと。「或は」是の如く取るべきか、此の

【九】外道は多く無想滅心を理想とし尊ぶが故に、之に異ることを示す。理に依らずして私情に出づるが故に、自ら言ふといふ。

【一〇】所證の理能證の智と冥合して一體不二なるは佛果也。先に能證の智の甚微を明かしたるを以て、此には其の同、不同の二相を明かす。

【一一】此に相といふは、餘物の相に非ずして智體を指す、智體自ら空なるを智相といふ。故に相といふも、標相(煙を見て火を知るが如き)又は形相(長短方圓等)に非ずして火熱の如き體相を云ふ、火卽熱なり、智卽空なり。

【一二】諸法は眞如を實體とし自體空なり、下衆生より上諸佛

空智と異りて更に異空ありや不やと、「或は又是の如く取るべきか。彼此の自體ありて彼此に轉滅するや不やと。云何んが取らん。此の自體空とは有にして不二、不盡なり。是の如く取れば、此の句は三種の空撥を離るるとを顯はす。一には（一四）謗撥を離る、二には（一五）異撥を離る、三には（一六）盡滅撥を離る。

（一七）二種の頌あり。一には有、不二、不盡、二には定、不二、不盡。此の頌は異れりと雖も同じく實有を明す。若し實有にあらざれば定と言ふことを得ず。此れ云何んが定まる。此れ定めて能く諸の煩惱を滅するが故なり。是を同相と名く。何者か（一八）不同の相なる、謂はく淨相解脫なり。此れに二種あり、一には何の處にか解脫を得ん。二には云何んが解脫せ

至る迄一切法は空を自性となすが故に同相と名く。

【一三】次に自體空とは如何に解するを正しとなすかに就て三義を出す、一には龜毛兎角の如く全く空無となすべきか、二には空なる智體の他に更に空とすべき一物ありや、三には彼の智と此の空とは各自體ありて彼の智を滅して此の空と爲すや。實性論に空亂意（空を誤解する者）に三種の過ありとして、一に實に法の斷滅すべき有り、然る後に涅槃を得となし、二に空を以て有物となし我應に空を得べしと、三に色等の法を離れて別に更に空有り、我應に修行して彼の空を得べし。

【一四】謗撥とは第一の如く空とは兎角の如く、斷空には非ずして有なり、之を空無と云ふは無を謗る者（誤解すること）なれば之を謗撥と名く。

【一五】異撥とは第二の如く智の外に異空あるに非ずして空卽智、智卽空也、故に智と空とは不二也、然るを智に異る空ありと見るを異撥と名く。

【一六】盡滅撥とは智に卽する空にして、空は智を滅して得るに非ず、而も滅盡の見をなすをいふ。偈文に有、不二、不盡といふは、此の三種の邪空を離れたることを示す。

【一七】義記に依るに、此の論を造る時世に傳ふる頌文に二種あり、一は有といひ、他は定といふ。蓋し異本の頌を擧げしものか。

【一八】前の同相は自性清淨の體なり、此に明かす不同相は方便淨にして、智德の差別を明かす。

ん。何の處にか解脫を得んとは、偈に「諸趣を遠離す」と言へり。此れ（一九）諸道の解脫を顯す、（二〇）煩惱業生を遠離するが故なり。云何んが解脫せんとは偈に「等同に涅槃の相なり」と言へり。（二一）世間と涅槃とを平等に攝取するが故に。聲聞の一向に世間に背くが如きにあらざるが故なり。此の智の漏を盡すは、（二二）初智斷と爲んや中と爲んや、はた後と爲んや。（二三）初智の斷に非ず、（二四）亦中後にも非ず、偈に「初に非らず、中後に非らず」と言へるが故に。云何んが斷ずるや。（二五）燈焰の（二六）唯だ初中後に非ずして、前中後に取るが如き故なり。是の如き解脫は（二七）他の音聲觀に同ずべきや否や。云何んが觀ずるや。偈に「言辭の所說に非らず」と言へり、語言を離るるが故なり。（二八）世間智

【一九】諸道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、天上、人間の六道（或は六趣）をいふ。

【二〇】煩惱業とは六道輪廻の原因にして、生は苦果也。惑と業と苦との三を離るるが故に六道を解脫（超越）すといふ。

【二一】解脫といふも此の世を厭ひ捨つるに非ず、此の生死（世間）卽ち涅槃（解脫の境）なりと證し、小乘聲聞の厭世とは同じからず。

【二二】智の惑を斷ずるは智先づ起つて惑後に滅すとせんや、或は惑先づ滅して智後に起るとせんや、或は同時と爲さんやとの問なり。

【二三】答の意は智先づ起つて惑後に滅すとせば、惑を斷ぜずして無漏智を成ずることになり、斷惑に因りて無漏智を得るの理に乖く、又智起るも倘ほ惑存するが故に、智は惑を斷ずる能はざるの過等あり、此の故に初に非ずといふ。

【二四】惑先づ滅して智後に生ずと爲さば惑は智なくして自ら滅するの過、聖道を障へざるの過等あり。此故に後にも非ず。初に非ず後に非ずとせば其中間をとり、智と惑とは同時なるかといふに、同時に俱に爲すとせば智と惑とは關係なく、智自ら無漏を成じ、亦惑を斷ずる力もなかるべし。惑も智と俱に存せば、聖道を障へざるべし等の過あり、故に中にも非らずといふ。

【二五】燈の光明の闇を破るを喩に擧げて前の智惑の關係を明かす、初中後の三時に斷を求むるに得べからずして方に斷の義を成す、此れ卽ち不斷の斷なり。

と同じく世間に依るべきや不や。云何んが依る。偈に「三世を出過す」と言へり。(二九)依止を轉じて常身に依止するが故に。無常の意識智の、無常の因緣法に依止するが如きに非ず、(三〇)修多羅の中に決定して說けるが如し。(三一)此の解脫は聲聞緣覺の智の「尚ほ」障有りて解脫すと同じく解脫を得可きや不や。云何んが解脫する。偈に「其の相虛空の如し」と言へり。一切の煩惱障礙無きが故なり。(三二)是の如く智を觀じ、是の如く煩惱を斷じ、是の如く觀を觀じ、是の如く依止に依止し、是の如く解脫して解脫を得ることを、是の如く說き已れり。中に於て自體空は是れ總、(三三)三種の空は是れ別なり。解脫は是れ總、(三四)五種の解脫は是れ別なり。偈に言はく、

寂滅は佛の所行にして、言說も及ぶこと能はず。地行も亦是の如く、說き難く復た聞き難し。

此の偈は云何ん。(三五)彼の智は、(三六)方便壞涅槃—

【二六】三時一一に就て斷の義成ぜざるを唯だ初、中、後に非ずといふ。次の句は前中後と生滅相續して取らば斷の義あるべしとなり。尙ほ此の斷惑の相に就ては一乘敎の深義あり。

【二七】他の音聲觀とは聲聞乘が先覺者の敎(音聲)に依りて解脫に導かるると同視すべきやとの意にして觀行の相を問答す。

【二八】解脫の依止する所を明かす。

【二九】妄念の意識は無常なれば生滅の因緣法に依止するも迷を轉じて得たる眞智は常住の法身に依止すとの意なり。

【三〇】修多羅とは契經と譯す、此には佛身常住と說ける華嚴經、涅槃經等を引證す。

【三一】次に解脫の相を明かす。二乘の解脫は惑障を離れ我空を證するも未だ法執を斷ぜざるが故に尙ほ障礙ある解脫といふ。今は此と同じからざるが故に虛空の如しといふ。

【三二】以下前文所說の不同相の諸義を結す。

【三三】三種の空とは前說同相中の有、不二、不盡の三を指す。

【三四】五種の解脫とは不同相中の五義を指す。

【三五】以下・二種の涅槃(前說——の後智同不同の二相)を標し、

を顯はすを以て、復た（三七）性淨涅槃を示す。偈に寂滅と言へるが故に。寂とは同相の涅槃を成ず、自性寂滅なるが故なり。滅とは不同相の方便壞涅槃を成ず、（三八）智緣滅を示現するが故なり。此の智は是れ誰の證ぞ。偈に「佛の所行」と言へるが故に。〔問ふ〕誰か說き、誰か聽かん。〔答ふ〕說無く聽無し。偈に「言說も及ぶこと能はず」と言へるが故に。言說とは音言を以て導く、謂く名句字身なり。何が故に（三九）但だ無言と說かざるや。言に依りて解を求むることを示現するが故なり。彼の智既に是の如し。地行復た何の相ぞや。偈に「地行も亦是の如く說き難く、復た聞き難し」と言へり。地とは（四〇）境界觀、行とは（四一）智眷屬なり。智眷屬とは謂はく（四二）同行なり。同行とは謂はく（四三）檀等の諸波羅蜜なり。何が故に復た說き難く聞き難きや。偈に言はく、

念及び心の道を離る、この智は佛の境界より起り、陰界入の「如く」說くに非ず、心意の及ばざる所なり。

說き難く聞き難きを明す、彼の智とは前段の初に說ける徵智を指す。

【三六】方便壞涅槃とは方便を以て煩惱障を壞したる解脫にして前說の不同相涅槃なり、或は方便淨涅槃ともいふ。

【三七】性淨涅槃とは前說の體性清淨の同相涅槃を指す。

【三八】智緣滅とは智境を緣じて障を滅するの義。

【三九】言說は及ばずとのみ言ひて何が故に全く言說なしといはざるやとの疑なり。

【四〇】境界觀とは佛境界を照す智にして地の正體なり。

【四一】智眷屬とは地體の智を衆行の主となし、餘行を其の隨伴（眷屬）となす。

【四二】同行とは主體の智と同行といふ意。

【四三】檀は檀那波羅蜜多（Dāna-pāramitā）の省略にして、布施と譯す。菩薩の六度の行の中一を舉げて他の持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を等取す。

此の偈は思慧、及び報生識の智は是れ即ち説くべきも、此の智は彼の境界に非ざることを示現す。同じからざるを以ての故なり。偈に「智は佛の境界より起る」と言へるが故に。陰界入の説く可きが如く、此の智は爾らず。文字を離るるが故に、是の故に説く可からず。偈に「〔四四〕陰界入の「如く」説くに非ず」と言へるが故に。耳識の所知に非らず、意識の思量に非ず、是の故に聞く可から ず、偈に「心意の及ばざる所」と云へるが故に。智とは是れ「十」地の智なり。〔四五〕起るとは何の觀を以て、何の同行を以て能く此の智を起すや。云何んが證すべくして、説く可からず、聞く可からざるや。今復た喩を以て此の義を證成せん。偈に言はく。

空中の鳥跡の、説き難く見る可からざるが如く、十地の義も是の如く、説聞することを得べからず。

此の偈は〔四六〕何の義を示すや。鳥の空中を行くが如き、その跡處は説く可からず、相も亦見るべからず。何を以ての故に。〔四七〕虚空の處には鳥跡の相を分別す可からざるが故のみ、虚空に行跡無きに非らず。是の如きは〔四八〕鳥跡の住處なり。名句字身の住處は、菩薩地の證智の所攝なり。「是の故に」説くことを得べからず、

【四四】 陰界入とは五陰、十八界、十二入にして現象界の諸法をいふ。

【四五】 問を設くるのみにて答なきは、前段の終に説く所と同義なるが故なり。

【四六】 前に説ける空中の風畫の喩は地法の難説難聞に喩へ、默して説かざることを明かせり、今は亦説聞の難きを述べ、先づ衆を誡めて言説に著すること勿からしめ、爲に宜説を許すの意を明かす

【四七】 砂上を行けば足跡の見るべきあるも空中を行くが故に鳥跡の相を見る能はず。

【四八】 鳥跡を言説(名と句と字)に喩へ、證智を虚空に喩へて言説の相なきを明かす

聞くことを得べからず。何を以ての故に（四九）聲性の如きに非ざるが故なり、（五〇）地智に名句字身無きには非らず。（五一）此の中、深きが故に、義大の踊悦を示す。何が故に我れ復た此を說くや。汝等應に聲の如く義を取るべからず。聲に隨ひて義を取るは五種の過あり。一には（五二）正信ならず、二に（五三）勇猛を退く、三には（五四）他を誑す、四に（五五）佛を謗る、五に（五六）法を輕んず。大衆自ら此の五過無きことを知るべし。已に深義を說けり。復た說大を顯はして正信を生ぜしめんために次に五偈を說く。

我れ但だ一分を說くのみ、慈悲及び願力にて、漸次に「諸地具はりて」

心の境に非ず、智滿は淨心の如し。

是の境界は見難く、說き難く自心に知るのみ、我れ佛力を承けて說く、

咸共に恭敬して聽け。

是の如く智入の行は、億劫に說くとも盡きず、今是の如きを略して說く、如實に滿足して住す、

一心に恭敬して待て。佛力を承けて善く說き、上法を說くに妙音「を以てし」。喩は相應し善字「に依る」。

【四九】音聲の性の說くべく聞くべきと同じからず。

【五〇】設ひ相の見るべきもいなくも、鳥行けば必ず足跡あるが如し。

【五一】次の句は上來の所說を結ぶ。

【五二】言に隨つて解すれば、實義に稱はざるが故に正信にあらず。

【五三】言語の相を離れて實理に趣く能はざるが故に勇猛を退くといふ。

【五四】已れ先づ謬解して他の爲に說くが故なり。

【五五】佛の眞意は離言に在るを佛語相に著して謬解し、之を佛說なりと爲すが故なり。

【五六】言詮の及び難き深旨を言に依りて、淺薄の解を得て、實を得たりとなすが故に、法を輕んずといふ。

是の言說は甚だ難し、無量の佛の神力にて、光焔我が身に入れり、是の力にて我れ能く說かん。前には十地の義は是の如く說聞を得べからずと言ひ、今は我れ但だ一分を說くと言ふ。此の言何の義有るや。是の地の所攝に二種あり。一には（五七）因分、二には果分なり。說とは謂はく解釋なり。一分とは是れ因分なり、果分に於て一分を爲すが故に、我れ但だ一分を說くと言ふ。此の說大に三種あり。一には因成就大、二には因漸成就大、三には教說修成就大なり。何をか（五八）因成就大といふ。偈に「慈悲及び願力」と言ふが故に。慈とは同じく喜樂の因果を與ふるが故に、悲とは同じく憂苦の因果を拔くが故に、願とは發心して大菩提を期するが故に、此の慈悲と願と長夜に熏修して二乘に同じからざるが故なり。何をか因漸成就大といふ。偈に漸次と言ふが故に、漸とは聞思慧等次第して乃至能く出世間の智を生ずる因を說くが故なり。何をか（五九）教說修成就大といふ。二種あり。一には（六〇）滿足修、二には（六一）觀修なり。滿足修とは偈に「心の境に非らず」と言へるが故に、心の境に非ずとは、

【五七】因分果分は華嚴教の要義にして本論今の所說に據る。果分とは佛の內證智と其の所行とにして之を就實の十地といふ。前の喩にては鳥跡所依の太空に當る。因分とは菩薩の所知と其の所行とにして前の鳥跡に當る。果分は絕待離言の境界にして不可說なり、因分は相對に下り機に對するが故に可說也。鳥跡は太空の一分なるが如く、可說の因分は果海不可說の一分を爲す、鳥跡は相を離れたれば長短等の相の說くべきなけれども、鳥に就て說くことを得るが如く、不可說の果海も二乘三乘の差別に寄せて顯示することを得るが故に、一分を說くといふ。

【五八】因成就。因分中の眞德、慈悲は利他の因、誓願は自行の因なり。此れ行の根本なれば因成就といふ。

【五九】教說修とは教說の中に眞德を修成するをいふ。教說と

此の句は聞思慧等の心の境界の處は唯だ是れ智の因にして能く出世間の智を生ずるも而も此は彼の出世間の智地を滿すること能はざるを示現す。偈に「智滿淨心の如し」と言ふが故に、淨心の如しとは出世間の淸淨心の如く、能く彼の智地を滿ずるが故なり。觀修とは偈に言はく、

是の境界は見難く、說き難く自心に知るのみ、我れ佛力を承けて說かん、咸共に恭敬して聽け。

此の偈は何の義を顯はすや。是の境界は見難きも、自心淸淨なれば見るべし、此の境界は說くべからず。是の如く敎說修成就已る。說法の中に於て、二種の過ありて證を得ると能はず。一には說者の過、二には聽者の過あり。說者の過に二種なり。一には（六二）佛の隨喜せざる說、二には（六三）平等ならざる說なり。聽者にも亦二種の過あり。一には（六四）見諍の過、我が法は是にして、彼の法は非なりと、是の如くして種種の諸見に執著す。二には法を說く者に於て恭敬を生ぜず。中に於て（六五）說者自身に過なく、我れは諸佛の隨喜せざる說にあらざることを示現す 偈に「我れ佛力を承けて說く、

は可說の因分なるを示す。此の三は共に因分なるも修成就は證智玄妙なれば、果分に濫用するが故に、特に敎說の說を加へて果分に簡ぶ。

【六〇】滿足修とは眞德の中、敎行備はるをいふ。

【六一】觀修とは眞德の中、證心明かなるをいふ。

【六二】師に違ふ過にして亦乖法の過とも名く、慢心ありて自ら說き、佛の神力を承けず、經に多く法に乖き慢心に順はず、故に隨喜せずといふ。

【六三】人に違ふ過なり、心に怨親向背ありて平等なる能はざるをいふ。

【六四】見諍の過は乖法の過也。自ら所見に固執して妄りに他の說を非難するをいふ。

【六五】說者に前の過なきことを明かす。

咸聽け」と言へるが故に。(六六)次に聽者を敎へて二種の過を防がしむ、偈に「共に恭敬して聽け」と言へるが故に。是の如く次第して、是の如く說を許すも、而も衆は未だ廣說なるか略說なるかを知らず。廣說すべからずして唯だ略說のみを許し、地義滿足す。第三の偈に說くが如し。

是の如き智入の行は、億劫に說くとも盡きず、今是の如く略說し、如實に滿足して住す。

智入とは此に說く所の地法なり。衆生は智を以て入る。云何んが入る。如實に滿足し、攝取して入る。「地法の」如く行修するが故に、「地法の」如く行修滿足するが故に、彼の廣說の義を攝取することを示さんが故に「略說すといふ」。住とは如來の家に(六七)決定して住するが故なり。(六八)我れ是の如く說けり。前に恭敬して聽けと言へるも、云何んが恭敬なるかを說かず、是の故に示現す。偈に言はく、

一心に恭敬して待て、佛力を承けて善く說き、上法を說くに妙音「をもてし」、喩相應し善字「に依る」。

「一心に恭敬して待て」といふに二種あり。一には身正しく恭敬して待つ、威儀の如く住して說法を受くるに堪ふるが故に。二には心正しく恭敬して待つ、(六九)心の如く決定して能く憶持に堪ふるが故なり。此の句は二種の恭敬して待つことを勸誡す。所謂る身心の故に。善く說くとは己に諂無く憍慢

(六六)次に聽者の無過を明かす。
(六七)智と行と相應するを決定して住すといふ。
(六八)前說の如く略說にして廣釋にあらざることを結ぶ。
(六九)心の如くとは求法の心を指す、思を決して法を求むることなり。

あること無きを示すが故なり。佛力を承くとは已に增上慢無きことを示すが故なり。下の半偈の「上法を說くに妙音〔を以てし〕喩は相應し善字〔に依る〕」とは何の事を示現し、何の事を以て、云何なる事を〔用ゐ〕、何の事に依止するや〔といふに答ふ〕。何の事を示現すとは所謂る上法なり。何の事を以てとは謂はく妙音聲なり。云何なる事とは譬喩と相應するなり、何の事に依止すとは謂はく善字に依止するなり〔是の故に〕我れ一切善く說くなり。又相應とは〔所說の法は〕譬喩と共に相應す。善字とは二種の相あり。一に(七〇)隨方の言音に善く隨順するが故に、二には字句圓滿にして增さず、減せず、理と相應するが故に、善字と言ふ。前に佛の神力を承くと言へるも、未だ云何なる力なるやを說かず。第五偈に佛の神力の事を示現す。偈に言はく、

　是の言說は甚だ難し、無量の佛の神力にて、光焰我が身に入る、是の
　力にて我れ能く說かん。

已に請分を說けり。此れより以後は正しく初地を說く。此の說分の中に何等の事を說くや。分別するに三あり。一には住、二には釋名、三には安住なり。(七一)住の中に四種あり、何の身に依り、何の義の爲めに、何の因を以て、何の相ありて、彼の心生ずる時、即ち初地に住するや〔を說く〕、是れを名けて住と爲す。中に於て、「諸の佛子は善く善根を集むるが故に」、〔といふ以下〕是の如き等の

【七〇】地方の國語に隨つて說くの意。
【七一】出世の菩提心生じ、堅く初地を守つて退失せざるを住と名く。

四十句は此の住事を說く、初め何の身に依りて是の如き心を生ずるやを說く。

經に曰く、諸の佛子よ、若し衆生ありて厚く善根を集むるが故に、善く諸の善行を集むるが故に、善く諸の三昧行を集むるが故に、善く諸佛を供養するが故に、善く淸白の法を集むるが故に、善知識善く護るが故に、善く心を淸淨にするが故に、深廣の心に入るが故に、大法を信樂し、好んで佛智慧を求むるが故に、大慈悲を現ずるが故に、是の如きの衆生は乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

論に曰く、是の如きの十句は何の身に依るかを說くなり。此の集に九種あり。一には行集、善く(七三)眷屬の持戒を作す、經に「善く諸の善行を集むるが故に」といへるが如し。二には定集、善く眷屬の三昧を作す、經に「善く諸の三昧行を集むるが故に」といへるが如し。三昧行とは觀行增上するが故なり。三には親近集、善く聞慧の智を習ふ、經に「善く諸佛を供養するが故に」といへるが如し。四には聚集、思慧の智善く波羅蜜等の諸の善法を思量す、經に「善く淸白の法を集むるが故に」といへるが如し。五には護集、修行實證にして善く敎授を得、經に「善知識善く護るが故に」といへるが如し。六には淨心集、出世間の正智を得、經に「善く心を淸淨にするが故に」といへるが如し。七には廣集、深心をもつて一切の衆生を利益することを作す、經に「深廣の心に入るが故に」といへるが如し。八には信心集、一

【七三】慧を以て主と爲せば、戒は隨つて作助となるが故に、眷屬といふ。

切智智を求む、經に「大法を信樂し、好んで佛智慧を求むるが故に」といへるが如し。九には現集、多く慈悲を行ず、經に「大慈悲を現ずるが故に」といへるが如し。中に於て慈念は(七三)苦苦と(七四)壞苦とに依り、悲は(七五)行苦に依る。是の中初の二種の集は增上の戒學と增上の定學とを顯はす。行集は善く眷屬の持戒を作すが故に。定集は善く眷屬の三昧を作すが故なり。次に四種あり、增上の慧學を顯はす。(七六)親近集は善く聞慧の智を習するが故に、聚集は思慧の智をもつて善く波羅蜜等の諸の善法を思量するが故に、(七七)護集は修行實證にして善く教授を得るが故に、淨心集は出世間の正智を得るが故なり。後の三集は聲聞辟支佛等に勝れたることを顯はすが故に。廣集は深心をもつて一切の衆生を利益することを作すが故に。信心集は一切智智を求むるが故に。(七八)現集は多く慈悲を行ずるが故なり。此の十句の中にて厚く善根を集むとは是れ總、餘の九種は是れ別なり。集とは是れ同相、別とは是れ異相、成とは略說の故に、壞とは廣說の故なり。已に何の身に依りて是の如きの心を生ずるやを說けり。次に何の義の爲めの故に是の如きの心を生ずるやを說かん。

【七三】苦苦とは疾病飢饉等より生ずる心身の苦惱をいふ。

【七四】壞苦とは自己の愛著せしものの壞失する時に感ずる苦惱。

【七五】行苦とは行は遷流の義にて、世の無常轉變なるより受くる苦惱をいふ。

【七六】聞慧は善知識に親近して得るが故に親近集といふ。

【七七】護集は修慧なり。修慧は善知識に順ひ其攝護を受けて成ずるが故に護集といふ。

【七八】前二は小乘の狹心を護りて大乘の心を起さしめ、現集は大乘の心により小行を捨てて利他の行を修せしむ。

經に曰く。佛智を得んが爲めの故に、十力の力を得んが爲めの故に、大無畏を得んが爲めの故に、佛の平等法を得んが爲めの故に、一切の世間を救はんが爲めの故に、大慈悲を淨めんが爲めの故に、十方無餘の智を得んが爲めの故に、一切世間の無障の淨智を得んが爲めの故に、一念の中に三世の事を覺することを得んが爲めの故に、大法輪を轉ずる無所畏を得んが爲めの故に、菩薩摩訶薩は是の如きの心を生ず。

論に曰く、中に於て佛智とは謂はく無上智なり。(七九)知斷證修の故に。此の佛智に九種の業差別あり、(八〇)彼を求めんが爲めの故に是の如きの(八一)心を生ず。一には力佛智、問記する業なり。此れ如來の(八二)是處非處の智力の(八三)問記なるが故に、修多羅の中に說くが如し。經に「(八四)十力の力を得んが爲めの故に」といへるが如し。二には(八五)無畏佛智、邪說を破する業なり、經に「大無畏を得んが爲めの故に」といへるが如し。三には平等佛智、人法無我を得て、衆生を教授して證入せしむる業なり、經に「佛の平等法を得んが爲めの故に」といへるが如し。(八六)四には(八七)救佛智、(八八)四攝の法を以て衆生を化する業な

【七九】知斷證修とは人生の苦なるを知りて、其の原因たる煩惱(集)を斷じ、涅槃(滅)を證するに、其の原因たる道を修するの義。

【八〇】彼とは佛智の九種の作用を指す。

【八一】心とは菩提心の義なり。

【八二】是處非處とは道理あることと道理なきことを明瞭に判斷する智力をいふ。佛の十力の第一にして惣じて正しく因果を知る智なれば、偏に之を擧ぐ。

【八三】問記とは衆生の問ふ所に隨つて皆能く記憶するの義。これ是處非處の智力の作用なり。

【八四】十力の力とは十の中にて一を擧げ、餘を簡ぶが故也。

り、經に「一切の世間を救はんが爲めの故に」といへるが如し。五には（八九）淨佛智、是れ淨にして（九〇）救攝の因を爲す業なり、經に「大慈悲を淨めんが爲の故に」といへるが如し。（九一）六には（九二）無餘智の佛智、常に（九三）佛眼を以て世間の衆生を觀ずる業なり、經に「十方の無餘智を得んが爲めの故に」といへるが如し。七には（九四）無染佛智、一切の世界に障無く染無く、自然に應化して信ぜしむる作業にして、智心無礙なり、經に「一切の世界の無障の淨智を得んが爲の故に」といへるが如し。八には覺佛智、一念の中に於て三世の衆生の心心數の法を知る業なり、經に「一念の中に三世の衆事を覺ることを得んが爲めの故に」といへるが如し。九には轉法輪佛智、「衆生を」解脱せしむる方便善巧の業なるが故に、百億の閻浮提に於て、同時に大法輪を轉ず、經に「大法輪を轉ずる無所畏を得んが爲めの故に」といへるが如し。是の如きの心を生ずといへるは即ち是れ本分の中に、「諸の佛子よ、是の菩薩は善決

【八五】佛の説法する時、畏怖の相なきは四無畏の智なり。

【八六】以上三は自利、以下の六は利他なり。

【八七】救佛智とは大悲を以て救濟する利他の智なり。

【八八】四攝の法とは布施、愛語、利行、同事なり。

【八九】淨佛智とは慈悲を以て瞋恚等の罪障を除きて衆生の心を清淨ならしむる智なり。

【九〇】前の四攝法を以て衆生を救濟するは慈悲心を根本とするが故に救攝の因といふ。

【九一】以上の二は利他の行を明かし、以下の四はの利他智を明かす。

【九二】所化の衆生の無量なるを知り盡して餘なきが故に無餘智といふ。

【九三】佛眼に五あり。肉眼、天眼を以ては衆生の形相を見、法眼を以て衆生の根性を見、慧眼を以て衆生の空寂なるを見、佛眼を以て衆生の實性を了達す。此五眼を具して能く衆生を見て利益を爲す。

【九四】一切の世界に於て心に愛著なきを無染といふ。

定を願ふ」と說けるが故なり。何が故に唯だ心を生ずとのみ言ひて、智及び餘の心數の法を生ずと言はざるや。心の中に卽ち知斷證修、一切の助道の法を攝するが故なり。已に何の義の爲めの故に是の如きの心を生ずるやを說けり。次に何の因を以て是の如きの心を生ずるやを說かん。

經に曰く、是の心は大悲を以て首と爲し、智慧增上し、方便善巧の攝する所、直心深心淳至し、如來力無量にして、善く衆生力と智力とを決定し、自然智に隨順し、能く一切の佛法を受け、智慧を以て敎化し、廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡す。

論に曰く、(九五)此心は大悲を首と爲す、中に於て悲大に九種あり。一には增上大、(九六)細苦の智增上して生ずるが故に、經に「智慧增上す」といへるが如き故に。(九七)智とは因果逆順染淨の觀の故に、(九八)慧とは自相同相差別の觀の故に。二には攝大、苦の衆生を救ふ方便善巧の所攝なり、經に「方便善巧の所攝」といへるが如き故に。三には淳至大、向の時に乃至衆生界を盡して、利益

【九五】此心とは前に生ずる所の菩提心を指す。菩提心の起るは必ず大悲に依るが故に首と爲すといふ。

【九六】微細の苦を緣じて智慧增上すること。

【九七】智と慧とは通じて云へば別なきも、區別を立つれば理を照すを慧となし、事を鑑みるを智と爲す。因果逆順染淨とは業煩惱を因となし、苦樂等の報を果となす、十二因緣にては次第の如く、前は後の因、後は前の果也、果よりして因を尋ぬるは逆觀、因に據りて果を推すは順觀なり。不善の因果は染にして、善法の因果は淨なり。此の事を智を以て決斷するを觀といふ。

【九八】因緣生の一切法は但名のみにて實なしと觀するを自相觀と名け、一切法は實體としは眞如平等なりと觀するを同相觀と名く、自相同相の義分るるが故に差別といふ、觀は照察の義なり。

衆生を作すことを許す悲心の增上なり、經に「(九八)直心深心淳至」といへるが如き故に。四には無量大、如來の無量力を攝取す、經に「如來力無量なり」といへるが如き故に。五には決定大、上妙なる決定の信、深智の勝對治なり、經に「善く衆生力と智力とを決定す」といへるが如き故に。六には隨順大、菩提に隨順して正覺す、經に「自然智に隨順す」といへるが如き故に。七には正受大、能く大勝の法を取りて衆生を敎授す、經に「能く一切の佛法を受け、智慧を以て敎化す」といへるが如き故に。八には最妙大、勝妙の功德を攝受す、經に「廣大なること法界の如し」といへるが如き故に。九には住盡大、無量の愛果の因は涅槃の際を盡す、經に「究竟なること虛空の如く、未來際を盡す」といへるが如き故に。已に何の因を以て是の如きの心を生ずるやを說けり。次に是の心の生ずる時何等の相あるやを說かん。

經に曰く、菩薩は是の如きの心を生ずれば、卽時に凡夫地を過ぎて菩薩の位に入り、佛家に生在し、種姓尊貴にして譏嫌すべきなく、一切世間の道を過ぎて出世間の道に入り、菩薩の法の中に住し、菩薩の正處に住在し、三世の眞如の法の中に入り、如來種の中に畢定して阿耨多羅三藐三菩提を究竟す。菩薩是の如きの法に住するを菩薩の歡喜地に住すと名く。不動の法を以ての故なり。

【九八】直心とは衆生界を盡して等しく利益を爲し情に偏局なきをいひ、深心とは苦を愍むの情懇切なる大悲拔苦の心なり。若し自利に約して云へば直心は眞如の法を念ずる心、深心とは好んで諸の善行を集むる心をいふ。此には前義に依る。

論に曰く、凡夫地を過ぐとは凡夫地を過ぎたるを以ての故に、出世間の聖道を得たることを示現す。此の過ぐるに八種あり。一には入位過、初め出世間の心を成ずるは始めて胎に住するが如し、〔一〇〇〕相似の法なるが故なり。經に「菩薩の位に入る」といへるが如き故に。二には〔一〇一〕家過、家生相似の法なるが故なり、經に「佛家に生在す」といへるが如き故に。三には種姓過、〔一〇二〕子相似の法にして大乘の行生ずるが故なり、經に「種姓尊貴にして譏嫌すべき無し」といへるが如き故に。四には道過、〔一〇三〕世間と出世間との道に不攝と攝との故に、〔一〇四〕異道の生相似の法なるが故なり、經に「一切世間の道を過ぎて出世間の道に入る」といへるが如き故に。五には法體過、大悲を以て體と爲し、他の事を作すに於て即ち是れ己が事とす、自の〔一〇五〕身體相似の法なるが故なり、經に「菩薩の法の中に住す」といへるが如き故に。六には處過、世間を捨てず、方便に染まず、善巧に住するが故に、

【一〇〇】凡夫の境界を超過して聖位に入り、漸次に向上進趣する相を喩を以て示す。法と喩と相似たるを相似といふ。

【一〇一】住胎すと雖、卑賤の家にては過ぎたりと爲すに足らず必ず王家に生るることを得て勝となす、今佛家に生在する（如來の法を得ること）は猶王家に生るるが如し、故に家生相似といふ。

【一〇二】佛家に生るると雖、二乘の法にては佛種を紹ぐこと成佛能はず、大乘の行成りて始めて佛の種姓を紹ぐに堪ふ、猶王子と生れて始めて王位を繼ぐが如し、故に子相似といふ。

【一〇三】地前は世間（有漏）地上は出世間（無漏）なり。此菩薩は世間に攝せず、出世間の攝なり。

【一〇四】異道とは人天と異れる三惡道をいふ。王子とし生るるも異道にして人天にあらざれば過ぎたりと爲さずとの意。

【一〇五】大悲の心よりして自他の別を爲さざるを菩薩の體となす、猶自の身體の諸根具備せるが如しとの意なり。

(一〇六)住處相似の法なるが故なり、經に「菩薩の正處に住在す」といへるが如き故に。七には業過、空に順ふ聖智は(一〇七)生命相似の法なるが故なり、經に(一〇八)三世の眞如の法の中に入る」といへるが如き故に。八には畢定過、佛種を斷ぜず、涅槃道を究竟す、(一〇九)成就相似の法なるが故なり、經に「如來種の中に畢定して阿耨多羅三藐三菩提を究竟す」といへるが如き故に。是の如く凡夫生と菩薩生とを示現するに入胎相似せず、煩惱あり、煩惱無きが故なり。是の如く次第に家相似せず、種姓相似せず、道相似せず、體相似せず、處相似せず、生業相似せず。成就相似せず。是の如きを此の地の中に住すと說く。是れを名けて住と爲す、經に「菩薩是の如きの法に住するを菩薩の歡喜地に住すと名く、(一一〇)不動の法を以ての故に」といへるが如し。已に住の義を說けり。◎次に釋名を說かん。云何んが說くや、多く歡喜するが故に、歡喜と名くることを示す。何を以て歡喜するや。此の地の中にて菩薩は歡喜す復た何の念を以て「歡喜」するや。初めに十句を說き、

【一〇六】大悲身具はると雖、兩邊に著せば勝れたりと爲さず、世間に著するはこれ凡夫、涅槃に著するは小乘なり、菩薩は涅槃に住せず、不住の境界に處す。故に過ぎたりとなす。猶王子の宮殿に處するが如し。

【一〇七】王子は都の宮殿に處るも飮食粗なれば長壽ならざるが如く、菩薩も亦不住に處ると雖、相に取著すれば過ぎたりと爲さず、空を證して以て慧命を養し、始めて勝れたりと爲すとの意なり。

【一〇八】無際限の絕待生命を得ることを示す。

【一〇九】前項をすべて具ふと雖、志氣勇猛ならざれば畢定して王位を繼ぐこと能はず、王子の意志堅固にして始めて成就すと相似す。

【一一〇】不動の法とは住の義を釋す、眞理を證すれば復失はず、又二乘異道の動ぜざる所なれば不動といふ。

後に二十句を說く。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は菩薩の歡喜地の中に住すれば多くの歡喜、多くの信敬、多くの愛念、多くの慶悅、多くの調柔、多くの踊躍、多くの堪受、多くの他意を壞らざること、多くの衆生を惱まさざること、多くの瞋恨せざることを成就す。

論に曰く、歡喜とは名けて（二一）心の喜、（二二）體の喜、（二三）根の喜と爲す、是の歡喜に九種あり。一には敬歡喜、三寶の中に於て恭敬するが故なり、經に「多くの（二四）信敬」といへるが如き故に。二には愛歡喜、樂うて眞如の法を觀ず、經に「多くの愛念」といへるが如き故に。（二五）三には慶歡喜、自ら證する所を較量して（二六）勝れたるとを覺る、經に「多くの慶悅」といへるが如き故に。四には調柔歡喜、自の身心に遍益し、成就す、經に「多くの（二七）調柔」といへるが如き故に。五には踊躍歡喜、自の身心に遍益增上し、滿足す、經に「多くの踊躍」といへるが如き故に。（二八）六には堪受歡喜、自ら（二九）菩提に至ると近きを見る、經に「多くの堪受」といへるが如き故に。

【二一】心の喜とは入觀の心適悅なるをいふ。
【二二】體の喜とは出觀の時の喜悅なり。
【二三】根の喜とは前の心と體との喜に由りて身體諸根を調暢ならしめ、輕安適悅なるをいふ。
【二四】自ら三寶の體性を證し、其深勝なるを信じて、敬を生ずるが故に信敬といふ。

【二五】初の二は喜の心、次の三は正しく喜の體相也。初中後別釋するが故に三句と爲す。
【二六】地前に比して勝れたることを云ふ。
【二七】喜心轉た增して內外に充遍し、身心に苦なく、忿惱を離るるが故に調柔といふ。
【二八】前は自行、次の三は化他に就て喜障を離るることを示す。口身意の三業に約するが

七には不壞歡喜、[已に]自心調伏[せるが故に]論義解說する時、(二〇)心擾動せず、經に「多く他意を壞らず」といへるが如き故に。八には不惱歡喜、衆生を敎化し、攝取する時、(二一)慈悲調柔す、經に「多く衆生を惱まさず」といへるが如き故に。九には不瞋歡喜、諸の衆生を見るに說の如く修行せず、威儀正しからざる時忍びて瞋らざるが故に、經に「多く瞋恨せず」といへるが如き故に。已に多くの歡喜を說けり。次に何の念を以ての故に歡喜を成ずるやを說かん。是れ第二の十、第三の十句の說なり。是の念に二種あり。一には當に得べきを念じ、二には現に得るを念ず。何をか當に得べきを念ずといふや。

經に曰く、諸の佛子よ、菩薩是の歡喜地の中に住するときは、諸佛を念ずるが故に、歡善の心を生ず。諸佛の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩摩訶薩を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩の所行を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の波羅蜜の清淨の相を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩地の較量して勝れたることを念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩力の不退を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の如來の敎化の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。能く衆生を利益することを念ずるが故に、歡喜の心を生ず。一切如來の智行に入ることを念ずるが故に、歡喜

故に三句あり。

【一九】已に行成るが故に果を取ること近きに在りとの意。これ豫期の喜を云ふに非ずして自らの力量の堪能なるを喜ぶ、故に堪受といふ。

【二〇】心安靜にして動ぜざるが故に、言必ず柔和溫順なれば他の反感を受けて、諍鬪を起すが如き事なし。

【二一】心には慈悲を懷き、動作(身)言語(口)溫順なれば、設ひ惡人と雖、苦惱を感ぜずして善道に導かる。

の心を生ず。

論に曰く、云何んが念ずといふや。佛の得たまふ所の如く我も亦當に得べしと、是の如く念ずるなり。此の念佛に九種あり。一には佛の法を念ず、經に「諸佛の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。二には佛菩薩を念ず、經に「諸の菩薩摩訶薩を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。三には佛行を念ず、經に「諸の菩薩の所行を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。四には佛の淨を念ず、經に「諸の波羅蜜の清淨の相を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。五には佛の勝れたることを念ず、經に「諸の菩薩地の較量して勝れたることを念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。六には佛の不退を念ず、經に「諸の菩薩の力の不退を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。七には佛の教化を念ず、經に「諸の如來の教化の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。八には佛の利益を念ず、經に「能く衆生を利益することを念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。九には佛の入を念ず、經に「一切如來の智行に入ることを念ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。中に於て初の二は共を念ず。佛を念ずるは佛の得たまふ所の如く、我も亦當に得べきが故なり。佛の法を念ずるは諸佛の法を念ずるが故に、〔三三〕佛と佛の法とは二なるが故なり「又」佛菩薩の二を念ずとは諸の菩薩を念ずるが故なり。佛の行を念ずるは諸の菩薩

【三三】佛と佛の法とは別異なれば分つて二と爲すとの意なり。

行を念ずるが故なり。是の如く次第して餘に六句あり。佛の淨を念ずるは諸の波羅蜜の清淨の相を念ずるが故なり。佛の勝れたるを念ずるは諸の菩薩地の較量して勝れたることを念ずるが故なり。佛の不退を念ずるは諸の菩薩力の不退を念ずるが故なり。佛の教化を念ずるは諸の如來の教化の法を念ずるが故なり。佛の利益を念ずるは能く衆生を利益することを念ずるが故なり。佛の入を念ずるは一切如來の智行に入ることを念ずるが故なり。〔此の六句は〕顯はす所の彼の菩薩の行に隨ふ。何を以て是の如き諸念を顯はすやは應に知るべし。(一二三)復た何をか顯はす。彼の波羅蜜の淨を顯はす。云何んが顯はすや。彼の菩薩の行地は較量して(一二四)勝れ、轉じ去るが故に、(一二五)地盡に去るが故に。(一二六)中に於て餘は、教化の法を得るが故に、利益衆生の行を作して虛しからざるが故に。如來地の行に入るが故なり。是の中佛の行を念ずとは亦は總。亦は別なり。已に當に得べきを念ずるが故に。歡喜の心を生ずることを說けり。次に現に得ることを念ずるが故に、歡喜の心を生ずることを說かん。

經に曰く。諸の佛子よ、菩薩は復た是の念を作さく、我れ一切世間の境界を轉離するが故に、歡喜の心を生ず。近く如來の所に入るが故に、歡喜の心を生ず。凡夫地を遠離するが故に、歡喜の心を生

【一二三】六句の中、初の一は離染行、後の五は勝進行を顯はす。

【一二四】後地を前地に望めて勝るといひ、前地より後地に趣入し不退なるを轉じ去るといふ。是れ修行の轉昇を明かす。

【一二五】地盡に去るとは十地の位窮りて佛果に入るをいふ。

【一二六】文の中に於て餘の三句は、との意なり、次の三句は地盡の中の差別の行德なり。

す。近く智慧地に到るが故に、歡喜の心を生ず。一切の惡道を斷つが故に、歡喜の心を生ず。一切の衆生の與に依止と作るが故に、歡喜の心を生ず。近く一切の諸佛を見たてまつるが故に、歡喜の心を生ず。諸佛の境界を生ずるが故に、歡喜の心を生ず。一切の菩薩の眞如の法に入るが故に、歡喜の心を生ず。我れ一切の怖畏毛竪等の事を離るるが故に、歡喜の心を生ず。

論に曰く、我れ一切世間の境界を轉離すといへるは、一切の凡夫の事に取著するを轉離するなり。此の轉離に九種あり。一には入轉離、經に「近く如來の所に入るが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。二には遠轉離、經に「凡夫地を遠離するが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。三には近至轉離、經に「近く智慧地に到るが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。四には斷轉離、經に「一切の惡道を斷つが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。五には依止轉離、經に「一切衆生の與に依止と作るが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。六には近見轉離、經に「近く一切の諸佛を見たてまつるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。七には生轉離、經に「諸佛の境界を生ずるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。八には平等轉離、經に「一切の菩薩の眞如の法に入るが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。九には捨轉離、經に「我れ一切の怖畏毛竪等の事を離るるが故に、歡喜の心を生ず」といへるが如し。中に於て入轉離とは〔二七〕事の相似せざるを顯はすが故に、遠

【二七】所行の事相似せざるをいふ。凡夫は六塵の境を取著するも、菩薩初地に入れば眞如平等を證して差別の相を捨るが故なり。

轉離と近至轉離とは　(二二八)自身の相似せざるを示すが故なり。餘は六句あり、斷轉離、依止轉離、近見轉離、生轉離、平等轉離、捨轉離なり。是の如く次第して、(二二九)行相似せざるが故に、(二三〇)迭ひに相依止すること相似せざるが故に、(二三一)他力相似せざるが故に、(二三二)處相似せざるが故に、(二三三)生業相似せざるが故に、(二三四)成就相似せざるが故なり。怖畏とは　(二三五)不愛、(二三六)疑慮、憂想、心と共に心(二三七)相應するが故に。復た(二三八)身相の差別とは謂はく毛豎等の事なり。次に何者か是れ怖畏なるを說かん。云何んが怖畏なる。此の因を遠離すれば怖畏無きが故に。

經に曰く、所以は何ぞ。是の菩薩摩訶薩は歡喜地を得已りて、所有諸の怖畏は卽ち皆遠離せ

【二二八】菩薩は聖意を身となす、凡夫の妄識を身となすと同じからざるが故なり。

【二二九】出世の淨行は凡夫惡道の行と異るが故なり。

【二三〇】菩薩の大悲は衆生に依りて起り、還つて衆生の依止する所となるを迭ひに相依止すといふ。是れ凡夫の自ら濟はず、他の依止となる能はざると同じからざるが故に、相似せずといふ。

【二三一】菩薩は佛を見て助道力を得るは、凡夫非器の得ざると異るが故に、他力相似せずといふ。

【二三二】處相似せずとは菩薩は不住道(涅槃に住せず世間に著せざるをいふ)を住處とし、之に依りて行を起す。之れ卽ち佛の境界にして、凡夫の五趣に生ずると同じからざる也。

【二三三】菩薩は平等の眞性を證して慧命に資して智業を生ず、凡夫の雜染の業より生ずると同じからざるが故に生業相似せずといふ。

【二三四】菩薩は內心純熟して所作怖なく畢定勝德を成就す、凡夫の障ありて常に怖ると同じからず。

【二三五】不愛とは所畏の事にして次に說く五種怖畏をいふ。

【二三六】疑慮と憂想とは正しく怖畏の體なり。所畏の事未だ定まらざれば疑慮を生じ、所畏已に決定すれば憂想を生ず。

【二三七】畏るべき事と畏るる心、心法と心と共に起るを相應といふ。

【二三八】身相の差別とは畏怖の心外に現はれて毛豎等種種差別せる表現をいふ。

り。所謂る不活の畏、惡名の畏、死の畏、惡道に墮する畏、大衆威德の畏なり。是の如き等の一切諸の畏を離る。何を以ての故に、是の菩薩は我の相を離るるが故に、尚ほ身をも貪らず、何に況んや所用の事をや。是の故に不活の畏あること無し。心に供養恭敬を希望せずして、我れ應に一切の衆生を供養し、一切所須の具を供給すべし。是の故に惡名の畏あること無し。我見を遠離して我の相無きが故に、死の畏あること無し。又是の念を作さく、我れ若し死し已るも、生ずるときは必ず諸佛菩薩を離れず。是の故に惡道に墮する畏あること無し。我が志樂する所は一切世間の身心には與に等しき者無し、何に況んや勝れたるもの有らん。是の故に大衆威德の畏あること無し。諸の佛子よ。菩薩は是の如く諸の怖畏毛竪等の事を離る。

論に曰く、此の五の怖畏は是れ初地の障なり。復た地の利益の勝れたることを説く。是の五怖畏の第一と第二と第五とは身口意に依る。第三と第四とは身に依る。身に依るとは（一三九）善道と（一四〇）惡道とを愛憎するに、捨と得とは身に依るが故なり。何が故に但だ五怖畏を説くや。打縛等の諸畏は皆五の所攝なるが故なり。此の怖畏の因に略して二種あり。（一四一）一には邪智、妄に取想して「我」見に愛著す

【一三九】善道（人界と天界）は愛すべき者なるに、死に依りて之を捨つるが故に怖を生ず、即ち死の畏なり。

【一四〇】惡道（三惡趣）は憎むべきものなるに、生に依つて之を得るが故に怖を生ず、即ち生の畏なり。

【一四一】五畏の中、不活と惡名と死とは第一の因に依る、邪智を以て我に取著するが故に、不活の畏と死の畏とあり、妄りに美名に取著するが故に、惡名の畏あり。

るが故に、(一四二)二には善根微少なるが故に。此の對治は經に「我の想を離るるが故に、尚ほ身をも貪らず、乃至大衆威德の畏あることなき故に、怖畏毛竪等の事無し」といへるが如し。何が故に二處に説くや。(一四三)前には身の怖畏を説き、後には異身の怖畏を説くが故なり。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は大悲を以て首と爲し、深大の心堅固にして、轉た復た勤修して一切の善根成就するが故に。

論に曰く。(一四四)深大の心堅固とは煩惱も小乘も此の觀を壞ること能はず。轉た復た勤修して一切の善根成就すとは諸の所説の善根は此の地に攝受するが故なり。(一四五)云何んが勤修する。中に於て(一四六)三種の成就あり。一には信心成就、二には修行成就、三には廻向成就なり。三十句ありて示現す。初の十句は信心成就を説く。

經に曰く、所謂る信心增上するが故に、多く恭敬するが故に、信清淨なるが故に、多く信を以て分別するが故に、悲愍の心を起すが故に、大悲を成就するが故に、心に疲懈無きが故に、慚愧を以て莊嚴するが故に、忍辱を成就し安樂なるが故に、諸佛の教法に敬順し、信重し、尊貴する

【一四二】餘の二畏は第二の因より生ず。功德善根少きが故に惡道に墮し、智慧の善少きが故に大衆を畏る。

【一四三】前段の説は現に得ることに就て説くが故に、但身畏といひ、今の所説は當報の惡道等に通ずるが故に、異身の怖畏といふ、或は云ふ、怖畏の體を擧ぐるを身畏といひ、畏體に就て、其の相に隨つて別論するを畏身と名くと。

【一四四】以上釋名分を竟り、以下安住地分を明かす。中に於て初に總じて安住を明かす。

【一四五】以下廣く安住を明かす。

【一四六】信心を行の始となし、次は信心に依りて行を起し、後は行を廻して德を成ず、これ修行の次第なり。

が故に。

論に曰く、信心增上すとは（一四七）所有る事に隨つて中に於て信增上し、成就す。此の信の增上に（一四八）九種あり。一には敬信增上して三寶を尊敬す、經に「多く恭敬するが故に」といへるが如し。二には淨信增上して自ら眞淨の智を證す、經に「信清淨なるが故に」といへるが如し。三には分別信增上して他をして淨智を證せしむ、經に「多く信を以て分別するが故に」といへるが如し。四には悲信增上し、五には慈信增上して衆生を敎化す、經に「悲愍の心を起すが故に、大慈を成就するが故に」といへるが如し。悲とは苦想を除く、決定して救濟するが故に、慈とは樂相を與ふ、永く無量の樂を與ふるが故に、起とは（一四九）轉た復た現前するが故なり。六には疲倦せざるの信增上して、無量の衆生を敎化し久しく世間に處して能く利益するが故に、經に「心に疲懈なきが故に」といへるが如し。（一五〇）七には慚愧の信增上して世間に著せざるが故に、慳等の波羅蜜の障法に於て深く慚愧するが故に、經に「慚愧を以て莊嚴するが故に」といへるが如し。八には安樂の信增上して、同法の者に於ては惱亂せざるが故に、經に「忍辱を成就して安樂なるが故に」といへるが如し。九には敬法の信增上して、敬信する殊

【一四七】下に說く所の三寶等の所信の事に隨ひて深信決定するを增上と云ふ。

【一四八】此の中、初の六は始めて信心を起し、後の三は此の信心增上して樂欲を成ず。初の六の中にて、前の二は自利、後の四は利他なり。

【一四九】初め入地の時に無缺の大悲成就し現行す、今正住中に更に現前するが故に、轉た復た現前すといふ。

【一五〇】次の三句は、初は起行の緣、後は行の所依を明かす。

勝心の故に、經に「諸佛の教法に敬順して信重尊貴なるが故に」といへるが如し。後の三句は何等の行を修するやを示す、波羅蜜の行なるが故に。誰を等侶と爲すや、同事安樂の故に。何の法の中に入るや、謂はく諸佛の教法なる故に。是の如く信心成就す。云何んが修行成就せん。

經に曰く、日夜善根を修集して厭足なきが故に、善知識に親近するが故に、常に法を愛樂するが故に、多聞を求めて厭くこと無きが故に、所聞の法の如く正觀するが故に、心に貪著せざるが故に、利養、名聞、恭敬に著せざるが故に、一切資生の物を求めざるが故に、常に如實の心を生じて厭足なきが故に。

論に曰く、此の十句は修行成就を説く、云何んが修行成就するや。

諸の善根を集めて休息なきが故に、經に「日夜善根を修集して厭足なきが故に」といへるが如し。此の集に八種あり。(一五二)一には親近集、諸法を忘れざるなり、經に「善知識に親近するが故に」といへるが如し。二には樂法集、問答の中に於て論義し解釋して心に喜樂するが故に、經に「常に法を愛樂するが故に」といへるが如し。(一五三)三には多聞集、經に「多聞を求めて厭くなきが故に」といへるが如し。四には正觀集、經に「聞く所の法の如く正觀するが故に」といへるが如し。五には不著集、經に「心に貪著せざるが故に」といへるが如し。向に説ける多聞集等の三句は是れ聞思修の慧にして是の如く次第す。不著とは三昧の中に於て愛著なきが故な

【一五二】初の二は攝法の方便、次の五は法に依つて次第に修行す。

【一五三】次の五句の中、前三は内觀順理の行、後の二は緣中離著の行なり。

り。六には不貪集、七には不求集、已に得たる利養に於て貪らず、未だ得ざる利養を求めず、これ菩薩の戒を障へ、菩薩の戒を退くればなり、經に「利養、名聞、恭敬に著せざるが故に、一切資生の物を求めざるが故に」といへるが如し。〔一五三〕八には如實心集、出世間の心念念に現前す、經に「常に如實の心を生じて厭足なきが故」にといへるが如し。是の如く修行成就す。云何んが廻向を成就せん。

經に曰く、一切智地を求めんが故に、諸佛の力無畏不共の法を求めんが故に、諸波羅蜜無著の法を求めんが故に、諸の諂曲を離れんが故に、說の如く能く行ぜんが故に、常に實語を護らんが故に、諸佛の家を汚さざらんが故に、菩薩の戒を捨てざらんが故に、動ぜざること大山王の如く、薩婆若の心を生ぜんが故に、一切世間の事を捨てずして出世間の道を成就せんが故に、助菩提分法を集めて厭足なきが故に、常に上上の勝道を求めんが故なり。諸の佛子よ、菩薩摩訶薩は是の如きの淨治地の法を成就するを名けて菩薩の歡喜地に安住すと爲す。

論に曰く、一切智地を求む等は何等の事を說くや。廻向の成就を示現せんが故なり。一切智地を求むとは是れ總、如來力を求むといへる等は一切智地に於て是れ別なり。一には〔一五四〕觀によつて一切智地を求む。二には無障によりて一切智地を求む。三には離によつて一切智地を求むるが故に。

【一五三】前七は阿含行、第八は證入行なり。

【一五四】觀は觀解なり、是れ能求の解也。次の十一句は能求の行を擧ぐ。但し論文に一句を缺く、次の廣釋の中には經と相應して十一句と爲せり。

四には說の如く能く行じて一切智地を求む。五には護によつて一切智地を求む。六には不汙によつて一切智地を求む。七には不捨によつて一切智地を求む。八には不動によつて一切智地を求む。九には不捨成就によつて一切智地を求む。十には集によつて一切智地を求む。十一には常求によつて一切智地を求む。中に於て何等の事を求むるや、一切智地を求むるが故に。何の觀を以て求むるや、諸佛の力無畏不共の法を觀ずるが故に。云何んが求むるや、諸の波羅蜜の無著法を求むるが故に。此の三求は是れ(一五五)家、依家、無障求の故なり。云何んが求むるや、諸波羅蜜の無著の法を求むるが故なり。此の無障求は(一五六)差別の求なり。中に於て(一五七)檀[那]波羅蜜に二種の垢あり。一には諂曲、乞ひ求むる者を見るに詐りて方便を設け心に許して與ふると無し。二には先言に隨はず、許して而も與へざるなり。是の垢を對治するは、經に「諸の諂曲を離れんが故に、說の如く能く行ぜんが故に」といへるが如し。(一五八)尸[羅]波羅蜜に一種の垢あり、實語を護らず本受けし所に違ひ、犯し已りて覆藏す。是の垢を對治するは、經に「常に實語を護らんが故に」といへるが如し。(一五九)羼提波羅蜜に一種の垢あり、如來の家を汙す。云何ん

【一五五】一切智地は所求の處なるが故に家といひ、前の所求の一切智中に於て力無畏等を分別し觀察するを依家と云ひ、六度に依りて能く慳等六弊を治するが故に無障求といふ、次第の如く前の三問を結す。

【一五六】無障求は六度に就て別開するが故に差別の求といふ。

【一五七】檀那波羅蜜（Dāna-pāramita）。檀那は布施と譯し、波羅蜜多は度と譯す。到彼岸の義にして、菩薩は此の行に依りて、彼岸（佛果）に到達するが故なり。

【一五八】尸羅波羅蜜（Śīla-pāramita）。戒度と譯す。

【一五九】羼提波羅蜜（Kṣānti-pāramita）。忍辱度と譯す。

が菩薩は如來の家を汙すや。他を惱亂する業なるが故に、他を利益する業は卽ち是れ如來の家なり。是の故に菩薩の此の家に生るるものは、他を惱亂する業は善事にあらざるが故なり。是の垢を對治するは、經に「諸佛の家を汙さざらんが故に」といへるが如し。(一六〇)毗黎耶波羅蜜に一種の垢あり、菩薩の戒は無量劫數の長遠に持ち難く、行じ難くして、退轉の心を生ず。是の垢を對治するは、經に「菩薩の戒を捨てざらんが故に」といへるが如し。(一六一)禪「那」波羅蜜に二種の垢あり。一には亂心、二には憶想分別を調伏すること能はず。是の垢を對治するは、經に「動せざること大山王の如く、(一六二)薩婆若の心を生ぜんが故に」といへるが如し。(一六三)般若波羅蜜に三種の垢あり。一には善巧方便なく、世間と涅槃とは(一六四)一向に不現と現なるが故に。二には(一六五)出世間の道を修集せざるが故に。三には(一六六)勝上の證法の中に於て願欲の心薄きが故に。是の如く次第して此の垢を對治するは、經に「一切世間の事を捨てずして出世間の道を成就せんが故に、助菩提の分法を集めて厭足なきが故に、常に上上の勝道を求めんが故に」といへるが如し。是の如く廻向を成就する是を勤行具足し成就すと名く。是の勤

【一六〇】毗黎耶波羅蜜（Vīrya-pāramitā）。精進度と譯す。

【一六一】禪那波羅蜜（Dhyāna-pāramitā）。靜慮度と譯す。

【一六二】薩婆若(Sarvajña)。一切智と譯す。

【一六三】般若波羅蜜(Prajñā-pāramitā)。智慧度と譯す。

【一六四】不住道の行を障ふ、一向に世間を現じて涅槃を現ぜざるは凡夫と同じく、或は一向に涅槃を現じて世間を現ぜざれば二乘に同じ、是れ善巧方便を缺く不住道の障なり、對治は經文にて知るべし。

【一六五】是は助道行を障ふ。

【一六六】是は證道行を障ふ。

行に四種あり。一には(一六七)信、二には(一六八)欲、三には精進、四には(一六九)方便なり。初の十句は信の増上成就を示現す。是の信増上は卽ち欲を攝受す。第二の十句の日夜善根を修集して厭くことなきは精進を示現するが故に、第三の十句は一切智地を求め、方便を示現するが故なり。是を此の地の說中の安住と名く。何を以ての故に、經に「諸の佛子よ、菩薩摩訶薩は是の如きの淨治地の法を成就すれば、名けて菩薩の歡喜地に安住すと爲す」といへるが如き故なり。是の如く說分訖る。

【一六七】信とは忍受決定の義。
【一六八】欲とは希求して彼の行に趣くの義。
【一六九】少善を以て無量の果を得るを方便と名く。

初歓喜地第一の三

論に曰く、已に說分を顯はせり。次に較量勝分を說かん。云何んが較量して勝れたるや。菩薩此の地の中に住すれば、聲聞、辟支佛に勝るるが故なり。較量勝に三種あり。一には願勝、二には修行勝、三には果利益勝なり。何をか願勝といふや。所謂る十大願なり。

經に曰く、菩薩は是の如く菩薩の歡喜地に安住すれば諸の大願を發して是の如きの大方便を起し、是の如きの大行成就す。所謂無餘の一切の諸佛を、一切供養し、一切恭敬するが故に、一切種具足し、上深信清淨にして、廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切劫數の一切の佛の成道の數を盡して、大いに供養し恭敬して休息有ること無けん。

論に曰く、是れ初の大願なり。無餘とは三種あり。一には一切の佛の無餘、二には一切の供養の無餘、三には一切の恭敬の無餘なり。一切の佛とは三種あり。一には應身佛、二には報身佛、三には法身佛なり。一切の供養とは三種あり。一には利養の供養、謂はく衣服臥具等なり、二には恭敬の供養、謂はく香華旛蓋等なり、三には行供養、謂はく、修行信戒行等なり。一切の恭敬とは三

種の恭敬あり。一には給侍の恭敬、二には迎送の恭敬、三には修行の恭敬なり。是の故に願を作して供養し恭敬す、經に「所謂無餘の一切の諸佛を、一切供養し、一切恭敬するが故に」といへるが如し。一切種具足すとは〔一〕無量にして〔二〕種種に、復た〔三〕勝事等をもつて供養するが故なり。上深信の清淨とは增上の敬重の故なり、菩提に廻向せんことを願ひ決定して信ずるが故に。廣大なること法界の如しとは〔四〕一切の餘の善根の中にて勝るが故なり。究竟なること虛空の如しとは無常の愛果、無量の因なるが故なり。未來際を盡すとは此の因は涅槃の常果を得るが故なり。一切の劫數、一切の佛の成道の數「を盡して」大いに供養し恭敬して休息あることなきが故に。此の初願の中に六種の大あるが故に名けて大願と爲す。一には福田大、經に「所謂る無餘の一切の諸佛を、一切供養し、一切恭敬するが故に」といへるが如き故に。二には供事大、經に「一切の種具足す」といへるが如き故に。三には心大、經に「上深信清淨なり」といへるが如き故に。四には攝功德大、經に「廣大なること法界の如し」といへるが如き故に。五には因大、經に「究竟なること虛空の如し」といへるが如き故に。六には時大、經に「未來際を盡す」といへるが如き故に。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切の諸佛の說きたまふ所の法輪を皆悉く受持するが故に、一切の佛の菩提を攝受するが故に、一切の諸佛の敎化したまふ所の法を皆悉く守護するが故に、廣大

【一】無量とは數量の多きこと。
【二】種種とは種類の多樣なること。
【三】勝事とは品質の精好なること。此の三要を具備するを具足といふなり。
【四】凡夫二乘等の善に勝る。

なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數、一切の佛の成道の數を盡して、正法を攝護して休息有ること無けん。

論に曰く。第二の大願に三種の法あり。「一切の諸佛の說きたまふ所の法輪を皆悉く受持す」とは所謂る教法修多羅等を書寫し、供養し、讀誦し、受持し、他の爲に演說するが故なり。「一切の佛の菩提を攝受す」とは所謂る法を證するなり。三種の佛の菩提の法を證す、此の證法を攝受して教化し轉受するが故なり。「一切の諸佛の教化したまふ所の法を皆悉く守護す」とは所謂る修行の法なり。修行の時に於て諸の障難あるを攝護し救濟するが故なり。復た三種の(五)成就と名く。一には諸佛の說きたまふ所の修多羅等の阿含の次第に於て、法輪をして斷せず成就せしむるが故に。二には(六)三種の正覺を證して證を得ること成就するが故に。三には修行乃至如實の修行にて正覺成就するが故に、是を三種の成就と名く。三種の佛の菩提とは聲聞、辟支佛も亦名けて佛と爲すが故なり。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切の成佛は無餘の一切の世界の住處に「於てし」兜率天より來下し、入胎し及び胎中に在り、初生の時、出家の時、佛道を成ずる時、轉法輪を請ふ時、大涅槃に入るを示す時、我れ爾の時に於て盡く往きて供養し法を攝する首と爲り、一切處に一時に成じ、一時に轉ずる

【五】行德相應するを成就といふ。

【六】三種の正覺とは聲聞と緣覺と菩薩の正覺を云ふ。

が故に。廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數、一切の佛の成道の數を盡し、盡く往きて法を攝して休息有ること無けん。

論に曰く、第三の大願にして、「一切の成佛は無餘の一切の世界の住處」とは一切の應〔身〕佛無邊にして遍く一切世界の住處に滿つるが故なり。何等の世界の諸佛の住處に隨ふも（七）應感相順して衆生見たてまつるが故なり。「兜率天より來下し乃至、大涅槃に入ることを示す時、我れ爾の時に於て盡く往きて供養し法を攝する首と爲る」とは、彼の衆生の（八）佛を供養する方便に隨ひ、如來の說きたまふ所の攝法を以て方便とし、功德、智慧、助菩提の法を集むるが故なり。「一切處に一時に成じ、一時に轉ず」とは前後にあらざるを示すが故なり。何が故に彼の處住を示現して、色、無色の處に在らざるや。（九）此の難處より來るは我が爲めにあらざるが故に、輕心を起して恭敬を生ぜず、此等を遮せん爲めの故なり。何が故に他化自在天等に住せざるや。如來には力ありて能く勝處に生ずるも（一〇）捨てて生ぜず、衆生を念ふが爲めの故に、來りて兜率に生ず。是の如くして大恭敬の心を生ずるが故

【七】應感相順。佛は機に應じて化を示し、衆生之を感見するを應感といふ。

【八】衆生に隨はんが爲に、自ら佛を供養して他をして己を學ばしむ、故に方便といふ。

【九】色、無色の二界は長壽天にして、敎化を布くも發心する者なし、敎化行はれざれば成佛するを能はず、此の故に後に此の世界に下るも、佛は難處を避け此に來りて、成佛せるものにて、我等の爲にあらずとなし、輕心を起して恭敬せざるべしとの意なり。

【一〇】若し他化天等の勝處に生ぜば、樂を貪りて生じたりとの念を起さしめて敬心を生ぜしむる所以に非ず、又下劣の天に生ぜば、歡樂微劣にして

なり。何が故に人中に〔來りて〕上天の樂を捨つるや。我等を愍むが故に、來りて人中に生る、増上の敬重心を生ぜしめんが故なり。何が故に處胎すや。〔二〕同生を示現する増長の力の故なり。何が故に自ら正覺を成じて餘佛の教化に非ざるを示すや。丈夫力の成就を現はす、他に因りて菩提を得るに非ざるが故なり。何が故に大涅槃に入ることを示すや。懈怠の衆生をして〔三〕勤心に修道せしめんが爲めの故なり。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切菩薩の所行は廣大無量にして不雜、諸波羅蜜の攝する所、諸地の淨く生ずる所の、諸の助道の法。總相、別相、同相、異相、成相、壞相。一切菩薩の所行の如實の地道と及び諸波羅蜜の方便業とを說き、一切を教化して其をして受行し心に増長することを得せしめんが故なり。廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數と行數とを盡して、増長して休息有ること無けん。

論に曰く、第四の大願なり。心に増長を得るとは何等の行を以て心を増長せしむるや。一切の菩薩の所行は一切を教化し其をして受行して心に増長を得せしむるが故なり。彼の菩薩の行に四種あ

捨て易きが故に下生せりとの念を起さしめ敬意を増さず、此故に中間の兜率天に住すとの意なり。

【二】佛も衆生も同じく胎生なれば、衆生も佛と同じく佛道を成ずることを得べしとの増長力（奮發心）を生ぜしむ。

【三】佛久しく住すれば、衆生は常に見て難値の想を起すこと能はず、故に自ら懈怠するに至るべし、此の故に入滅を示して勤修せしむ。

り。一には種種、二に體、三には業、四には方便なり。此の四種を以て教化し、其をして受行せしむ。何者か是れ菩薩の行の種種なるや。(一三)世間の行に三種あり。(一四)廣とは初地より乃し六地に至る。(一五)大とは七地。(一六)無量とは八地より乃し十地に至る。(一七)不雜とは法無我の平等觀にして出世間の智なるが故に、經に「一切の菩薩の所行は廣大無量にして不雜なり」といへるが如き故に。(一八)體とは經に「諸の波羅蜜の所攝なり」といへるが如き故に。(一九)業とは經に「諸地に淨く生ずる所の、諸の助道の法といへるが如き故に。(二〇)方便とは經にいへるが如く(二一)總相、別相、同相、異相、成相、壞相との故に、一切の菩薩の所行の如實の地道と及び諸の波羅蜜の方便業とを說く」との故に。

經に曰く、又大願を發す。所謂無餘の一切の衆生界。有色、無色、有想、無想、非無想、非想非非想、卵生、胎生、濕生、化生、三界所繫の雜入の六道、一切の生處、名色の所攝。一切の衆生界を教化し成就せんが爲めに、諸佛の法に信入せしめんが故に、一切世間の數道を斷ぜんが故に、一切

【一三】世間と出世間と分つに二義あり、一に位に約して云へば、地前を世間と爲し、地上を出世となす、二に義に隨はば、敎道を世となし、證道を出世と爲す。

【一四】初地より二地に至るまでは一行の中に一切を具備するが故に廣といふ。

【一五】七地には一切の行の中に一切を具備するが故に大といふ。

【一六】八地以上は法は流水の如く、念念に深く無量の佛境界に入るが故に無量と稱す。

【一七】不雜とは世間有漏の法を雜へざるの義。

【一八】體とは行體なり。

【一九】業とは諸地の修業なり。

【二〇】六相門に於て、一一切を成じ、一切一を成じ、成壞善巧なるを方便といふ。

【二一】總相別相等の六相の解釋は前に在り。

智智の處に住せしめんが故に、廣大なること法界の如く、究竟なること虚空の如く、未來際を盡し、一切の劫數、一切の衆生界の數を盡して、一切衆生を敎化して、休息有ること無けん。

論に曰く、第五の大願は衆生を敎化せんが故なり。何者か是れ衆生なる。何の義の爲めの故に化すや。一切の衆生に六種の差別あり。一には麤細の差別、二には生依止の差別、三には不淨淨處の差別、四には苦樂の差別、五には自業の差別、六には自體の差別なり。何をか(二二)麤細の差別といふ。麤とは(二三)色有るをいひ、細とは色無きをいふ。(二四)色の中の麤とは想有り、細とは想無きをいふ。(二五)無色の中の麤とは非無想をいひ、細とは非想、非非想をいふ。是れを麤細の差別と名く、經に「有色、無色、有想、無想、非無想、非想非非想」といへるが如き故に。生依止の差別とは經に卵生、胎生、濕生、化生」といへるが如き故に。(二六)化生とは云何んが依止するや。(二七)業に依止して生ずるが故なり。不淨淨處の差別とは經に「(二八)三界の所繫」といへるが如き故に。苦樂の差別とは種種の身の故

【二二】果報の相に就て麤細の差別を分つ。

【二三】色とは質礙の義にして形體あるをいふ。

【二四】色界十八天の中無想天を除く外は有想也。無想天は廣果天と同處にして外道は無想定を修して此天に生れ無心の果報を得て究竟涅槃と爲す。

【二五】無色界には總て形體なく唯識のみありて住す。此に四天あり、前三（空無邊處、識無邊處、無所有處）は非無想にして麤、第四の非想非非想處は細なり。非想といふは麤想無きをいふ。

【二六】胎卵濕の三生は其の生るるに依止する所あれば依止の差別なるも、化生には依止する所なし、何ぞ依止の差別に攝するや、又何に依止するやとの意なり。

【二七】業力の因に依止して生ずとの意。

【二八】上界は淨、欲界は不淨なり。

に、經に「(二九)雜入の六道と」いへるが如き故に。(三〇)自業の差別とは、經に「一切の生處」といへるが如き故に。(三一)自體の差別とは、經に「(三二)名色の所攝」といへるが如き故に。是れを衆生と名く。何の義の爲めに化すといはば三義の爲めの故なり。一には諸佛の說きたまふ所の法の中に信入せしめんが爲めなり。經に「一切の衆生界を敎化し成就して諸佛の法に信入せしめんが爲の故に」といへるが如し。二には已に佛法の中に入れるものを二乘の菩提に入らしめんが故なり、經に「一切世間の(三三)數道を斷ぜんが故に」といへるが如し。三には已に二乘の菩提に入れるものを無上の菩提に入らしめんが故なり、經に「一切智智の處に住せしめんが故に」といへるが如し。

經に曰く、又大願を發す。所謂る無餘の一切の世界は廣大無量にして、麤細亂住し倒住し正住して、帝網の差別の如し。この十方世界の無量の差別入を皆現前に知らんが故に、廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數と一切世界の數とを盡して、信入して休息有ること無けん。

論に曰く、第六の大願なり。無餘の一切の世界といふに三種の相あり、隨つて是の如きの世界の

【二九】大體に就て云へば上天を樂となし三惡道を苦となし人界と修羅道とは苦樂を兼ね、苦樂相雜る故に雜入といふ。

【三〇】業因に種種の差別あるが故に果報も亦種種無量にして一切の生處同じからず。

【三一】名色を以て報と爲す。自報の體なるが故に自體の差別といふ。

【三二】五蘊の中色蘊を色(物、卽ち形體)とし他の四蘊(受、想、行、識)を名となす、形體なき心法なれば只名に依りてのみ之を辯ずるが故に名といふ。

【三三】世間には五趣(又は五道)の差別あるが故に數道といふ

智に入りて皆現前に知る。一には一切の相、二には眞實義の相、三には無量の相なり。一切の相とは經に「廣大無量、乃至正住す」といへるが如き故に。廣大無量とは一千世界、二千世界、三千世界の故なり。細とは（三四）何等の世界に隨ふ（三五）意識身の故に。麤とは何等の世界に隨ふ意識身の故なり。亂住とは次第して住するに非ざるが故なり、倒住とは舍宅を造らずして住するが故なり、正住とは舍宅を造りて住するが故なり。是を一切の相と名く。（三六）帝網の差別の如しとは眞實義の相の故なり。（三七）業幻の作なるが如き故なり、無量の相とは十方世界の無量の差別（三八）入の故に、（三九）無量の相なるが故なり。眞實義の相とは（四〇）唯智のみ能く知る、餘相は現に見るべきが故に。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切の佛土は一佛土、一佛土は一切の佛土、一切の國土平等にして淸淨なり。一切の佛土は神通莊嚴し、光相具足して、一切の煩惱を離れ、淸淨道を成就し、無量

【三四】所住の衆生の心身に麤細の別あるを前に說くが如し。衆の心身の細なるは其の世界も亦細なり、心身麤なれば其の世界も亦麤なり。三界の中にては、無色界は細、下二界を麤となす。

【三五】意識身とは心と身と也。

【三六】帝網とは帝釋天の羅網を喩とし、網の無量の寶珠が互に相映じて障へず重重無盡に映現するの義に依りて、圓融無礙の義を示す。廣大無量の世界あるも、其實相は一處の中に多くの世界ありて、鎔融無礙なりとの意なり。

【三七】業幻とは幻術にて種種の作業を僞し、火處に水を見、大處に小を見る等の如く、各自性なきをいふ。

【三八】入とは處の義。

【三九】十方の國土は形狀各異り一處に就て無量といふに非ず遍く十方に於て無量の差別あるを無量の相といふ。

【四〇】第二の眞實義の相は理なれば唯智の所知なるも、餘の二相は現前に見ることを得との意なり。

の智慧の衆生ありて、悉く其の中に滿つ。佛の上妙なる平等の境界に入るが故に、諸の衆生の心の樂ふ所に隨つて爲めに示現するが故に。廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數と佛國土の數とを盡して、一切の佛土を淸淨にして休息有ること無けん。

論に曰く、第七の大願なり。淨き佛の國土の相に七種あり。一には（四一）同體淨、經に「一切の佛土は一佛土、一佛土は一切の佛土なり」といへるが如き故に。二には（四二）自在淨、經に「一切の國土は平等にして淸淨なり」といへるが如き故に。三には（四三）莊嚴淨、經に「一切佛土は（四四）神通にて莊嚴し、光相具足す」といへるが如き故に、光明にて莊嚴し。（四五）衆寶等にて莊嚴せるが故なり。四には（四六）受用淨、經に「一切の煩惱を離れ、淸淨の道を成就す」といへるが如き故に。五には住處衆生の淨、經に「無量の智慧の衆生有りて悉く其の中に滿つ」といへるが如き故に。六には（四七）因淨、經に「佛の上妙なる平等の境界に入るが故に」といへるが如し。七には

【四一】同體とは諸の佛土は皆法性土を以て體と爲すが故に一多相入無礙なり，又一は多を以て體となし、多は一を以て體となすが故に同體といふ。

【四二】自在淨とは寶珠淸淨にして美惡共に自在に其相を現ずるが如きをいふ。相淨（衆寶にて莊嚴し諸の瑕穢なき淨相）の佛土は彼此別異なるも，自在淨の佛土は十方齊同なるが故に平等といふ。

【四三】莊嚴淨とは卽ち淸淨なり。

【四四】神通莊嚴とは小に大を容れ、大に小を容る等神變自在なるをいふ。光明莊嚴とは寶光相照して闇冥なきをいふ。

【四五】衆寶莊嚴とは諸寶珠にて集成せるをいふ。

【四六】受用淨とは此國土を受用する利益に就ていふ。

【四七】因淨とは佛土を生ずる因に就ていふ。之に二あり。布施、持戒等の行業と淨土三昧の法門等の德業となり。

【四八】果淨、經に「諸の衆生の心の樂ふ所に隨つて爲めに示現するが故に」といへるが如し。これ智の神力等を顯はすが故なり。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切の菩薩は、同心同行なるが故に、共に善根を集めて怨嫉なきが故に、一切の菩薩は平等に一觀するが故に、常に諸佛菩薩に親近して捨離せざるが故に、意に隨つて能く佛身を現ずるが故に、自ら心の中に於て悉く能く諸佛の神力と智力とを解知するが故に、不退にして隨意なる神通を得るが故に、悉く能く一切の世界に遊行するが故に、一切の佛會に皆身相を現ずるが故に、一切の生處に普く其の中に生ずるが故に、不可思議なる大乘を成就するが故に、具足して菩薩の行を行ずるが故に、廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數と一切の行數とを盡して大乘の道に入りて休息有ること無けん。

論に曰く、【四九】第八の大願なり。【五〇】餘乘を念ぜざるが故に、經に「一切の菩薩は同心同行なるが故に」といへるが如し。菩薩の行に十種あり。一には共に善根を集めて怨嫉無きが故に。二には一切の菩薩は平等【五一】一觀なるが故に。三には常に諸佛菩薩に親近して捨離せざ

【四八】果淨とは前の因に對して果を明す。果に二あり、一に因所生の果、前の相淨の佛土是れなり、二に所示現の果、機に隨つて示現する佛土、前の自在淨なり。經文は之に出る。

【四九】前來の七願は行方便、以下の三願は行修純熟なり。後の三願は別して論ずれば初は自利、次は利他、後は自利利他の得果。

【五〇】一切の菩薩は共に一佛乘に趣向する外、餘乘を念ぜざるなり。

【五一】諸の菩薩は眞如觀に依りて平等を證し、觀心に別異なきが故に一觀といふ。

るが故に。四には意に隨つて能く佛身を現ずるが故に。五には自ら心中に於て悉く能く諸佛の神力と智力とを解知するが故に。六には不退隨意の神通を得るが故に。七には悉く能く一切の世界に遊行するが故に。八には一切の佛會に皆身相を現ずるが故に。九には一切の生處に普く其の中に生ずるが故に。十には不可思議なる大乘を成就するが故に、具足して菩薩の行を行ずるが故なり。中に於て初めの句は功德の行を顯はすが故に、第二は寂靜の等觀に住するが故に、第三は聚集して佛法を解說し論ずるが故に、第四は心に隨つて成佛を示現するが故に、第五は自ら勝心を發して如來の法身を念ずるが故に、第六は常不退の神通を得るが故なり。餘の四は通業を以て名を得。一には(五二)餘の世界に往き、二には(五三)自餘の異身を示現し、三には(五四)同じく生往するが故に、四には不可思議なる大乘に入るが故なり。

經に曰く。又大願を發す。所謂る不退輪に乘じて菩薩の行を行ぜんが故に、身口意の業の作す所空しからず、衆生の見る者は必定して佛法を得るが故に、我が音聲を聞けば卽ち眞實の智慧を得るが故に、心に喜び恭敬すれば卽ち煩惱を斷ずるが故に、藥樹の王の如き身を得るが故に、如意寶の如き身を得るが故に、大菩薩の行を行ずるが故に、廣大なること法界の如く、究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切の劫數と一切の行數とを盡して、作す所の利益空しからず休息有ること無けん。

【五二】一身多刹に遊化するの義。

【五三】多身多處に示現するの義。異身十方に遊化し、機の感見に隨つて、種種に示現するをいふ。

【五四】同類生を示す。

論に曰く、第九の大願は不空にして菩薩の行を行ずるを顯はす。復た菩薩の行を行ずるは（五五）不退輪に乘じて菩薩の行を行ずるを顯はすが故なり。中に於て不空に二種あり。一には作業必定して空しからず。身口意の業の作す所空しからざるが故なり、是の如く次第して三句の説は應に知るべし、「衆生の見る者は卽ち必定して佛法を得るが故に」とは身業の不空を明す。「我が音聲を聞けば卽ち眞實の智慧を得」とは口業の不空を明す。「心に喜び恭敬すれば卽ち煩惱を斷ず」とは意業の不空を明す。二に利益を作して空しからず。一切の衆生に二種の（五六）苦あり。一には種種の諸苦、二には（五七）貧窮の苦、是の二を對治するは、經に「（五八）藥樹王の如き身を得るが故に」といひ、（五九）如意寶の如き身を得るが故に」といへるが如し。

經に曰く、又大願を發す。所謂る一切世界の處に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんが故に、一凡夫道に於て、一切の凡夫道の處を離れず、身初めて生れ、道場に坐して佛道を成じ、法輪を轉じて衆生を度することを示し、大涅槃を示す。諸佛の境界の大神通と智力とを現じ、一切の衆生界の應に度すべき所の者に隨ひ、念念の中に於て、佛道を得るを示し、諸の衆生を度して苦惱を滅するが

【五五】不退輪とは身口意の三業を三輪といふ。惡染を摧破し下より轉じて、上に趣かしむるが故に輪といひ、其の益用滅退なきが故に不退の輪と名く、此に依りて行を起すを乘ずといふ。

【五六】疾病等の逼迫の苦をいふ。

【五七】順緣不足の苦なり。

【五八】藥樹王の枝葉華果皆病を除く効能あるが如く、種種の逼迫の苦を對治する身を得との意。

【五九】如意寶珠は意に隨つて、種種の財寶衣服飮食等を出生す。是の如き身を得て、貧窮の苦を對治す。

故に。一の三菩提を以て遍く一切法の涅槃性の如きを知るが故に。一音の說を以て一切衆生の心をして皆歡喜せしむるが故に。大涅槃を示して菩薩の所行を斷せざるが故に。大智慧地を示して一切法を發起するが故に。法智通と如意の神通と幻通とをもつて一切の世界に遍きが故に。廣大なること法界の如く究竟なること虛空の如く、未來際を盡し、一切劫の數と三菩提を成ずる數とを盡して、大智慧と大神通等とを求めて休息有ること無けん。

諸の佛子よ、菩薩は是の如く菩薩の歡喜地に安住して諸の大願を發し、是の如きの大方便と、是の如きの大行とを起すは十願門を以て首を爲す、是の如き等の滿足せる十百千萬阿僧祇の大願を生ず。是の菩薩は菩薩の歡喜地に住して是の如き等の願を起す。

論に曰く、第十の大願は大乘の行を起す。云何んが（六〇）大菩提なる。云何んが（六一）作業なる。大菩提とは經に「阿耨多羅三藐三菩提を成ずるが故に」といへるが如し。作業とは七種あり。一に正覺を示す業、二に實諦を說く業、三に證し敎化する業、四に種種に法を說く業、五に佛種を斷せざる業、六に法輪復住の業、七に自在の業なり。初めの業とは一凡夫道に於て一切の凡夫道の處を離れずといふより大涅槃を示すといふに至るまでの故に。一凡夫道とは一閻浮提の義なり、（六二）閻浮提の凡夫道とは化すべき

【六〇】菩提の自體を明かす、即ち自行の果なり。

【六一】菩提の作業を明かす、即ち利他の果なり。

【六二】閻浮提（Jambudvīpa）。須彌四州の一にして須彌山の南方に住し、人壽百歲にして中夭の者多く、苦樂相半して發心修行するは本州を第一となす。故に諸佛は此の州にのみ出現すといふ、是れ即ち吾等の住する世界のこと。

衆生の住處を名けて凡夫道と爲す。第二の業とは(六三)「諸佛の境界の大神通と智力とを現す」といへるが故に、「一切の衆生界の應に度すべき所の者に隨つて、念念の中に於て佛道を得ることを示し、諸の衆生を度して、苦惱を滅す」といへるが故に、諸の世界の一切の化すべき者に隨ひ、心に隨つて佛身を示現す。佛身を示現すとは諸の(六四)難處を除きて、(六五)彼彼の勝處に生じ、苦を除き集を斷じ滅を證し道を修するとを示す。第三の業とは(六六)一の三菩提を以て法無我を觀じて、一切法の性淨涅槃を證し、衆生をして信解せしむるが故に。第四の業とは一音聲を以て種種の信解に隨つて化すべき衆生は一時に皆心を歡喜せしむるが故に。第五の業とは大涅槃を示現して菩薩の所行の力を斷ぜざるが故に。第六の業とは(六七)佛智地に復して一切の修多羅等の說く所の法と軌則とを失はざるが故に。第七の業に

【六三】諸佛の境界とは八相成道し、說法して衆生を度するは、唯佛の所爲なれば、之を佛境界と名く、更に別開して神通(八相成佛)と智力(法を說いて苦を滅す)となす。

【六四】難處とは佛を見ず、法を聞くことを得ざる處をいふ。是に八種あり、三惡趣は苦劇しくして法を聞くことを得ず、長壽の天界と北鬱單越州(須彌の北州)とは長壽にして快樂多きが故に却て發心の心なく、其の他の處に在るも盲者聾者は法を聞くことを得ず、又世智辯聰のものは輕薄にして法を聞かず、其の他佛前佛後に生を受くるものは佛に遇ふことを得ず、之れを八難處と稱す、此處には佛身を示現せざるが故に之れを除くとの意なり。

【六五】彼彼の勝處とは八難處を除く其他の種種の勝處といふ意、難處に對して佛の示現する處を勝處といへるなり。

【六六】一の三菩提とは、一極無二の正覺の智といふ義、二乘に簡ぶが故に一といふ。

【六七】佛の滅後に諸の聖弟子に敎法を傳證して、佛法を住持せしむるが如きを佛種不斷の業をいふ。

【六八】法智通といふは一切法を觀ずるに性相無きが故に。如意の神通とは自身に生住滅の【六九】修短を現じ、心に隨つて自在なるが故に。【七〇】幻通とは外事を轉變して意に隨はざることなき故なり。初めの法智通は世間に住せざるが故に、如意の神通と幻通とは涅槃に住せざるが故なり。何が故に唯だ此の十大願を說くや。初めの願には功德の行滿足するが故に、第二の願には智慧の行滿足するが故に、次の五願は衆生を敎化せんが爲めの故に、一は何の身を以てし、二は何の心を以てし、三は何者か衆生、四は衆生は何の處に住し、五は自身は何の處に住して、能く衆生を敎化するやを示す。後の三願は自身を顯はす、一には地の校量して勝れたることを得るが故に、二には菩薩地盡の校量して勝れたることを得るが故に、三には一切地盡の究竟なることを得るが故なり。此の三は如實に衆生を敎化することを示現するが故なり。「諸の大願を發す」とは心に隨ひて義を求むるが故なり。「是の如き大方便を起す」とは彼の所作の方便の勇猛を成ずるが故なり。「是の如きの大行」とは彼の所作の行成就するが故なり。菩薩は此の地に住し、漸次に久しく習すれば此の三行を起す。一時に非ざるが故に。何を以ての故に。此の十大願は一一の願の中に百千萬阿僧祇の大願有りて、以て眷屬と爲るが故なり。經に「諸の佛子よ、菩薩は是の如く菩薩の歡喜地に安

【六八】法智通は自在の所依にして、法智にて理を照すが故に世間に住せず、餘の二通は世間に應現して化益するが故に涅槃に住せざるなり。

【六九】修短とは長短の義。出生するに變化出沒自在なるを如意神通といふ。

【七〇】意のままに外事を轉變するを幻通といふ。

住して諸の大願を發し、是の如きの大方便と、是の如きの大行とを起すは十願門を以て首と爲し、是の如き等の滿足せる十百千萬阿僧祇の大願を生ず」といひ、「是の菩薩は菩薩の歡喜地に住して是の如き等の願を起す」といへる如き故なり。何が故に大願と名くるや、(七二)光明善根轉た勝れ增廣なるが故なり。此の菩薩の願の勝れたるとを校量するに、二種ありて聲聞辟支佛に勝る。一には常に勤めて無量の行を修習するが故に、二には一切の衆生と同じく行ずるが故なり。同じく行ずとは「次の」十盡の句の示現する所なり。

經に曰く、十の盡句を以て諸の大願を成ず。何等をか十と爲す。所謂る一に衆生界の盡、二に世界の盡、三に虛空界の盡、四に法界の盡、五に涅槃界の盡、六に佛出世界の盡、七に如來智界の盡、八に心所緣界の盡、九に佛境界智入界の盡、十に世間轉、法轉、智轉界の盡なり。衆生界盡くるが如き、我が願乃ち盡きん。世界の盡の如く、虛空界の盡の如く、法界の盡の如く、涅槃界の盡の如く、佛の出世界の盡の如く、佛智界の盡の如く、心所緣界の盡の如く、佛の境界の智入界の盡の如く、世間轉、法轉、智轉界の盡の如く、若し彼の界盡きなば我が願乃ち盡きん。是の如く衆生界の盡は盡きず。我が此の善根も亦盡くべからず。世界の盡も盡きず、虛空界の盡も盡きず、法界の盡も盡きず、涅槃界の盡も盡きず、佛の出世界の盡も盡きず、如來界の盡も盡きず、心所緣界の盡も盡きず、佛の境界智入界の盡も

【七二】眞證の善根は出障清淨なるを光明といふ。次第漸勝を增といひ、增長して佛地に向ふが故に願と名く。

盡きず、世間轉、法轉、智轉界の盡も盡きず、我が此の諸願善根も亦盡くべからず。

論に曰く、(七二)中に於て、衆生界の盡は是れ(七三)總、世界盡より乃至智轉界の盡は是れ別なり。何等か是れ衆生界なる、衆生界盡なるが故に。何の處にか住する、世界盡なるが故に。所有の虛空界は、虛空界盡なるが故に。何の法を說いて敎化するや、(七四)法界盡なるが故に。(七五)化に隨ひて衆生を何の處にか置く、涅槃界盡なるが故に。(七六)佛の出世界盡なるが故に。何の方便善巧を以て「出現」するや、(七七)如來の智界盡なるが故に。復た隨つて(七八)所緣の心緣界盡なるが故に。復た隨つて何の界を以て「化」するや、(七九)佛の境界智入界盡なるが故に。此の事已に說けり。盡とは示現して斷盡せず、念念の盡に非らざるが故なり。此の九種の盡に略して(八〇)三種を說く。三轉は此の(八一)十盡句の增上力を示現するが故に。諸佛は此の力を以て

【七二】次に衆生界、世界等の十盡を擧げて前說諸大願の無盡なることを示す。盡とは統攝して餘無き義にて、無盡廣多の意なり。

【七三】前の十願は皆衆生の爲なれば衆生界を總と爲し、餘の九は別別に衆生を濟度する義を集成するが故に別といふ。

【七四】法界とは衆生の起す所の善惡等の法なり、之を說いて以て衆生を敎化するなり。

【七五】敎化して何の處に導くやと其の究竟目的を問ふ。

【七六】涅槃の用を說いて佛の出世界といふ、佛の出現することを示すものにて世間に對して出世といふに非ず。

【七七】如來智は佛の方便化他の智なり。

【七八】衆生の心に所緣あることを知るの意にて、是に由りて前の如來智起る。

【七九】是れ度生の法を示す。法界の實性は佛の境界にして、佛の智慧の所入なるが故に佛境界智入界といふ、此の境を以て衆生を度せんと欲するのみ。

【八〇】後の三轉は略して前の九義を攝す、謂く世間轉に前の衆生界、世界、虛空界心の所緣界を攝し、法轉に前の法界涅槃界・佛境界智を攝し、

常に衆生の爲めに利益を作すが故なり。是の如く已に願の校量して勝れたることを說けり、云何んが行の校量して勝れたる。

經に曰く、諸の佛子よ、菩薩は決定して是の如きの諸の大願を發し已れば則ち調順の心、柔軟の心を得。是の如くなれば則ち信を成ずる者にして諸佛如來と本所行の入とを信じ、諸の波羅蜜を集めて增長することを得、善く諸地を成就す。無畏の力、不共の佛法の不壞を具足するが故に、不可思議の佛法は、中なく邊なき如來の境界より起り、無量の行門には、諸の如來の境界入にして、信は果を成就す。要を擧げて之を言はば、一切の菩薩の行より乃至如來の智地の說加を得るを信ずるが故に。

論に曰く、〔八二〕「是の如きの諸の大願を發し已れば則ち調順の心を得」とは、彼の諸の善根の中に〔八三〕自在の勝を得るが故なり。〔八四〕「軟柔の心」とは勝樂の行を得るが故なり。〔八五〕是の如くなれば則ち信を成ずる者なり。〔八六〕中に於て〔八七〕本行の入」は菩薩の行に從りて乃至成菩提の覺に入るが故な

智轉には佛佛出世と如來智とを攝す。轉とは世法及び智は展轉して前の無盡を攝して、無窮なるが故なり、轉も亦無盡の意なり。

【八一】以下十盡句の功能を明かす。十盡なるが故に十願無盡なり、十願無盡なるが故に諸佛は衆生の爲に常に利益をなして窮盡あることなし。

【八二】初に大願。心に熏じて心を調暢ならしめ、能く行を起すに堪ふることを明かす。

【八三】起さんと欲すれば卽ち起るが故に自在といふ。

【八四】內證神心に適して剛强なきが故に柔軟の心と名く、此の二心は諸行の體なり。

【八五】行成の人を擧げて正しく所修の行を顯はす。

【八六】以下廣く信相を明かす。

【八七】本行入とは因を信ず、成菩提の覺とは果を信ずる也。是れ經文の諸佛如來を釋す。

り。中に於て菩薩行の所攝の（八八）本行入を信するに二種の相あり。一には（八九）云何んが菩薩の行、二には（九〇）云何んが次第して成ずるや。經に諸の波羅蜜を集め、增長することを得との故に、善く諸地を成就す」といへるが如き故なり。（九一）此の菩提、所攝の（九二）本行入に六種の勝あり。是の故に信勝る。一には外道、魔怨、聲聞、緣覺の對治等に於て勝る、經に「（九三）無畏、（九四）力、（九五）不共の佛法の（九六）不壞を具足するが故に」といへるが如し。二には不思議の神通力の上勝なり、經に「不可思議の佛法」といへるが如き故に。三には（九七）不雜の深勝、經に（九八）「中なく邊なく如來の境界より起る」といへるが如き故に。四には（九九）一切種智の勝、經に「無量の行門は、諸の如來の境界入」といへ

【八八】菩薩の行は佛を本と爲して能く菩提に入るを本行入と名く、此には因に就て釋するが故に菩薩行を取る。

【八九】行體を問ふ。

【九〇】修成の相を問ふ。

【九一】以下、果を釋す。

【九二】菩提の果は本因行の趣入する所なるが故に、菩提所攝の本行入といふ、前には菩薩行といひて因を標し、此には菩提として果を標す。

【九三】無畏とは佛は四無所畏を以て外道を對治す。外道は邪見にして佛に德なしと言ふ、故に無畏を彰す。行は自他を兼ね、德は智斷を備ふるが故に能く對治するなり。

【九四】力とは佛の十力也、之を以て魔怨を對治す。魔怨は常に人の善を破らんとす、十力堅固にして魔に勝つことを得るが故に能く之を對治す。

【九五】不共の佛法は佛の十八不共法也、之れ二乘を對治す。

【九六】此等の諸德は堅牢にして破ること能はざるを不壞といふ。

【九七】不雜の深勝とは眞如を證する一味平等の智なれば不雜といひ、實性を窮むるが故に深といふ。

【九八】中邊無しとは二義あり、一には生死涅槃に偏局せざるをいひ、二には有無の二想に偏執せざるをいふ。是れ如來の境界にして之に依りて證心現前するが故に起るといふ。

【九九】一切種智とは、世諦を了知する差別智なり。

るが如き故に。五には[一〇〇]離勝、一切の煩惱習は常に遠離せるが故に、經に「信は果を成就す」といへるが如き故に。復た略して彼の菩薩の本行入の示現を說く、經に「[一〇一]要を擧げて之を言はば、一切の菩薩の行より、乃至如來智地の說加を得るを信ずるが故に」といへるが如し。說とは所說なり。加とは證を得るが故なり。此の菩薩の三種の觀は諸の衆生に於て、大慈悲を起す。一に最上第一義の樂を遠離し、二に諸苦を具足し、三に彼の二に於ける顚倒なり。云何んが最上第一義の樂を遠離するや。

經に曰く、諸の佛子よ、彼の菩薩は是の念を作さく、諸佛の正法は是の如く甚深、是の如く寂靜、是の如く寂滅、是の如く空、是の如く無相、是の如く無願、是の如く無染、是の如く無量、是の如く上なり。此の諸佛の法は是の如く得難し。

論に曰く、諸佛の正法は是の如く[一〇二]甚深とは九種あり。一には寂靜甚深、二には寂滅甚深、三には空甚深、四には無相甚深、五には無願甚深、六には無染甚深、七には無量甚深、八には上甚深、九には難得甚深なり。寂靜とは[一〇三]妄計の實有を離るるが故に、妄計正取の故に。寂滅とは[一〇四]法、義ともに定なるが故に。空、無相、無願とは

【一〇〇】離勝とは上來は智德を明かせるを以て次には斷德を明かす、文解し易し。

【一〇一】因と果とを信ずることを總結す。

【一〇二】凡情を超えたるを深といひ、深の極を甚といふ。

【一〇三】諸法は實に無なるを妄に之を計して實有と爲すを妄計の實有といふ。

【一〇四】眞性の體寂なるを法定といひ、眞性の相用の寂なるを義定といふ。寂靜は遮詮（否定）に約し、今定といふは表詮（肯定）に約す。

三障を對治する解脫門の觀なるが故なり。何をか三障といふ。一に(一〇五)分別、二に(一〇六)相、三に(一〇七)取、捨の願なるが故なり。無染とは雜染の法を離るる觀なるが故なり。無量とは算數すべからず、思量すべからざる善根を生ずる觀なるが故に。上とは自利他利の增上智に依る觀なるが故なり。難得とは(一〇八)三阿僧祇劫の證智の觀なるが故なり。云何んが諸苦を具足する。

經に曰く、而も諸の凡夫の心は邪見に墮し、無明癡闇の爲めに其の意識を蔽はれ、常に憍慢の幢を立て、念欲渴愛の網の中に墮在し、諂曲の林に隨順し、常に嫉妬を懷ひて後身の生處の因緣を作る。多く貪欲瞋癡を集めて諸の業行を起し、嫌恨の猛風は罪心の火を吹いて常に熾然ならしめ、所有作業は皆顚倒と相應し欲漏、有漏、無明漏に隨順し、相續して心意識の種子を起す。

論に曰く、(一〇九)而も諸の凡夫の心は(一一〇)邪見に墮すとは邪見に九種あり。一には(一一一)蔽意の邪見、

【一〇五】分別とは妄想心の體なり、空解脫門の對治なり。

【一〇六】相とは分別心に依りて起る虛僞の相、無相解脫門の對治なり。

【一〇七】取捨の願とは妄心か虛僞の妄境に於て違順の情に任せて取捨する希求の念にして、無願解脫門の對治する處也。

【一〇八】菩薩の修行の楷位にて初地に至る迄に一阿僧祇を經、初地より第八地に至る迄に二阿僧祇を經、八地より佛位に達するまでに三阿僧祇を經。乃ち三阿僧祇を經て始めて覺照するを證智の觀といふ、故に是より以降にては未だ得ざるが故に難得といふ。

【一〇九】第二に諸苦を具足することを明かす。

【一一〇】凡情實理に迷ひて、二執に沒し、理外に謬取するを總じて邪見といふ、業、煩惱等に通す。

【一一一】無明の眞心を覆蔽するをいふ。

經に「(二二)無明癡闇の爲めに其の意識を蔽はる」といへるが如き故に、二には(二三)憍慢の邪見、經に「常に憍慢の幢を立つ」といへるが如き故に。三には(二四)愛念の邪見、經に「念欲の渇、愛の網の中に墮在す」といへるが如き故に。四には(二五)諂曲心の邪見、經に「諂曲の林に隨順す」といへるが如き故に。五には(二六)嫉妬行の邪見、經に「常に嫉妬を懷き後身の生處の因緣を作る」といへるが如き故に。六には(二七)集業の邪見、經に「多く貪欲瞋癡を集め諸の業行を起す」といへるが如き故に。七には吹心熾然の邪見、經に「嫌恨の猛風罪心の火を吹いて常に熾然ならしむ」といへるが如き故に。八には(二八)起業の邪見、經に「所有る作業は皆顚倒と相應す」といへるが如き故に。九には(二九)心意識種子の邪見、經に「(三〇)欲漏、(三一)有漏、(三二)無明漏に隨順し、相續して心意識の種子を起す」といへるが如き故に。是の中にて蔽意の邪見と憍慢の邪見と愛念の邪見

【二二】慧明なきを無明といひ、自性愚騃なるを癡といひ、心闇濁なるを闇といふ。

【二三】内に實義を計して自ら高陵なるを憍慢といふ。幢は喩なり。

【二四】愛念とは外の諸法を實有と妄計して貪取するをいふ、未だ得ざるを希求するは念なり。已に得たるを染著するは愛なり。

【二五】諂曲とは詐つて外相を善くし、内に誠實なきをいふ。

【二六】嫉妬とは財を忌み身を忌むをいふ。

【二七】集業とは經意に明かなり。

【二八】前の吹心は思業（意志活動）なり、之より身口の行爲となるを起業といふ。

【二九】若し苦樂の果に望むれば業を正種となすも、若し本性に就て云へば心識を種子と爲す、一切の生死は皆心より起るが故なり。

【三〇】欲漏とは無明を除ける欲界の所有る煩惱をいふ。

【三一】有漏とは色無色界の一切の煩惱（無明を除く）をいふ。

【三二】三界の無明を無明漏といふ。

と此の三の邪見は（三三）法義に依りて妄りに計し是の如く次第す。諂曲の邪見と嫉妬の邪見と此の二の邪見は追求の時に於ける心行の過なるが故なり、嫉とは身に於て邪行を起すが故に、妬とは資財等に於てす。是の故に生生の處は卑賤の中に墮し、形貌鄙陋にして、資生足らざるが故に。第六の集業の邪見は（三四）諸受を受くる時、彼の（三五）二の顚倒の（三六）境界を憎愛するが故に。第七の吹心熾然の邪見は怨恨の時に於て、互ひに相追念して報惡の業を起さんと欲するが故に。第八の起業の邪見は惡を作す時に於て、迭ひに相加害するが故に。第九の心意識の種子の邪見は、善業を作す時に於て、所有る布施、持戒、修行、善根等の業は皆是れ有漏なるが故なり。

經に曰く、三界地に於て復た芽の生ずるあり。所謂る名色共に生じて離れず。此の名色增長し已つて六入の聚を成す、六入を成じ已りて內外相對して觸を生ず。觸の因緣の故に、受を生ず、深く受を樂ふが故に渴愛を生ず、渴愛增長するが故に取を生ず。取增長するが故に復た後有を起す、有の因緣の故に生老死憂悲苦惱有り。是の如く衆生は長き苦聚を生ず。是の中皆空にして我我所を離れ、知無く覺なきこと草木石壁の如く。又亦響の如し。然るに諸の衆生は知らず覺らずして苦惱を受く。

論に曰く、是の中の因緣に三種あり。一には（三七）自相、復た芽の生ずる有りといへるより乃し有

【三三】法義とは法は體に就て云ふ、無明の眞性を蔽ふことなり。義とは差別の義相より起る憍慢と愛念となり。
【三四】諸受とは苦と樂と捨（苦樂の中庸）の三受を云ふ。
【三五】憎愛の二倒なり。
【三六】境界とは違順等の境なり。
【三七】自相とは現在の因緣體狀を明かす。

に至る。二には（二八）同相、所謂生老病死等の過なり。三には（二九）顚倒相、我我所を離るといへる等なり。自相とは三種あり。一には報相、名色は（三〇）阿梨耶識と共に生ず、經に「三界地に於て復た（三一）芽の生ずる有り。所謂る名色共に生ず」といへるが如き故に。「名色共に生ず」とは名色は彼と共に生ずるが故なり。二には彼の（三二）因相、是の名色は彼を離れず、彼に依りて共に生ずるが故に、經に「離れず」といへるが如き故に。三には彼の果の（三三）次第相、（三四）六入より乃し有に至るまでなり、經に「此の名色增長し已つて六入の聚を成じ、六入を成じ已つて內外相對して（三五）觸を生ず、觸の因緣の故に（三六）受を生ず。深く受を樂ふが故に渴愛を生ず、渴愛增長するが故に（三七）取を生ず。取增長するが故に復た（三八）後有を起

【二八】同相とは未來の因緣也。現在に同じきが故に同相といふ。これ現未相對して一應の分類なり。義に隨つて云へば因より生ずる微細の行相は、緣起の自相なれば之を自相といひ、果相の顯彰なるは、緣起の過患にして遍く果位に通ずるが故に之を同相といふ。自體の固有性は自相にして、共通性を同相と爲す。

【二九】顚倒相とは緣起の體は實に空なるも、妄執して實有と爲すをいふ。

【三〇】阿梨耶（Alaya）又は阿賴耶識とは、有情の根本たる識體に名く。

【三一】本識の中の種子を因として名色の果報を生ず、種の芽を生ずるが如し。

【三二】果相たる名色は本識を離れず、卽ち本識の生果作用を因相と名く。

【三三】果相たる名色の細より、麁に次第に發展する相狀を明かす。

【三四】六入とは新譯に六處といふ、眼耳鼻舌身意の六根具備するをいふ。

【三五】根（五官）が對境を緣じて識作用を起す、根境識相對して知覺を起す、之を觸といふ。

【三六】受は受納の義にて、識の對境を受納せんとの心作用なり。

【三七】取とは取著の義にて、煩惱なり。

【三八】後有とは未來に生死する主體なり。

す、有の因縁の故に生老死憂悲苦惱有り。是の如く衆生は長き苦聚を生ず」といへるが如き故に。是の中にて「我と我所とを離る」とは此の二の空なるを示現す。知無く覺無しとは自體無我の故なり。彼の無知無覺は（三九）非衆生數の（四〇）動と不動とを示す、經に「草木石壁の如く、又亦（四一）響の如し」といへるが如き故に、因縁の相似、相類する法なるが故なり。云何んが彼の二に於て顛倒なるや、經に「然るに諸の衆生は知らず覺らずして苦惱を受く」といへるが如き故に。

經に曰く、菩薩は是の如く諸の衆生の苦聚を離れざるを見る、是の故に卽ち大悲智慧を生ず。是の諸の衆生を我れ應に敎化して涅槃の畢竟の樂に住せしむべし。是の故に卽ち大慈悲智慧を生ず。

論に曰く、云何んが諸の苦聚を具し、云何んが最上第一義の樂を遠離するや。此れ先に已に說けり。大慈悲等を示現せんが故なり。

經に曰く、諸の佛子よ、菩薩摩訶薩は是の如きの大慈悲の法に隨順して初地に住在し、深妙の心を以て一切の物に於て悋惜する所無く、智を以て佛の大妙智を求むるが故に、大捨を修行して卽時に所有の施すべきの物を皆悉く能く捨つ。所謂る一切の財穀、庫藏等を捨つ。或は金銀、摩尼、眞珠、瑠璃、珂貝、硨磲、碼碯、生金等を以て捨て、或は寶の莊嚴具瓔珞等を

【三九】非衆生數とは非情物のこと。

【四〇】無知無覺といふは、神我の知覺なきを云へるものなれども、惑ふ者は人の動止を見て知覺有りと謂ふ恐あれば、喩を以て示す。草木を動と爲し、石壁を不動と爲す、動不動共に知覺なし。

【四一】形有りて知なきは草木の如く、聲ありて心無きは響の如し。有情にして知覺なき義を類顯す。

以て捨て、或は象馬、車乘、輦輿等を以て捨て、或は寺舍、園林、樓觀、流泉、浴池等を以て捨て、或は奴婢、僮僕等を以て捨て、或は國土、聚落、城邑、王都等を以て捨て、或は妻子、男女等を以て捨て、或は一切愛する所の事を以て皆悉く能く捨て、或は頭目、耳鼻、肢節、手足、一切の身分等を以て捨つ。是の如きの一切の捨つべきの物を悋惜せず、唯無上の佛智慧を求めんが故に、而も大捨を行ず。是の如く菩薩摩訶薩は初地に住して能く大捨を成ず。

論に曰く、「是の時に於て所有る施すべき物を皆悉く能く捨つ」とは、佛の無上大妙の智を求めんが故なり。是の中にて一切の物とは略して二種あり。一に外、二に內なり。外には復た二種あり。一に所用、二に貯積。經に「所謂る一切の財穀庫藏等」といへるが如き故なり。是の如く次第す、中に於て廣く八種あり、金銀等より乃し一切の愛する所の事に至る。內とは自身の所攝なり。是の外事の捨の中に、初の捨は是れ總、餘の九捨は是れ別なり。二種の喜に依る。一には（四二）藏攝の喜、二には（四三）利益の喜なり。藏攝の喜とは金銀等を謂ふなり。利益の喜とは復た八種あり。一には嚴飾利益の喜、寶の莊嚴等を謂ふ。二には代步利益の喜、象馬等を謂ふ。三には戲樂利益の喜、園林、樓觀等を謂ふ。四には代苦利益の喜、奴婢等を謂ふ。五には自在利益の喜、國土、聚落等を謂ふ。六には眷屬利益の喜、妻子等を謂ふ。七には

【四二】藏攝の喜とは己が庫藏の財寶を以て他を攝して喜ばしむるの義。
【四三】利益の喜とは己を利益する物を施し與へて他を喜ばしむるの義。

(一四四)堅著利益の喜、一切の所愛等を謂ふ。八には(一四五)稱意利益の喜、頭目、耳鼻等を謂ふなり。

經に曰く、菩薩は是の如く大施の心を以て一切衆生を救ふが故に、轉轉して世間、出世間の利益の勝事を推求す。彼れ利益勝事を推求する時、心に疲倦せず。是の故に菩薩は疲倦せざるの心を成ず。不疲倦を成じ已つて、一切の經論に於て心に怯弱なし。是れを一切の經論の智を成ずと名く。是の如く一切の經論の智を成じ已つて善能く應作と不應作とを籌量し、上中下の衆生に於て宜しきに隨ふ。宜しきに隨つて行じ、力に隨ひ、感に隨ふ。是の故に菩薩は世智を成就す。世智を成じ已つて時を知り、量を知り、慙愧を以て莊嚴し、自利利他の道を修習す。是の故に菩薩は慙愧の莊嚴を成ず。是の如きの行の中に、精勤し修行して不退不轉の力を得。是の如くして菩薩は堅固の力を成ず。堅固の力を得已りて、勤行して諸佛を供養し、聞く所の法に隨つて、說の如く修行す。諸の佛子よ、是の菩薩は悉く知り已つて、是の如きの清淨の諸地の法を起す。所謂る信、悲、慈、捨、不疲倦と諸の經論を知ると、善く世法を解すると、慙愧と堅固力と諸佛を供養すると說の如く修行するとなり。

論に曰く、是の中にて、此の世智に依つて宜しきに隨ふ。宜しきに隨つて行ふとは(一四六)論の中に說くが如く、自己の力に隨ひ、彼の能く受くるに隨ふが故なり。慚愧に依りて、時を知り量を知る

【一四四】其他すべて己が情に協ひ堅く愛著する所の物を與へて喜ばしむ。

【一四五】稱意とは頭目耳鼻等の自己の身分は我が意のままに用ひらるるものなれば稱意といふ。

【一四六】論とは地持論の菩提分品に廣く釋す。

とは三種の時を示す。一には（二四七）念時、二には（二四八）日夜の時、三には（二四九）所作必ず得て斷ぜざるの時なり。堅固の力に依るに「是の如きの彼の行の中」とは上に說く所の如く信等の故なり。「精勤を修行す」とは二種あり。一に不退力、行を捨てざるが故に、二に不轉力、精進して息まざるが故に。「諸佛を供養し說の如く修行す」とは二種あり。一には（二五〇）利養の供養、二には（二五一）修行の供養なり。此の十種の行は二種の勝成就を顯はす。一には深心成就、謂はく信と悲慈等となり。二には修行成就、謂はく捨と不疲倦と諸の經論を知ると、善く世法を解すと、慚愧と、堅固力と、諸佛を供養すると、說の如く修行する等となり。中に於て自利の行に依るに謂ゆる信は能く菩薩の行と、及び諸佛の法を信ずるが故に、求めて必ず能く得るが故なり。利他の行に依るに、所謂る慈悲とは能く安穩ならしめ樂を與ふる心なるが故に。捨とは財を以て他を攝する行なるが故に。不疲倦とは自ら法を攝する行なるが故に。「諸の經論を知り、善く世法を解す」とは、法を以て他を攝する行なるが故なり。餘に三行の信等を攝護する有り。一には不著の行、（二五二）慚愧を以て障を對治し、信

【二四七】念時とは修行の始は分に隨つて念念に漸習して未だ相續不斷なること能はざれば念時といふ。

【二四八】日夜の時とは修行進みて心轉た勝れ日夜相續して斷絕せざるに堪ふるの意。

【二四九】修行愈進勝して究竟成就して斷ぜざるをいふ。

【二五〇】香華等を供へて禮拜するが如きは利養の供養なり。

【二五一】佛の教法に隨つて修行するを云ふ、又法供養とも稱す。供養とは他を喜ばしむるの意なれば教法に順うて修行するは佛を供養する上上の者也。

【二五二】慚愧と堅固とは能く前七を護り、供養修行は能く前七を攝す。慚愧に由るが故に護りて惡を離れしめ、堅固力に由りて信善をして退失せざらしむ。

等の不著の行なるが故に。二には不動の行、堅固力、信等有りて動かすべからざるが故に、三には修行、彼の垢清淨の依止の行なり。諸佛を供養して信等の善根を攝するが故なり。是の中に二種の供養に依るが故に、二種の身を得。一には(一五三)上妙の身、見るべき所の者は心に敬重を生じ、利益空しからざるが故に、二には(一五四)調柔の心、自性の善根成就して行法を樂しむが故なり。前に說く所の三十句は信增上等より乃至常に上上の勝道を求むといへるまでは淸淨地の法を得るなり。今此の十句の信等より乃し諸佛を供養すといふまでは盡く是れ障地の淨法なり。

是を修行の較量勝と名く。云何んが果の利益の較量して勝れたるや。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の歡喜地に住し已りて、多く諸佛を見たてまつる。大神通の力と大願の力とを以ての故なり。多百の佛、多千の佛、多百千の佛、多百千那由他の佛、多億の佛、多百億の佛、多千億の佛、多百千億の佛、多百千億那由他の佛を見たてまつる。大神通の力と大願の力とを以ての故なり。是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆して、衣服、飲食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て衆僧を供養し、此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんことを願ふ。此の菩薩は諸佛を供養するに因るが故に、衆生を敎化し利益する法を成ず。是の菩薩は多く二攝を以て衆生を攝取す、所謂る布施と愛語となり。後の二攝法は但信解

【一五三】利供養に由りて上妙の身を得。

【一五四】法供養(修行)に依りて調柔の心を得。

の力を以て行ひ、未だ善く通達せず。是の菩薩は十波羅蜜の中には檀波羅蜜增上し、餘の波羅蜜は修集せざるには非らざれども、力に隨ひ分に隨ふ。是の菩薩は隨所に諸佛を供養し、衆生を敎化し、皆能く淸淨地の法を受行す。是の如くして是の如きの彼の諸の善根を皆薩婆若に廻向せんことを願ふ。轉た復た明淨に調柔に成就して意の用ふる所に隨ふ。諸の佛子よ、譬へば金師の善巧に金を鍊るに數數火に入るるが如し。是の如く是の如くして轉た復た明淨に調柔に成就して意の用ふる所に隨ふ。諸の佛子よ、菩薩も亦復た是の如し。是の如く是の如くして諸佛を供養し、衆生を敎化して皆能く淸淨地の法を修行す。正しく修行し已りて、是の如く、是の如く彼の諸の善根を皆薩婆若に廻向せんことを願ひ、轉た復た明淨に調柔に成就して意の用ふる所に隨ふ。

論に曰く、果の利益の校量して勝れたるに四種あり。一には(二五五)調柔果の利益勝、二には(二五六)發趣果の利益勝、三には(二五七)攝報果の利益勝、四には(二五八)願智果の利益勝なり。調柔果の利益勝とは金は相似の法なり。信等の善法は猶ほ眞金の如し。數數火に入るるとは三種の入あり。一には功德入。佛と僧とを供養するが故に。二に悲心入、衆生を敎化するが故に。三には無上果入、

【二五五】調柔果とは二義あり、一には修施、廻向、化衆生等の行は能く信等を修練して調柔ならしむるをいひ、此の事地中に滿足するを果と名く。二には調柔せらるる信等の十行は布施廻向等に由りて離垢淸淨となるが故に調柔といふ。

【二五六】發趣果とは地滿足し已って更に明了の智解を生じて、能く此地を發して上地に趣向するをいふ。

【二五七】攝報果とは王位の身因行に報いられ、此の地の勝福より生ず。

【二五八】願智果とは內證の願力にて敎智自在なるをいふ。

大菩提に廻向せんと願ふが故なり。「大神通力を以て諸佛を見たてまつる」とは勝れたる神通の力を以て色身の佛を見たてまつるなり。大願の力とは内の正願の力を以て法身佛を見たてまつるなり。多百の佛乃至百千億那由他の佛とは方便善巧して多佛を示現し、多數を顯はすが故なり。供養とは三種あり。一には恭敬の供養、謂はく讃歎等なり、佛の功德を顯はすが故に。二には尊重の供養、謂はく禮拜等なり。三には奉施の供養、謂はく華香、塗香、末香、旛蓋等なり。「諸の菩薩の上妙の樂具を以て」とは是の諸の菩薩の有する所の世間不共の物を具足して一切の衆僧に奉施するが故なり。

云何んが發趣果の利益勝なるや。

經に曰く、復た次に、諸の佛子よ、菩薩摩訶薩は此の菩薩の歡喜地に住し、初地の中の諸相の得果に於て應に諸佛、菩薩、善知識の所に從ひて、地の諸法を成ずることを推求し請問して厭足有ること無かるべし。是の如く菩薩は初地の中に住して、應に諸佛、菩薩、善知識の第二地の中の諸相得果、成地の諸法を推求し請問して厭足有ること無かるべし。是の如く第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地の中の諸相得果も應に諸佛、菩薩、善知識の所に從ひて、推求し請問して十地の法を成じ、厭足有ること無かるべし。是の菩薩は善く諸地の障對治を知り、善く地の成壞を知り、善く地の相を知り、善く地の得修を知り、善く地の清淨分を知り、善く地地の轉行を知り、善く地地の住處を知り、善く地地の校量勝智を知り、善く地の不退轉を得ることを知り、善く一切の菩薩地は清淨にして如

來の智地に轉入することを知る。諸の佛子よ、菩薩は是の如く善く地相を起し、初地に發して意成に住せず、乃至十地に轉入す、障碍なきが故なり。十地の智慧光明を得るを以ての故に、能く諸佛の智慧光明を得。諸の佛子よ、譬へば善巧の導師の如し。多くの人衆を將ゐて彼の大城に向ふに未だ發せざるの時、應に先づ道中の利益諸事を問ひ、復た道中の退患過咎を問ひ、復た道處の中間の勝事を問ひ、復た道處の中間の退患過咎を問うて、道の資糧を具へ、應に作すべき所のことを作し、推求し請問す。未だ初處を發せざるに、是の大導師は乃至善く彼の大城に到るまでのことを知る。未だ初處を發せざる此の導師は能く智慧を以て思惟し、籌量して、諸の資用を具へ、乏しき所なからしめ、正しく衆人を導き、乃至大城に到ることを得、嶮道の中に於て諸の患難を免れ、身及び衆人は皆憂惱なし。諸の佛子よ、菩薩摩訶薩の善巧の導師も亦復た是の如く初地に住して善く地の障對治を知り、乃至善く一切の菩薩地の清淨にして如來の智地に轉入することを知る。爾の時に、菩薩は大福德と助道の資糧と善擇智慧の助道とを具へて、一切の衆生を將ゐて薩婆若の大城に向はんと欲す。未だ初處を發せざるに、應に先づ地道の功德を問ひ、復た諸地の退患を問ひ、復た地の道處の中間の勝事を問ひ、復た地の道處の中間の退患を問うて大功德智慧の資糧を具へ、應に作すべき所のことを作し、應に諸佛、菩薩、善知識の所に從ひて、推求し請問すべし。未だ初處を發せざるに、是の菩薩は善く地の障對治を知り、乃至善く能く薩婆若の大城に到るまでのことを知り、未だ初處を發せざるに、菩薩は是の如く智慧分別し

て大功德智慧の資糧を具へ、一切の衆生を將ゐて、應の如く教化して世間の嶮難惡處を出過せしめ、乃至薩婆若の大城に住せしめ、世間の生死の嶮過の爲めに染せられず。身及び衆生には諸の衰惱なし。諸の佛子よ、是の故に菩薩摩訶薩は常に應に心に疲倦せず、諸地の業、勝智の本行を勤修すべし。諸の佛子よ、是を菩薩摩訶薩の初めの菩薩の歡喜地門に入ることを略說すと名く。廣く說けば則ち無量百千萬億阿僧祇の事あり。

論に曰く、諸相とは諸地の中の所有る諸障、及び對治の相に隨ふが故に、得とは出世間の智を證するが故に、果とは證智の力に因りて世間出世間の智を得るが故なり。成地の諸法とは所謂る信等なり、彼を滿足せんが爲めの故に、五種の方便あり。一には觀方便、二には得方便、三には增上方便、四には不退方便、五には盡至方便なり。觀方便とは障對治の成壞の善巧なり。經にいへるが如く「是の菩薩は善く諸地の障對治を知る」との故に、善く地の成壞を知るとの故なり。十種の地の障對治の故に、名けて十地と爲す。本分の中に說くが如し。是の如く次第に集むるが故に成といひ、散ずるが故に壞といふ。得方便とは入らんと欲する方便、已に入れる方便、彼の勝進の方便なり。經にいへるが如く「善く地相を知る」との故に、「善く地の得修を知る」との故に、「善く地の淸淨分を知る」との故なり。增上の方便とは地地に轉行し、地地に住處し、地地に增長する善巧なり。經にいへるが如く「善く地地の轉行を知る」との故に、「善く地地の住處を知る」との故に、「善く地地

の較量勝智を知る」との故なり。不退の方便とは經にいへるが如く、「善く地の不退轉を得ることを知る」との故なり。甚至の方便とは菩薩地盡きて如來地に入る善巧なり　經にいへるが如く「善く一切の菩薩地清淨にして如來の智地に轉入することを知る」との故なり。「諸の佛子よ、譬へば善巧の導師の多く人衆を將ゐて彼の大城に向ふが如し」とは正行を得せしめんが故なり。中に於て導師とは二種の方便あり、一には道に迷はざる方便。道路の中に於て是は利、是は退患。道路の處に於て是は勝、是は過咎と皆善巧に知るなり。經にいへるが如く「先づ道中の利益諸事を問ふ」との故に、「復た道處の中間の勝事を問ふ」との故に、「復た道處の中間の退患過咎を問ふ」との故なり。二には資具の利益方便なり、經にいへるが如く「道の資糧を具へ、應に作すべき所のことを作す」との故なり。云何んが攝報果の利益勝れたるや。

經に曰く、菩薩摩訶薩は此の初地に住して、多く閻浮提の王と作り、豪貴自在にして常に正法を護り、能く大施を以て衆生を攝取し、善く衆生の慳貪、妬嫉の垢を除き、常に大捨を行じて窮盡すること無く。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事にして、是の諸の福德は皆念佛を離れず、念法を離れず、念僧を離れず、諸の菩薩を念ずることを離れず、菩薩の行を念ずることを離れず、諸の波羅蜜を念ずることを離れず、十地を念ずることを離れず、不壞の力を念ずることを離れず、無畏を念ずることを離れず、佛の不共法を念ずることを離れず、乃至一切種の一切智智を具足せるを念ずることを離

れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。諸の佛子よ、是の菩薩摩訶薩は若し家を捨てて勤行精進せんと欲せば、佛法の中に於て便ち能く家、妻子、五欲を捨つ。出家を得已りて、勤行精進せば、一念の間に於て百の三昧を得、百の佛を見たてまつるを得、百の佛の神力を知り、能く百佛の世界を動かし、能く百佛の世界に入り、能く百佛の世界を照し、能く百佛の世界の衆生を教化し、能く住壽百劫にして、能く過去、未來の各百劫の事を知り、能く百の法門に入り、能く身を變じて百となし、一一の身に於て、能く百の菩薩を示現して以て眷屬と爲す。

論に曰く、攝報果の利益勝とは二種あり。一には在家の果、二には出家の果なり。在家の果に復た二種あり。一には上勝の身、閻浮提の王等なり。經にいへるが如く、「菩薩摩訶薩は此の初地に住して、多く閻浮提の王となり、豪貴自在にして、常に正法を護る」との故なり。二には上勝の果、善巧に慳貪、嫉妬を調伏す。經に「能く大施を以て衆生を攝取し、善く衆生の慳貪、嫉妬の垢等を除く」といへるが如し。「能く大施を以て衆生を攝取す」とは自ら布施を行し、善く他を勸めて施さしめ、衆生を攝取して、善く衆生の慳嫉の垢を轉ずるなり。方便善巧とは四攝の法を以て衆生を攝取するが故なり。「念佛を離れず」といへる等は自利の益を離れざることを示現す。是の如きの諸念は

事の中に於て行じ了りて、大恭敬を成じ、諸の妄想を除く。此の念に略して四種あり。一には上念、三寶を念ずるが故に。二には同法の念、諸の菩薩を念ずるが故に。三には功德の念、自身及び他身の菩薩の行の自體轉た勝れたることを念ずるが故に。四には求義の念、諸力等此れは是れ眞實究竟なることを念ずるが故なり。何等か是れ上念なる、念佛等は佛法等を念ずるが故なり。施者と受者と財物及び菩提に於て分別を生ぜず、取著せざるが故なり。是の如きの一切作す所の業の中に、作者に著せず、境界に著せず、作事に著せず、果報に著せず、此の一切の諸行を以て、皆大菩提に廻向せんと願ふが故なり。上首と爲るとは二種あり。一には勝首、光明功德あるが故に、二には大首、獨一にして二なきが故なり。勝とは二種あり。一には妙、智の自在なること勝れたるが故に。二には微妙、一切の煩惱を離れて自在なると勝れたるが故なり。大とは二種あり、一には上、與等なきが故に、二には無上、能く過ぐるものなきが故なり。是の如きは自體の功德を顯示せんが故なり。導とは阿含の中に於て法義を分別して正しく說くが故に。將とは他を證せしめ、義を得、諸の煩惱を滅せしむるが故に。師とは敎授して正道に入らしむるが故に。乃至一切智智の依止とは大菩提の道を以て敎化するが故なり。是れを在家の菩薩の攝報果の利益勝れたりと名く。復た次に、出家の菩薩は禪定の勝業あり。勝業に二種あり、一には三昧勝、所謂る一念の間に於て、百の三昧を得、三昧の自在力を得るが故なり。二には三昧の所作勝、百佛を見たてまつる等を謂ふ。是の三昧

を得るを以ての故に、十方の諸佛、及び佛の加したまふ所の諸菩薩の所に於て、智慧を修習するが故なり。「能く百佛の世界を動かす」とは化すべき衆生をして正信を生ぜしむるが故なり。「能く百佛の世界に入り、能く百佛の世界を照し、能く百佛の世界の衆生を教化す」とは彼の世界に往至し、及び彼の世界を照し見て。正しく衆生を化するが故なり。「能く壽百劫に住す」とは。勝れたる衆生を攝取するが故なり。「能く過去未來世の各百劫の事を知る」とは、諸の衆生を化せんがために離惡の上首となりて善惡の業道を說くが故なり。「能善く百の法門と入る」とは、自の智慧を增長し、種種の法門の義を思惟せんが爲めの故なり。「能く身を變じて百と爲し、一一の身に於て、能く百の菩薩を示現して以て眷屬となす」とは、多く利益を作し、速疾に行ぜんが爲めの故なり。云何んが願智果の利益勝なる。

經に曰く、若し願力を以てせば自在なること勝上なり。菩薩の願力の示現は此の數に過ぎて、種種の神通を示現す。或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は乃至無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、中に於て身とは、是れ一切の菩薩の行の根本の所依なるが故なり。彼の身に依るが故に、光明及び神通あり。光明に依りて天眼あり、天眼あるを以て前の境界の一切のものを見る。眼に五種あり、應に知るべし。神通に依りて音聲及び行、莊嚴、加、信等あり。音聲とは、彼の言說

に應ずるが故に、行とは徧く十方に至るが故に、莊嚴とは種種の應現をなすが故に、加とは神力彼に加するが故に、信とは三昧門に依りて神通力を現じ、衆生の信に隨ひて利益成就するが故に、業とは慧眼所攝の陀羅尼門によりて、現に法を說くが故なり。略して一切諸地に各因體果相あることを說く、應に知るべし。

卷の第四

離垢地第二

論に曰く、菩薩は是の如く已に正位を證せり。〔次に〕出世間の道に依り、清淨の戒に因りて、第二の菩薩の離垢地を說く。此の清淨の戒に二種の淨あり。一には發起淨、二には自體淨なり。發起淨とは、十種の直心を說く。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩の言はく、諸の佛子よ、若し菩薩已に初地を具足し、第二地を得んと欲する者は當に十種の直心を生ずべし。何等をか十となす。一には直心、二には柔軟心、三には調柔心、四には善心、五には寂滅心、六には眞心、七には不雜心、八には不希望心、九には勝心十には大心なり。菩薩は是の十心を生じて、第二の菩薩の離垢地に入ることを得。

論に曰く、十種の直心とは（一）清淨戒の直心に依りて、（二）性戒成就し、應に作すべき所に隨ひて（三）自然に行ずるが故なり。直心に

【一】清淨戒の直心とは自體淨中の三聚淨戒の發起する根源たる直心の意。

【二】性戒。二義あり、一には久しく戒律を習積して性と成りしもの、二には眞如の自性中には破戒の垢なきが故に今眞如に順じて行ずるは自ら持戒なるを性戒と云ふ。前義は後天的修成の性格として持戒を說き、後義は先天的本具の實性として持戒を說く。

【三】自然に行ずとは直心に依りて性戒を成ずるが故に所作

復た九種あり。一には柔軟の直心、(四)喜樂の意を共にして戒行を持つが故に。二には調柔の直心、(五)自在力の故に、性善の持戒にして煩惱雜らざるが故に。三には(六)善の直心、諸根を守護して、戒を誤り犯さざること猶ほ良馬の性の調伏せるが如くなるが故に。四には寂滅の直心、調伏、柔軟にして(七)高心を生せざるが故に。五には眞の直心、能く諸の惱を忍びて(八)眞金の如くなるが故に。六には(九)不雜の直心、得る所の功德には厭足の念を生せず、淸淨の戒に依りて更に勝戒を求め、寂靜を樂ふが故に。七には(一〇)不希望の直心、諸の(一一)勢力、自在有るものを願はざるが故に。八には(一二)勝の直心、衆生を利益せん爲めに(一三)三有の願を斷たざるが故に。九には

自然にして意志努力を須ゐざるなり。

【四】心體淸淨にして瑕穢なく他と共に化して他を惱まさず心に眞僞なければ共に喜樂して戒行を持つ。

【五】所作無礙にして惡の爲に牽制せられず自由に戒行を持するをいふ。

【六】善とは諸根の調順せるをいふ。眼耳等の諸根は破戒の門なるが故に之を守護するなり。

【七】戒の實相を得て心に所執なければ、己が持戒を恃みて自ら高ぶり他を輕んずることなし、之を寂滅といふ。

【八】眞金の燒き打ち磨する等の事あれども其性改變せざるが如く、如何なる苦惱を忍びても戒を持ち、眞心改變せずとの意なり。

【九】不雜とは厭足の念なければ偏意を雜へず、勝戒を求めて進修するには好んで寂靜に處して世事の擾亂を雜へず、故に不雜と名く。

【一〇】不希望とは善を修して專ら佛を求め、人天の果報を希望願戀せざるの意。

【一一】勢力自在有るものとは天王人王等の果報をいふ。

【一二】大悲の心ありて衆生を利益するを勝といふ。二乘等の自調獨善に勝れたるが故なり。

【一三】三有とは、欲、色、無色の三界に生を受くること。願とは涅槃に住せずして、常に世間に生を受けて衆生を敎化せんとの願なり。

大の直心、〔二四〕有の果に隨順して而も染まざるが故なり。自體淨とは三種の戒あり。一には離戒の淨、二には攝善法戒の淨、三には利益衆生戒の淨なり。〔二五〕離戒の淨とは、謂はく十善業道なり、「經に」殺生を離るるより乃し正見に至るまでなり。亦正受戒淨と名く。攝善法戒の淨とは、離戒の淨よりも、〔二六〕上と爲す、經に「菩薩は是の思惟を作さくといふより衆生諸の惡道に墮つるは皆十の不善の業道、集の因緣に由る、乃至、是の故に我れ應に等しく十善の業道を行ずべし。一切種淸淨なるが故に」といへるまでなり。利益衆生戒の淨とは、攝善法戒よりも〔二七〕上と爲す、「經に」菩薩は復た是の念を作さく、我れ十の不善の業道を遠離し、行法を樂うて行ずるより乃至尊心を生ずる等までなり。

經に曰く、諸の佛子よ、菩薩は菩薩の離垢地に住して、自性に十善業道を成就して、一切の殺生を遠離し、刀杖を捨棄し、瞋恨の心なく、慚あり愧あり、一切衆生に於て憐愍を具足して安隱の心と慈心とを生ず。是の菩薩は尙ほ惡心をもつて衆生を惱まさず。何に況んや、他の衆生に於て、衆生の想を起し、故に重心を起して身に加害を行はんや。

論に曰く、「以下十善業道を說く。一切の殺生を遠離すとは、遠離勝と利益勝とを示現するが故な

〔二四〕有の果とは世間に生を受くること。衆生を攝化せんが爲に生死すと雖、內心は世間に染まず超然たることを得るを大と名く。

〔二五〕十善戒を守つて十惡を離るるを離戒の淨といふ、又攝律儀戒とも云ふ、防非止惡の戒なり。

〔二六〕離戒は止惡にして未だ善を集修せず、故に離惡に依りて更に諸善を修する攝善法戒を上位と爲す。

〔二七〕攝善法戒は自ら善を修するも未だ他を利益する能はざるを以て、利他の戒行たる利益衆生戒を更に上位となす。

り。離殺生に依るに三種の離あり。一には因の離、經にいへるが如く「刀杖を捨棄し、瞋恨の心なく、慚あり、愧あり、憐愍の情を具足す」との故に。二には對治の離、經にいへるが如く、「一切の衆生に於て安隱の心と慈心とを生ず」との故に。三には果行の離、經にいへるが如く、「尙ほ惡心をもつて諸の衆生を惱まさず、何に況んや、他の衆生に於て衆生の想を起し、故に重心を起して身に加害を行はんや」との故に。中に於て殺生に二種の因あり。一には受畜の因、二には起因なり。受畜の因に二種あり。所謂る刀杖なり。刀とは斫截の事、杖とは捶打の事なり。經にいへるが如く「刀杖を捨棄す」との故に。乃至、咒術、諸藥等の能殺の具をも悉く皆遠離す。起因に二種あり。所謂る貪と瞋とは財利の爲めの故に、諸の惡業を造り、乃至命を沒するまで心に恥悔すること無し。是等を對治するは、經にいへるが如く「慚あり、愧あり」との故に。衆生を貪らんが爲めにこれを掬養して籠に繫ぎ、苦惱を生ぜしむ。是等を對治するは、經にいへるが如く、「憐愍の情を具足す」との故に。此の二種を離るるが故に、因の離と言ふ。對治の離に二種あり。一には安隱の心、一切の衆生に於て利益を作し、善法を以て敎化して善道[又は]涅槃の因に住せしむるが故に。二には慈心、彼の衆生をして人天の報[又は]涅槃の樂果を得せしむるが故に。經にいへるが如く「一切の衆生に於て安隱の心と慈心とを生ず」との故なり。是の如く(一八)因果の中に於て、顚倒して求めず、愚癡の心よ

【一八】安隱心は人に善因を授く卽ち因中に於て顚倒して求めざるなり、慈心は人に樂果を授く、卽ち果中に於て顚倒して

り殺生する（一九）祭祀等を離る。對治とは即ち名けて離となす。故に對治離と名く、彼れ能く離るるが故なり。衆生と言ふは諸の衆生の常に非らず、斷に非らざるを示す、命根の因緣に隨ひ、乃至現に壽命ありて世に住するとを得、死するときは業煩惱の力に依りて、未來に還生するが故なり。果行の離に二種あり。一には微細、心に害せんと念ふが故に。二には麤重、身に惱害を行ふが故に。經に「是の菩薩は尚ほ惡心をもつて諸の衆生を惱まさず、何に況んや、他の衆生に於て、衆生の想を起し、故に（二〇）重心を起して身に加害を行ぜんや」といへるが如き故に。中に於いて麤行に五種あり。一には（二一）身、經に「他」といへるが如き故に。二には（二二）事、經に「衆生」といへるが如き故に、三には（二三）想、經に「衆生の想」といへるが如き故に。四には（二四）行、經に「故に重心を起す」といへるが如き故に、五には（二五）體、經に「身に加害を行はん」といへるが如き故に。

經に曰く、諸の劫盜を離れて、資生の物は常に自ら滿足し、他の財を壞らず。若し物の他に屬し、他の

求めざるなり。此の故に殺生して以て樂の因と爲さず、又樂の果と爲さざるなり。

【一九】祭祀の爲に殺生するは犧牲に供ふるなり、之れ愚癡より起るなり。前の起因に貪と瞋とを擧げて、癡を除きたるも此に特に之を出す。食せんが爲の殺生は貪なり、怨仇を除かんが爲の殺生は瞋より起る、祭祀等の爲の殺生は癡より起る。

【二〇】重心とは重罪を犯す心の意。

【二一】身とは自に簡びて殺すべき他の體をいふ。

【二二】事とは非情に簡び殺すべき事、即ち生命ある者のこと。

【二三】想とは是の衆生を認知すること。

【二四】行とは殺心を起すこと。

【二五】體とは正しく生命を斷つこと。殺生の正體なるが故なり。

所用の事、他の守護の想に「於て」、盗心を生ぜず。是の菩薩は乃至草葉をも與へざれば取らず。何に況んや其の餘の資生の具をや。

論に曰く、劫盗を離るるに依り三種の離あり。一には因の離、二には對治の離、三には果行の離なり。(二六)因の離とは、自らの資生足らざるなり。此を對治するには、經に「資生の物常に自ら滿足す」といへるが如き故に。對治の離とは、所謂る布施するなり。自らの資生に於て、捨てて著せず、無貪なるを以ての故に。(二七)當來の資生を壞せず、經に「他の財を壞らず」といへる如き故に。果行の離とは二種あり。一には微細の物をも與へざるをば取らず、二には麁重の物をも與へざるをば取らず。此れに五種の示現あり。一には身、經に「若し物の他に屬す」といへるが如き故に。二には事、經に「他の所用の事」といへるが如き故に。三には想、經に「他の守護の想」といへるが如き故に。四には行、盗心をもつて取るが故に。經に「盗心を生ぜず」といへるが如き故に。五には體、所謂る微塵なり。經に「乃至草葉をも與へざるをば取らず。何に況んや其の餘の資生の具をや」といへるが如き故に。

經に曰く、邪婬を離れて、自ら妻色に足りて他の妻を求めず。他の守護する女人及び他の妻、姓と

【二六】惡業の因に共通のものあり、貪瞋癡是なり。又諸業に特有の因あり、刀杖を畜ふるは殺生の因、資生不足は劫盗の因なるが如き是なり。共因は前段に詳說せるが故に以下は唯不共因のみを擧ぐ、故に此には資生不足といふのみ。

【二七】無貪の報として當來世に大財を得ること。經に他の財といふ他世の財の意なり。

親と標とに護らるるもの、戒法の護る所のもの「を求めず」。是の菩薩は乃至貪求念想の心をも生ぜず。何に況んや彼此の二形事に從はん。況んや復た非處に於てをや。

論に曰く、邪婬を離るるに依りて三種の離あり。一には因の離、二には對治の離、三には果行の離なり。因の離とは自妻に足らず、此れを對治するは經に「自ら妻色に足る」といへるが如き故に。對治の離とは、(二八)現在に梵行淨なるが故に、未來の妻色を求めず、經に「他の妻を求めず」といへるが如き故に。果行の離とは二種あり。一には微細、經にいへるが如く、所謂る心中のことなり。二には麤重、身相の中を謂ふ。身相に三種あり。一には不正、二には非時、三には非處なり、不正とは他の守護する女、共と不共等なり。共とは他の守護なるが故に。不共とは他の妻なるが故に、經に「他の守護する女人、及び他の妻」といへるが如き故に。姓、親標の護とは所謂る(二九)父母、親族、(三〇)姓護、及び已に他に許す標幟の護る所なるが故に、經に「姓と、親と、標とに護らる」といへるが如き故に。女人とは非衆生數の女の名を遠離することを示現するが故なり。非時とは、梵行を修する時を謂ふ、經に「戒法の所護」といへるが如き故に。非處とは非道に婬を行ずるを謂ふ、經に「況んや復た非處に於てをや」といへるが如き故に、細麤とは、謂はく意業と身業との二種を遠離するが故に、經に「乃至貪求念想の心をも

【二八】現在に持戒なるは來世の中にて、妻色の果報を求むるにあらずとの意。
【二九】父母親族とは經文の親護を解す。
【三〇】姓護とは上族は下姓の配匹に非ざるが如き、種姓の守護に屬す。

生ぜず。何に況んや（三一）彼此の二形事に從はんや」といへるが如き故に。

經に曰く、妄語を離れて常に實語、諦語、時語を作す。是の菩薩は乃至夢中にも覆見、忍見を起さず、心に誑他の語を作さんと欲することなし。何に況んや故らに妄語せん。

論に曰く、妄語を離るるに依りて二種の離あり。一には對治の離、二には果行の離なり。對治の離とは卽ち是れ因の離なり。（三二）何を以ての故に、彼の身業には二種の離あるも、妄說の中には外事なきが故なり。復た異因なきが故なり。離殺生の中にいへるが如し。受畜の因に二種あり。刀杖の如き外事を謂ふ。彼の中に說けるが如し。離るとは刀杖を棄捨するが故なり。離妄語の中には彼の身業の二種の外事なきが故なり。異因無しとは、殺生の因は貪瞋癡等なり。（三三）妄語の因は他を誑かす心を謂ふ。彼を遠離するが故に卽ち實語を成ずるなり。是の如きの實語は誑他の心を對治す、卽ち是れ因の離なり、（三四）彼に依りて此を生ずるが故に異因なしと言ふ。是の如く（三五）對治の離は卽ち是れ因の離なり。復た對治の離に三種あり。一には（三六）想に隨ふ語、經に「常に實語を作す」といへるが如き故に。二には善く思量して事「實」の如くなる語、經に「諦語」といへ

【三一】彼此は男女のこと。

【三二】妄語とは對治離の外に因離なく、對治離卽ち因離なることを明かし、身業と口業と異ることを示す。

【三三】誑他の思心の他に貪瞋等の異因なきを示す。

【三四】彼の誑他の心に依りて、此の妄語を生ずるが故に、貪等の異因なし。

【三五】實語に誑他の心を對治するが故に對治の離は卽ち因の離となる、異因なきが故に。

【三六】想に隨ふとは心に稱ふ語の意。經に實語といふが已が心に違はざる語にして、心の

るが如き故に。三には(三七)時を知る語、自身「及び」他身の衰惱を起さざるが故に、經に「時語」といへるが如き故に。果行の離とは一に細、二に麤なり、經に「是の菩薩は乃至夢中にも覆見、忍見を起さず、心に誑他の語を作さんと欲すること無し。何に況んや、故らに妄語を作さん」といへるが如し。夢中とは是れ細なり、故らに作すとは是れ麤なり。(三八)覆見と、(三九)忍見とは解し易し、(四〇)智見を名けて見となす。

經に曰く、兩舌を離れて、破壞の心無く、恐怖せざるの心と、惱亂せざるの心とをもつて、此に聞きて彼に向つて說かず、此を壞るが故に。彼に聞きて此に向つて說かず、彼を壞るが故なり。同意の者を破らず、已に破れたる者は、增長せしめず、離別を喜ばざる心、離別を樂はざる心ありて離別の語を樂說せず。離別の語は若くは實、若くは不實なるもこれを作さず。

論に曰く、兩舌を離るるに依りて、二種の離あり。一には對治の離、二には果行の離なり。對治

ままを口に語るをいふ。

【三七】心に違はざる實語、事實に稱ふ諦語と雖も、其場合を察して語らざれば、自他の衰惱を起すことあり。故に時に適合する語を時語といふ。

【三八】覆見とは覆相の妄語にして、現に見て自ら見想を生ずるも誑つて見ずといふ、已が所見を覆ふ故に覆見といふ、前の諦語に反す。

【三九】忍見とは覆心の妄語にして實には見ざるを妄に見想を生じて自ら見たりと謂ひながら、他には誑つて見ずといふ如きは、其言は事實なれども己が心に違ふ故に忍見といふ前の實語に反す。

【四〇】夢中の事の如き眼を以て見るべからざるを智見といふ、此にては分別想念をも通じて智と名く、是れ見の義を釋せるなり。

の離とは破壞せざるの心を謂ふ。一には【四一】心、二には【四二】差別なり。其の聞く所に隨ひて、異處に往きて說く。【四三】此の二種の朋は心に受けて、憶持し、口業に言說して破壞する心なるが故なり。「之を對治するは」經にいへるが如く、「此に聞きて彼に向つて說かず、此を壞るが故に。彼に聞きて此に向つて說かず、彼を壞るが故なり。差別とは三種あり。一には身壞、二には心壞、三には業壞なり。身壞に二種あり。一には未壞、二には已壞なり。此れを對治するは、經にいへるが如く、「同意の者を破らず、已に破れる者は增長せしめず」との故に。心壞にも亦二種あり。一には未だ破らざる者を破らんと欲し、二には已に破れる者を【四四】隨喜す。此れを對治するは、經にいへるが如く、「離別を喜ばざる心」との故に、「離別を樂はざる心」との故に。業壞にも亦二種あり。一には細、二には麤。【四五】實と【四六】不實との語なり。此れを對治するは、經にいへるが如く、「離別の語を樂說せず、離別の語は若くは實、若くは不實なるもこれを作さず」との故に。

經に曰く、惡口の所有る語言を離る。侵惱の語、麤獷の語、他を苦しむる語、他をして瞋恨

【四一】心とは惡言を傳へて不和を生ぜしめんとする心をいふ。之に依りて對治の離を明かす。

【四二】差別とは正に破壞（不和）する時の差別の想なり。之に依りて果行の離を明かす。

【四三】此の二種の朋とは彼此二人の所にて、詐つて親朋を現じ、各其の惡言を聞き、之を憶持して、兩者に傳說するなり。論には兩舌の過を說き、經文は對治の離を說く。

【四四】隨喜とは賛同して、益益不和を生ぜしむるの意。

【四五】實とは實際に惡言ありしをいふ。

【四六】不實とは實に語らざりしものを自ら假作せる惡言をいふ。他の實の惡言を傳ふるは罪稍輕きが故に、細といひ、不實を傳ふるは罪過重きが故に

せしむる語、現前の語、不現前の語、鄙惡の語、不斷の語、聞くを喜ばざる語、聞いて悅ばざる語、瞋惱の語、心火能く燒く語、心熱惱する語、不愛の語、不樂の語、不善にして自ら身を壞り亦他人を壞る語、是の如き等の語は皆悉く捨離す。所有る語言の、美妙にして耳を悅ばしむるもの、所謂る潤益の語、軟語、妙語、聞くを喜ぶ語、聞くを樂しむ語、入心の語、順理の語、多人の愛念する語、多人の喜樂する語、和悅の語、心徧へに喜ぶ語、能く自心と他心とに歡喜、敬信を生ぜしむる語、常に是の如きの種種の美妙なる語を說く。

論に曰く、惡口を離るるに依りて、二種の離あり。(四七)一には果行の離、二には對治の離なり。果行の離とは、他を損する語にして、能く他をして瞋らしむるを謂ふ。經に「侵惱の語、麤獷の語、他を苦しむる語、他をして瞋恨せしむる語」といへるが如き故に。此の句は(四八)次第に後を以て前を釋す。此等は義は一にして名は異る。復た(四九)相對する語と相對せざる語と、麤惡の語と(五〇)常行の語と有るが故に。經に「現前の語、不現前の語、鄙惡の語、不斷の語」といへるが如き故に。中に於いて

麤と云ふ。

【四七】此の段は前來と次第を異にし初に果行の離を擧げて後に對治離を示す。蓋し對治と果行とは歷別相對して文義便なるが故に、其の次第は前と反して果行の離を初に擧ぐ。

【四八】次第に後を以て前を釋すとは侵惱は正しく惡口の過なれば先づ之を擧げ、其を釋して麤獷といひ、麤獷を解して他を苦しむといひ、更に之を解して、他を瞋恨せしむといふ、故に義は一にして名は異ると云へるなり。

【四九】相對とは對面して語ること。經には現前といふ。

【五〇】常行とは經の不斷を解す。

【五一】現前の語とは麤にして斷せず、【五二】不現前の語とは微にして斷あり。是の如く說く者は戒と相違して能く他の苦を生じ、他をして瞋らしむるが故に、經に「聞くを喜ばざる語、聞いて悅ばざる語」といへるが如き故に。不利益の語を作せば、瞋妬の心起るに因りて他をして戒と相違せしむるが故に、經に「瞋惱の語」といへるが如き故に。他をして瞋惱せしむるに二種の饒益無きことあり。一は未だ瞋を起さざる者をして能く瞋を生ぜしめ、聞く時、憶ふ時、愛せず、樂しまず、胸中閉塞するが故に、經に「心火能く燒く語、心熱惱する語、不愛の語、不樂の語」といへるが如き故に。二には已に同意して樂む事あるも、自身に失壞し、他をして失壞せしむ、經に「不善にして自ら身を壞り、亦他人を壞る語」といへるが如き故に。是の如き等の惡語を離るるが故に、果行の離と言ふ。對治の離とは謂はく潤益の語なり。中に於て二種あり。一には不麤不疾の語、二には樂むべき語なり。經に「軟語、妙語」といへるが如き故に。是の中、不麤不疾とは戒分の所攝にして、受行斷せざるが故なり。喜とは名けて可樂と爲すが故に。可樂に二種あり。一には樂にして樂むべく、二には安隱にして樂むべきなり。樂とは人天に隨順するが故に、安隱とは涅槃城に隨順するなり。經に「聞くを喜ぶ語、聞くを樂しむ語、入心の語、順理の語」といへるが如き故に。又復た怨親の中の人聞く時、憶ふ時、能く歡喜を生ず、經に「多人の愛念する語、多人の喜樂する語」といへるが如き故に。此の語は是の如

【五一】對面して發する惡言は情過麤重なり故に麤惡といふ。

【五二】對面せずして發する惡語は其の過微細なり、常行不斷に對して斷有りと云ふ。

く二種の益を作す、一には他の未だ瞋恨を生ぜざるものには其をして生ぜざらしめ、歡喜を生ぜしむるが故に。復た能く三昧を生ずるが故に、二には未だ親友を生ぜざるものには其を生ぜしむるが故に、自身に歡喜を現ずるが故に、他をして歡喜を現作せしむるが故に。經に「心に和悅する語、心に偏へに喜ぶ語、能く自心と他心とに歡喜、敬信を生ずる語、常に是の如きの種種の美妙なる語を說く」といへるが如き故に。

經に曰く、綺語を離る。「所謂る」常に善く思ふ語、時語、實語、義語、法語、順道の語、毗尼の語、時に隨ひて籌量する語、善く心の樂ふ所を知る語なり。是の菩薩、乃至戲笑にも尙ほ綺語せず、何に況んや故らに綺語を作さんや。

論に曰く、綺語を離るるに依りて二種の離あり。一には對治の離、二には果行の離なり。(五三)對治の離とは(五四)善く言說すべき時を知り、(五五)彼此の語に依りて、勸發し憶念し、修行せしむる時には、若し非善處の衆生を見れば、不善を捨てて、善法に安住せしめ、彼の時に敎化する語なる故に、經にいへるが如く、常に善く思ふ語の故に、時語の故に。復た顚倒せざる語は展轉して敎誨し、隨順し、修行する時に依るに、(五六)義言、(五七)法言の故に、經に「實語、義語、法語」といへるが如

【五三】經文に九語を擧ぐ、攝して三とす。初の二は敎化して信を生ぜしむ、次の三は敎授して行を起さしむ、後の四は敎誡敎勸して德を成ぜしむ。

【五四】語るに時に合ひて自他に損減なく、能く善法を生ずる如き場合を常に審慮するを。

【五五】彼此れ損なく自他に益を成ずる時の語といふ意なり。

き故に。復展轉して罪を擧げて、諍を滅して學行する時に依れば、(五八)如法の語、及び(五九)阿含の語なり、經に「順道の語、(六〇)毗尼の語」といへが如き故に。復(六一)攝受の語にて說法し、攝受し、修行せしむる時に依れば、威儀の如く住する語なるが故に、譬喩順義の語の故に、經に「時に隨ひて籌量する語、善く心の樂ふ所を知る語」といへるが如き故に、果行の離に二種あり、一には細、二には麤なり。此の二を遠離するが故に、果行の離と言ふ。細麤とは經に「是の菩薩は乃至戲笑にも尙ほ綺語せず。何に況んや故らに綺語を作さんや」といへるが如き故なり。

經に曰く、貪心を離れ、他の有する所の一切の財物と、他の用ふる所の財とに於て、貪心を生ぜず、求めず、願はず。貪心を生ぜず。

論に曰く、不貪に依るに三種あり。一には(六二)事、二には(六三)體、三には(六四)差別なり。事とは攝受の用なり。中に於て二種あり、一には(六五)己の攝として受用するもの、二には(六六)攝護の想なり。

【五六】言に義理(又は義利)を含むが故に義言といふ。

【五七】行法に稱ふ語を法言といふ。

【五八】如法とは他の罪過を擧げて除かしむる慈心、利益、柔軟、眞實、時の五德を具ふるをいふ。經に順道といふを釋するなり。

【五九】教法に依つて諍罪を滅するを阿含語といふ。經には毗尼といふ。

【六〇】毗尼(Vinaya 毗奈耶)とは調伏、滅罪等と譯す。戒律のことなり。

【六一】法を說いて衆生を攝受し、行を起さしむるが故に攝受の語といふ。

【六二】事とは他の物と己の物と簡別する事。

【六三】體とは貪る所の物體。

【六四】差別とは貪らざる心なり。

【六五】現に己の物として存在すること。

【六六】財物は現在せずと雖も、己の所屬として守護せしむること。

經に「他の有する所の一切の財物に於て」といへるが如き故に。體とは二種あり。一に所用の事、金銀等を謂ふ。二には資用の事、飲食衣服等を謂ふ。經に「他の用ふる所の財」といへるが如き故に。不貪の性とは貪心を對治するが故なり、經に「貪心を生ぜず」といへるが如き故に。此の差別は三種の貪を對治す。三種の貪とは一には欲門の行、二には得門の行、三には奪門の行なり。是等を對治するには、經に「求めず、願はず、貪心を生ぜず」といへるが如き故に。中に於て、初めの二は細、第三は麁なり。

經に曰く、瞋心を離れ、一切の衆生に於て常に慈心、安隱心、憐愍心、樂心、利潤心、一切の衆生を饒益する心を起し、所有る瞋恨、妬害、妄想の垢等は悉く皆遠離し、所有る一切のものは慈悲に隨順して善く修め、一切の行を成就するが故に。

論に曰く、瞋障を離るるに依る對治は五種の衆生の爲めに說く。一には怨讐の所に於て、慈愍の心を生ず、經に「常に慈心を起す」といへるが如き故に。二には惡行の衆生の所に於てす、經に「安隱の心を生ず」といへるが如き故に。三には貧窮乞匃、及び苦の衆生の所に於てす、經に「憐愍の心、樂の心を生ず」といへるが如き故に。四に(六七)樂の衆生の所に於てす、煩惱に染著する處なればなり、經に「利潤の心」といへるが如き故に。五には(六八)菩提心を發す衆生の所に於てす、無量の利益行

【六七】歡樂に耽る人は放逸に流れ煩惱染著多し、故に放逸を捨てて善道に導く、之を利潤の心といふ。

の中に勤勞し、疲倦して退轉を恐るるが故に、經に「一切の衆生を饒益する心を起す」といへるが如き故に。此慈心等に〔六九〕六種の障あり。此れ〔七〇〕分別に非ず、亦〔七一〕一一の對にもあらず。未だ怨を生ぜざる者に於て、能く生ぜしめ、已に生ぜる者には隨順して增長せしむ。未だ親を生ぜざる者には生ぜざらしめ、已に生ぜる者には增長せざらしむ。自身の中に於て、善法の未だ生ぜざる者には生ぜざらしめ、已に生ぜざる者は滅せしむ。不善の法に於て、未だ生ぜざる者には能く生ぜしめ、已に生ぜる者には增長せしむ。他身の中に於て、不愛の事の未だ生ぜざる者には生ぜしめ、已に生ぜる者には增長せしむ。愛事の未だ生ぜざる者には生ぜざらしめ、已に生ぜる者には隨順せしめず、經に「所有瞋恨、妬害、妄想垢等は皆悉く遠離す」といへるが如き故に。此の修多羅の文句は、次第して此の瞋恨等の無量の惡行の根本を說けるが故に、等と言ふ。彼を悉く捨離するが故なり。餘は所念に隨ひて一切盡く、慈心を以て利益す、經に「所有る一切のものは慈悲に隨順して善く修め、一切の行を成就するが故に」といへるが如し。

經に曰く、邪見を離れ、正道に隨順し、種種の占相吉凶を捨て、惡戒の見を離れて、正直の見を修

【六八】發心するも三乘道に趣向する者は、無量の行中に疲倦を生じ退轉する恐あるが故に之を教導する心を生ずる也。

【六九】六種の中揀して三對となす、初の二は一對、己を以て他に對して其瞋恨を明かす、次の二は一對、唯己に就て其妬害を釋す、後の二は一對、唯他に就て其の妄垢を彰す。

【七〇】二三障共に前の一の治を障ふるに非ず、亦二三の對治共に一障を治するに非ざる故に分別に非ずといふ。

【七一】六障は別別に六心と相對するにも非ずとの意。

し、奸欺せず、諂曲せず、決定して佛法僧の三寶を誠信す。菩薩は是の如く日夜に常に十善の業道を護る。

論に曰く、正見に依りて七種の見對治あり。何者をか七種の見となす。一には(七二)異乘の見、此れを對治するは經に「正道に隨順す」といへるが如き故に。(七三)二には(七四)虛妄分別の見、三には(七五)戒取淨見、此れを對治するは經に「種種の占相吉凶を捨て、惡戒の見を離る」といへるが如き故に。惡戒の見とは自ら所見を取るが故なり。四には(七六)自ら謂ふ正見なりと、此を對治するは經に「正直の見を修す」といへるが如き故に。五には(七七)覆藏の見、六には(七八)詐現不實の見なり、此れを對治するは、經に「奸欺せず、諂曲せず」といへるが如き故に。七には非淸淨の見、(七九)世間の見を謂ふ、此れを對治するは經に「決定して佛法僧の三寶を誠信す」といへるが如き故に。是の如く已に一切種の離戒を說けり。復た離戒の增上淸淨を說く、斷せず、闕かず

【七二】小乘の見を異乘といふ。經文の正道とは大乘をさす。

【七三】次の三は邪僻顛倒の見なり。

【七四】外道は因果の理法を知らざれば、占相に依りて吉凶をトす、之れ卽ち邪見なり。

【七五】外道は雞狗等の戒を受持して解脫の因となすが如き、正因にあらざるを、正因と執するを惡戒の見といふ、之れ不正を正となす私情の迷見なり、不淨の邪戒を取して、淨戒となすの見なり。

【七六】自己の邪見を執して正見なりと謂ふ、之を見取見といふなり。

【七七】次の二は名利を欲求する時に起る、覆藏とは自己の罪過を覆うて他を欺くなり。

【七八】自己不德なるも詐つて有德を現し、他の利華を求むるなり。

【七九】現在の生死に滿足し、之に愛著し、之を淸淨となして、出離解脫の念を生ぜざるを云ふなり。

常に護持するが故なり、經に「菩薩は是の如く日夜常に十善の業道を護る」といへるが如き故なり。是の如く一切種の離戒を具足し、性成就せるが故に。復た不斷、不闕を示せるが故に。次には攝善法戒の淨を說く、謂はく菩薩は是の思惟を作さく等「以下」に修多羅に次第して說けり。

經に曰く、菩薩は是の思惟を作さく、一切の衆生は諸の惡道に墮す、皆十不善の業道、集の因緣を離れざるに由るが故なり。是の故に我れ當に先づ善法に住し、亦他人をして善法に住せしむべし。何を以ての故に、若し人自ら善を行ぜず、善行を具へざれば他の爲めに法を說きて、善に住せしめんは、是の處有ること無し。

論に曰く、(八〇)諸の惡道に墮すとは、三種の義あり。一には(八一)惡行に乘じて往くが故に、二には(八二)自身に依止して、能く苦惱を生ずるが故に、三には(八三)常に種種の苦相の處に墮するが故なり。何が故に、十不善の業道と言ふや。謂く、攝めて一切の惡果に到る數なるが故に、十不善の業道と言ふ。攝めて一切の惡果に到る數とは、十不善の業道を說くが故なり。數とは十處を攝取するが故に、惡とは不善の故に、果とは地獄、畜生、餓鬼等の、毀

【八〇】經文に四段あり、次第の如く智と願と業と行とを明かす。此には初の智と願とを說き、次の經文に願と行とを明かす。

【八一】惡行は、人を通じて果に至るが故に道と名くるなり。卽ち三塗の苦報を道の所至となすなり。これ道の義を釋するなり。

【八二】次には墮の義を釋す。自ら惡因を作り、果、己を離れざるが故に自身に依止すといひ、身に依りて苦を生するを惡といふ。

【八三】此の句は墮の義を釋するなり。

つべきに墮するが故に。到とは攝取の業なるが故に。集の因とは受行の故なり。菩薩は是の如く〔八四〕無因と顚倒の因とを遠離して、善く衆生の自ら惡業を行じて、非法の處に住し、遠離すること能はざるを解す。菩薩は思惟し、深く寂靜にし已りて、彼の衆生を救はんと欲し、自ら堪能あるを知れり。復た障及び對治、不善の業道及び果、〔八五〕善の業道及び果及び〔八六〕上上の清淨を觀察して、增上の心を起す。攝善法戒の清淨の行を求學し、修行せんが故なり。

經に曰く、是の菩薩は復た深く思惟すらく、十不善の業道、集の因緣を行ずるが故に、則ち地獄、畜生、餓鬼に墮し、十善の業道、集の因緣を行ずるが故に、則ち人中に生じ、乃至有頂の處に生ず。又是の上「品」の十善業道は智慧觀と和合して修行す。其の心狹劣なるが故に、心に三界を厭畏するが故に、大悲を遠離するが故に、他に從ひ聲を聞きて通達するが故に。聲を聞きて意に解り、聲聞乘を成ず。

論に曰く、〔八七〕智慧觀とは實相の觀なるが故に。惡道とは是れ苦なり。不善の業道は是れ集なり。彼を離るるは是れ滅なり。彼を對治するは是

〔八四〕衆生の惡道に墮するは皆不善に由るが故に、無因に非ず。又不善に由りて惡道に墮するが故に、倒因に非ず、無因と倒因とを離れて、惡因惡果を思惟するなり。

〔八五〕世間の善を指す。凡そ善に五品あり。凡夫の善と聲聞の善と緣覺の善と菩薩の善と佛の善となり。

〔八六〕上上の清淨とは佛菩薩の善をいふ、二乘の善は凡夫の善に對して上位に在り、大乘の善は更に其の上位に在るが故に上上といふ。

〔八七〕經文に觀を明す、中に二段あり。初に凡夫の善惡因果を明し、後に聲聞の十善道と智慧と和するとを明す。論には初に四諦の智慧觀を釋す、中に於て、初には凡夫の四諦觀を示す。

れ道なり。又(八八)善道とは、是れ苦、善の業道は是れ集、(八九)彼の使を離るるは是れ滅、彼を對治するは是れ道なり。智慧(九〇)同じく觀じ(九一)修行に分別無し。聲聞に(九二)五種の相あり。一には因集、二には畏苦、三には捨心、四には依止、五には觀なり。是の如く狹劣等は是れ聲聞の心なり。因集とは、微少の善根を修行するが故に、但だ自身の利益のみに依る、經にいへるが如く、「其の心狹劣」との故に。畏苦とは、經にいへるが如く、「心に三界を厭畏す」との故に。捨心とは、諸の衆生を捨つ、經にいへるが如く、「大悲を遠離す」との故に。依止とは、(九三)師の教授に依るが故なり。觀とは(九四)音聲を念ずるが故なり。何をか音聲といふ。(九五)我れ「及び」衆生等は但だ名のみあるが故にと、是の如く彼は音聲に從ひて、解するが故なり。(九六)衆生の無我に入るも、法無我に非らず。

【八八】 次に聲聞の四諦觀を示す。凡夫は不善の因果を苦集となすも聲聞は十善の因果を苦集と爲して涅槃を求む、是れ凡夫に對して勝れたることを顯はす。

【八九】 聲聞は善法は妄想より起ると知らざるが故に、善の體を滅せずして、唯善中の煩惱使を除くが故に、彼の使を離るといふ。

【九〇】 同觀とは聲聞の智慧は前の二種の四諦法中に於て、同じく皆觀するが故なり。此れ十善所依の慧體を明かす。

【九一】 善と慧と合して起るが故に分別なしといふ、蓋し十善道法の慧に依って起るを修行と名くる也。

【九二】 次に聲聞は凡夫には勝れたるも上に對すれば劣ることを釋す。中に五項を擧ぐ、前三は菩薩に劣ること、後の二は緣覺に劣ることを示す。

【九三】 緣覺乘の者は無師獨悟なるも、聲聞乘の者は師の教授に依る。

【九四】 聲聞といふも耳にて聲を聞くに非す、聲に依りて解を生す、觀念の意なりとの義。

【九五】 我も衆生も乃至一切の諸法も皆假名卽ち音聲にして實體なしと觀じ、假に依りて空を悟る、是れ音聲の義を釋するなり。

【九六】 空の義を解すると雖、衆生無我卽人空を了達するのみにて未だ法空(萬法唯心所現

經に「他に從ひ、聲を聞きて、通達するが故に、聲を聞きて、意に解し、聲聞乘を成ず」といへるが如き故なり。

經に曰く、又是の上の十善淸淨の業道は、他に從ひて聞かざるが故に、自ら正覺するが故に、大悲の方便を具足すること能はざる故に、而も能く深き因緣の法に通達して、辟支佛乘を成ず。

論に曰く、(九七)辟支佛に三種の相あり。一には自覺、二には法を説くこと能はず、三には少境界を觀じ、佛の説法及び諸の菩薩を假らず、唯自ら覺悟す、經にいへるが如く、「他に從ひて聞かざるが故に、自ら正覺するが故に。」(九八)説法の心を起さず、法を説くに堪へざるが故に、經にいへるが如く、「大悲方便を具足すること能はざるが故に。」微細の因緣境界の行を觀ずるが故に、經にいへるが如く、「而も能く深き因緣の法に通達して、辟支佛乘を成ず」との故なり。(九九)因集と苦を畏ると衆生を捨つるとは、辟支佛も亦此の法あり。(一〇〇)所有の勝事は此の中に已に説けり。

經に曰く、又是の上上の十善業道は淸淨にして具足す。其の心廣大にして無量なるが故に、諸の衆生に於て、悲愍の念を起すが故に、方便の所攝なるが故に、善く大願を起すが故に、一切の衆生を捨てざるが故に、佛智の廣大なることを觀ずるが故に、菩薩地淸淨に、波羅蜜淸淨にして、

の唯識觀)に入らずとの意。

【九七】辟支佛(Pratyeka-buddha)獨覺と譯す、十二因緣を觀じて無師獨悟するが故なり。

【九八】利他の大悲心なきが故に説法の心を起さずといふ。

【九九】以下聲聞と緣覺の同異を[illegible]す、即ち三同二異を擧ぐ。

【一〇〇】無師獨悟なれば依止勝る、深細の因緣を觀ずるが故に觀勝る、之を二勝といふ、前に已に説けるが故に論に略す。

深廣の行に入りて成ず。

論に曰く、菩薩に四種の相あり。一には因集、二には用、三には彼の力、四には地なり。一切の善根に依りて、行を起すが故に、一切の衆生の利益に依りて行ずるが故に、大乘の心廣くして無量なるが故に、此は是れ〔一〇一〕因集なり。經に「又是の上上の十善業道は清淨にして具足し其の心廣大にして無量なるが故に」といへるが如し。諸の衆生の習行する苦因、及び受苦を見る時悲愍の心を起し、彼の衆生に依りて利益を作す、是れ菩薩の用なり。經に「諸の衆生に於て悲愍を起すが故に」といへるが如し。彼の力とは謂はく四攝法なり。經に「方便の所攝なるが故に」といへるが如し。地とは三種あり。一には〔一〇二〕淨深心地、十大願に名を得、經に「善く大願を起すが故に」といへるが如し。二には〔一〇三〕不退轉地、寂滅の行を得已りて、衆生を解脱せしむることを捨てず、經に「一切衆生を捨てざるが故に」といへるが如し。三には〔一〇四〕受大位地、是の故に佛の廣大の智を證せんことを求む、經に「佛智の廣大を觀ずるが故に」といへるが如し。菩薩地清淨に、波羅蜜清淨にして〔一〇五〕深廣の行に入りて成ずとは、此の中には但だ菩薩地の廣く成ずることを說けば

【一〇一】本智修せし善根を因となし、之に依りて行を集むるが故に因集といふ。

【一〇二】地を分つて十となし更に攝して三と爲す、初地より七地までは功用の義同じきが故に合して一となし、淨深心と爲す、障を除き實義に趣向するが故なり。

【一〇三】八九兩地は無功用等しきが故に合して一と爲す、法の流水中に在つて任運に上進するが故に不退位と名く。

【一〇四】第十地は究竟にして佛智の職を受くるが故に受大位地と名く。

【一〇五】佛智に於て證顧するを入といひ、圓滿を成といふ。

便ち足る。何が故に復た地淨と、波羅蜜淨とを說くや。〔一〇六〕上上の清淨有るが故に、〔一〇七〕第一法の清淨なるが故に、菩薩の深廣の行成ずることを顯示す。第一義とは波羅蜜の義の故なり。

經に曰く、又是の上上の十善業道は一切種清淨にして、十力の力なるが故に、一切の佛法を集めて、成就せしむるが故なり。〔一〇八〕是の故に我れ應に等しく十善業道を行じ、一切種を修行して、清淨に具足せしむべし。

論に曰く、上上とは四種の義ありて、上上の事を顯はす。一には滅、二には捨、三には方便、四には無厭足なり。不善の業道は習氣と共に滅するが故に。善業自在に成就するが故に。聲聞、辟支佛を捨するが故に。〔一〇九〕方便とは菩薩乘に於ける善巧の故に。〔一一〇〕餘殘に厭足なきが故に、一切智の中にて自在の智を得るが故に。一切種を清淨ならしむるが故に、經に「又是の上上の十善業道は、一切種清淨なり」との故に。十力の力なるが故に、一切の佛法を集めて、成就せしむるが故に、是の故に我れ應に等しく十善の業道を行じ、一切種を修行して、清淨に具足せしむといへるが故なり。〔一一一〕魔怨と小乘とを降伏して增上を作すが故に、力は佛の法なることを顯示す、應に知るべし。次に〔一一二〕上に「說ける」大悲に依る

【一〇六】初地より九地に至るまで離障清淨漸次に勝るが故に上上の清淨といふ。

【一〇七】離障の中、波羅蜜の行最も勝れたるが故に第一義と稱す。

【一〇八】以上廣く願を明かし竟りて次に行を示す。

【一〇九】四攝法を以て衆生を敎化するを方便といふ。

【一一〇】餘殘とは殘餘の經文を指し、無厭足を釋す、十善道を修して息まざるなり。

【一一一】以下重ねて佛の十力は二

利益衆生戒の增上に五種の義あり。一には(二三)智、二には(二四)願、三には(二五)修行、四には(二六)集、五には(二七)集果なり。智とは三種の相有り。一には時の差別、二には報果の差別、三には習氣果の差別なり。

經に曰く、是の菩薩は復た是の思惟を作さく、此十不善の業道は上なる者は地獄の因緣、中なる者は畜生の因緣、下なる者は餓鬼の因緣なり。中に於て、殺生の罪は能く衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生せば、二種の果報を得ん。一には短命、二には多病なり。劫盜の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ、若し人中に生せば、二種の果報を得ん。一には貧窮、二には共財に自在を得ず。邪婬の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ、若し人中に生せば、二種の果報を得ん。一には婦貞良ならず、二には二妻相諍ひて己が心に隨はず。妄語の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生せば、二種の果報を得ん。一には多く誹謗せられ、二には恆に多人の爲めに誑かさる。兩舌の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生せば、二種の果報を得ん。一には破壞の眷屬を得、二には弊惡の眷屬を得。惡口の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せし

乘を捨することを稱す。

【二二】以上攝善法戒を說き竟りて、以下攝衆生戒を說く。

【二三】衆生を攝化利益せんが爲に業果を知るを智と名く。

【二四】智に由り願を生ず、自ら善に住して他も亦善に住せしめんとするを願と名く。

【二五】願に由りて正しく行ずるを修行と爲す。

【二六】已に自ら行じ已つて衆生を攝化せんと欲して先づ悲心を起す、此の大悲の心は能く化他の事を集起すが故に之を集と名く。

【二七】此の集心に依りて利他の行を起す、行は集に依りて生ずるが故に之を集果と稱す。

む。若し人中に生ぜば、二種の果報を得ん。一には常に惡聲を聞き、二には所有る言説には恆に諍訟あり。綺語の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生ぜば、二種の果報を得ん。一には説く所の正語も人信受せず、二には所有る言説を辯了すると能はず。貪欲の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には財を貪りて厭足あるとなく、二には多く求めて恆に意に從はず。瞋恚の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には常に他人の爲に、其長短を求められ、二には常に他人の爲に、惱害せらる。邪見の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。若し人中に生ぜば、二種の果報を得ん、一には常に邪見の家に生れ、二には心恆に諂曲す。諸の佛子よ、是の如く十不善の業道は皆是れ衆苦大聚の因緣なり。

論に曰く、(二八)時の差別とは不善業道の因果の上中下の差別に依る、經に「是の菩薩は是の思惟を作さく、此の十不善業道の上なる者は地獄の因緣、中なる者は畜生の因緣下なる者は餓鬼の因緣なり」といへるが如き故に。(二九)前は總じて不善業道の因を觀ず、今は別してその報果たる一切諸の惡處を觀ず、經に「殺生の罪は能く衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしめ、乃至邪見の罪も亦衆生をして地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ」といへるが如き故に。(三〇)習氣果とは人中

【二八】時の差別とは果に對して因を明かす、果に三時有り、之に對して因を辨ずるなり。
【二九】次に報差別を示す。報差別とは因に對して果を明かす、十不善の業の果報は各異るが故なり。
【三〇】習氣果とは人中に殘果を受くるをいふ。

に一一各二種の果あり、經に「若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には短命、二には多病、乃至若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には常に邪見の家に生れ、二には心恆に諂曲す」といへるが如き故に。是の中、時報の差別とは、苦の深重なることを示現するが故に。云何が示現するや。下なる者は餓鬼中にて深きが故に、中なる者は復轉た深きが故に。上なる者轉轉して重深なるが故なり。習氣の差別とは隨順して善道の中に至るが故に。總別合觀するに、惡道の中に無量の大苦あり、經に「諸の佛子よ、是の如き十不善の業道は皆是れ衆苦の大聚因緣なり」といへるが如し。云何んが願と爲すや。

經に曰く、菩薩は復た是の念を作さく、我れ當に十不善の業道を遠離して、樂ひて法行を行ずべしと。

論に曰く、願とは、復た樂ひて大乘の法を行ず、衆生を利益せんことを作さんが義の故に、善法を攝めんが故に、經に「菩薩は復た是の念を作さくといへるより。乃至樂ひて法行を行ぜん」といへるが故に。云何んが、修行するや。

經に曰く、菩薩は十不善の業道を遠離して、十善業道に安住し、亦他人をして十善の業道に住せしむ。

論に曰く、修行する者は自ら善法に住して、彼の障を遠離し、對治を修行し、亦衆生をして善法に住せしむるが故に、經にいへるが如く、「菩薩は十不善の業道を遠離して、乃至、亦他人をして十

善の業道に住せしむ」との故なり。云何んが集となす。

經に曰く、是の菩薩は復た一切の衆生の中に於て、安隱心、樂心、慈心、悲心、憐愍心、利益心、守護心、我心、師心を生じ、尊心を生ず。

論に曰く、集とは增上の悲に依るなり。復た衆生を念ふが爲めの故に、十種の心を生ず。復た次に、此の心は八種の衆生の爲めの故に生ず。一には惡行の衆生に於て、善行に住せしめんと欲するが故に、經にいへるが如く、安隱の心「を生ず」との故に。二には苦の衆生に於て樂具を不盡ならしめんと欲するが故に、經にいへるが如く、樂心「を生ず」との故に。三には怨憎の衆生に於て、加報を念はず、經にいへるが如く、慈心「を生ず」との故に。四には貧窮の衆生に於て、彼の苦を遠離せしめんと欲す、經にいへるが如く、悲心を「生ず」との故に。五には樂の衆生に於て不放逸ならしめんと欲す、經にいへるが如く、憐愍の心「を生ず」との故に。六には外道の衆生に於て現に佛法を信せしめんと欲するが故に、經にいへるが如く、利益の心「を生ず」との故に。七には同行の衆生に於て、退轉せざらしめんと欲す、經にいへるが如く、守護の心「を生ず」との故に。八には一切の攝菩提に於て、衆生を取ると己身の如く、是の諸の衆生は卽ち是れ我が身なりと願ふ、經にいへるが如く、〔三〕我心「を生ず」との故に。餘の二心を生ずる者は、彼の衆生を觀じ大乘の道に乘じて、進趣し、功德を集め具足す、經にいへるが如く、

〔三〕我心とは一切の衆生と自己と同體なりとの心。

〔二二二〕師心〔を生ず〕との故に、〔二二三〕尊心〔を生ず〕との故なり。集果とは勝れたる悲の攝むる所の〔二二四〕欲勝なり。

〔二二五〕復た次に、增上の顚倒に依るに三種の衆生を首となす。一には〔二二六〕欲求、二には〔二二七〕有求、三には〔二二八〕梵行求なり。欲求の衆生とは、二種あり。一には〔二二九〕受用の時、二には〔二三〇〕追求の時なり。受用には三種あり。一に〔二三一〕不共の財を受く、二には〔二三二〕厭足なき財を受く、三には〔二三三〕貯積する財を受く。追求には二種あり。一には現報を追求して惡行を習ふが故に、二には後報を追求して善行を習ふが故なり。有求の衆生にも亦二種あり。一には〔二三四〕道の差別、二には〔二三五〕界の差別なり。〔二三六〕梵行求の衆生にも亦二種あり。一には邪見、諸の外道等なり。二には正見、同法の小乘等なり。彼の諸の衆生は是の如きの道に趣く。これに隨順し、對治して所應の如き處に住せしむ。云何んが

【二二二】上位の菩薩に對して師心を生ず。
【二二三】具德圓滿の如來に對して尊敬の心を生ず。
【二二四】衆生を救濟せんと欲する念勝れたるを欲勝といふ。
【二二五】以下集果の別釋なり、初に略標し後に廣く釋す。
【二二六】外に五欲を求むるを欲求と名く。
【二二七】三有の中に正報の果を求むるを有求といふ。
【二二八】出世の道を求むるを梵行求といふ。梵は清淨の義なり。
【二二九】現に五欲に於て受用する時罪過を生ずるなり。
【二三〇】未だ五欲を得ざるを追求して罪過を起す。
【二三一】自己の得たる物を他と共に用ゐざることにて瞋の過を生ず。
【二三二】貪の過を起す。
【二三三】癡の過を增す。
【二三四】六道の差別、六道輪廻の過なり。
【二三五】三界の差別、三界を出離し難き過あり。
【二三六】前に列する十種の衆生を指す。

顚倒を首と爲すといふ。

經に曰く、菩薩は復た此の念を作さく、是の諸の衆生は邪見、惡意、惡心に墮して、惡道の稠林を行く。我れ應に彼の衆生をして眞實の道を行じて正見の道、如實の法の中に住せしむべしと。

論に曰く、邪見とは四顚倒を謂ふ。此の顚倒とは二倒を名けて（三七）惡意と爲す、專念に行ずるが故に。二倒を名けて（三八）惡心と爲す、專念の行に非らず、所謂る我淨の想なるが故なり。彼は正道稠林の行因に非らず。正道に非らずとは是れ諸の煩惱なり。稠林とは煩惱使の故なり。經にいへるが如く、「菩薩は復た此の念を作さく、是の諸の衆生は邪見惡意、惡心に墮して、惡道の稠林を行く」との故なり。彼の諸の衆生に隨順して對治するに（三九）妙法たる正念、正見、出世間の法をもつてす、經にいへるが如く、「我れ應に彼の衆生をして眞實の道を行じて、正見の道。如實の法の中に住せしむべし」との故に。云何んが不共の財を受くといふや。

經に曰く、是の諸の衆生は共に相破壞し、彼我を分別し、常に共に鬪諍し、日夜に瞋恨熾然として息まず、我れ應に彼の衆生をして無上の大慈の中に住せしむべしと。

論に曰く、不共の財を受くとは互に相破壞するなり。破壞に二種あり。一には對怨、心の中に於

【三七】常樂の二倒を惡意と名く、任運に起る倒見に非ずして、意志を用ゐて專念して起るが故に意といふ。

【三八】我淨の二倒は心身に依る根本の倒見なれば惡心と名く、意志を用ゐずとも常に任運に起るものなれば專念にあらずといふ。

【三九】前の四倒を對治する妙法は四念處法なり。

てす。二には闘諍、言の中に於てす。是の如きの破壞は報を作さんことを思念し、增長して行熾なり、經にいへるが如く、「是の諸の衆生は共に相破壞し、乃至日夜に瞋恨熾然として息まず」との故なり。心中に對怨すとは、彼我を分別すと此の言に示現す。言中に於て闘諍すとは、常に共に闘諍すと、此の言に示現す。報を作さんとを思念し、增長して行熾なりとは、日夜に瞋恨熾然として息まずと、此の言に示現す。彼の諸の衆生に隨順して對治するには、大慈の益を與ふ、經に「我れ應に彼の衆生をして無上の大慈の中に住せしむべし」といへるが故なり。云何んが、厭足なき財を受くといふ。

經に曰く、是の諸の衆生は心に厭足なく、常に他の財を求め、邪命をもつて自活す。我れ應に彼の衆生をして清淨の身口意の業、正命の法の中に住せしむべしと。

論に曰く、無厭足の財を受くる者に二種有り。一には心中に貪り、二には身口の中に於て、斗秤妄語等の方便をもつて奪ふが故に。經にいへるが如く、「是の諸の衆生は心に厭足なく、常に他の財を求め、【四〇】邪命をもつて自活す」との故に。彼の諸の衆生に隨順し對治するに清淨の身口意の業と、【四一】正命の自活とをもつてす。經にいへるが如く、「我れ應に彼の衆生をして清淨の身口意の業、正命の法の中に住せしむべし」との故に。云何んが、貯積する財を受くといふや。

【四〇】邪命とは不正の生業をいふ。

【四一】正命とは正當なる生業をいふ。

經に曰く、是の諸の衆生は貪欲、瞋恚、愚癡に隨逐するに因りて、常に種種の煩惱の熾火の燒然する所となり、出要の方便を志求すること能はず。我れ應に彼の衆生をして、一切の煩惱の大火を滅除して、清涼無畏の處に安置せしむべしと。

論に曰く、貯積する財を受くる者は、貪等は〔一四二〕因體の過なり。〔一四三〕彼に染著する故に、彼を散じ用ふるに於ては、瞋心を起すが故に、〔一四四〕彼を寶として翫び、受用する中に、樂の境界多きも、數數煩惱の火の爲めに、燒然せらるる過あり。彼の過を見ざれば、出意を求むること無し。經にいへるが如く、「是の諸の衆生は貪欲、瞋恚、愚癡に隨逐するに因りて、常に種種の煩惱の熾火の燒然する所と爲り、出要の方便を志求すること能はず」との故に。彼の諸の衆生に隨順して對治するは一切の煩惱を除きて清涼の處に置くなり。經にいへるが如く、「我れ應に彼の衆生をして一切の煩惱の大火を滅除して、清涼無畏の處に安置せしむべし」との故に。云何んが、現報を追求し、諸の惡行を習するや。

經に曰く、是の諸の衆生は常に愚癡、闇冥、妄見、厚翳の無明の黑闇の爲めに覆はれ。大黑闇の稠林に入りて、智慧の光明を遠離し、大黑闇の處に墮ち、其の所見に隨ひて、種種の嶮道に到る。我れ應に彼の衆生をして障礙無く、清淨の慧眼を得せしむべし。是の眼を以ての故に、一切法の如實

【一四二】貯財は貪瞋癡の三毒を生するが故に之を因體となす。
【一四三】彼に染著すとは貯財に對して貪欲心を起すをいふ。
【一四四】貯財を愛翫して樂しむは癡なり。

の相を知り、他教に隨はず、一切の如實無障礙の智を得せしめん。

論に曰く、(一四五)現報を追求して、惡行を習するとは、既に愚癡、闇冥、妄見、厚翳黑闇に覆はるる過あり。妄りに樂を見るが故に。未來の實の果報を見ざる過の故に。亦現在の實の果報を見ざるの過の故なり。經にいへるが如く、「是の諸の衆生は、常に愚癡、闇冥、妄見、厚翳の無明黑闇の爲めに、覆はる」との故に。又愚癡とは多く闇冥の爲めの故に、妄見とは、顚倒して樂と見るが故に、厚翳とは、未來の實の果報の過を見ざるが故に。黑闇とは、現在の實の果報の過を見ざるが故なり。(一四六)愚癡の因、(一四七)使事を滿足するは是れ過なり、及び(一四八)無漏智の處を遠離するが故なり。彼の善行の障は不善の行に順ふが故なり。經にいへるが如く、「大黑闇の稠林に入る」との故に、智慧の光明を遠離すとの故なり。稠林とは是れ愚癡を因となす使なる故に、大とは滿足する故なり。(一四九)大對を受至する過患あり。經にいへるが如く、「大黑闇の處に墮つ」との故なり。是の中、對とは黑闇を示現す、闇

【一四五】經文に四過を擧ぐ。一に愚癡覆心の過、二に惡法を增長し善治を遠ざくる過、三に苦報を受くる過、四に臨終の時悔見の過なり。論文に隨つに釋す。

【一四六】次に第二の增惡遠善の過を釋す。

【一四七】愚癡の心は使の爲に因となるが故に癡因といひ、癡に依りて起す所の貪瞋等を使と名く。

【一四八】無漏智の處とは出世の聖道なり、是れ善法を遠ざかることを釋す。

【一四九】次に第三、の受報の果を明す。論に受至大對の過といふ。業因の果を受くるを受といひ、因より果に到るを至といふ。大對とは受くる所の苦果(苦身及び苦處)は多く對礙あるが故に對と稱す、大とは對の極を示す。

中を行くに處處に障礙あるが如く、是の如く相似の法の故なり。大對を受くる事成りて諸の惡趣に至る、是の故に墮と名く。〔一五〇〕多く罪因を作りて臨終の時に於て、惡報の想を見、心に悔見の過を生ず、經にいへるが如く、「其の所見に隨ひて、種種の嶮道に到る」との故なり。〔一五一〕嶮道を見るとは悔見の故に、本罪の相を見るも彼れを對治する正見を集むる能はず。其の所見に隨ふとは死時に於けるが故なり。彼の諸の衆生に隨順して對治するに如實の法を以てし、障礙なき清淨の慧眼を得せしむ。經にいへるが如く、「我れ應に彼の衆生をして障礙なき清淨の慧眼を得せしむべし。是の眼を以ての故に、一切法の如實の相に知り、他に隨はず、一切の如實無障礙の智を得しめん」との故なり。云何んが、後報を追求して、諸の善行を習するや。

經に曰く、是の諸の衆生は世間生死の嶮道に隨順して、將に地獄、畜生、餓鬼の深坑に墜ちんとす。隨順して惡見の網中に入り、種種なる愚癡の稠林の覆ふ所と爲り、虚妄の道に隨逐して、顚倒の行を行じ、常に盲冥なるが故に、有智の導師を遠離して、出要の道處に非らざるを、出要の想なりと謂ひ、魔道に隨逐して、怨賊に攝せられ、善巧の導師を遠離して、魔意の稠林に入り、佛意を遠離す。我れ應に彼の諸の衆生の種種なる諸苦を拔濟して、世間の嶮道の艱難より度して、無畏の處に安置し、薩婆若の大城に住せしむべしと。

【一五〇】次に第四、臨終悔見の過を釋す。

【一五一】罪惡の因に依りて臨終の時に、地獄等の嶮道の相狀を見て心に悔を生ず、之を悔見と名く。

論に曰く、（一五二）後報を追求して、善行を習する者は嶮道に隨順する過あり、經にいへるが如く、「是の諸の衆生は世間生死の嶮道に隨順す」との故に。彼の嶮道に三種あり。一には自體、二には障礙、三には失なり。自體とは世間の乏少なる善の根本なるが故なり。障礙とは（一五三）八種あり。一には出でんことを求めて、而も世間に隨順し、三惡趣に墮つ、經にいへるが如く、「將に地獄、畜生、餓鬼の深坑に墮ちんとす」との故なり。二には網に入る、苦果の中に於て、妄りに樂想を生ずるが故に、經にいへるが如く、「隨順して惡見の網中に入る」との故なり。三には黑闇の稠林に覆はる。彼の癡使の覆ふ所となるに因るが故なり。爲めに苦の因を説くも知覺せず、經にいへるが如く、「種種なる愚癡の稠林の覆ふ所となる」との故なり。四には顚倒の道を行じて、眞實の樂を捨て、妄りに邪道に行ずるが故に。經にいへるが如く、「虛妄の道に隨逐して、顚倒の行を行ず」との故なり。五には（一五四）盲冥にして果を得て貪著し、愛欲に盲ひらるるが故に、經にいへるが如く、「常に盲冥なりとの」故なり。六には（一五五）導師を遠離す。惡道の中に生じ、及び放逸等の障ありて、佛世に値ふと雖も、見ず、聞かざるが故に、經にいへるが如く、「有智の導師を遠離す」との故なり。七には涅槃を希ひ求めて、而も彼の異處に趣き、謂へらく梵天等、梵世間

【一五二】出世間の勝義に迷ふ無明に由りて善業を造り、未來に人天の報を求むるをいふ。

【一五三】八の中、初の二は苦諦に迷ひ、次の二は集諦に迷ひ、次の二は道諦に迷ひ、後の二は滅諦に迷ふ。

【一五四】人天の樂果を得て之に愛著し、正慧眼なきが故に盲冥といふ。

【一五五】大聖に違背して正道を悟り難きが故なり。

等を以て出世の正見と爲せり、經にいへるが如く「出要の道處に非らざるを、出要の想と謂へり」との故なり。八には怨賊、(一五六)魔の境界に行き、諸慾に貪著し、(一五七)功德を劫め、(一五八)盡し集まらざらしむるが故に、經にいへるが如く「魔道に隨逐して、怨賊に攝せらる」との故なり。失とは三種あり。一には善の導師を離れて、不善の地に依る、經にいへるが如く「善巧の導師を遠離す」との故に。二には怨地に依止す、經にいへるが如く「魔意の稠林に入る」との故に。三には(一五九)善知識と作る地を遠離す、經にいへるが如く「佛意を遠離す」との故なり。彼の諸の衆生に隨順して對治するに、如實の法を以てし、世間を出でて、一切智の地に住せしむ、經にいへるが如く「我れ應に彼の諸の衆生の種種なる諸苦を拔濟し、世間の嶮道の艱難より度して、無畏の處に安置し、薩婆若の大城に住せしむべし」との故なり。云何んが、道の差別なる。

經に曰く、是の諸の衆生は大暴水の波浪の沒する所となり、欲流、有流、見流、無明流に隨順し、世間の漂流に隨順し、大愛の河に沒し、大駛流に在りて、正觀すると能はず。常に欲覺、瞋覺、惱覺、惡行廣きが故なり。愛見の水中にて羅刹に執へられ、順ひて欲林に入りて、廻り復り、欲事の中に求めて、深く愛著するが故に。我慢の陸地は焦枯せらるるも能く救ふ者

【一五六】魔の境界とは五欲なり。
【一五七】貪を魔の體となす、善法に違するが故に功德を劫むといふ。
【一五八】已に起れる功德を盡し、未だ起らざるを集めずとの意なり。
【一五九】佛は衆生の與に善知識となる、出世の善法は是れ佛の住處なるが故なり。

なく、六入の聚落に於て、動發すること能はず、自ら善行を離れて、正しく度る者なし。我れ應に彼の衆生に於て、大悲の心を生じ、善根の力を以て、之を拔濟し、無畏不染の寂靜を得て、諸の恐怖を離れ、一切智慧の寶洲に住せしむべし。

論に曰く、有求衆生の道差別とは、〔二六〇〕大河に沒在する過なり、經にいへるが如く、是の諸の衆生は大暴水の波浪の沒する所と爲るとの故に。彼の大暴水の波浪に三種あり。一には〔二六一〕自體、二には起難、三には、失なり。自體とは五種の相あり。一には深、無量の水なるが故に、經にいへるが如く、〔二六二〕欲流、〔二六三〕有流、〔二六四〕見流、〔二六五〕無明流に隨順すとの故に。二には流、世間に隨順して、常に流れて斷えず、經にいへるが如く、世間の漂流に隨順すとの故に。三には愛水の沒する所となる、經にいへるが如く、大愛の河に沒すとの故に。四には漂、念念に住せず、岸を見ざるが故に、經にいへるが如く、大駛流に在りて、正觀すること能はずとの故に。五には廣、欲等の念覺に隨順して、廣きが故に、經にいへるが如く、常に欲覺、瞋覺、惱覺ありて惡行廣しとの故なり。起難に四種あり。一には執、我我所の窟宅に執著して、動離することを能はざるが故に、經にいへるが如く、愛見の水の中にて羅利に執へらるとの故に。二には入趣、

【二六〇】六道に漂溺するを大河に喩ふ。

【二六一】煩惱は六道の河體なり、之に處するに害多きが故に起難といひ、離出の道を失ふを失と名く。

【二六二】欲界の煩惱を（無明と見とを除く）欲流といふ。

【二六三】色、無色兩界の煩惱（無明と見とを除く）を有流といふ。

【二六四】三界の諸見を見流といふ。

【二六五】三界の無明を無明流といふ。

先づ欲を捨て已りて還つて復た欲念中に轉入するが故に、經にいへるが如く、欲林に順入して、廻り復るとの故に。三には中著、受用の時に於て、欲等を求めて樂著するが故に、經にいへるが如く欲事の中に求めて、深く愛著すとの故に。四には洲、〔一六六〕用事の時の中に於て、我等の最勝なる〔一六七〕三種の我慢によつて、自ら高しとして彼を輕んず、經にいへるが如く、我慢の陸地に焦枯せらるとの故なり。失とは三種あり。一には救はるること無き失、惡道の中に處するも、人の濟拔するもの無し、經にいへるが如く、能く救ふ者無しとの故に。二には出意なき失、善道の中に處するも出離の心無し、經にいへるが如く、〔一六八〕六入の聚落に於て、動發すること能はずとの故に。三には異處に去るの失、諸の難處に生じて、佛世に値はず、經にいへるが如く、自ら善行を離れて、正しく度る者無しとの故なり。彼の諸の衆生に隨順して對治するに如實の法を以てし、一切智の洲に住せしむ、經にいへるが如く、我れ應に彼の衆生に於て、大悲の心を生じ、善根の力を以て之を拔濟し、無畏不染の寂靜を得て、諸の恐怖を離れ、一切智慧の寶洲に住せしむべしとの故なり。云何んが、界の差別なる。

經に曰く、是の諸の衆生は世間の牢獄の處に閉在し、衆多の患苦、多くの惱、妄想、愛憎に繫縛

〔一六六〕前に愛と見とを水に喩へ今は慢を洲陸に喩ふ。慢心は多く技能を恃むが故に用事の時といふ。

〔一六七〕我慢（下に對して自ら高しと爲す）、大慢（等侶に對して自ら大と驕る）、憍慢（上に對して不恭）の三種を三慢と名く。

〔一六八〕六入とは眼耳等の諸根、識の依つて起る處なれば六處ともいふ。

せられ憂悲共に行じ、愛鎖に繫がれ、三界の無明の稠林に入りて覆はる。我れ應に彼の衆生をして一切の三界の所著を遠離し、離相無礙の涅槃に住せしむべし。

論に曰く、有求衆生界の差別とは、牢獄に閉在する過なり、經にいへるが如く。是の諸の衆生は世間の牢獄に閉在すとの故に。此の牢獄の過に五種の隨逐あり、應に知るべし。(一六九)一には苦事、二には財盡、三には愛離、四には著縛、五には障礙なり。此れ五種の難の差別を示す。一には(一七〇)無病の難、多種の病苦と妄想愁惱なり。經にいへるが如く、衆多の患苦、多くの惱妄想との故に。二には資生の難、(一七一)愛不愛の事の中に於て、憎愛に縛せらる、經にいへるが如く、愛憎に繫縛せらるとの故に。三には親難、親愛のもの離壞し、憂悲を增長す、經にいへるが如く、憂悲共に行ずとの故に。四には戒難、色、無色の中に生じて、(一七二)暫らく犯戒を離ると雖も、(一七三)戒行の相違を免れず、愛欲の使に縛せらる、經にいへるが如く。愛鎖に繫がるとの故に。五には見難、世間の智を得るも彼と相違する無明使に覆蔽せらる、經にいへるが如く、三界の無明稠林に入つて覆はるとの故に。彼の諸の衆生に隨順して、對治するに如實

【一六九】三界を牢獄に喩ふ。獄中に必ず次の五過あり、喩に就いて之を明かす。苦事とは鞭杖捶撻をいひ、資生を費用するを財盡といひ、親屬と離るるを愛離といひ、枷鎖の身に著くを著縛といひ、出でんと欲するも能はざるを障礙といふ。

【一七〇】無病は樂、病苦は此樂を障ふる故に無病の難といふ。

【一七一】財物は愛する事、之を求めて愛心を生じ、貧窮は憎むべき事、之を厭ひて憎心を生ず。

【一七二】上二界に生を受くれば無慚愧を離るるが故に犯戒なしと雖、尙ほ眞の出離に非らざれば暫く離るといふ。

【一七三】出世の淨戒と相違す。

の法を以てし、離相無礙の涅槃に住せしむ、經にいへるが如く、我れ應に彼の衆生をして、一切の三界の所著を遠離せしめ、離相無礙の涅槃に住せしむべしとの故なり。云何んが邪見の諸の外道等なる。

經に曰く、是の諸の衆生は深く我相に著し、五陰の巣窟に於て、自ら出づること能はず、四顚倒を行じ、六入の空聚に依りて、常に四大の毒蛇の爲めに侵惱せられ、五陰の怨賊の爲めに殺害せられ、此の一切無量の苦惱を受く。我れ應に彼の衆生をして一切の障礙を離れ、空無我の智道に住せしむべし。所謂る涅槃は一切の障礙を滅す。

論に曰く、邪梵行の諸の外道等とは我相を執取する過なり。此れ餘の見の根本なり。經にいへるが如く、是の諸の衆生は深く我相に著すとの故に。彼の諸の衆生は、涅槃の城に趣かんと欲するも、我有るを以ての故に、五陰の舍に於て、動發すること能はず、經にいへるが如く、五陰の巣窟に於て、自ら出づること能はずとの故に。正道を行ぜんと欲するも、顚倒を以ての故に、彼の邪道を行ず、經にいへるが如く、四顚倒を行ずるが故なり。我の想に依恃するが故に、涅槃に趣かんと欲するも、虛妄の我見にて六入の聚に住す、經にいへるが如く、六入の空聚に依るとの故なり。老病死等の諸苦を受け、意に遠離せんと欲するも、離るることを得ず、恆に己が身に隨ふ、經にいへるが如く、常に四大の毒蛇の爲めに、侵惱せらるるとの故に。陰怨隨逐して放捨せず、經にいへ

るが如く、五陰の怨賊の爲めに、殺害せらるとの故に。常に種種なる諸苦の爲めに隨逐せらる、經にいへるが如く、此の一切無量の苦惱を受くとの故に。彼の諸の衆生に隨順して對治するに、如實の法を以てし、一切の障を離れて、涅槃に住せしむ。經にいへるが如く、我れ應に彼の衆生をして一切の障礙を離れ、空無我の智道に住せしむべし。所謂る涅槃は一切の障礙を滅すとの故なり。

云何んが、正梵行、同法、小乘等なる。

經に曰く、是の諸の衆生は小心狹劣にして、大乘を求めず、其の心に無上なる一切智智を遠離し、等しく出離の行あるも、而も聲聞、辟支佛の乘を樂ふ。我れ應に彼の衆生をして、微妙なる無上の佛法、深くして廣大なる意に安住せしむべし。諸の佛子よ、菩薩は是の如く隨順して、戒を持つ力は善能く廣く方便の行を起すが故に。

論に曰く、正しく梵行を行ずるは小乘を求むる過なり。此の小乘の意に二種あり。一には小心、佛法は微妙廣大にして無量なれば、其心退沒して證すると能はざるが故に。二には狹心、無量の衆生に於て、利益を作すとに懈怠なるが故に、經にいへるが如く、是の諸の衆生は小心狹劣にして、大乘の法を求めずとの故なり。復た小乘の心願に依る過あり、小乘を願ふが故に、經にいへるが如く、其の心に無上なる一切智智を遠離すとの故に。修行の過あり、(一七四)不定聚の衆生は實には大乘の

【一七四】不定聚とは佛道に入りて修行するも、必ず成佛すと定まらざる者をいふ。

出離の法あるも。而も小乘を修行す、經にいへるが如く、等しく出行あるも、而も聲聞、辟支佛の乘を樂ふとの故なり。彼の諸の衆生に隨順して對治するに如實の法を以てし、微妙なる無上の佛法、廣大なる心に住せしむるが故に、經にいへるが如く、我れ應に彼の衆生をして微妙なる無上の佛法、深くして廣大なる意に安住せしむべしとの故に。持戒の行に依るが故に、此の戒力を得て能く善法を作し、善巧に諸の善行を起すが故に。經にいへるが如く、諸の佛子よ、菩薩は是の如く隨順して戒を持つの力は善能く廣く方便の行を起すとの故なり。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の離垢地に住し已りて、多く諸佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを以ての故に。多百佛、多千佛、多百千佛、多百千那由他佛、多億佛、多百億佛、多千億佛、多百千億佛、多百千億那由他佛を見たてまつる。大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て供養し、恭敬し、尊重し、讃歎し、衣服、飲食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を衆僧に供養す。此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんことを願ひ、諸佛の所に於て。上恭敬の心を生ず。復た十善の法を受く。善法を受け已りて、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、終に中失せず。是の菩薩は無量の劫、無量の百劫、無量の千劫、無量の百千劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、無量の百千億劫、無量の百千億那由他劫に於て、慳嫉、破戒の垢心を遠離し、布施を習行し、持戒清淨なり。諸の佛

子よ、譬へば鍊眞金を成ずるに、礬石の中に置きて煮已りて、一切の垢を離れ、轉た復た明淨ならしむるが如し。諸の佛子よ、菩薩は此の離垢地の中に住するも亦復た是の如し。無量劫乃至無量の百千億那由他劫に於て、慳嫉、破戒の垢心を遠離して、布施を成就し、持戒淸淨なり。菩薩は爾の時に四攝法の中に於て、愛語偏へに多く、十波羅蜜の中には、戒波羅蜜增上せり。餘の波羅蜜は修集せざるには非ざれども、力に隨ひ、分に隨ふ。諸の佛子よ、是を菩薩摩訶薩の第二の菩薩離垢地を略說すと名く。

菩薩は是の地の中に住しては、多く轉輪聖王となり、法の自在を得て、七寶具足す。自在力ありて能く一切の衆生の破戒等の垢を除き、善方便を以て、諸の衆生をして、十善の業道を修行せしむ。作す所の善業は、布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は、皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず。乃至具足せる一切種、一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切衆生の中に於て首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、帥と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止と爲るべしと。

諸の佛子よ、是の菩薩摩訶薩は若し捨家して、勤行精進せんと欲せば、佛法の中に於て便ち能く家、妻子、五欲を捨て、出家を得已りて、勤行精進すれば、一念の間に於て、千の三昧を得、千の

佛を見上ることを得、千の佛の神力を知り、能く千佛の世界を動かし、能く千佛の世界に入り、能く千佛の世界を照し、能く千佛の世界の衆生を教化し、能く壽千劫に住し、能く過去、未來世の各千劫の事を知り、能善く千の法門に入り、能く身を變じて千と爲し、一一の身に於て、能く千の菩薩を示現し、以て眷屬となす。若し願力を以てせば、自在勝上なり。菩薩の願力は此の數に過ぎて、種種の神通を示す。或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通あり、乃至無量の百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、此の中、果の利益の校量して勝れたることは、初地に說けるが如く、此の地も亦是の如し。【一七五】有る者は同じく、無き者は應に知るべし。此の中、勝事とは無量劫に於て、慳嫉、破戒の垢心を遠離し、布施を成就して持戒清淨なる等なり。諸事勝れたるが故に。初地中に於ては戒未だ淨ならざるが故に、施も亦淨ならず。若し爾らば何が故に、初地の中に檀波羅蜜の增上を說きて、餘は如からざるや。然れども彼の檀波羅蜜等は此の地の中にて轉た勝れて淸淨なるが故なり。慳嫉、破戒等の垢を離るるを以て、是の故に、此の地を釋して離垢と名く。初地の中に金は但だ火鍊を以てして、外の貪等の麤垢を除くが故に、鍊金淸淨と說けり。今此の地に於ては復た礬石の中に置いて煮る、

【一七五】此の句は地果に就て初地と比較し有無を示す。地果の中、調柔果、攝報果、願智果の三は有りて前と同じ、發趣果は此の地に無し、前と異る。

自體の明垢を除くが故に、自性眞淨の故に、性戒淸淨の義を說くなり。

卷の第五

明地第三

論に曰く、第三の明地の差別に依るに四分あり。一には(一)起厭行分、二には(二)厭行分、三には(三)厭分、四には(四)厭果分なり。起厭行とは、謂はく十種の深念の心なり。厭行とは、一切行の無常を觀ずといふより、乃至未だ禪に入らざる〔以前なり〕。厭とは、四禪、四空、三摩跋提なり。厭果とは、四無量等の淨深の心なり。應に知るべし。

經に曰く、諸の佛子よ、菩薩は善く淸淨の心をもつて第二地を行じ已りて、第三の菩薩地を得んと欲するには、當に十種の深念の心を起すべし。何等をか十と爲す。一には淨心、二には不動の心、三には厭心、四には離欲の心、五には不退の心、六には堅心、七には明盛の心、八には淳厚の心、九には快心、十には大心なり。菩薩は是の十種の深念の心を以て第三地に入ることを得。

論に曰く、是の中、十種の深念の心とは、

(五)一には(六)彼に依りて起る淨深念の心なり。

【一】此地に禪定を修して、煩惱を厭伏するを起厭と名く。

【二】初入地の心に彼の厭を修起するを厭行と名く。

【三】初入地を厭行といひ、正住地の中に八禪等を修するを厭分といふ。

【四】此の地の滿足するを厭果分と名く。

【五】初の二を一對として根本

經に淨心といへるが如き故なり。二には(七)自乘を捨てざるに依る、經に不動の心といへるが如き故に。(八)三には(九)勝法を志求して、善方便を起す、此れ能く當來の貪欲を厭患す。四には現欲を貪らざるに依る、經にいへるが如く、厭心との故に、離欲の心との故なり。五には自乘を捨てざるに依りて進行す、經にいへるが如く、不退の心との故に。(一〇)六には(一一)自地の煩惱は破壞すること能はざるに依る、經にいへるが如く、堅心との故に。七には(一二)三摩跋提の自在に依る、經にいへるが如く、明盛の心との故に。(一三)八には禪定(一四)自在にして力有れば、下地に生ずと雖も而も退失せざるに依る、經にいへるが如く、淳厚の心との故に。(一五)九には(一六)彼の生に依る、煩惱染むると能はず、經にいへるが如く、快心との故に。十には衆生を利益するに依りて、(一七)諸有を斷たず、經にい

た立つ。初は離過の心、次は成善の心を明かす。

【六】後の二地の淨持戒の行に依りて、此の深心を起すが故に淨心といふ。

【七】自の住す所の大乘の法に依りて、堅心動ぜざるなり。

【八】次の三を一對とし、方便發修を明かす。初の二は發修離過、後の一は進行善法なり。

【九】二地を滿足して、三地に趣向するを、勝法を志求すといふ。

【一〇】次の三を一對とし、修し已りて成就せるを明かす。初の一は離過、後の二は成善なり。

【一一】三地に斷ずべき煩惱を深く伏して過患たらしめざるの義なり。

【一二】三摩跋提([illegible])は、等至又は等引と譯す。禪定のこと、此の句は善の體を明かす、體成するが故に出入自在なり。

【一三】此句は善の用を明かす。

【一四】自在とは受生自在なり。

【一五】次の二を一對となし、德用自在を明す。初は自行離過、後は利他自在を彰す。

【一六】後の生とは欲界を斥す、欲界に在るも欲界の煩惱に染せざるなり。快心とは染に在りて而も汙れざるが故に。

【一七】大悲攝化の爲めに三界の諸有を絶たずして受生するの義なり。

へるが如く、大心との故なり。已に起厭行分を說けり。次に厭行分を說かん。厭行に三種あり。一には（一八）護煩惱の行を修行す、二には（一九）護小乘の行を修行す、三には（二〇）方便攝行を修行す。護煩惱の行を修行すとは、一切行の無常を觀ずと〔及び〕救者あると無しとの此の二の十句に示現す。云何んが一切行の無常を觀ずるや。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は第三の菩薩地に住し已りて、正しく有爲の法、一切の行は無常、苦、不淨なりと觀ず。無常とは敗壞して久しく住せず、念念に生滅して、前際より來らず、去つて後際に至らず、現在にも住せず、是の如く正しく一切の諸行を觀ず。

論に曰く、是の中、（二一）命行住せざるが故に、總じて無常觀を明す、經にいへるが如く、正しく有爲の法、一切の行は無常なりと觀ずとの故なり。（二二）云何んが此れ無常なる。（二三）何者か是れ無常なるや。是の如く正觀するなり。云何んが此れ無常なるとは、依身轉ずる時（二四）力（二五）三種の苦を生ず、經にいへるが如く、苦との故なり。

【一八】有爲を厭離して垢障を捨つるを護煩惱の行と名く。護とは捨の義なり。

【一九】小乘狹劣の心を捨てて一切智を求め、深く衆生を念ふを護小乘の行と名く。

【二〇】前の二行に依りて勝修を發起し、廣大を求むるを方便攝行と名く。

【二一】命行とは有爲の諸法の相續するを命と名け、遷流するを行と名く。轉變相續して常住ならざるは無常の義なり。

【二二】前の有爲法の無常なる所以を問ふ。

【二三】有爲無常の體相を問ふ。

【二四】身體の轉化し遷壞する時自ら三苦を生ず、故に轉化を力と名く。

【二五】苦苦、壞苦、行苦を三苦と名く。疾病飢餓等より起る身心の苦惱を苦苦といひ、自己の愛著せるものの破壞せる時に感ずる苦惱を壞苦といひ、世の無常轉變なるより感ずる苦惱を行苦といふ。

(二六)飲食の力に依りて形色增損する等なり、經にいへるが如く、不淨との故なり。(二七)不護の諸惡の力に依りて、横に天壽する等、經にいへるが如く、無常との故なり。世界の成力に依りて滅壞するが故に、經にいへるが如く、敗壞との故なり。(二八)資生は主に依るも定まれる力あると無く、一處に住せず、經にいへるが如く、久しく住せざるが故なり。何者か是れ無常なるとは、無常に二種あり。一には少時、經にいへるが如く、念念に生滅するが故に。二には(二九)自性成せず、實に過去、未來、現在の三世の中に、生せず、轉せず、住せざるなり、經にいへるが如く、前際より來らず、去つて後際に至らず、現在に住せずとの故なり。是の如く一切の諸行を正觀するが故なり。是の如く一切の有爲法を觀ずるに無常の行の中に救者あること無し。

經に曰く、是の菩薩は是の如く眞實に一切の行を觀見するに救者有ること無し、依止する所なく、憂を共にし、悲みを共にし、熱惱を共にし、增愛に繫がれ、憂惱轉た多く、停積有ること無く、常に貪瞋癡の火の燃やす所と爲り、身の無量の病苦の增長するを見る。

論に曰く、此の菩薩は是の如く眞實に一切行を觀見するに、救者有ること無しと。第二の十句に

【二六】飲食の好惡に由りて形體不淨なり。

【二七】危嶮を冒し、毒藥を服する等のことを不護の力に依るといふ。

【二八】資生とは資財なり、衆生は其の所有主なりと雖、彼此互に相傳へて所有の主定らず此の故に一處に住せずといふ。

【二九】三世の中に諸法の自性なきが故なり。

此の無救を說くに〔三〇〕九種あり。一には無常の未だ至らざる中に於て、所依の苦無し、經にいへるが如く、依止する所無しとの故に。二には無常既に至るも能く救ふ者無し、無常至るを以ての故に多く憂苦を共にす。經にいへるが如く、憂を共にすとの故に。三には中間に同じく悲む、經にいへるが如く、悲みを共にすとの故に。四には同じく苦惱の事の中にて、憂悲隨逐して其力虛弱となり、轉た熱惱を增す、經にいへるが如く、熱惱を共にすとの故に。五には資生を追求する時、愛する所の事を欲し、愛せざるを欲せず、是の如くして妄想の愛憎に常に縛せらる、經にいへるが如く、憎愛に繫がるとの故に。六には受用時の中に樂み少く苦み多し、經にいへるが如く、憂惱轉た多しとの故に。七には身老ゆる時の中に於て、少壯の盛色は復た集むべからず、經にいへるが如く、停積有ること無しとの故に。八には少壯の時に於て、三種の受を具へて、貪等常に燒く、經にいへるが如く、常に貪瞋癡の火の燃やす所となるとの故に。九には年衰ふる時に於て、無量の病苦增長す、經にいへるが如く、身の無量の病苦增長することを見るとの故なり。後の三句は皆身の患の事を明す。何故に初說に在らざるや。身の數數の患の事を示すが故なり。云何んが護小乘の行を修行する。

經に曰く、是の菩薩は是の如きを見已りて、一切の行に於て轉た復た厭離して、如來の智慧に趣

【三〇】初の四句は死せんとする時に就て救者なきを明かし、次の二句は外に愛求する事の中に於て、過患ありて救者なきことを示し、後の三句は老時に就て無救を明かす。

く。是の菩薩は如來の智慧は思議すべからず、無等、無量にして得難く、無雜、無惱、無憂にして、能く無畏安隱の大城に至り、復た轉還せず、能く無量なる苦惱の衆生を救ふことを見る。

論に曰く、護小乘を修行すとは、一切有爲の行に於て、厭離を生じ已りて、佛の智慧に趣向するなり。如來の智に依るに二種の大あり。一には〔三一〕攝功德大、二には〔三二〕清淨大なり。攝功德大とは、五種あり。〔三三〕一には神力の攝功德大、經にいへるが如く、是の菩薩は如來の智慧の不可思議なるを見るとの故に。二には無比の攝功德大、〔三四〕敵對有ること無ければなり、經にいへるが如く、無等なりとの故に。〔三五〕三には〔三六〕大義の攝功德大、廣く能く無量の衆生を利益す。經にいへるが如く、無量なりとの故に。四には〔三七〕無譏嫌の攝功德大、希有にして得難し、經にいへるが如く、得難しとの故に。五には〔三八〕不同の攝功德大、諸の外道を雜へず、經にいへるが如く、無雜なりとの故なり。清淨大とは煩惱の使の苦を離れ涅槃を得るが故なり。煩惱の使を離るとは、煩惱の習無明を離れて、不雜なり、經にいへるが如く、無惱との故に。苦を離るとは、苦の根本盡くれば憂悲も

【三一】佛の菩提を求むること、菩提を德と名け、修成を攝と名く。

【三二】大涅槃を求むること、涅槃は諸障を離れて清淨なり。

【三三】初の二を一對となし、妙用自在を明かす。

【三四】寄對して勝を顯はさんとするも、對比すべきもの無き義なり。

【三五】次の三を一對と爲し、行德圓滿を明かす。

【三六】大義とは廣く他を利益すること。

【三七】此の句は自行の勝を明かす。淨德殊勝なるが故に譏嫌無しといふ。

【三八】他に寄對して異れることを示す。

隨つて盡く、經にいへるが如く、無憂との故に。涅槃を得とは、經にいへるが如く、能く無畏安隱の大城に至るとの故に。菩薩は涅槃の城に至りて、復た退還せず、而も能く衆生を利益し、世間、出世間の涅槃の勝事を得。經にいへるが如く、復た轉還せずとの故に。能く無量の苦惱の衆生を救ふことを見るとの故に。無救の衆生に依りて、十種の殊勝心を起す。

經に曰く、菩薩は是の如く如來智の無量なるを見、一切有爲の行の無量の苦惱を見て、復た一切の衆生に於て、轉た殊勝の十心を生ず。何等をか十となす。所謂衆生は愍むべし、孤獨にして救はるることなきをみては殊勝の心を生ず。恆常に貧窮なるをみては殊勝の心を生ず。三毒の火の熾んに燃えて息まざるをみては殊勝の心を生ず。三有の牢固の獄に閉在するをみては殊勝の心を生ず。常に煩惱、諸惡の稠林の爲に覆はるるをみては殊勝の心を生ず。正觀の力なきをみては殊勝の心を生ず。善法を遠離して心に喜樂なきをみては殊勝の心を生ず。諸佛の妙法を失ふをみては殊勝の心を生ず　而も常に世間の水流に隨順するをみては殊勝の心を生ず。涅槃の方便を失ふをみては殊勝の心を生ず。是を殊勝の十心を生ずと名く。

論に曰く、是の中、救はるること無しとは、孤獨なるを以ての故なり。(三九)孤獨にして無救なるに九種あり。一には恆常に貧窮にして孤獨無救なり。二には三毒の火熾んに燃えて息まず、孤獨無救

【三九】世間には慈父なきを孤といひ、子なきを獨といふ。孤獨の故に苦に逢ふも救はるることなし。衆生も是の如く、佛菩薩の慈父を遠け(孤)、自ら善子なきが故に(獨)、苦に在りて救はるることなきを示す。

なり。三には三有牢固の獄に閉在して、孤獨無救なり。四には常に煩惱、諸惡の稠林の爲に覆はれて孤獨無救なり。五には正觀の力無くして孤獨無救なり。六には善法を遠離して心に喜樂無く孤獨無救なり。七には諸佛の妙法を失うて孤獨無救なり。八には而も常に世間の水流に隨順して孤獨無救なり。九には涅槃の方便を失うて孤獨無救なり。是の中、(四〇)欲求の衆生に依るに「二あり」。(四一)心に厭足無きと、他の資財に於て、求めて休息無きとなり。此の二は應に知るべし。經にいへるが如く、恆常に貧窮なるをみて殊勝の心を生ずとの故に。三毒の火熾んに燃えて息まざるをみて殊勝の心を生ずとの故なり。(四二)有求の衆生に依るに「二あり」。(四三)六道の世間に輪轉するが故に。(四四)彼の因の煩惱に覆はるるが故に、常に(四五)難處に生ずるが故に、是の如きの三句は次第して應に知るべし。經にいへるが如く、三有牢固の獄に閉在せるをみて殊勝の心を生ずとの故に、(四六)正觀の力無きをみて殊勝の心を生ずとの故なり。(四七)梵行求の衆生に依るに「四あり」。(四八)勝念を起さざる者と、

【四〇】常に五欲を追求する衆生の意。

【四一】求めて厭くことを知らず常に不足の念を懷くこと。

【四二】有とは生を受くること、世間に出生せんことを求むるを有求といふ。

【四三】六道の苦樂に繫縛せらるること。

【四四】六道の原因なる煩惱の義。

【四五】難處とは佛法に遇ふこと能はざる八難處のこと、即ち教導を得ざるが故に世間を出離すること能はざるなり。

【四六】難處に生じて教導を受けざるが故に正觀の力無しといふ。

【四七】梵行とは清淨の行の意。淨行を修して出離を求むる者を梵行求と名く。

【四八】前三は小乘の行、後の一は外道の行なり、大乘の因を修せざるを勝念を起さずといふ。

(四九)增上慢を懷く者と、(五〇)涅槃に入るの心無き者と、妄りに外道を行ずる者とあり。是の如きの四句は次第して應に知るべし。經にいへるが如く、善法を遠離して心に喜樂無きをみて殊勝の心を生ずとの故に、諸佛の妙法を失ふをみて殊勝の心を生ずとの故に、而も常に世間の水流に隨順するをみて殊勝の心を生ずとの故に、涅槃の方便を失ふをみて殊勝の心を生ずとの故なり。次に衆生を救度する精進行を說きて此の十心を發す。

經に曰く、是の菩薩は諸の衆生界の是の如く具さに種種の苦惱を受くることを見已りて、大精進の行を發す。是の諸の衆生を我れ應に救ふべし、我れ應に解くべし、應に清淨ならしむべし、應に得脫せしむべし、應に善處に著せしむべし、應に安住せしむべし、應に歡喜せしむべし、應に所宜を知らしむべし、應に得度せしむべし、應に涅槃せしむべし。

論に曰く、(五一)何の處にか救度せん、何を以て救度せん、云何んが救度を成せん、此れ衆生を救度する差別を分別す。何の處にか救度せんとは(五二)業妄想の中と、(五三)煩惱妄想の中と、(五四)生妄想の中とに於てす。經にいへるが如く、(五五)我れ應に

【四九】大菩提の果を求めず、究竟の處に至らずして、而も究竟最上の念を生ずるが故に增上慢といふ。
【五〇】大乘の涅槃果を求めざるの義。
【五一】初に救度の處を問ひ、次に救度の行を問ひ、後に所得の果を問ふ。
【五二】業とは身口意の造作をいふ。
【五三】煩惱とは惡業の因たる煩惱なり。
【五四】生とは三界に生を受けたる苦果をいふ。此の三皆妄心より起るが故に妄想と名く。
【五五】次の經文の三句は前の三義に應じて救度を明かす卽ち業縛を解き、煩惱の汙を清淨にし、苦報を脫せしむ。

解くべしとの故に、應に淸淨ならしむべしとの故に、應に得脫せしむべしとの故に、是の如く次第して我れ應に救度すべきが故なり。何を以て救度せんとは、（五六）三學を授けて攝取するが故に、勸めて持戒の處に置くが故に、勸めて定慧の處に住せしむるが故なり。經にいへるが如く、應に善處に著せしむべしとの故に、應に安住せしむべしとの故なり。是の如く次第に三昧の地なるが故に、定慧合せ說くなり。復た勸めて持戒の處に置くに（五七）二種あり。一には疑網を除きて戒を信ぜしむるが故に、經にいへるが如く、應に歡喜せしむべしとの故に。二には已に戒に入れる者をして心に樂住して安固不動ならしむ、經にいへるが如く、應に（五八）所宜を知らしむべしとの故に。復た勸めて定慧の處に住せしむとは（五九）掉沒、隨煩使を滅除す、經にいへるが如く應に涅槃せしむべしとの故なり。是を護小乘の行を修行すと名く。云何んが方便攝行を修行するや。

經に曰く、菩薩は是の如く善く一切有爲の行を厭離し已りて、深く一切の衆生界を念ひ、一切智智の無量の利益に趣き、卽時に如來の智慧に依りて衆生を救度し、是の思惟を作さく、此の諸の衆生は大苦、煩惱、業の中に墮在す、何の方便行を以て、之を拔濟して、涅槃の畢竟の樂に住せしめんやと。

【五六】三學とは戒定慧なり。是れ總じて行體を擧げ、次に別して其の相を釋す。

【五七】初句に疑を除くは持戒の始にして、後句に安固不動なるは持戒の終なり。

【五八】宜しきを量りて授くるの意。

【五九】掉沒とは心の掉擧と惛沈とにして定心の障なり。隨煩使とは慧の障なり。

論に曰く、是の中、厭離と深念と利益とは三種の因を示現す。一には妄想の因を遠離す、善く一切有爲の行を厭離すとの故に。二には世間の因を捨てず、深く一切の衆生界を念ふとの故に。三には精進の因を發す、一切智智の無量の利益に趣くとの故なり。中に於て利益の處に趣くとは、能く彼の道を修行するが故なり。深く念ふとは、能善く衆生を化するが故なり。如來の智慧に依りて衆生を救度すとは此の言は方便の攝行を發起するとを示現す。經にいへるが如く、是の思惟を作さく、此の諸の衆生は大苦の煩惱業の中に墮在す、何の方便行を以て之を拔濟し、涅槃の畢竟の樂に住せしめんやとの故なり。大苦、煩惱、業の中に墮在すとは、苦とは生妄想なり、煩惱とは煩惱妄想なり、業とは業妄想なり。涅槃の畢竟の樂とは、無上の涅槃の故なり。是の中、(六〇)方便攝行に三種あり。一には證畢竟盡、二には起上上證畢竟盡、三には彼の起る依止の行なり。

經に曰く、是の菩薩は是の如きの念を作さく、無障礙の解脫智の處を離れず、彼の無障礙の解脫智處は一切法の如實の覺を離れず、彼の一切法の如實の覺は無行無生の行慧を離れず、是の如き智慧光明は禪方便の決定智慧觀を離れず、彼の禪方便の決定智慧觀は聞慧の方便

【六〇】方便攝行を明す。經文には具さに五法四對あり。五法とは無礙解脫の慧、如實智、無行の慧、禪定、聞慧是なり。四對とは一に聞に依りて禪を得、二に禪に依りて慧を發す、三に慧に依りて實智を得、四に實智に依りて無礙智を得る也。論に五法を攝して三となし、初の一は佛果を窮盡するを以て證畢竟盡と名け、末後の聞慧を彼の起る依止の行と爲し、中間の三種を起上上證畢竟盡と名く。蓋し此の三種は次第に下は上を起し漸次に增上して佛果に至るが故に起上上證と稱するなり。

を離れず。

論に曰く、證畢竟盡とは無障礙の解脱智の中に住するなり、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如きの念を作さく、無障礙の解脱智の處を離れずとの故に。彼れ盡く如來の說きたまふ所の一切法は如實の覺に隨順して起るを以て、此の如實の覺を以て彼の無障礙の解脱智を起す。經にいへるが如く、彼の無障礙の解脱智の處は一切法の如實の覺を離れずとの故に。此れ自相同相の無分別の行慧なり、經にいへるが如く、彼の一切法の如實の覺は無行無生の行慧を離れずとの故なり。是の如きの智慧光明は禪方便の決定智慧觀を離れずとは、彼の慧は此の中に光明と名く。是の光明に依るが故に明地と名くるなり。彼の菩薩は禪定の中に於て、方便決定の智慧觀なり、經にいへるが如く、彼の禪方便の決定智慧觀は聞慧の方便を離れざるが故なり。彼の禪方便とは勝進の禪を得るが故に、決定とは他に於て決定せるが故に。智慧觀とは自らの智慧を以て觀ずるが故なり。是を起上上證畢竟盡と名く。彼れ是の如きの智慧觀を聞慧の方便に依りて得。此は是れ彼の起る依止の行なり。聞慧の方便は是れ起る所依なり。是の故に修行は是を彼の起る依止の行と名く。是の中、行とは日夜に法を求め、法を聞き、是の如く次第して敎に依り、義に依る。

經に曰く、菩薩は是の如く正觀して知り已つて、轉じて復た勤修して正法の行を求め。日夜に常に求めて法を聞き、法を喜び、法を樂み、法に依り、法に隨ひ、法を益し、法を思ひ、法を究覺し、法

に歸依し、隨順して法を行ず。

論に曰く、是の中、正法の行を求むとは經教に依り、義に依ること、前に說けるが如し。日夜に常に求めて法を聞き、法を喜び、法を樂むとは慢心無く、妬心無く、他を折伏する心無くして義を問ふが故なり。法に依るとは大乘の教法に依りて自見正しく取つて忘失せざるが故なり。法に隨ひ、法を益し、法を思ふとは、讀誦に依り、他の爲に說くに依り、靜處に義を思ふに依るが故なり。法を究竟すとは定に依りて修行するが故なり。法に歸依すとは出世間の智に依るが故なり。隨順して法を行ずとは、解脫に依る、諸佛の解脫の法に於て隨順して彼れ行ずるが故なり。是の中、正法の行を求むると、常に求めて法を聞くと、此の初の二句は常に勤行するとを示現するが故に。法を喜ぶ等の九句は正しく修行することを示現するが故に。彼れ常に勤行するは何を以て因となすや、恭敬して法を重んじ畢竟して盡くることを示現するが故なり。彼の菩薩は財を以て首となし、財寶の中、及び王位の處、或は生天の處、世間の淨中、及以び己身よりも、法を以て重しと爲す。

經に曰く、菩薩は是の如く方便して佛法を求むるが故に、諸の財錢、穀倉庫、寶藏等の事にして捨つること能はざるもの有ること無し。此の物の中に於て、難想を生ぜず、但法を說く者に於て、難遭の想を生ず。是の菩薩は佛法を求めんが爲めの故に、用ふる所の外財にして而も捨つること能はざるもの有ること無く、所作、供給、尊事にして而も行ふこと能はざるもの有ること無く、憍慢、我慢、大

慢等にして而も捨つること能はざるもの有ること無し。質直にして柔軟なるが故なり。身苦にして而も受くること能はざるもの有ること無し。是の菩薩は勝財の心を成就することを得て、若し一句の未曾聞の法を聞かば、三千大千世界に滿つる珍寶を得たるに勝れり。是の菩薩は一偈の正法を聞くことを得ば、上財の想を生じて、轉輪聖王の位を得たるに勝れり。復た勝財の心を得て、若し未曾聞の法を得て、能く菩薩の行を淨めば、釋提桓因、梵天王の處に無量劫に住することを得るに勝れり。是の菩薩は若し人あり、來りて是の如きの言を作さん、我れ汝に佛の所説の法一句、能く菩薩の行を淨むるものを與へん、汝今若し能く大熾燃の火坑に入りて、大苦を受けなば、當に相ひ與ふべしと。是の菩薩は是の如きの念を作さく、我れ一句の佛所説の法、能く菩薩の行を淨むるものを受けんが故には、尚三千大千世界に於て、中に滿てる大火に梵天より投下せん、何に況んや人中の諸の小苦惱をやと。菩薩は是の如く精進の行を發して、諸の正法を修し、聞く所の法に隨ひ、寂靜の處に於て、悉く能く正觀す。

論に曰く、彼の菩薩は法を重んぜんが爲めの故に、能く一切の財物を捨つ、經にいへるが如く、菩薩は是の如く方便して佛法を求め、乃至、但法を説く者に於て、難遭の想を生ずとの故に。彼の財の得る所の處、田宅等の外財も彼亦能く捨つ、經にいへるが如く、是の菩薩は佛法を求めんが爲の故に、用ふる所の外財にして捨つる能はざるもの有ること無しとの故に。及び彼の財の爲す所の

內法を此れも亦能く捨つ、經にいへるが如く、內財にして捨つること能はざるもの有ること無しとの故に。及び彼の爲す所も、是れも亦能く捨つ、身行の恭敬、奉給等なり、經にいへるが如く、所作の供給、尊事にして行ふこと能はざるもの有ること無しとの故に。誰か此の物に於て能く得、能く捨てん。彼の高大の意を此れも亦能く捨つ、經にいへるが如く、憍慢、我慢、大慢等にして捨つる能はざるもの有ること無し。質直、柔軟なるが故なりと。應に護るべき所の者を彼亦能く捨つ、種種の身苦にして受けざる無し、經にいへるが如く、身苦にして受くる能はざるもの有ること無しとの故なり。衆多の勝妙の財寶を得るに於て、然も愛樂せず、法を重んずる心成ずるが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は勝財の心を成就するとを得、乃至三千大千世界に滿つる珍寶を得たるに勝れりとの故なり。是を財の中に於て勝れたりと名く。云何んが王位等の中にて勝れたる。是の菩薩は法を得て轉た喜心を生じ、成就し、轉輪王の位、釋梵天王等を得たるに勝れり、經にいへるが如く、是の菩薩は一偈の正法を聞くことを得て、上財の想を生じ、乃至釋提桓因、梵天の上處に無量劫に住することを得るに勝れりとの故に。法を求めんが爲の故には三千大千世界に滿つる熾然たる火中、及び地獄の中にも身を投じて久しく苦惱を受く、經にいへるが如く、是の菩薩は若し人有り、來つて是の如きの言を作さん、我れ汝に佛の所說の法一句を與へん、乃至何に況んや人中の諸の小苦惱をやとの故に。是の中、一句の法を聞くとは、謂はく字句の法を聞くなり。一偈の法を聞くこ

とを得とは、謂はく偈の法を聞くが故なり。能く菩薩の行を淨むとは謂はく義を聞くが故なり。此の正しき修行は何を以て因と爲すや。寂靜の處に依りて思惟し、正觀することを示現するが故なり、經にいへるが如く、菩薩は是の如く精進の行を發し、乃至悉く能く正觀すとの故に。云何んが厭分なる。是の菩薩は諸の法を聞き已つて、說の如く修行して乃ち佛法を得ることを知りて、禪、無色無量の神通に入る。彼れ樂處に非らず、中に於て染せず、必定、應に作すべきが故に。

經に曰く、是の菩薩は諸法を聞き已つて其の心を降伏し、空閑の處に於て心に是の念を作さく、說の如く行ずる者は乃ち佛法を得ん、但口の言ふ所のみを以て清淨を得べからずと。是の菩薩は此の明地に住して、說の如く行ずるに因るが故に、卽ち諸の欲、惡不善の法を離れて、覺有り、觀有り、離れて喜樂を生じ、初禪の行に入る。是の菩薩は覺觀を滅して內清淨に、心一處に住し、覺無く、觀無く定喜樂を生じて、二禪の行に入る。是の菩薩は喜を離れ、捨を行じて憶念し、安慧ありて身に樂を受け、諸の賢聖は能く說き、能く捨し、念に樂を受けて三禪の行に入る。是の菩薩は苦を斷ち、樂を斷つ。先に憂喜を滅して苦ならず樂ならず。捨念清淨にして四禪の行に入る。是の菩薩は一切の色想を過ぎ、一切の有對の想を滅し、一切の別異の想を念せず、無邊の虛空を知りて、卽ち無邊の虛空處の行に入る。是の菩薩は一切の無邊の虛空想を過ぎて、無邊の識を知り、卽ち無邊の識處の行に入る。是の菩薩は一切の無邊の識想を過ぎて、無所有を知り、卽て無所有處の行に入る。是の菩薩は一

切無所有の處を過ぎて、非有想非無想の安隱を知り、即ち非有想、非無想處の行に入る。但法に隨順して行ずるが故に、而も樂著せず。

論に曰く、何の義を以ての故に、禪と無色と無量の神通とに入るや。五種の衆生の爲の故なり。一には（六一）禪樂憍慢の衆生の爲の故に、諸禪に入る。二には（六二）無色解脱の憍慢の衆生の爲の故に、無色定に入る。三には苦惱の衆生の爲めに善處に安んじ、永く樂を與へしめんが故に、應に彼の苦を解きて受けざらしむべきが故に、慈悲無量に入る。四には解脱を得たる衆生の爲めの故に、喜捨無量に入る。五には邪歸依の衆生の爲めの故に、勝れたる神通力に入りて、正しく義を信ぜしめんが故なり。此の地にて不退の禪を得るが故に、名けて三昧地と爲す。前地に三昧無きにあらず、此の地勝るるが故なり。是の中、禪と無色との差別に四種あり。一には離障、二には修行對治、三には修行利益、四には彼の二の依止の三昧なり。是の初禪の中にて諸の欲、惡不善の法を離るるは是を離障と名く。經にいへるが如く、即ち諸欲、惡不善の法を離るとの故に。（六三）覺有り、觀有るは是を修行對治と名く。經にいへるが如く、覺有り、觀有りとの故に。喜樂は是を修行の利益と名く。經にいへるが如く、離れて

【六一】世俗の四禪を修得して或は禪樂に愛著し、或は高慢を起すものあり。道を以て化し難きが故に、自ら諸禪に入りて彼に過ぎ、以て其の所著を奪じ慢意を息めしむ。

【六二】四無色を修得して之を涅槃と謂ひ己が所得を恃むものあり。彼の慢意を息めしめんが爲に自ら無色定に入る。

【六三】覺觀とは尋求覺察する思惟作用をいふ。其の麤用を覺といひ、細用を觀と名く。新譯には之を尋伺と稱す。

喜樂を生ずとの故に。初禪の行に入るとは是を彼の二の依止の三昧と名く。經にいへるが如く、初禪の行に入るとの故なり。第二禪の中に、覺觀を滅するは、是を離障と名く。經にいへるが如く覺觀を滅すとの故に。內淨とは是を修行對治と名け、覺觀の障を滅するなり。經にいへるが如く、內淸淨にして、心一處に。覺無く、觀無しとの故に。心一處とは無漏不斷の三昧行を修して、心一境に住するが故なり。定喜樂を生ずるは、是を修行利益と名く。經にいへるが如く、定喜樂を生ずとの故に。二禪の行に入るは、是を彼の二の依止の三昧と名く。經にいへるが如く、二禪の行に入るとの故なり。第三禪の中、離喜は是を離障と名く。經にいへるが如く、喜を離るるが故に、行捨、憶念、安慧は、是を修行對治と名く。經にいへるが如く、捨を行じて憶念し、安慧なりとの故に。身受の樂とは是を修行の利益と名く。經にいへるが如く、身に樂を受くとの故に。三禪の行に入るは、是を彼の二の依止の三昧と名く。經にいへるが如く、三禪の行に入るとの故なり。第四禪の中に、苦を斷ち、樂を斷ち、先に憂喜を滅するは、是を離障と名く。經にいへるが如く、苦を斷ち、樂を斷ち、先に憂喜を滅すとの故に。捨念淸淨なるは是を修行對治と名く。經にいへるが如く、捨念淸淨なりとの故に。苦ならず、樂ならざるは是を修行の利益と名く。經にいへるが如く、苦ならず、樂ならずとの故に。四禪の行に入るは、是を彼の二の依止の三昧と名く。經にいへるが如く、四禪の行に入るとの故なり。無色の三摩跋提にも亦四種あり。一には離障、二には修行對治、

三には修行利益、四には彼の二の依止の三昧なり。一切の色想を過ぐとは、眼識の想を過ぐるが故なり。一切の有對の想を滅すとは、耳鼻舌身識の和合の想を滅するが故なり。一切の別異の想を念はずとは、意識和合の想を念はざるが故なり。意識は一切の法を分別するが故に、別異の想と說く。是を離障と名く。是の如きを對治するは色等の境界の想を過ぐ。色等の境界を分別せず、無我を見るが故に。是を修行對治と名く。無邊の虛空を知るとは、是を修行の利益と名く。卽ち無邊の虛空の行に入るとは、是を彼の二の依止の三昧と名く。一切の無邊の虛空の想を過ぐとは、是を離障と名く。是の如きを對治するは彼の無邊の虛空を過ぎて、外念の麤分別の過患を見る。是を修行對治と名く。無邊の識を知るとは、是を修行の利益と名く。卽ち無邊の識の行に入るとは、是を彼の二の依止の三昧と名く。一切の無邊の識想を過ぐとは、是を離障と名く。是の如きを對治するは彼の無邊の識を過ぎて、麤事の念分別の過患を見る。是を修行對治と名く。無所有を知るとは、是を修行の利益と名く。卽ち無所有の行に入るとは、是を彼の二の依止の三昧と名く。一切の無所有の想を過ぐとは、是を離障と名く。是の如きを對治するは彼の無所有を過ぎて、麤念の分別の過患を見る。是を修行對治と名く。非有想非無想の安穩を知るとは、是を修行の利益と名く。卽ち非有想非無想の行に入るとは、是を彼の二の依止の三昧と名く。已に厭分を說けり。云何んが厭果なる。謂はく、四無量、五通神等なり。云何んが四無量なる。

經に曰く、是の菩薩は慈心隨順して廣大無量、不二にして瞋恨なく、對無く、障無く、惱害無く、徧く一切世間の處に至り、法界、世間に最たり。虛空界を究竟して、徧く一切世間の行を覆ふ。是の如く、菩薩は慈悲心隨順し、喜心隨順し、捨心隨順し、廣大無量にして不二、瞋恨無く、對無く、障無く、惱害無く、徧く一切世間の處に至り、法界、世間の最たり、虛空界を究竟し、徧く一切世間の行を覆ふ。

論に曰く、無量に三種あり。一には(六四)衆生念、二には(六五)法念、三には(六六)無念なり。衆生念とは四種の相差別あり。一には與樂、二には障對治、三には清淨、四には攝果なり。云何んが與樂なる。三種の樂を與ふるなり。一には欲界の樂を與へ、二には色界の(六七)同喜樂を與へ、三には(六八)不同喜の樂を與ふ。彼は苦を離れ、喜を離るゝが故なり。(六九)不二とは亦是れ廣大無量なり、經にいへるが如く、是の菩薩は慈心隨順し、廣大無量にして、不二なりとの故なり。云何んが障對治なる。(七〇)不愛の者に

【六四】衆生念とは諸衆生を緣念して樂を與へんと欲するなり。

【六五】法念とは諸の衆生の五蘊の法數、及び其の起る所の善惡等の法を知り用ゐて以て教化す。

【六六】無念とは衆生の體性空なることを知り、怨親平等の大悲心を起す。以上の三種を念といふは他の經論には緣といふ。蓋し緣とは心緣の謂にして念の義也。

【六七】初禪二禪の樂は樂と喜と俱なるが故に同喜の樂といふ。

【六八】三禪以上は、喜を以て過患となし、之を離るるを樂となすが故に、不同喜の樂といふ。

【六九】衆生に樂を與ふる時、彼此を簡ぶこと無きが故に不二といふ。

【七〇】怨恨ある者に損害を加へ、親愛する者に樂を與ふ、之を障と爲す。

與へ、愛する者に與ふ。此れ障對治なり、經にいへるが如く、(七一)瞋恨無く(七二)對無きが故に。云何んが清淨なる。正しく身心の(七三)不調、睡眠、掉悔、諸蓋等を斷ずるなり、經にいへるが如く、無障なりとの故に。云何んが攝果なる。欲色界の中に(七四)正果と習果とを受けて苦事無きが故なり、經にいへるが如く、惱害無しとの故に。云何んが法念なる。徧く一切の處、所有る欲、色、無色界、凡夫、有學、無學、衆生に等しき法及び衆生の(七五)所有る分別して作す者は皆能く念知す、經にいへるが如く、徧く一切世間の處に至るとの故に。無念とは二種あり。一には自相無念、法の無我を觀じて世間の中に最たり、經にいへるが如く、法界世間に最たりとの故に。二に徧至無盡の觀、經にいへるが如く、虛空界を究竟すとの故に。一切の世間とは一切の世界に普く行ずるが故なり、經にいへるが如く、徧く一切世間の行を覆ふとの故に。諸の神通とは、四の通明智と第五の明見となり。初の一の神通は身業の清淨、天耳と他心智との二通は口業の清淨、宿命と生死智との二通は意業の清淨なり。一の身通は能く衆生の所に到り、天耳、他心の二通は能く說法の、音聲と及び義とを知るが故に。他心を知るを以ての故に、種種の言音に隨ひて皆能く盡く知る。此の義に依りて

【七一】瞋恨なしとは前障を治す。

【七二】對無しとは若し偏親あれば便ち怨對あり、怨親なきが故に對無しといふ、後障を治するなり。

【七三】身心不調なるが故に身口意の上に惡業を造る。

【七四】慈心は禪定に依つて起り欲惡不善の障を遠離するが故に、色界に於て其の正果を受く。此の慈行の餘勢は、後に欲界に生じて習果を受く。

【七五】心の起す所の善惡等なり。

種種の異名を說いて衆生に隨ひて用ふるが故なり。去來の二通は盡く衆生の過去未來の應に化を受くべき所を知るが故に。云何んが身通なる。

經に曰く、是の菩薩は無量の神通力を現じ、能く大地を動かし、一身を多身と爲し、多身を一身と爲し、現沒し、還出し、石壁山障も皆能く徹過すること虛空を行くが如く、虛空の中に於て跏趺して去ること猶ほ飛鳥の如く。地に入出するは、水の如く異ることなし、水を履むこと地の如く、身より烟焰を出すこと大火聚の如く、身中より水を出すは猶ほ大雲の如く、日月の大神德有り、大威力有るも而も能く手を以て捫摸して之を摩す。身力自在にして乃し梵世にも至る。是の菩薩は天耳界淸淨なること人に過ぐるを以て、悉く人天の二種の音聲を聞く、若くは近く、若くは遠く、乃至蚊虻蠅等も悉く其の聲を聞く。是の菩薩は他心智を以て、實の如く他の衆生の心及び心數の法、貪心有るは如實に貪心有ることを知り、貪心を離るるは如實に貪心を離れたることを知り。如實に瞋心有ると、瞋心を離るると、癡心有ると、癡心を離るるとを知り。如實に染心有ると、染心を離れたると、小心と、廣心と、大心と、無量心と。攝心と、不攝心と、定に住する心と、定に住せざる心と、解脫の心と、解脫せざる心と、求心と不求心とを知り、上心は如實に上心なるを知り、上心にあらざるは如實に上心にあらざるを知る。是の如く他心智を以て如實に他の衆生の心及び心數の法を知る。是の菩薩は如實に無量の宿命を念知す。諸の生ずる所の處も亦能く念知す。一生、二、三、四、五、乃至十、二十、

三十、四十、五十〔生〕なるも亦能く念知す。百生を念知し、無量の百生、無量の千生、無量の百千生をも念知し、成劫、壞劫、及び成壞劫。無量の成壞劫を念知し、乃至、百劫、千劫、百千劫、億劫、百億劫、千億劫、百千億劫を念知し、乃至無量の百千萬億那由他劫をも念知す。我れ本某處に在りて、是の如きの名、是の如きの姓、是の如き生、是の如きの色あり、是の如く飲食し、是の如きの壽命あり、是の如く久住し、是の如く苦樂を受け、我れ彼に於て死して此の間に生れ、此の間に於て死して彼の間に生れたりと、是の如く過去世の種種の相貌、說、姓、相等を皆能く念知す。是の菩薩は天眼界清淨にして人見に過ぐ、諸の衆生は若くは生、若くは死、形色、好醜、善行不善行、貧賤富貴、是の諸の衆生の隨所の造業を皆如實に知る。是の諸の衆生は身の惡業を成就し、意の惡業を成就し、諸の賢聖を謗り、邪見、及び邪見業の因緣を成就するが故に、身壞し命終りて惡道に墮ち、地獄の中に生ず、是の諸の衆生は身の善業を成就し、口の善業を成就し、意の善業を成就し、賢聖を謗らず、正見及び正見の善業の因緣を成就するが故に、身壞し命終りて必ず善道及び諸天の中に生ずと、是の如く、菩薩は天眼界清淨にして人に過ぐ。相貌姓名、諸の衆生の若くは生、若くは死、形色の好醜、善行不善行、貧賤富貴を見。是の諸の衆生は業に隨ひて報を受けたるを皆如實に知る。是の菩薩は禪、解脫、三昧、三摩跋提に於て能く入り能く出でて、而も禪、解脫力に隨つて生ぜず、隨つて能く菩提分法を滿ずる處を見て、願の力を以ての故に其の中に生ず。

論に曰く、身通とは勝れたる自在を得るなり。應に知るべし。自在に三種あり。一には世界自在、能く大地を動かす。經にいへるが如く、是の菩薩は無量の神通力を現じて、能く大地を動かすとの故に。二には身自在、彼れ能く散合し隱顯す、經にいへるが如く、一身を多身と爲し、多身を一身となし、現沒し還出すとの故に。三には作業自在、作業に八種あり。一には傍行礙ふる無し、經にいへるが如く、石壁山障も皆能く徹通すること虛空を行くが如しとの故に。二には上行、經にいへるが如く、虛空の中に於て跏趺して去ること猶ほ飛鳥の如くなりとの故に。三には上下行、經にいへるが如く、地に入出すること水の如く異ること無しとの故に。四には水を涉るも沒せず、經にいへるが如く、水を履むこと地の如くなりとの故に。五には其の身爓然たり、經にいへるが如く、身より烟焰を出すこと大火聚の如くなりとの故に。六には身能く水を注ぐ、經にいへるが如く、身中より水を出すこと猶ほ大雲の如しとの故に。七には身能く摩捫す、經にいへるが如く、日月に大神德有り、大威力有るも而も能く手を以て捫摸して之を摩すとの故に。八には自在にして乃し梵世間、器世間に至るまで意に隨ひて轉變し自在を得るが故に。經にいへるが如く、身力自在にして乃し梵世に至るとの故に。天耳通とは能く聞き、所聞に隨つて、如實に淸淨の諦聞を示現するが故なり。人に過ぐとは遠く聞くが故なり。人に過ぐる聲とは下は乃至阿鼻地獄等の聲を悉く能く聞くが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は天耳界淸淨にして人に過ぐるを以てとの故に。人天等の

所作の音聲に隨ひて、現に聞きて明了に、乃至蚊虻蠅等の微細の音聲をも亦能く聞くが故に、經にいへるが如く、悉く人天の二種の音聲、若くは近く、若くは遠きを聞き、乃至蚊虻蠅等も悉く音聲を聞くとの故なり。他心通とは、他心の差別に八種あり。一には隨煩惱、二には使、三には生、四には三昧の行を學ぶ、五には三昧を得、六には解脱を得、七には妄りに正行を行ず、八には餘の凡夫の增上慢なり。隨煩惱とは、貪瞋等と和合す、經に、是の菩薩は他心智を以て、如實に他の衆生の心、及び心數の法を知る、貪心有るは如實に貪心有ることを知り、乃至癡心を離れたるを知るといへるが如き故に。使とは、煩惱有り、煩惱を離るる等なり、經に、如實に染心有ると、染心を離れたるとを知るといへるが如き故に。生とは、人中の小、欲天の中の廣、色天の中の大、無色の二解脱の中の無量なり、經に、小心と廣心、大心と無量心といへるが如き故に。三昧行を學ぶとは、散心と不散心となり、經に、攝心と不攝心といへるが如き故に。三昧を得とは、定に入ると、定に入らざる時、及び定に有りて起つ時なり、經に、定に住する心と、定に住せざる心といへるが如き故に。解脱を得とは、縛有ると縛無きとなり、經に、解脱の心と解脱せざる心といへるが如き故に。妄りに正行を行ずとは、名聞の中に於て、現に希望を起して順ずと順ぜざるとの故に、經に、求心と不求の心といへるが如き故に。餘の凡夫の增上慢とは、(七六)麤細の習行の故に、經に、上心は如實に上心なるを知り、非

【七六】有上の處に究竟の想を起す慢心は麤なり、無上の處に得想を起す慢心は細なり。

上の心は如實に非上の心なるを知るといへるが如き故なり。宿命智通とは、誰か能く念ずるや、智能く念ずるが故に、經に、是の菩薩は如實に無量の宿命、諸の所生の處を念知すといへるが如き故に。何等の事を念ずるや、經に、亦能く一生を念知し、乃至無量百千萬億那由他劫を念知すとのいへるが如き、故に。云何んが念ずるや、名字の差別に因る、經に我れ本某處に在りて、是の如く名くといへるが如き故に。家の差別とは、經に、是の如きの姓といへるが如き故に。貴賤の差別とは、經に是の如きの生といへるが如き故に。好醜の差別とは、經に、是の如きの色といへるが如き故に。供饍の差別とは、經に、是の如きの飲食といへるが如き故に。業行の差別とは、經に、是の如きの壽命ありて、是の如く久しく住すといへるが如き故に、衰利成壞の差別とは、經に、是の如く苦樂を受け、我れ彼に於て死して此の間に生れ、此の間に於て死して彼の間に生るといへる如き故に。是の中、家の差別とは、父母の差別を謂ふ。貴賤の差別とは、刹利、婆羅門等の差別なり。業行の差別とは命の差別、(七七)時と非時との死の故に。是の中、種種の相貌とは、一切諸相の差別なり、經に、種種の相貌といへる如き故に。說とは名稱なり、經に、說くといへるが如き故に。姓相とは、家姓等の故に、經に、姓相等は皆能く念知すといへるが如き故なり。復た(七八)異義有り。亦能く一生、二生を念知すと、是の如き等は是を相貌と名く。說とは名等の故なり、相とは我れ彼に於て死

【七七】時の死とは天壽を盡くして死するをいひ、非時の死とは中年に夭喪するをいふ。

【七八】以上一應解釋し畢りて更に異義を擧げて再釋す。

して此の間に生ると、是の如き等を皆能く念知するが故なり。生死智通とは、誰れか能く見る。天眼を以て見るが故に。淸淨とは審かに見るが故に、人に過ぐとは遠く見るが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は天眼界淸淨にして人に過ぐるを以てとの故に。何等の事を見るや、謂はく衆生の生死等なり。經にいへるが如く、諸の衆生の若くは生れ、若くは死するを見、乃至隨つて造る所の業を皆如實に知るとの故に。云何んが見る、經にいへるが如く、是の諸の衆生は身の惡業を成就し、乃至業に隨ひて報を受くるを皆如實に知るとの故に。餘は〔七九〕前二地の中に說けるが如き善惡業の報は、此れ亦是の如く應に知るべし。是の中、禪とは四禪なり。解脫とは四無色定なり。三昧とは四無量なり。三摩跋提とは五神通なり。能く入り、能く出づとは、卽ち〔八〇〕心を生ずる時、心に隨ひて用現在前するが故なり。而も禪解脫力に隨ひて生ぜずとは彼の淳厚の深念心此に成就し示現す。隨つて能く菩提分法を滿ずる處を見るとは、諸佛大菩薩と共に一處に生るる故なり。經にいへるが如く、是の菩薩は禪解脫に於て、乃至願力を以ての故に、而も其の中に生るるとの故に。

經に曰く、是の菩薩は菩薩の明地に住し已りて、多く諸佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを

【七九】善惡受報の事は前の二地の中、攝善戒の下に十不善は地獄等に生じ、十善は人天等に生ずることを說けり、故に今は略す。

【八〇】心を起して入らんと欲し、心を起して出でんと欲する心を生ずる時といふ、能く出入するを用現在前すといふ。

以ての故に、多くの百佛、多くの千佛、多くの百千佛、多くの百千那由他佛、多くの億佛、多くの百億佛、多くの千億佛、多くの百千億佛、多くの百千萬億那由他佛を見たてまつり。大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と、深心とを以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆して、衣服、飲食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て、衆僧を供養し、此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんことを願ひ、諸佛の所に於て上恭敬の心を生じ、專心に法を聽き、聞き已つて受持し、說の如く修行す。是の菩薩は一切法は不生不滅なるも因緣によりて、有ることを觀ず。

論に曰く、一切の法は不生不滅なりとは、清淨法の中に於て、增すことを見ず、煩惱妄想の中に於て、減ずることを見ず、因緣集りて生ずるが故なり。彼の清淨の中に一法の增すべき無く、彼の煩惱妄想の中に一法の減ずべき無し。然れども對治の因緣に依るが故に、煩惱妄想を離れて轉た勝れ、清淨の般若現前す、經にいへるが如く、一切法は不生不滅なるも因緣により有りと觀ずとの故なり。

經に曰く、是の菩薩は一切の欲縛は轉た復た微薄となり、一切の色縛、一切の有縛、一切の無明縛は皆悉く微薄となり、諸の見縛は先に已に除滅せり。是の菩薩は菩薩の明地に住し已りて、無量の百劫、無量の千劫、無量の百千劫、無量の百千那由他劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、

無量の百千億劫、無量の百千萬億那由他劫にも復た現に妄貪を集斷せず、復た現に妄瞋を集斷せず、復た現に妄癡を集斷せず。是の菩薩は彼の諸の善根轉た增して明淨となる。諸の佛子よ、譬へば本眞金を巧師鍊治するに秤兩等しく住して、轉た更に精妙に、光明倍勝るが如し。諸の佛子よ、菩薩も亦復た是の如く、菩薩の明地に住し已りて、無量の百劫、乃至無量の百千萬億那由他劫に復た現に妄貪を集斷せず、復た現に妄瞋を集斷せず、復た現に妄癡を集斷せざれば、彼の諸の善根は轉た增して明淨となる。是の菩薩は忍辱安樂の心轉た復た明淨となり、同和の心、柔軟の心、不瞋の心、不動の心、不濁の心、我れを高下せざる心、衆生の所作を希望せざる心、所有る施作に報を望まざる心、諂曲せざる心、稠林せざる心、轉た復た清淨なり。是の菩薩は四攝法の中には利益增上し、十波羅蜜の中には忍辱波羅蜜增上す。餘の波羅蜜も修習せざるには非らず、力に隨ひ、分に隨ふ。諸の佛子よ、是を菩薩の第三の菩薩明地を略說すと名く。

論に曰く、一切の欲縛轉た復た微薄なりとは、一切の修道の欲、色、無色界の所有る煩惱と及び(八一)彼の因とを斷じ、(八二)同の無明習氣は皆悉く微薄にして遠離するが故なり。諸の見縛とは、初地の中に於て、見道の時已に斷せり、經にいへるが如く、是の菩薩は一切の欲縛轉た復た微薄とな

【八一】彼の因とは無明縛なり。無明を根本の因として欲縛色縛、有縛を生ずるが故なり。

【八二】四縛の別體なるは麤なるも微細なる習氣の四縛は同體にし同じく一心に在り、故に今細を簡び麤に異して同といふ。無明習氣とは其の同法を辨ずるなり。習氣とは三縛の微細なる殘氣なり。

り、乃至、諸の見縛は先に已に除滅せりとの故に。復た（八三）現に妄貪を集斷せず等とは、（八四）不善根の使、習氣の行を斷ずるなり。麁煩惱を斷ずるに非らず。麁煩惱は前地に已に斷ぜり、經にいへるが如く、是の菩薩は菩薩の明地に住し已りて、無量の百劫、乃至彼の諸の善根轉た增して明淨となるとの故に。眞金の喩は秤兩を減ぜず、等しく住することを示現するが故なり。菩薩は明地に住して、世間を厭離すると前地に勝る、自在にして失はざるが故なり、經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば本眞金の如く、乃至彼の諸の善根は轉た增して明淨なるとの故に。是の菩薩は忍辱安樂の心轉た復た明淨となるとは、他人惡心を加ふるも能く忍受して、善く他心を護る、經にいへるが如く、是の菩薩は忍辱安樂の心轉た復た明淨となるとの故に。惡を加ふるも改めず。善く他心を護るとは、（八五）分別して示現す。惡を作して疑を懷くも、現に同じく伴侶となり、愛語し、誨誘す、經にいへるが如く、同和の心との故に、柔軟の心との故に。惡を加ふるも瞋らず、罵を聞くも報いず、（八六）憂惱を生ぜず、經にいへるが如く、不瞋の心との故に、不動の心との故に、不濁の心との故に。過去より憍慢ならず、自ら善語を與ふ、經にいへる

【八三】一切の煩惱を皆妄と名くるも、今は現起のものは情妄麁顯なるが故に、現起の煩惱を妄と名く。此の妄貪等は、前地已に斷ずるが故に、今復對治を集めて、之を斷ぜずとの意なり。

【八四】不善根とは貪瞋癡の三毒をいふ。此の地にては但其の微細習氣を斷ず。

【八五】惡を加ふるも改めざるは忍辱心なり、善く他心を護るは安樂心なり。此の二心を以て以下の諸心を分別するが故に、分別して示現すといふ。

【八六】身口に害罵を受くるも返報せずして能く忍耐する時、內心變動せざるを憂惱を生ぜずといふ。

が如く、我を高下せざる心との故に。心に他人の恭敬を希望せず、經にいへるが如く、衆生の所作を希望せざる心との故に。作す所の事に於て、心に報いを求めず、經にいへるが如く、所有る施作に報を望まざる心との故に。不實にあらざる心をもつて利益の行を作し、及び無偏の心をもつて等しく利益を作すが故に、經にいへるが如く、諂曲せざる心との故に。微細の隱覆せる垢心を皆悉く遠離す。經にいへるが如く、稠林せざる心轉た復た清淨なりとの故なり。

經に曰く、菩薩は是の地の中に住して、多く忉利天王と作り、法の自在を得、能く衆生の貪欲等の諸の煩惱垢を除き、善方便の力を以て、衆生を諸欲の淤泥より拔濟し、作す所の善業は布施、愛語、利益、同時なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずるとを離れず、乃至具足せる一切種の一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切の衆生の中に於て首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念に從ひて精進の行を發す。精進の力を以ての故に、一念の間に於て、百千の三昧を得、百千の佛を見たてまつることを得、百千の佛の神力を知り、能く百千の佛の世界を動かし、能く百千の佛の世界に入り、能く百千の佛の世界を照し、能く百千の佛の世界の衆生を教化し、能く壽百千劫に住し、能く過去未來世の各百千劫

の事を知り、能善く百千の法門に入り、能く身を變じて百千と爲し、一一の身に於て、能く百千の菩薩を示現し、以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在なること勝上なり。菩薩の願力は此の數に過ぎて、種種の神通力を示す。或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は、乃至無量の百千萬億那由他劫に數へ知るべからず。

論に曰く、此の地の攝報果と願智力果とは初地の中に釋するが如し。

卷の第六

焰地第四

論に曰く、第四の焰地は(一)彼の淨三昧の聞持に依りて如實の智の淨なることを顯示するが故なり。此の地の差別に四分あり。一には(二)清淨對治修行增長因分、二には清淨分、三には對治修行增長分、四には彼の果分なり。清淨對治修行增長因とは謂ゆる十の法明入なり。

經に曰く、爾の時に、金剛藏菩薩の言はく、諸の佛子よ、若し菩薩第三の菩薩地を得、清淨の明を具足し已りて、第四の菩薩地を得んと欲する者は當に十の法明入を以て、第四地に入ることを得べし。何等をか十と爲す、一には衆生界を思量する明入、二には世界を思量する明入、三には法界を思量する明入、四には虛空界を思量する明入、五には識界を思量する明入、六には欲界を思量する明入、七には色界を思量する明入、八には無色界を思量する明入、九には勝心決定の信界を思量する明入、十には大心決定の信界を思量する明入なり。菩薩は此の十の法明入を以て、第四地に入ること

【一】彼の淨三昧とは前三地の禪定總持を指す。

【二】初入地の出障の行なるが故に清淨と云ひ、正住地の道品等の行は能く障を除するが故に對治といひ、進修漸次に上位に至るが故に增長といひ、初は入地の方便なるが故に因といふ。是れ即ち本地の因にして、第四は是の地の果なり、中間の二は地相なり。

を得。

論に曰く、法明入とは、證地の智の光明を得、彼の智明に依つて如來の說きたまふ法の中に入る。彼の智を法明入と名く。彼の所說の法を正觀し、思量して如實に知り、二處に〔三〕順行するが故なり。此の思量に十種の差別あり。衆生界の假名差別を思量する分別、經にいへるが如く、衆生界を思量する明入との故に。依住の分別、經にいへるが如く、世界を思量する明入との故に。染の分別、經にいへるが如く、法界を思量する明入との故に。無盡の分別、經にいへるが如く、虛空界を思量する明入との故に。染淨の依止の分別、經にいへるが如く、識界を思量する明入との故に、煩惱使の染分別、經にいへるが如く、欲界を思量する明入との故に、色界を思量する明入との故に、無色界を思量する明入との故なり。淨分別、經にいへるが如く、勝心決定の信界を思量する明入との故に、大心決定の信界を思量する明入との故なり。是の中、煩惱使の染とは、謂ゆる三界なり。淨とは後の二句なり。一は〔四〕煩惱に依りて染せられず、二は〔五〕衆生を捨てず、聲聞等と同不同の義の故なり。云何んが淸淨分なる。即ち如來の家に於て、轉た勢力有るが故に。

【三】正觀思量は是れ方便、如實に知るは是正證なり。此の二は同じく所說の法に依るが故に順行といふ。

【四】勝心決定の信界は勝解を得、所解の法に於て印持し決定して、煩惱をして心を汙さざらしむ、是れ二乘と同じ。

【五】大心決定は廣大の心普く一切の衆生を救濟す、二乘の狹心と同じからず、此の故に後の二句は聲聞等と同不同の義に依るといふ。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は菩薩の焰地を得て、卽ち如來の家に於て轉た勢力有り、彼の內法を得るが故に、十種の法智を以て教化し成熟するが故なり。何等をか十と爲す。一には不退轉の心の故に。二には三寶の中に於て決定して恭敬し畢竟して盡くるが故に。三には分別して生滅の行を觀ずるが故に。四には分別して諸法の自性は不生なるを觀ずるが故に。五には分別して世間の成壞を觀ずるが故に。六には分別して業に生有ることを觀ずるが故に。七には分別して世間と涅槃とを觀ずるが故に。八には分別して衆生世界の業の差別を觀ずるが故に。九には分別して前際後際の差別を觀ずるが故に。十には分別して無所有の盡を觀ずるが故なり。諸の佛子よ、菩薩は是の如く十種の法智をもつて教化し成熟して、卽ち如來の家に於て轉た勢力有り、彼の內法を得たるが故なり。

論に曰く、云何んが卽ち如來の家に於て轉た勢力有りといふや。(六)多聞に依止して智究竟するが故に。(七)智障を除滅して勝を攝するが故なり。此の是の如き淨勝は如來の家なり。是の故に彼の內法を得と名く、如來の自身に有する所の諸法なり。(八)是の諸法を以て如來を顯示す。謂ゆる十種の法智をもつて教化し成熟するが故なり。此の法明入を(九)同時に得ること應に知るべし。彼れ復た四種智の教化なるが故に、

【六】前の三地の多聞の解に依りて、此の四地の出世間の慧を得るを智究竟と名く、轉の義を釋するなり。

【七】智障を除滅すとは當地所斷の所知障を滅するなり、是に由りて此の四地の殊勝の慧を得るが故に勝を攝すといふ、これ經文の勢力の義を釋するなり。

【八】此十法なければ如來と名けず十法は諸佛の安住する所なるを以て如來の家と名く。

【九】此の教化の法智と四地の

法智をもつて教化し成熟すと名く。四種の智とは、一には〔一〇〕自ら住する處の畢竟智、經にいへるが如く、不退轉の心との故に。二には〔一一〕同じく三寶を敬ふ畢竟智、經にいへるが如く、三寶の中に於て、決定して恭敬し畢竟して盡くるとの故に。三には〔一二〕眞如智、經にいへるが如く、分別して〔一三〕生滅の行を觀ずとの故に。〔一四〕分別して諸法の自性は不生なりと觀ずとの故に。四には〔一五〕分別所說の智、經にいへるが如く、分別して世間の成壞を觀ずとの故に。分別して業に生あることを觀ずとの故に。分別して世間と涅槃とを觀ずとの故に。分別して衆生世界の業の差別を觀ずとの故に。分別して〔一六〕前際後際の差別を觀ずとの故に。分別して〔一七〕無所有の盡を觀ずとの故なり。菩薩自ら住する處とは、謂はゆる大乘の法なり。是の中、初の二法とは不退轉の心と、三寶の中に於て、決定して恭敬し、畢竟して盡くる心となり。是の初の二智は自ら住する處の畢竟智と、同じく三寶

證智の法明とは、一體にして異ることなければ、得るも同時にして前後なし。

【一〇】自ら住する處とは大乘の法也。大乘の心に住して退轉せざるを畢竟智と名く。

【一一】佛法僧の三寶の同體を證して不壞の信を成ず。

【一二】眞如智とは人法二無我の正證智なり。

【一三】五蘊等の諸法は、生滅流轉して、本より人我なきことを觀ず。

【一四】蘊等の諸法は、自性本來不生なりと觀じて、法無我を證す。

【一五】次の六句は後得世俗の智にして教智なるが故に所說の智といひ、世諦の差別を知るが故に分別と稱す。

【一六】煩惱の無始を觀ずるを前際といひ、涅槃の無終を觀ずるを後際と爲す。

【一七】前句は事觀にして、此の句は理觀なり。理に順すれば煩惱本より空にして、損減あること無しと觀じ、涅槃は自性淨にし、新に增益するに非ず、自性盡の故に皆無所有の盡と名く。

を敬ふ畢竟智となり。教化し成熟するが故に。次の二法は分別して生滅の行を觀じ、分別して諸法の自性は不生なりと觀ず。是れ眞如の智なり。謂ゆる衆生と法との無我の觀なり。是の如く次第して分別すること應に知るべし。餘は是れ分別する所說の智なり。彼れ復た煩惱の染淨に依るが故に。煩惱染に隨ふと、何の煩惱を以て染すると、所有の淨と所淨に隨ふとなり。云何んが煩惱染に隨ふといふや、器世間に隨ふが故なり、經にいへるが如く、分別して世間の成壞を觀ずるが故に。〔八〕衆生世間の生ずるは同じ因より生を受くるが故に、經にいへるが如く、分別して業に生あることを觀ずるが故に。何をか煩惱染といふ。謂ゆる世間なり。何をか所有の淨といふ。謂ゆる涅槃なり。經にいへるが如く分別して世間と涅槃とを觀ずるが故に。云何んが所淨に隨ふや、諸佛の世界の中にて衆生を教化して自業成熟するが故なり、經にいへるが如く、分別して衆生世界の業の差別を觀ずるが故に。煩惱染及び淨とは謂ゆる前際と後際となり、經にいへるが如く、分別して前際と後際との差別を觀ずるが故に。彼の前際と後際とは不損不益なり、經にいへるが如く、分別して無所有の盡を觀ずるが故に。染法の中に於て一法の減ずべきを見ず、淨法の中に於て、一法の增すべきを見ざるが故に。云何んが對治修行增長なる。二種あり。一には〔九〕護煩惱染を修行し、二には〔一〇〕護小乘を修行す。何をか護煩惱染といふ。菩提分法を修行する

〔八〕苦諦の正依二報は隨煩惱集因の所生なり。
〔九〕護煩惱とは大智自利の行にして凡夫と異る。
〔一〇〕護小乘とは大悲利他の行にして小乘に異る。

が故なり。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の燄地に住し已りて、(二一)内身の循身觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪憂を除く。(二二)外身の(二三)循身觀を觀じて、精勤して一心に世間の(二四)貪憂を除く。内外身の循身觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪憂を除く。是の如く(二五)内受、外受、内外受を觀じ、是の如く(二六)内心、外心、内外心を觀じ、是の如く内法の循法觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪憂を除き、外法の循法觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪憂を除き、内外法の循法觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪憂を除く。(二七)是の菩薩は未だ諸惡不善の法を生ぜざらしめんが爲めの故に、勤め精進して發心正斷を生ぜんと欲し、已に生じたる諸惡不善の法を斷ぜんが爲めの故に、勤め精進して發心正斷を生ぜんと欲す。未だ生ぜざる諸の善法を生ぜんが爲めの故に、勤め精進して發心正行

【二一】菩提分法の中、初に四念處を明かす。四念處とは身受心法を次第の如く不淨、苦、無常、無我なりと觀じて、淨、樂、我、常の四倒の妄見を破するなり。

【二二】内身とは自身、外身とは他身なり。

【二三】循身觀とは循は巡歷の義、身の四肢五體に於て次第に巡歷して觀察するをいふ。

【二四】貪憂とは始めて五欲を棄てて尙ほ之を念ふ故に貪を起し、未だ道法を得ざるが故に憂を生ず、此の故に偏に貪憂を除くといふ。

【二五】内受外受とは自受を内とし他受を外と爲す。或は意相應の受を内と爲し、五識相應の受を外と爲す。或は定受を内と爲し、散受を外と爲す等の多釋あり。

【二六】内心外心とは自心と他心となすことあり。或は意識の内を緣すると外を緣するとにて分ち、或は定心と散心とにて分つことあり。

【二七】次に四正勤（或は四正斷ともいふ）を明す。四正勤とは精進を體とし、止惡と作善とに就て已生と未生とに分つが故に四種となる。

を生ぜんと欲す。已に生じたる諸の善法を住して失はず、修滿增廣ならしめんが爲めの故に、勤め精進して發心正行を生ぜんと欲す。〔二八〕是の菩薩は四如意分を修行す。〔二九〕欲定の斷行成就して如意分を修し、〔三〇〕厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。精進定の斷行成就して如意分を修し、厭に依止し、離に依止し、滅に依止して、捨に廻向す。〔三一〕心定の斷行成就して如意分を修し、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。〔三二〕思惟定の斷行成就して如意分を修し、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。〔三三〕是の菩薩は信根を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。精進根を修行して、厭に依止し、離に依止し、捨に廻向す。念根を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。定根を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。慧根を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。〔三四〕是の菩薩は信力を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。精進力を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。念力を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨

【二八】次に四如意足を明かす。或は四神足ともいふ。所作志を遂ぐるを如意といふ、神の義なり、足とは所依の定也。

【二九】欲とは樂欲希望の義。

【三〇】諸煩惱に於て斷行を成ずるの相は加行道に厭背し、無間道に離れ、解脫道に滅を證し、勝進道に彼の果を趣求す。

【三一】心定とは或は意定とも名く、專心に境を守りて心散動せざるの義。

【三二】思惟定とは或は慧定又は觀とも稱す、明慧照察の義なり。

【三三】次に五根を明かす。信、精進、念、定、慧の五行に依りて能く見道無漏智を生ずるが故に五根と名く。

【三四】次に五力を明かす。

に廻向す。定力を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。慧力を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。（三五）是の菩薩は念覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。擇法覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し捨に廻向す。精進覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。喜覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。猗覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。定覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。捨覺分を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。（三六）是の菩薩は正見を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正思惟を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正語を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正業を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正命を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正精進を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正念を修行して厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。正定を修行して、厭に依止し、離に依止し、滅に依止し、捨に廻向す。

論に曰く。何をか護小乘を修行すといふや。一切の衆生を捨てざるが故に、助菩提分法を修行

【三五】次に七覺支を明かす。
【三六】次に八正道を明かす。

す。

經に曰く、是の菩薩は一切の衆生を捨てざる心を以ての故に、行は本願より起つて淳至なるを以ての故に、大悲を首と爲すが故に、大慈成就するが故に、一切智智を觀ずるが故に、莊嚴せる佛國を起さんが爲めの故に、佛の諸力、無畏、不共の佛法、相好の莊嚴、具足せる妙聲を具へんが爲めの故に、上上の勝行を求めんが爲めの故に、隨順して甚深の佛法を聞きて解脫せんが爲めの故に、大方便を思惟せんが爲めの故に行ず。

論に曰く、一切の衆生を捨てざる心とは、此の不捨衆生の心に四種あり。一には始、二には益、三には怖、四には行なり。始とは本願の故なり、經に本願より起つて淳至なるを以ての故にといへるが如し。益とは憐愍の故なり、經に大悲を首と爲んが故に、大慈成就せるが故にといへるが如し。怖とは佛智を求むるが故なり、經に一切智智を觀ずるが故にといへるが如し。行とは修行の故なり、修行に五種あり。一には淨土の行を修す、經に莊嚴せる佛國を起さんが爲めの故にといへるが如し。二には佛法を起すの行を修す、經に如來力、無畏、不共の佛法、相好の莊嚴、具足せる妙聲を起さんが爲めの故にといへるが如し。妙聲とは法螺の聲なるが故に。三には彼の地の方便たる無厭足の行を修す、經に上上の勝行を求めんが爲めの故にといへるが如し。四には不退轉の地に入るの行を修す、經に隨順して甚深の佛法を聞きて解脫せんが爲めの故にといへるが如し。五には衆生を

教化する行を修す、經に大方便を思惟せんが爲めの故に行ずといへるが如し。是を對治修行增長分と名く。云何んが對治修行增長果分なる。

經に曰く、是の菩薩は所有る身見を首と爲し、我人、衆生、壽命、陰界入、我慢の所起、出沒等の事を思惟して多く觀ず。治の故に、我の故に、護の故に、貪著處の故に、是の菩薩は是の如き等の事を皆悉く斷滅す。

論に曰く、對治修行增長の果とは、(三七)我知、大智、(三八)我修、是れ我の所修なりと、是の如き等の出沒等の事を皆悉く滅するが故なり。(三九)出とは三昧の起る義なるが故に。(四〇)沒とは三昧の滅する義なるが故に。彼に復た五種有り。一には本、二には起、三には行、四には護、五には過なり。是の中、本とは身見に依るを本と爲すが故に、(四一)衆生我慢、法我慢の如き差別あり、經にいへるが如く、是の菩薩は所有る身見を首と爲し、我人、衆生、壽命、陰界入、我慢の起す所の出沒等の事との故に。起とは不正の思惟を起す、經にいへるが如く、思惟すとの故なり。行とは(四二)他をして知らしむ、經にいへるが如く、多く觀ずとの故に。(四三)護とは、數數觀ずるが故に、我想を起すが故に、受持するが故なり、經に

【三七】我知とは能知の我を執す、大智とは所知の大法にして三地の中の解法慢なり。

【三八】我修とは修して後我れ此の定を修すと禪定に計執する也。是れ三地正受の慢なり。

【三九】出とは出定ありと計する義。或は謂ふ、出は諸禪を修起する義なりと。

【四〇】沒とは入定有りと計する義。或は謂ふ禪定を退失する義なりと。

【四一】衆生我慢とは人我慢のことにして我人衆生、壽命をいひ、法我慢とは陰界入をいふ。

【四二】己が得る所の八禪の劣法に於て勝相を求覓して他をして知らしめんとするなり。

【四三】護とは數數勝相を觀じ勝れたるを取りて已に屬し憶持して心に置き、已が所得を防

（四四）治の故に、我の故に、護の故にといへるが如し。過とは（四五）心諸事に安處する等なり、經に貪著處の故にといへるが如し。是の如く、學行事の中の出沒等を皆悉く遠離す。經にいへるが如く、是の菩薩は是の如き等の事を皆悉く斷滅すとの故に。此は是れ煩惱染に依りて遠離の果を生ずるなり。

經に曰く、是の菩薩は所有る作すべからざる業、如來の呵したまふ所の諸の煩惱染は一切行せず、所有る作すべき業、菩薩の行に隨順し、如來の讚したまふ所をば一切正しく修行す。

論に曰く、所有る作すべからざる業とは、二種の事あるが故に應に作すべからず。一には如來を尊敬せず、佛讃嘆したまはざるが故に。二には惡名を畏る、聞きて煩惱を生ずるが故に。經にいへるが如く、是の菩薩は所有る作すべからざる業、乃至一切を行せずとの故に。所有る作すべき業とは二種の事有り、是の故に應に作すべし。一には惡の名利無きを見、菩薩の行に隨順するが故に。二には如來を尊敬す。佛の讃嘆したまふが故に、經にいへるが如く、所有る作すべき業、乃至一切を正しく修行すとの故なり。此は是れ業染に依りて遠離の果を生ず。是の菩薩は轉た復た隨所隨所に方便智の起す所の修行と、助道分とは是の如く、是の如く潤益の心を成ずと、是の如き等の四の十句は四種の果を顯示す。一には勝功德の中に於て、增上の欲心を生ず、二には彼の說法尊の中に

護するの義。

【四四】治とは數數觀察して所見の我所を修治するの義。

【四五】堅く自己の得る所の定等を執し、心諸事に安んずる卽ち定愛なり。

報恩の行を起す、三には彼の方便行の中に勤精進を發す、四には彼の増上欲、本心界滿足す。云何んが勝功德の中に於て増上の欲心を生ずるや。

經に曰く、是の菩薩は轉た復た隨所隨所に方便智の起す所の修行と、助道分とは、是の如く是の如くして潤益の心、輭心、調心、安隱樂の心、不染の心、轉た上上の勝行を求むる心、轉た勝智を求むる心、一切の世間を救ふ心、諸師を恭敬し、隨順して教を受くる心、所聞の法に隨ひて修行する心を成ず。

論に曰く、是の中、隨所隨所に方便智の起す所の修行とは、一切の衆生を捨てずして修行するが故なり。前に說けるが如し。助道分とは謂ゆる一切の菩提分法の道支なるが故に。是の如く是の如くして潤益の心を成ずとは、（四六）深く愛敬せんと欲するが故なり。彼の潤益の心に三種の相あり。一には（四七）樂行の勝、經にいへるが如く、輭心との故に。二には（四八）三昧自在の勝、經にいへるが如く、調心との故に。三には過を離るる對治の勝、經にいへるが如く、安隱樂の心との故に。彼の過に復た六種あり。一には（四九）食の爲にする過、或は（五〇）說法者中の妬心の過なり。此を對治するには、經にいへるが如く、不染の心との故に。二には少欲功德の過、多く布施頭陀等を樂はず。此を對治するには、經にいへるが如く、轉た

【四六】上の功德に於て其の實利を見るが故に、殊勝の意樂を起し、心を柔和にし勝德を欲求す。
【四七】法を證して神に適ふをいふ。
【四八】三昧を以て心を調へ、諸緣の中に於いて無礙なるをいふ。
【四九】衣食の利の爲にする義。
【五〇】說法者の名を妬むの義。

上上の勝行を求むる心との故に。三には少欲智の過、勝智を求むることを好まず。此を對治するには、經にいへるが如く、轉た勝智を求むる心との故に。四には懈怠の過、衆生を化することを勤めず。此を對治するには、經にいへるが如く、一切の世間を救ふ心との故に。五には自ら見取する過、尊き教法に於て、心隨順せざるなり。此を對治するには、經にいへるが如く、諸師を恭敬し隨順して教を受くる心との故に。六には(五二)首と爲るものを捨つる過、說に隨つて行ぜず。此を對治するには、經にいへるが如く、所聞の法に隨つて修行する心との故に。

是の如くして潤益の心を成ず。此の十句は是を勝功德の中に於て、增上の欲心を生ずる果と名く。云何んが彼の說法尊の中に報恩の行を起すといふや。

經に曰く、是の菩薩は是の如く知恩の心を成じて、報恩を知る。心轉た柔和にして、安樂に同止し、直心、輭心となり、稠林の行無く、諂曲有ること無く、我慢有ること無く、善く教誨を受けて、說者の意を得。是の如くして善心成就し、是の如くして寂滅の心成就し、是の如くして善寂滅の心成就す。

論に曰く、彼の說法尊の中に報恩の行を起すとは、彼の知恩の心〔以下〕第二の十句に示現す。是の中、彼の知恩の心を成ずとは、隨順して報恩の行を行ずるなり。報恩の行とは、九種有り。尊に

【五二】說の如く修行するは聞思の中にて首と爲す、其の首たる者を捨つるの過なり。

依りて報恩の心を起す、經にいへるが如く、報恩を知るとの故に。(五二)同法の者に依つて、將護の心を起す、經にいへるが如く、心轉た柔和なりとの故に、安樂に同止すとの故に。法に依りて行じ隨順して(五三)敎を受け事を發して能く忍ぶ、經にいへるが如く、直心との故に、軟心との故に。食を受用するに依りて、施主の所に於て自の過を覆はず、妄りに己が德を說かず、經にいへるが如く、稠林の行無しとの故に、諂曲有ること無しとの故に。自の勝れたる功德に依りて、高心を起さず、經にいへるが如く、我慢有ること無しとの故に。敎に依りて正しく語を受く、經にいへるが如く、善く敎誨を受くとの故に。敎に依りて顚倒して受けず、經にいへるが如く、說者の意を得との故なり。菩薩は是の如く彼の尊の所に於て、報恩の行を修して。是の如き善心の成就を成ずとは、是れ對治修行增長するが故なり。是の如くして寂滅の心成就すとは、(五四)是れ初めの對治修行の增長力の故なり。是の如くして善寂滅の心成就すとは、(五五)彼の果は前の二句に顯はす。是を彼の說法尊の中に報恩行を起す果と名く。云何んが彼の方便行の中に勤精進を發すや。經に曰く、是の菩薩は是の如くして不休息の精進、不雜染の精進、不退の精進、廣精進、無邊の

【五二】同法の者とは同行の善友なり。同行の者を將護して和順の心を起すは說法者の心に順ふ、是の故に報恩となる。

【五三】敎を受けて師命に違はざるは直心なり、修行の事を發して如何なる苦難に逢ふも能く忍ぶは軟心なり。

【五四】前の增上の欲心を生する果を結ぶ。

【五五】護煩惱行と護小乘行との二種の對治に依りて此の果を得。初句は善心を成じ、次の句は寂滅心を生ず。總じて上の二句を合して善寂滅と爲し、報恩心の果を成すとの義。

精進、光明の精進、無等の精進、不壞の精進、一切の衆生を敎化する精進、善く是道と非道とを分別する精進を成ず。

論に曰く、彼の方便行の中に、勤精進を發すとは、不休息の精進を成ずといふ[以下]第三の十句に示現す。不休息の精進に九種あり。一には彼の精進の行平等に流注す、經にいへるが如く、不雜染の精進との故に。(五六)雜染とは懈怠と共に染と共にして、若くは過ぎ、若くは及ばざるが故なり。二には自乘動せず、經にいへるが如く、不退の精進との故に。三には廣く念ず、經にいへるが如く、廣精進との故に。四には無量の衆生の爲めに利益を作して攝取せんと願ふが故に、經にいへるが如く、無邊の精進との故に。五には常に至心に順行す、經にいへるが如く、光明の精進との故に。六には修習して餘の精進に過ぐ、經にいへるが如く、無等の精進との故に。七には一切の魔及び煩惱の行も破壞すると能はず、經にいへるが如く、不壞の精進との故に。八には攝取せんが故に、經にいへるが如く、一切の衆生を敎化する精進との故に。九には能く疑惑を斷ちて他の言を降伏し、正しく修習するが故に、經にいへるが如く、善く是道と非道とを分別すとの故なり。是を彼の方便行の中にて勤精進を發す果と名く。云何んが彼の本心界の滿足なるや。

【五六】雜染の義を釋して二義となす。一には染と共なるは精進に耽著すること太だ過ぐ、二には懈怠と共なるは及ばずして懈怠に失す。此の緩急の中を得て、過不及に失せざるを平等に流注すといふ。廣く利他を念ずる心を起す義。

經に曰く、是の菩薩は深心界轉た清淨にして、深心界失はず、信解界轉た明利に、善根を生じて增長し、世間の垢濁を遠離し、諸の疑心を斷ちて、疑網あること無くして現前に具足し、喜樂を成就す。如來は現前に加したまひて、無量の深心は現前に成就す。

論に曰く、彼の本心界の滿足とは、心界轉た清淨といふ[以下]第四の十句に示現す。〔三七〕心界とは菩提分の心に依る。初句に示現す。心界の清淨に九種あり。一には彼の道心は修行を增益す、經にいへるが如く、深心界失はずとの故に。二には勝上の證の中に於て轉た決定の心を生ず、經にいへるが如く、信解界轉た明利なりとの故に。三には彼の因にして對治增長す、經にいへるが如く、善根を生じて增長すとの故に。四には諸障を滅除す、經にいへるが如く、世間の垢濁を遠離すとの故に。五には此の地の祕密の疑事を除く、經にいへるが如く、諸の疑心を斷つとの故に。六には疑を斷つを以ての故に餘の處に於て決定す、經にいへるが如く、疑網有ること無くして現前に具足せりとの故に。七には勝樂の行に依る、經にいへるが如く、喜樂を成就すとの故に。八には衆生を化する力に依る、經にいへるが如く、如來は現前に加したまふとの故に。九には無量の三昧心を現じて智障清淨なるに依る、經にいへるが如く、無量の心現前に成就すとの故なり。是を本心界の滿足の果と名く。

【三七】心界を釋して菩提分といふは、菩提心に依る樂欲心にして、卽ち前の增上欲心の果なり。正しく眞如を念じて、上の道品を修するが故に滿足といふ。

經に曰く、是の菩薩は菩薩の燄地に住し已つて、多く諸佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを以ての故に、多くの百佛、多くの千佛、多くの百千佛、多くの百千那由他佛、多くの億佛、多くの百億佛、多くの千億佛、多くの百千億佛、多くの百千萬億那由他佛を見たてまつる。大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆し、衣服、飮食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て、衆僧を供養す。此の善根を以て、皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんことを願ひ、諸佛の所に於て、上恭敬を生じ、專心に法を聽く、聞き已りて受持し、力に隨ひて修行し、諸佛の法の中に於て出家して道を修む。是の菩薩は深心決定して、信解轉た復た明淨なり。是の菩薩は此の菩薩の燄地に住して無量の百千萬億那由他劫に深心決定し、信解平等にして淸淨なり。彼の諸の善根は轉た勝れて明淨なり。諸の佛子よ、譬へば本眞金を巧師鍊治して莊嚴具を作るに成就して失はず、餘の莊嚴具に非ざる眞金に及ぶこと能はざる所なるが如し。諸の佛子よ。菩薩は是の如く此の菩薩の燄地の中に住し彼の諸の善根は成就して退かず、下地の善根の及ぶこと能はざる所なり。諸の佛子よ、譬へば摩尼寶珠の光を生じ、淸淨の光輪能く光明を放ち成就して壞せず、餘寶の光明の奪ふこと能はざる所、一切の風飄、雨漬、水澆にも光明は滅せざるが如し。諸の佛子よ、是の如く菩薩は此の菩薩の燄地の中に住すれば、下地の菩薩の及ぶこと能はざる所、一切の衆魔及び諸の煩惱も皆壞すること能はず。

是の菩薩は四攝法の中にては同事偏へに勝り、十波羅蜜の中にては精進波羅蜜增上し、餘の波羅蜜も修習せざるには非らず、力に隨ひ分に隨ふ。諸の佛子よ、是を菩薩の第四の菩薩焰地を略說すと名く。

若し菩薩此の地の中に住すれば、多く須夜摩天王と作り、所作自在にして諸の衆生の身見等の事を破し、方便善巧をもつて諸の衆生をして正見等の事に住せしむ。所作の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至具足せる一切種、一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念よりして精進の行を發す。精進の力を以ての故に、一念の間に於て、億の三昧を得、能く億の佛を見たてまつり、億の佛の神力を知り、能く億佛の世界を動かし、能く億佛の世界に入り、能く億佛の世界を照し、能く億佛の世界の衆生を化し、能く壽億劫に住し、能く過去未來世の各億劫の事を知り、能善く億の法門に入り、能く身を變じて億と爲し、一一の身に於て能く億の菩薩を示して以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在勝上なり。菩薩の願力は此の數に過ぎて、種種の神通を示し、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は乃至無量百千萬億那由他

劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、是の菩薩は深心決定し、信解平等にして清淨なり。彼の諸の善根は轉た勝明なり。淨とは餘の淨地の諸の菩薩の如し。眞金にて莊嚴具を作る譬は阿含の證智の莊嚴を現作するに喩ふ、證智を得ることを示現するが故に。經にいへるが如く譬へば本眞金を巧師練治して莊嚴具を作るに成就して失はざるが如しとの故に。摩尼寶の光を生ずる喩は、彼の證智の法明は、摩尼寶の光の中に阿含の光明を放ちて無量の法門の義に入り、光明の智處に、普く照し示現す。是の義を以ての故に、此の地の釋名を燄と爲す、經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば摩尼寶珠の光を生じ、清淨の光輪能く光明を放ち成就して壞せず、餘寶の光明の奪ふこと能はざる所なるが如しとの故なり。光を生ずとは、光明有りて具足せるが故なり。清淨の光輪とは、光明の圓滿にして無垢なるが故なり。所作自在とは、諸の衆生の身見等の事を破するが故なり。是の中、作とは所作の故に、自在とは、能力の故なり。餘は前に說けるが如し、應に知るべし。

巻の第七

難勝地第五

論に曰く、第五地の中に分別するに三有り。一には(一)勝慢對治、二には(二)不住道行勝、三には彼の(三)果勝なり。云何んが勝慢對治なる。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、諸の佛子よ、若し菩薩第四の菩薩地を得て、善く諸行を滿じ已つて、第五の菩薩地に入らんと欲せば、當に十の平等の深淨心を以て、第五地に入ることを得べし。何等をか十となす。一には過去の佛法、平等なる深淨の心の故に。二には未來の佛法、平等なる深淨の心の故に。三には現在の佛法、平等なる深淨の心の故に。四には戒淨、平等なる深淨の心の故に。五には心淨、平等なる深淨の心の故に。六には除見疑悔淨、平等なる深淨の心の故に。七には道非道智淨、平等なる深淨の心の故に。八には行斷智淨、平等なる深淨の心の故に。九には一切の菩提分法を思量する上上の淨、平等なる深淨の心の故に。

【一】勝慢對治とは本地の加行道、及び初住地無間道を合して初分となす。勝慢といふは慢に二種あり。一は他地の慢、謂はく前の四地の中に出世の智を得、其の勝相を取するを勝慢と爲す、今十種の淨心を以て之を對治す。二には自地の慢、謂はく此十心に於て勝相を希求し、復以て慢と爲す、眞如の道に隨順するを以て之を對治す。

【二】不住道行勝は本地の正住地解脱道なり。

【三】果勝とは本地成滿する勝進道なり。

十には一切の衆生を化度する淨、平等なる深淨の心の故なり。諸の佛子よ、菩薩は是の十種の平等なる深淨の心を以て、第五の菩薩地に入ることを得。

論に曰く、勝慢對治とは謂ゆる十の平等なる深淨の心なり。同念にして不退轉の心の故に。前に已に法慢對治を解說せり。今此の地の中には身淨分別の慢對治を說く。是の中、平等の深淨心とは平等の中に於て心に淸淨を得、此の深淨の心を分別するに十種有り。十種の深淨の心とは、是れ諸佛の法及び諸佛の法に隨順せるなり。彼の分別は應に知るべし。何をか是れ諸佛の法といふ。謂ゆる㊃三世の力等し、經にいへるが如く、過去の佛法、平等なる深淨の心の故に。未來の佛法、平等なる深淨の心の故に。現在の佛法、平等なる深淨の心の故にと。是の如く三世の佛法の力等しきとは已に說けり。

次に諸佛の法に隨順することを說かん。彼の諸佛の法は云何んが成ずることを得る。戒定智と及び衆生を化するとに因るが故なり。是の中、戒の淨に依るは、經にいへるが如く、戒淨、平等なる深淨の心の故なり。定淨に依るは、經にいへるが如く、心淨、平等なる深淨の心の故なり。智定に依るは、經にいへるが如く、除見疑悔淨、平等なる深淨の心の故なり。道非道智淨、平等なる深淨の心の故なり。行斷智淨平等なる深淨の心の故なり。一切の菩提分法を思量する上上の淨、平等なる深淨の心の故なり。是の中に行斷智とは、一切の菩提分法を思量して上上に轉た勝るが故なり。衆生を敎化す

【四】三世の果位の十力は平等なり、十力の如く餘の四無畏、十八不共法等も亦平等なり。

るに依るとは、經にいへるが如く、一切の衆生を化度する淨、平等なる深淨の心の故なり。
經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は第五の菩薩地に住し已つて、善く菩提分法を修行する故に、善く深淨の心の故に、轉た上勝の行を求むるが故に、如道に隨順する行なるが故に、大願力を得るが故に、慈悲心を以て一切衆生を捨てざるが故に、功德智慧の行を修習するが故に、諸行を休息せざるが故に、方便善巧を起すが故に、上上地を照見するが故に、如來の加を正受するが故に、念意と去智の力とを得るが故に、不退轉の心を成就するが故に。

論に曰く、是の中、善く菩提分法を修行し、乃至如道に隨順する行とは、皆是れ正しく諸行を修するなり。善く菩提分法を修行すとは、第四の菩薩地中に菩提分法を修して、善淨の深心有るが故なり。彼の深淨の心等は勝行を希求す。是の如く不住道の行の勝るは（五）彼の慢を破するが故なり。如道に隨順する行とは、彼の平等の中の深淨の心と、不退轉の心と現に成就するが故に。彼の平等なる清淨の法に隨つて住す。是の如く菩薩の深心の安住を名けて如道に隨順する行と爲すが故なり。是の中、如道に隨順する行に八種あり。一には菩提心を修習す、經に大願力を得るが故にといへるか如し。二には疲倦せず、經に慈悲心を以て一切の衆生を捨てざるが故にといへるが如し。三には善根力を得、經に功德智慧の行を修習するが故にといへるが如し。四には衆行を捨て

【五】前に勝相を求めて勝の念を起すは即ち慢にして未だ如道に順ぜざるなり、此の故に今之を破す。

、經に、諸行を休息せざるが故にといへるが如し。五には正しく修行す、經に方便善巧を起すが故にといへるが如し。六には厭足無し、經に上上の地を照見するが故にといへるが如し。七には他の勝力を得、經に如來の加を正受するが故にといへるが如し。八には自身に勝力を得るが故に、勝念等の（六）三慧の故に、經に、念意と去智の力とを得るが故に、不退轉の心を成就するが故にといへるが如し。去とは修慧の觀に障礙なきの義の故に。云何んが不住道の行勝なる、不住道の行勝に二種の觀あり。一には所知の法の中にて智清淨の勝、二には衆生を利益する勤方便の勝なり。是の二法を以ての故に、世間に住せず、涅槃に住せざるなり。云何んが所知の法の中にて智清淨の勝なるや。

經に曰く、是の菩薩は如實に是れ苦聖諦なり、是れ苦集諦なり、是れ苦滅諦なりと知り、如實に是れ至滅苦道聖諦なりと知る。是の菩薩は善く世諦を知り、善く第一義諦を知り、善く相諦を知り、善く差別諦を知り、善く說成諦を知り、善く事諦を知り、善く生諦を知り、善く盡無生智諦を知り、善く道に入らしむる智諦を知り、善く一切の菩薩地の次第に成就する諦を知り、及び善く集如來智諦を知る。是の菩薩は衆生の意に隨ひて歡喜せしむるが故に、善く世諦を知り。一切法の一相なるに通達するが故に、善く第一義諦を知り。法の自相と同相とを覺するが故に、善く相諦を知り。法の差別を覺するが故に、善く差別諦を知り。陰界入を分

【六】三慧とは聞思修の三慧なり。經に念とは教を念持する義にして聞慧、意とは義を思惟する義にして思慧、智は是れ修慧なり。

別することを覺するが故に、善く說成諦を知り。身心の苦惱を覺するが故に、善く事諦を知り。諸道の生の相續を覺するが故に、善く生諦を知り。畢竟して一切の熱惱を滅するが故に、善く盡無生智諦を知り。不二の行を起すが故に、善く道に入らしむる智諦を知り。正しく一切法の相を覺するが故に、善く一切の菩薩地の次第に成就する諦を知り、及び善く集如來智諦を知る。信解力を以ての故に知る、一切究竟の智を得て知るにあらず。

論に曰く、彼の所知の法の中にて智淸淨の勝に二種あり。一には實法を分別して如實に四諦を知る、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に苦聖諦を知り、乃至如實に至滅苦道聖諦を知るとの故に。二には衆生を化する方便として十諦差別の方便智を差別す、經にいへるが如く、是の菩薩は善く世諦を知り、乃至善く集如來智諦を知るとの故なり。是の中、實法の分別とは、有佛と無佛とに（七）苦集の二諦は果因の差別、體は是れ妄想に染せらるるが故に。（八）滅道の二諦の果因の差別、體は是れ淨法なるが故に。衆生を化する方便の差別とは、所化の衆生に差別有るが故に。方便の差別は、應に知るべし。所化の衆生に七種有り。小乘の化すべきもの六種有り。一には（九）根未熟の衆生の爲めの故に、（一〇）世諦の方便を知る。二には根熟せる衆生の爲めの故に、（一一）第一義諦の方便を知る。三には

【七】集諦は迷の因、苦諦は迷の果なるが故に果因の差別といひ、體は是れ妄想に染せらるといふ。

【八】滅道の二諦は悟の果と因となるが故に體は是れ淨法といふ。

【九】根未だ熟せずして大乘に入るに堪へざる者。

【一〇】四諦十六行等をいふ。

【一一】第一義諦とは法空を知らしむるなり。

(一二)深法を疑惑する衆生の爲めの故に、(一三)相諦の方便を知る。四には謬り解して深法を迷惑する衆生の爲めの故に、(一四)差別諦の方便を知る。五には(一五)正念を離れたる衆生の爲めの故に、(一六)說成諦の方便を知る。六には正見の衆生義の爲めの故に、(一七)事諦の方便を知り、(一八)生諦の方便を知り、(一九)盡無生智諦方便を知り、道智諦に入らしむる方便を知る。事諦等の四諦は苦諦等の所攝なり。七には大乘の化すべき衆生の爲の故に、善く一切の菩薩地の次第に成就する諦の方便を知り、及び善く集如來智諦の方便を知る。經にいへるが如く、是の菩薩は衆生の意に隨つて歡喜せしむるが故に、善く世諦を知る、乃至一切究竟の智を得て知るにあらずとの故なり。是の中、菩薩地の次第とは、地地の中間に自地の次第に入るが如く、應に知るべし。一切の生處にて身心に苦惱を受くるが故に、事諦の苦を知るとは所有る受は皆是れ苦事の故なり。

(二〇)不二の行を起すとは(二一)一行の故なり。正

【一二】空の義を聞きて斷滅の見を起すを深法を疑惑すといふ。

【一三】諸法の非有非無の一實の相を知らしめ、或は又空見に墮する者に對して、諸法の自相歷然たることを分別するを相諦といふ。

【一四】眞諦の二諦を聞き、空有一體と謬解する者に對して、二諦差別の義を示す。

【一五】二諦の差別を聞きて各別體ありと謂ひ、正道に乖違するを正念を離るといふ。

【一六】此の衆生に對して前の四諦差別の諸法は但言說に隨つて因緣集成す、自性あることなしと知らしむ、之を說成諦といふ。

【一七】事諦とは苦諦のこと。

【一八】生諦とは集諦なり、集は能く苦を生ずるが故に。

【一九】盡無生は滅諦なり。迷の生死の因盡くるを盡といふ卽盡智なり、後果の起らざるを無生といふ卽ち無生智なり。

【二〇】不二の行とは道諦の智にして、能く無二の滅諦に至るが故なり。

【二一】滅理に稱ふ行なるが故に

しく一切の相を覺るとは、(二二)五明論の處にて善巧に知るが故なり。信解力の故に知るとは、(二三)鏡像觀の智力にして、成就觀の智力にあらざるが故なり。是の如く所知法の中にて智清淨にして勝れたることを已に説けり。

云何んが衆生を利益する勤方便の勝なるや。一切有爲の法は虚妄の相なりと知るを以ての故に、衆生を憐愍する念を起す。

經に曰く、是の菩薩は是の如く、善く諸の諦智を起し已つて、如實に一切有爲の行は皆是れ虚妄、誑詐にして、凡夫を誑惑することを知る。菩薩は爾の時に復た衆生の中に於て、大悲轉た勝れて現在前し、及び大慈の光明を生ず。

論に曰く、是の菩薩は是の如く善く諸の諦智を起し已りて、乃至、及び大慈の光明を生ずとは、是の中、(二四)妄想にて常等となすは相似せず無なるが故に虚といひ、(二五)常に我想慢の事を作すが故に妄といひ、(二六)世法盡く壞するが故に誑といひ、世法は愚癡の凡夫を(二七)牽取するが故に詐とい

一行といふ。

【二二】五明論とは内明(佛教の教義)、聲明(文典學)、醫方明(醫學)、工巧明(工藝)、因明(論理學)の五科にして、印度古代に於ける一般學問の分類なり。

【二三】信解力の理會は鏡面の映像を觀知するが如きものにて、直觀の證智にあらず。成就觀とは佛果の智を親しく證するをいふ。

【二四】内五蘊を觀するに妄想に依りて常住なり樂なりと爲すも、之れ實相を得たるものに非ずして無なり(情有理無)、故に虛といふ。是れ所取の法の實に非らざるを明かす。

【二五】此の五蘊に對して我想を起し慢心を生ずるは僞妄なり。是れ能取の眞に非らざることを明かにす。

【二六】世法とは外六塵の境を觀ずるなり。外法は壞滅する者なるも、不壞の實法の如く見ゆるは實相を誑るなり、是れ所取の不實を明かす。

【二七】外境心を引き心之に迷ふなり。

ふ。常等の相は無にして有に非らず、似有なるが故に、虛事の中に意正しく無す。我想慢の事正しく取するが故に、妄事は是れ患なり。世法は利盡くるが故に誑事心を牽く。世法は愚癡の凡夫を牽取するが故に詐事の相現ず、故に凡夫を誑惑すと言ふ、此の諸の句義は應に知るべし。凡夫とは彼の正しく取する我慢の身に依止するなり。大悲大慈とは彼の衆生を憐愍して、勝れたる利益を示現し、彼の前地の悲に勝るが故に、大悲と言ひ。不住道行の勝れたるが故に、衆生を救ふ方便智の成就なるが故に、大慈の光明と言ふ。

經に曰く、是の菩薩は是の如きの智慧力を得て、一切の衆生を捨てず、佛智慧を求めて、如實に一切有爲の行の先際と後際とを觀じて、諸の衆生は先際の無明有愛に從ふが故に生ずることを知り、世間に流轉し、五陰の家に歸りて動發すること能はず、苦陰の聚を增長す。是の中、我無く、壽命無く、衆生無く、我と我所とを離れたるを、皆如實に知る。後際も亦是の如し。此の無所有の虛妄貪著、分段、盡出、有無を皆如實に知る。

論に曰く、是の菩薩は是の如きの智慧力を得とは、前に說けるが如し。一切の衆生を捨てずとは、大悲大慈の光明なり、これ亦前に說けるが如し。佛智慧を求むとは、一切の衆生を救ふ義の故なり。如實に一切有爲の行の先際と後際とを觀ずとは、彼の大悲の觀に隨ひて二種の相を示す。一には如實に苦の因緣集を觀ずるが故に、經にいへるが如く、諸の衆生は先際の無明有愛に從ふが故に

生ずるとを知り、乃至有無をも皆如實に知るとの故に。是の中、先際の無明有愛に從ふが故に生ずとは、此れ凡夫の生を顯す。菩薩の生にはあらず、菩薩は(二八)善巧の方便を以て生る。何が故に餘の因緣分を言はざるや。(二九)無明有愛は是れ有分の根本なるが故なり。彼の生とは、說に三種の衆生あり。欲求の衆生と、(三〇)妄梵行求の衆生と、有求の衆生となり。乃至有頂の五陰の苦聚に依る、是れ無我の事なり。是の中、自身に我無く及び彼に我事無し、第一義の故に無し。然るに彼の無我は命根の力に依りて住し、(三一)數數生を受けて、衆生の身心相續す、常に非らず斷に非らざるが故に命あり衆生ありと說く。(三二)彼の慢取の意を破せんが故に、命無く、衆生無しと說く。能取所取の我慢の意を遠離せんが故に、我と我所とを離ると說く。前際に(三三)何の因を以て、(三四)隨所に衆生

【二八】無明等の因より生を受くるは、凡夫の生死にして、菩薩の受生は大悲の願力に依る變易生死なり。此の故に善巧の方便を以て生るといふ。

【二九】生死流轉(有分)の因には十二因緣に示すが如く、業等あれども無明に由りて業を起し、愛は能く之を潤して業果の生死を感ず、是の故に無明と愛を根本と爲す。今は根本を擧げて、餘の因緣分を擧げず。

【三〇】梵行求には小乘及び外道あり。今は外道を指すが故に妄といふ。有頂天に生ずるも其の生は五蘊假和合の苦果なり、故に苦聚といふ。生死の體は自身無我なり、此の無我の事は第一義眞諦より無といふ。之を衆生と說くは世俗諦に依りて假立す。

【三一】人の梵名は補特伽羅(Pudgala)といひ、數取趣と譯す。數數諸趣の受生を取るが故なり。

【三二】此の假立相續の生命を執して慢取を起すが故に、其の病執を破せんが爲に、命無く衆生無しと說く。

【三三】何の因を以てとは前の無明有愛を牒す。

【三四】是の句は前の果を牒す。

有り、(三五)隨所に苦行有りやを、彼れ正觀し已りて、後際も亦是の如し。彼の苦因に隨ふを無明愛事と名く。盡とは滅に名く。勝世間滅するが故なり。出とは道に名く。(三六)無も亦如實に知り、有も亦如實に知る、是を一種の大悲をもつて因緣集を正觀すと名く。如實の苦を念ずるが故なり。次に第二種の大悲をもつて深重の苦、無量世の隨逐、及び種種の苦事を正觀することを說かん。

經に曰く、菩薩は爾の時に是の如きの念を作さく、此の諸の凡夫は甚た怪しむべしと爲す、愚癡にして智無く、無量無邊の阿僧祇の身有り、已に滅し、今滅し、當に滅すべし。是の如く盡滅し已つて、身に於て厭離の想を生ずると能はず、轉た更に機關の苦身を增長し、常に世間に隨ひて漂流して返ることを得ず。五陰の舍に歸して捨離すること能はず、四大の毒蛇を畏れず、我慢見の箭を拔出すること能はず、貪恚癡の火を滅除すること能はず、無明の黑闇を破壞すること能はず、愛著の大河を乾し竭くすこと能はず、十力の大聖導師を求めず、常に魔意の稠林に入り、生死海の中に於て、常に諸惡の覺觀の爲めに轉せらる。

論に曰く、大悲をもつて正しく深重の苦を觀ずとは、無量世に種種の苦に隨逐するが故なり。無量無邊の阿僧祇の身有りて滅すとは、無量世に隨逐するが故なり。云何んが種種の苦なる。生苦を

(三五) 是の句は前の無我を牒す。

(三六) 凡夫に約すれば但苦集有りて滅道無し。菩薩に約すれば順は有にして逆は無なり。凡聖に約すれば眞の滅と道とは有にして、妄の苦と集とは本空なり。凡夫は迷ふが故に、此の有と無とを覺知せず、菩薩は正しく覺了して如實に之を知るとの意なり。

觀ずるが故に、彼の集の故に、彼の滅道を離るるが故なり。是の如く、老病死の苦を觀ずるが故に、彼の集の故に、彼の滅道を離るるが故に。是の中、此の身は因緣に依りて有り。(三七)機關の苦身とは、生苦を示現す。常に世間に隨ひて漂流して返ることを得る能はずとは、集愛を示現す。五陰の舍に歸りて捨離することと能はずとは、彼の滅道を離るることを示現す。四大の毒蛇を畏れずとは、謂はく病苦なり。(三八)彼れ生を增損するが故に。(三九)妄梵行求の衆生と、欲求の衆生の受欲の者と。惡行を行ずる者と、有求の衆生とは、我慢見の箭を拔出すること能はずといふに示現す。貪恚癡の火を滅除すると能はず、無明の黑闇を破壞すること能はず、愛著の大河を乾し竭くすこと能はず、是の如く次第して彼の集を示現し、無畏の處に趣く。十力の大聖導師を求めずとは、彼の滅を遠離することを示現す。常に魔意の稠林に入りて、惡道に隨順すとは、彼の道を遠離することを示現す。生死海の中に於て、常に諸の惡の覺觀の爲めに轉せらるるとは、一切三界の心心數の相の虛妄分別なり。應に知るべし。次に上の大慈悲光明の觀行を說かん。

【三七】 機關とは苦の因に依つて苦果隨つて轉ずるが故に名くるなり。

【三八】 地水火風の四大は肉身を組織する要素なり、四大の調不調に依りて身體に增損あり。

【三九】 次は四種の人を擧げて四句を釋す。妄梵行求の衆生(外道のこと)は、我慢我見等を多く起すが故に、欲求の衆生の中にて受欲の者は貪瞋癡の三毒を起すが故に、惡行を行ずる者は無明に蔽はれ少利を見て大惡行を行ずるが故に、有求の衆生は愛欲に渇するが故に、次第して四種の衆生の苦因を示す。

經に曰く、我れ彼の諸の衆生を見るに是の如きの苦惱を受け、孤獨にして救はることなく、依有ること無く、舍有ること無く、洲有ること無く、究竟無く、盲にして目無く、無明翳藏に纏はれ、愚癡に覆はる。此の衆生の爲めに是の如きの心を發す。唯我れ一人のみ獨にして等侶なく、功德、智慧、助道を修集し、是の功德と、智慧と、助道とを以て資糧となし、一切の衆生をして畢竟清淨に住することを得しめ、乃至佛の十力、無障礙の智盡を得しめん。

論に曰く、彼れ是の如きの苦惱を受くとは、前に說く所の如し。孤獨とは、彼の苦の中に於て、救拔せらるること無きが故なり。復た次に孤獨とは、已に受けたる苦と未だ受けざる苦との中に於ての故に、救はること無く、依る者無しと言ふ。善知識を離るるが故に、(四〇)舍有ること無しと言ふ。正法を聞くことを離れたるが故に、(四一)洲有ること無しと言ふ。寂靜の思惟を離れたるが故に、(四二)究竟無しと言ふ。正見を離れたるが故に、盲にして目なき者と言ふ。彼の障、諸の舊煩惱、及び客塵煩惱常に邪念を起して正法等を聞かざるが故に、無明翳藏に纏はれ愚癡に覆はると言ふ。唯我れ一人のみ獨にして等侶無しとは、勇猛の勝事を顯示す。功德、智慧、助道を修集すとは、修行の增長せるを顯示す、彼れ衆生を教化するによりて、人天の因、乃至涅槃の因と作るが故なり。畢竟清淨と

【四〇】善友は能く庇護するが故に舍と爲す。之れなき故に舍なしといふ。

【四一】聞法は洲の如く之に依りて四流の水に漂はさるることを免るる法を聽くこと能はざるが故に洲無しといふ。

【四二】思を靜め義を窮むるを究竟と爲す。是れ無きが故に究竟なしといふ。

は、勝世間淸淨なるが故なり。佛の十力を得とは、諸の魔怨を降伏するが故なり。無障礙の智盡とは、聲聞、辟支佛の淨智に勝るが故なり。

經に曰く、菩薩は是の如く善く觀じて、智慧力を起し、修する所の諸の善をもつて發願す、一切の衆生を救はんが爲の故に、一切衆生の爲めに利益を作さんが故に、一切衆生の爲めに安樂を得しめんが故に、一切の衆生を愍念せんが故に、一切の衆生をして苦惱無からしめんが爲めの故に、一切の衆生をして解脱を得せしめんが爲めの故に、一切の衆生を攝せんが爲めの故に、一切衆生の心を淸淨ならしめんが爲めの故に、一切衆生を調伏せんが爲めの故に、發願して一切の衆生をして大涅槃に入らしめんが爲めの故に。

論に曰く、是の中、善く觀じて智慧力を起すとは、正觀の智を以て衆生を調伏するが故なり。皆一切の衆生を救度せん爲めとは、一切の苦惱を拔くが故なり。救度に九種あり。一には不善に住する衆生をして善法に往かしむ、經にいへるが如く、一切の衆生の爲めに利益を作さんが故に。二には善法に住する衆生をして樂果を得せしむ、經にいへるが如く、一切の衆生の爲めに安樂を得しめんが故に。三には貧乏に住する衆生に一切の資生の具を與ふ、經にいへるが如く、一切の衆生を愍念せんが故に。四には病苦に住し及び諸の外緣に惱まさるる衆生をして皆除斷せしむ、經にいへるが如く、一切の衆生をして苦惱無からしめんが爲めの故に。五には世間に繫閉する衆生をして出

離を得せしむ、經にいへるが如く、一切の衆生をして解脫を得せしめんが爲めの故に。四種の相ありて、諸の外道をして正法を信解せしむ、經にいへるが如く、一切の衆生の心を淸淨ならしめんが爲めの故に。已に決定に住する衆生をして勸めて三學を修せしむ、經にいへるが如く、一切の衆生を調伏せんが爲めの故に。已に三學に住せる衆生をして涅槃を得せしむ、經にいへるが如く、發願して一切の衆生を大涅槃に入らしめんが爲めの故に。此の九種の救苦の中、初の二句は未來を救はんが爲め、餘句は現在を救ひ亦未來を救はんが爲めなり。是を不住道の修行勝と名く。次に不住道の修行の勝果を說かんに、四種の相あり。一には攝功德の勝、二には修行の勝、三には衆生を敎化する勝、四には世間に隨順する智を起す勝なり。云何んが攝功德の勝なる。攝聞と戒と智と勝るが故に。

經に曰く、是の菩薩は此の第五の菩薩難勝地に住し已つて、名けて念者と爲す、諸法を忘れざるが故に。名けて意者と爲す、善く決定する智慧あるが故に。名けて去者と爲す、經書の意の次第を知るが故に。名けて有慚愧の者と爲す、自ら護り彼を護るが故に。名けて堅心の者と爲す、持戒の行を捨てざるが故に。名けて覺者と爲す、善く是處と非處とを思惟するが故に。名けて隨智の者と爲す、他に隨はざるが故に。名けて隨慧の者と爲す、善く諸法の章句の是義と非義とを分別するが故に。名けて神通を得たる者と爲す、善く禪定を修するが故に。名けて善方便の者と爲す、世間の法行に隨ふ

が故に。

論に曰く、攝聞の勝とは、攝聞思修の慧の勝れたるが故なり。云何んが、慧勝なる、經に「名けて念者と爲す、諸法を忘れざるが故に。名けて意者と爲す、善く決定する智慧あるが故に。名けて去と爲す、經書の意の次第を知るが故に」といへるが如し。是の中、念者とは聞慧の勝れたるが故に。意者とは思慧勝れたるが故に。去者とは修慧勝れたるが故なり。此の諸句は次第に復た異釋あり、聞持勝れたるが故に名けて念者と爲し、法智甚深にして勝れたるが故に名けて意者と爲す、意甚深の智勝れたるが故に名けて去者と爲す。此を略說するに〔四三〕二種の善巧を成就す、法善巧と義善巧との故なり。戒攝の勝とは二種有り、〔四四〕忍辱柔和の勝と、及び、〔四五〕戒無缺の勝となり。經に「名けて有慚愧の者と爲す、〔四六〕自ら護り、〔四七〕彼を護るが故に。名けて堅心の者と爲す、持戒の行を捨てざるが故に」といへるが如し。攝智の勝とは、五種あり。一には因緣集智、〔四八〕無因と〔四九〕顚倒因との邪見を對治す、經にいへるが如く、名けて覺者と爲す、善く是處

〔四三〕二種の善巧に配して異釋す。聞持は總なり、別しては法を知ると義を知るとあり、故に法と義とに配す。

〔四四〕微細の罪過を犯すも能く之を悔ゆること。

〔四五〕堅く戒を持して犯さざること。

〔四六〕內に慚愧の心ありて柔和、發して人に向ふを自ら護るといふ。

〔四七〕他に罪過を擧げらるるも慚愧に由りて能く之を忍辱するを彼を護るといふ。

〔四八〕果は必ず因に由るを是處（道理あること）と名け、因に由らずと爲すを非處と名く。是れ無因の邪見を對治す。

〔四九〕善惡の因は苦樂の果を招くを是處と名け、之に反するを非處と名く。之れ倒因を對治す、此の智を名けて經に

と非處とを思惟するが故に。二には證智、(五〇)魔事を對治す、經にいへるが如く、名けて隨智の者と爲す、他に隨はざるが故に。三には妄說を知る智、異說を對治す、(五一)善く是の句義と非の句義と雜の句義とを知る、經にいへるが如く、名けて(五二)隨慧の者と爲す、善く諸法の章句の是義と非義とを分別するが故に。四には神力智、邪の歸依の行を對治す、經にいへるが如く、名けて神通を得たる者と爲す、善く禪定を修するが故に。五には衆生を化する智、方便を以て攝取するが故に、經にいへるが如く、名けて善方便の者と爲す、世間の法行に隨ふが故に。是を攝功德の勝と名く。云何んが修行の勝なる。

經に曰く、名けて無厭足の者と爲す、善く功德行の助道を集むるが故に。名けて不休息精進の者と爲す、常に智慧行の助道を求むるが故に。名けて無疲倦の者と爲す。大慈悲行の助道を集むるが故に。名けて常に佛法を念ずる者と爲す、佛の十力、四無所畏、十八不共の佛法を求むるが故に。名けて善念の修行者と爲す、莊嚴せる佛國を起すが故に。名けて具足して種種の善業を修行する者と爲す、三十二相、八十種好を集むるが故に。名けて常に精進を行ずる者と爲す、佛の身口意を莊嚴せんことを求むるが故に。名けて樂つて大いに法を恭敬する者と爲す、一切の菩薩、及び法師に親近し供養するが故に。名けて善く願を起して自在なる者と爲す、大方便をもつて善く世間に入るが故に。名けて日

覺者といふ。

【五〇】理外の分別を魔事と名く。證理の智は能く之を治す。

【五一】教說を知る智なり、正說を是となし邪說を非と爲し、正邪相交るを雜と爲す。

【五二】邪を簡びて正を得るを隨慧と名く。

夜に餘心を遠離する者と爲す、常に樂つて一切の衆生を敎化するが故に。

論に曰く、是の中、修行の勝に十種あり。一には增長の因行、經にいへるが如く、名けて無厭足の者と爲す、善く功德行の助道を集むるが故に。二には依止の因行、經にいへるが如く、名けて不休息精進の者と爲す、常に智慧行の助道を求むるが故に。三には衆生を化して疲倦せざる行、經にいへるが如く、名けて無疲倦の者と爲す、大慈悲行の助道を集むるが故に。四には佛法の行を起す經にいへるが如く、名けて常に佛法を念ずる者と爲す、佛の十力、四無所畏、十八不共の佛法を求むるが故に。五には佛の國土を淨むる行を起す、經にいへるが如く、名けて善念の修行者と爲す、莊嚴せる佛國を起すが故に。云何んが莊嚴なる。煩惱染なく、堅固の智慧を得て、衆生は其の中に住在し、及び(五二)佛法にて莊嚴せるが故なり。六には佛の法身に依つて行を起す、經にいへるが如く、名けて具足して種種の善業を修行する者と爲す、三十二相、八十種好を集むるが故に。七には佛の所作に依つて行を起す、經にいへるが如く、名けて常に精進を行ずる者と爲す、佛の身口意を莊嚴せんことを求むるが故に。八には法を敬重する行、經にいへるが如く名けて樂つて大いに法を恭敬する者と爲す、一切の菩薩及び法師を供養するが故に。九には願つて有を取るの行、經にいへるが如く、名けて善く願を起して自在なる者と爲す、大方便をもつて善く世間に入るが故に。

【五二】莊嚴の義を釋するに前句は人に約し、此の句は法に約す。佛果位の諸の功德法を以て莊嚴すとの意なり。

十には小乘の心を離るる行、經にいへるが如く、名けて日夜に餘心を遠離する者と爲す、常に樂つて一切の衆生を教化するが故に。是を修行の勝と名く。云何んが教化衆生の勝なる。

經に曰く、是の菩薩は是の如きの行を成就せる時、布施を以て衆生を教化す。又愛語、利益、同事を以て衆生を教化す。又色身の示現を以て衆生を教化す。又説法を以て衆生を教化す。又廣く菩薩の行、神通の事を示して衆生を教化す。又諸佛の大事を説いて衆生を教化す。又世間の過惡を示して衆生を教化す。又諸佛の智慧と利益とを説いて、衆生を教化す。又大神通、莊嚴の相を現じ、亦種種の行を説いて衆生を教化す。是の菩薩は是の如く、衆生を教化する方便成就し、身心常に佛智に趣いて、諸の善根の業を退失せず、常に勤めて轉勝の道を修行するが故に。

論に曰く、是の中、教化衆生の勝とは、四攝法を以て教化す、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如きの行を成就せる時、布施を以て衆生を教化し、又愛語、利益、同事を以て衆生を教化すとの故に。同事をもつて衆生に隨順して應に（五四）自衆を化すべき爲めには、經にいへるが如く、又色身の示現を以て衆生を教化すとの故に。疑惑の衆生の法を説きて成就すべきものの爲には、經にいへるが如く、又説法を以て衆生を教化すとの故に。菩提に於て方便なき衆生の爲めには、經にいへるが如く、（五五）又廣く菩薩の行、神通の事を示して衆生を教化すとの故に。大

【五四】種種の衆生に隨つて身を以て類同し、同事を現ずるが故に自衆と稱す。

【五五】此の衆生は菩薩所行の道等を解せざるが故に行事を示して修行を解せしむ。

乘に於て疲倦せる衆生の爲めには、經にいへるが如く、又【五六】諸佛の大事を說いて衆生を教化すとの故に。世間を樂ふ衆生の爲めには、經にいへるが如く、又世間の過惡を示して衆生を教化すとの故に。大乘を信せざる衆生の爲めには、經にいへるが如く、又諸佛の智慧と利益とを說いて衆生を教化すとの故に。無智の衆生の爲めには、神通莊嚴を現じて、種種の行を示し、一身を以て無量の身を示し、是の如き等の事をもつて決定の信を生ぜしむ、經にいへるが如く、又大神通、莊嚴の相を現じ、亦種種の行を說いて衆生を教化すとの故に　是の菩薩は是の如く衆生を教化する方便成就すとは、前に說けるが如し。身心常に佛智に趣くとは、衆生を教化して勝力を求めんが爲めの故なり。而も諸の善根の行を退失せずとは、所得の功德智慧に隨ひて、皆退失せざるが故なり。常に勤めて轉勝の道を修行すとは、彼の修する所の諸行を增勝ならしめんと欲するが故なり。

【五六】修行を解すと雖、尙疲倦して進まざるが故に、佛果の大利益の事を示して之を勸誘す。

是を教化衆生の勝と名く。云何んが世間に隨順する智の勝れたるを起し、染障を對治するや。經に曰く、是の菩薩は衆生を利益せんが爲めの故に、善く世間の所有る書、論、印、算數、有性等の論、諸病を治むる方を知る。所謂る乾枯病を治し、顚狂病を治し、鬼著病を治し、蠱毒病を治する等、衆生を損害する者は、皆悉く能く治す。謂ゆる呪藥等なり。作論、經書、妓樂、戲笑、歡娛等の事、國土、城邑、聚落、室宅、河泉、池流、園觀、華果、藥草、林樹等、金銀、瑠璃、摩尼、眞珠、珊瑚

琥珀、硨磲、碼碯、諸寶の性等。日月、星宿、地動、夢想、吉凶入等。遍身の諸相、持戒の行處、禪定、神通、四無量心、四無色定、凡そ諸の衆生を惱まさざるの事、能く衆生を利益し安樂にする事を知る。衆生を憐愍する故に、出し、漸く無上の佛法に信入せしむるが故に。

論に曰く、世間に隨順する智とは、染障の對治なり。經に是の菩薩は衆生を利益せんが爲めの故に、善く世間の所有る一切の書論等を知るといへるが如し。是の中、書等に四種の障對治あり。四種の障とは、一には(五七)所用の事の中に忘るる障、(五八)取與寄付。法を聞いて義を思ひ、作不作の事、已作未作の事、應作不應作の事。此を對治するが故に書といふ。二には邪見顚智の障、(五九)因論と(六〇)聲論とを以て此の二を對治するが故に論といふ。三には所取の物を守護せざる障、此を對治するが故に(六一)印といふ。四には取與に疑を生ずる障、此れを對治するが故に算數いふ、數とは一一を二と爲し、二二を四と爲す、是の如き等なり。(六二)算とは一は縱、十は横、是の如き等なり。(六三)石性等の論とは、貧事の障を對治するが故に。諸病を治する方とは、四大不調の衆生の毒相病障を對治するが故に。乾枯顚狂の病とは、(六四)四大不調の相の故なり。(六五)鬼著病等は是衆生の相、

【五七】必要の事項を忘るるを。
【五八】取るべきもの、與ふべき者、寄付すべき者に就いて正しき理會あること。
【五九】因論とは因明(論理學)のこと。之に依つて正智を得邪見の障を治す。
【六〇】聲論とは聲明(文章音韻の學)の智識に依つて顚智の障を治す。
【六一】印とは印記分別又は決定不改を表示す。之に依つて所取の物を守護す。
【六二】算は位を記するが故に縱横といふ。
【六三】工藝技術を敎ふる論のこと。
【六四】四大不調に依る身體內部の疾患なり。
【六五】俗に云ふ生靈死靈等の祟

蠱毒病とは亦は四大の不調、亦は衆生の相、（六六）病の因、及び死の因、此を對治するは、謂ゆる呪藥等なり。日、月、星、宿、地動、夢、想、吉凶の入等、遍身の諸相とは、是の中唯日月等の相見有るが故に。日等とは曜等に攝するが故に。入とは（六七）八業の果に入るが故に。遍身の諸相とは（六八）愛不愛の果行の故に。持戒の行處等とは、是の中、持戒の行處、禪定、神通、四無量心、四無色定等は是の如く次第して破戒の染、貪欲の染、邪歸依の染、妄行功德の染、妄修解脫の染、是の如く次第して說く、經にいへるが如く、石性等の論、乃至呪藥等との故に。論、經、書、妓樂、戲笑、歡娯等とは、憂惱の障を對治するが故に。國土、城邑、乃至藥草、林樹等とは、此れ不喜樂の障を對治するが故に。金銀、瑠璃、乃至、諸の寶性等とは、繫閉等の障は此の對治なるが故に。日月、星宿、乃至遍身の諸相等とは、所得の報分、過去の作惡の因の障は此の對治なるが故に。持戒の行處、乃至無色定とは、五種の染を對治す、何をか五種の染といふ。破戒の染、乃至妄修解脫の染の故なり。此の世間の智を起すに、四種の相を具足す。一には（六九）異障の中に障無きが故に、經にいへるが如く、凡そ諸の衆生を惱まさざる事との故に。二には過なき樂を與ふ、經にいへるが如く、能く衆生を利益し、安樂にする事との故に。三とは發

りをいふ、卽ち外部より來る病因なり。

【六六】病の原因となるもの及び死亡の原因となる凡ての疾患を指す。

【六七】八業とは前說の日月等の八を指す。

【六八】前世の善惡業因に依りて感招したる吉凶等の外相なれば愛不愛の果行といふ。

【六九】捕獲等の生類を惱ますの障なきをいふ。

起清淨、經に、衆生を憐愍するが故に、(七〇)出すといへるが如し。四には所用の清淨、經に、漸く無上の佛法に信入せしむるが故にといへるが如し。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の難勝地に住し已つて、多く諸佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを以ての故に、多くの百佛、多くの千佛、多くの百千佛、多くの億佛、多くの百億佛、多くの千億佛、多くの百千億佛、多くの千萬億那由他佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃歎して、衣服、飲食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て衆僧を供養し、此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと願ひ、諸佛の所に於て上恭敬を生じ、專心に法を聽き、聞き已つて受持し、力に隨つて修行し、佛法の中に於て出家す。出家を得已つて諸佛の所に於て、經法を聽受し。法師と爲つて法を說きて利益し、轉た勝れたる多聞の陀羅尼を得て法師を成就す。是の菩薩は爾の時に此の菩薩の難勝地の中に住して、無量の百劫に彼の善根は轉た勝れて明淨となり、無量の千劫、無量の百千劫、無里の百千億劫、無量の百千萬億那由他劫に彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となる。是の菩薩は是の如きの衆生を敎化する法を成就す。諸の佛子よ、譬へば本眞金を硨礫を以て磨瑩すれば光色轉た勝れて明淨となるが如し。諸の佛

【七〇】出とは唐經に「悉く開示す」と有り、晉經には「此の如きの法を出す」といふ。教法を開說して、衆生を導くの意なり。

子よ、菩薩は此の菩薩の難勝地の中に住して、彼の諸の善根は方便智の思量力を以ての故に、轉た勝れて明淨となる。彼の智慧善根成就して退かず、思量轉た勝り、下地の善根の及ぶこと能はざる所なり。諸の佛子よ、譬へば日月星宿の諸天の宮殿の光輪は圓滿に成就して壞せず、風も動かす能はざるが如し。是の如く、諸の佛子よ、菩薩は此の菩薩の難勝地の中に住して彼の諸の善根は方便智の思量力を以ての故に、不退を成就し、一切の聲聞、辟支佛、世間の善根の及ぶと能はざる所なり。是の菩薩は十波羅蜜の中にては禪波羅蜜增上す、餘の波羅蜜も修習せざるには非らず、力に隨ひ分に隨ふ。諸の佛子よ、是を菩薩の第五の菩薩難勝地を略說すと名く。若し菩薩此の地の中に住すれば、多く兜率陀天王と作り、作す所自在にして一切の外道の邪見を摧伏し、能く衆生をして實諦の中に住せしむ。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至一切種の一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切の衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、道と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至、一切智の依止者と爲るべしと。復た是の念に隨ひて精進の行を發す。精進の力を以ての故に、一念の間に於て、千億の三昧を得、千億の佛を見たてまつり、千億の佛の神力を知り、能く千億の佛の世界を動かし、能く千億の佛の世界

に入り、能く千億の佛の世界を照し、能く千億の佛の世界の衆生を化し、能く壽千億劫に住し、能く過去未來の各千億劫の事を知り、能善く千億の法門に入り、能く身を變じて千億と爲し、一一の身に於て能く千億の菩薩を示して以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在勝上なり。菩薩の願力は此の數に過ぎて、種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は、乃至無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、轉た勝れたる多聞の陀羅尼を得て法師を成就すとは、義陀羅尼を得るには非らず、平等清淨の心は甚だ得難きを以ての故に。又出世間の智を樂つて、世間の智を現ずるは最も難きが故に、聞持の陀羅尼を得。此の地の光明にて眞如の事示現す、經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば本眞金の如く、乃至下地の善根の及ぶこと能はざる所なりとの故に。日月の光輪とは、阿含の增長に依りて、智慧の光明は前地の智に勝るが故なり。經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば日月星宿の如く、乃至世間の善根の及ぶこと能はざる所なりとの故に。

卷の第八

現前地第六

論に曰く、五地中に三分に差別して、勝慢對治、不住道行勝、及び彼の果勝となしたるが如く、第六地も亦是の如く應に知るべし。轉た勝れたるが故なり。云何んが勝れたる。第四地の中に已に衆生我慢と、解法慢の對治を說けり、第五地の中に已に身淨分別慢の對治を說けり、今第六地の中には染淨の法を取する分別慢對治を說く、十の平等法を以ての故に。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言く、諸の佛子よ、若し菩薩已に善く第五地の道を具足して第六の菩薩地に入らんと欲せば、當に十平等の法を以て第六地に入ることを得べし。何等をか十と爲す。一には一切の法は無相平等なるが故に。二には一切の法は無想平等なるが故に。三には一切の法は無生平等なるが故に。四には一切の法は無成平等なるが故に。五には一切の法は寂靜平等なるが故に。六には一切の法は本淨平等なるが故に。七には一切の法は無戲論平等なるが故に。八には一切の法は取捨無く平等なるが故に。九には一切の法は幻、夢、影、響、水中の月、鏡中の像、焰、化の如くにして平等なるが故に。十には一切の法は有無不二にして平等なるが故に。是の菩薩は是の如く

一切法の相を觀じて、垢を除くが故に、隨順するが故に、分別無きが故に、第六の菩薩現前地に入ることを得て、明利の順忍を得るも、未だ無生の法忍を得ず。

論に曰く、染淨の法を取する分別慢對治とは謂く(一)十の平等法なり。是の中、一切の法は無相、乃至一切[の法]は有無不二にして平等なりとは是れ十二入の一切法は自性無相にして平等なるが故なり。復た次に、相分別の對治に九種有り。一には(二)十二入の自相の想、經にいへるが如く、一切の法は(三)無想平等なるが故に。二には(四)念の展轉する行相、經にいへるが如く、一切の法は無生平等なるが故に。三には生の展轉する行相、經にいへるが如く、一切の法は(五)無成平等なるが故に。四には(六)染相、經にいへるが如く、一切の法は寂靜平等なるが故に。五には淨相、經にいへるが如く、一切の法は(七)本淨平等なるが故に。六には(八)分別の相、經にいへるが如く、一切の法は(九)無戲論平等なるが故に。七には(一〇)出沒の相、經にいへ

【一】十句の中、初の一は總、餘は別なり。論に九種の相對治を立てて無相を示す。但し論には對治の語なく、經文を擧げて之を顯はす。

【二】十二入(又は十二處)とは眼耳鼻舌身意の六根と、其對境たる色聲香味觸法の六境とをいふ。これ有爲無爲の一切法を攝盡せるなり。

【三】十二入の自相は妄想の所作にして所有なきが故に無想といふ。

【四】念とは想念なり。所取の法は妄想なれば相空と說くべきも、想は能く諸相を現する者なれば、有にあらずやとの疑あり。故に今其の主觀たる念想も虛妄分別の展轉する行相なれば無生平等といふ。

【五】所取の相と能取の想と展轉相依りて諸法は生成するも相は想に依るが故に所取成ぜず、想は却て相に依るが故に能取立せず。互に相依りて共に自立せざるが故に無成平等といふ。

【六】染相とは惑業にして、集諦なり。其の體本來空寂にして自性なきが故に寂靜平等と

るが如く、一切の法は取捨無くして平等なるが故に。八には（一一）我は有に非らざる相、經にいへるが如く、一切の法は幻、夢、影、響、水中の月、鏡中の像、焰、化の如くして平等なるが故に。九には（一二）成壞の相、經にいへるが如く、一切の法は（一三）有無不二にして平等なるが故なり。垢を除くとは障垢を遠離するが故なり、隨順とは平等の眞如の法に隨順するが故なり。分別無しとは、分別の想を生ぜざるが故なり。明利とは、微細の慢を對治するが故なり。（一四）前二地の中には麤と中との慢を對治するが故に、軟と中との忍を得たり。隨順とは、（一五）無生法忍に隨順するが故なり。未だ無生の法忍を得ずとは、此の忍は無生法忍に順ずるのみにて卽ち無生忍に非らざるが故

いふ。

【七】染法已に本來空無なれば滅道二諦の淨法は本來清淨なり。

【八】染淨俱に空なるに種種の名言を立て分別するを分別の相といふ。

【九】名言は義に依つて立ち、義は名言に依つて顯る、名を尋ねて義を取るを、妄想戲論といふ。

【一〇】淨法の取るべきを出と名け、染法の捨つべきを沒と名く。妄法は空にして捨つべき無く、眞理は念を離るれば取るべきなし、故に取捨なしといふ。

【一一】前に眞妄有也との見を破するに無を以てせり。然らば眞妄を斷無なりと爲すを正理となすべきかとの疑あれば、我は非有也との斷無の見を破して緣生假有の義を示す。故に幻夢等の喩を擧ぐ。此の句は有を以て無を破するなり。

【一二】成とは有の相、壞とは無の相也。前に無と取するを幻有なりとして之を破するが故に、今復亦有亦無を以て正理と謂はんも、有と執するを無也と破するは、法體實に無也といふには非ず。又無と執するを有也と破するも、法體實に情の如く有なりといふには非らず。是の故に正理は有無不二なりと示す。これ先の有無の見を俱に破するなり。

【一三】有無不二とは有無互に除くを不二といふに非ず、亦有無合せ取るを不二と云ふに非ず。亦總じて有無なきを不二といふに非ず。此に不二とは有卽無、無卽有の義を示す。

【一四】四地に除く所の解法慢の障は最も麤なるが故に軟品の順忍を得、軟とは下の謂なり。

なり。是を染淨の法を取する分別慢の對治と名く。云何んが不住道の行勝なる。

經に曰く、是の菩薩は是の如く、一切法の相を觀じて、隨順して至ることを得、復た勝れたる大悲を以て首と爲すが故に、大悲增上するが故に、大悲をして滿足せしむるが故に、世間の生滅を觀ずるが故に。

論に曰く、是の菩薩は是の如く一切法の相を觀じて隨順して至ることを得とは、不住道の行勝に至ることを得るが故なり。不住道の行勝とは、衆生を捨てず、過去、現在、未來の大悲の攝勝れたるが故に、一切所知の法の中に智淨きが故に、一切種の微細の因緣集觀の故に、〔一六〕世間と涅槃とに住せざるが故なり、經に「復た大悲を以て、首と爲し、乃至世間の生滅を觀ずるが故に」といへるが如し。

經に曰く、是の菩薩は世間の生滅を觀じ已つて、是の念を作さく、世間の所有る受身生處の差別は皆我に貪著するを以ての故なり。若し我に著することを離るれば世間の生處無しと。菩薩は復た是の念を作さく、此の諸の凡夫は愚癡に盲ひられて、我に貪著し、無智闇障にして常に有無を求め、恆に邪念に隨ひ、妄りに邪道を行じ、妄行、罪行、福行、不動行を集起す。是の行を以ての故に、心の種

五地には身淨慢を除く、これ中品の忍を得、今此の六地には染淨の法を取る分別の慢は最も細なるが故に、之を對治して上品の忍を得、此の故に明利と名く。

〔一五〕七地八地以上は無生忍の位なるも此の地は然らず、故に無生法忍に隨順すといふ。

〔一六〕大悲の故に涅槃に住せず、智清淨にして厭離の念を生ずるが故に生死に住せざるなり。

子を起し、有漏有取の想の故に、未來の生老死の身を起し、復た後有を生ず。業を地と爲し、無明覆蔽し、愛水を潤と爲し、我心漑灌して種種の見網を增長することを得しめ、名色の芽を生ず、生じ已つて名色を增長す、增長し已つて諸根を成ず、諸根成じ已つて迭互に相對して觸を生ず、觸相對して受を生ず、受けて後希ふ所に愛を生ず、愛有るを以ての故に取を生ず、取增長し已つて、五陰の身を生ず、五陰の身增長し已つて、五道の中に於て漸漸に衰變するを名けて老と爲す、衰變して滅するを名けて死と爲す、死して後に諸の熱惱を生ず、熱惱に因るが故に一切の憂悲苦惱聚を生ず。是れ因緣集なり。集むる者有ること無く、自然にして集まる。滅する者有ること無く自然にして滅するなり。是の菩薩は是の如く隨順して因緣集を觀ず。

論に曰く、是の中、世間の所有る受身生處の差別とは、五道の中の所有る生死の差別なり、是を世間の所有る差別と名く。此の因緣集に三種の觀門あり、應に知るべし。一には成と答と相との差別、二には第一義諦の差別、三には世諦の差別なり。云何んが成差別なる。初に唯〔一七〕因緣を明し、無我の義を釋して、一切の世間の所有る受身生處を成ず、皆我に貪著するを以ての故なり。若し我に著することを離るれば則ち世間の生處無し、即ち無我の義成ず。〔一八〕若し第一義の中に實に我相有らば我に著するの心は即ち是れ第一義の智にして、〔一九〕應

【一七】十二因緣を觀じて無我の義を明かす。
【一八】次の二句は我の理に非ざることを示す。
【一九】我は第一義の理體に無きが故に我執を離るれば世間に生ぜず、然るに我執に由りて世間に生ずるが故に我は理にあらざること明かなり。

に世間の受身生處に在つて生ずべからず。又復た、若し第一義の中に實に我相有らば、若し我に著することを離るれば則ち（二〇）應に常に世間に生ずべし。此の義を顯示するは、經にいへるが如く、世間の所有る受身生處の差別は皆我に貪著するを以ての故なり、若し我に著することを離るれば則ち世間の生處無しとの故に。云何んが（二一）答差別なる。若し實に我無ければ云何んが我に著せん。此の中には應に（二二）是の難有るべし。卽ち自ら答へて言へらく、愚癡に盲ひられ我に貪著すればなり。此を示現するは、經にいへるが如く、菩薩は復た是の念を作さく、此の諸の凡夫は愚癡に盲ひられ我に貪著すとの故なり。是の如く實に我有ること無し、何ぞ次第して我に貪著し、世間の受身生處有ることを得んや。此を成じて示現す、經にいへるが如く、無智の暗障は常に有無を求むとの故に。是の如きは答難の差別なり。是の中、無智、（二三）有無とは常と斷とを希求す、此れ無明と（二四）有愛とを示す。是の二は有支の根本なるが故なり。恆に邪念に隨ひ妄りに邪道を行じ、妄行、

【二〇】又第一義に我有らば我を離るるは卽ち理に違することとなるが故に、世間に生ずべき道理なるも、實には我を離るれば出世を得るが故に、理實に我無きこと明かなり。

【二一】以上は無我の義を成ずるが故に成差別といふ。次には此の無我の成立に就て疑難あり、之に答へて我執の起る所以を釋す。

【二二】若し理實に我無ければ何ぞ我と執するの道理有らんやとの難なり。

【二三】常を希ふを有といふ、樂事の常住せんことを欲するが故なり。斷を求むるを無といふ、苦事の斷滅せんことを欲するが故なり。

【二四】有愛とは三有の愛にして受生を希求することなり。

(二五)罪行、(二六)福行、(二七)不動行を集起す。恆に邪念に隨ふとは無明の因を示すが故に。妄りに邪道を行ずとは解脱處に於ける不正の行を示すが故に。妄行を集起すとは苦薩の勝義を示すが故に。(二八)菩薩は有に行ずと雖も、妄行と名けざればなり。是の行を以ての故に心の種子を起し、有漏、有取、想、乃至隨順して因緣を觀ず。是の中、心の種子を起すとは生老死の體性を示す。復た後有を生ずとは、隨順し攝取して罪福等の行を成就す。業を地と爲すが故に、前に無智の暗障、無明の覆藏と說けるが故に、常に有無を求め、愛水を潤と爲すが故に。是の如く住し、是の如く心を生ず。我は是れ我所、(二九)我の想は是れ慢なり。(三〇)我は生不生なり。是の如き等の種種の見網は自然にして滅すとは性(三一)自ら滅するが故なり。智緣滅に非ず。是の如きの答難因緣集は無我の義の成ずるとを釋し已る。云何んが(三二)相差別なる、若し因緣無我なれば何の相を以て因緣集の行に住するや。

【二五】無明に由りて世間の因果に迷うて罪行を造り、出世の因果に迷うて福及び不動行を起す。三惡趣を感ずる業及び人天の別報苦業を皆罪行と稱す。

【二六】欲界人天を感得する業を福行と稱す。

【二七】色無色界を感得する業を不動行と稱す。

【二八】凡夫は無明を因とし、有を求めて業を造るが故に、妄行といふも、菩薩は生を受けて、善行を爲すと雖も、正智見の上の行業にして妄行にあらず。

【二九】此の句は經文の我心を釋す、心は想の義、我に依りて我想を起し、他を陵ぐを以て慢と稱す。

【三〇】生とは常なり、不生とは斷なり。常と斷との二見を根本として六十二見を起す。是れ經文の種種の見網を釋するなり。

【三一】以上は十二因緣の順觀を示し、次には逆觀を示す。緣起の法は無性なるが故に自ら滅するなり。智力にて斷ずるが故に滅するには非ず。

【三二】眞に迷うて妄を起す緣相の次第を示す。

經に曰く、是の菩薩は復た是の念を作さく、如實に諸諦の第一義を知らざるが故に、名けて無明と爲す、無明の作す所の業果、是を名けて行と爲す、行に依りて初の心識有り、識と共に生じて四受陰有り、名けて名色と爲す、名色增長して六入有り、根と塵と識との三事和合して有漏の觸を生ず、觸共に生ずるが故に受有り、受に染著するが故に愛と名け、愛增長するが故に取と名く。取に從つて有漏の業を起すを有と名く。業有れば、果報有るを生と名く。生陰增長し衰變するを名けて老と爲す、老し已つて陰壞するを名けて死と爲す。然して別離する時、愚人貪著して心熱するを名けて憂と爲す、聲を發して啼哭するを名けて悲と爲す、五根相對するを名けて苦と爲す、意根相對するを名けて憂と爲す、憂苦轉た多きを名けて惱と爲す。是の如く但苦樹の增長する有り、作者有ること無し。菩薩は是の念を作さく、若し作者有らば則ち作事有り、若し作者無ければ則ち作事無し。第一義の中には作者有ること無く、作事有ること無しと。

論に曰く、是の中、無明の作す所の業果とは、所謂名色なり。中に於て識とは彼の依止なるが故に、名色と識と共に生ずるが故に識と名色とは迭互に相依るが故なり。若し作者無ければ、中に於て作事を分別するも亦無し此れ因緣集の有分を說く、自體作事無きが故なり。是を有分次第因緣集觀と名く。應に知るべし。云何んが第一義の差別なる。是の如くにして第一義諦を證すれば則ち解脫を得、彼の觀の故に。

經に曰く、是の菩薩は是の念を作さく、三界は虛妄にして但是れ一心の作なりと。

論に曰く、但是れ一心の作なりとは、一切の三界は唯心に轉ぜらるるが故なり。云何んが世諦の差別なる。隨順して世諦を觀ずれば卽ち第一義諦に入る。此の觀に六種あり。一には何者か是れ染、染の依止なりやと觀ず、二には因觀、三には攝過觀、四には護過觀、五には不厭厭觀、六には染觀なり。是の中、染依止の觀とは、因緣有分は一心に依止するが故なり。

經に曰く、如來の說く所の十二因緣分は皆一心に依る。所以は何ん。事に隨ひて貪欲し、心と共に生ずるを名色と名く。名色の增長するを六入と名く。六入の分を觸と名く。觸共に生ずるを受と名く。受け已つて厭足なきを愛と名く。愛攝して捨てざるを取と名く。此の有分和合して有を生ず。有の起す所を生と名く。生の變熟するを老と名く。老の壞するを死と名く。

論に曰く、此は是れ〔三三〕二諦の差別なり。〔三四〕一心と雜染の和合する因緣集觀なり。因觀とは二種あり。一には他因觀、二には自因觀なり。云何んが他因觀なるや。

經に曰く、是の中、無明に〔三五〕二種の作有り。一には緣中の癡、衆生をして惑はしむ、二には行の與めに因と作る。行にも亦二種の作有り。一には未來世の果報を生ず、二には識の與めに因と作る。

【三三】二諦の差別とは所依の心體は是れ眞諦、能依の有支は是れ俗諦なり。

【三四】一心は眞諦にして雜染は俗諦、眞妄和合して諸法を生ず、所謂獨眞不生單妄不成の義なり。

【三五】此段には十二支に各二種の作用あることを明かす。一は十二支各自固有の作用、二は各後支の與めに因となりて之を助成する作用なり。

識にも亦二種の作有り。一には能く有をして相續せしむ、二には名色の與めに因と作る。名色にも亦二種の作有り。一には互ひに相助成す、二には六入の與めに因と作る。六入にも亦二種の作有り。一には能く六塵を縁ず、二には觸の與めに因と作る。觸にも亦二種の作有り。一には能く所縁に觸る、二には受の與めに因と作る。受にも亦二種の作有り。一には憎愛等の事を覺す、二には愛の與めに因と作る。愛も亦二種の作有り。一には可染の中に於て貪心を生ず、二には取の與めに因と作る。取にも亦二種の作有り。一には煩惱染縛を增長す、二には有の與めに因と作る。有にも亦二種の作有り。一には能く餘道の中に於て生ず、二には生の與めに因と作る。生にも亦二種の作有り。一には五陰を增長し、二には老の與めに因と作る。老にも亦二種の作有り。一には諸根をして熟せしむ、二には死の與めに因と作る。死にも亦二種の作有り。一には五陰の身を壞し、二には見知せざるを以ての故に、而も相續して絶えざらしむ。

論に曰く、是の中、五陰の身を壞し、見知せざるを以て、而も相續して絶えざらしむとは、(三六)五陰を壞するは能く後生の因を作す。(三七)見知せざるを以ての故に能く後生の因を作す、是を(三八)他因

【三六】五陰積聚の身壞して死するは後の受生の因となる。

【三七】見知せずとは無明の義なり。無明を因として後有を生じ、生死輪廻相續して斷絶せざること恰も汲井輪の如し。

【三八】他因觀とは十二緣起は前は能く後を起し他の與に因となるが故なり。前支を因として之と異る後支を生ずるが故に他因觀といふ。

觀と名く。云何んが〔三九〕自因觀なる。無明等の自生の因、緣事を觀ずるが故なり。何者か是れ無明等なる。因緣行斷せず助成するが故なり。

經に曰く。是の中、無明は行に緣たりとは、無明の因緣にて行をして斷ぜざらしめ行を助成するが故なり。行は識に緣たりとは、行の因緣にて識をして斷ぜざらしめ識を助成するが故なり。識は名色に緣なりとは、識の因緣にて名色をして斷ぜざらしめ名色を助成するが故なり。名色は六入に緣たりとは、名色の因緣にて六入をして斷ぜざらしめ六入を助成するが故なり。六入は觸に緣たりとは、六入の因緣にて觸をして斷ぜざらしめ觸を助成するが故なり。觸は受に緣たりとは、觸の因緣にて受をして斷ぜざらしめ受を助成するが故なり。受は愛に緣たりとは、受の因緣にて愛をして斷ぜざらしめ愛を助成するが故なり。愛は取に緣たりとは、愛の因緣にて取をして斷ぜざらしめ取を助成するが故なり。取は有に緣たりとは、取の因緣にて有をして斷ぜざらしめ有を助成するが故なり。有は生に緣たりとは、有の因緣にて生をして斷ぜざらしめ生を助成するが故なり。生は老死に緣たりとは、生の因緣にて老死をして斷ぜざらしめ老死を助成するが故なり。無明滅するが故に則ち行滅す、無明の因緣無ければ行滅して助成せざるが故なり。行滅するが故に則ち識滅す、行の因緣無ければ識滅して助成せざるが故なり。識滅するが故に則ち名色滅す、識の因緣無ければ名

【三九】自因觀とは無明等の十二支は各前支を離れては後支なきが故に自因といふ。前の他因觀は十二支の前後不卽の義を明かし、此の自因觀は前後不離の義を示す。

色滅して助成せざるが故なり。名色滅するが故に則ち六入滅す、名色の因緣無ければ六入滅して助成せざるが故なり。六入滅するが故に則ち觸滅す、六入の因緣無ければ觸滅して助成せざるが故なり。受滅するが故に則ち愛滅す、受の因緣無ければ愛滅して助成せざるが故なり。愛滅するが故に則ち取滅す。愛の因緣無ければ取滅して助成せざるが故なり。取滅するが故に則ち有滅す、取の因緣無ければ有滅して助成せざるが故なり。有滅するが故に則ち生滅す、有の因緣無ければ生滅して助成せざるが故なり。生滅するが故に則ち老死滅す、生の因緣無ければ老死滅して助成せざるが故なり。

論に曰く、是の中、(四〇)無明は行に緣たり、無明の因緣にて行をして斷せざらしめ、行を助成するが故にとは、無明に二種あり。一には子時、二には果時なり。是の中、子時とは行をして斷せざらしむ。二種の義を有するが故に(四一)緣事を示現す。是の如く餘の因緣分の自生も二種の義に因る、緣事應に知るべし。自因觀とは相捨離せずと觀ずるが故に　前支を離れては後支無しと觀ずるが故に。無明を離れざれば則ち行を成ずと觀ず。若し無明を離れずして、行有らば應に無明は行に緣たりと言ふべからず。若し無明を離れて行の成る有らば異は則ち成ぜず。是の故に(四二)偈に言はく、

【四〇】初起の無明を子時と名く、無明自體の作用なり。無明は自體に止まらず轉じて行を起す之を果時と名く、後の與めに因たる作用なり。

【四一】緣事とは子時を緣とし果時を事と爲す、種子と現行との如し。

【四二】龍樹の中觀論の偈文を引證して因果不卽不離の義を示す。

衆緣の生ずる所の法は、是れ則ち〔四三〕因に卽せず、亦復た〔四四〕因に異らず、〔四五〕斷に非ず亦常に非ず。

自生の因緣觀とは前に說けるが如し。無明に二種あり。一には子時、二には果時なり。行乃至老死も亦是の如し。〔四六〕先際と後際と滅すれば、中際も亦無し、是の故に〔四七〕說かず。

云何んが攝過觀なる。所謂三道に攝せらるる苦因と苦果との故なり。

經に曰く、是の中、無明と、愛と、取との三分の斷せざるは、是れ煩惱道なり。行と有との二分の斷せざるは、是れ業道なり。餘の因緣分の斷せざるは、是れ苦道なり。先際より後際に相續して斷せざるが故に、是の三道は斷せず。是の如き三道は〔四八〕我と我所とを離る、但生滅有るのみなるが故に、猶ほ〔四九〕束竹の如し。

論に曰く、云何んが〔五〇〕護過觀なる。若し因緣より生ずと言はば、分別するに三種の過あり。一

【四三】所生の果は能生の因に非らざるが故なり、卽ち因果不卽の義を示す。

【四四】因能く果を生ずるが故に因果不離にして別異ならず。

【四五】因果不卽なるを以て、因果倶に斷無にあらず。不異なるが故に、因果倶に常有にあらず。

【四六】十二緣起の中にて無明と行とを先際とし、識名色觸受の五果を中際とす。先際無ければ中際なし、又後際の愛取有なければ中際の苦果生ぜず、これ總じて十二因緣を過現未の三際に分ちて、因滅すれば果も亦滅し、果滅すれば因滅するの義を示す。

【四七】論の意より推すに、子果等の別を說かざるの意。

【四八】十二因緣を惑(無明、愛、取)と、業(行、有)と、苦(餘の七支)との三道に分つ。惑と業とを因として苦果を生ず、是の故に人生は因果二法の生滅緣起にして、我なく我所なし。

【四九】十二因緣は束竹の互に相依つて立つが如くなれば、獨立の自性なし。

【五〇】人生は生滅の因緣にして我なしと云はば、三種の過を生ず、今三際の不同を明かして、此の三過を辯釋するが故に護過觀といふ。

には（五一）一切身一時に生ずるの過、何を以ての故に、異因無きが故なり。二には（五二）自の業報を受くること無き過、何を以ての故に、作者無きが故なり。三には（五三）失業の過、何を以ての故に、未だ果を受けざる業已に滅するが故なり。此の三種の過は過去世等の異因を見て答ふるを以ての故に、受生報等の差別あるが故なり。

經に曰く、無明は行に緣たりとは、是れ過去世の事を見る、識、名色、六入、觸、受は是れ現在世の事を見る、愛、取、有、生、老死は是れ未來世の事を見る。是に於て三世の轉有ることを見る。無明滅するが故に、諸行滅するを名けて因緣の相續を斷つの說と爲す。

論に曰く、無明は行に緣たりとは卽ち是れ過去世の事を見るとは、（五四）現在の生は是れ過去の作なるが故に、現在の果は卽ち是れ（五五）當來なり、卽ち是れ過去世の因の義を見るなり。識乃至受は是れ現在世の事を見るとは、（五六）過去世の中にてなせる所有る業に隨ひて（五七）彼の業は現在の識等の果報を得、復た能く（五八）未來の果報を得。愛取有は是れ（五九）未來世の事を見るとは、復た生有り

【五一】五道の受生に異因（過現の因別なるを異因といふ）無しといはば、一切身同一時に生ずべしとの難なり。

【五二】我ありて善惡の業を作せば、其の報を受くべき主體あるも、作者の主體たる我なければ、何者か其の報を受くるやとの難なり。

【五三】主體たる我なければ、其の業を持續して果を受くるに至らしむる者なかるべしとの難なり。

【五四】過去の因能く現在を作ることを示す。

【五五】現在の果を過去の因に由りて說くが故に當來といふ。

【五六】現在の果は過去の因に由ることを明かす。

【五七】過去の因現在の果を得ることを明かす。

【五八】現在は過去より云へば未來なるが故に、未來の果報を得といふ。

【五九】現在の愛取有の三は、果に從へて未來といふ。

（六〇）一往定まるが故なり。是に於て三世の轉有ることを見るとは、復た（六一）後世の生有りて轉ずるが故なり。（六二）此れ何の義を說くや。三種の義有るが故に、過去の業は報を得ず、或は（六三）未作有り、或は（六四）已作にして未だ報を得ず、或は（六五）對治の斷を得るが故なり。是の中、無明は行に緣たりとは是れ作を示現す。行は識に緣とし、乃至觸受とは、此れ作し已つて報を得ることを示現す。愛、取、有の斷えざるは此れ對治を得ざることを示現す。若し愛取を斷てば、作業有りと雖も則ち無明緣行は有を生ずること能はず、是の故に諸業に已作と未作と有り、果を得ると、未だ果を得ざると有り、已に斷つと、未だ斷たざると有り。若し是の如くなれば則ち一切身一時に生ずるの過無し。若し爾らば一切の業は卽ち（六六）當來の受にあらず、亦（六七）不受にあらず、亦（六八）一時にあらず、若し自の作業なれば果報失はず、他身の受にあらざるが故に。（六九）若し是の如くなれば則ち自業、報を受けざるの過無し。他は作さざるが故なり。彼の三事の

【六〇】此の句は上の義を結ぶ。三世の因果一往の理、是の如く決定せりとの義なり。

【六一】前に過現未相對して一往の道理を示したるが、此には三世流轉の因果を明す。流轉の因を對治せざる間は、後世更に後世を轉生して、輪廻無窮なりとの意なり。

【六二】次は前に擧ぐる所の護過を釋す。

【六三】未作とは意欲を起すも、未だ身口の作業とならざるをいふ。

【六四】現在已に愛取等にて、種種の業を作り竟るも、未だ潤熟せざるが故に、生老死の果を得ざるなり。

【六五】已熟の作業なりと雖、聖果を得たる者は愛取を斷つが故に業は燋亡して報を得ず。

【六六】前の對治に依りて業を斷つが故なり。

【六七】前の未斷の業なり。

【六八】前の作と未作、得と未得とを顯す。

【六九】自ら作し自ら受くるが故に、第二の不受報の過なし。

業を離れ定んで果を得て失はず、若し是の如くなれば則ち失業の過無し。是を名けて三種の過を護ることを示現すとなす。云何んが（七〇）不厭厭觀なる。種種の微苦を厭ふ、所有る受を分別するに皆是れ苦なるが故に、及び種種の麤苦を厭ふが故に。

經に曰く、十二因緣分を說いて三苦と名く。是の中、無明、行、識、名色、六入を名けて行苦と爲す。觸、受を名けて苦苦と爲す。餘の因緣分を名けて壞苦と爲す。無明滅するが故に行滅す、乃至生滅するが故に老死滅するを名けて三苦の相續を斷つの說と爲す。

論に曰く、云何んが深觀なる。

經に曰く、無明の因緣にて行生ず、因と緣とは能く行を生ず、餘も亦是の如し。無明滅すれば行滅して、行無し、餘も亦是の如し。無明の行に因緣たるは是れ縛の生ずるなり。餘を說くも亦是の加し。無明滅して行の滅するは是れ縛滅するなり、餘を說くも亦是の如し。無明の行に因緣たるは是れ隨順有觀なり、餘を說くも亦是の如し。無明滅して行の滅するは是れ隨順無所有盡觀なり、餘を說くも亦是の如し。

論に曰く、深觀とは四種あり。一には（七一）有分は、他作にあらず、（七二）自の因より生ずるが故なり。

【七〇】不厭厭觀とは凡夫は麤苦を厭はず、菩薩は之を厭ふ、及二乘は微苦を厭はず、菩薩は之を厭ふが故に、不厭厭觀といふ。

【七一】有分とは分は支の義にて有支なり、生死相續の體をいふ。

【七二】因能く果を生じて他作に非らざることを明かす。

二には（七三）自作にあらず、緣より生ずるが故に。經にいへるが如く、無明の因緣は行を生ず、因緣能く行を生ず、餘も亦是の如し、無明滅すれば行滅して行無し、餘も亦是の如しとの故に。三には（七四）二作に非らず。但（七五）隨順して生ずといふが故に、（七六）知者無きが故に、（七七）作時住せざるが故に、經にいへるが如く、無明の行に因緣たるは是れ縛を生ずるなり、餘を說くも亦是の如し。無明滅すれば行滅するは是れ縛を滅するなり、餘を說くも亦是の如しとの故に。四には無因の作にあらず、有に隨順するが故に、經にいへるが如く、無明は行に因緣たりとは是れ隨順有觀なり。餘を說くも亦是の如し。無明滅すれば行滅すとは是れ隨順無所有盡觀なり、餘を說くも亦是の如しとの故に。若し無因にして生せば生は應に常生なるべし、不生にあらず、定因無きを以ての故に。亦恆に不生なるべし。何を以ての故に、無因にして生ずるが故なり。此れ佛法の樂ふ所にあらず。若し爾らば隨順有觀には、因有り因無きに非らざるが故に。若し無因ならば隨順有と言ふことを得ず。是を十種の因緣集觀と名く。相諦差別の觀を已に說けり。

【七三】果は因に由ることを明かして、自作に非らざることを示す。

【七四】因を自となし、緣を他と爲す、或は果を自と爲し、因緣を他となす。此の二の自他俱に不作なるが故に、二作に非らずといふ。

【七五】自他共に不作ならば、何ぞ緣生といふを得んとの疑難に答へて、通俗の義に隨順して生と說くのみ、理實には無生なり。

【七六】因正しく有力にして果を生ずる時は、緣は必ず無力なるが故に相知ることを得ず、是の故に知者なしといふ。是の因緣は果と共ならざるなり。

【七七】果の起る時を作時といふ。因に於ても又緣に於ても住する所なきが故に、不住といふ。

經に曰く、是の菩薩は是の如く(七八)十種の逆順をもつて因緣集法を觀ず、所謂因緣分次第するが故に、一心の所攝なるが故に、自業成ずるが故に、相捨離せざるが故に、三道不斷の故に、先後際を觀ずるが故に、三苦の集なるが故に、因緣より生ずるが故に、因緣は生滅の縛なるが故に、隨順有盡觀の故に。

論に曰く、(七九)復た二種の異觀あり。一には大悲隨順觀、二には一切相智分別觀なり。(八〇)大悲隨順觀とは四種有り。一には愚癡顚倒、二には餘處に解脫を求む、三には異道に解脫を求む、四には異解脫を求む。云何んが愚癡顚倒なる、所著の處に隨ひて(八一)愚癡及び顚倒有り、此の事を觀ずるが故なり。我に著するを以ての故に、一切處に生を受く。我を遠離するが故に、則ち生有あること無し。云何んが愚癡なる。無明暗の故に、經にいへるが如く。是の菩薩は世間の生滅を觀じ已つて是の念を作さく、世間の所有る受身生處の差別は皆我に貪著するを以ての故なり。若し我に著することを離るれば則ち世間の生處無しとの故に。愚癡に盲ひられて、我に貪著す、是の如き顚倒及び有相支の中の疑惑顚倒なり、經にいへるが如く、菩薩は復た是の念を作さく、此の諸の凡夫は愚癡に盲ひられ、我に貪著し、無智の暗障は常に有無

【七八】經文、此の一段は次第の如く、前に說く所を結びて十種と爲す。

【七九】論文、此の一段に前來の經說を他の方面より分類し再釋す。

【八〇】大悲隨順觀とは諸の外道の眞理に達せず、眞の解脫を知らずして異求するを愍み、十二因緣を觀じて眞の解脫に導かんとする菩薩の大悲、之に隨順する因緣觀をいふ。

【八一】無我の理を解せざるを愚癡といひ、謬つて有我を執するを顚倒といふ。

を求む、是の如き等の故に。云何んが餘處に解脱を求むといふや。是の凡夫は是の如きの愚癡顛倒にて常に應に（八二）阿梨耶識、及び（八三）阿陀那識の中に於て解脱を求むべきに、乃ち（八四）餘處の我我所の中に於て解脱を求む。此を對治するは、經にいへるが如く、是の菩薩は是の念を作さく、三界は虚妄にして但是れ一心の作なり、乃至老壞するを死と名くとの故に。云何んが異道に解脱を求むといふや。顛倒の因の中に於て解脱を求むるなり。顛倒の因に三種有り、（八五）性を因となし、自在天を因となし、（八六）苦行を因となし、及び（八七）因無しとなす、應に是の如く求むべからず。何を以ての故に、因縁有支の二種の業は能く因縁の事を起すが故なり。經にいへるが如く、是の中、無明に二種の作有り。一には緣中の癡は衆生をして

【八二】阿梨耶識。又は阿梨耶（Ālaya）識といふ、無沒識又は藏識と譯す、有情の主體たる根本識に名く。

【八三】阿陀那識（Adāna）、執持識と譯す、我執の妄識なり。但し唯識論等にては、阿賴耶識の異名となす。

【八四】前に正しく解脱を求むべき處を擧げ、今は凡夫迷妄に依りて、我我所の所執に於て解脱を求むる邪義を示す。

【八五】性因とは數論學派の所執にして、性とは冥性又は自性（prakriti）のこと、此の學派にては神我と自性の二元を立て、自性を以て現象界を開發する物質的本體となし、其の先天的の屬性たる喜憂闇の三德にて、一切の差別的の現象を生ずとなし、此の三德の繫縛を脱して神我獨存の境に達するを解脱と爲す。自在天とは萬有を創造する超越的絶待神に名く。有情の善惡、苦樂は皆自在天の所爲にして、罪福共に自在天に歸して有情其の報を受くることなし。自在天と有情とは恰も工匠と其の作れる機械人形の如しといふ印度に於ける一學派の主張なり。

【八六】解脱は各自の業果に非らず、罪業の報もなし、但苦行を修すれば解脱に至ると主張する苦行外道の說なり。

【八七】因果の理法あることを信せず、苦樂共に自然なり、此の自然の理を知れば解脱を得と稱する一種の自然主義なり。

惑はしむ、二には行の與めに因と作る。是の如き等の故なり。自生因の故に、經にいへるが如く、是の中、無明行に縁たりとは、無明の因縁は行をして斷せざらしめ、行を助成するが故に、是の如き等の故なり。煩惱業妄想の因の故に。樂にあらざる因の故に。經にいへるが如く。是の中、無明、愛、取の三分の斷せざるは、是れ煩惱道なりと、是の如き等の故なり。先中際の因の故に、及び中後際の因の故に、中際と前後二際との故に、經にいへるが如く、是の中、無明は行に因縁たりとは是れ過去世の事を見る、是の如き等の故なり。若し是の如き事無ければ則ち種種の衆生も亦無し。云何んが異解脱を求むといふや。(八八)眞解脱には四種の相あり、一切の苦を離れたる相と、無爲の相と、染を遠離したる相と、出世間の相となり。(八九)彼の諸行の苦事隨逐して、乃し無色に至るも縛有り。經にいへるが如く、十二因縁分を說いて三苦と名く。無明、行、乃至六入を名けて行苦と爲すと、是の如き等の故なり。是の如く(九〇)因縁生の故に、經にいへるが如く、是の中、無明は行に因縁たり、因縁能く行を生ず、餘も亦是の如し等の故なり。是の如く復た(九一)染縛を生ず。經にいへるが如く。是の中、無明の行に縁たるは是れ縛を生ずと說く、餘も亦

【八八】眞解脱には四種の相とは次第の如く樂德、常德、淨德、我德を擧ぐ。

【八九】以下は邪解脱を明す、初に三苦を擧げ、、外道には非想處等を求めて解脱と爲すも、苦相ありて眞の解脱の樂德なきことを示す。

【九〇】因縁生の故に生滅あれば涅槃の常德にあらず。

【九一】外道は非想天等を解脱なりと異求するも、菩薩之を觀ずるに染縛にして、涅槃眞淨の德にあらず。

是の如し等の故なり。是の如く（九二）有に隨順して無色に解脫有ることを求む、經にいへるが如く、無明は行に因緣たりとは隨順有觀の說なり、餘も亦是の如き等の故なり。是の如く大悲隨順觀の因緣集を已に說けり。一切相智分別觀とは、是の中九種あり。一には染淨分別觀、我慢に著し、我慢を離るるは染淨なるが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は世間の生滅を觀じ已つて、是の念を作さく、所有る受身生處の差別は皆我に貪著するを以ての故なり、若し我に著することを離るれば則ち世間の生處無しとの故に。二には依止觀、此の因緣集は何等の法に依るや。經にいへるが如く、是の菩薩は復た是の念を作さく、如實に諸諦の第一義を知らざるが故に名けて無明と爲す、是の如き等の故なり。三には（九三）方便觀、因緣有支の二種の業は能く因緣の事を起すが故に、經にいへるが如く、是の中、無明に二種の作有り、一には緣中の癡は衆生をして惑はしめ、二には行の與めに因と作ると、是の如き等の故なり。四には（九四）因緣相觀、有支には作なきが故に、經にいへるが如く、是の中、無明は行に緣とし、無明の因緣は行をして斷せざらしめ、行を助成すとの故に、是の如き等の故なり。五には（九五）入諦觀、三道は苦集諦なるが故に、經にいへるが如く、是の中、無明愛

【九二】外道の非想天等を計して涅槃なりと爲すも、有に順ずるが故に、眞の解脫我德にあらず。

【九三】自業助成の二種の作用ありて、十二緣起は各前支は後支を起す方便と爲り、若し前支を滅すれば後支起らず、是れ解脫の方便なるが故に之を方便觀と名く。

【九四】十二緣起支は前後相離れざることを明かし、各無性無作にして一緣起の相なることを觀す。

【九五】惑業苦の三道不斷は苦集二諦なれば入諦觀といふ。

取の三分の斷せざるは是れ煩惱道なり、行有の二分の斷せざるは是れ業道なり、餘の因緣分の斷せざるは是れ苦道なりとの故に。六には（九六）力無力の信入依觀、先中後際の化勝るるが故に、經にいへるが如く、無明は行に緣たりとは是れ過去世の事を見ると是の如き等の故なり。七には（九七）增上慢の非增上慢に信入する觀、如實に微苦と我慢とを知らざるが故に、經にいへるが如く、是の中無明行、乃至六入を名けて行苦と爲すと、是の如き等の故なり。八には（九八）無始觀、中際の因緣生ずるが故に、後際生じ、隨順して縛するが故に、經にいへるが如く、無明は行に因緣たり、因緣は能く行を生ず、餘も亦是の如し、無明の行に因緣たるは是れ生縛の說なり、餘も亦是の如しとの故なり。九には（九九）種種觀、有に隨順する觀の故に、欲、色、無色の愛等なり、經にいへるが如く、無明の因は行に緣たるは隨順有觀の說なり、餘も亦是の如しとの故なり。是の如く不住道の行勝を已に說けり。次に彼の果勝を說かん、五種の相有り。一には對治の勝、及び離障の勝を得、二には修行の勝を得、三には三昧の勝を得、四には不壞心の勝を得、五には自在力の勝を得。云何んが對治行の勝を得るや、

【九六】過現未三際輪迴は三際の因たる義邊を有力と名け、果たる義邊を無力と名く。三世因果の義を以て凡夫を化導し信入依行せしむの義を示す。

【九七】三苦集成の說は、如實に微細の苦を知らざるは、我慢即ち增上慢なり。若し微苦を知れば非增上慢なり。不知者にして今知ることを得るを信入といふ。

【九八】因緣より生起する法は元本ありて、之より始めて起るにあらざれば無始といふ。又眞諦觀より云へば、諸法は因緣集起にして本性無きが故に無始觀と名く。

【九九】三有の相各別にして種種の類狀あるが故に隨順有觀と名く。

謂ゆる三解脫門なり。

經に曰く、是の菩薩は是の如く十種に因緣を觀じ已つて、我無く、壽命無く、衆生無く、自性空にして作者と受者とを離る。斯の如く觀ずる時、空解脫門現前して生ず。是の菩薩は彼の有支の自性滅を觀ずるが故に、常に解脫現前し、因緣の處には少法の相の生ずべき無きを見る、是の如く少法の相を見ざるが故に、無相解脫門現前して生ず。是の菩薩は是の如く空に入り、無相に入りて、願樂を生ぜず。唯大悲を首と爲して、衆生を敎化するを除く。是の如くにして無願解脫門現前して生ず。是の菩薩は是の三解脫門を修行して、彼、我の相を離れ、作者と受者との相を離れ、有無の相を離る。

論に曰く、是の中、空解脫門に三種の相說有り。一には衆生の無我なるを見る、二には法の無我なるを見る、三には(一〇〇)彼の二は作無し。作者無しと見るが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如く十種に因緣集を觀じ已つて、我無く、壽命無く、衆生無く、自性空にして作者と受者とを離る、是の如く觀ずる時、空解脫門現前して生ずとの故に。衆生の無我なるを見るとは、我無く、壽命無く、衆生無しと、此の句にて示現す。法の無我なるを見るとは、自性空なりと、此の句にて示現す。彼の二は作無しとは、衆生と及び法とは作事等無しと見る。作者無きを以て、作事も亦無し、作者を見ざるが故に。作者と受者とを離ると、此の句にて示現す。

【一〇〇】前二句は二我の體空を明かし、此句は二我の作用の空なるを顯はす。

無相解脱門にも亦三種の相説あり。一には障を滅す、二には對治を得、三には念相行せず。經にいへるが如く、是の菩薩は彼の有支の自性滅を觀ずるが故に、常に解脱現前し、因縁の處には少法の相の生ずべき無し、是の如く、少法の相を見ざるが故に、無相解脱門現前して生ずと。是の中、障を滅すとは彼の有支の自性滅を觀ずるが故にと、此の句にて示現す。對治を得とは、常に解脱現前すと、此の句にて示現す。念相行せずとは、因縁の處には少法の相の生ずべき無きを見ると、此の句にて示現す。無願解脱門にも亦三種の相説有り、一には依止、二には體、三には勝なり。經にいへるが如く、是の菩薩は是の如く空に入り、無相に入り、願樂を生ぜず、唯大悲を首と爲し衆生を教化するをば除く、是の如くして無願解脱門現前して生ずとの故に。是の中、空に入り、無相に入るは、是を依止と名く。入空と入無相とに依止するを以ての故なり。能く無願を成じて願樂を生ぜず、願樂を生ぜざるは是を無願の體と名く。大悲を首と爲し衆生を教化すとは、是を名けて勝と爲す。聲聞にも亦無願を生ぜざること有るも、無願の體は大悲を遠離して、衆生を教化することを樂はざるが故に「劣れり」。滅障の勝とは三種の相を離るるが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は是の三解脱門を修行して、彼我の相を離れ、作者と受者との相を離れ、有無の相を離るるとの故に。【一〇一】是の如く次第して、五地の中に於ては、平等の染淨心を遠離

【一〇一】次には劣を擧げて勝を示す。五地の中にとは十平等深淨の心を以て四地の身淨我慢を遠離せり、今此地にては深空を以て彼の二我を滅す、此故に五地に比して勝れたり。

するが故に、【一〇二】四地の中には出沒等の相を遠離す。此の六地の中にては【一〇三】法の平等を遠離するが故に。云何んが修行の勝を得るや。

經に曰く、是の菩薩は大悲轉た增し、重悲を以ての故に勤行精進して未だ滿せざる助菩提分法を滿足せんと欲し、菩薩は是の念を作さく、有爲は和合するが故に行ず、和合を離るるが故に行ぜず、衆緣具はるが故に行じ、具はらざるが故に行ぜず。唯我れのみ有爲の法に過多きことを知る。應に和合因緣を具すべからず、亦畢竟して有爲の法を滅せず、衆生を教化せんが爲めの故なり。諸の佛子よ、菩薩は是の如く、有爲法の過多きことを知りて、自性を離れ、不生不滅の自性を觀ず。是の菩薩は是の如きの觀を作し已つて、大悲を起すが故に、一切の衆生を捨てざるが故に、卽時に無障礙の智門現前することを得て、般若波羅蜜の行の光明現前すと名く。是の菩薩は是の如く般若波羅蜜の行を成就して、光明現前し、照し已つて、助菩提分法の因緣を滿せんが爲めに而も有爲法と共に住せず、有爲法の性は寂滅の相なり、亦其の中に住せず、無上の菩提分法を具足せんと欲するが故なり。

論に曰く、修行の勝を得とは、二種の修行有り。一には勇猛の修行を發し、二には丈夫の志を起して修行す。勇猛の修行を發すとは、有爲の法に過多きことを知り、生業、煩惱因縛を遠離し、

【一〇二】四地の離障を擧げ、此の文の中の作者と受者とを離るることの勝れたるを示す。

【一〇三】此地の初の十平等の處にて有無を破する等を擧げ、此地滿足して無相無願にて有無を破遣し、一切を蕩盡することを顯はし、前に比して勝れるたることを示す。

勝れて衆生を利益することを作す、經にいへるが如く、是の菩薩は大悲轉た增し、重悲を以ての故に勤行精進して未だ滿せざる助菩提分法を滿足せんと欲し、菩薩は是の念を作さく、(一〇四)有爲は和合するが故に行ず、和合を離るるが故に行せず、衆緣具はるが故に行じ、具はらざるが故に行せず、唯我れのみ有爲の法に過多きことを知る、應に和合因緣を具ふべからず、亦(一〇五)畢竟して有爲の法を滅せず、衆生を敎化せんが爲めの故なりと。丈夫の志を起して修行すとは、(一〇六)厭對觀なり、過多きとを見る觀の故なり。(一〇七)對を滅するが故に、自性は同相にして無なりと觀ずるが故に、經にいへるが如く、諸の佛子よ、菩薩は是の如く有爲の法に過多きことを知り、自性を離れ、不生不滅の自性を觀ずとの故に。修行の勝とは智及び大悲勝れて隨順するが故に、不住道の行、無障礙の智門現前するに依りて、般若波羅蜜の行の光明現前す、(一〇八)有爲の法及び涅槃を平等に證することを知るが故に。(一〇九)彼共に住せざるが故に、(一一〇)彼れ助道の行を滿せざるが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如きの觀を作し已つて、大悲を起すが故に、一切の衆生を捨てざるが故に、卽

【一〇四】智を修めて有爲に著せざることを示す。
【一〇五】悲を修めて無爲に住せざることを示す。
【一〇六】對とは對礙の義にて有爲法に名く、之を厭ふが故に厭對觀といふ。
【一〇七】有爲法の自性は同相にて本より生滅なしと知れば有爲の對礙を滅して理と冥合す。
【一〇八】悲智の二の不住なる所以を解す。
【一〇九】不住の義を釋す。智は有爲法と共に住せず、悲は無爲法と共に住せざるが故に不住といふ。
【一一〇】不住の所爲を釋す。智慧の助道行未だ滿ぜざるが故に有爲に住せず、功德の助道行未だ滿せざるが故に無爲に住せざるなり。

時に無障礙の智門現前することを得て、般若波羅蜜の行の光明現前すと名く。是の菩薩は是の如く般若波羅蜜の行を成就して、光明現前し照し已つて、助菩提分法の因緣を滿せんが爲めに而も有爲法と共に住せず、有爲法の性は寂滅の相なりと觀じ、亦其の中に住せず、無上の菩提分法を具足せんと欲するが故にと。無障礙の智とは、謂ゆる如來の智なり。然れども此れ未だ成就せざるを名けて光明現前すと爲す。云何んが、三昧の勝を得るや、十空の三昧門有り、同じく上首及び彼の眷屬と爲るが故なり。

經に曰く、是の菩薩は此の菩薩の現前地の中に住して、信空三昧、性空三昧、第一義空三昧、第一空三昧、大空三昧、合空三昧、起空三昧、如實不分別空三昧、不捨空三昧、得離不離空三昧を得。是の菩薩は是の如き等の十の空三昧門の上首を得て、百千萬の空三昧門現在前す。是の如く十の無相の三昧門を上首として、百千萬の無相の三昧門現在前す。是の如く十無願の三昧門を上首として、百千萬の無願の三昧門現在前す。

論に曰く、此の空三昧に四種の差別有り。一には【二二】觀、二には【二三】不放逸、三には【二三】增上を得、四には【二四】因事なり。第四の三昧を除きて、五の三昧有り、是を名けて觀と爲す。一には衆生の無我を觀ず、經にいへるが如く、信空三昧を得との故に。二には法の無我を觀ず、經にいへるが如く、

【二二】觀とは觀解の意。
【二三】不放逸とは解に依りて行を起し、過を離るるが故也。
【二三】修行に依りて德を成じ、上功德を得るが故に增上を得といふ。
【二四】因事とは德に依りて用を起す、三昧は是れ大用の本なるが故に因事と名く。

性空三昧との故に。三には（二五）彼の空觀を取る、經にいへるが如く、第一義空三昧との故に。四には彼の（二六）阿梨耶識に依りて觀ず、經にいへるが如く、大空三昧との故に。五には（二七）轉識を觀ず、經にいへるが如く、合空三昧との故なり。不放逸とは第四の三昧なり、分別して善く修行するが故に、修行に厭足無きが故なり、經にいへるが如く、（二八）第一空三昧との故に。增上を得とは第七の三昧にして、增上の功德を得るなり、經にいへるが如く、（二九）起空三昧との故に。因事とは餘の三種の三昧なり、智障淨の因事、經にいへるが如く、（三〇）如實不分別空三昧との故に。衆生を教化する因事、經にいへるが如く、（三一）不捨空三昧との故に。願うて有を取る因事、經にいへるが如く、（三二）離不離を得る空三昧との故に。是の如く願つて有を取り、煩惱染を遠離して、而も諸有に隨順するが故に、離不離と名く。云何んが不壞心の勝を得るや。

經に曰く、是の菩薩は菩薩の現前地の中に住して、復た轉た不壞の心、決定の心、眞心、深心、不

【二五】前の生空觀と法空觀とを合せて二空となる。

【二六】阿梨耶識に空不空の二義ある中、空如來藏を觀ずるが故に大空三昧といふ。

【二七】轉識とは前五識と第六意識と第七末那識とを七轉識といふ。識作用に間斷と轉易とあるが故なり。此七轉識は根本識なる阿梨耶識を離れず、之と和合して起り皆自體なし、故に合空といふ。

【二八】修行究竟して放逸の過を離るるが故に第一と名く。

【二九】勝德は空に依りて生起するが故に起空三昧といふ。

【三〇】分別とは妄分別にして智障なり、智障清淨なるが故に如實不分別といふ。

【三一】空に依りて大悲を起し、衆生を捨てざるが故に不捨空三昧といふ。

【三二】染著を遠離するを離といひ、度生の爲に諸有に隨順するを不離といふ。

退轉の心、不休息の心、淨心、無邊の心、求智の心、方便智行を滿足する心を滿足す。

論に曰く、不壞の心とは、堅固不退なるが故に、是の不壞の心に(二三)九種有り。一には(二四)信觀の不壞、經にいへるが如く、決定心との故に。二には受くるに堪ふる調柔の不壞、經にいへるが如く、眞心との故に。三には(二五)密處に於て驚怖せざる不壞、經にいへるが如く、深心との故に。四には自乘動ぜざる不壞、經にいへるが如く、不退轉の心との故に。五には精進を發す不壞、經にいへるが如く、不休息の心との故に。六には嫉妬破戒の垢を離るる不壞、經にいへるが如く、淨心との故に。七には廣く衆生を利益する不壞、經にいへるが如く、無邊の心との故に。八には上勝の解を求むる不壞、經にいへるが如く、求智の心との故に。九には衆生を化する行の不壞、經にいへるが如く、方便智行を滿足する心との故に。云何んが自在力の勝を得るや。

經に曰く、是の菩薩は此の諸の菩薩の心に隨順し成就して、阿耨多羅三藐三菩提に趣向し。不退轉の精進を成ず。一切の外道、異論も動かすこと能はざるが故に。隨順し成じて諸智の地に入るが故に。遠離成じて、聲聞、辟支佛地を轉ずるが故に。一向に成じて決定して佛智に趣くが故に。不退成じて、一切の諸魔煩惱も壞すること能はざるが故に。堅住成じて、善く菩薩

【二三】此の九種は前の十の三昧を攝す。初の四句は前の觀に就て不壞を說き、次の一句は前の不放逸に就て不壞を說き、次の一句は前の得增上に就て不壞を說き、後の三句は前の因事に就て不壞を說く。

【二四】理を信ずることを決定せるの義。

【二五】阿梨耶識は微密にして測知し難きが故に密處といふ。

の智慧明に住するが故に。正住成じて、善く空、無相、無願の法行を修するが故に。助正の行成じて、方便智を以て觀ずるが故に。不捨の行成じて、助菩提分法を集むるが故なり。是の菩薩は菩薩の現前地の中に住して、般若波羅蜜の行增上し成就して、第三の利順忍を得、如實の法に隨順して違逆有ること無きが故なり。

論に曰く、是の菩薩は此の諸の菩薩心に隨順し成就して阿耨多羅三藐三菩提に趣向すとは、般若波羅蜜の行力の勝を得て能く深く入るが故なり。是の中、(二六)力勝に九種有り。一には能く他を降伏する力、經にいへるが如く、不退轉の精進成じ、一切の外道異論も動ずること能はざるが故なり。二には能く疑を斷つ力、經にいへるが如く、隨順成じて、諸智の地に入るが故なり。三には自乘を動せざる力、經にいへるが如く、遠離成じて聲聞、辟支佛地を轉ずるが故なり。四には蜜處に決定する信の力、經にいへるが如く、一向成じて、決定して佛智に趣くが故なり。五には散壞せざる力、經にいへるが如く、不退成じて一切の諸魔煩惱も壞すること能はざるが故なり。六には煩惱障に依る淨對治の堅固力、經にいへるが如く、堅住成じて善く菩薩の智慧明に住するが故なり。七には廣く對治する力、經にいへるが如く、正住成じて善く空、無相、無願の法行を修するが故なり。八には衆生を化する力、經にいへるが如く、助正の行成じて方便智をもつて觀ずるが故なり。九には智障淨力、經にいへるが如く、不捨の行

【二六】前の十種の不壞心に依りて九種の自在力を得。

成じて助菩提分法を集むるが故なり。是の菩薩は菩薩の現前地の中に住して、般若波羅蜜の行増上し成就して第三の利順忍を得、如實の法に隨順して違逆有ること無し、是の諸法は上の所說の如し、力勝に攝せらるるが故に。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の現前地に住し已つて、多く諸佛を見たてまつる、大神通力と大願力とを以ての故に、多くの百佛、多くの千佛、多くの百千佛、多くの百千那由他佛、多くの億佛、多くの百億佛、多くの千億佛、多くの百千億佛、多くの百千萬億那由他佛を見たてまつる。大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆し、衣服、飲食、臥具、湯藥、一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て、衆僧に供養す。此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと願ふ。諸佛の所に於て上恭敬を生じ、專心に法を聽く、聞き已つて受持し、聞きて受持し已つて如實の三昧の智慧光明を得、隨順して修行し、行じ已つて憶持す。是の菩薩は智慧轉た勝れ、復た諸佛の法藏を得。是の菩薩は此の菩薩の現前地の中に住して、無量の百劫に於て、彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となる。無量の千劫、無量の百千劫、無量の百千那由他劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、無量の百千億劫、無量の百千億那由他劫に彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となる。諸の佛子よ、譬へば本眞金の瑠璃を以て磨瑩すれば光色轉た勝れて明淨となるが如し。諸の佛子よ、菩薩は是の如く此の菩薩の

現前地の中に住して、彼の諸の善根、方便智觀は轉た勝れて明淨となり、轉轉に寂滅し成就して不壞なり。諸の佛子よ、譬へば月の光明輪の衆生の身を照して清淨なることを得しむるが如く、四種の風吹くとも壞すること能はざる所なるが如し。諸の佛子よ、菩薩は是の如く此の菩薩の現前地の中に住して、彼の諸の善根は能く無量百千萬億那由他の衆生の煩惱の火を滅し、四種の魔道も壞すること能はざる所なり。是の菩薩は十波羅蜜の中には般若波羅蜜增上し、餘の波羅蜜も修習せざるに非ず、力に隨ひ、分に隨ふ。諸の佛子よ、是を諸の菩薩の第六菩薩の現前地を略說すと名く。若し菩薩此の地の中に住すれば、多く化樂天王と作り所作自在にして善く巧みに衆生の我慢を滅除し、善く衆生の我慢法心を轉ず、作す所の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至一切種一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念に從ひて、精進の行を發す、精進の力を以ての故に一念の間に於て、百千億の三昧を得、百千億の佛を見たてまつり、百千億の佛の神力を知り、能く百千億の佛の世界を動かし、能く百千億の佛の世界に入り、能く百千億の佛の世界を照し、能く百千億の佛の世界の衆生を教化し、能く

壽百千億劫に住し、能く過去未來世の各百千億劫の事を知り、能善く百千億の法門に入り、能く身を變じて百千億と爲し、一一の身に於て、能く百千億の菩薩を示し、以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在なること勝上なり。菩薩の願力は此の數に過ぎて、種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は乃至無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、聞いて受持し已つて如實の三昧、智慧の光明を得て、隨順し修行すとは、陀羅尼を得ることを此の句に示現す。彼の事に因るが故に、勝三昧に依りて(二三七)奢摩他、(二三八)毘婆舍那の光明の勝行を得と説く。行じ已つて憶持すとは、能く彼の行を持するが故なり。是の菩薩は智慧轉た勝れ、乃至彼の諸の善根も轉た勝れて明淨なりとは、彼の障を解脱して彼の義を證するが故なり。瑠璃をもつて眞金を磨瑩する喩は、此の地の中に於て出世間の智增上し、光明轉た勝れたるを示現す、經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば本眞金を瑠璃を以て磨瑩すれば光色轉た勝れて明淨となるが如く、乃至方便智觀を以て轉た勝れて明淨となるとの故に。無障礙の智現前するを以て、般若波羅蜜の行の光明現前す、故に名けて現前地と爲す。方便智觀とは、不住道行の所攝なる明智なるが故に、月の光明輪の喩は前

【二三七】奢摩他(Śamatha)は止と譯す、一切の亂想妄念を止息して心寂靜に住すること、前の如實の三昧なり。

【二三八】毘婆舍那(Vipaśyanā)は觀と譯す、心智明淨にして能く諸法の實義を觀察すること、前の智慧光明を斥す。

地の智に勝れて、（二九）輪は小にして光明は大なることを示現す、經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば月の光明輪の如し、乃至四種の魔道も壞すること能はざる所なりとの故に。魔道とは魔事魔行に隨順するが故なり。餘は前に說くが如し。

【二九】前地は月輪の喩を取るが故に小なり、此地は月光の喩を取るが故に大なり、乃ち前地の智に勝れたることを示す。

卷の第九

遠行地第七

論に曰く、第七地の中に五種の相差別有り。一には(二)無作の行を樂ふ對治差別、二には(一)彼の障の對治差別、三には(三)雙行差別、四には(四)前と上地とに勝れたる差別、五には彼の果の差別なり。云何んが無作の行を樂ふ對治差別なるや。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、諸の佛子よ、若し菩薩善く六地の行を具足し已りて、第七の菩薩地に入らんと欲する者、是の菩薩は當に十種の方便智を以て殊勝の行を發起して入るべし。何等をか十となす。所謂る善く空、無相、無願を修して大功德の助道を集め。諸法の無我無壽命、無衆生に入りて捨てず、四無量を起し、功德の法を起して增上の波羅蜜行を作し、法として取るべき無し。三界を遠離して能く應化することを得て、

【一】前地には三空無作に樂著するが故に、之を微細の障となす、此地には有に隨って空に著せざるを示し、以て對治と爲す。

【二】此地の加行(豫備的修行)に前地に空を樂著する心を對治すれども、尙ほ有量にして有功用の行なるが故に之を障となし、此地の初住地中に無量にして無功用の行を修して以て對治となす。

【三】垢障已に除き止觀双行するが故なり。

【四】此地の功用は前の六地に過ぎ、後の三地に勝るが故なり。上とは後地を斥す。

三界を莊嚴する行を起し。畢竟して諸の煩惱焰を寂滅し、而も能く一切衆生の爲めに貪瞋癡の煩惱焰を滅する行を起し。幻、夢、影、響、化、水中の月、鏡中の像に隨順し、自性不二にして而も作業を起す、無量の差別心なり。善く一切の國土の道は虛空の如くなるを知りて而も莊嚴して佛の國土を淨むる行を起す。諸佛の法身は自性無身なりと知りて、而も色身の相好莊嚴の行を起し、諸佛の音聲は無聲にして本來寂滅、不可說の相なりと知りて、而も一切の衆生に隨ひて、種種の差別の音聲を莊嚴する行を起し、諸佛に入りて一念の頃に於て、三世の事に通達し、而も能く種種の相、劫數の修行を分別し、一切衆生の心に隨ひて、差別して觀ずるが故なり。諸の佛子よ、是の菩薩は是の如く十種の方便智をもつて殊勝の行を發起し、六地の行を具足し已つて第七の菩薩地に入ることを得。諸の佛子よ、是の菩薩は此の十種の方便智をもつて殊勝の行、現前の行を發起するを第七の菩薩地に入ると名く。

論に曰く、無作の行を樂ふ對治とは、方便智をもつて十種の殊勝の行を發起す、經にいへるが如く諸の佛子よ、若し菩薩善く六地の行を具足し已つて、第七の菩薩地に入らんと欲する者、是の菩薩は當に十種の方便智を以て殊勝の行を發起して入るべしと。彼の菩薩は無障礙の智現前し、般若波羅蜜の行現前する時、即ち無作の行の中に於て、樂心を生じ、增上の行を起すに非ず、彼の樂「著の心」を對治するは此十種の法差別にて示現するなり。方便智とは、衆生を捨てざる法無我の智の對治にして、增上の行を攝取し、(五)殊勝の行を發起す。此の勝行は世出

【五】空に即して有に涉り、有

間及び世間に於て、増上の行なれば更に（六）勝る者無し。四種の功徳あるが故なり。一には財及び身の勝れたる因事、須ふる所に随ひ、（七）意に随ひて取る財及び身の勝を得、功徳の集に因るが故に、經にいへるが如く所謂る善く空、無相、無願を修して大功徳の助道を集むとの故に。二には悪行を護る因事。是の如くにして勝れたる無量の修行を得て、一切衆生の中に於て妄行を起さざるが故に、經にいへるが如く、諸法の無我、無壽命、無衆生に入りて、而も捨てず、四無量を起すとの故に。三には善根を護る因事。彼の勝因増上することを得るが故に、經にいへるが如く、功徳の法の増上行は波羅蜜の行なるを以ての故に、經にいへるが如く、功徳の法を起して増上の波羅蜜行を作し而も法として取るべき無しとの故に。四には（八）衆生を攝する因事。中に於て、七種の門有り。一には（九）願力にて生を取り、上首と作りて餘の衆生を教化するが故に。上首とは（一〇）衆生随逐するが故なり。經にいへるが如く、三界を遠離して而も能く應化することを得、三界を荘嚴する行を起すとの故に。二には（一一）對治を説くが故に、煩惱染、及び随煩惱使を滅せんが爲めに、常に自ら寂滅なるが故に

に即して空を修するが故に、空に留らず有に任せざるが故に、其所行は殊勝なり。殊勝の行なるが故に増上といふ。

【六】空に即するが故に世間に勝れ、有に渉るが故に出世に勝る。

【七】隨意に受生して類に順ふが故に、是れ身勝なり。

【八】前の三句を自利行に屬し、後の七句を合して利他行と爲す。

【九】菩薩は大悲願力にて受生し、業惑の生に非らず、此の故に經文に三界を遠離すといふ。

【一〇】衆生は上首たる菩薩に隨って化を受くるが故なり。

【一一】煩惱の自性は寂滅なりと知るも、衆生をして大小の煩惱を離れしめんが爲に對治を説く。

經にいへるが如く、畢竟して諸の煩惱焰を寂滅したるも而も能く、一切衆生の爲めに貪瞋癡の（一二）煩惱焰を滅する行を起すとの故に。三には諸障を滅せんが爲めの故に、（一三）障に四種有り、五地の中に説くが如し。經にいへるが如く、幻、夢、影、響、化、水中の月、鏡中の像、自性不二にして而も作業を起す、無量の差別の心との故に。四には大法の衆會に於て、集まるが故に、經にいへるが如く、善く一切の國土の道は虚空の如きを知り、而も莊嚴して佛の國土を淨むる行を起すとの故に。（一四）五には見聞し、親近し、供養し、修行して福徳を生ずるが故に、經にいへるが如く、諸佛の法身は自性無身なるも而も色身の相好、莊嚴の行を起すとの故に。六には法輪を轉ずるが故に、經にいへるが如く、諸佛の音聲は無聲にして本來寂滅不可説の相なりと知りて、而も一切の衆生に隨ひて、種種の差別の音聲を莊嚴する行を起すとの故に。七には問ふ所あれば善く釋するが故に、經にいへるが如く、諸佛は一念の頃に於て、三世の事に通達するに入りて、而も能く種種の相、劫數の修行を分別し、一切の衆生心に隨ひて差別して觀ずるが故なり。此の十種の殊勝の行を發起して、（一五）共對に攝取し、（一六）對治に攝取し、善く空、無相、無願等を修行して、一切法の無我無壽命、無衆生等に入る、是の如く次第して應に知るべし。此の十種の

【一二】煩惱焰を滅する行とは對治の教を説くこと。

【一三】四種の障は第五地に説けり。

【一四】前句は淨土を莊嚴すること（依報）を明し、次の三句には佛身（正報）の三業教化を明かす。

【一五】共對とは方便智と共に相對することを明かす。空に著せざるを方便智と名け、空に即するの有を殊勝行と名く。

【一六】空を礙へずして有行を起

法現前して第七地に住することを得、經にいへるが如く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の十種の方便智をもつて殊勝の行、現前の行を發起するを第七の菩薩地に入ると名くとの故に、是の如く無作の行を樂ふ對治差別の七地は已に說けり。次に彼の障の對治を說かんに、二種の相有り。一には (一七)無量種を修行し、二には (一八)無功用の行を修行す。

經に曰く、是の菩薩は第七の菩薩地の中に住して、無量の衆生界に入り、諸佛の無量なる敎化衆生の業に入り、無量の世界網に入り、諸佛の無量なる清淨の國土に入り、無量の諸法の差別に入り、無量の諸佛の智の無上道を得るに入り、無量の劫數に入り、無量の諸佛の三世の事に通達するに入り、無量の衆生勝事を信樂する差別に入り、無量の諸佛の名色身の種種の示現に入り、無量の衆生の心行根信の種種の差別に入り、無量の諸佛の音聲語言をもつて衆生をして歡喜せしむるに入り、無量の衆生の心心所の行の種種の差別に入り、無量の諸佛の隨智慧行に入り、無量の聲聞乘に乘ずる信解に入り、諸佛の無量に道を說いて衆生をして信解せしむるに入り、無量の辟支佛乘の集成に入り、諸佛の無量なる深智慧門に入り、所說に入り、諸の菩薩の無量なる所行道に入り、諸佛の無量に說きたまふ所の大乘集成事に入り、菩薩をして得入せしむ。

すが故に、此の有行は方に能く樂空の心を對治し、還つて方便智の所攝となるが故に・對治に攝取すといふ。

【一七】 前の樂對治は有量を障と爲すが故に、次には無量種の行を修して之を對治す。

【一八】 前の樂對治は作意（意志の力）に依りて修習するは功用なり、之を障と爲すが故に、次には無功用の行（意志力を用ゐず、任運自然の行）を修して之を對治す。

論に曰く、無量種を修行すとは、所作に隨ひて何等の衆生を利益し、衆生は何れの處に住し、何等の智慧を以てし、何等の心を以てし、何等の行を以てし、何等の乘に置くや、此の差別を以て十種の修行有り。是の中、所作に隨ひて何等の衆生を利益すとは、無量の衆生に於てす、無量の業を以て敎化するが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は第七の菩薩地の中に住して無量の衆生界に入り、諸佛の無量なる敎化衆生の業に入るとの故に。衆生は何の處に住すとは、無量の世界の中に於て、淸淨の佛國土に依らしむるが故に、經にいへるが如く、無量の世界網に入り、諸佛の無量なる淸淨の國土に入るとの故に。何等の智慧を以てとは、無量なる種種の法界の智慧を以て覺するが故に、經にいへるが如く、無量の諸法の差別に入り、無量なる諸佛の智の無上道を得るに入るとの故に。無量の劫數に三世に通達するも亦智慧覺に入る。經にいへるが如く、無量の諸佛の三世の事に通達するに入るとの故に。何等の心を以てとは、三種の事有り。一には(一九)衆生の種種の天を信ずる有り、身心隨つて同行し、彼の信に隨ひて說くが故に、經にいへるが如く、無量の衆生の信樂の勝事差別に入り、無量の諸佛の名色身の種種なる示現に入るとの故に。二には(二〇)過去の心習、(二一)輭中利の根を知りて、應の如く法を說く、經にいへるが如く、無量の衆生の心行根信の種種の差別に入り、無量の諸佛の音聲語言

【一九】衆生の樂欲は種種なり、菩薩は彼の心に隨ひ、彼の行に同じて說法し、彼をして佛法に信入せしむ。

【二〇】過去の心習とは器根の宿成をいふ。

【二一】輭中利とは下中上の器根三品の不同なり。

をもつて、衆生をして歡喜せしむるに入るとの故に。三には何等の行を以てとは。衆生の心に隨つて對治を說くが故に、經にいへるが如く、無量の衆生の心心所の行、種種の差別に入り、無量の諸佛の隨智慧行に入るとの故に。何等の乘に置くやとは、三乘の中に於てす。聲聞乘の中に置くとは、經にいへるが如く、無量の聲聞乘に乘じて信解するに入り。諸佛の無量に道を說いて衆生をして信解せしむるに入るとの故に。辟支佛乘の中に置くとは、經にいへるが如く、無量の辟支佛乘の集成に入り、諸佛の無量なる深智慧門に入り、所說に入るとの故に。大乘の中に置くとは、經にいへるが如く、諸の菩薩の無量の所行道に入り、諸佛の無量に說く所の大乘集成事に入り、菩薩をして得入せしむとの故に。是の如く彼の障對治の無量種の差別。修行の十種を已に說けり。次に無功用の行を修行することを說かん。

經に曰く、是の菩薩は、是の如きの念を作さく、是の諸佛世尊には無量無邊の境界有り、是の境界は若干百億劫、千億劫、百千億劫を以て知るべからず、乃至復た此の數に過ぎて、無量の百千萬億那由他劫にも算數すべからず、是の如きの諸佛の境界を我れ皆應に集むべし、自然に成じ、分別を以て成ずることを得ず。分別せず、相を取らざるを以ての故に成ず。是の菩薩は是の如く善く觀ずる智通をもつて、日夜に常に方便智を修して、熏發して殊勝の行を起し、善く堅固に住す。不動の法を以ての故なり。

論に曰く、是の中、自然とは自性勝れて、分別無きが故に、經にいへるが如く、自然に「成じ」、分別以て成ずることを得ず、分別せず、相を取らざるを以ての故に成ずと。此の句にて示現す。是の菩薩は是の如く善く觀ずる智通をもつて、日夜に常に方便智を熏發して殊勝の行を起し、善く堅固に住す。不動の法を以ての故にとは、彼の障の對治なるが故に、是の如き彼の障對治の差別は此の地に已に說けり。次に雙行分を說かんに、四種の相あり。一には(三)二行雙び無間なり、二には信勝、三には能く大義を作す、四には菩提分法の差別なり。

經に曰く、是の菩薩は道を起すの時、一念の心を捨てず。是の菩薩は智慧を修行し、來る時亦起し、去る時亦起し、住する時亦起し、坐する時亦起し、臥する時亦起し、乃至睡夢にも、皆能く道を起す。諸の陰蓋を離れて諸の威儀に住し、常に是の如きの相念を離れず、是の菩薩は念念の中に於て、菩薩の十波羅蜜を具足す。何を以ての故に、是の如く菩薩は一切の心を起して、念念の中に於て、大悲を以て首と爲し、一切の佛法を修習して、皆如來智に廻向するが故なり。是の菩薩は佛道を求むる時、修する所の善根を捨てて一切の衆生に與ふ、是れ檀波羅蜜なり。能く一切の煩惱の熱を滅す、是れ尸波羅蜜なり。慈悲を首と爲し、能く一切の衆生を忍ぶ、是れ羼提波羅蜜なり。現に諸法の自性は不生なりと認む、是れ般若波羅蜜なり。能く無量の智門を起す、是れ方便波羅蜜なり。上上

【三】內證の行成熟して止觀俱に現ずるを二行雙ぶといひ、外修常に相續して間斷なきを無間といふ。

の勝智を期す、是れ願波羅蜜なり。一切の外道、邪論、及び諸の魔衆も菩薩の道を沮壞すること能はず、是れ力波羅蜜なり。如實に觀じて一切法の相を知る、是れ智波羅蜜なり。是の如く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩遠行地の中に住して、念念に十波羅蜜を具足し、亦四攝法を具足し、亦四家三十七の助菩薩分法、三解脫門を具足す。略して說く、乃至一切の助菩提分の法も念念の中に於て皆悉く具足す。

論に曰く、是の中、一念の中に、奢摩他、毗婆舍那の二行雙び現前するが故に。諸の威儀に住すとは、一切の行の中に、彼れ修行する時に無間にして斷ぜず息まずして行ずるが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は道を起す時、一念の心をも捨てず、乃至諸の威儀に住するが故にと、一切の煩惱蓋を遠離するが故なり。信勝とは彼の無量智の中にて殊異の義なり。莊嚴の相現前して專念するが故なり、經にいへるが如く、常に是の如きの相念を離れずとの故に。能く大義を作すとは、念念に十波羅蜜の大義を具足するが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は念念の中に於て、菩薩の十波羅蜜、乃至智波羅蜜を具足すとの故に。是の中、方便波羅蜜とは無量の智事を起す、是の智を以ての故に布施等の無量の行を起す、願力に攝めらるるが故なり。願波羅蜜とは、上上の智を起す、是の智を以ての故に布施等の上上の行を起す、生を攝取すること勝るが故なり。力波羅蜜とは一切の異論、及び諸の魔衆も行を壞すること能はず、是の行を以ての故に布施等の障を遠離するが故な

り。智波羅蜜とは、如實に觀じて一切法の相を知る。是の智を以ての故に、布施等の一切の種差別は衆生を化せんが爲めなることを知るが故なり。菩提分の差別とは、四種の相有り、一には、大乘に依りて波羅蜜を行ずるが故に、經にいへるが如く、是の如く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の菩薩遠行地の中に住して、念念に十波羅蜜を具足すとの故に。二には衆生を敎化するに依りて、四攝法を行ずるが故に、經にいへるが如く。亦四攝法を具足すとの故に。三には煩惱障の增上淨に依るが故に、家、菩提分、解脫門とは、何の處に住し、何等の門を以て修行して淸淨を得るや。經にいへるが如く、亦四家、三十七の助菩提分法、三解脫門を具足すとの故に。家とは〔三〕般若の家、諦の家、捨煩惱の家、苦淸淨の家なるが故に。四には智障淸淨に依る、經にいへるが如く、略して說くに一切の助菩提分法は念念の中に於て、皆悉く具足すとの故に。是の如く雙行の差別を已に說けり。次に前の上地の勝差別を說かん。下地の增上方便の行滿足せるが故に。七地の中に說く。

經に曰く、爾の時に解脫月菩薩金剛藏菩薩に問うて言はく、佛子よ、菩薩は但第七の菩薩地の中に於て一切の助菩提分法を具足するや、爲當一切の菩薩の諸地の中にも亦皆具足するや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は十の菩薩地の中に於て、悉く一切の助菩提分法を具足す、但第七地のみ勝るが

〔三〕般若は能照の智、二諦は所照の境、捨煩惱は苦の因たる惑を滅し、苦淸淨とは苦果盡くる也、家とは處住の義。

故に名を得たり。何を以ての故に、佛子よ、是の菩薩は此の菩薩地の中にて、方便行具足して智慧神通の行に入ることを得るが故なり。佛子よ、菩薩は初地の中に於ては發願して一切の佛法を觀ずるが故に、助菩提分法を具足す。第二地の中にては心の惡垢を除くが故に、助菩提分法を具足す。第三地の中にては轉た增長せんことを願ひて法明を得るが故に、助菩提分法を具足す。第四地の中にては道に入るが故に、助菩提分法を具足す。第五地の中にては隨順して世間の法を行ずるが故に、助菩提分法を具足す。第六地の中にては甚深の法門に入るが故に、助菩提分法を具足す。此の第七の菩薩地の中にては一切の佛法を起すが故に、一切の助菩提分法を具足す。

論に曰く、云何んが下地の增上の方便行滿足せるや、滿足せるを以ての故に大智通の行に入る、經にいへるが如く、金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は十の菩薩地の中に於て、悉く一切の菩提分法を具足す。但第七地のみ勝れたるが故に名を得。何を以ての故に、佛子よ、是の菩薩は此の菩薩地の中にて、方便行具足して、智慧神通の行に入ることを得るが故なり。是の中、通に五神通有り、智は前に說けるが如し。云何んが此の地の中にて、方便行滿足するや、彼の餘の世間出世間の行の中にて更に殊勝の行を起す。是の中、此の七地の中には一切の佛法を起すが故に、能く助菩提分法を具足す、經にいへるが如く、佛子よ、菩薩は初地の中に於て、發願して一切の佛法を觀ずるが故に、助菩提分法を具足す。乃至此の第七の菩薩地の中にては一切の佛法を起すが故に、一切の

助菩提分法を具足すとの故に。是の如く前上地の勝差別にて〔二四〕下地の增上方便行の滿足は已に說けり。云何んが〔二五〕上地の增上の修行なるや。智慧、方便、菩提分の功用の行滿足せるが故に。經に曰く、何を以ての故に。佛子よ、菩薩は初地より來た、乃し七地に至るまで諸の智慧の所行の道を得、是の力を以ての故に、第八の菩薩地より乃し第十地に至る、無功用の行自然に滿足す。佛子よ、譬へば二つの世界有り。一は染淨の世界、二は純淨の世界ならんに、是の二の中間は過ぐることを得べきは難きが如し。此の界を過ぎんと欲せば當に大神通力を以てすべし。佛子よ、菩薩の是の如きの行は染淨の菩薩道に於て、過ぐることを得べきは難し。當に大願の力と、大方便智の力と、大神通の力とを以てすべきが故に、乃ち過ぐることを得べし。解脫月菩薩の言はく、佛子よ、七の菩薩地は是れを染行と爲すや。はた是を淨行と爲すや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、初地より來た菩薩の行ずる所は皆煩惱染業を離る。何を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するが故に、道に隨つて行ずる所の如は分に平等なるが故に、名けて七地の煩惱行を過ぐと爲さず。佛子よ、譬へば轉輪聖王の上寶の象に乘じて四天下に遊び、貧窮、困苦、染過の人有るを知るも、而も彼の過の爲めに染せられざるが如し。然れども王は未だ人身を免れず、若し人身を捨てて梵世に生れ、梵天の宮に住し、現に千の世界に行き、梵王の光明威力を示さば、爾の時には名けて人と爲さず。佛子

〔二四〕下地とは前六地なり。
〔二五〕上地とは後の三地なり。以下後三地に勝れたることを明かす。

よ、菩薩も亦是の如く、初地より來た、諸の波羅蜜乘に乘じて一切の世間に行き、亦世間の煩惱染過を知るも、而も煩惱の過の染する所と爲らず、正道に乘ずるを以ての故に、而も名けて七地の煩惱染を過ぐと爲さず。若し菩薩にして一切功用の行を捨て、七地より第八地に入らば、爾の時には名けて菩薩の清淨業に乘じて一切の世間に行ずと爲す。如實に一切の煩惱染過を知りて、而も煩惱過の染する所と爲らず、過ぐることを得るを以ての故なり。佛子よ、菩薩は是の第七の菩薩地に住しては多くの貪欲等の諸の煩惱衆を過ぐ。是の菩薩は此の菩薩の遠行地の中に住して、有煩惱の者と名けず、無煩惱の者と名けず。何を以ての故に。一切の煩惱は行ぜざるが故に、有煩惱の者と名けず、如來の智慧を貪り求めて未だ滿足せざるが故に、無煩惱の者と名けず。

論に曰く、云何んが上地の增上智慧方便行なるや。菩提分の功用滿足するが故なり。經にいへるが如く、何を以ての故に、佛子よ、菩薩は初地より來た、乃し七地に至るまで、諸の智慧の所行道を得、乃至當に大願の力と、大方便智の力と、大神通の力とを以て、乃ち過ぐることを得べしとの故に。初地より來た一切の煩惱を遠離することを示現す。是の如く此の地を名けて染淨と爲す。染行に非ず、如分に平等の道を行ずるが故なり。彼の菩薩は此の地の中にて力に隨つて分に功用の道を捨つること、轉輪王の譬の如し。第八地の中にては自然に報行を得て煩惱の過を過ぐることを示現す。梵世に生れて轉輪王の人身を捨つるが如し。經にいへるが如く、諸の佛子よ、譬へば轉輪

聖王の如く、乃至煩惱過の染する所と爲らず、過ぐることを得るを以ての故なり。佛子よ、菩薩は是の第七の菩薩地に住して多くの貪欲等諸の煩惱衆を過ぐとは、未だ報地に至らざるが故に。是の故に、此の地を離煩惱の行と名けず、功用あるが故なり。菩薩は此の遠行地の中に住して有煩惱の者と名けず、乃至未だ滿足せざるが故に、無煩惱の者と名けず。是の如く前上地の勝差別分を已に說けり。次に雙行果の差別を說かん。此に四種の相有り。一には業清淨、二には勝三昧を得、三には過地、四には勝行を得ることなり。云何んが業清淨なるや。

經に曰く、是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して畢竟して深淨の身業を成就し、畢竟して深淨の口業を成就し、畢竟して深淨の意業を成就す。是の菩薩は所有る不善の道業の諸佛の呵したまふ所は皆已に捨離し、所有る善の業道の諸佛の歎じたまふ所は是れ則ち常に行ず。世間の所有る經書技術は五地の中に說けるが如く、自然にして行ず。是の菩薩は三千大千世界の中に於て、大師と爲ることを得、唯諸佛と及び八地の菩薩とを除く。衆生の深心妙行なるものも能く與に等しき者有ること無し。是の菩薩には所有る禪定、三昧、三摩跋提、神通、解脫はすべて一切現前す。修行門の中にて善く報力を成就すること、第八の菩薩地の如くなるには非ず。是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地に住して、念念の中に於て、具足して方便智力と、及び一切の助菩提分法とを修集し、轉た勝れて具足することを得。

論に曰く、業清淨とは四種の相有り、一には戒淨の勝、經にいへるが如く、是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して畢竟して深淨の身業を成就し、乃至是を則ち常に行ずとの故に。二には世間智清淨の勝、經にいへるが如く、世間の所有る經書技術、乃至自然にして行ずとの故に。三には自身の勝を得、心行の二平等にして與に等しき者無し、經にいへるが如く、是の菩薩は三千大千世界の中に於て、乃至、深心、妙行なるものも與に等しき者無しとの故に。四には勝力を得、禪等現前して勝る。經にいへるが如く、是の菩薩には所有る禪定三昧、乃至轉た勝れて具足することを得との故に。是の中、禪に依りて三昧、三摩跋提、神通、解脱を起す。衆生を教化せんが爲めの故に。寂滅の樂行なるが故に、滅定の三摩跋提は、是の如く次第す。是の如く雙行果の業清淨の四種の相を已に説けり。次に勝三昧を得ることを説かん。

經に曰く、是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して、善擇智と名くる菩薩の三昧、善思義三昧、益意三昧、分別義藏三昧、擇一切義三昧、善住堅根三昧、智神通門三昧、法界業三昧、如來利益三昧に入り、種種の義藏、世間涅槃門と名くる菩薩の三昧に入る。菩薩は是の如く、大智通門を滿足し、十の三昧を上首として能く百千の菩薩の三昧門に入りて、此の地を淨治す。

論に曰く、勝三昧を得とは(二六)十種の相有り。一には(二七)未だ義を觀ぜざるに依り。二には(二八)已に義を觀ぜるに依る。經にいへるが如く、是の菩

【二六】初の五は解を起して分別し、後の五は行を成じて分別することを明かす。

薩は、此の第七の菩薩遠行地の中に住して善擇智と名くる菩薩の三昧に入るとの故に、善思義三昧に入るとの故に。三には（二九）一句に依りて無量の義の勝れたるを說く。四には（三〇）一義に依りて無量の名を說く、經にいへるが如く、益意三昧との故に、分別義藏三昧との故に。五には（三一）明處に通ずる智に依る、經にいへるが如く、擇一切義三昧との故に。六には（三二）煩惱障の淨なるに依る、眞如觀の（三三）堅根の故に、經にいへるが如く、善住堅根三昧との故に。七には智障の淨なるに依る、四種の障の淨有るが故なり。一には（三四）勝功德の障、此を對治するは、經にいへるが如く、智神通門三昧との故に。二には無障礙智の障、此を對治するは、經にいへるが如く、法界業三昧との故に。三には深上の佛法に於て怯弱なる障、此を對治するは、經にいへるが如く、如來利益三昧との故に、四には不住行の障、此を對治するは、經にいへるが如く。（三五）種種の義藏世間涅槃門と名くる菩薩の三昧に入るとの故に。種種の義藏とは種種の善根の故なり。是の如く大智通門滿足して、十の三昧を上首とし、能く百千萬の菩薩の三昧門に入りて、此の地を淨治するが故なり。已に勝三昧を得る

【二七】心を調して觀ぜしむ。
【二八】已に義を觀ずるには重ねて更に審思す　此の二は理法を知ることを明かす。
【二九】義持の力に由る。
【三〇】文持の力に由る。三と四とは敎法を知ることを明かす。
【三一】此句は廣く事法を知ることを明かす。
【三二】前の五は自利、次の五は利他なり。中に於て第六は煩惱障なるを以て其行の深きを示し、後の四は智障の淸淨なるを得て其行の廣きを示す。
【三三】眞如三昧は諸定の根本にして、堅固不壞なるが故に堅根といふ。
【三四】智通の勝德を發すこと能はざるを障となす。
【三五】種種の義藏とは種種の善根なり。有爲の善根を修するが故に涅槃に住せず、無爲の

ことを說けり。次に地を過ぐることを說かん。

經に曰く、是の菩薩は是の三昧智慧方便の善く清淨なるを得るが故に、大悲力を得るが故に。聲聞、辟支佛の地を過ぎて、現前に思量して智慧地に趣く。

論に曰く、聲聞辟支佛の地を過ぐとは二種の相有り。一には修行方便智力、二には大悲力の故なり。現前とは能く(三六)法の流水に入るをいふ。思量智慧地とは八地の智慧なり、應に知るべし。但奢摩他、毗婆舍那の道を觀ず。彼の處に成就するが故なり。復た次に過ぐとは業勝れたるが故に示現す。

經に曰く、是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して、無量の身業の無相行、無量の口業の無相行、無量の意業の無相行有り。是の菩薩は善く清淨に行ずるが故に、無生法忍の光明を得。解脫月菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は菩薩の初地に住して無量の身業、無量の口業、無量の意業有りて已に一切の聲聞辟支佛の行成に過ぎたり。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、大法を觀ずるが故に過ぐ、自の智行の力にて過ぐるに非ず。此の第七の菩薩地は自の智行力にて觀ずるとを得るが故に、一切の聲聞辟支佛の壞すること能はざる所なり。佛子よ、譬へば王子の王家に生在して王の相を具足し、一切の臣衆に勝るは豪尊の力を以ての故にして、自の智行の力に非ざるが故なり。若し身長大すれば自ら智

善根を修するが故に生死に住せず、此の無住の三昧に依りて不住行の障を治す。

【三六】八地以上は止觀俱に現前し、自然に流注して佛の果海に入るの意を示す。

力を具し、作す所の事成じて一切の臣衆に過ぐるが如し。是の如く佛子よ、菩薩は初發心の時、已に一切の聲聞辟支佛に勝る。深心大なるを以ての故なり。今此の第七の菩薩地の中に住すれば、自の智行に住するが故に、一切の聲聞辟支佛の事に過ぎたり。

論に曰く。無量の三業無相の行とは入定して相を遠離する是れ無量なり。聲聞緣覺も亦淨業有りて相を遠離するも、無量の相に非ず、一切の衆生を利益すること能はざるが故に。復た次に此の無量は餘の下地の事に勝るが故なり。善く淸淨に行ずとは方便を修して行滿足するが故なり。無生法忍の光明とは相現前するが故なり。王子の喩は此の地の中の勝過を示現す、方便を修して行滿足するが故なり。自の智行に住すとは(三七)方便行盡きて念觀に住するが故に、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば王子の王家に生在して、乃至自の智行に住するが故に、一切の聲聞辟支佛の事に過ぐとの故なり。無量の身等の勝業を已に說けり。但だ多くの無量の神力のみに非ず、亦無量に勝義を示すが故なり。

經に曰く、諸の佛子よ、是の菩薩は此の第七の菩薩遠行地に住して、甚深遠離の無行を得て、身口意の業轉た勝行を求めて捨離せず。

論に曰く、甚深とは遠く入るが故に、遠離とは彼の障滅するが故に、無行とは彼の餘の出世間、世間地に行ずること能はざるが故なり。身口意の業轉た勝行を求めて捨離せずとは、聲聞辟支佛

【三七】方便慧及び殊勝の行の滿足して、上地の境界に於ては、念觀相應するをいふ。

も彼の相業を離れたりと雖も是の如くならず、少を得て足れりと爲し、上行を求めざるが故なり。
是の如く雙行の果の二乘地に過ぎたることを已に說けり。云何んが勝行を得るや。金剛藏經に曰く、解脫月菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は何の地より來かた能く寂滅定に入るや。菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は第六地より來かた能く寂滅定に入る。今此の第七の菩薩地に住して念念の中に於て能く寂滅定に入り、而も寂滅定を證せず。是の菩薩は畢竟して不可思議の身口意業を成就す。佛子よ、是の諸の菩薩は實際の行を行じて而も寂滅定を證せず。佛子よ、譬へば人有りて大船舫に乘じて大海に入り、善く行船を知り、善く水相を知りて、大海の水難の害する所と爲らざるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の第七の菩薩地の中に住して、諸の波羅蜜の船に乘じて實際の行を行じ、而も寂滅定を證せず。

論に曰く、實際の行を行じて而も寂滅定を證せざるは、有を捨てざるを以ての故なり。經にいへるが如く、金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、菩薩、摩訶薩は第六地より來かた能く寂滅定に入る、乃至而も寂滅定を證せずとの故に。是の如く三摩跋提の勝行を已に說けり。次に勝行を發起することを說かん。

經に曰く、菩薩は是の如く三昧の智力の修行に通達して大方便の智力を起すが故に、身を世間門に現じて深心に涅槃に住す。眷屬に圍遶せらると雖も而も心常に遠離し、願力を以て三界に受生するも

而も世間の染する所と爲らず、心常に寂滅なるも方便力を以て而も還つて熾んに燃ゆ、然りと雖も燒かず、佛智に隨順するも聲聞、辟支佛地に轉じ、諸佛の境界藏に通達するも魔の境界を現じ、四魔の道を過ぐるも現に魔の境界を行し、諸の外道の行を現ずるも而も深心に佛濟を捨てず。一切世間の事に通達するも心常に出世間の道法に在り、所有る莊嚴の事は諸の天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、四天王、釋提桓因、梵天王に勝るも而も樂法の念を捨てず。

論に曰く、殊勝の行を發起すとは、八種の行有り。（三八）共對治に攝す。

一には功德の行を起して世間門に隨順す、經にいへるが如く、菩薩は是の如く三昧智力の修行に通達して大方便智力を起すが故に、身を世間門に現ずるも深心に涅槃に住すとの故に。二には上首となりて餘行を攝す、經にいへるが如く、眷屬に圍遶せらると雖も而も心常に遠離すとの故に。三には願にて有を取る行、經にいへるが如く、願力を以て三界に受生するも而も世間の染する所と爲らずとの故に。四には（三九）家不斷の行、貪欲隨煩惱使を遠離するも而も貪欲の行事を示す、經にいへるが如く、心常に寂滅なるも方便の力を以て而も還つて熾んに燃ゆ、然りと雖も燒かずとの故に。五には入行、經にいへるが如く、佛智に隨順するも聲聞辟支佛の地に轉ずとの故に。六には

【三八】此の八行は皆所治と俱にして、而も汙れず、能治と共にして治行常に行はる。深く涅槃を樂うて身を生死に現ずといふが如く、能治と所治と俱存するが故に共對治と名づく。

【三九】家不斷とは妻子有ることを示す。

資生の行、飲食睡夢等の魔の境界の故に。經にいへるが如く、諸佛の境界藏に通達するも魔の境界を現ずとの故に。七には退行、老病死を示す、此の三は魔の境界なるが故に、經にいへるが如く、四魔の道を過ぐるも現に魔の境界を行ずとの故に。八には【四〇】轉行、二種の轉有り。一には見貪の轉、經にいへるが如く、諸の外道の行を現ずるも而も深心に佛濟を捨てずとの故に。二には障礙轉、經にいへるが如く、一切世間の事に通達するも而も心常に出世間の道法に在りとの故に。三には貪轉、天龍等の尊重の心を攝取して彼の貪心を轉ずるが故に、經にいへるが如く、所有る莊嚴の事は諸の天龍に勝る。乃至而も樂法の念を捨てずとの故に。

經に曰く、菩薩は是の如きの智慧を成就して此の菩薩の遠行地に住し已り、多く諸佛を見たてまつる。大神通力と大願力とを以ての故に、多くの百佛、多くの千佛、多くの百千佛、多くの百千那由他佛、多くの億佛、多くの百億佛、多くの千億佛、多くの百千億佛、多くの百千億那由他佛を見たてまつる。大神通力と大願力とを以ての故に、是の菩薩は諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以て、供養し、恭敬し、讃歎して、衣服、飲食、臥具、湯藥一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て衆僧を供養し、此善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんとを願ふ。諸佛の所に於て、上恭敬を生じ、專心に法を聽き、聞き已りて受持し、聞いて受持し已りて如實の三昧と、智慧の光明とを得て、隨順

【四〇】菩薩は邪に處して恆に正しく、癡に居て癡へられず、貪に在りて貪らず、常に他を化導して障を離れしむるを轉行といふ。

し修行す、行じ已りて憶持し、諸佛の正法を守護す、一切の聲聞辟支佛の智慧の問難は壞すること能はざる所なり。是の菩薩は復た衆生を利益するが故に、法忍轉た淨し。是の菩薩は此の菩薩の遠行地の中に住して、無量劫に於て、彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となり。調柔成就して復た轉た盡く成就す。無量の百劫、無量の千劫、無量の百千劫、無量の百千那由他劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、無量の百千億劫、無量の百千億那由他劫に彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となり、調柔成就し復た轉た盡く成就す。佛子よ、譬へば本眞金の一切の衆寶を以て具足し莊嚴すれば、光色轉た勝れて明淨となり、餘の莊嚴具の及ぶこと能はざる所なるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して、彼の諸の善根は方便智より起つて轉た勝れて明淨となり、一切の聲聞辟支佛の壞すること能はざる所なり。佛子よ、譬へば日光は一切の星宿月光の壞すること能はざる所、閻浮提の內の所有る泥水をも悉く能く乾し竭すが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の第七の菩薩遠行地の中に住して、彼の諸の善根は一切の聲聞辟支佛の壞すること能はざる所、又能く一切衆生の煩惱の淤泥を乾し竭くす。是の菩薩は、十波羅蜜の中にて、方便波羅蜜增上し、餘の波羅蜜も修習せざるには非ず、力に隨ひ、分に隨ふ。諸の佛子よ、是を菩薩の第七の菩薩遠行地を略說すと名く。若し菩薩此の地の中に住すれば、多く他化自在天王と作り、自在にして善く衆生をして、正智を發生せしめ、亦衆生をして、煩惱の海を度らしむ。作す所の善業は布施、

惡語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至一切種の一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲るべし、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。是の念よりして精進の行を發す、精進の力を以ての故に、一念の間に於て、百千億那由他の三昧を得、百千億那由陀の佛を見たてまつり、百千億那由他の佛の神力を知り、能く百千億那由他の佛の世界を動かし、能く百千億那由他の佛の世界に入り、能く百千億那由他の佛の世界を照し、能く百千億那由他の佛の世界の衆生を化し、能く壽百千億那由他劫に住し、能く過去、未來世の各百千億那由他劫の事を知り、能善く百千億那由他の法門に入り、能く身を變じて百千億那由他の身と爲し、一一の身に於て、能く百千億那由他の菩薩を示して、以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在勝上なり。菩薩は願力にて此の數に過ぎて、種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は、乃至、無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、諸佛の正法を守護すとは、三千大千世界の中に於て、大師たるを得るが故なり。方便

行を修め滿足するが故に、彼れ守護の上首なるが故なり。衆生を利益するが故に、法忍轉た顯はる。此の地の釋名は應に知るべし。經にいへるが如く、是の菩薩は復た能く衆生を利益するが故に、法忍轉た淨しとの故に。修行の功用〔四一〕盡至の故に、名けて遠行地と爲す。一切の衆寶具足して莊嚴する眞金の喩は一切の菩提分法の方便行の功用滿足することを示現するが故なり。此の地の中に諸の善根は轉た勝れて明淨なることを示現す。經にいへるが如く、譬へば本眞金の如く、乃至一切の聲聞辟支佛の壞すること能はざる所なりとの故に。日光の喩は〔四二〕前地の如く、此の地の勝れたることを說くが故なり。經にいへるが如く、佛子よ、譬へば日光の如く、乃至又能く一切衆生の煩惱の淤泥を乾し竭すとの故に。餘は前に說けるが如し。

【四一】盡至とは功用の究竟せる義。

【四二】前地は月光の月輪に勝れることを示し、此地は日光に喩へて前地の月光に勝れたることを示す。

不動地第八

論に曰く、第八地の中に七種の相差別有り。(一)一には總じて方便作集を明す地分、二には(二)得淨忍分、三には(三)得勝行分、四には(四)淨佛國土分、五には(五)得自在分、六には(六)大勝分、七には釋名分なり。云何んが總じて方便作集を明かす地分といふや。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、諸の佛子よ、若し菩薩七地の中に於て善く慧の方便を集め、善く諸行を淸淨にし、善く助道(七)の法を集め、善く大願力を起し、善く如來の力加に加せられ、自の善根力は力を得るが故に、常に念じて如來力、無畏、不共の佛法に隨順するが故に、善く淨深の心覺するが故に、功德智力を成就するが故に、大慈悲をもつて、等しく一切の衆生を

【一】七種の相の中、初の二は趣地の方便なり。第一は遠方便にして、總じて前の七地を此地に起し、集成する方便と爲す。

【二】第二は近方便にして前地に得し所の無生忍の光明は、此地に至りて成熟し、深く淸淨ならしむ。

【三】是れ初住地の行にして前の淨忍に依り勝行を發起す。

【四】是れ正住地の初にして、前の勝行に依りて、更に佛國土を淨むる行を起す。

【五】是れ正住地の圓滿する位にして、淨土の行に由りて、勝德を成じて、無礙自在を得るなり。

【六】是れ此地の成滿の行也。此地は前地に比するに、皆勝れたるも、今此地滿は勝中の勝なるが故に大勝といふ。

捨てざる行の故に、無量智の道に通達するが故に。

論に曰く、總じて方便作集を明す地分とは、七地の總なるが故なり。同相及び別相あり。云何んが同相なる。（七）同相に三種有り。一には二種の（八）無我は上上の證なるが故に、二には（九）不住の道淸淨なるが故に、三には彼の（一〇）方便智と行との所攝にして助菩提分法を滿足するが故なり。經にいへるが如く、諸の佛子よ、若し菩薩七地の中に於て、善く慧の方便を集むとの故に。善く諸行を淸淨にすとの故に。善く助道の法を集むとの故に。云何んが（一一）別相なる。善く大願力を起す等は初地等の諸地なり、經にいへるが如く、善く大願力を起すとの故に。第二地の中には、是の故に我れ應に等しく十善の業道を行し、一切種を修行して淸淨に彼の處に如來力を具足せしむべしとの故に、經にいへるが如く、善く如來の力加に加せらるとの故に。第三地の中には、厭にて不退の禪定等を得、自の善根力通達することを得るが故に、經にいへるが如く、自の善根力は力を得との故に。第四地の中には所說の法を分別する智、敎化智の障淨くして勝れ、佛法に通達せんとを念ず、經にいへるが如く、常に念じて如來力、無畏、不共の佛法に隨順すとの故に。第五地の中には深淨の心平等にして善く深心等を

【七】同相とは諸地の通行に名く。

【八】人無我と法無我の二無我は、初地より以來之を證し、漸次に轉勝して、此地に至るが故に上上の證といふ。

【九】悲智俱に行じて偏に住著なきが故に不住の道といふ。

【一〇】行は是れ前の證、方便は前の不住なり、此の二の所攝は、助道の法なり。

【一一】別相とは諸地の中の別異の行をいふ。

淨む、經にいへるが如く、善淨の深心覺すとの故に。第六地の中には大悲自在を首と爲し、增上して、因緣集を觀じ、福德智力を成就す、經にいへるが如く、福德智力を成就すとの故に。第七地の中には方便智慧は殊勝の道を發起して、一切の衆生を捨てざる行、經にいへるが如く、大慈悲をもつて等しく一切の衆生を捨てざるの行との故に。無量の衆生界を以ての故に無量の智道に入る、經にいへるが如く、無量の智道に通達すとの故に。是の如く、第八地の總明方便作集地分を已に說けり。云何んが得淨忍分なるや。無生法忍を得るが故に、彼の清淨なる自然無功用の行は應に知るべし。

經に曰く、一切法の本來無生[に入り]、無成無相、無出、不失、無盡、不行にして有性有るに非ず、初中後平等に入り、眞如無分別にして一切智智に入る。是の菩薩は一切の心意識の憶想分別を遠離して、貪著する所無く、虛空の如く平等にして、一切法の虛空の如き性に入る、是を無生法忍を得と名く。

論に曰く、復た次に彼の忍は〔二二〕四種の無生の中に於て、應に知るべし、四種の無生とは、一には〔二三〕事の無生、二には〔二四〕自性の無生、三には〔二五〕數差別の無生、四には〔二六〕作業

【二二】四種の無生とは一には相を破し、二には性を破し、三には因を泯じ、四には果を離れて無生忍を得るなり。前の二は事相を破して眞如の實性に歸し、後の二は實性を遣して事相を捨遣す。

【二三】相實を事と名け、事を泯して理に入るを事の無生と名く。因緣生起の事法は本無生なり、故に事を泯するは即ち無生を證し、能く相を破して有を遣る。

【二四】諸法の實體を性と名く。一切の法は各實性あるを以て性を泯じて眞如に歸するを性の無生と名く。無生緣起して性を破するが故に、性を泯するは即ち無生なり。是れ有性を破するなり。

差別の無生なり。是の中、事の無生とは（一七）實に七種の事有り。一には淨分の法の中にて（一八）本有の實、此を對治するは、經にいへるが如く、一切法の本來無生に入るとの故に。二には（一九）新新生の實、此を對治するは、經にいへるが如く、無成との故に。三には（二〇）相の實、此を對治するには、經にいへるが如く、無相との故に。四には（二一）後際の實、此を對治するには、經にいへるが如く、無出との故に。五には（二二）先際の實、染分の中の煩惱障の故に、此を對治するには、經にいへるが如く、不失との故に。六には（二三）盡の實、諸の衆生なり、此を對治するには、經にいへるが如く、無盡との故に。七には（二四）雜染の實、淨分の中なり、此を對治するには、經にいへるが如く、

【一五】數差別とは因相を離るるなり。證道の因に始終ありて三世の差別をなすが故に數差別といふ。證道の後に類つて之を見るに、三世の差別なく一切無生なるが故に、數差別の無生と名く。

【一六】作業差別の無生とは果相を離るるなり。佛果位の業用を作業と爲す。證して後に之を望めば、作業の得べき無きが故に無生といふ。

【一七】實とは相に隨つて執定まるをいふ。七種の實を擧げ、經文を引いて對治を明かす。

【一八】本有の實。凡夫が修養の力にて佛果を證するは、本有の佛性に依ると爲して、自性住性（先天的の覺性）といふ一物有りと計するをいふ。之を對治するは諸法本來無生なりと證入するに在り。

【一九】新新生の實。前に覺性の先天本有觀を否定すれば、覺性は後天的新生のものとなる。覺性は修行の力にて漸次に新生し開發すとなす習所成性を計す。之を對治するは覺性は緣より起るが故に成卽無成なりと證入するに在り。

【二〇】相の實。前の二性（先天的本有の覺性と後天的新生の覺性）より生ぜし所の行相ありと爲すの計なり。菩提涅槃は諸相を離れて不可得なれば無相を以て之を對治す。

【二一】後際の實。佛果を後際と名く、後際に出纏（解脫）ありと計す。以上の四句は之を一應位に配すれば、一は凡夫位、二は三賢の解行位、三は地上證位、四は證後の佛果位に當る。又此の四は順次に疑を釋することを知るべし。

【二二】先際の實。佛果の後際に對して衆生の在纏（煩惱）に

不行との故に。自性の無生とは是れ法無我なり、彼の法無我は、(二五)自體無性なるが故なり、經にいへるが如く、有性有るに非ずとの故に。彼れ事を觀ずるが故に、(二六)是れ此の忍は無と言ふことを得ず。(二七)所有る觀と法無我とは二相無きが故なり。數差別の無生とは、(二八)三時の中に於て(二九)染淨の法增減せざるが故に、經にいへるが如く、初中後平等との故に。作業差別の無生とは、眞如の中に於て、無分別の佛智を淨むるが故に、經にいへるが如く、眞如無分別一切智智に入るとの故に。是の如く、無生法忍觀を示現す。次に行は(三〇)報分別境界の想と、(三一)攝受分別生の想とを遠離することを示現するが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は一切の心意識の憶想分別を遠離す

縛はれたる位ノを先際と名く。之を對治するは煩惱の體卽空にして壞すべきなく煩惱卽菩提と證するに在り。

【二三】盡の實。一切の凡夫は皆煩惱染を斷ずれば、衆生は皆佛と成りて遂に盡くべしとの計なり。之を對治するは衆生は虛空の性の如く無盡なりと知るなり。

【二四】雜染の實。衆生は淨染の二分より成る、修行位中には染に背いて淨に向ふと計す。之を對治するは不行といふは生佛一體にして、上轉修入の行は不可得なりと知るなり。

【二五】自體無性とは先有にして今無なるに非ず、本來無性なりとの意。

【二六】前に四地より七地に至り事の無生を觀じて、今正しく此の理を忍するが故に、此の忍は無といふを得す。

【二七】此の句は所觀の事の外に理なきことを明かす。此の故に二相なしといふ、不二中道の意なり。

【二八】三時とは修行時の初中後の時分を云ふ。初時は唯染、後時は唯淨、中時は染淨相半する位なり。

【二九】初時に染增して淨滅するに非ず、後時に淨增して染滅するに非ず。理性より云へば三時皆空にて、自性無きが故に、染淨の法增減せずといひ、初中後平等といふ。

【三〇】報分別の境界想とは報報心の義にて、異熟の果體たる第八識の分別作用を離るる義を示す、是れ經文の心の字を釋す。

【三一】攝受分別性の想とは第七識と前六識の分別作用を離るる義を示す、是れ經文の意識を釋す。

との故に。(三二)想とは(三三)障法の想を遠離す。(三四)治法の想無きに非ず。彼の治想は下地の中に於て三種の勝事有り。一には(三五)無功用自然の行なり、經にいへるが如く、貪著する所無しとの故に。二には(三六)徧一切法の想なり、經にいへるが如く、虚空の如く平等なりとの故に。三には眞如の不動自然行に入るが故に、經にいへるが如く、一切法の虚空の如き性に入る。是を無生法忍を得と名くとの故に。是の如く八地の得淨忍分を已に說けり。次に得勝行分を說かん。

經に曰く、又佛子よ、是の如く法忍を成就すれば、菩薩は卽時に是の第八の菩薩不動地を得、深行の菩薩たることを得て、知るを得べきこと難し。能く分別する無く、一切の相を離れ、一切の想、一切の貪著を離れて、無量無邊、一切の聲聞辟支佛の壞すること能はざる所、寂靜にして、一切の寂靜現在前す。佛子よ、譬へば比丘の神通を具足することを得て卽ち自在を得、次第に滅盡定に入りて、一切の動心、憶想分別を皆悉く盡滅するが如し。佛子よ、菩薩も亦是の如く是の第八の菩薩不動地に住すれば、卽ち一切の有功用の行と及び諸の憶想の念とを離れて、無功用の法を得、身口意を離れ、務めて報行の成に住す。佛子よ、譬へば人有りて夢中に身大河に墮在すと見て、是の人爾の時に大勇猛を發

【三二】一切の心意識の分別想を滅すといふも、障法の想を離るるのみ、治法の想は尚行ずることを明かす。

【三三】障法の想とは有分別觀解の想なり。

【三四】治法の想とは無分別智なり。

【三五】佛果を求むるの心なく、任運に行を起し、自性自ら進むことを示す。

【三六】遍一切法の想とは能治の廣きことを示す。空理一切に遍じ、離念の無生智は虚空の如く平等一相なり。

し、大方便を施して、此の河を出でんと欲す、勇猛を發すの時、忽然として便ち寤めんに、寤め已れば則ち一切の勇猛方便の據事を離るるが如し。佛子よ、菩薩も亦是の如く、初より已來諸の衆生の四大河に墮することを見て大精進力を發し、廣く行道を修して、不動地に至り、即ち一切の想、有功用の行を離る。是の菩薩は一切二心を行ぜず、諸の憶想する所復た現前せず。佛子よ、譬へば梵天に生在すれば欲界の煩惱は一切行ぜざるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の菩薩の不動地に住すれば一切の心意識等行ぜず、一切の佛心、菩提心、菩薩心、涅槃心行ぜず、如何に況んや當に世間心を行ずべきをや。

論に曰く、是の中、勝行を得とは〔三七〕深行を得るが故なり。深行に七種有り。一には難入の深、經にいへるが如く、又佛子よ、是の如く法忍を成就すれば、菩薩は卽時に是の第八の菩薩不動地を得。深行の菩薩たることを得て、知るを得べきと難しとの故に。二には同行の深、諸の淨地の菩薩は同じきが故なり、經にいへるが如く、〔三八〕能く分別すること無しとの故に。三には境界の深、〔三九〕能取所取現前せざるが故なり、經にいへるが如く、一切の相を離れ、一切の想、一切の貪著を離るとの故に。一切の障想を護るが故に、一切の貪著を離ると言ふ。四には修行の深、自利利他の行有るが故なり、經にいへるが如く、〔四〇〕無量無邊との故に。五に

【三七】此位に入りて行玄奧なるが故に深行といふ。
【三八】諸の無漏淨地の菩薩と異ることなきが故に能く分別すること無しといふ。同行にして差異なきが故に區別し能はざるの義なり。
【三九】能取の想と所取の相とを離るるの義
【四〇】自利の行無量にして利他無邊なり。

は不退の深、經にいへるが如く、一切の聲聞辟支佛の壞すると能はざる所との故に。六には離障の深、經にいへるが如く、寂靜なりとの故に。七には對治現前の深、經にいへるが如く、一切寂靜にして而も現在前すとの故に。眞如は一切寂靜の故なり。滅盡定の喩は、彼の行の寂滅なるを示すが故なり、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば比丘の如し。乃至身口意を離れ務めて、報行の成に住すとの故に。一切の動心、憶想分別を皆悉く盡滅すとは、彼の依止無きが故なり。卽ち一切有功用の行を離るとは、切用の行地を過ぐるが故なり。無功用の法を得とは、彼の對治の法を得るが故なり。無功用の法自然に行ずることを得るを以ての故に。報行の成に住すとは有功用の行の相違の法を得ることを示現するが故に。復た報行の成に住すとは、善く阿梨耶識の眞如の法の中に住するが故なり。夢寤の喩は此の行の中に彼の過想を護りて正智の想有ることを示す。此の行寂滅するが故なり、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば人有り夢中に身を見るが如し、乃至諸の憶想する所復た現前せずとの故に。是の中、(四一)清淨に依りて世間涅槃の二心行せざるが故に、(四二)境界に依りて受用念想行せざるが故に、梵天に生る喩は下地の心に於ては一向に行せず、報地を得るが故なり。此れ遠離の勝を說く、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば梵天に生在するが如し、乃至何に況んや當に世間の心を行

【四一】夢中に河を渡るに此岸を世間に喩へ、彼岸を涅槃に喩ふ。已に覺寤すれば、彼此倶に亡するを、清淨に依るといふ、內證清淨の意なり。

【四二】外緣の境界たる彼此の岸無ければ、受用の念想行せず、是れ經の後の句を釋す。

すべきをやとの故に。是の中、(四三)順行と(四四)不順行の二分有り。(四五)心等(四六)佛等行せざるが故に、大乘小乘の差別の故に、大乘小乘の中の衆生法の差別の故に。無學と學の差別、佛等と涅槃との差別の說は、應に知るべし。是の中、順行とは順行分の中に心等行せざるが故なり、經にいへるが如く、一切の心意識等行せずとの故に。是の中、不順行とは不順行分の中に佛等行せざるが故なり、經にいへるが如く、佛心、乃至涅槃心行せずとの故に。大乘、小乘の差別にて、大乘の中の差別とは佛、菩提涅槃の差別の故なり。小乘の中の差別とは、聲聞の涅槃、阿羅漢等の差別の故なり。大乘の中の衆生法の差別とは、佛、菩薩の差別の故なり。法の差別とは菩提涅槃の差別の故なり。小乘の中の無學と學とは衆生の差別なり。是の中、法の差別とは涅槃の差別なり。無學の差別とは(四七)阿羅漢の差別なり。有學の差別とは(四八)阿那含等の差別なり。是の如き等の行は皆悉く行せざるが故なり。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩は此の不動地を得已りて、本願力に住するが故に、諸佛爾の時に彼の(四九)法の流水門の中にて如來の智慧を與へ、復

(四三) 順行とは世間の心なり。
(四四) 不順行とは出世間の心なり。
(四五) 心等とは心を擧げて意と識と及び憶想等を等取す、是れ卽ち順行なり。
(四六) 佛等とは佛を擧げて菩提涅槃等を等取す、是れ卽ち不順行なり。
(四七) 阿羅漢は無學位なり。阿羅漢にも亦六種九種等の差別あり。
(四八) 小乘の四向四果の中、阿羅漢を除きて餘を有學位といふ。預流、一來、不還の三果四向の差別あり。阿那含(Anāgāmin)とは不還と譯す。
(四九) 無生忍に在りては功用を用ゐず、任運に行を起して、佛果に趣くは、猶ほ大河の水の人力を待たずして、大海に流入するが如き故に、法の流水門と稱す。

た是の言を作したまはく、善い哉、善い哉、善男子よ、汝は此の究竟忍を得たり、一切諸佛の法に順ずるが故に。善男子よ、我等の有する所の四無所畏、十八不共の佛法の成就は、汝今未だ得ず、當に諸佛の法を成就せんが爲めの故に、勤求精進して亦此の忍門を捨つること莫れ。

論に曰く、此の如來の智慧力を與ふるは彼の深行樂足の心を釋せんが故に、上法を得ることを嘆ずるが故に、〔五〇〕教授を修することを得ざるが故なり。若し〔五一〕此の忍行を捨てざれば一切の佛法を成就することを得ざるが故に。〔五二〕彼の有力に依りて能く作すが故に、經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩は此の不動地を得已つて、本願力に住し、乃至亦此の忍門を捨つること莫れとの故に。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝は是の寂滅解脱を得たりと雖も、此の凡夫衆生は不善にして寂滅ならず、常に種種の煩惱集の中に在りて種種の異念覺觀の害する所と爲る、汝當に是の如きの衆生を愍念すべし。

論に曰く、彼の衆生は大利益の事無きに依りて煩惱を現起し、在家出家分の中の深く煩惱に著する衆生をして轉ぜしむるが故に、經にいへるが如く、善男子よ、汝は是の寂滅解脱を得たりと雖も、乃至汝當に是の如きの衆生を愍念すべしとの故に。不善とは煩惱染を現起するが故なり、寂滅せずとは彼の使を遠離せざる故なり。常に種種の煩惱集の中に在りとは、在家分の中に於けるが故なり。種

〔五〇〕十力等を修して衆生に教授する法を得ずとの意なり。
〔五一〕是の句は著を捨てしむ。
〔五二〕全く棄捨するに非ず、此力に依りて能く大行を成ずるが故なり。

種の異念覺觀の害する所と爲るとは、出家分の中に於けるが故なり。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝應に本の所願を念じて、大いに衆生を利益せんと欲し、不可思議の智慧門を得んと欲すべし。

論に曰く、願に依りて衆生を敎化し、智行廣く能く轉ずるが故なり、經にいへるが如く、復た次に、善男子よ、汝應に本の所願を念じて、乃至不可思議の智慧門を得んと欲すべしとの故に。

經に曰く、復た次に、善男子よ、此の一切法の中にて法性は、佛有るも佛無きも、法界常住なり、諸の如來は此の法を得るを以ての故に說いて名けて佛と爲さず、聲聞、辟支佛も亦此の無分別の法を得るなり。

論に曰く、(五三)不共の義に依り、(五四)功行疲倦す、彼の(五五)垢轉ずるが故に、經にいへるが如く、復た次に、善男子よ、此の一切法の中の法性、乃至、亦此の無分別の法を得との故に。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝は我等の無量の淨身、無量の智慧、無量の佛國土、無量の光輪、無量の起智、無量の淨音を觀せよ。汝今應に是の如き等の事を起すべし。

論に曰く、無量の淨身等は彼の佛法成就するに力有ることを示現す、衆生を利益するに依るが故

【五三】不共の義とは經の第二句を釋す。佛は但此の法を得るのみならず、化佛の大用を具す。

【五四】功行疲倦とは第三句を釋す。二乘は寂滅に住して化を捨つる故なり。

【五五】佛の勸に依りて此の二過を轉ずるをいふ。

に、此の衆生を利益する事は何の事身を以てするや、經にいへるが如く、復た次に、善男子よ、汝我等の無量の淨身を觀せよとの故に。何等の智を以てするや、世諦の智と第一義諦の智となり、經にいへるが如く、無量の智慧との故に。何等の土を以てするや、清淨の國土なり、經にいへるが如く、無量の佛國土との故に。何等の（五六）攝伏を以てするや、經にいへるが如く、無量の光輪との故に。度すべき所の衆生に隨ひて智慧を行ず、經にいへるが如く、無量の起智との故に。言說する所に隨ふ、經にいへるが如く、無量の淨音との故に。如來は無量の利益衆生を作す、汝今應に是の如き等の事を起すべしと示現す。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝今適此の一の法明を得、所謂る一切法の寂滅にして分別無き法明なり。是の如く、善男子よ、如來の法明は無量の入、無量の作、無量の轉あり、汝彼を得んが爲めの故に、應に此の法を起すべし。

論に曰く、復た諸佛の無量の勝行を示す、經にいへるが如く、復た次に、善男子よ、汝今適此の一の法明を得、乃至應に此の法を起すべしとの故に。無量の入とは法門の差別の故に、無量の作とは作事の差別の故に、無量の轉とは上上不斷の差別に依るが故なり。

經に曰く、復た次に、善男子よ、汝十方の無量の國土、無量の衆生、無量の法の差別を觀せよ。汝應に是の如く盡く彼の事に通達すべし。是の如く、佛子よ。諸佛は此の菩薩に是の如き等の無量無邊

【五六】攝伏とは善者は光明を以て之を攝取し、惡者は輪を以て之を折伏するの義なり。

に智慧を起す門を與ふ。此の無量の智慧門を以ての故に、是の菩薩は能く無量智の差別業を起し、皆悉く成就す。

論に曰く、復た（五七）少作に在りて、見る所の無量の世界と衆生と、法の差別とに隨ひて少分觀じて卽ち能く轉を成就するが故に、經にいへるが如く、復た次に、善男子よ、汝十方無量の國土を觀せよ、乃至皆悉く成就すとの故に。

經に曰く、金剛藏菩薩は解脫月菩薩に語りて言く、佛子よ、若し諸佛にして、此の菩薩に起智門を與へて轉せしめざれば、是の菩薩は爾の時に卽ち涅槃に入りて、一切の衆生を利益することを棄捨せん。諸佛は此の菩薩に無量無邊の起智門を與へしを以ての故に、一念の中に於て、起す所の智業は初發心より以來、乃至第七地を竟るまでに比するに百分が一にも及ばず、千分、百千分、百千那由他分、億分、百億分、千億分、百千億分、百千億那由他分が一にも及ばず、乃至無量無邊の阿僧祇分も亦一にも及ばず、乃至算數譬喩の能く及ぶ所に非ず。所以は何ん、佛子よ、先には一身の起行を以て起すが故に、今此の菩薩地の中には、菩薩の無量の身の差別を得るが故に、無量の行力を集むるが故に、無量の音聲起るが故に、無量の智慧起るが故に、無量の生起るが故に、無量の淸淨の國土の故に、無量の衆生を敎化するが故に、無量の諸佛を供養し恭敬するが故に、隨順して無量の法を覺するが故に、無量の神通力を得て起すが故に、無量の衆

【五七】佛果を望むに遙かならざるの意。

會の差別の故に、無量の身口意の業は一切の菩薩の行力を集む、不動の法を以ての故なり。佛子よ、譬へば船に乘りて大海に入らんと欲するに未だ大海に至らざれば、多く功力を用ゐず。若し大海に至れば、復た力を用ゐず、但だ風の力を以て去る。若し大海に於て一日に行く所を本の功力に比するに、百歲に至るも、及ぶことを得る能はざるが如し。是の如く佛子よ、菩薩は善く善根資糧を集め、大乘の船に乘りて菩薩の所行の大智慧海に到り、一念の間に於て、無功用の智は能く一切智智の處に入る、本の有功用の行は若くは一劫、若くは百千萬劫にも及ぶことを得る能はず。

論に曰く、是の中、卽ち涅槃に入るとは智慧を與ふることを示現す、經にいへるが如く、諸佛は此の菩薩に無量無邊の起智門を與ふるを以ての故に、乃至。不動の法を以ての故なり。諸佛は此の菩薩に無量無邊の起智門を與ふるを以てとは、(五八)彼の行の中に功德を攝するの因勝る、(五九)同じく敎授と作りて說くが故なり。乃至算數等次第して解釋すること應に知るべし。數分とは一一を二と爲し、二二を四と爲す、是の如き等の喩も亦一に及ばず、是の事は喩比すべからざるが故なり。無量の身の差別とは、(六〇)一切の菩薩身は自身の如しと信解するが故なり。是の如きの無量の音聲起る等も亦無量なること應に知るべし。此の十句は衆生を敎化するに依り、助道の行を集むるに依

【五八】發起行の中にて無生法忍は功德を攝する因最も殊勝なりとの意なり。

【五九】經の智を與ふることを解す。諸佛共に勸むるが故に同じく敎授と作ると云ふ。

【六〇】自身を以て一切の菩薩身に同ぜしむ、空の故に一切の菩薩の修する所は卽ち自身の修なり、是れ同體の智力なり。信解とは勝解力に依る。

り、障淸淨に依ること應に知るべし。(六一)身住に隨ひ、(六二)所說に隨ひ、依智に隨ひ、所取の生に隨ひ、何の國土に隨ひて、衆生を敎化することを得。(六三)隨って功德の助道を集め、智慧の助道を集む。無量の諸佛を供養し恭敬するが故に、隨順して無量の法を覺するが故なり。神通障と正覺障との淸淨なるに隨ふが故に、此の一切處に無量の身口意業に隨順するを應に知るべし。不動の法を以てとは、(六四)無間に斷せずして集むるが故なり。佛子よ、譬へば船に乘るが如し。乃至百千萬劫にも及ぶことを得る能はずとは、船は彼の行の速疾なるに喩ふ。(六五)因の勝れたるを示現すと知るべし。善く善根資糧を集むとは、(六六)七地の中に於て、菩薩の行を修するが故なり。大乘の船に乘りて菩薩の所行の大智慧海に到るとは、八地の智慧海なること應に知るべし。是の如く八地の得勝行分を已に說けり。

次に佛の國土を淨むることを說かん。此の佛の國土を淨むるに(六七)三種の自在行有り。一には器世間の自在行、二には衆生世間の自在行、三には智正覺の自在行なり。云何んが器世間の自在行なるや。

【六一】身住に隨ふとは無量の身なり。觀音は大悲に住する身なるが如く、所住の法に隨ひて彼の身を現す。

【六二】所說に隨ふとは無量の音聲なり。所說の法に隨ひて音聲も亦無量なり。

【六三】隨ふとは宜しきに隨ふの意にて、一に非らざるを示す、卽ち無量を釋するなり。

【六四】無相無功用にして間斷なきが故に、用相動ぜずして任運に集成すとの意。

【六五】因の勝るとは行の速疾なる所因を顯はす。無生忍は是れ行の勝因なればなり。

【六六】前七地に修する善根を資糧として此地に到るを得。

【六七】三種とは初は敎化の處、次は所化の人、三は能化の佛なり、之を三世間といふ。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩は菩薩の第八地を得て、大方便の慧より無功用の心を起し、菩薩道に在りて、一切智智の力を觀ず。所謂る世界の成を觀じ、世界の壞を觀ず。是の菩薩は世間の成ずるに隨つて、彼れ如實に知る。世間の壞するに隨つて、彼れ如實に知る。業の因緣の集まるに隨ふが故に世間の成ずることを彼れ亦知る。業の因緣盡くるに隨ふが故に、世間の壞することも彼れ亦知る。世間の幾時に成ずるに隨つて彼れ亦知り、世間の幾時に壞するに隨つて彼れ亦知る。世間の幾時に成じ住するに隨つて彼れ亦知り、世間の幾時に壞し住　るに隨つて彼れ亦知る。是の菩薩は地界の小相を知り、地界の大相を知り、地界の無量相を知り、地界の差別相を知る。是の菩薩は水界の少相を知り、水界の大相を知り、水界の無量相を知り、水界の差別相を知る。是の菩薩は火界の小相を知り、火界の大相を知り、火界の無量相を知り、火界の差別相を知る。是の菩薩は風界の小相を知り、風界の大相を知り、風界の無量相を知り、風界の差別相を知る。是の菩薩は微塵の細相と麤相と無量相とを知り、差別相をも知る。何の世界の中に隨ふも。所有る微塵の集散と塵微の差別とを皆悉く能く知る。何の世界の中に隨ふも。所有る地界の若干の微塵も皆悉く能く知る。所有る水界の若干の微塵も皆悉く能く知り、所有の火界の若干の微塵も皆悉く能く知り、所有る風界の若干の微塵も皆悉く能く知り、所有る衆生身の若干の微塵も皆悉く能く知り、所有る國土身の若干の微塵も皆悉く能く知る。是の菩薩は諸の衆生の麤身と細身との差別、若干の微塵の成ずることを知り、地獄身の若干

の微塵に依りて成ずることを知り、畜生身の若干の微塵に依りて成ずることを知り、餓鬼身の若干の微塵に依りて成ずることを知り、阿修羅身の若干の微塵に依りて成ずることを知り、天身の若干の微塵に依りて成ずることを知り、人身の若干の微塵に依りて成ずることを知る。是の菩薩は通達して是の如きの微塵を分別する智に入り已りて、欲界の成ずるを知り、色界の成ずるを知り、無色界の成ずるを知り、欲界の壞するを知り、色界の壞するを知り、無色界の壞するを知り、欲界の小相を知り、欲界の大相を知り、欲界の無量相を知り、欲界の差別相を知り、色界の小相を知り、色界の大相を知り、色界の無量相を知り、色界の差別相を知り、無色界の小相を知り、無色界の大相を知り、無色界の無量相を知り、無色界の差別相を知る。是の如く、三界を思量する智の中に入る。是の菩薩は復た善く智明を起して、善く衆生身の差別を知り、善く衆生身を分別することを知り、善く應に生ずべき所の處を觀ず。是の菩薩は衆生の生處に隨ひ、衆生身の集業に隨ひて而も爲めに身を受く、衆生を教化せんが故なり。是の菩薩は身を現して、徧く三千大千世界に滿ちて、衆生の身の各各の差別に隨ふ。是の如く、隨順して生ずる處に現前の光明を起し、若くは二三千大千世界、若くは三四五、若くは十、二十、三十、四十、五十、若くは百三千大千世界、若くは千、若くは萬、若くは百萬、若くは千萬、若くは百千萬、若くは億萬、若くは百千萬億那由他、乃至無量無邊、不可說不可說の三千大千世界に身其の中に徧くして、衆生の自身の差別の信に隨ふ。是の如く生ずる處に現前の光明を起す、

智隨順するが故なり。是の菩薩は是の如き智慧を成就して一佛國土に於て、身動搖せず、乃至不可說の諸佛の國土の衆會の中に於て、現前の光明を起すが故に。

論に曰く、器世間の自在行とは、五種の自在有り。一には（六八）心の欲する所に隨ひ彼れ（六九）能く現じ及び現ぜず。二には（七〇）何の欲に隨つて彼れ能く現ず。三には時の欲するに隨つて彼れ即時に現ず。四には廣狹の欲するに隨つて、彼れ能く現ず。五には心の幾許の欲に隨ひて彼れ能く現ず。經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩は菩薩の第八地を得て大方便慧より無功用の心を起し、菩薩の道に在りて一切智智の力を觀じ、乃至世間の壞するに隨つて彼れ如實に知るとの故に。此の世界の成壞等は初の器世間の自在行の中にて心の欲する所に隨つて彼れ能く現じ及び現ぜざるが故なり。業の因緣の集まるに隨ふが故に世間成ずることを彼れ亦知る。業の因緣の盡くるに隨ふが故に世間の壞することを彼れ亦知る。これ業集盡の智にして、第二の何の欲に隨つて彼れ能く現ずるが故なり。世間の幾時に隨つて成じ、乃至第四句の世間の幾時に隨つて壞住するやを彼れ亦知る。世間の幾時に隨つて成ずる等の智は第三の幾時の欲するに隨つて彼れ即時に現ずるが故なり。是の菩薩は地界の小相を知り、乃

【六八】心の欲する所に隨ふとは此世界に於て自心の知らんと欲する所は即ち知り、又他の衆生の心に隨ひ知らんと欲すれば即ち知る、是れ即智の自在なり。

【六九】能く現ずとは成なり。現ぜずは壞なり。是れ通自在なり。

【七〇】何の業に隨つて成じ、何の業に隨つて壞するやを知らんと欲すれば即ち知る。之を業集盡智といふ。

至、人身の若干の微塵に依りて成ずることを知るとは、地等の相差別智にして、第四の廣狹の欲に隨つて彼れ能く現ずるが故なり。是の菩薩は是の如く微塵を分別する智の中に入り、乃至現前光明成壞の智、乃至一佛國土に於て、身動搖せずとは、第五の心の幾許の欲に隨つて彼れ能く現ずるが故なり。是の中、地界等に次第して境界智と相智とあり。云何んが境界智なる、(七一)定地に非ざる報識の境界は是を小相と名く。(七二)定地の識の境界は是を大相と名く。如來の境界は是を(七三)無量相と名く。云何んが相智なる、(七四)自相と同相と是を差別相と名く。身の麤細とは色、無色等の諸の衆生、(七五)是の如く次第す。欲界等の(七六)境界智と相智とは、欲界の人境界は是を小相と名け、天の境界は大相なり、(七七)色界は覺觀の境界は小相にして無覺無觀の境界は大相なり。無色界は(七八)佛法の中にて凡夫の境界は小相、聲聞、菩薩は大相なり、一切の如來の境界は無量相なり。善く衆生身の差別を知り、善く衆生身を分別することを知るとは、

【七一】定地に非ずとは欲界所知の境界を示す、欲界の所知は狹きが故に小相と名く。

【七二】定地とは上界の所知は廣きが故に大と名く。

【七三】佛智は無限なるが故に無量相といふ。

【七四】四大の麤相を自相と名け、此の四大の聚成の上に、空無我等の義有るを同相と名け、此の二の不同を差別と名く。

【七五】色界は麤、無色界は細、欲界は麤、色界は細なり、故に是の如く次第すと云ふ。

【七六】三界の中の事の分齊を知るを境界智と名け、法の分齊を知るを相智と名く、此には欲界を擧げ、上二界を等取す。

【七七】色界の中にて覺觀あるは初禪にして、覺觀無きは二禪以上なり。

【七八】無色界の中にて、外道妄取して涅槃と爲すを、簡去せんが爲に特に佛法といふ。

(七九)善く身の不同と(八〇)方便の異生同生の差別とを知る、應に知るべし。諸佛の國土の衆會の中に於て、現前の光明を起すとは、彼れ處處に去りて身體示現す。是の如く佛國土を淨むる器世間の自在行を已に說けり。云何んが衆生世間の自在行なるや。

經に曰く、是の菩薩は衆生身の差別信に隨ひ、決定信の差別に隨つて、彼彼の大會の中に、是の如く自身を示現す。是の菩薩は若くは沙門衆の中に於ては沙門の形色を示し、婆羅門衆の中にては婆羅門の形色を示し、刹利衆の中にては刹利の形色を示し、毗舍衆の中にては毗舍の形色を示し、首陀衆の中にては首陀の形色を示し、居士衆の中にては居士の形色を示し、長者衆の中にては長者の形色を示し、四天王衆の中にては四天王の形色を示し、帝釋衆の中にては帝釋の形色を示す。是の如く焰摩衆の中、兜率衆の中、化樂衆の中、他化自在衆の中、魔衆の中、梵天衆の中にては、梵天の形色を示し、乃至阿迦尼吒天衆の中にては阿迦尼吒天の形色を示す。是の菩薩は應に聲聞身を以て度すべき者には聲聞の形色を示し、應に辟支佛身を以て度すべき者には辟支佛の形色を示し、應に菩薩身を以て度すべき者には菩薩の形色を示し、應に佛身を以て度すべき者には佛身の形色を示す。佛子よ、是の如く所有る不可說の諸佛の國土の中にて衆生身の信樂差別に隨つて、彼彼の佛國土の中にて是の如く自身差別して示現す。

【七九】總じて所知の衆生を釋す。

【八〇】方便を以て化現して彼の衆生に同ずることを釋す。

論に曰く、衆生世間の自在行とは、彼れ調伏自在なるが故に、彼れ行きて衆生を化するに、身心自ら事に同じ、自の身心は（八一）等分に示現す、經にいへるが如く、是の菩薩は衆生身の差別信に隨ひ、乃至彼彼の佛國土の中に是の如く自身差別して示現すとの故に。是の如く衆生世間の自在行を已に說けり。云何んが智正覺の自在行なる。第一義諦の智、聖諦の智等なり。

經に曰く、是の菩薩は一切の身相の分別を遠離して身の平等を得たり。是の菩薩は衆生身を知り、國土身を知り、業報身を知り、聲聞身を知り、辟支佛身を知り、菩薩身を知り、如來身を知り、智身を知り、法身を知り、虛空身を知る。是の菩薩は是の如く衆生の深心の起樂を知り、若くは衆生身を以て自身と作す。是の如く國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虛空身を以て自身と作す。是の菩薩は是の如く衆生の深心の起樂を知り、若くは自身を以て衆生身と作す。是の如く國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虛空身をもつて衆生身と作す。是の菩薩は是の如く衆生の深心の起樂を知り、何等何等の身、何等何等の身の中に能く自在に作す。是の菩薩は衆生身の集業身、報身、煩惱身、色身を知り、無色身を知る。是の菩薩は國土身の小相、大相、無量相、垢相、淨相、廣相、亂住相、倒住相、平正相を知り、方網の差別相を知る。業報身の假名差別、聲聞身の假名差別、辟支佛身の假名差別を知り、菩薩身の假名差別を知る。是の菩薩は如來身、菩提

【八一】菩薩の身は衆生に隨つて必ず宜しきを量つて現ずるを等分に示現すといふ。

身、願身、化身、受神力身、相好莊嚴身、光明身、意生身、功德身、法身を知り、智身を知る。是の菩薩は善く智身の善く思量する相、善く如實に觀ずる相、果行所攝の相、世間出世間の差別相、三乘差別の相、共不共の相、乘不乘の相を知り、善く學無學の相を知る。是の菩薩は法身の平等相を知り、不壞の相を知り、轉時の假名の差別相、衆生非衆生法の差別相を知り、佛の法、聖僧の法の差別相を知る。是の菩薩は虛空身の無量相、周偏の相、無形の相、不異の相、無邊の相を知り、色身の別異を顯はす相を知る。

論に曰く、第一義諦の智とは一切の身相分別を遠離して、身の平等を得て、自身と他身とを分別せざることを示すが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は一切の身相分別を遠離して、身の平等を得との故に。此は是れ聲聞辟支佛の第一義の智に同じからざることを示現す。世諦の智とは善く衆生身等の染分と淨分と不二分とを知り、善く分別して知るが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は、衆生身を知り、乃至虛空身を知るとの故に。是の中、衆生世間と器世間と、彼の二の生因の業煩惱とは、是れ(八二)染分なり。三乘は是れ(八三)淨分なり。此の三乘は(八四)何の智に隨ひ、何の法に隨ふや、彼れ淨を顯示す。虛空は是れ(八五)不

【八二】經說の十身の中にて初の衆生身、國土身、業報身とを染分と爲す。

【八三】次の聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身の三乘を淨分と爲す。

【八四】何の智に隨ふとは智身を示し、何の法に隨ふとは法身を示す。是れ卽ち能知の智と所知の法となり、以上六身を淨分となす。

【八五】虛空身は染淨の二相に非らざるが故に不二分と名く。以上の十身を融三世間の十身と名く。

二分の故に。是の菩薩は是の如く衆生の深心の起樂を知り、若くは衆生身を以て自身と作し、乃至虛空身を以て自身と作す等、是の菩薩は是の如く衆生の深心の起樂を知り、若くは自身を以て、衆生身と作し、乃至自身を以て虛空身と作す等、是の中、衆生身を以て自身と作すとは彼の自在の中の所作攝取の行にして、種種に示現す。是の中、衆生身とは業、生、煩惱、妄想、染の差別、色無色界の差別を皆如實に知る、經にいへるが如く、是の菩薩は衆生身、集業身、報身、煩惱身、色身を知り、無色身を知るとの故に。國土身とは（八六）千等の世界の差別なり、應に知るべし。淨不淨の世界の差別を皆善く分別して知る、廣等の世界の差別を皆善く分別して知る、經にいへるが如く、是の菩薩は國土身を知り、乃至方網差別の相を知るとの故に。廣相等の諸句の義は初地に說けるが如し。業報と、聲聞と、辟支佛と菩薩身との假名差別とは自相同相の差別なり、（八七）假名の分別にして我人無きが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は業報身の假名差別を知り、乃至菩薩身の假名差別を知るとの故に。（八八）是の菩薩は如來身を知るとは正覺を成ずることを示す菩提の爲めの故に、願つて兜率天に生ずるが故に、所有る佛の應化の故に、自身舍利に住持するが故に、所有る實報の身の故に、所有る光明は衆生を攝伏するが故に、所

【八六】千等とは千世界を小とし、二千を中とし、三千を大千世界とす。此には千を擧げて餘を等取す。

【八七】四身共に自相同相の差別にして假名の分別なり、四身各別の人我無きが故なり。但し佛德は餘人に超絕せるが故に假名とはいはず。

【八八】以下如來身を釋す、次第に經文の菩提身願身等の十身を解釋す。

有る同不同、世間出世間の心にて自在の解脫を得るが故に、所有るの不共ありて能く廣大の利益を作す因たるが故に、所有る如來の無漏界の故に、所有る無障礙の智の故に。是の故に此の智は能く一切の事を作す、彼の事の差別を皆悉く能く知る、經にいへるが如く、是の菩薩は如來身、菩提身を知り、乃至智身を知るとの故に。此の菩薩は智身を知るとは、聞思の智の差別、修智の差別、(八九)果行智の差別、世間出世間智の差別を皆如實に知る。經にいへるが如く、是の菩薩は善く智身を知り、乃至學無學の相を知るとの故に。是の菩薩は法身の平等相を知るとは無量の法門は等一の法身を明すが故に、(九〇)聞くが如く取るが故に、(九一)所化の衆生の根性の相應する時に隨つて說に差別あるが故に、有根無根の差別の相の故に、(九二)第一相を知るの差別を皆悉く能く知る、經にいへるが如く、是の菩薩は法身の平等相を知り、乃至、佛法聖僧の法の差別相を知るとの故に。是の菩薩は虛空身を知るとは無盡の相、徧相、不可見の相、無障礙の相、無爲の相、(九三)能く通じて色を受くる相、(九四)色に因りて彼れ分別するを皆悉く能く知る。經にいへるが如く、是の菩薩は虛空身の無量の相を知る、乃至色身の別異を顯はす相を知るとの故

【八九】果行智とは因果に就て區別す。行は因にして前の三慧に通す、證入を果と爲す。

【九〇】敎法の中にて實敎は理に稱うて說くが故に聞くが如く取るといふ。是れ經の不壞の相を釋す。

【九一】所化の衆生の根性の熟する時に隨つて根の差別に稱うて說く、是れ權敎なり。此の句は經の轉時假名の差別相を釋す。

【九二】第一相とは三寶の殊勝なるをいふ。

【九三】虛空は寬廣にして諸の色法(物質)を受容すとの意。

【九四】色法(物質)の無き所は卽ち虛空なり、色と空とは相對して知るべき相なり。

に。是の如く八地の佛國土を淨むる三の自在行を已に說けり。次に十の自在を得ることを說かん。

經に曰く、是の菩薩は善く是の如きの諸身を起すことを知るときは命の自在を得、不可說不可說の劫に命住持するが故に。心の自在を得、無量阿僧祇の三昧智に入るが故に。物の自在を得、一切世界の無量の莊嚴嚴飾住持して示現するが故に。業の自在を得、現生の如く後時の業報住持して示現するが故に。生の自在を得、一切の世界に生示現するが故に。願の自在を得、心の欲する所に隨ひて佛の國土時に示現して三菩提を成ずるが故に。信解の自在を得、一切世界の中に徧滿示現するが故に。如意の自在を得、一切の佛國土の中に意の如く作變の事を示現するが故に。法の自在を得、無邊無中の法門明かに示現するが故に。智の自在を得、如來力、無畏、不共の法、相好莊嚴、三菩提を示現するが故に。

論に曰く、自在を得とは是の菩薩は是の如く器世間と、衆生世間と、智正覺世間との三種の自在行を修行するが故に、十の自在を得るなり。經にいへるが如く、是の菩薩は善く是の如きの諸身を起すことを知るときは命の自在を得、乃至智の自在を得との故に。此の十の自在は十種の怖畏を對治す、是の如く次第して應に知るべし。何をか是れ十種の怖畏といふ。一には死の怖畏、二には煩惱垢の怖畏、三には貧窮の怖畏、四には惡業の怖畏、五には惡道の怖畏、六には求めて得ざる怖畏、七には法を謗る罪業の怖畏、八には追求の時縛せられて活きざる怖畏、九には云何ん云何んの疑の

怖畏、十には大衆威德の怖畏なり。是の如く八地に十の自在を得る分を已に說けり。次に大勝分を說かん。

經に曰く、是の菩薩は是の菩薩十の自在を得已りて、卽時に名けて不可思議智の者、無量智の者、廣智の者、不可壞智の者と爲す。菩薩は是の如く至り已りて是の如きの智成就し、常に清淨の身業を集起し、常に清淨の口業を集起し、常に清淨の意業を集起す。智慧を首と爲し、智隨順して轉ず、般若波羅蜜增上し、大悲を首と爲し、方便善巧をもつて善能く分別す。自ら願力を起し、善く諸佛の加に加せられ、常に衆生を利益する行を捨てず、徧く無邊の世界の差別の事を知る。佛子よ、略して說かんに、菩薩は此の菩薩の不動地を得て、身口意業の所作は皆能く一切の佛法を集起す。是の菩薩は此の菩薩の不動地を得て、能く淨心力の中に住す、一切の煩惱集を離るるが故に。善く深心力の中に住す、常に道を離れざるが故に。善く大悲力の中に住す、衆生を利益することを捨てざるが故に。善く大慈力の中に住す、一切の世間を救ふが故に。善く陀羅尼力の中に住す、法を忘れざるが故に。善く辯才力の中に住す、智慧善巧を以て一切の佛法を分別するが故に。善く神通力の中に住す、無邊の世界の差別に行くが故に。善く願力の中に住す、一切の菩薩の所行を捨てざるが故に。善く波羅蜜力の中に住す、一切の佛法を修集するが故に。善く如來の加力の中に住す、一切種の一切智智現前するが故に。是の菩薩は是の如きの智力を得て、一切の所作を示す、一切事の中に過咎有ること無きが故なり。

論に曰く、大勝とは三種の大有り、一には智大、二には業大、三には彼の二の住する功德大なり。一云何んが智大なる。不可思議智の者は世間に住せず、涅槃に住せざるが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は是の菩薩の十の自在を得已りて卽時に名けて不可思議智の者と爲すとの故に。此の不可思議に三種有り、應に知るべし。一には(九五)修行盡至の不可思議、二には(九六)所知の不可思議、三には(九七)除障智の不可思議なり。經にいへるが如く、無量智の者との故に、廣智の者との故に、不可壞智の者との故に。是を智大と名く。菩薩は是の如く至り已りて、乃至一切の佛法を集起すとの故に、是の菩薩は是の如く至り已るとは、(九八)上に說けるが如し。是の如く智成就すとは亦(九九)上に說けるが如し。

常に淸淨の三業を集起すとは此は是れ業大なり。彼の淨業に四種の相有り。一には(一〇〇)起と能起と同時なり、經にいへるが如く、智慧を首と爲すとの故に。智隨順して轉ずとの故に。二には智不染の作と、衆生を利益する行とを攝する等なり、經にいへるが如く、般若波羅蜜增上すとの故に、大悲を首と爲し、方便善巧をもつて善能く分別すとの故に。三には因、自行他行の因を攝する等なり、經にいへるが如く、善く願力を起すとの故に、善く諸佛の所加を加す

【九五】修行盡至とは證理の深きを示す。涅槃の無分量を證するが故なり。

【九六】所知とは廣く世境を照すが故なり。

【九七】除障とは煩惱の障を除滅するの義、除障の極は天魔外道も壞すること能はざるが故に、經に不可壞の智といふ。

【九八】前の十種の自在を得るの文を指す。

【九九】前に說ける不思議智を指す。

【一〇〇】三業は起なり、智慧能く彼を起すが故に智を能起となす、三業起り竟つて智と共に相隨ふを同時といふ。

との故に。四には作業の所持、衆生を利益し、佛の國土を淨めて、一切の佛法を成就す、經にいへるが如く、常に衆生を利益する行を捨てずとの故に、徧く無邊の世界の差別の事を知るとの故に、佛子よ、略して說かんに菩薩は此の菩薩の不動地を得て身口意の業の所作は皆能く一切の佛法を集起すとの故なり。是を業大と名く。彼の二の住する功德大とは、善く淨心力に住する等にて示現す、七種の功德に依るが故なり。一には善く道に住する功德、經にいへるが如く、是の菩薩は此の菩薩の不動地を得て善く淨心力の中に住す、一切の煩惱集を離るるが故に。善く深心力の中に住す、常に道を離れざるが故に。善く大悲力の中に住す、衆生を利益することを捨てざるが故に。善く大慈力の中に住す、一切の世間を救ふが故なり。又善く道に住する功德の初の二は、障を遠離するが故に、對治堅固なるが故に、次の二は衆生を捨てざるが故なり。二には不忘の功德、經にいへるが如く、善く陀羅尼力の中に住す、法を忘れざるが故なり。三には口業を成就する功德、經にいへるが如く、善く辯才力の中に住す、智慧善巧をもつて一切の佛法を分別するが故なり。四には心自在成就の功德、經にいへるが如く、善く神通力の中に住す、無邊の世界の差別に行くが故なり。五には願力成就の功德、經にいへるが如く、善く願力の中に住す、一切の菩薩の所行を捨てざるが故なり。六には修行成就の功德、經にいへるが如く、善く波羅蜜力の中に住す、一切の佛法を集むるが故なり。七には智を與ふる功德、經にいへるが如く、善く如來の加力の中に住す、一切種の一切

智智現前するが故なり。是の菩薩は是の如きの智力を得て一切の所作を示すとは憎愛無きことを得て、衆生の有煩惱と無煩惱とを分別せず、平等に作業するが故なり。一切事の中に過咎有ること無しとは、此の七種の功德を得るを以ての故なり。是の如く八地の大勝分を已に說けり。次に釋名分を說かん。

經に曰く、佛子よ、此の菩薩の智地を名けて不動地と爲す、壞すべからざるが故なり。名けて不轉地と爲す、智慧退かざるが故なり。名けて難得地と爲す、一切の世間は知り難きが故なり。名けて王子地と爲す、家の過なきが故なり。名けて生地と爲す、意に隨つて自在なるが故なり。名けて成地と爲す、更に作さざるが故なり。名けて究竟地と爲す、智慧善く分別するが故なり。名けて涅槃地と爲す、善く大願力を起すが故なり。名けて加地と爲す、他は動かすこと能はざるが故なり。名けて無功用地と爲す、善く先の道を起すが故なり。

論に曰く、釋名に二種有り、一には地の釋名、二には智者の釋名なり。地の釋名とは六種の相有り。一には染對治、此の染に二種有り、一には下地の功用の行、小乘の願、諸魔の業なり。二には煩惱習の行なり。此を對治するは經にいへるが如く、佛子よ、此の菩薩の智地を名けて不動地と爲す、壞すべからざるが故に、名けて不轉地と爲す、智慧退かざるが故なり。二には甚深を得るが故に、經にいへるが如く、名けて難得地と爲す、一切世間は知り難きが故なり。三には發行の淸淨、

經にいへるが如く、名けて王子地と爲す、家の過なきが故に。名けて生地と爲す、意に隨つて自在なるが故なり。是の中、發淨とは〔一〇一〕王子の如く一切の所作に過なきが故に。行淨とは生地に住して欲する所の事は自在に成就するが故なり。四には世間出世間の有作の淨勝、經にいへるが如く、名けて成地と爲す。更に作さざるが故に。名けて究竟地と爲す、智慧善く分別するが故なり。是の中、出世間有作の淨勝とは智慧を以て、善く智障淨を分別するが故なり。五には彼の二の無作の淨勝、經にいへるが如く、名けて涅槃地と爲す、善く願力を起すが故なり。無作の淨勝とは大願力を以て一切の衆生を利益することを捨てざるが故に。六には菩薩地の勝、經にいへるが如く、名けて加地と爲す、〔一〇二〕他は動かすこと能はざるが故に。名けて無功用地と爲す、〔一〇三〕善く先の道を起すが故なり。又菩薩地の勝とは六地七地に勝るが故に。六地に勝るとは殊勝の行を發起す、〔六地には〕他事念動ずるが故に。七地は有功用、此の地の中には、善く先の道を起して無功用自然に行ずるが故なり。智者の釋名とは何の義を以ての故に菩薩を名けて不動を得たる菩薩と爲すや。今此の事を說かん、應に知るべし。

經に曰く、佛子よ、菩薩は是の如き智慧を成就すれば名けて佛性に入ることを得たりと爲す、名け

【一〇一】王子は王家に生在して營農等の家業無きが如く、菩薩は佛家に生在して修行功成の過あること無し。

【一〇二】六地には空を觀ず、有を以て他と爲し、其の空觀を動かす、今は然らざるが故に勝れたり。

【一〇三】前七地の中に修する所の諸行を先の道といふ。此の地に至つて報熟現前するが故に善く起すといふ、是れ功用に依りて生起するに非ざるが故に無功用地と名く。

て佛の功德自ら照明なりと爲す、名けて佛の威儀に隨つて行ずと爲す、名けて佛の境界現前すと爲す。日夜常に爲めに善く諸佛の加に加せられ、常に四天王、釋提桓因、梵天王等の奉迎する所と爲り、常に密跡金剛神の侍衞する所と爲り、三昧力を捨てずして常に無量の諸身の差別を現ず。一切の身行の中に勢力成就して、大果報神通を成就し。無邊の三昧の中に於て自在を得、能く無量の記を受け、化すべき世間に隨つて成正覺を示す。是の菩薩は是の如く通達して大乘の衆數に入り、善く大乘の通を思量し。日夜常に智の光明焔を放ちて無障礙の法界道に入り、善く界道の差別を知り、能く一切相の功德を示し、意に隨ひて自在に善く先際と後際とを解し、一切の魔道を廻轉する智に通達して、如來の智慧の境界に入り、能く無邊の世界の中に於て菩薩の道を行ず、不退轉の力の故なり。是の故に菩薩を名けて不動を得たる菩薩と爲す。

論に曰く、彼に復た二種の義有りて名けて不動を得たる菩薩と爲す。一には(一〇四)一向不動、二には(一〇五)一體不動なり。佛性に隨順する因の故に、經にいへるが如く、佛子よ、菩薩は成就して是の如きの智慧を得れば名けて(一〇六)佛性に入ることを得たりと爲す等なり。是の中、佛性とは果滿足して勝る。(一〇七)隨順の因とは三種の相を示現す、一には攝功德、二には行、三には近。經にいへるが如く、名けて佛の功德自ら照明すと爲すとの故に。名けて佛の威儀に隨つ

【一〇四】一向不動とは行修上に順ずるが故に是れ勝進行なり。
【一〇五】一體不動とは諸の菩薩の行と體同一なるが故に、是れ自分行なり。
【一〇六】佛果の法身理性に證入するの義。
【一〇七】佛に隨順する因の義。

て行ずと爲すとの故に、名けて佛の境界現前すと爲すとの故なり。是の中、自ら照明すとは、善く淸淨なるの義の故に、威儀の行とは名けて正行と爲すが故に、現前とは佛の境界に近づくが故なり。是の中、一向不動とは、經にいへるが如く、日夜常に爲めに善く諸佛の加に加せらるるとの故なり。彼れ復た五の功德に依ること應に知るべし。一には供養の功德、經にいへるが如く、常に四天王、釋提桓因、梵天王等の奉迎する所と爲るとの故に。二には護の功德、經にいへるが如く、常に密跡金剛神の侍衞する所と爲るとの故に。三には【一〇八】依止の功德、經にいへるが如く、三昧力を捨てずとの故に。四には國土淸淨の功德、經にいへるが如く、常に無量の諸身の差別を現ずとの故に。五には衆生を敎化する功德なり。復た次に衆生を敎化する功德に五種の示現有り。一には願つて諸有の生を取る、經にいへるが如く、一切の身行に勢力成就すとの故に。二には根心使智力、經にいへるが如く、大果報神通を成就すとの故に、三には無量の法力、法輪を轉ずるが故に、經にいへるが如く、無邊の三昧の中に於て、自在を得るとの故に。四には受力、經にいへるが如く、能く無量の記を受くとの故に。五には說力、經にいへるが如く、化すべき世間に隨つて成正覺を示すとの故に。是の菩薩は是の如く通達すとは一向不動の故なり。是の中、一體不動とは大乘の衆數に入る、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如く通達して大乘の衆數に入るとの故に。大乘の衆數に入るとは破壞せざる

【一〇八】定に依りて德を成ずるが故に三昧を依止の功德と爲す。

義に名く。此に九種有り。一には智の不壞、經にいへるが如く、善く大乘通を思量すとの故に。二には說不壞、經にいへるが如く、日夜常に智の光明焔を放つとの故に。三には解脫不壞、經にいへるが如く、無障礙の法界道に入るとの故に。四には佛國土の淸淨不壞、經にいへるが如く、善く界道の差別を知るとの故に。五には大乘に入る不壞、經にいへるが如く、能く一切の相功德を示すとの故に。六には神通不壞、經にいへるが如く、意に隨つて自在なりとの故に。七には能く義を解釋する不壞、經にいへるが如く、善く先際と後際とを解すとの故に。八には道場に坐する不壞、經にいへるが如く、一切の魔道を廻轉する智に通達すとの故に。九には正覺不壞、經にいへるが如く、如來の智慧の境界に入るとの故なり。能く無邊の世界の中に於て、菩薩の道を行ず、不退轉の力の故にとは、行障礙なく斷絕せざるが故なり。行の障礙なくして斷義せざるを以ての故に名けて不動を得たる菩薩と爲す。

經に曰く、菩薩は菩薩の不動地を得て、常に無量の諸佛を見たてまつることを離れず、善く三昧力を行ずるが故に、及び大願力の故に諸佛を見たてまつる時、供養し恭敬するとを捨てず。是の菩薩は一一の劫の中、一一の世界の中に於て、無量の佛、無量の百佛、無量の千佛、無量の百千佛、無量の百千那由他佛、無量の億佛、無量の百億佛、無量の千億佛、無量の百千億佛、無量の百千萬億那由他佛を見たてまつり、大神通力と大願力とを以ての故に、諸佛を見たてまつる時、上心と深心とを以

て、供養し、恭敬し、尊重し、讃歎し、衣服、飲食、臥具、湯藥一切の供具を悉く以て奉施し、諸の菩薩の上妙の樂具を以て衆僧を供養す。此の善根を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんことを願ふ。諸佛に親近し、諸佛に從つて本世界の差別等の諸の法明を受く。是の菩薩は轉た深く如來の法藏に入りて、世界の差別の事の中を問ふとも能く盡す者なし。是の菩薩は彼の諸の善根は無量劫の中に轉た勝れて明淨となり、無量の百劫、無量の千劫、無量の百千劫、無量の百千那由他劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、無量の百千億劫、無量の百千億那由他劫に、彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となる。佛子よ、譬へば本眞金にて善巧の金師莊嚴具を作り已りて繫けて閻浮提王の若くは頸、若くは項に在らんに、閻浮提の人の餘寶の莊嚴具は能く奪ふ者なきが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の不動地に住すれば、彼の諸の善根は一切の聲聞辟支佛、乃至十地の菩薩の壞すること能はざる所なり。菩薩は是の地の大智の光明を得て、諸の衆生の煩惱の闇障を滅す、善く分別する智門を以ての故なり。佛子よ、譬へば千世界の主の大梵天王は能く一時に於て慈心を流布して千の世界に滿ち、亦能く光を放ちて徧く其の中を照すが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の菩薩の不動地の中に住して、能く身の光を放ちて、十千萬の三千大千世界の微塵數の世界の衆生を照して漸く能く諸の煩惱の火を除滅して清涼なることを得しむ。是の菩薩は十波羅蜜の中にて願波羅蜜增上し、餘の波羅蜜も修習せざるには非ず、力に隨ひ、分に隨ふ。佛子よ、是を菩薩の第八の菩薩不動地を略說すと名く。若

し廣く說かば無量の劫數に於ても盡すこと能はず。菩薩は是の地の中に住して多く大梵天王と作り、千の世界を主り、自在最勝にして、諸の衆生、聲聞、辟支佛、菩薩に波羅蜜の道を與へて窮盡有ること無し。世間の性差別の中を說くも、能く壞する者無し。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず。乃至一切種の一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切の衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念に從ひて、精進の行を發す、精進の力を以ての故に、一念の間に於て、百萬の三千大千世界の微塵數の三昧を得、百萬の三千大千世界の微塵數の諸佛を見たてまつり、能く百萬の三千大千世界の微塵數の佛の神力を知り、能く百萬の三千大千世界の微塵數の世界を動かし、能く百萬の三千大千世界の微塵數の佛世界に入り、能く百萬の三千大千世界の微塵數の佛の世界の衆生を化し、能く壽百萬の三千大千世界の微塵數の劫に住し、能く過去、未來世の各百萬の三千大千世界微塵數の劫の事を知り、能善く百萬の三千大千世界微塵數の法門に入り、能く身を變じて百萬の三千大千世界の微塵數と爲し、一一の身に於て能く百萬の三千大千世界の微塵數の菩薩を示して、以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在なること勝上なり。菩薩の願力は此の數

に過ぎて、種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は乃至無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、諸佛に從ひて本の世界の差別等の諸の法明を受くとは、彼の因相の故なり。閻浮提王の眞金を莊嚴具と作すの譬は淸淨の地を得て身心勝るが故なり。善根の光明轉た更に明淨なることを示現するは、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば千世界の主の大梵天王の如し。乃至淸涼なることを得せしむとの故に。餘は前に說けるが如し。

卷の第十一

善慧地第九

論に曰く、第九地の中に四分の差別あり。一には(一)法師方便成就、二には(二)智成就、三には(三)入行成就、四には(四)說成就なり。第八地の中には但佛國土を淨め、衆生を敎化せり。此の第九地の中には辯才力の故に、衆生を敎化す、一切の相を成就して、能く敎化するが故に、此れ彼に勝るが故なり。云何んが法師方便成就なるや。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は是の如きの無量智と、善く思量する智とを以て、更に轉た勝深なる寂滅解脫を求め、復た轉た如來の究竟智慧を求め、如來の深密の法の中に入り、思惟して不思議大智慧を選擇して、諸の陀羅尼三昧及び智を選擇して淸淨ならしむるが故に、諸の神通の廣大の行を現じ、世界の差別の行に通達し、如來の力、無畏、不共の佛法を修して無障調柔し、如來の法輪を轉ずる莊嚴の事に通達し、大悲の大願力を捨てずして第九の菩薩地に入ることを得。

【一】法師方便成就とは此地に能く辯才說法を起すが故に法師地とも名く。趣地の行立つを方便成と名く。
【二】智成就とは法を知るの智成ずるが故なり。
【三】入行成就とは所化の器を知るなり。
【四】說成就とは器根に應じて正しく法を說くなり。

論に曰く、是の中法師方便成就とは他の利益と自の利益とに依る、(五)一と一と五と三との句に示現す。(六)無色に解脫の想を得る、化す可すべきの衆生に依りて他を利益するが故に、經にいへるは如く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、佛子よ。菩薩は是の如きの無量智と善く思量する智を以て、更に轉た勝深の寂滅解脫を求むとの故に。(七)未だ究竟の佛智を得ざるに依りて、自ら利益す、經にいへるが如く、復た轉た如來の究竟智を求むとの故に。(八)根熟の菩薩に依り、邪念の修行の化すべき衆生に依り、未だ法を知らざる衆生に依りて(九)法輪を轉じて知ることを得せしめ、邪歸依の衆生に依り、生天を信ずる衆生に依り、是の如く次第して五句に、他を利益する行を示す、經にいへるが如く、如來の深密の法の中に入るとの故に。思惟して不思議の大智慧を選擇すとの故に、諸の陀羅尼三昧及び智を選擇して淸淨ならしむとの故に、諸の神通の廣大の行を現ずとの故に、世界の差別行に通達すとの故に、淸淨の國土を示し、生天を信ずる衆生を轉じて佛法に入らしむとの故に。(一〇)(一一)正覺に依り、(一二)轉法輪に依り、(一三)涅槃に依る。此の是の如く次第の三句は自ら利益する行

【五】初の一句は利他、次の一句は自利なるが故に一と一といひ、次の五句は亦利他にして後の三句は自利なるが故に五と三とといふ。

【六】無色界に生じて解脫なりと誤想する衆生を敎化して眞の涅槃に趣向せしむ、是れ初の一句にて示す利他なり。

【七】第二句の自利を釋す。

【八】次の五句は利他を釋す。

【九】經に諸の陀羅尼三昧といふは、說法の所依なるが故なり。

【一〇】次の三句は自利を釋す。

【一一】佛內證の正覺大智等（智德）を得んと欲す。

【一二】佛の外化攝生の法輪の大智（恩德）。

【一三】佛の無住涅槃（斷德）を得て悲願を捨てざらんと欲す。

を示す、經にいへるが如く、如來力。無畏、不共の佛法を修して無障調柔との故に、如來の法輪を轉ずる莊嚴の事に通達すとの故に、大悲の大願力を捨てずして第九の菩薩地に入ることを得との故に、衆生を利益することを捨てずして大涅槃を示現するは大悲の大願力を捨てざるを得るを以ての故なり、應に知るべし。是の如く九地の法師成就分を已に說けり。云何んが智成就なるや。

經に曰く、是の菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して、如實に善、不善、無記の法行、有漏、無漏の法行、世間、出世間の法行、思議、不思議の法行、定、不定の法行、聲聞、辟支佛の法行、菩薩の法行、如來地の法行、有爲の法行を知り、如實に無爲の法行を知る。

論に曰く、是の中、智成就とは、何等の法に依りて法を說くや。應に知るべし、彼の法は淨と染と不二となり、經にいへるが如く、是の菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して、如實に善、不善、無記の法行を知るとの故に。淨法の中に於て、〔一四〕有漏と無漏と有り、經にいへるが如く、有漏、無漏の法行との故に。復無漏の法の中に〔一五〕世間、出世間の法行有り、經にいへるが如く、世間と出世間の行法との故に。復彼の法に思議と不思議と有り、經にいへるが如く、〔一六〕思議、不思議の法行との故に。彼の思議に復〔一七〕定

【一四】見道前の善を有漏と名け、見道以後の善を無漏と名く。

【一五】教と證とに依りて世間と出世間とを分つ。教に依りて解すると、證眞の行となり。

【一六】地前を思議とし、地上を不思議とす。

【一七】有漏の思議法中に定不定を分つ。決定して能く證入するを定といひ、緣に動かされて決定せざるを不定といふ。

と不定とあり、經にいへるが如く、定、不定の法行との故に。彼れ復た三乘の中に於てす、經にいへるが如く、聲聞、辟支佛の法行との故に、菩薩の法行との故に、如來地の法行との故に。彼れ復た三乘の法の中に〔一八〕有爲と無爲との〔一九〕依順の行を示す、經にいへるが如く、有爲の法行〔を知り〕如實に無爲の法行を知るとの故に。是の如く九地の智成就分を已に說けり、云何んが入行成就なるや。

經に曰く、是の菩薩は是の如きの智慧に隨順して、如實に衆生の心行の稠林、煩惱行の稠林、業行の稠林、根行の稠林、信行の稠林、性行の稠林、深心行の稠林、使行の稠林、生行の稠林、習氣行の稠林を知り、如實に三聚の差別行の稠林を知る。

論に曰く、是の中、入行成就とは、〔二〇〕共に依ると〔二一〕煩惱と業と生と〔二二〕共と染と〔二三〕煩惱染淨等に依ると定不定の時に依るとなり、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如きの智慧に隨順して如實に衆生の心行の稠林を知るとの故に、乃至、三聚の差別行の稠林を知るとの故なり。彼れ復た定、不定の時により、〔二四〕根等

【一八】能證の修行を起すを有爲と名け、所證の眞理を無爲と名く。

【一九】三乘は皆理に依りて成ずるが故に依順の行と稱す。

【二〇】共に依るとは第一の衆生の心行なり。是れ善惡染淨の共通の所依なるが故に共に依るといふ。

【二一】煩惱と業とは次の二、生とは第九なり。生は苦果にして、惑業苦の三道は因果義親しきが故に同處に列す。

【二二】次の根、信、性、深心の四は、同じく是れ業なるが故に共といふ。共とは相似の義なり。染とは使行なり。

【二三】煩惱染淨等とは習氣行なり、習氣は別體なく染淨の殘氣なるが故なり。

【二四】根等次第すとは根に依りて、信を起す等次第すとの意

次第し、（二五）根等は信等に相似す、經にいへるが如く、根行の稠林との故に、信行の稠林との故に、性行の稠林との故に、深心行の稠林との故に、使行の稠林との故に、生行の稠林との故に、習氣行の稠林との故に、如實に三聚の差別行の稠林を知るとの故なり。稠林とは衆多の義の故に、難知の義の故なり。行とは（二六）不正信の義の故なり。云何んが心行稠林の差別なる。

經に曰く、是の菩薩は如實に衆生の諸心の種種の相を知る。心の雜相、心の輕轉生不生の相、心の無形の相、心の無邊の一切處の衆多の相、心の清淨相、心の染不染の相、心の縛解の相、心の幻起の相、心の道に隨つて生ずる相、乃至無量百千の種種なる心の差別相を皆如實に知る。

論に曰く、是の中、心行稠林の差別とは心は種種に差別して異るが故なり、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に衆生の心の種種の相を知るとの故に。彼の心の種種の相に八種有り。一には差別の相、（二七）心意識六種に差別するが故に、經にいへるが如く、心の雜相との故に。二には（二八）行相、

なり。

【二五】宿習を根と爲し、根に依りて信を起し、信必ず根と相似するが故なり。是の如く性、深心等、次第に生起し相似するの義を明かす。

【二六】不正信とは理に於て證信なれば能く心想を滅す、心想滅するが故に一切行ぜざるも、證信なければ心等集起するが故に、行とは不正信の義と釋す。

【二七】心とは第八阿頼耶識、意とは第七末那識、識とは前六識なり。心と意と各一識の中に六を具するが故に六種の八識不同なるを差別すといひ、經に雜相といふ。

【二八】行相とは心識作用の轉變の相をいふ。

住異生滅の行の故に、經にいへるが如く、心の輕轉生不生の相との故に。三には（二九）第一義相、彼の心を觀ずるに心を離れて心身不可得なるが故に、經にいへるが如く、心の無形相との故に。四には（三〇）自相、無量の境界に順行して取るが故に、經にいへるか如く、心の無邊の一切處の衆多の相との故に。五には（三一）自性不染の相、經にいへるが如く、心の清淨相との故に。六には（三二）煩惱と同じく、煩惱と同じからざる相、經にいへるが如く、心の染不染の相との故に。七には（三三）使と同じく使と同じからざる相、經にいへるが如く、心の縛解の相との故に。八には因相、諸の菩薩は（三四）願力を以て生じ、餘の衆生は自の業力にて生ずるが故に、經にいへるが如く、心の幻起の相との故に、（三五）心の道に隨ひて生ずる相との故に、乃至無量百千の種種なる心の差別の相を皆如實に知るとの故なり。自性の清淨心を以ての故に、第六と第七とに心の染不染の故に、心の縛解の故にといへる、此の二句は煩惱染を示現し、第八句の心

【二九】第一義相とは心の體性なり。眞性緣に隨つて、此の心を起すが故に、經に無形相といふ。

【三〇】諸法を緣ずる作用を自相といふ。無邊の境に隨つて心識之を緣じて其の相を取るを順行して取るといふ。

【三一】以上の四心は妄心、次の四心は眞心。

【三二】經の染と不染とを釋す。心の外相は煩惱に纏はれたるも、心體は不染にて自性清淨なりとの意にして、在纏の不染心なり。

【三三】使と共同なるは繋縛也、使を離れたるは解脱なり。使は所縛にして所縛の體は眞心なり、眞心の自性は清淨なれば心の自體は使を離る。

【三四】菩薩の願力に依る受生は幻起不實なるも、實に利益の事を爲す、是の故に經に幻起の相といふ。

【三五】衆生は業に隨つて受生するが故に道に隨ふといふ。道とは六趣のこと。

道に隨順するが故に生ずとは染を示現す。云何んが煩惱行の稠林の差別なるや。
經に曰く、是の菩薩は如實に、諸の煩惱深入の相、行無邊の相、共生不離の相、煩惱と使との一義の相、心相應不相應の相、道に隨つて生ずる處に報を得るの相、三界の中の差別の相、愛無明見箭の大過の相、三種の業因の不斷の相を知る。略して說く、乃至、如實に八萬四千の煩惱行の差別相を知る。

論に曰く、煩惱行の稠林の差別とは三種の事を示現す。一には（三六）遠入乃し有頂に至るが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に煩惱深入の相を知るとの故に。二には（三七）難知、無量の善根等修集して行ずるが故に、經にいへるが如く、行無邊の相との故に。三には染と業と煩惱と生との染の故に、是の中、所縛に隨ふと、何を以つて縛すと、及び所縛の事となり。此の事は煩惱染の染事を說くことを示現す、經にいへるが如く、共生不離の相との故に、煩惱と使とは一義の相との故に、心相應不相應の相との故に。是の中、所縛に隨ふとは（三八）迭ひに共に事を同うし、（三九）迭ひに共に相依り、共生して離れざるが故なり。何を以て縛すとは、謂はく使なり。使有るを以ての故に、解脫を得ず、煩惱と使と

【三六】遠入とは經の深入と同義にして、遠く有頂に至る迄の煩惱なり。有頂とは小乘は非想非非想處を頂と爲し、大乘は金剛定を頂と爲す。

【三七】無量の善根等を修習する時煩惱を引起し、隨行して惑と染と倶なるが故に知り難しといふ。

【三八】此句は共生を釋す。心王と惑と互に相ひ扶起するをいふ。

【三九】此句は不離を釋す。心と惑とは起り已つて互に相依り

は(四〇)一義なるが故に。所縛の事とは謂はく心なり。(四一)心の相應と不相應との故に。(四二)不相應とは解脱を得べきを示すが故なり。(四三)身事の(四四)道と界とに生ずる因の故に、生は煩惱染の示現なり、經にいへるが如く、道に隨つて生ずる處に報を得るの相との故に。三界の中の差別の相との故に。(四五)三分の中に於て業因は解脱を障ふるが故に、世間の身口意業に隨順するが故に、起因を斷ぜざるが故に、業煩惱妄想染示現す、經にいへるが如く、愛と無明と見との箭の大過の相との故に。三種の業の根本斷ぜざる相の故に、乃至、如實に八萬四千の煩惱行の差別相を知るとの故に。三分とは一には愛行欲の衆生、二には(四六)無戒の衆生、三には外道の衆生なり。云何んが業行稠林の差別なるや。

經に曰く、是の菩薩は如實に諸業の善、不善、無記の相、有作、未作の相、心の共生して離れざる相、因の自性は盡なるも果を集めて失はざる次第の相、有報、無報の相、黑業、白業、黑白業、不黑不白業、正受業の差別の相、業因無量の相、聖と世間との差別の相、現報、生報、後報の相、乘非乘、

て離れずとの意。

【四〇】一義とは煩惱と使とは同一惑の義なればなり。

【四一】心とは所縛の體を擧ぐ。相應とは惑と相應する意にて所縛の事なり。

【四二】在纏の心性は本性淨なるが故に、此の纏縛を解脱せしむることを得となり。

【四三】次の二句は受生に約して煩惱を明かす。

【四四】道とは六道、界とは三界なり。此煩惱は三界六道に生身する因となるが故に。

【四五】次の三句は染業に約して煩惱を明かす。三分とは愛と癡と見となり。愛は欲求、癡は有求、見は邪梵行求（外道）なれば解脱を障ふといふ。

【四六】現在の少樂の爲に衆の惡行を爲す破戒の衆生は愚癡の甚しきものなれば、無明を釋して無戒の衆生に配す。

定不定の相、乃至如實に八萬四千の諸業の差別相を知る。

論に曰く、業行稠林の差別とは（四七）道因の差別を示現す、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸業の（四八）善不善、無記の相を知るとの故なり。（四九）自性の差別、經にいへるが如く、有作、未作の相との故に。（五〇）方便の差別、經にいへるが如く、心共生して離れざるの相との故なり。（五一）盡集果の差別、經にいへるが如く、因の自性は盡なるも果を集めて失はざる（五二）次第の相との故なり。已受の果と未受の果との差別、經にいへるが如く、（五三）有報、無報の相との故なり。（五四）對の差別、經にいへるが如く、（五五）黒業、白業、（五六）黒白業、（五七）不黒不白業、正受業の差別相との故なり。（五八）因緣

【四七】業は六道の因たることを明かす。

【四八】善に三品あり、上品は天界に生ずる因、中品は人界に生ずる因、下品は修羅の因なり。不善の三品は三惡趣に生ずる因なり　無記の業は因とならざるも、相對の故に之を列擧す。

【四九】自性とは業の自性は意思也、意志の作業に現はるるまでには審慮、決定、發動の三種あり。前の二は意内に在りて未だ身語の上に顯はれざる籌量時なれば未作に屬す。發動思は作業時なれば正しく身語に在りて動作を起すが故に有作と名く。此に善惡の業を成す。

【五〇】方便の差別とは、業思と同時に起る意識とは共生して其善惡に隨ひ、生じ已つて本識に熏習して種子を成す、熏じたる種子は能熏の識と相似るが故に別に果を生ぜず、業行は常に心識に依りて起るが故に離れずといふ。心識は業を起す方便なれば之を方便の差別と名く。

【五一】盡集果の差別とは無始の業因は有爲なるが故に念念に滅壞するを盡といひ、然かも果に至るまで其の功能を失はざるが故に集果といふ。

【五二】前念滅するも、後念續いて存するが故に、次第の相といふ。

【五三】過去の生報の業を現在に已に受くるを有報と名け、後報の業の未だ受けざるを無報と名く、報全く無なりといふにあらず。

【五四】四業相對して差別を明かすが故に對の差別といふ。

の差別、經にいへるが如く、業因無量の相との故なり。(五九)未集と已集との差別、經にいへるが如く、聖と世間との差別相との故なり。定不定報の差別、經にいへるが如く、(六〇)現報生報、後報の相との故に、(六一)乘非乘の定不定の相との故に、乃至如實に八萬四千の諸業の差別相を知るとの故なり。是の中、自性の差別に二種の業有り、一には籌量の時、二には作業の時なり。方便の差別とは心共生して心に熏じ、別に果を生ぜざるが故なり。盡集果の差別とは、無始の時より業は自然に念念に滅壞するも集めて失はざるが故に。有爲の作業は因盡きて集むるが故なり。已受の果と未受の果の差別とは、生報と後報とに受と不受と有ると應に知るべし。對の差別とは黑業は白業に對し、白業は黑業に對し、不黑不白業は二業に對し、二業は不黑不白業に對す、業集成就の差別は應に知るべし。定不定の差別とは三種の時に定と不定とあるが故に、三種の乘に定と不定とあるが故なり。非乘とは世間の定不定なり、應に知るべし。云何んが根行稠林の差別なるや。

【五五】諸の不善業は染汙性なるが故に一向に黑業と名け、色界の善業は想を雜へざるが故に一向に白業と名く。
【五六】欲界の善業は惡を雜ふるが故に黑白業といふ。
【五七】諸の無漏の業を不黑不白業といふ。
【五八】多くの因緣に隨つて皆能く業を起すが故なり。
【五九】出世の聖業を未集といひ世間の業を已集といふ。
【六〇】現在に現に報を受くるを現報といひ、次の來生に受くるを生報といひ、第二生已後に受くるを後報といふ。
【六一】乘とは三乘、非乘とは世間なり。三乘の中の定不定は退と不退となり、世間の中の定不定とは度し難きものと度し易き者となり。

經に曰く、是の菩薩は如實に諸根の煗中上の差別相、先際と後際との別異、不別異の相、上中下の相、煩惱共生して離れざるの相、乘と非乘との定、不定の相、淳熟せる定相、隨根網、輕轉壞、取相の相、根增上して壞せざる相、轉不轉の根の差別相、深入共生して種種なる差別の相、略して說く、乃至如實に八萬四千の諸根の差別相を知る。是の菩薩は如實に衆生の信の煗中利の相を知る、略して說く、乃至如實に八萬四千の信の差別の相を知る。是の菩薩は如實に諸性の煗中上の相を知る、略して說く乃至如實に八萬四千の諸性の差別の相を知る。是の菩薩は如實に心の煗中上の相を知る、略して說く、乃至如實に八萬四千の心の差別の相を知る。

論に曰く、根行稠林の差別に九種有り。一には〔六二〕說器の差別、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸根の〔六三〕煗中上の差別相を知るとの故に。二には〔六四〕根轉の差別、經にいへるが如く、先際と後際との別異、不別異の相との故に。三には性の差別、經にいへるが如く。上中下の相との故に。四には煩惱染の差別、經にいへるが如く、煩惱共生して離れざる相との故に。五には定不定の差別。經にいへるが如く、乘と非乘との定不定の相との故に。淳熟せる定相との故に。六には順行の差別、經にいへるが如く、隨根網、輕轉壞、取相の相との故に。七には聲聞淨の差別、

【六二】說法の對機たる器根の差別なり。

【六三】法を聞いて速かに受解するを利根(上)と爲し、遲受なるを鈍根(煗)と爲し、遲速の中容を中根と爲す。又法の淺深・廣狹に依りて分つ。

【六四】根轉とは上中下の根器は過現未三際の中に於て、互に相望むるに轉變あるをいふ、次に論釋あり。

經にいへるが如く、根增上して壞せざる相との故に。八には菩薩淨の差別、經にいへるが如く、轉不轉の根の差別相との故に。九には一切の根攝を示す差別なり、經にいへるが如く、深入共生して種種なる差別の相との故に。略して說く、乃至如實に八萬四千の諸根の差別相を知るとの故に。是の中、根轉の差別とは（六五）前後の根にて前根は下と增と平との故に。性の差別とは（六六）三乘の中に於て、性差別するが故なり。煩惱染の差別とは（六七）喜樂等の諸根は煩惱習使に隨つて染むが故に。定不定の差別とは三乘の中に於て、又世間の中に於て定と不定と有り。（六八）熟と不熟と有るが故なり。是の中、（六九）小乘の不定根の衆生は菩薩轉じて大乘に向はしむるが故に、定根の者は菩薩度して一一の乘の中に解脫せしめ、（七〇）報定る者は捨つ。順行の差別とは三種の順行有り、一には

【六五】前後の根とは過去と未來となり。經文の前際と後際とを釋す。次下は別異と不別異とを釋す。後轉を中上と爲せば前の根は下なり。前は能生にして後は所生なり。所生若し增せば前の根は下也、所生若し下なれば前の根は增す、是れ根轉の別異なり。所生と能生と相似たれば、前後平齊にして差別なし。是れ不別異なり。

【六六】三乘の性差別とは上は大乘、中は緣覺乘、下は小乘なり。

【六七】喜樂等とは憂喜苦樂捨の五受なり。喜樂は貪を生じ、憂苦は瞋を生じ、捨根は癡を生ず。斯の如く五受根は煩惱と伴ひ勝用を起すが故に染むといひ、經には煩惱と共生して相離れずと說けり。

【六八】前段の定不定は業に依つて分つも、今は機根に依つて分つが故に、熟不熟といふ。是れ大乘に就て定不定を立つるなり。

【六九】小乘に就て云へば根の熟せる者は不定、轉じて大乘に向はしむる故なり。不熟の者は各自乘に隨つて解脫するが故に定といふ。

【七〇】次は世間の非乘に就て云へば熟者は不定、化して佛道に入らしむべく、不熟の者は果報已に定りて向上すること能はざるが故に、暫く之れを捨てて化益を施さずとの意なり。

身に依る順行、迭ひに共に相縛して（七一）六入展轉するが故に、二には生滅の順行。（七二）輕壞の故に、三には觀行、（七三）取相の故に。聲聞淨の差別とは（七四）行增上して障滅能く成ずる義の故に。菩薩淨の差別とは（七五）轉不轉地の差別の故に。一切の根攝の差別とは（七六）始行と方便と報熟とに根差別あるが故に。信と性と心の煩中上等の無量の差相別を皆如實に知る、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に衆生の信の煩中上の相を知る、乃至如實に八萬四千の心の差別相を知るとの故に。是の如く性入應に知るべし。云何んが使行稠林の差別なる。

經に曰く、是の菩薩は如實に諸使の深と共生し、心と共生する相、心の相應と不相應と離れざるの相、遠入の相、無始より來かた恐怖せざるの相、一切の禪定、解脫三昧、三摩跋提、神通正修と相違する相、堅く三界繫に繫縛せらるる相、無始より來かた心相續して集むる相、諸入の門を開いて集むる相、對治の實を得る相、地入の隨順と不隨順との相、不異の聖道にて滅動する相を知る。略して說く、乃至如實に八萬四千の種種の使の差別相を知る。

り。

【七一】展轉して互に相縛すること、魚鳥の網せらるる如く解脫を得ざるが故に、經に隨根網といふ。

【七二】根と心識と相隨ひて染汙す、故に生滅に順ずといふ。其の體有爲なれば生住久しからず、故に輕といふ、異滅し易きが故に壞といふ。

【七三】覺觀の心は六境に行ずるが故に取相といふ。

【七四】凡夫に比して斷障の行增勝なるが故に行增上といふ。

【七五】地前を轉とし地上を不轉と爲す。或は前七地を轉とし八地已上を不轉とす。

【七六】初行を始行とし、正しく修するを方便とし、終成を報熟と爲す。此の三時に約して一切の根の差別を辨ず。

論に曰く、是の中、使とは隨逐して縛する義の故なり。此の使行稠林の差別とは何の處に隨逐し、何の隨逐を以てするや。此の事の差別を示現す。何の處に隨逐すとは（七七）報と（七八）非報との心なり、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸使の深［心］と共生し、心と共生する相を知るとの故に、（七九）心は現事を離れざるが故なり。（八〇）欲色無色の（八一）上中下の差別、經にいへるが如く、心の（八二）相應と不相應と離れざるの相との故に。（八三）隨逐して乃し有頂に至る、經にいへるが如く、遠入の相との故なり。（八四）無邊の世界に唯智のみ［使を］怖畏すると怨賊の如くす、未だ嘗て聞思修の智有らず、是の故に［使］滅せず［衆生を惱ます］、經にいへるが如く、無始より來かた恐怖せざるの相との故に。（八五）世間の禪定等は心の隨順行を滅すること能はず、經にいへるが如く、一切の禪定、解脫、三昧、三摩跋提、神通の正修と相違する相との故なり。何の隨逐を以てすとは六種の隨逐有り。六種の隨逐とは六句に說く、一には有不斷の隨逐、（八六）有斷せざるを以

【七七】報心とは有情の主體たる異熟の阿賴耶識にして、微細難知の識なるが故に、深心といふ。

【七八】非報心。轉識分別事識をいふ。是れ第八阿賴耶識より生じたるものにて報身の體に非ざるが故に非報心といふ。

【七九】前七識は皆第八識に依りて緣に托して現起するが故に現事を離れずといふ。

【八〇】前は心に約して處を明かし、次は三界の果に約して處を明かす。

【八一】欲界は下、色界は中、無色界は上なり。

【八二】當界に心を起すを相應といひ、異界と相望めては不相應といふ。

【八三】此句は地位に約して處を明かす。有頂の義は前に釋せり。

【八四】此句は時に約して處を明かす。

【八五】此句は行に約して處を明かす。

【八六】三有の相似相續を斷ぜざるは此使ありて繫縛を爲すが

て相似するは使縛をなすが故なり、經にいへるが如く、堅く三界繋に繋縛せらるる相との故に。二には遠時に隨逐するが故なり、經にいへるが如く、無始より來た心相續して集むる相との故に。三には一身の生に隨逐するが故なり、眼等の(八七)諸入の門に六種の(八八)生集識(八九)同生して隨逐するが故に、及び(九〇)阿梨耶に熏ずるが故に隨逐す、經にいへるが如く、諸入の門を開いて集むる相との故に。四には不實の隨逐、對治の實義の故なり、經にいへるが如く、對治の實相を得との故に。五には微細の隨逐、(九一)九地の中の六入處に於て、煩惱は身に隨逐するが故なり、經にいへるが如く、地入の隨順と(九二)不隨順の相との故に。六には苦の隨逐を離る、出世間の行なり、餘行は離るると能はざるが故なり、經にいへるが如く、(九三)不異の聖道にて滅動する相との故に。略して說く、乃至如實に八萬四千の種種の使の差別相を知るとの故に。云何んが生行稠林の差別なる。

經に曰く、是の菩薩は如實に諸生の差別相を知る。業に隨つて生ずる相、地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、人天の差別の相、有色、無色の生の差別相、有想、無想の生の差別相、業は是れ田、愛は是れ水、

故なり。

【八七】眼耳鼻舌身意の六根なり。

【八八】生集識とは六根に依りて生ずる所の六識なり。

【八九】使は根、識と倶生して隨逐すること、是れ現行なり。

【九〇】阿梨耶は第八識にして此に熏習したる種子も亦隨逐す。種子と現行と相資けて煩惱を益益熾ならしむ。

【九一】九地とは三界九地（欲界と色界の四禪と無色界の四天）なり。或は十地の中の前九地なりと。

【九二】不隨順とは微細にして見る可らざるが故なり。

【九三】晉經には無聖道開法門相といひ、唐經には唯以聖道拔出相といふ。

無明は是れ黑闇、識は是れ種子、後身は是れ芽を生ずるの相、名色共生して離れざるの相、有癡、求愛相續の相、欲愛欲生樂衆生相續無際の相、三界の相に貪著して出づるの相を皆如實に知る。

論に曰く、生行稠林の差別に八種あり。一には身の種種、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸生の差別の相を知るとの故に。二には業の種種、經にいへるが如く、業に隨つて生ずる相との故に。三には住處の種種、經にいへるが如く、地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、人天の差別相との故に。四には(九四)色と想との上下の種種、經にいへるが如く、有色、無色の生の差別相との故に。有想、無想の生の差別相との故に。五には(九五)外色と同じき因の種種。經にいへるが如く、業は是れ田、愛は是れ水、無明は是れ黑闇、識は是れ種子、後身は是れ芽を生ずるの相との故に。六には自相の種種、經にいへるが如く、(九六)名色共生して離れざる相との故に。七には(九七)本となりて生に順ふ因の種種、經にいへるが如く、有癡、求愛の相續の相との故に。八には(九八)苦諦を集むる種種の差別を示現す。經にいへるが如く、欲愛欲生樂衆生相續無際の相との故

【九四】色と想との上下とは色界を下とし無色界を上とす。大乘敎にては無色界にも微細の色ありとなすが故也。想の上下とは有想天を上とす、無想天を下とし、無想天にも細想あるが故に想の中に攝す。

【九五】外色云云とは受生の因緣は心外の諸法の生ずると同類なりとの義、草木の地等に依りて生ずるが如くなるが故なり。

【九六】名色は本識と共に生じて相離れずとの意。

【九七】現在の生は癡愛を本因として生じ、今生の上に還つて癡愛を起すが故に生に順ふといふ。

【九八】現生に能く未來の苦を集む、三求の衆生は苦を集むること同じからざるが故に、種種の差別といふ。

に。三界の想に貪著して出るの相を皆如實に知るとの故に。是の中、(九九)欲愛とは樂貪は取と共にして處處に求むるが故に、(一〇〇)欲生とは復た樂有の衆生有り自身と他身とを愛し、心相に著して上下界に往來し、取著するが故に。(一〇一)小大の無量と無想との相に(一〇二)有輪を出るも、展轉して苦諦の差別を示現す。云何んが習氣行の稠林の差別なる。

經に曰く。是の菩薩は如實に習氣の行と不行との差別の相を知る。道に隨つて生ずる處に熏じて習氣有り、衆生の行と共にするに隨つて行に習氣有り、業煩惱に隨つて習氣有り、善、不善、無記の法に隨つて習氣有り、後有に習氣有り、次第に隨逐して習氣有り、深く入りて煩惱を斷せず牽れて習氣有り、有實と不實とに習氣有り、聲聞、辟支佛、菩薩、如來を見聞し、親近して熏じて習氣有るを皆如實に知る。

論に曰く。(一〇三)習氣行の稠林の差別に十種あり。一には(一〇四)果と與に現在すると現在せざるとの差別、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に習氣の行と不行との相を知るとの故に。

【九九】是れ欲求の衆生は貪と取とを以て處處に追求するが故なり。

【一〇〇】是れ有求の衆生なり。自界を愛するは自身なり。他界を愛するは他身なり。

【一〇一】次は梵行求の衆生なり。小大といふは小は欲界、大は色界、無量とは空識の二の無色界なり。無想は別に之を擧ぐ。外道は是等を計して涅槃と爲す。

【一〇二】有輪とは生死相續なり。外道は三界の輪廻を知らざるが故に無想天等に生じて輪廻を出でたりと思ふも、實には三界の輪廻は展轉相續す。

【一〇三】習氣とは熏習に依りて生じたる殘氣なり。

【一〇四】過去に作せし善惡業の因は彼の習氣と現在の果とは或は同じく現起し或は同じく起らず。是れ經に行と不行といふを釋す。人嘗て布施を行じたるを以て今人身を得るも亦當に施を好むが如き是れ因習

二には（一〇五）道熏の差別、經にいへるが如く、〔六〕道に隨つて生ずる處に熏じて習氣ありとの故に。三には（一〇六）衆生に親近して熏ずる差別、經にいへるが如く、衆生の行と共にするに隨つて、行に習氣ありとの故に。四には（一〇七）功業煩惱の熏ずる差別、經にいへるが如く、業煩惱に隨つて、習氣ありとの故に。五には（一〇八）善業等の熏の差別、經にいへるが如く、善、不善、無記の法に隨つて、習氣ありとの故に。六には（一〇九）中陰に熏ずる差別、經にいへるが如く、後有に習氣ありとの故に。七には（一一〇）果と與に次第して熏ずる差別、經にいへるが如く、次第に隨逐して、習氣ありとの故に。八には（一一一）離世間の禪の因の熏ずる差別、遠入熏じて煩惱を斷ぜず、煩惱に牽

氣なり。

【一〇五】**道熏の差別**とは六趣の熏習の差別にして、前世に同じく畜生たりしものが業盡きて散じ、今人中に生ぜんに各相見て瞋想を結ぶが如きを道熏といふ、是れ果習氣なり。

【一〇六】惡を遠け善に近くは、與に處る所を愼む。善人に親近して善となり、惡人と交れば惡となるが如きなり、是れ緣習氣なり。

【一〇七】所作の事業に隨つて熏習あり、獵は殺生を意に留めざる如きなり。又所起の煩惱に隨つて習氣あり、屢瞋恚を起せば遂には串習を成すが如し嗜酒喫煙の如き亦然り。

【一〇八】善惡無記の因業の熏ずる習氣にして、三性の因業を來果を望むるに、因業に應じて習氣あり。

【一〇九】中陰（現世に死して未だ來生を得ざる中間）を現在に望めて習氣を說く。若し人現在に好んで梵行を修すれば、中陰に至るも亦欲染なきが如し。

【一一〇】一一の惡習に隨ひ、諸趣の中に次第に熏じて順次に其の習氣を受く。例せば因中に在つて初は多く善を作し、後には多く惡をも兼れ行ぜば、後果を受くる時、初は樂多く後には苦有りと云ふが如く、果を受くるの時、因の次第に依る、是れ現在を當有に望めて習氣を說くなり。

【一一一】**離世間禪**とは無漏定なり。無漏定を修するに彼の因未だ煩惱を斷ぜざるに由り、無漏を修すると雖も、亦煩惱に牽かれ、上界に生じて無漏に至るも猶彼の習氣あり。故に論に遠入といひ、經に深入と云ふ。

かるるが故に、經にいへるが如く、深く入りて煩惱を斷せず、牽かれて習氣ありとの故に。九には（二二）同法と異外道との行と、解脱の熏ずる差別、經にいへるが如く、有實と不實とに習氣ありとの故に。十には（二三）乘熏の差別を示現す、經にいへるが如く、聲聞、辟支佛、菩薩、如來を見聞し、親近して熏じて習氣あるを皆如實に知るとの故に。云何んが三聚の行稠林の差別なる。

經に曰く、是の菩薩は如實に衆生の三聚、正定の相、邪定の相、此の二を離れたる不定の相を知り、正見は正定の相、邪見は邪定の相、此の二を離れたるは不定の相。五逆は邪定の相、五根は正定の相、此の二を離れたるは不定の相、八邪は邪定の相、正位は正定の相、更に不作の故に、此の二を離れたるは不定の相、妬悋惡行を轉ぜざるは邪定の相、無上の聖道を修行するは正定の相、此の二を離れたるは不定の相なるを皆如實に知る。佛子よ、菩薩は是の如きの智に隨順するを名けて菩薩の善慧地に安住すと爲す。

論に曰く、衆生の三聚の行稠林の差別に五種あり。一には（二四）有涅槃

【二二】此句は實非實即ち正邪相對し、大小相對して習氣を明す。同法とは實を釋す、三乘は同じく佛法なるが故に同法といふ。異道とは非實を釋す。諸の異端外道也。行とは上の二の因・解脱とは其果也。曾て外道を修せし者は今佛道に入るも外道の餘習あり。又曾て二乘を修せし者は今大乘を學ぶと雖先づ小乘の餘習を行ず、喩へば香箱は香を取り去るも習氣猶存するが如し。

【二三】此句は唯正道に就き見聞に約して習氣を明かす。文解し易し。

【二四】初に種姓に約して三聚を分つ。涅槃に到ることを得(有涅槃)るは正定、涅槃に到る能はざる者（無涅槃）は邪定なり。

の法と、無涅槃の法とは（二二五）三乘の中にて一向に定まる差別、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に衆生の三聚、正定の相、邪定の相、此の二を離れたる不定の相を知るとの故に。二には（二二六）善行と惡行との因の差別、經にいへるが如く、正見は正定の相、邪見は邪定の相、此の二を離れたるは不定の相との故に。三には（二二七）惡道と善道との因の差別、經にいへるが如く、（二二八）五逆は邪定の相、（二二九）五根は正定の相、此の二を離れたるは不定の相との故に。四には（二三〇）外道と聲聞との因の差別、經にいへるが如く、（二三一）八邪は邪定の相、（二三二）正位は正定の相、更に不作の故に、此の二を離れたるは不定の相との故に。五には（二三三）菩薩の差別を示現す、經にいへるが如く、妬悋惡行を轉せざるは邪定の相、無上の聖道を修行するは正定の相、此の二を離れたるは不定の相なるを皆如實に知るとの故に。化すべき衆生を捨つるを妬と名く、他に財を施すことを喜ばざるを悋過と名づく、能く他の苦を生ずるは惡行の轉ぜざるなり、菩薩の

【二二五】正定の中にて三乘は各自乘に於て決定し他乘に入らざるが故に一向に定るといふ。論には不定を釋せず。經文に依りて知り易きが故なり。

【二二六】二に解惑に約して三聚を分つ。

【二二七】三に行業に約して三聚を分つ。五逆罪の行業は惡道を招く故に邪定なり。五根は必す善道を招くが故に正定也。

【二二八】五逆とは或は五無間業ともいひ、五種の暴惡なる罪なり。五種とは父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、和合僧を破り、佛身血を出す。

【二二九】五根とは信、精進、念、定、慧なり。

【二三〇】四に邪正位に約して分つ。

【二三一】八邪とは八正道の反對にて邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪命、邪定、邪精進、邪念の八なり。

【二三二】正性離生の聖者の位を正位と名く。

【二三三】五に直に大乘の菩薩の得失に約して三聚を分つ。

(二四)波羅蜜と相違するは邪定の菩薩なり。是を法師方便成就、智成就、入行成就と名く。三種の事成就して此の地の中に善く住す。經にいへるが如く、佛子よ、菩薩は是の如きの智に隨順するを名けて菩薩の善慧地に安住すと爲すとの故に。云何んが說成就なる。衆生に解脫の方便を與ふるが故なり。

經に曰く、是の菩薩は此の菩薩の善慧地に住し已りて、如實に衆生の是の如きの諸行の差別相を知り、其の解脫するに隨つて因緣を與ふ。是の菩薩は如實に衆生を化する法を知り、如實に衆生を度する法を知り、聲聞乘の法を說き、辟支佛乘の法を說き、菩薩乘の法を說き、如實に如來地の法を說くことを知る。是の菩薩は是の如く知り已つて如實に衆生の爲めに法を說きて解脫を得しめ、心の差別に隨ひ、使の差別に隨ひ、根の差別に隨ひ、信の差別に隨ひ、境界の差別に隨ひ、種種の行と習氣とに、一切の境界智に隨順し、性行稠林に隨順し、生と煩惱と業と習氣と轉とに隨ひ、聚の差別に隨ひ、乘信に隨ひて解脫を得しめ而も爲めに法を說く。

論に曰く、說成就とは其の解脫するに隨ひて因緣を與ふ、經にいへるが如く、是の菩薩は此の菩薩の善慧地に住し已りて、如實に衆生の是の如きの諸行の差別相を知り、其の(二五)解脫するに隨ひて因緣を與ふとの故に。彼の說成就に復た三種の相を示現す。一には智成就、二には口業

【二四】妬は精進、禪定、智慧の三を蔽ひ、悋は布施を障へ、惡行は持戒、忍辱の二行を障ふ。此の故に六度に相違すといふ。

【二五】衆生の器根に隨つて法を

成就、三には法師成就なり。智成就とは（二二六）所知に隨ひ、（二二七）所依に隨ふ、此の事の說は應に知るべし。何をか所知に隨うて說くといふ。（二二八）解脫の器熟することを得るが故に、（二二九）解脫の體正しく度するが故に、（二三〇）解脫の差別は三乘の差別を以てするが故に、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に衆生を化する法を知り、乃至如實に如來地の法を說くことを知るとの故に。何をか所依に隨ひて說くといふ。（二三一）所說の法は器に對するが故に、（二三二）應に度すべきものに隨つて、對治の法を授くるが故に。是の義は二句に說く。所說の法器成りて（二三三）根に隨ひ信に隨ひて爲めに法を說く。此の義は二句に說く、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如く知り已つて、如實に衆生の爲めに法を說きて解脫を得しむ、心の差別に隨ひ、使の差別に隨ひ、根の差別に隨ひ、信の差別に隨ふとの故に。（二三四）譬喩にて解する器に隨ふ。經にいへるが如く、境界の差別と種種の行と、習氣とに隨ふとの故に。（二三五）種種の異行の器に隨ふ、經にいへるが如く、一切の境界智

說き解脫を得しむることを明かす。

【二二六】所知に隨ふとは所說の法を明かす。

【二二七】所依に隨ふとは所化の器を明かす。

【二二八】經に衆生を化する法といふを釋す。是に由りて諸の衆生をして解脫の器を熟せしむ。

【二二九】經に衆生を度する法といふを釋す。是に由りて正しく解脫の果を得しむ。前句は敎道にして此句は證道なり。

【二三〇】所得の解脫の果は三乘を出でざるが故なり。

【二三一】經の心の差別に隨ふといふを釋す。

【二三二】經の使の差別に隨ふといふを釋す。

【二三三】上の二句にて化法の器成熟し、次に度法の器を明かす。

【二三四】譬喩とは前に業を田に喩へ、愛を水に喩へ、種子芽を生ずと說くが如きなり。

【二三五】前に譬喩にて解せしに依り、次には解に由りて種種の異行を起さしむ。

に隨順すとの故に。乃至（二三六）成就することを得る器とは、經にいへるが如く、性行稠林に隨順すと
の故に。（二三七）辭辯の器に隨ふとは、彼の生と煩惱と業との（二三八）熏と（二三九）同行との故に、經にいへるが
如く、生と煩惱と業と、習氣と轉とに隨ふとの故に。定不定の根轉の器
とは、經にいへるが如く聚の差別に隨ふとの故に。乘の因に隨ひ能く乘
じて出づる器とは、經にいへるが如く、乘信に隨つて解脫を得しめ、而
も爲めに法を說くとの故に。云何んが智業成就なる。

經に曰く、是の菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して、略して說くに、**大法師**と作り、大法師の深妙の義の中に住在して、諸佛の法藏を守護す。

論に曰く、是の中、（二四〇）說く者と（二四一）持する者とを二句に示現す。大法師の深妙の義の中に住在すとは二十種の能く法師と作るの事あり、云何んが能く法師と作るの事なる。一には時、二には正意、三には頓、四には相續、五には漸、六には次、七には句義漸次、八には示、九には喜、十には勸、十一には具德、十二には不毀、十三には不亂、十四には如法、十五には隨衆、十六には慈心、十七には安隱心、十八には憐愍心、十九には利養名聞に著せざること、二十には自らを讚め、他を毀らざることとなり。是の中、時とは八難なきが故に、偈に說けるが

【二三六】法器を成就するの意にて行に依りて德を成ずる器を明かす。
【二三七】生と業と煩惱と久しく串習して捨て難きが故に、勝妙の辭辯を以て、敎化して正しく之を離れしむるが故に、辭辯の器といふ。
【二三八】熏とは習氣なり。
【二三九】同行とは轉を釋す。同行の巧辯を作して能く化するを以てなり。
【二四〇】說とは口業、深入の義を明かす。
【二四一】持とは智[illegible]、守護の法を顯はす。

如し。

(二四二)王の憂惱を懷きて、病み恚り諸欲に著し、嶮處に侍衞のもの無く、讒佞ありて忠臣なきが如く、

是の如く八難ある時は、智臣は應に語るべからず、心の王も亦是の如く、非時には應に說くべからず。

正意とは、正しき威儀に住し、不正に住するに非ず。此の義云何ん、自ら立ち他は坐しては應に爲めに法を說くべからず、是の如き等は戒經の中に廣く說けるが如し。何を以ての故に、諸佛菩薩は法を敬重するが故に、法を敬ふを以ての故に。他をして尊重の心を生ぜしめ、法を聞くに恭敬して心を攝して聽くが故なり。頓とは是れ菩薩の正意、一切衆の爲めに。一切の法を說きて慳法の垢を離るるが故なり。相續とは說に休息なく諸法の中の嫉妬の意を捨つるが故なり。漸とは字句の次第の如く說くが故なり。次とは字句の次第の如く、義も亦是の如く說くが故なり。句義漸次とは(二四三)義を同うする法を說

【二四二】前一偈半は譬喩、後の半偈は法喩合也。王を衆生の心に喩ふ。八難とは一に憂惱あれば他の言說は心に入らず、二に病苦、三に瞋恚、四に貪欲あれば法を聞くも心に入らず、五に嶮處とは佛法に遇ふを能はざる八難處をいひ、六に善法なければ侍衞する者なく、七に惡友讒佞し、八に善友忠臣なし。此の八は皆法の難なり。此の時に法を說くも其の益なければ說法せず。故に非時には說かずといふ。

【二四三】前の敎と義との中に於て同義の法を說いて不同義の法を說かず。例せば四諦の中に苦諦を有作と說けば他の集滅道の中にも亦有作と說き、苦を無作と說けば他の三諦の中

して義を同うせざる法を說かざるが故なり。示とは(一四四)應に示すべき所を示す等の故なり。(一四五)喜とは應に喜ぶべき所を喜ぶが故なり。勸とは怯弱の衆生を助けて勇猛ならしむるが故なり。具德とは現智と比智と、阿含と所證とを具に說くが故なり。不毀とは善道に隨順して說くが故なり。不亂とは不動不雜にして正しく非稠林に入るが故なり。如法とは具に四聖諦を說くが故なり。隨衆とは(一四六)四衆(一四七)八部に於て、應に聞くべき所に隨つて爲に法を說くが故なり。是の如きの十五種の相は菩薩隨順して他を利益し、一切の法を說くが故なり。慈心とは(一四八)怨の衆生の中に於て慈心を起して法を說くが故なり。安隱心とは惡行の衆生の中に於て、利益の心を起して法を說くが故なり。憐愍心とは(一四九)苦樂を受くる放逸の衆生の中に於て、憐愍利樂の心を起して法を說くが故なり。利養名聞に著せずとは心に希望せずして常に遠離を行ずるが故なり。自ら讚めて他を毀らずとは(一五〇)我慢、(一五一)嫉妬、(一五二)隨煩惱を離れて衆生の爲めに法を說くが故なり。是の如きの五種の相は菩薩自心を清淨にするが故

にも亦無作と說くといふが如く、一切相雜へざるを同義といふ。

【一四四】小乘根の人には小法を示すが如し。

【一四五】機宜を量つて開曉し歡喜せしむ。

【一四六】四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞（淸信士）、優婆夷（淸信女）の四部の弟子をいふ。

【一四七】八部とは天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽の八部衆をいふなり。

【一四八】怨の衆生とは瞋恚多き衆生の意。

【一四九】苦を受くるは現在の受苦を愍むなり。樂を受け放逸なるは當來の苦を愍む。

【一五〇】我慢なきが故に自ら讚めず。

【一五一】嫉妬なきが故に他を毀らず。

【一五二】緣に隨つ起る煩惱を隨煩惱といふ。

に。此の二十の事を具へて、能く法師と作る、是を大法師の深妙の義の中に住すと名くるが故に。是の如く說成就の中の智成就を已に說けり。云何んが口業成就なる。

經に曰く、無量の智方便に通達する四無礙の智は菩薩の言辭說法を起す。是の菩薩は日夜常に四無礙智を壞せず。何等をか四と爲す、所謂る法無礙、義無礙、辭無礙、樂說無礙なり。

論に曰く、口業成就とは菩薩は四無礙の言音を以て法を說く、經にいへるが如く、無量の智方便に通達して、乃至樂說無礙との故に。壞せずとは動せざるが故なり。是の中、四無礙の境界とは、一には(一五三)法の體、二には(一五四)法境界の體、三には(一五五)正しく得て衆生に與ふ、四には(一五六)正しく求むるに、無量門を與ふ。是の中、法の體とは(一五七)二邊を遠離する(一五八)生法の所攝なり。色の礙相の如く、是の如き等なり。法境界の體とは彼の二邊を遠離する生法の所攝の中にて(一五九)如實智の境界なり、菩薩は彼の生法所攝の如き智の境界の中に住す。(一六〇)色とは何者か是れ色なる、眼色等は虛妄の分別なるが如し、

【一五三】初に法の自體を明かす。

【一五四】次に法體の上に具はる差別の義を明かす。

【一五五】自ら得し所を說いて衆生に與ふ。

【一五六】衆生の正意を以て法を求むるには、其の種種の差別に隨つて無量の法門を與ふ。

【一五七】諸法は因緣より生ずるが故に一向に斷にあらず、又常にも非らざるが故に、二邊を遠離すといふ。

【一五八】生法の所攝とは自體を表す。我法二執の所依の法なり。例へば色(物質)に質礙の相あり心に緣慮の用あるが如し。

【一五九】諸法の差別の義は如實智の照す境なり。前は俗諦、是は眞諦なり。

【一六〇】色とは云云。類を擧ぐ。色等の諸法は虛妄の分別にして眞智の境にあらず。是れ妄情の所現にして理實には本より色の義なければなり。

是の如き等なり。正しく得て衆生に與ふとは彼の如實智の境界の中に於て、他の喜ぶ所の言說に隨ひ、正しく知りて他に隨ひて言說し、正知して與ふるが故なり。正に求めて無量の門を與ふとは彼に於て他の喜ぶ所の言說に隨つて正しく無量種種の義語を知り、知るに隨つて與ふるが故なり。是の四無礙の智に十種の差別あり。一には(二六一)自相に依り、二には(二六二)同相に依り、三には(二六三)行相、四には(二六四)說相、五には(二六五)智相、六には(二六六)我慢無き相、七には(二六七)小乘大乘の相、八には(二六八)菩薩地の相、九には如來地の相、十には住持の相なり。後の五は是れ淨相なり。云何んが自相なる。

經に曰く、是の菩薩は法無礙の智を用つて諸法の自相を知り、義無礙の智を以て諸法の差別相を知り、辭無礙の智を以て不壞に諸法を說くことを知り、樂說無礙の智を以て諸法の次第不斷の說を知る。

論に曰く、是の中、自相とは四種あり(二六九)一

【二六一】自相とは諸法の體各別異なるを知る。

【二六二】同相とは諸法に通ずる理法を知る。

【二六三】行相とは時に約して諸法の轉變することを明かす。三世に遷流するが故に行相といふ。

【二六四】說相とは機に對して敎を宣ぶること。上の三は敎の詮表する義を知る。今此の說相は能詮の敎法を知るなり。

【二六五】智相とは上の四は所知に約し、是は能知の智に約す。以上の五は汎く敎理を知ることを明かし、次の五は三乘の淨德を知ることを辯ず。

【二六六】我慢無しとは總じて三乘の離相淨證を明かし、後の四は別して辨ず。

【二六七】通じて小大の相を明かす。是は行相に約す。

【二六八】以上の二は通じて諸乘の行果を辨じ、後の三は別して一乘に約す。八は因行を知り、九と十とは果を知る。九は果の體に約し、十は用に約す。

【二六九】初の二は總別の一對也。緣生の諸法に於て總じて自相を知ると差別を知るとなり。初は色の自相を知り次は色法の上の十一(五根五境及び法

には生法の自相、二には差別の自相、(一七〇)三には(一七一)想堅固の自相、四には彼の想の差別の自相なり。經にいへるが如く、是の菩薩は法無礙の智を用て諸法の自相を知るとの故に。義無礙の智を以て諸法の差別相を知るとの故に。辭無礙の智を以て不壞に諸法を說くことを知るとの故に。樂說無礙智を以て諸法の次第不斷を知るとの故なり。是の中、不壞に說くとは所覺の諸相に隨ひ、彼彼の衆生に隨ひて種種に法を說くが故なり。次第不斷の說とは次第して息まず、無量衆多の異名をもつて彼の義を堅固にせんが爲めの故なり。云何んが同相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て諸法の無體性を知り、義無礙の智を以て諸法の生滅の相を知り、辭無礙の智を以て諸法の假名なるを知り、而も假名の法を斷ぜずして說く、樂說無礙の智を以て假名不壞の無邊の法に隨ひて說く。

論に曰く、是の中、同相に(一七二)四種あり、一には(一七三)一切法の同相、二には(一七四)一切有爲法の同相、三には一切法の假名の同相、四には假名假名の同相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙

處色）種の差別を知るが如きなり。

【一七〇】次の二は廣略の一對也。少名を以て法を顯はすを辭と云ひ、衆多の異名を以て其義を確實に說示して、他をして愛樂せしむるを樂說といふ。

【一七一】想とは言說を起す所依となる思想なり。名字言說を以て義を顯示し、其をして堅實ならしむるが故に想堅固といふ。

【一七二】初の二は眞俗二諦に約し、後の二は廣略に約す。

【一七三】一切諸法は眞諦門より見れば、同じく無性を以て自相と爲す。

【一七四】生滅有爲の諸法は俗諦門より見るに、同じく無常の相、生滅の法なり。

の智を以て諸法の無體性を知るとの故に。義無礙の智を以て諸法の生滅の相を知るとの故に。辭無礙の智を以て諸法の假名を知り而も假名の法を斷せずして說くとの故に。樂說無礙智を以て假名不壞の無邊の法に隨つて說くとの故に。是の中、無常の門にて無我の義の中に入り、第二の同相にて初の智境界を成ず。是の中、諸法の假名を知り、而も假名の法を斷せずとは假名の法は餘の假名の法を以て說く、假名不壞の無邊の法に隨ふとは前の假名を壞せずして而も能く異れる假名にて說くなり。云何んが行相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て現在の諸法の差別を知り、義無礙の智を以て過去未來の諸法の差別を知り、辭無礙の智を以て、過去未來現在の諸法を知り、不壞を以て法を說く、樂說無礙智を以て一一の世に於て無量の法明を得るが故に法を說く。

論に曰く、是の中、行相とは四種あり。一には(一七五)生の行相、二には(一七六)已生未生の行相、三には(一七七)物の假名の行相、四には(一七八)說事の行相なり、經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て現在の諸法の差別を知るとの故に。義無礙の智を以て過去未來の諸法の差別を知るとの故に。辭無礙の智を以て過去未來現在の諸法を知り不壞を以て法を說くとの故に。樂說無礙智を以て一一の世に於いて無邊の法明を得との故に。

【一七五】一念緣生の現法を知るは生の行相にして、法無礙に名づく。

【一七六】過去未來の諸法を知るを差別の義となす。

【一七七】上の二法に於て名字を假設するを辭無礙と名く。

【一七八】假名を以て諸の衆生の爲

(一七九)一一の世は現在世なるが故に、過去未來の彼彼の世間を攝受す、應に知るべし。過去未來世を見て現在世を知る。是の如く彼の菩薩の智境界成ず。說事の行相とは三世の中を出でず、應に知るべし。無量の法明とは異異の(一八〇)法明なり、應に知るべし。云何んが說相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て諸法の差別を知り、義無礙の智を以て諸法の義の差別を知り、辭無礙の智を以て諸の言音に隨つて爲めに法を說き、樂說無礙の智を以て樂ふ所の解に隨つて爲めに法を說く。

論に曰く、是の中、說相とは(一八一)四種あり、一には修多羅の說相、二には彼の解釋の說相、三には隨順の說相、四には(一八二)相似の說相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て諸法の差別を知るとの故に。辭無礙の智を以て諸法の義の差別を知るとの故に。辭無礙の智を以て諸の言音に隨つて爲めに法を說くとの故に。樂說無礙の智を以て樂ふ所の解に隨つて爲めに法を說くとの故なり。是の中、諸の言音に隨つて說くとは彼の衆生の言音に隨つて說くが故なり。樂ふ所の解に隨つて說くとは諸の衆生の所有る心念に隨ひ、乃至所有る種種の譬喩に隨つて說くなり。云何んが智相なる。

に宣說するを樂說と名く。

【一七九】三世を通論するに過去未來に各現在あるが故に、一一の世は現在世といひ、現在に過未を攝するが故に、彼彼の世間を攝受すといふ。

【一八〇】聞思の慧にて法を照了するを法明といふ。

【一八一】初の二は本典と解釋に約して法と義とを分ち、次の二は言音に隨ふと心に隨ふとにて辭と樂說とを分つ。

【一八二】心の樂欲に隨つて種種に說示し、心と義と相應するが故に相似の說相といふ。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以ては法智を以て諸法の差別、不壞の方便を知り、義無礙の智を以ては比智を以て如實に諸法の差別を知り、辭無礙の智を以ては世智を以て正見するが故に說法し、樂說無礙の智を以ては第一義の智方便を以ての故に說法す。

論に曰く、是の中、智相とは（一八三）四種あり。一には現見智、二には比智、三には（一八四）得んと欲する方便智、四には（一八五）得智なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以ては（一八六）法智を以て諸法の差別、不壞の方便を知るとの故に。義無礙の智を以ては比智を以て如實に諸法の差別を知るとの故に　辭無礙の智を以ては世智を以て正見するが故に說法し。樂說無礙の智を以ては第一義の智方便を以ての故に說法すと。是の中、法智とは諦の差別、（一八七）不異の方便を知る。法智の差別は不壞の方便なるが故に。比智とは（一八八）此の如實の分別の如く、餘も亦是の如し、比智は如實に諦の差別を知るが故なり、第一義の智方便とは（一八九）顚倒異に非ずして樂說す、應に知るべし、云何んが無我慢の相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て諸法の一相不壞なるを知り、義無礙の智を以て陰、界、入、諦、因緣、集方便を知り、辭無礙の智を以

【一八三】初の二は現比二智に約して分ち、次の二は淺深約して分つ。
【一八四】世俗諦を說くは第一義智を得んが爲の方便となるが故なり。
【一八五】得智とは第一義を說きて正しく證得せしむ。
【一八六】大乘の義に依れば現在の欲界を知るを法智と名け、上界及び過未を知るを比智と名くるなり。
【一八七】不異の方便とは經文の不壞の方便を釋す。不異の法を見るを不壞と名く。
【一八八】現智の知る所を以て餘法を類比す。
【一八九】理に稱うて說くが故に顚

て一切世間の歸敬する所の善妙の音聲、字句の說法を知り、樂說無礙の智を以て所說轉た勝れ無量の法明にて說法す。

論に曰く、是の中、無我慢の相とは(一九〇)四種あり。一には第一義諦の無我慢の相、二には世諦の無我慢の相、三には說(一九一)美妙なる無我慢の相、四には(一九二)說無上なる無我慢の相なり。經にいへるが如く、復た次に此の法無礙の智を以て諸法の一相不壞なるを知るとの故に、義無礙の智を以て陰、界、入、諦、因緣、集方便を知るとの故に、辭無礙の智を以て一切世間の歸敬する所の善妙の音聲字句の說法を知るとの故に、樂說無礙の智を以て所說轉た勝れ無量の法明にて說法すとの故なり。是の中、(一九三)一相、不壞とは無我は不壞なるが故なり。(一九四)我れは無我を知り、我れは無我を證す。是の如き等の(一九五)壞陰等の方便をもつて無我に入るが故なり。是の故に、彼の菩薩の智境界を成ず。一には(一九六)聚積著の我、二には(一九七)異因の著、三には(一九八)欲著　四には(一九九)作著なり。此の對治は是の如く次第す。

倒異にあらず。

【一九〇】初の二は眞俗に約し、後の二は總別に依りて分つ。

【一九一】美妙とは情に稱ふを美といひ、理に順ずるを妙といふ。

【一九二】言と理と殊勝にして、轉た多きを無上といふ。

【一九三】第一義諦の無我なれば一相といふ。能所なきが故に不壞といふ。

【一九四】此の句は前の義を反釋す。我れ無我を知るといひ、我れ無我を證すといふは、能所あるが故に、第一義の無我を壞す。

【一九五】次の句は義は法に順ずることを釋す。世諦の陰界入等を觀じ、之を方便となして眞諦の無我を證するが故なり。

【一九六】五蘊の眞相を知らずして之に迷ふが故に、五蘊の積聚せる身を執して我となす。

【一九七】十八界に迷ふが故に異因の我を計す。

【一九八】十二處に迷ふが故に欲著の我を計す。

【一九九】四諦十二因緣に迷ふが故

陰等の方便は應に知るべし。云何んが小乗大乗の相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て諸法に差別有ること無く一乗に攝在することを知り、義無礙の智を以て諸乗を分別する差別門を知り、辭無礙の智を以て能く諸乗を説きて壊せず、樂説無礙の智を以て一一の乗に於て無量の法明を説く。

論に曰く、是の中、小乗大乗の相とは〔二〇〇〕四種あり。一には〔二〇一〕觀相、二には〔二〇二〕性相、三には〔二〇三〕解脱相、四には〔二〇四〕念相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て諸法に差別有ると無く一乗に攝在するとを知るとの故に。義無礙の智を以て諸乗を分別する差別門を知るとの故に。辭無礙の智を以て能く諸乗の不壊を説くとの故に。樂説無礙の智を以て一一の乗に於て無量の法明を説くとの故に。是の中、諸法に差別有ると無く一乗に攝在するとを知るとは一觀にして異らず、應に知るべし。能く諸乗を説きて壊せずとは解脱を同うするに依りて懼れず。無量の法明を説くとは種種の法明を分別して説くが故なり。度すべき者に隨ひ種種の念行に依りて隨順し解脱せしむ。

に作著の我を計す。此の四我を對治して眞の無我を顯はすことを説く。

【二〇〇】初の二は權實に約して法義を分ち、後の二は總別に約して分つ。總じて三乗を説いて解脱せしむるを辭無礙といひ、衆生の心念に隨ひ一一の乗に於て無量種の説を爲すを樂説といふ。

【二〇一】觀相とは實に就けば一觀不異にして唯是の一乗眞實なり。

【二〇二】性相とは機の根性に就く故に三乗の別あり。是れ機に順じて權教を説く。

【二〇三】解脱相とは權の三乗を會して一實に歸せしむ。

【二〇四】念相とは方便門を開き、機に隨つて念同じからず、心行亦異るが故に、多くの法明を以て諸乗の法を説く。

云何んが菩薩地の相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て一切の菩薩の行、法行、智行、隨智入を知り、義無礙の智を以て分別して十地の義を說く差別入を知り、辭無礙の智を以て不壞の說にて諸地に隨順する道を與へ、樂說無礙の智を以て一一の地の無量の相を說く。

論に曰く、是の中、菩薩地の相とは（二〇五）四種あり。一には智相、二には說相、三には方便を與ふる相、四には無量の門に入る相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て一切の菩薩の行、（二〇六）法行、（二〇七）智行（二〇八）隨智入を知り、義無礙の智を以て分別して十地の義を說く差別入を知るとの故に。辭無礙の智を以て不壞の說にて諸地に隨順する道を與ふることを知るとの故に。樂說無礙の智を以て一一の地の無量の相を說くとの故なり。是の中、一切の菩薩の行とは法行、智行にて示現す、（二〇九）觀智の說なるが故なり。（二一〇）十地の差別とは心を謂ふ、說とは口言なり、應に知るべし。不壞の說にて諸地に隨順する道を與ふとは（二一一）顚倒せずして敎授するが故なり。云何んが如來地の相なる。

【二〇五】十地の體を說くを法となし、地相を說くを義と爲し、說相の體に違はざるを辭と爲し、說相の機に隨ふを樂說と爲す。

【二〇六】法行とは法を證して行を成す。

【二〇七】智行とは智に依りて行を成す。

【二〇八】智行能く地に入るを隨智入といふ。

【二〇九】觀智を說くは菩薩の行なるが故に、之を十地の體と爲す。

【二一〇】地體は一智なれども相に十地ありて位を分つ。此の分位差別は心の差別に依るとの意なり。

【二一一】機に稱ひ、證道に違はざるを顚倒せずといふ。經の不壞の說を釋す。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て一切の佛、一念の間に於て正覺を得ることを知り、義無礙の智を以て種種の時と事と相との差別を知り、辭無礙の智を以て正覺に隨つて差別して說き、樂說無礙の智を以て一一の句法に於て無量劫に說きて而も窮盡せず。

論に曰く、是の中、如來地の相とは四種あり。一には（二二）法身の相、二には（二三）色身の相、三には（二四）正覺の相、四には（二五）說相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て一切の佛は（二六）一念の間に於て正覺を得ることを知るとの故に。義無礙の智を以て種種の時と事と相との差別を知るとの故に。辭無礙の智を以て正覺に隨つて差別して說くとの故に。樂說無礙の智を以て一一の句法に於て無量劫に說くとも窮盡せずとの故なり。（二七）是の中、時とは何の劫の中に隨ひ何等の佛を成ず。事とは隨ふに何等の佛國土を以てし、何等の佛身に隨ひ、相とは名の記する處に隨つて見聞することを得べきが故なり。正覺に隨ふとは（二八）十種の佛に依る、正覺の如し、應に知るべし。云何んが作住持の相なる。

經に曰く、復た次に法無礙の智を以て一切の佛語と力と無畏と不共の佛法と大悲と無礙智の行と轉法輪と隨順一切智智とを知り、義無礙の智を以て隨順せる如來の音聲は八萬四千を出して衆生の心に

【二二】佛の體に約して法身といふ。
【二三】佛の用に約して時處應現の色身といふ。
【二四】前の二身の智德の差別を正覺の相といふ。
【二五】衆生の心樂に隨つて廣く佛德の無量の差別を顯すを說相といふ。
【二六】始覺と本覺と無二一體の法身なれば、一念の間に於て正覺を得るといふ。
【二七】以下重ねて義を細釋す。
【二八】前に說きたる十佛の最初を正覺佛と名く。

隨ひ、根に隨ひ、信に隨つて差別するとを知り、辭無礙の智を以て、一切衆生の行を知り、如來の音聲を以て不壞に說き、樂說無礙の智を以て諸佛の智行、神通圓滿せるを以て信に隨ひて說法す。

論に曰く、是の中、作住持の相とは四種あり。一には(二九)覺相、二には(三〇)差別相、三には(三一)說相、四には(三二)彼の無量の相なり。經にいへるが如く、復た次に法無礙の智を以て一切の佛語と力と無畏と不共の佛法と、大悲と、無礙の智行と轉法輪と隨順せる一切の智智とを知るとの故に。義無礙の智を以て、隨順せる如來の音聲は八萬四千を出して、衆生の心に隨ひ、根に隨ひ、信に隨つて差別するとを知るとの故に。辭無礙の智を以て、一切衆生の行を知り、如來の音聲不壞を以て說くとの故に、樂說無礙の智を以て諸佛の智行、神通圓滿せるを以て信に隨つて說法すとの故なり。是の中、佛語とは能く法を說くが故に、力とは能く憍慢の衆生を破するが故に、無畏とは能く外道を降伏するが故に、不共の佛法とは聲聞辟支佛と同せざるが故に、大悲とは當に能く法を說くが故に、無礙の智行とは彼に依りて法を說くが故に、轉法轉とは隨順して法を說くが故に。此の一切の事に一切の智智は通達して知るが故なり。(三三)心に隨ふとは心性に隨ふ、應に知るべし。諸佛の智行神通の圓滿とは諸佛の法身

【二九】覺相とは佛の說法を起す住持の德なり。

【三〇】差別相とは佛の機に隨つて現する差別の德なり。是の二は佛の說法を知る總別にして法と義とを分つ。

【三一】說相とは前の差別に依りて衆生の爲に說く。

【三二】彼の無量の相とは衆生の心樂の異るに隨つて種種に異說す。

【三三】義無得を釋する中に心に隨ふとは種姓の差別、根器・樂欲等の差別なり。

なり、此の行は衆生を利益せんが爲めの行にして不可壞なるが故に圓滿と言ふ。彼の信に隨ふが故に、菩薩の無盡の樂說を示現す。是の如く口業の成就を已に說けり。云何んが法師の自在成就なる。四種の事を示現す、一には（三四）持成就、二には（三五）說成就、三には（三六）問答成就、四には（三七）受持成就なり。云何んが持成就なる。

經に曰く、佛子よ、菩薩は是の如く善く無礙の智を知つて、第九の菩薩地に安住するを名けて、諸佛の法藏を得たりと爲し、能く大法師と作り、衆義陀羅尼、衆法陀羅尼、起智陀羅尼、光明陀羅尼、善意陀羅尼、衆財陀羅尼、威德陀羅尼、無障礙陀羅尼、無量陀羅尼を得、種種の義陀羅尼を得。是の如き等の陀羅尼を得て十阿僧祇の百千の陀羅尼門を滿足す。是の如き十阿僧祇の百千の音聲方便と、是の如き十阿僧祇の百千の無量の信樂門の差別にて法を說く。是の菩薩は是の如き十阿僧祇の百千の無量の陀羅尼門を得て、能く無量の諸佛の所に於て、法を聽く。聞き已りて忘れず、聞く所の法の如く能く無量の差別門を以て人の爲めに演說す。

論に曰く、持成就とは十種の陀羅尼有り。（三八）一には義陀羅尼、經にいへるが如く、衆義陀羅尼を得との故に。二には聞法陀羅尼。經にいへるが如く、衆法陀羅尼を得との故に。三には智陀羅尼、

【三四】持成就とは心に法を蘊蓄して持すること。
【三五】說成就とは蘊蓄に依りて說を起す。
【三六】問答成就とは他の疑惑難問に對して善く答辯す。
【三七】受持成就とは更に勝法を受けて他の爲に宣說す。
【三八】初の三は意業を起す。一は能く義を知り、二は能く教を知り、三は智能く化通を起す。

經にいへるが如く、起智陀羅尼との故に。〔二二九〕四には放光陀羅尼、經にいへるが如く、光明陀羅尼との故に。五には〔二三〇〕他を降伏する陀羅尼、經にいへるが如く、善意陀羅尼との故に。四には如來を供養し布施を以て貧窮の衆生を攝取する陀羅尼、經にいへるが如く、衆財陀羅尼を得との故に。〔二三一〕七には大乘の中に於て、狹劣の衆生に教を示して利益する陀羅尼、經にいへるが如く、威德陀羅尼との故に。八には不斷辯才の陀羅尼、經にいへるが如く、無障礙門の陀羅尼を得との故に。九には無盡の樂說陀羅尼、經にいへるが如く、無量の陀羅尼を得との故に。十には種種の義、樂說の陀羅尼、經にいへるが如く、種種の義陀羅尼を得との故に。乃至聞く所に隨つて無量に差別して說く、是等の餘は經文の如し。說成就、問答成就、受持成就は經にいへるが如く應に知るべし。解し易きが故に釋せず。餘は前に說けるが如し。

經に曰く、是の菩薩は一佛の所に於て十阿僧祇の百千の陀羅尼門を以て法を聽受し、一佛に從ひて法を聽くが如く、餘の無量無邊の諸佛にも亦是の如し。是の菩薩は佛を禮敬する時に於て聞く所の法明門を能く受け、多學の聲聞の大陀羅尼力を得たるもの十萬劫に於ても能く受持する所に非ず。是の菩薩は是の如きの陀羅尼力と及び無礙智の樂說力とを得て說法する時、法座に在りて一切の三千大千世界に遍く、衆生の心の差別に隨つて法を說く、是の菩薩の法座は唯諸佛

【二二九】次の三は身業を起す。四は光明を放つて善柔の衆生を慈光を以て攝取す。

【二三〇】五は剛强難化の衆生は威力を示して折伏す。是れ善巧の慧なれば、善意陀羅尼といふ。

【二三一】次の四は口業を起す。

と及び受職の菩薩とを除き、一切の中に於て最も殊勝と爲し、無量の法明を得。是の菩薩は法座に處して、或は一音を以て說きて一切の大衆をして悉く解了を得しめんとせば卽ち解了を得、或は種種の音を以て說きて一切の大衆をして各開解を得しめんとすれば卽ち開解を得、或は但光明を放ちて說きて、一切の大衆をして各解法を得しめんとすれば卽ち法を解することを得、或は一切毛孔を以て皆法音を出し、或は三千大千世界の所有る色物を以て皆法音を出し、或は一音を以て一切の世界に周遍して皆解することを得しめ、或は一切の音聲を以て法聲住持し、或は一切の世界の歌詠樂音の、一切の音聲に於て、皆法音を出し、或は一字の聲の中に於て、一切の法の字句の聲を皆差別して說き、或は不可說の世界の無量の地水火風聚の細微塵の差別に於て一一の微塵の中にて不可說の法門を皆悉く能く說く。是の菩薩は三千大千世界の所有る衆生、一念の間に於て一時に問難するも、彼の一一の衆生、無量の音聲の差別を以て問難するも、一人の問ふ所、餘の者は問ひを異にするが如き、是の菩薩は一念の間に於て悉く是の如き問難を受け、但一音を以て皆開解せしむ、是の如く二、三千大千世界、若くは三、四、五若くは、十、二十、三十、四十、五十、若くは百三千大千世界、若くは千三千大千世界、若くは萬、十萬、百萬、若くは億三千大千世界、若くは十億、百千萬億那由他、乃至無量無邊、不可說不可說の三千大千世界の中に滿てる衆生、一念の間に於て、一時に問難し、彼の一一の衆生、無量の音聲差別を以て問難し、一人の問ふ所、餘の者は問ひを異にするが如き、是

の菩薩は一念の間に於て悉く是の如きの問難を受けて但一音を以て皆開解せしむ。是の菩薩は不可說不可說の世界に於て、其の中に遍滿し、心に隨ひ、根に隨ひ、信に隨つて衆生の爲めに法を說く、法明を得るが故に、如來力を求めて佛事を滿足し、一切の衆生に與へて依止と作る。是の菩薩は轉た倍精進して是の如きの智明を攝取す、若し一一の毛頭の處に於て不可說不可說の世界の微塵數の如來の大會あり。佛其の中に在して爲めに法を說き、一一の如來は不可說不可說の世界の微塵數の衆生の爲めに法を說き、一一の衆生心の中に不可說不可說の世界の微塵數の心ありて如來を生じ、是の如く衆生の心に隨ひて法門を與ふ、一佛の如く一切の佛の一一の毛頭の處に在すも亦是の如し。是の如く一切の法界の中に、是の中に於て大憶念力を生じ、一念の間に於て一切の佛に從つて受くる所の一切の法明をば一句をも失はず、何に況んや說く所の一切の世界の中の衆生をや。是の菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して轉た勝れて晝夜更に餘念なく、佛の境界に入りて常に一切の諸佛に親近することを得、甚深の菩薩の解脫に通達す、是の菩薩は是の如きの智に隨順して常に三昧に入り、諸佛に親近することを離れず。一一の劫の中に於て無量の佛、無量の百佛、無量の千佛、無量の百千佛、無量の百千那由他佛、無量億の佛、無量百億の佛、無量千億の佛、無量の百千億の佛、無量の百千億那由他の佛を見たてまつり。上妙の供具を以て供養し、恭敬し、尊重し、讃歎す、諸佛に親近し、諸佛の所に於て、種種に問難して說法陀羅尼に通達す。是の菩薩は彼の諸の善根轉た勝れて明淨となる、佛子よ、

譬へば本眞金を莊嚴具と作し已りて、轉輪聖王の若くは頸、若くは項に繫在するに、一切の小王、四天下の人の所有る一切の諸の莊嚴具の能く及ぶ者なきが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して、彼の諸の善根は轉た勝れて明淨となり、一切の聲聞辟支佛、及び下地の菩薩の壞すること能はざる所なり。是の菩薩は善根轉た明かにして能く衆生の煩惱心の稠林處を照す、照し已りて還つて攝まる。佛子よ、譬へば大梵天王は二千世界の中の所有る一切の深き稠林の處を皆悉く能く照すが如く、是の如く、佛子よ。菩薩は此の菩薩の善慧地の中に住して彼の諸の善根の光明は諸の衆生の煩惱心の稠林の處を照し、照し已つて還つて攝まる。是の菩薩は十波羅蜜の中にて力波羅蜜增上し、餘の波羅蜜も修習せざるに非ず、力に隨ひ、分に隨ふ。佛子よ、是を菩薩の第九の菩薩善慧地を略說すと名く。若し廣說すれば無量劫に於て說くとも盡すべからず。菩薩は此の地の中に住して多く大梵天王と作り、大勢力を得て二千世界を主り、自在の中に於て而も自在を得、如實に正解し最も殊勝と爲り、善能く聲聞、辟支佛、菩薩に波羅蜜の行を宣說し、衆生の問難も能く窮盡することなし。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至一切種一切智智を念ずることを離れず。常に是の心を生ずらく、我れ當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝となり、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、

上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念に從つて精進行を發せば精進の力を以ての故に、一念の間に於て十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の三昧を得、十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の佛を見たてまつり、十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の佛の神力を知り、能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の世界を動かし、能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の世界に入り、能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の世界を照し、能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の世界の衆生を化し、能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數劫に壽住し、能く過去未來世の各十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の劫の事を知り、能善く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の法門に入り、能く身を變じて十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の身と爲し、一一の身に於て能く十阿僧祇の百千の佛國土の微塵數の菩薩を示して以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在勝上なり、菩薩の願力は此の數に過ぎて種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は、乃至無量百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

卷の第十二

法雲地第十

論に曰く、菩薩は九地の中に於て已に佛國土を淨め及び衆生を化することを作し、第十地の中に修行して智覺を滿足せしむ、此は是れ勝れたるが故なり。此の地の中に八分の差別あり。一には(一)方便作滿足地分、二には(二)得三昧滿足分、三には(三)得受位分、四には(四)入大盡分、五には(五)地釋名分、六には(六)神通力無上有上分、七には(七)地影像分、八には(八)地利益分なり。云何んが方便作滿足地分なる。

經に曰く、爾の時に金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、若し菩薩は是の如く無量智、善觀智、乃至第九の菩薩地の善擇智にて善く淸白の法を滿

【一】前九地に修する所の行を攝して、總じて方便となして此地を滿足するが故なり。

【二】是れ初住地の行なり。行德無量なるも、此の地の受職は必ず三昧に依るが故に、偏に之を擧ぐ。

【三】是れ正住地の行。前の勝定に依りて能く佛智を攝するなり。

【四】是れ地成滿の行。是の地を前に比するに既に窮盡し、今後此地滿して盡中の極なるが故に入大盡と名く。

【五】此地は學窮り德を辨じて名稱を顯はす。

【六】此地滿足し已つて妙用自在なるを神通といふ。神通の用前に過ぎたれば無上といひ、仰で如來に比するに劣れるが故に有上といふ。

【七】喩を以て法を顯はす。猶影像に因りて本質を知るが如くなれば地影像分といふ。

【八】地の勝益を說いて趣入を勸む。此の後の二分は十地に通ず。前を以て後に攝むるが故に此地に收む。

足し、無量の助道法を集め、善く大功德智慧を攝し、廣く增上の大悲を行じ、廣く世界の差別を知り、深く衆生界の稠林行に入り、隨順して如來の行の境界に入ることを念じ、深く入りて如來の力、無畏、不共の佛法に趣向すれば、名けて一切種、一切智智の受位の地に至ることを得と爲す。

論に曰く、是の中、地方便作滿足地分とは、初地より九地に至る中に於て善擇智の業は應に知るべし、經にいへるが如く、佛子よ、若し菩薩は是の如く、(九)無量智、善觀智、乃至第九の菩薩地の善擇智との故に。此の善擇智に七種の相あり。一には善く修行するが故に、三句あり、經にいへるが如く、善く清白の法を滿足し、無量の助道法を集め、善く大功德智慧を攝すとの故に、(一〇)此の諸句は次第して相釋す、應に知るべし。(一一)二には普遍く隨順して自ら利し他を利するが故に、經にいへるが如く、廣く增上の大悲を行ずとの故に。(一二)三には佛土を淨めしむ、經にいへるが如く、廣く世界の差別を知るとの故に。(一三)四には衆生を教化す、經にいへるが如く、深く衆生界の稠林の行に入るとの故に。

【九】無量智は廣智なり。善觀智(或は善修智)は深智なり。是れ後得智と根本智に當る。諸地の中に具さに此二智を起す。通じて善擇智と名く。妙智能く決擇するが故なり。

【一〇】此の三句は證と助道と不住道となり。次第に相釋すとは何の因にて證を得るや、助道を起すが故なり。何の因にて助道を成ずるや、不住の行に由るが故なり。

【一一】次の六句は別して顯はす。初の一句は前七地の二利の行相を攝す。第八地の初に七地の差別を辨ぜしを以て、此に總攝して一句に之を顯はすなり。

【一二】別して第八地の佛土を淨むる行を擧ぐ。

【一三】次の四句は別して第九地の中の行を擧ぐ。初は自分行後の三は勝進行にして、次第の如く解と行と證となり。

五には善く解す、經にいへるが如く、隨順して如來の行の境界に入ることを念ずとの故に。如來の境界とは眞如の法なるが故に。六には厭足なし、經にいへるが如く、深く如來の力、無畏、不共の佛法に趣向すとの故に。七には〔四〕地盡きて至入す、經にいへるが如く、名けて一切種、一切智智の受位地に至ることを得と爲すとの故なり。是の如く、十地の方便作滿足地分を已に說けり。云何んが得三昧滿足分なる。

經に曰く、佛子よ、菩薩は隨順して是の如きの智を行し、受位の地に入ることを得れば、卽ち菩薩の離垢三昧と名くるを得て現在前す、法界の差別に入る三昧と名け、道場を莊嚴する三昧と名け、一切種の華光三昧と名け、海藏三昧と名け、海成就三昧と名け、虛空界廣三昧と名け、善擇一切法性三昧と名け、一切衆生の心行に隨ふ三昧と名け、一切の諸佛を現じて現前に住する菩薩の三昧と名くるをえて現在前す。是の如き等を上首とし、十阿僧祇の百千の諸の三昧門は皆現在前す、是の菩薩は皆悉く此の一切の三昧に入りて、善く三昧の方便、乃至三昧の作す所の正受を知る。此の菩薩は乃至十阿僧祇の百千の三昧あり、最後の三昧を一切智智受勝位の菩薩三昧と名くるをえて現在前す。

論に曰く、得三昧滿足とは離垢三昧等は眷屬と共に現前するが故なり、離垢三昧とは煩惱垢を離るるが故なり、而も現在前すとは功力を加へずして自然に現在前するが故なり。此の離垢三昧に復

〔四〕第十地は菩薩の位窮まるが故に地盡といひ、行に依りて證を得るが故に至入といふなり。

た九種の三昧あり。八種の垢を離るること應に知るべし。一には（一五）入密無垢、經にいへるが如く、法界の差別に入る三昧と名くとの故に。二には（一六）近無垢、經にいへるが如く、道場を莊嚴する三昧と名くとの故に。三には（一七）放光無垢、經にいへるが如く、一切種の華光三昧と名くとの故に。四には（一八）陀羅尼無垢、經にいへるが如く、海藏三昧と名くとの故に。五には（一九）起通無垢、經にいへるが如く、海成就三昧と名くとの故に。六には清淨佛土無垢、二句あり、無量の正觀の故に、經にいへるが如く、虛空界廣三昧と名け、善擇一切法性三昧と名くとの故に。七には化衆生無垢、經にいへるが如く、一切衆生の心行に隨ふ三昧と名くとの故に。八には正覺無垢、菩提を成ずる三昧にして、一切の諸佛迭ひに共に現前して知るが故に、經にいへるが如く、一切の諸佛を現じて現前に住する菩薩の三昧と名け、而も現在前すとの故に。乃至一切智智受勝位の菩薩の三昧と名け、而も現在前すとは一切智智は無分別にして、一切智智は平等に位を受くるが故なり。善く三昧の方便、乃至三昧の作す所の正受を知るとは三昧の事を滿足せるを示現す。是の如く、十地の得三昧滿足分を已に說けり、云何んが得受位分なる。

經に曰く、是の三昧現在前する時、卽ち大寶蓮華王ありて出づ、周圍は十阿僧祇の百千三千大千世

【一五】入密とは密處に入るの意法界の深奧なるを密處と名くるなり。
【一六】近とは滿行已に圓成して佛果に近づくをいふ。前は解、是は行なり。次の三は三業の德なり。
【一七】身光の業用なり。
【一八】口辯總持なり。
【一九】意業に神通を現ず。

界の如く、一切の衆寶間錯して莊嚴し、一切世間の境界に過ぎて、出世間の善根の生ずる所、諸法の如幻の性境界を行じて成ずる所、光明普く一切の法界を照して一切諸天の所有る境界を過ぎ、大瑠璃、摩尼寶を莖と爲し、不可量の眞檀王を臺と爲し、大碼碯寶を鬚と爲し、閻浮檀金を葉と爲し、華身に無量の光明あり、一切の衆寶其の内に間錯し、無量の寶網ありて其の上に彌覆し、十三千大千世界に滿てる微塵數に等しき蓮華を以て眷屬と爲す。是の如く諸相を成就し具足し已りて、爾の時に菩薩は其の身殊妙にして華座と稱可す。是の菩薩は一切智智受勝位の三昧力を得るが故に、卽時に身は大寶蓮華王の座に在り。是の菩薩は大寶蓮華王座の上に在りて坐する時、爾の時に大寶蓮華王の眷屬の蓮華の上に皆菩薩あり、一一の菩薩は皆蓮華座の上に坐して彼の菩薩を圍遶し、一一の菩薩は各十の十百千三昧を得て皆一心に恭敬して大菩薩を瞻仰せり。

論に曰く、是の中、受位を得とは何等の座處に隨ひ、何等の身量に隨ひ、何等の眷屬に隨ひ、何等の相に隨ひ、何等の出處に隨ひ、所得の位に隨ふや、是の如きに隨つて說く。六事は應に知るべし。是の中、座處とは十種の相あり。一には生相、經にいへるが如く、是の三昧現在前する時、卽ち大寶蓮華王ありて出づとの故に。二には量相、經にいへるが如く、周圍は十阿僧祇の百千三千大千世界の如しとの故に。三には勝相、經にいへるが如く、一切の衆寶間錯して莊嚴すとの故に。四には地相、經にいへるが如く、一切世間の境界に過ぐとの故に。五には因相、經にいへるが如く、出世間

の善根の生ずる所との故に。六には成相、經にいへるが如く、諸法の如幻の性境界を行じて成ずる所との故に。七には第一義相、經にいへるが如く、光明普く一切の法界を照すとの故に、普く照すとは、名けて正觀と爲すが故に。八には功德相、一切の諸天に過ぐるが故に、經にいへるが如く、一切の諸天の所有る境界に過ぐとの故に。九には體相、莖臺等なり、經にいへるが如く、大瑠璃、摩尼寶を莖と爲す等なり。十には莊嚴の具足せる相、經にいへるが如く、華身に無量の光明あり、一切の衆寶其の內に間錯して、無量の寶網ありて其の上に彌覆すとの故に。何等の身量に隨ふとは身は華座に稱ふ、經にいへるが如く、爾の時に菩薩は其の身殊妙して華座に稱可すと、是の如き等なり。何等の眷屬に隨ふとは、此の座處の大寶蓮華王座の眷屬と菩薩の眷屬は其の中に住在す、經にいへるが如く、爾の時に大寶蓮華王の眷屬と、是の如き等なり。

經に曰く、是の菩薩は大寶蓮華王座に昇り、及び眷屬の菩薩は蓮華座に坐し、三昧に入り已つて、爾の時に十方一切の世界は皆大いに震動し、一切の惡道は皆悉く休息し、光明普く一切の法界を照し、一切の世界は皆悉く嚴淨となり、皆一切の諸佛の大會を見聞することを得たり。何を以ての故に、佛子よ、是の菩薩は大寶蓮華王座に坐する時、卽時に兩足の下より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の阿鼻地獄等を照して衆生の苦惱を滅す。兩膝より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の畜生を照して苦惱を滅除す。齊輪より十阿僧祇の百千の光明

を放ち、出し已りて悉く十方無量の餓鬼を照して苦惱を滅除す。左右の脇より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の人身を照して苦惱を滅除す。兩手より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の諸天阿修羅宮を照し。兩肩より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の聲聞人を照し。項背より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の辟支佛身を照し。面門より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の初發心より、乃至九地を得たる菩薩を照し。白毫相より十阿僧祇の百千の光明を放ち、出し已りて悉く十方無量の位を得たる菩薩の身を照し、而して住し、一切の魔宮は隱蔽して現せず。頂上より十阿僧祇の百千三千大千世界微塵數の光明を放ち、出し已りて悉く十方一切の諸佛の大會を照し、一切世界を圍遶す、十帀して虛空の中に住し大光明輪の網臺を成じ、高大の光明と名け、大供養を作して諸佛を供養す。是の如きの供養には初發心より乃至九地を得たる菩薩の作す所の諸佛を供養することは百分が一にも及ばず、千分が一にも及ばず、百千分が一にも及ばず、百千那由他分が一にも及ばず、億分が一にも及ばず、百億分が一にも及ばず。千億分が一にも及ばず、百千億分が一にも及ばず、百千億那由他分が一にも及ばず、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。是の大光明輪の網臺は十方世界の所有る華香、末香、燒香、塗香、散香、華鬘、衣服、寶幢、旛蓋、衆寶、瓔珞、摩尼、寶珠の供養の具に勝る、一切世間の境界を過ぎて、出世間の善根より生ずるを以ての故なり。一一の佛の大會の上に皆

衆寶を雨らすこと猶大雨の如し、若し衆生ありて是の如きの供養を覺知する者は當に知るべし、皆是れ必定して無上の大道を退かず。是の如きの諸の光明雨の大供養已つて、彼の一切の光明は悉く十方一切の諸佛の大會を照し、一切の世界を圍遶し、十帀して諸佛の足下に入る。爾の時に彼の諸佛及び彼の大菩薩は某の世界の中にて某甲の菩薩は是の如きの菩薩の道を行じて、菩薩の得位地を成就する時を知る。又佛子よ、卽時に十方無量無邊の菩薩、乃至九地に住する者は皆來り圍遶して大供養を設け、一心に瞻仰して各十の十百千三昧を得、諸の得位地の菩薩は功德をもつて莊嚴せる金剛卍字の胸に於て一大光明を出し、壞魔怨と名け、十阿僧祇の百千の光明あり、以て眷屬と爲す。出し已りて悉く十方無量の世界を照し、無量の神力を示し、亦來りて是の大菩薩の功德を以て莊嚴せる金剛卍字の胸に入る。此の光明滅し已りて是の菩薩は卽時に百千の增上せる大勢力の功德智慧を得て現在前す。

論に曰く、何等の相に隨ふとは一切の世界の動く等の相なり、經にいへるが如く、是の菩薩は大寶蓮華王座に昇り、乃至皆一切の諸佛の大會を見聞することを得との故に。何等の出處に隨ふとは光明を出すを以ての故なり。復た次に光明の三種の業は應に知るべし、一には〔一〇〕利益の業、二には〔一一〕發

【一〇】十處より出す光明の業用を攝して三種となす。前の九種を利益業と爲す、謂く初の五は凡夫を益し、次の二は二乘を益し、後の二は菩薩を益す。經文を參照せよ。

【一一】又後の三光を發覺業と爲す。謂く第八は初發心より九地に至るまでを發覺し、第九は十地の菩薩を發覺し、第十は一切の諸佛を發覺す。

覺の業、三には(三二)攝伏の業なり。經にいへるが如く、何を以ての故に、佛子よ、是の菩薩は大寶蓮華王座に坐して、卽時に兩足の下より十阿僧祇の百千の光明を放ち、乃至功德智慧現在前すとの故に。必定して無上の大道を退かずとは、(三三)地中に於て決定せる義の故なり。復た(三四)異義あり定んで不放逸なり、(三五)所作の事決定せる心の故に。功德を以て莊嚴せる金剛卍字の胸とは、菩薩の胸中に於て功德を以て莊嚴せる金剛卍字の相あり、名けて無比と爲す。

經に曰く、是の如く、佛子よ、爾の時に諸佛は眉間の白毫相の光を放ち、益一切智通と名け、阿僧祇の光明の眷屬あり、十方一切の世界を照して遺餘あるとなし。十帀して一切の世界を圍遶し、諸佛の大神通力を示して無量百千萬億の諸佛を勸發し、一切十方の諸佛の國土は六種に震動して一切の惡道の苦惱を滅除し、一切の魔宮隱蔽して現せず、一切諸佛の菩提を得たる處を示し、一切の諸佛の大會の神通莊嚴の事を示し、一切の法界の際、一切の虛空界、盡一切世界を照明し已りて、還り來りて一切菩薩の大會の上に集在し、周帀し圍遶して大神通の光明莊嚴の事を示す。是の光明は彼の大菩薩の頂上に入り、其の諸の眷屬の光明は諸の眷屬の蓮華座上の菩薩の頂上に入る。光明の是の菩薩の身に入る時、彼

【三二】又、八九の二光を攝伏業と爲す。第八は能く攝して九地以還の菩薩をして來つて供養を成ぜしむ。第九は能く伏して魔宮を隱蔽す。

【三三】是れ地上の證決定に約す。

【三四】是れ下位に約す。正定に入らしむる益なり。定んで不放逸とは惡を離るること決定せりとの意。

【三五】善事を集修すること決定せりとの意。

の諸の菩薩は各先に未だ得ざる所の十の十百千の三昧を得、彼の諸の光明は一時に彼の菩薩の頂に入る、時に彼の菩薩は名けて位を得たりと爲し、諸佛の境界に入り、佛の十力を具へて佛の數に墮在す、佛子よ、譬へば轉輪聖王の長子の如し、玉女寶の生む所にして王の相を具足し、轉輪聖王は子をして白象寶の閻浮檀金の座上に在らしめ四大海の水を取り、上に羅網を張り、寶蓋、旛華、寶幢を以て、種種に莊嚴し、手に金鐘の香水を執りて子の頂上に灌ぐ、卽ち灌頂と名け、刹利王の數となり、具足して十善道を轉ずるが故に、轉輪聖王と名くることを得。是の如く、佛子よ、彼の菩薩は諸の如來より位を受くることを得已りて智位を得たりと名け、十力を具足して佛の數に墮在す。佛子よ、是を菩薩の大乘位の地と名く。菩薩は是の位の爲めの故に、無量百千萬億の苦難の行事を受く。是の菩薩は是の位を得已りて無量の功德智慧は轉た增して名けて菩薩の法雲地に安住すと爲す。

論に曰く、所得の位に隨ふとは、諸の如來の光明を彼の菩薩は迭互ひに知り平等に攝受するが故に、經にいへるが如く、是の如く、佛子よ、爾の時に諸佛は眉間の白毫相の光を放ち、益一切智通と名く、是の如き等なり。云何んが位を得る、轉輪聖王の長子の如し、經にいへるが如く、譬へば轉輪聖王の長子の如く、是の如き等なり。此の菩薩は同じく位を得る時名けて善く此の地の中に住すと爲す。經にいへるが如く、是の菩薩は是の位を得已りて、無量の功德智慧轉た增して名けて菩薩の法雲地に安住すと爲す。是の如く得受位分を已に說けり。云何んが入大盡分なる、入大盡分と

は五種あり。〔二六〕一には智大、二には解脱大、〔二七〕三には三昧大、四には陀羅尼大、五には神通大なり。此の事は五種の義に依りて分別す、應に知るべし。一には正覺の實智の義に依り、二には心自在の義に依り、三には發心して卽ち一切の事を成就する義に依り、四には一切の世間に隨つて衆生を利益する義に依り、五はに能く衆生を度するに堪ふる義に依る。云何んが智成就なる。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の法雲地に住して如實に欲界の集、色界の集、無色界の集を知り、如實に衆生界の集、識界の集、有爲界の集、無爲界の集、虛空界の集、法界の集を知り、如實に涅槃界の集を知り、如實に邪見、諸の煩惱界の集、世界の成壞の集、聲聞行の集、辟支佛行の集、菩薩行の集、諸佛の力、無畏、不共の佛法、色身、法身の集、一切種一切智智の集、菩提を得て法輪を轉じ、滅度を示す集を知る、略して說く、乃至如實に一切法に入りて智の差別を成ずる集を知る。是の菩薩は是の如きの智を以て勝慧に通達し、如實に衆生の業化、煩惱化、見作化、世界化、法界化、聲聞化、辟支佛化、菩薩化、如來化を知り、如實に一切の分別無分別の化を知る。是の菩薩は如實に佛力の持、法持、僧持、業持、煩惱持、時持、願持、供養持、行持、劫時を知り、如實に智持を知る。是の菩薩は如實に諸佛の所有る細微の入智を知る、所謂る行細微入智、退細微入智、入胎細微入智、生細微入智、奮迅細微入智、出家細微入智、菩提を得る細微入智、法輪を轉ずる細微入智、

〔二六〕前の二は自利。一は內智二は外用なり。
〔二七〕後の三は利他。一は意業起用、二は發語業、三は身業變化なり。

壽命を持する細微入智、涅槃を示す細微入智、如實に法の久位する細微の入智を知る。是の菩薩は、如實に諸佛の所有る密處を知る、所謂る、身密、口密、意密、時と非時とを籌量する密、菩薩に授記を與ふる密、衆生を攝伏する密、乘種種の密、一切の根行差別の密、一切の信如實の所作の密、如實に行の菩提を得る密を知る。是の菩薩は、如實に諸佛の所有る入劫の智を知る、所謂る、一劫は阿僧祇劫に入り、阿僧祇劫は一劫に入る、有數劫は無數劫に入り、無數劫は有數劫に入る、一念劫は無量劫に入り、無量劫は一念劫に入る、劫は非劫に入り、非劫は劫に入る、有佛劫は無佛劫に入り、無佛劫は有佛劫に入る、有佛劫は有佛劫に入り、無佛劫は無佛劫に入る、過去未來劫は現在劫に入り、現在劫は過去未來劫に入る、未來過去劫は現在劫に入り、現在劫は未來過去劫に入る、長劫は短劫に入り、短劫は長劫に入る、短劫は短劫に入り、長劫は長劫は入る、如實に一切の劫相の相入を知る。是の菩薩は如實に諸佛の所有る入智を知る、所謂る凡夫道に入る智、微塵に入る智、國土身に入る菩提智、衆生身心に入る菩提智、一切の處隨に入る菩提智、亂行示現に入る智、順行示現に入る智、逆行示現に入る智、思議不思議に入る智、世間出世間に入る智、行示現智、入聲聞智、辟支佛智、菩薩智、如實に如來の智行を知る智、佛子よ、諸佛の智慧は是の如く廣大にして無量無邊なり、菩薩は此の地に住して卽ち能く是の如きの智慧に入ることを得。

論に曰く、是の中、智大に復た七種あり、應に知るべし。一には集智大、二には應化智大、三に

は加持智大、四には入細微智大、五には密處智大、六には入劫智大、七には入道智大なり。是の中、初めに能く疑を斷つ力に依る、應に知るべし。第二は（二八）彼の身に依りて力を起す、第三は彼に依りて（二九）是の如く是の如く行力を轉ず、第四は（三〇）彼の應化と加持と善集とに依る（三一）不二の智にて作すが故なり、第五は（三二）護根に依りて、未熟の衆生を驚怖せしめず。第六は（三三）命行に依る、（三四）加持と捨とは自在の意なるが故に、第七は（三五）對治の意に依りて說く。是の中、集智とは因緣集智なり。應に知るべし、彼れ復た（三六）所有に隨ひて、染、或は淨、或は滅に分つ。（三七）所有る三界の處に隨ひ、所有る衆生に隨ひ、染淨等の心に隨ひ、（三八）所有る有爲の法と無爲の法との

【二八】 應化智の業用は身に依りて起るが故なり。

【二九】 住持の化用は一にあらざるが故に重ねて是の如くといふ、常に化して絕えざるが故に轉といふ。

【三〇】 八相成道の中に一よく一切を現ずるが故に微細に入るといふ。華嚴の十玄門の中の微細相容安立門の意なり。彼の應化等は前の三智を牒す。

【三一】 不二の智とは應化と加持とは悲にして、集智は智なれば三智合して悲智不二と也、正しく作佛するが故に作といふ。八相一一に三智を具するのみならず、一相に各餘の八を具するが故に微細といふ。

【三二】 初心の行者の機根未だ熟せざる者を護らんが爲に麤を現じて細を隱し、彼をして深妙なるに怖れを懷かしめざるなり。是れ十玄門の中の祕密隱顯俱成門の意なり。

【三三】 是れ入劫智を釋す。善く諸劫の互に相涉入することを解す。時劫の相續するを命と名け、遷流するを行と名くるが故に命行に依るといふ。

【三四】 一に一切を攝するを加持といひ、一一切に入るを捨といふ、己を廢して他に隨ふが故なり。劫は心に隨つて轉ずるを自在の意といふ。

【三五】 諸の世法は出世の對治の用たるに堪ふるが故に入道智と名く。

【三六】 此句は總釋也。中に於て六重あり。一は唯染、（初の五句及び邪見は煩惱集）、二は唯淨（涅槃集及び聲聞等の集）、三は唯滅（虛空集）四は染淨、合（識及び有爲世間の成壞）、五は淨滅合（無爲及び涅槃）、

無知と知とに隨ふが故なり。所有る處に隨ふ、虛空等なり、(三九)說く所の正不正の法に隨ひ、所證と不證とに隨ふ、〔證とは〕謂ゆる涅槃に於てし、〔不證とは〕所有る邪見の過に隨ふ、餘の外道等なり、彼れ證するを能はざればなり。所有る器世間の壞成に隨ひ、所有る三乘に隨ふ。彼の集の差別は應に知るべし、經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の法雲地に住して、如實に欲界の集を知り、乃至如實に一切法に入る成智の差別集を知るとの故なり。是の中、應化の智とは衆生の應化等の差別なり、應に知るべし、經にいへるが如く、是の菩薩は是の如きの智を以て勝慧に通達し、乃至如實に一切の分別と無分別との化を知るとの故に。是の中、(四〇)煩惱、見作の化とは應化して煩惱染と見作とを示すが故なり。(四一)法界化とは所說の行の故なり。(四二)彼れ一切の分別と無分別とに應化することを如實に知るが故に。是の中、加持の智とは、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に佛力の持を知り、乃至如實に智持を知るとの故に、經にいへるが如く、應に知るべし。是の中、智持とは一切智の故なり、此の智は能く一切の事を作すが故に。

六は染淨及び減に通ず（法界集）。

【三七】以下別釋なり。三界の處とは初の三句を釋す。

【三八】此句は有爲無爲集を釋す。有爲は有心の故に知と名け、無爲は無心の故に無知と名く。

【三九】此の句は法界集を釋す。淨法を正とし染法を不正と爲す。

【四〇】煩惱化とは貪等の煩惱を示現して化し、見作の化とは邪見を化現して化す。

【四一】以上の四句は衆生世間自在の化。此の一句は器世間自在の化なり。後の三乘の化は智正覺世間自在の化なり。

【四二】此句は結釋なり。有心を化作するを分別と名け、非情を現化するを無分別と名く。

入細微の智とは、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸佛の所有る〔四三〕細微入智を知り、乃至如實に法の久住する細微入智を知るとの故に。經にいへるが如く、應に知るべし。是の中、奮迅とは七歩を行ずることを現ずる等なり、應に知るべし。是の中、〔四四〕密處の智とは、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸佛の所有る密處を知り、乃至如實に行の菩提を得る密を知るとの故に、經にいへるが如く、應に知るべし。是の中、入劫の智とは所謂る劫に入るなり、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸佛の所有る入劫の智を知る、所謂る一劫は阿僧祇劫に入り、乃至如實に一切の劫相の相入を知るとの故に、經にいへるが如く、應に知るべし。是の中、入とは〔四五〕平等の解脫は、一切の劫迭ひに相入するが故なり。是の中、入道の智とは凡夫地に依り、我慢の行者に依り、信じて生天を求むる者に依り、覺觀の者に依る、經にいへるが如く、是の菩薩は如實に諸佛の所有入智を知る、所謂凡夫道に入る智、乃至卽ち能く是の如きの智慧に入ることを得との故なり。是の如きの七種の智大を已に說けり。云何んが解脫大なる。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩は是の如く、此の地の行に通達して菩薩の不思議の解脫門と名くるを得、無障礙の解脫、淨智差別の解脫、普門光の解脫、如來藏の解脫。隨順不退轉の解脫、入通達三世

〔四三〕佛の化用の微細にして自在なるを知る。
〔四四〕佛所現の祕密の義等を知る。
〔四五〕不思議解脫の法は平等齊均にして、諸劫海に遍きが故に、諸劫をして互に相入せしむとの意なり。

の解脱、法界藏、解脱、解脱光輪の解脱なり、菩薩の一切の境界の無餘の解脱を得と名く。佛子よ、是の菩薩は十の菩薩の解脱門を首と爲し、是の如き等の無量無邊の百千萬阿僧祇の菩薩の解脱門を得、皆第十の菩薩地の中に於て、是の如く、乃至無量無邊の百千萬阿僧祇の三昧を得、無量無邊の百千萬阿僧祇の陀羅尼、無量無邊の百千萬阿僧祇の神通も亦是の如し。

論に曰く、是の中、解脱大とは一には神通の境界に依る、經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩は是の如く、亦此の地の行に通達して菩薩の(四六)不思議の解脱門と名くるを得との故に。二には能く無量の世界に至る願智の無礙、經にいへるが如く、(四七)無障礙の解脱との故に。三には世間出世間、有學無學、聲聞辟支佛、菩薩如來の解脱智等を知る、經にいへるが如く、(四八)淨智の差別の解脱との故に。四には(四九)意に隨つて事を轉ず、經にいへるが如く、普門光の解脱との故に。五には法陀羅尼、經にいへるが如く、(五〇)如來藏の解脱との故に。六には能く他の言を破す、經にいへるが如く、隨順不退轉輪の解脱との故に。七には(五一)三世の劫に隨意に住持す、經にいへるが如く、入通達三世の解脱との故に。八には(五二)一切法、一切種の因緣集智、經にいへるが如く、

【四六】轉變自在にして測量し難きが故に不思議の解脱と名く是を總とし餘の九は別なり。

【四七】是れ速疾自在なり。

【四八】所知自在なり

【四九】衆生の意に隨つて種種の境界の中に自身を示現す。觀音等の應化自在なるが如し、之を普門自在と名く。

【五〇】所證の眞如は恆沙の如來の功德を蘊藏するが故に如來藏と名け、法總持と名く。

【五一】是れ前段に說きたる入劫智なり。

【五二】是れ前段の善集智と同じきなり。

法界藏の解脱との故に。九には光は身を離れずして而も能く普く照す、經にいへるが如く、解脱光輪の解脱との故に。十には一時に依りて無量の世界の諸の衆生心を知る、經にいへるが如く、菩薩の一切境界の無餘の解脱を得と名くとの故に。是の中、三昧大とは、經にいへるが如く、是の如く、乃至無量無邊の百千萬阿僧祇の三昧との故に。是の中、陀羅尼大とは、經にいへるが如く、無量無邊の百千萬阿僧祇の陀羅尼との故に。是の中、神通大とは、經にいへるが如く、無量無邊の百千萬阿僧祇の神通も亦復た是の如しとの故に。是の如く、十地の入大盡分を已に說けり。云何んが地釋名分なる。

經に曰く、是の菩薩は是の如きの智慧に通達して菩提に隨順し、無量の念力を成就し、方便畢竟す。是の菩薩は十方無量の佛の所に於て、無量の大法明、無量の大法照、無量の大法雨を一念の間に於て皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。佛子よ、一切如來の祕密の處、所謂る大法明、大法照、大法雨を彼の一一の衆生と一切の聲聞辟支佛とは皆受くること能はず、堪ふること能はず、思ふこと能はず、持すること能はず。初地より乃至九地に住する菩薩も亦受くること能はず、堪ふること能はず、思ふこと能はず、持すること能はず。唯此の法雲地に住する菩薩のみは皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。佛子よ、譬へば大海は一大龍王の大雲雨を起すも、皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。若くは二、若くは三、四、五、若くは十、二十、三十、四十、

五十、若くは百龍王、若くは千、若くは萬、若くは億、若くは百億、若くは千億、若くは百千億那由他の龍王、乃至無量無邊の稱說すべからざる諸の大龍王の大雲雨を起し、一念の間に於て、一時に澍ぎ下すも皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持するが如し。所以は何ん、大海は是れ無量廣大の器なるが故なり。是の如く、佛子よ、菩薩は此の菩薩の法雲地の中に住しては、一佛の所に於て、大法明、大法照、大法雨を皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。若くは二、若くは三、四、五、若くは十、二十、三十、四十、五十、若くは百の諸佛、若くは千、若くは萬、若くは億、若くは百億、若くは千億、若くは百千億那由他の諸佛、乃至無量無邊の稱說すべからざる諸佛の所にて大法明、大法照、大法雨を一念の間に於て、皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。是の故に此の地を名けて法雲地と爲す。解脫月菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は此の法雲地に住して幾許の佛の所にて大法明、大法照、大法雨を一念の間に於て皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持するや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、菩薩は此の法雲地に住しては不可數不可說の佛の所にて大法明、大法照、大法雨を一念の間に於て、皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す。佛子よ、譬へば十方の所有る不可說の百千萬億那由他の佛國土の微塵數に等しき諸の世界の中の所有る衆生の如く彼の衆生の中に一りの衆生聞持陀羅尼を得て餘り無く、佛の持者として最大聲聞の聞持陀羅尼第一と爲る、譬へば金剛蓮華上の佛には大勝比丘と名くる持聞陀羅尼第一のもの有るが如

し、其の一りの衆生は是の如きの聞持陀羅尼力を成就す。彼の一りの衆生の如く餘の一切世界の所有る衆生も皆亦是の如く聞持陀羅尼力を成就す。其の一人の受くる所の法を第二の人は重ねて受けず、是の如く一切各各同じからず。佛子よ、意に於て云何ん。彼の一切の衆生の受くる所の聞持陀羅尼力は寧ろ多しと爲する不や。解脱月菩薩の言はく、佛子よ、彼の一切の衆生の受くる所の聞持陀羅尼力は甚だ多くして無量なり。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、我れ今當に汝が爲めに說くべし、是の菩薩は此の法雲地に住して、一念の間に於て一佛の所に於て三世の法界藏と名くる大法明、大法照、大法雨を皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す、彼の大法明、大法照、大法雨を受持する方便は上に說ける一切衆生の聞持陀羅尼力を此に比するに、百分が一にも及ばず、乃至百千那由他分が一にも及ばず、億分が一にも及ばず、百億分が一にも及ばず、千億分が一にも及ばず、百千億那由他分が一にも及ばず、乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。一佛の所の如く、前に說く所の如く十方世界の微塵數に等しき諸佛の所に、復た此の數に過ぐる無量無邊の諸佛の所にも三世の法界藏と名くる大法明、大法照、大法雨を一念の間に於て皆悉く能く受け、能く堪へ、能く思ひ、能く持す、是の故に此の地を名けて法雲地と爲す。復た次に佛子よ、是の菩薩は此の法雲地に住して自ら願力に從ひて大慈悲の雲を起し、大法の雷音を震ひ、通明無畏を以て電光と爲し、大智慧光を以て疾風と爲し、大福德善根を厚き密雲と爲し、種種の色身を現して雜色の雲と爲し、正法の雨を說き、諸の魔怨

と電等の譬喩の相似の法なり、應に知るべし、經にいへるが如く、復た次に、佛子よ、是の菩薩は此の法雲地に住して自ら願力に從ひ、乃至是の故に此の地を名けて法雲地と爲すとの故なり。是の中、大智慧の光を以て疾風と爲すとは風相似の法なり。種種の色身を現ずとは世間の種種の身に隨つて廻轉す、雜色の雲の相似の法なるが故なり、正法の雨を說きて諸の魔怨を破るとは雨の相似の法なるが故なり。是の如く此の地の釋名分を已に說けり。云何んが神通力の無上有上分なる。

經に曰く、是の菩薩は此の地に住在して智慧の中に於て上自在力を得、善擇の大智通は心の念ふ所に隨つて、或は狹國を以て廣と爲し、廣國を狹と爲し、復た心念に隨つて、或は垢國を以て淨と爲し、淨國を垢と爲す、是の如く廣大無量にして亂住、倒住、正住等の一切の世界を自在力の故に種種に能く成ず。是の菩薩は復た心念に隨つて、或は一微塵の中に於て一世界の所有る一切の鐵圍山等を示し、然も彼の微塵は增長せず、若くは二、若くは三、四、五、若くは十、二十、三十、四十、五十、若くは百、若くは千、若くは萬、若くは億、若くは百億、若くは千億、若くは百千億、若くは百千億那由他の世界、乃至不可說不可說の世界の所有る一切の鐵圍山等を一微塵の中に入れ、然も彼の微塵も亦增長せず。是の菩薩は復た心念に隨つて、或は一世界の莊嚴の事を以て二世界を示し、復た心念に隨つて或は一世界の莊嚴の事を以て、乃至無量の不可說不可說の世界を示す。復た心念に隨つて或は二世界の莊嚴の事を以て一世界を示し、乃至或は無量の不可說不可說の世界の莊嚴の事を以て一世界を

示す。復た心念に隨つて、乃至或は無量の不可說不可說の世界の衆生を以て一世界に置き、然も諸の衆生は恐怖せず、覺せず、知らず。復た心念に隨つて、或は一世界の衆生を以て、乃至無量の不可說不可說の世界の中に置き、然も諸の衆生は亦恐怖せず、覺せず、知らず。復た心念に隨つて、或は一毛道に於て一切の佛の境界の莊嚴の事を示し、復た心念に隨つて、乃至或は無量の不可說不可說の一切の佛の境界の莊嚴の事を以て一毛道を示す。復た心念に隨つて、一念の間に於て無量の不可說不可說の世界の微塵に等しき身を示現し、一一の身の中に於て是の如き等の微塵數の手を示し、此の諸の手を以て、勤心に十方の諸佛を供養し、一一の手を以て恆河沙に等しき華箱を執り、以て諸佛に散ず、是の如きの華箱、是の如きの華鬘、末香、塗香、熏香、衣服、寶蓋、旛華、寶旛、一切の莊嚴の事も亦復た是の如し。一一の身の中に於て是の如き等の微塵數の頭を示し、一一の頭の中に於て、是の如き等の微塵數の舌を示し、此の諸の舌を以て諸佛の功德の事を讃嘆す。是の如き等の事を念念の中に於て十方に遍滿し、念念の中に於て無量の世界に於て菩提を得ることを示し、乃至大涅槃を示し、莊嚴住持し、三世の中に於て、無量の身を示し、自身の中に於て無量の諸佛有ることを示し、無量の佛の世界の莊嚴の事を示す、亦世界の成壞の事を示す。或は自身の一毛孔の中に於て一切の風災を出して而も衆生を惱まさず。復た心念に隨つて、或は無量無邊の世界を以て一海水と爲し、此の海水の中に大蓮華を作り、光明の莊嚴は遍く無量無邊の世界を覆ひ、中に於て大菩提樹の莊嚴せる妙事を示現し、乃至一

切種一切智智を示す。或は自身に於て十方の光明、摩尼寶珠、電光、日月、星宿、諸の光明等を示し、乃至一切の世界の諸の光明等を皆身中に現ず。口の噓氣を以て能く十方無量の世界を動かし而も衆生をして驚怖の想あらしめず。十方の世界の風災の劫盡、火災の劫盡、水災の劫盡を示し、一切衆生の種種の心念に隨つて、色身を應現して莊嚴成就す。或は自身を以て如來身と作し、如來身を以て自身と作し、如來身を以て自の佛國土と作し、自の佛國土を以て如來身と作す、是の如く。佛子よ、是の菩薩は此の菩薩の法雲地の中に住して神變すること是の如し。復た此に過ぎたる有餘の無量無邊の百千萬億那由他の神通莊嚴を自在に示現す。

論に曰く、是の中、神通力の無上有上とは六種の想あり、應に知るべし。一には依內、二には依外、三には自相、四には作住持、五には歡喜せしむ、六には大勝なり。是の中、神通力の無上とは餘の衆生の神通力に比するが故なり、有上とは如來の神通力に比するが故なり。是の中、依內とは四種あり、一には不思議解脫、二には三昧、三には起智陀羅尼、四には神通なり、前に說く所の如し。依外とは外の事地等なり、復た外事あり、自他身等なり。是の中、自相とは二種あり、一には外事を轉ずる等なり、二には應化自身等なり。是の中、轉とは復た三種あり、一には略廣の轉、二には異事の轉、三には自在の轉なり、能く一切衆生の種種なる莊嚴と作る等なり。云何んが略廣の轉なる、經にいへるが如く、是の菩薩は此の地に住在てし智慧の中に於て、上自在力を得、善擇の

大智通は心の念ふ所に隨つて、或は狹國を以て廣と爲し、廣國を狹と爲すとの故に。云何んが異事の轉なる、經にいへるが如く、復た心念に隨つて或は垢國を以て淨と爲し、淨國を垢と爲し、乃至一切世界の自在力の故に、種種に能く成ずとの故なり。云何んが自在轉なる、經にいへるが如く、是の菩薩は復た心念に隨つて、一微塵の中に於て、一世界を示し、乃至然も諸の衆生は亦恐怖せず、覺せず、知らずとの故なり。云何んが應化自身等なる、經にいへるが如く、復た心念に隨つて或は一毛道に於て一切の佛の境界の莊嚴の事を示し、復た心念に隨つて、乃至或は不可說不可說の一切の佛の境界の莊嚴の事を以て、一毛道を示すとの故なり。是の中、作住持とは供養門等成就し助菩提の法を集むるが故なり、經にいへるが如く、復た心念に隨つて、一念の間に於て無量の不可說不可說の世界の微塵に等しき身を示現し、乃至無量無邊の百千萬億那由他の莊嚴も自在に示現すとの故なり。云何んが歡喜せしむる。

經に曰く、爾の時に會中の一切の菩薩衆、及び一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、摩醯首羅、淨居天等各是の念を作さく、若し菩薩の神通智力にして能く是の如くならば、無量無邊の佛は復た云何んと。爾の時解脫月菩薩は諸の大衆の心に念ふ所を知り已りて、金剛藏菩薩に問うて言はく、佛子よ、今諸の大衆は是の菩薩の神通智力を聞きて疑網に墮在す、疑を斷たんが爲めの故に、少しく菩薩の神通の力、莊嚴の妙事を示せ、爾の

時に金剛藏菩薩、卽ち一切佛國の體性菩薩の三昧に入る、解脫月菩薩の衆、及び一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、摩醯首羅、淨居天等皆自ら身を見るに金剛藏菩薩の身中に入り、其の身内に於て佛の國土を見る。彼の國土の中の所有る諸相の莊嚴の妙事は百千萬億劫に於て說くとも盡すべからず。中に於て、道場樹あり、其の莖の周圍は十萬三千大千世界、高さは百萬三千大千世界、三千億三千大千世界を覆蔭し、樹の高廣に稱へる師子の座あり、其の座上に佛あり、一切智通王如來と號し、一切の大衆咸く皆佛は道場樹下の師子座の上に坐したまふを見たてまつる。其の中の諸相の莊嚴の妙事は百千萬億劫に於て說くとも盡すべからず。金剛藏菩薩は、是の如きの大神力を示現し已り、還つて一切の諸菩薩衆、及び一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、摩醯首羅、淨居天等をして各本處に在らしむ。爾の時に一切の大衆は歡喜踊躍して希有の想を生じ、默然として住し金剛藏菩薩を觀る。爾の時に解脫月菩薩は金剛藏菩薩に語りて言はく、佛子よ、甚だ希有と爲す、此の三昧の神通莊嚴には大勢力あり、佛子よ、此の三昧を名けて何等と爲すや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、此の三昧を名けて一切の佛國の體性と爲す。爾の時に解脫月菩薩は金剛藏菩薩に問うて曰く、佛子よ、此の三昧の境界の莊嚴神通の妙事は幾許に齊しと爲すや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、若し菩薩は心の念ふ所に隨へば、善く此の三昧力を修成するが故に、能く是の如きの佛國土の微塵數に

等しき諸佛の國土を自身の中に現ずることを示して復た此の數に過ぐ。佛子よ、菩薩は此の菩薩の法雲地に住して是の如き等の無量百千の菩薩の三昧を得。是の義を以ての故に、此の菩薩は乃至得位の菩薩、及び善慧地に住する菩薩も測り知ること能はず。若くは身身の業も測り知るべきこと難く、若くは口口の業も測り知るべきこと難く、若くは意意の業も測り知るべきこと難く、若くは神通の事も測り知るべきこと難く、若くは三世を觀ずる智も測り知るべきこと難く、若くは三昧の境界に入ることも測り知るべきこと難く、若くは智の境界も測り知るべきこと難く、若くは諸の解脱に遊戯することも測り知るべきこと難く、若くは應化の所作、若くは加持の所作、若くは神力の所作も測り知るべきこと難く、乃至擧足下足の所作を乃至得位菩薩、及び善慧地に住する菩薩も測り知ること能はず。佛子よ、菩薩の法雲地は是の如く無量なり、今已に略説せり。若し廣く說かば無量百千阿僧祇劫、無量の百千萬、無量の百千億にも盡くすことを得る能はず。解脱月菩薩は金剛藏菩薩に問うて曰く、佛子よ、若し菩薩の神通の行、境界の力にして、是の如く無量ならば佛の神通の行、境界の力は復た云何ん。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、譬へば人ありて四天下の中の二三の豆土を取りて、是の如きの言を作すが如し、無量の世界の地界は此より多しと爲すやと、汝の問ふ所の者は我れ謂へらく是の如しと。如來の無量の智慧を云何んぞ菩薩の智慧を以て測量せんと欲するや。佛子よ、人の四天下の中の少しの地界を取るも、餘に在るもの極めて多きが如く、是の如く佛子よ、菩薩の法雲地は無量劫に於て說

くとも但一分を說くのみ、何に況んや如來地をや。金剛藏菩薩は解脫月菩薩に語りて言はく、佛子よ、是の諸の如來は我が言を證知したまふ、佛子よ、假使ひ十方に一一の方の無量世界の微塵數に等しき諸佛の國土に於て、十地の菩薩皆其の中に滿ち、譬へば甘蔗、竹葦、稻麻、叢林の如くなるも、此の諸の菩薩は無量劫に於て、修する所の行業、功德智慧は如來の功德智慧の力に於て、百分が一にも及ばず、千分が一にも及ばず、百千分が一にも及ばず、億分が一にも及ばず、百億分が一にも及ばず、一千億分が一にも及ばず、百千那由他分が一にも及ばず、百千億那由他分が一にも及ばず、乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。是の如く、佛子よ、是の菩薩は是の如きの智慧に通達して、如來の身口意業に順ひ、菩薩の三昧力を捨てず、能く諸佛を見たてまつりて勤心に供養し、一一の劫の中に於て、一切種の供具の上上なるを以て、無量の諸佛を供養し、而も能く具さに諸佛の神力の所加を受けて、轉た復た明勝なり。是の菩薩は法界の中に於て、所有る問難も能く勝つ者無く、無量の百劫、無量の千劫、無量の百千劫、無量の百千那由他劫、無量の億劫、無量の百億劫、無量の千億劫、無量の百千億劫、無量の百千億那由他劫にも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば、善巧の金師の善く此の金を治めて莊嚴具と爲し、無上の摩尼寶珠を以て、其の間に間錯し、自在天王の若は頸、若は項に繫在せば、其の餘の天人の莊嚴具の能く及ぶ者なきが如く、是の如く、佛子よ、是の菩薩は此の第十の菩薩法雲地の中に住して、彼の菩薩は不可思議の智行にて、一切の衆生、

一切の聲聞、辟支佛、初地より乃至九地に住する菩薩の及ぶこと能はざる所なり。是の菩薩は此の地の中に住して大智照の光明は、能く一切の衆生をして乃至一切智智に住せしめ、其の餘の智慧の明も壞すること能はざる所なり。佛子よ、譬へば摩醯首羅天王の光明は一切の生處の衆生の光明に過ぎて能く衆生の身心をして清涼ならしむるが如く、是の如く、佛子よ、是の菩薩は此の第十の菩薩の法雲地の中に住して彼の智慧の光明は一切の聲聞辟支佛、初地より乃至九地に住する菩薩の及ぶこと能はざる所なり。是の菩薩は此の地の中に住して能く一切の衆生をして一切智智の法の中に住せしむ。佛子よ、是の菩薩は是の如きの智慧に隨順して、十方の諸佛は爲めに智慧を説きて三世の行に通達せしめ、正しく法界の差別を知らしむ、遍く一切の世間界を覆ひて一切の世間界を照し、一切の衆生界をして證法を得しめんが故なり。略して説く、乃至隨順して一切智智を得。是の菩薩は十波羅蜜の中にて智波羅蜜增上す。佛子よ、是を菩薩の第十の菩薩の法雲地を略說すと名く。若し廣說せば無量無邊の阿僧祇劫にも窮盡すべからず。若し菩薩此の地の中に住すれば、多く摩醯首羅天王と作り、自在を具足して善く衆生、聲聞、辟支佛、菩薩の波羅蜜行を受け、法界の中に於て。問難ある者も能く盡くさしむるなし。所作の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是の諸の福德は皆佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共の佛法を念ずることを離れず、乃至具足せる一切種の一切智智を念ずることを離れず。常

に是の心を生ずらく、我れ當に一切の衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、微妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切智智の依止者と爲るべしと。復た是の念に從ひて精進行を發せば精進の力を以ての故に、一念の間に於て十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の三昧を得、十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の佛を見たてまつることを得、能く十不可說の百千億億那由他の佛の世界の微塵數の世界を動かし、能く十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の世界に入り、能く十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の世界を照し、能く十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の世界の衆生を教化し、能く壽に住すること十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の劫、能く過去、未來世の各十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の劫の事を知り、能善く十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の法門に入り、能く身を變じて十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の身と爲し、一一の身に於て十不可說の百千萬億那由他の佛の世界の微塵數の菩薩を示して以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば自在なること勝上なり、菩薩の願力は此の數に過ぎて種種の神通を示す、或は身、或は光明、或は神通、或は眼、或は境界、或は音聲、或は行、或は莊嚴、或は加、或は信、或は業、是の諸の神通は乃至無量の百千萬億那由他劫にも數へ知るべからず。

論に曰く、是の中、歡喜せしむとは能く疑を斷つが故なり。疑を斷つに二種あり。一には自の神

通力を示現し、二には一切の法を說くが故なり。云何んが自の神通力を示現する、經にいへるが如く、爾の時に會中の一切の菩薩衆、及び一切の天、龍、夜叉、是の如き等なり。是の如く、自〔の神通〕力を示現して衆生の疑を斷ち歡喜せしむるが故に。云何んが一切の法を說く、經にいへるが如く、是の如く、佛子よ、是の菩薩は是の如きの智慧に通達して如來の身口意の業に順ひ、乃至轉た復た明勝なり。是の菩薩は法界の中に於て所有る問難も能く勝つ者なしと、是の如き等なり。是の中、大勝とは二種あり、一には神通力の勝、二には算數の勝、此の二種の事は一切の前地に勝るるが故なり。經に說けるが如く、應に知るべし。三世の智等に通ずるが故に、三種の行に通ずるが故に。一には能く疑を斷つ行、經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩は此の地の中に住して是の如きの智に住して、十方の諸佛は爲めに智慧を說きて三世の行に通達せしむ等なり。三世の行とは通の義なり、應に知るべし。二には速疾神通の行、如來の祕密の法を說くを聞くが故なり、經にいへるが如く、正しく法界の差別を知るとの故に。三には等作の助行、此に三種あり、應に知るべし。一には淨佛國土の平等を作す、衆生を化せんが爲めの故に、二には法明の平等を作す、三には正覺の平等を作す。經にいへるが如く、遍く一切の世間界を覆ふとの故に、一切の世間界を照すとの故に、一切の衆生界をして證法を得せしむとの故に、略して說く、乃至隨順して一切智智を得と是の如き等なり。是の如く此の地の神通力の無上有上分を已に說けり。次に地影像分を說かん。是の中、地影像

とは四種あり。一には池、二には山、三には海、四には摩尼寶珠なり、四種の功德を況ふるを以ての故なり。一には修行の功德、二には上勝の功德、三には度し難きを能く度する大果の功德、四には轉盡堅固の功德なり。云何んが修行の功德なる。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩は十地に次第に順行して一切種一切智智に趣向す。佛子よ、譬へば阿耨大池より四河を流出して、閻浮提に充滿し、窮盡すべからず、轉た復た增長して乃至大海に充滿するが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は菩提心より善根大願の水を流出して、四攝の法を以て、衆生界に充滿し、窮盡すべからず、轉た復た增長して乃至滿足して一切種の一切智智を得。

論に曰く、是の中、修行の功德とは本願力に依りて修行し、四攝法を以て他を利益する行を作し、自の善根增長して乃ち菩提を得、自の利益の行は應に知るべし、經にいへるが如く、佛子よ、譬へば阿耨大池より四河を流出するが如く乃至滿足して一切種の一切智を得との故に。云何んが上勝の功德なる。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩の十地は佛智に因るが故に而も差別あり。譬へば大地に依るが故に、十大山王の差別あるが如し。何等をか十と爲す、所謂る雪山王、香山王、毗陀略山王、仙聖山王、由乾陀羅山王、馬耳山王、尼陀羅山王、斫迦婆羅山王、衆相山王、須彌山王なり。佛子よ、譬へば雪山王の一切藥草其の中に集在し、是の諸の藥草は取るとも盡くすべからざるが如し、是の如く、佛子よ、一

菩薩は菩薩の歡喜地の中に住在して　一切世間の書論、伎藝、文誦、呪術は其の中に集在し、一切世間の書論、伎藝、文誦、呪術は窮盡すべからず。佛子よ、譬へば香山王の一切の諸香其の中に集在し、一切の諸香は取るとも盡くすべからざるが如し、是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の離垢地の中に住在して一切の菩薩の持戒正受の行香は其の中に集在し、一切の菩薩の持戒正受の行香は窮盡すべからず。佛子よ、譬へば毘陀略山王の純淨の寶性にして、一切の諸寶其の中に集在し、一切の諸寶は取るとも盡くすべからざるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の明地の中に住在して、一切世間の禪定、神通、解脫、三昧、三摩跋提は其の中に集在し、一切世間の禪定、神通、解脫。三昧、三摩跋提は問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば仙聖山王の純淨の寶性にして、五通の聖人其の中に集在し、五通の聖人は窮盡すべからざるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の焰地の中に住在して、一切行の中の殊勝の智行は其の中に集在し、一切行の中の殊勝の智行は種種に問難するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば由乾陀羅山王の純淨の寶性にして、一切の夜叉、諸の大鬼神は其の中に集在し、一切の夜叉、諸の大鬼神は窮盡すべからざるが如し、是の如く、佛子よ。菩薩は菩薩の難勝地の中に住在して、一切の自在如意、神通變化の莊嚴は其の中に集在し、一切の自在如意、神通變化の莊嚴は問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば馬耳山王の純淨の寶性にして、一切の菓果其の中に集在し、一切の菓果は取るとも窮盡すべからざるが如し、是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の現前

地の中に住在して、說入因緣集觀、其の中に集在し、說入因緣集觀、聲聞果證は問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば尼民陀羅山王の純淨の寶性にして、一切の大力の龍神其の中に集在し、一切の大力の龍神は窮盡すべからざるが如し、是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の遠行地の中に住在して、種種の方便智其の中に集在し、種種の方便智は辟支佛の果證を說き、問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば斫迦婆羅山王の純淨の寶性にして、自在を得たる衆其の中に集在し、自在を得たる衆は窮盡すべからざるが如し、是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の不動地の中に住して、一切の菩薩の自在を起す道は其の中に集在す、一切の菩薩の自在を起す道は一切の世間界の差別を說き、問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば衆相山王の純淨の寶性にして、諸の大阿修羅衆は其の中に集在し、諸の大阿修羅衆は窮盡すべからざるが如し。是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の善慧地の中に住在して一切衆生の逆順を知る行は其の中に集在し、一切衆生の逆順を知る行は一切世間の生滅の相を說き、問答するも窮盡すべからず。佛子よ、譬へば須彌山王の純淨の寶性にして諸の大天衆は其の中に集在し、諸の大天衆は窮盡すべからざるが如し、是の如く、佛子よ、菩薩は菩薩の法雲地の中に住在して如來の力、無畏、不共の佛法は其の中に集在す、如來の力、無畏、不共の佛法は佛事を示現し、問答するも窮盡すべからず。佛子よ、此の十大寶山王は同じく大海に在り。大海に因りて名を得、是の如く、佛子よ、菩薩の十地は同じく一切智に在り、一切智に因りて名を得。

論に曰く、是の中、上勝の功徳とは一切智の增上の行なる十地に依るが故なり、經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩の十地は、佛智に因るが故に而も差別あり、譬へば大地に依るが故に、十大山王の差別あるが如しとの故に。是の中、(五八)純淨の諸の寶山の喩は八種の地に喩ふ、(五九)厭地と善淨との故なり。復た次に(六〇)諸の山王は衆生數に非ずと衆生數の依なるとの故なり。衆生數に非ずとは二種あり、一には受用の事、二には寶を守護し積聚する事等なり。是の中、受用の事とは二種あり、一には衆生の(六一)四大の增損對治、二には衆生を(六二)長養す。雪山、香山、毗陀略山、馬耳山、此の四山は非衆生數の依なるが故に、藥草、衆香、衆寶、一切の果は其の中に集在す。一切の果とは第六の山中なり。衆生數とは復た六種の難對治あるが故なり。六種の難とは一には貧の難、二には死の難、三には險の難、四には不調伏の難、五には惡業の難、六には怨敵の難なり。第四の山中にて五通の(六三)福田は貧難を對治す、第五の山中にて(六四)夜叉大神の神通變化は死難を對治す、第七の山

【五八】十山の中、初の雪山と香山とは土石の山なるが故に除き、餘の八山は皆金寶の山なるが故に純淨の寶山といふ。

【五九】厭地とは第三地也、彼には淨禪を以て煩惱を厭離するが故に。善清淨とは四地以上なり、是れ皆無漏にして諸の煩惱を斷じ、寶の純淨なるが如き故なり。

【六〇】以下諸山の中の所有の諸物を釋す。神仙等を衆生數とし、藥寶等を非衆生數と爲す。

【六一】藥は能く病を除くが故に四大の增損(疾病)對治と云ふなり。

【六二】香藥は身を資け長養するが故なり。

【六三】五通福田は富を生ずるが故なり。

【六四】夜叉の威力は眷屬を制して害せざらしむるが故なり。

中にて（六五）諸の大龍王は險難を對治す、第八の山中にて（六六）得自在の衆は不調伏の難を對治す、第九の山中にて（六七）阿修羅の說呪は惡業の難を對治す、第十の山中にて（六八）自在、四天王は怨敵の難を對治す。此の一切の山は其の中に集在すとは所說の事の如く、能く一切の物を生ずるが故に其の中に集在すと言ふ。窮盡すべからずとは順行して休息せざるが故なり。彼の十大山は大海に因りて名を得。大海も亦大山に因りて名を得、菩薩の十地も亦復た是の如く同じく一切智に在り一切智に因りて名を得、（六九）彼の因果は相顯するが故なり、經にいへるが如く、佛子よ、此十の大寶山王に同じく大海に在り、大海に因りて名を得。是の如く、佛子よ、菩薩の十地は同じく一切智に在り、一切智に因りて名を得との故に。云何んが度し難きを能く度する大果の功德なる。

經に曰く、佛子よ、譬へば大海の十相を以ての故に數大海と名け、能く壞すること有ること無きが如し。何等をか十と爲す。一には漸次に深く、二には死屍を受けず、三には餘水は本處を失ひ、四には同一の味、五には無量の寶衆、六には甚深にして度り難く、七には廣大にして無量、八には多く大身の衆生ありて依住す、九には潮限を過ぎず、十には能く一切の大雨を受けて厭足あること無し。是の如く、佛子よ、菩

【六五】龍王は時雨を降らし以て險難を治す。
【六六】金剛力士は惡人を摧伏するが故なり。
【六七】說呪の力は其の眷屬を調制して殺害を行ぜざらしむるが故なり。
【六八】須彌頂上の天帝釋等を自在と名け、須彌中腹の四王を四天王と名く、彼能く阿修羅の怨敵を對治す。
【六九】山は海に因りて高勝なるを得、海は山に因りて深廣なるを得るが如く、佛智は海の如く十地は山の如し、因果、高深相ひ顯はるとの意。

薩の行は十相を以ての故に數菩薩の行と名け、能く壞すると有ること無し。何等をか十と爲す、所謂る菩薩の歡喜地の中には漸次に大願を起すが故に、菩薩の離垢地の中には破戒の死屍と共に住せざるが故に、菩薩の明地の中には諸の世間の假名數を捨つるが故に、菩薩の焰地の中には三寶を恭敬して一味不壞を得るが故に、菩薩の難勝地の中には無量の方便智は世間の所作の多寶を起すが故に、菩薩の現前地の中には甚深の因緣集法を觀ずるが故に、菩薩の遠行地の中には無量の方便智を以て善く諸法を擇ぶが故に、菩薩の不動地の中には大莊嚴の事を起すとを示現するが故に、菩薩の善慧地の中には甚深の解說を得て世間の行に通達し、如實に證する所限を過ぎざるが故に、菩薩の法雲地の中には能く一切諸佛の大法明の雨を受けて厭足あることなきが故に。

論に曰く、是の中に度し難きを能く度する大果の功德とは因果相順ずるが故なり。十地は大海の如し、度し難きを能く度して大菩薩の果を得るが故なり。大海に八種の功德あり、應に知るべし。一には易入の功德、經にいへるが如く、漸次に深しとの故に、二には淨の功德、經にいへるが如く、死屍を受けずとの故に、三には平等の功德、經にいへるが如く、餘水は本名を失ふとの故に、四には(七)護の功德、經にいへるが如く、同一味との故に、五には利益の功德、經にいへるが如く、無量の寶聚との故に。六には不竭の功德、謂ゆる深廣等なり、經にいへ

【七】護とは捨の義、餘の一切の差別相を捨つるが故に、又謂はく同一味を護つて恒に失はざるが故なり。

るが如く、甚深にして度り難しとの故に、廣大にして無量なりとの故に、七には住處の功德、大衆生の依住なるを以ての故に、經にいへるが如く、多く大身の衆生ありて依住すとの故に、八には護世間の功德、潮時を過ぎず、水を受けて厭くこと無し、經にいへるが如く、潮限を過ぎずとの故に、能く一切の大雨を受けて厭足あること無しとの故に。大海の相似法なる菩薩の十地の行も亦十種の相應あり、經にいへるが如く、是の如く、佛子よ、菩薩の行は十相を以ての故に、數菩薩の行と名け、能く壞すること有る無しとの故に、是の如き等なり。云何んが轉盡堅固の功德なる。

經に曰く、佛子よ、譬へば大摩尼の寶珠は十の寶性に過ぐるが如し。一には大海より出で、二には巧匠善く治め、三には善く轉た精妙なり、四には善く清淨なり、五には善淨の光澤あり、六には善く攢穿し、七には貫くに寶縷を以てし、八には瑠璃の高幢に置在し、九には一切の光明を放ち、十には王の意に隨つて衆の寶物を雨らし、能く一切の衆生に一切の寶物を與ふ。是の如く、佛子よ、菩薩は薩婆若の心を發して十の聖性に過ぐ、一には初發心に布施して慳を離れ、二には善く戒持の正行を修して明淨となり、三には善く禪定、三昧、三摩跋提を修して轉た精妙ならしめ、四には菩提分は善く清淨に、五には方便神通に善淨光澤あり、六には因緣集觀は善く攢穿し、七には種種の方便智の縷は善く貫穿し、八には自在神通の幢上に置き、九には衆生の行を觀じて多聞智慧の光明を放ち、十には諸佛智位を授く、爾の時に能く一切の衆生は佛事を現作す、卽ち薩婆若を得と名く。

論に曰く、是の中、轉盡堅固の功德とは大摩尼寶の喩なり。經にいへるが如く、佛子よ、譬へば大摩尼の寶珠の如し等の故に。十の寶性に過ぐとは摩尼寶は毗瑠璃等に過ぐ。(七一)出づるを以ての故に取り、乃至一切の光明を放ち示現す。此の寶に八種の功德の(七二)攝あるが故なり。八種の功德とは一には出の功德、選擇して取にる善觀を以てするが故に、二には色の功德、巧匠善く治むるが故に、三には形相の功德、善く轉た精妙なるが故に、四には無相の功德、善く淸淨なるが故に、五には明淨の功德、善淨の光澤あるが故に、六には起行の功德、善く攢穿するが故に、貫くに寶縷を以てするが故に、瑠璃の高幢に置在するが故に、此の三句に示現す、七には神力の功德、一切の光明を放ちて遍く一切處を照すが故に、八には不護の功德、王の意に隨つて衆の寶物を雨らし能く一切の衆生に一切の寶物、正智受位を與ふるが故に、一切の衆生は善根の藏を同うするが故なり。十の聖性に過ぐとは聲聞辟支佛等の性に過ぐるが故なり。聲聞に八種の性有り、四行四果の差別あるが故に、辟支佛に二種の性有り、行果の差別あるが故なり。是の如く十地の影像分を已に說けり。云何んが地利益分なる。

經に曰く、佛子よ、是の菩薩の行なる善く一切種の一切智智を集むる功德集の法門品は、若し衆生にして、深く善根を種ゑざる者は聞くことを得る能はず。解脫月菩薩の言はく、佛子よ、此の一切種

【七一】出づるを以て云云とは經文の海より出るが故に取るとの意にて初句を擧げ、中間を略して第九（一切光明を放ち）と第十（示現）とを擧げて、摩尼寶の他寶に勝れる點を例擧す。

【七二】十を攝して八と爲す。六と七と八の三を合して一となすが故なり。

一切智智を集むる功德集の法門品を若し聞くとを得る者は此の人幾許の功德を成就するや。金剛藏菩薩の言はく、佛子よ、一切智智の所攝の觀に隨ひて、諸の功德を集む、此の一切種一切智智を集むる功德集の法門品も亦復た是の如し、此の人此の法門を聞くことを得て得る所の功德も亦復た是の如し。何を以ての故に、佛子よ、若し菩薩に非ざれば、此の集一切種一切智智の功德集の法門を聞くことを得ず、何に況んや能く信ぜん、何に況んや能く持せん、何に況んや正しく修行せんや。此の經を說く時、佛の神力を以て、得法の力を以て、十方世界の十億の佛土の微塵數に等しき諸佛の世界は六種に十八相に動く、所謂る動、遍動、等遍動、踊、遍踊、等遍踊、覺、遍覺、等遍覺、起、遍起、等遍起、震、遍震、等遍震、吼、遍吼、等遍吼なり。佛の神力を以て得法の力を以ての故に、種種の天華を雨らし、雲の如く下る、天衣を雨らし、天寶を雨らし、天の莊嚴具を雨らし、天蓋を雨らし、天幢を雨らし、天旛を雨らし、天の妓樂を雨らし。天の音聲を雨らして、一切の智地を讃嘆し、及び十地の殊勝の事を讃ず。此の世界の四天下の他化自在天の中の自在天王宮の摩尼寶藏殿に十地の法を說くが如く、是の如く十方一切の世界は周遍して皆此の十地の法を說く。佛の神力を以ての故に、十方十億の佛土の微塵數に等しき世界を過ぎて十億の佛土の微塵數に等しき諸の菩薩あり、來り集りて遍く十方の虛空に滿ち、到り已つて皆是の言を作さく、善い哉、佛子よ、善く菩薩の諸地に住する相を說けり、佛子よ、我等一切も亦金剛藏と名け、金剛勝と名くる世界の金剛幢佛の所より來り、彼の一切の世界は

皆佛の神力を受けて此の法門を説く、衆會も亦是の如く、句字も亦是の如く、釋名も亦是の如く、義趣も亦是の如く、不增不減なり、佛子よ、是の故に我等は佛の神力を受けて來りて此の衆に到るは此の法を證せんが爲めなり、佛子よ、我等の來りて此の衆に至るが如く、是の如く、十方一切の世界の一一の世界の中に四天下の上の他化自在天の中の自在天王の宮摩尼寶藏殿にも、皆十億の佛土の微塵數に等しき菩薩あり、往きて爲めに證を作す。爾の時、金剛藏菩薩摩訶薩は佛の神力を承けて此の經を説く時に、如來隨喜し、彼の一切の菩薩衆、及び一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、摩醯首羅、淨居天の衆は皆大いに歡喜せり。佛は他化自在天の中に在して成道未だ久しからず、第二七日に自在天王の宮摩尼寶藏殿に金剛藏菩薩の説を歡喜奉行したてまつれり。

論に曰く、是の中、地利益とは二種あり、一には生信の功德、二には供養の功德なり。復た次に此の法門の中に決定の信にて、大利益の義を説き示現す。經にいへるが如く、佛子よ、是の菩薩の行の善く一切種一切智智を集むる功德集の法門品と、是の如き等なり。解脫月菩薩の言はく、是の如き等なり。金剛藏菩薩の言はく、是の如き等の故なり。此の經の中に於て復た信を生ずる功德と緣生の義の爲めの故に、神通力を以て六種十八相の動を示現す、經にいへるが如く、此の經を説くとき佛の神力を以て得法力を以ての故にと、是の如き等なり。是の中、六種の動とは一には動、二には踊、

三には上去、四には起、五には下去、六には吼なり、十八相は此の六種の動等の相、下中上なり、是の如く、次第して應に知るべし。器世間の中は四種の衆生聚に依る、一には不善の衆生に依り、二には种種の天を信ずる衆生に依り、三には我慢の衆生に依り、四には呪術の衆生に依る、此の衆生の爲めに下中上の次第に差別するが故に、動乃至吼、是の如きの十八句の異義は應に知るべし。是の如く、生信の功德、及び緣生の義を已に說けり。是の中、供養の功德とは、經にいへるが如く、種種の天華を雨らし、雲の如く下る、是の如き等なり。一切の世界に此の法門を說くとを示現す。無量の法門にて衆生を利益せんが爲めなることを示現す。經にいへるが如く、此の世界の四天下と、是の如き等なり、餘は解し易し。

國譯十地經論終

國譯異部宗輪論序文

嘗て自分は東京帝國大學に於て、この論を學生と共に演習したことのあつた關係上、此論の國譯を擔當することになつた。そこで、初めこの任を受くるや、大體に於て次ぎの方針を立てて見たのである。

第一、本典としては言ふまでもなく、唐譯の異部宗輪論を用ゐること。但し比較參照の便を計る爲めに他の秦譯、陳譯の兩文をも併せ譯出し、出來得るならば西藏譯をも對照すること。

第二、本文に科段を附し、章節によつてその内容を標示すること。

第三、脚註としては、獨り本文の文字的解釋に止まらず、廣く南北兩傳に渉つて、關係史料を調べて、批評的にその眞意を確むること。

第四、解題に於ては、獨りこの論の成立や内容の梗概を明にする許りではなく、進んで結集史分派史に關して、一通り纏まれる意見を述べ、以てこの論を批評的に研究する爲めの參考に供すること。

等であつた。乍併、自分は此の外に、ドクトル荻原雲來氏と共同して倶舍の國譯の方をも引受けてゐたので、順序としては先づ倶舍の方を片附けて、然る後に此の方に及ぶとにしようといふのは最初の

豫定であつたのである。

乍併、出來上れる結果は、不幸にして、豫期通りのものにならないことを、深く遺憾に存じ、且つ申譯ない感のする次第である。實をいへば倶舍の方をもう少し早く片附ける豫定であつた所、思ひの外に手間取つた爲めに、この論の完成に多くの力を注ぐことが出來なく、從つて豫期通りの手運びに及びかねたのである。勿論、倶舍論の方をやりつつあつた時でも、側ら始終、この事に留意し、文學士干潟龍祥君の助を藉りて、先きに演習の際に控へた予の手記を整理し、且つ種種の問題に就いて予の意見を口授したり、君の研究を促したりして、所謂荒仕事の方は早くより著手してゐたけれども、之を精練し整理する上に於て、時間が大に足らなくなつたのである。かくして辛うじて出來上れる成績は實に次ぎの如きものとなつて仕舞つた。

第一、唐譯宗輪論を中心として、秦譯十八部論と陳譯部執輪論とを參照として譯出することは、略ぼ豫定通り。

第二、本文に科段章節を附することも、豫定通りにやつた。

第三、脚註にありては、勿論、本文に對して一通りの解釋を施した上に、所所に於て南傳の論事(Kathā vatthu)中に記載されある諸派思想と對照し、時に之に依つて慈恩以下の誤まれる註釋を訂正した所もある。けれども、廣く支那、西藏等に傳はる種種の異說を比較し批評的に之を論定したり解

釋したりするといふ所まで及びかねた。卽ち此の點に於て、この部分は豫定の六分位しか實現しかねたと言はねばならぬ。

第四、解題中、特に分派史と結集史に對する批評的考察は、最初の計畫では最も重きを置かうとした所であつた。干潟文學士に囑して自分の提出した材料なり意見なりを基礎として更に氏の研究と意見とを加へて、ともかく、分派史結集史を一通り纏めて見ることは、所謂荒仕事中に於ける重なる事業であつたのである。かくして出來上れるものは、眞の未定稿ではあるけれども、實に原稿紙百餘枚に涉る、所謂、「結集史分派史考」である。乍併、之をこのまま本論の解題中に編み入れるには、餘りに詳細で且つ未だ精練を缺く所あり、加ふるに、尙ほ考究を要すべき所あるにも關らず、自分には之をやつてゐる暇がないのである。(來る卅一日出發洋行のため)。ここを以つて、種種考慮の結果、國民文庫刊行會主幹の承諾を得て、之を未定稿のままとして本論の附錄に廻すことにして、責任の所在を明にすると同時に、亦、本論の解題中に是非ともあらねばならぬ必要に應ずることにしたのである。從て眞の解題としては、僅かに本論の外形を述ぶるに止めたのである。かかる窮策をとらねばならなくなつたことは、誠に遺憾ではあるけれども、事情やむを得ざるものとして讀者の諒察を乞ふと同時に、たとひ、未定稿ではあるとしても、ともかく、本文以上の容積に涉る研究論文まで添へる程努力したといふことだけは認識してもらひたいと思ふ。

【原名】先づこの論の原名からするに、已に梵本が散逸して居るから、他の種種の記錄から推さねばならぬ。先づ之を至元法寶勘同總錄に就いて見るに、

梵云必囉地壓必曖叉咀沙悉特羅と。乍併、後の沙悉特羅(Śāstra)の論たることは明なれど、前の必囉地壓必曖叉咀に就いてはいかに之を梵語化すべきか、一寸見當附け能はざるものがある。更に之を南條目錄に徵するに、之れを、

Aṣṭadaśa nikāya śāstra

と記してあるけれども、こは文字通りに十八部論の原名で、異部宗輪論といふ題名その者ではない。

然るに之れを西藏の方面よりするに、この論の原名は、疑もなく、

Samaya bheda-uparacana cakra śāstra であらねばならぬ。卽ち Samaya とは宗義の義 bheda とは差異の義、uparacana は配列の義、cakra は輪の義にて、直譯すれば宗異列輪論とでもいふべきものである。この事はワッシリエーフ(Wassiljew)氏が、この論の西藏譯を更に露譯し、獨譯したものの中にも明であるが、更にターラナータの佛敎史中(獨逸譯一七四頁)にも十八派に關する首著としての Samayabhedoparacanacakra の名を擧ぐるに徵しても明である。眞諦三藏は之を部執異論と譯したるは意味に於て間違なきも、輪の字を脫したるは完からずとて、玄奘は之を異部宗輪論と譯して、原名に對する忠實振りを發揮したのである。

【著者】この論の著者は通例、世友（Vasumitra）と稱せられ、而かも(一)世友に種種ある中、佛滅後四百年の婆沙會中の大論師がそれであるとせられてゐる。蓋しこの論は說一切有部宗の所傳を基礎としてゐる上に、陳唐の二譯に從へば、明かに本文中に世友大菩薩が異部の起れる時を觀じてその次第を述べたことが載つてゐるので、所謂世友大菩薩と有部とを結び付けて、婆沙會中の大論師としたものであらうと思ふ。乍併、翻つて考ふるに、たとひ、序文にした所で、自ら「世友大菩薩は大智覺慧を具して」云云といふは、自作としては可なりに可笑しき上に、よしや世友の作なりとて前述の如く、已に世友といふ人に五人もある以上は、必ずしも婆沙會中のそれと定むる譯には行くまい。現にターラナータの如きは、この論の作者たる世友を婆沙會中のそれと混同してはならぬ、この論の作者は遙か後の人にて、世親の俱舍論に註した人であると態態注意してゐる程である（Schiefner S. 174）。故にこの論の作者を佛滅四百年の世友とする說は、要するに想像にて、研究を終た後にあらざれば、無條件に承認し得べからざるものと言はねばならぬ。乍併、又之れをターラナータの如く世親以後の世友と見る說に對しても、世親の年代論との關係上、俄かに首肯し得べからざるものがある。何んとなれば、この論の初譯たる十八部論はたとひ羅什（支那 A.D. 401—413）の譯ではないとし

【一】世友といふ名を有する論師は尠くも五人あり、一には滅後三百年の初に出でて品類足論や界身足論を作れる人。二には四百年出の婆沙四評家の一人。三には經部の異師にして同論を作れる人。四には滅後千年の人、五には玄奘渡天の時、師とした人等である。（述記發軔第一卷一一二丁）

た所で、少くも後秦時代（A.D. 391―417）に屬する限り、その作者は、それより古かるべく從て世親は一層、古くならねばならぬからである。

かく考へて來ると、この論の作者の何人であるかは、要するに不明といふの外なきに到るのであるが、惟ふに、此の論は、有部の教徒中の或者が、その派に傳はる傳承を、特にその大立物たる世友に歸して述べたもので、而かも恐らく次第に整理され増補されて今日の如きものとなつたのであらう。西藏に傳はる Bhavya の Kayabhetrovibhanga の說のこの宗輪論に頗る類似してゐるのも、蓋しその源は同一傳承に基く爲めで、而かも特に之れを世友に歸せざる所に、此の論の源泉を彷彿し得るものがあらうかと思ふ。從つてその成立年代も不明にて、暫らく之れを佛滅四百年の世友の眞作と見得る餘地を許すとせば、支那の初譯時代までを含めて、卽ち B.C. 1st―A.D. 400 を以て、その成立時代と見る外に、詳しく規定する道があるまいと思ふ。

【飜譯】 次ぎにこの論の譯を見るに、この論は支那に前後三回程譯されてゐる。

第一、十八部論（又は分別部論）

この十八部論は、何人の企てか明ならざれど二部を合集したものである。その初部は梁僧伽婆羅の譯したる文珠師利問經の下卷分別部品より成り、其後部に於て、羅什法師集としてこの論を附して以て合本としたのである。前部の譯者は明であるけれども其後部に關しては經錄の間に異論がある。歷

代三寶記（致六76）には眞諦譯とあれど、こは勿論、誤りであるが、開元錄（結四37）には失譯として而かも秦錄に附し、梁高僧傳（第二）には明に羅什譯としてある。卽ち何れにしても秦時代に譯されたものであることは、例へば他鞞羅の譯に「秦言上座部」とあるによりても明であるけれども、併し羅什譯といふ證據は擧らぬ。とにかく、この十八部論は初譯だけに、體裁に於ても未だ後の二譯程整はぬ上に（こは梵本の相違にも歸因するやうである）、脫文、誤寫、誤解も尠くはないやうである。此の國譯に於て秦譯として參照に出したのは卽ち之れである。

第二、部執異論、陳の眞諦譯（支那AD. 548—569）

これ卽ち第二譯にして、而かも眞諦三藏が阿毘達磨の敎相に通じてゐる學者だけに、その譯も可なりに立派なものである。後に陳譯といふは之を指す。

第三、異部宗輪論、唐の玄奘譯

唐の龍朔二年（AD. 662）に譯出したもので三譯中、最も完備したものと稱せられてゐる。この國譯の本典となつたのは之れである。略して唐譯といふ。

尙ほ、この外にこの論は西藏にも譯された。譯者は法輪（Dharmacakra）といふ人であるけれども、何時頃の譯か、少くも自分としては未だ分らぬ。露のワッシリエーフ氏が之れを露譯して、その佛敎史の末に附してある。（この佛敎史を獨逸譯したのは卽ち、Der Buddhismus, Seine Dogmen, Geschichte

und Literatur, von Wassiljew 1860 St. Petersburg である）

以上の四譯によつて、たとひ梵文は已に散逸して求むることが出來ぬとしても、この論を略ぼ遺憾なきまでに理解し得ることは、誠に學人として吾等の幸福と言はざるを得ぬ。

【本論の組織と立場】以上、本論の形式的方面を說明したから更に、少しくその組織と立場に就て述べて見よう。

本論は大體に於て、二部門より成立する。その第一部門は專ら分派の次第を明にしたもので、言はば教會史であり、第二部門はその各分派の教理を述べたもので、言はば教理史である。而して、その特徵とすべきは、第一部門にありては分派の因緣を明にすると同時に、大體ながらも、その年代をも明にしたことで、恐らくこの點は、南北兩傳の分派史中出色と言つて宜からう。又第二部門にあつては、獨り各派の本計を叙述するに止まらず、その末計の異義をも述べたことがその特徵で、此の點に於て南傳の論事が、教派を名指すことなしに種種の問題を論じたよりも確なものがあると言はねばならぬ。本論の重んぜらるるのは實にこの二大特長を併せ有する所にあるのである。

乍併、ここに注意せねばならぬことは、かく言つたからとて、直ちにこの論の記載を以て、歷史的事實をありのままに示したものと速斷してはならぬことである。已に前にも度度觸れ置いた如く、此の論は、もと、說一切有部宗に傳はる分派觀を述べたものである。從つて、自然、有部臭味強く、そ

れだけ、此論の記事を見るには割引を要するや勿論である。早い話が、この論はその第一部門の系統史に於て、有部を以て正統上座部中の最高位に置いて、他の上座部系の諸派を凡べてこの派の末派として取扱つてゐるけれども、かくの如きは、他の史料と比較對照するに到底許し得べからざる獨斷で、全く爲めにする所ありての構說と判せざるを得ぬのである。同樣にその教理の叙述にありても、專ら有部を標準としてその同異を論ずるの方針をとつてゐるから、到底、第三者が之れを取扱ふが如く公平に行かぬのも亦自然の數であらう。故に、吾人はこの論は分派史に對して誠に得難き史料を提供するといふことを許しながらも、この論を讀むに當つては又常に批評的態度をとり、輕輕に引づられぬやうに注意する必要がある。然らざれば、稍稍もすれば、一家の私見を以て、全體に關する眞理と誤斷するの陋に落ち入ることを免かれぬからである。何れ是れ等のことは附錄に到りて明にならうと思ふけれども。特に一言注意して置くのである。

＊　＊　＊

尙ほ、最後にこの論を研究する爲めの參考書を擧げて置かう。

【註釋】先づ註釋からすれば、本論に續いて權威とせらるる註釋に二通りある。一は陳譯に對するもので、而かも眞諦自身の撰んだ、

部執異論疏　十卷

である。こは、諦師が本論を譯出するや、例によつてその註疏を書いたもので一時は支那にては勿論、日本にても盛に讀まれたものである。乍併、不幸にして、慈恩の述記に壓せられて、今では已に散逸して、僅かに三論玄義、同檢幽鈔、同誘蒙、同冠註、義林章等に引用されあるものによりて、その大體を知り得るに過ぎざるは誠に遺憾に堪へぬ。

その第二は、唐譯に對するもので、而かもこの論の譯場に列して、筆受の役目を勤めた慈恩大師窺基の、

異部宗輪論述記　三卷

である。こは眞諦の疏を參照しその誤まれるを訂して、眞義を傳へんとして作つたものである。爾來、新譯研究の指南とせられてゐるけれども、乍併、之れにも亦怪しき所のあるのを見のがしてはならぬ。

宋註として殘り居るのは何れも述記に對するもので、就中吾人の知れる限り最も便利なるは、豐山の榮天師の宗輪論述記目論五卷(大日本藏經論部中に攝む)と、小山憲榮師の異部宗輪論述記發靭三卷(流布本)とであらう。

【參考書】次ぎに、この論を研究するに當りて、比較考察するの必要あるものを擧ぐるならば、

文殊師利問經　梁僧伽婆羅譯

舍利弗問經　失譯

Kāyabhetrovibhanga. Bhavya 作(註)

Dīpavaṁsa. Ed. & tr. by Oldenberg.

Mahāvaṁsa tr. by Geiger, 1912 London.

Kathāvatthu tr. by S. Z. Aung & Mrs. Rhys Davids

等であらう。又漢譯にては大毘婆沙論二百卷・倶舍論三十卷等も種種の點に於て此の論を研究する爲め、參考書となるものである。この論の、眞の研究は是れ等と比較するによつて初めて達せらるるものであるといふことを忘れてはならぬ。

大正八年十月廿一日

譯者　木村泰賢識

【註】Rockhill's Life of Buddha の末を見よ。

國譯異部宗輪論

(一)序說

佛般涅槃の後、適に滿(二)百餘年にして、聖教に異部興り、便ち不饒益を引く。

(三)【陳】佛滅百年の後、弟子の部執異にして如來の聖教及び衆生の利益を損す。

(四)【秦】正覺涅槃の後、始めて滿百餘歲にして、茲に異論興り、正法漸く衰損す。

展轉して執異なるが故に、隨つて諸部起ること有り。(五)自の(六)阿笈摩に依つて彼れが執を說いて厭はしむ。

【陳】(七)不了義經に於て、言の如く執するが故に失あ

【一】序說に卽ち五偈有り。第一偈は根本分派の年代を示し、第二偈は以後諸部の起りしを說き、第三偈は作者世友の德を讚じ、第四、五の兩偈は作者が正教に依りて諸部の說を沙汰せんとする意志を示す。

【二】年代に關しては附錄第三節參照。

【三】以下〔陳〕とするは異部宗輪論の異譯なる陳の眞諦三藏譯部執異論を指す。(藏四、八〇左以下)

【四】以下〔秦〕とするは同姚秦鳩摩羅什譯とせらるる十八部論を指す。(藏四、七八右—八〇右)右二書に關しては解題參照。

【五】自らの阿笈摩に依つて彼れが執を說いて厭はしむ。陳秦兩譯共略唐譯と同意と解さるるが、その意は「作者世友自身の奉ずる經に依つて、諸部の異說邪執を指摘して、衆生をしてそを厭はしむ」といふにあるが、今西藏譯を見るにやや異るが如し。卽ち「彼等は爭ひつつ自己の所執に依りて論ぜり」とあり、作者世

り。衆生の厭怖を起すことは理敎の說に依らしむるにあり。

【秦】 各各意見を生じ、別衆を建立す。危險甚だ畏る可く、厭離心を生ずべし。

(八)世友大菩薩は(九)大智覺慧を具し、(一〇)釋種の眞の(一一)苾芻なり。(一二)彼の時を觀じて思擇す。

【陳】 (一三)天友大菩薩は苦を觀じて弘誓を發し、(一四)勝智定悲の心を以て此の如き義を思擇す。

等しく諸の世間を觀ずるに、種種の見に漂轉せられて、(一五)(一六)牟尼の語を分破し、彼彼の相當に說くべし。

【陳】 我れ諸の衆生を見るに、種種の見に隨つて流る。故に眞實の義を說いて、佛言の顯はす所の如くならしめん。

友の意志を示すものに非ず。

【六】 阿笈摩(梵 Āgama)。普通は阿含と書す。經典の意なるが、特には小乘經を指す。北傳にては之れを長、中、雜(相應)、增一の四阿含とし、南傳にてはそれに小阿含を加へて五阿含とす。

【七】 不了義經(Neyārtha-sūtram)。究竟義を顯はせる經を了義經(Nītārtha-sūtram)と稱へ然らざるを不了義經と稱す。

【八】 此の一偈秦譯に無し。

【九】 大智覺慧は大智大覺大慧の意。菩薩の德の三種なり。その解釋に四あり、第一は、智は利他の德、覺慧は自利の德、その內諸法の自相を了するを覺とし、共相を了するを慧とす。第二は、聞慧を智とし、思慧を覺とし、修慧を慧とす。第三は、自相作意を智とし、共相作意を覺とし、勝解作意を慧とす。(作意とは心所の一。心意を作動してその境に向はしむるものなり。自相作意とは自相を觀ずる自相觀と相應する作意。共相作意とは四諦の十六行相等共相を觀ずる共相觀と相應する作意。勝解作意とは不淨觀四無量心、有色解脫、八勝處、十遍處等假想觀と相應する作意なり。)第四は、智は總じて自他の二利に通ず、覺は自相、慧は他相なり。

【一〇】 釋種(梵 Śākyaputra)は釋尊の弟子の意にして、卽ち佛教徒の意なり。

【一一】 苾芻(梵 Bhikṣu)。乞士と譯す。出家行者は乞食して、供養を受けて修行するより出家行者を凡て苾芻(舊譯にては比丘、こは方言語及巴利の bhikkhu の音に當るもの)と

【秦】今修多羅に於て、佛の正教を觀察し、眞諦の說に依つて堅固の義を求めん。

審かに佛教を觀じ、聖諦說を依となし、沙中の金を採るが如く、其の眞實を擇取すべし。

【陳】若し佛の正教を知れば、聖諦を根本と爲す。故に實義を取るべきこと猶沙中の金の如くなるべし。

【秦】猶沙礫中に眞金寶を求得するが如し。（一七）我れ先聖に從つて聞く、如來は人中の日なりと。

稱す。

【一二】彼の時とは諸派分裂し相爭へる時の意。

【一三】天友は世友といふに同じ原語 Vasu-mitra の Vasu は世とも天とも譯すること、Vasu-bandhu を世親とも天親とも譯するが如し。

【一四】勝智定悲は大智覺慧に當る。

【一五】牟尼（梵 Muni）は聖人の意、佛を指す。

【一六】「牟尼の語を分破し、彼彼の相當に說くべし」は西藏譯に合し、陳秦の兩譯とは異り、西藏譯は「如來の教は分破して彼彼の宗義を說くに至る」とあり。

【一七】以下の句は唐陳及び西藏譯に無し。恐らく此は次の長行の首におかるべきならん。

第一部　分派の次第

(一八)第一章　根本分派

第一節　根本分派の年代

是の如く傳へ聞く、佛薄伽梵般涅槃の後、(一九)百有餘年、聖を去ること時淹しく、日の久しく沒するが如し。摩揭陀國の(二〇)俱蘇摩城の王を(二一)無憂と號す。(二二)贍部を統攝し、(二三)一の白蓋を感じ、(二四)化、人神を洽ほす。是の時佛法の大衆初めて破る。

【陳】是の如く聞く所、佛世尊滅後滿一百年、譬へば朗日の(二五)頽悉多山に隱るるが如し。百年を過ぎて後更に十六年、

【一八】第一章に關しては附錄第三節參照。

【一九】百有餘年。西藏譯は此れに合す、(Wassiljew, s. 246) 陳秦兩譯共に百十六年とす。但し陳の元明兩本には百六十とあれどそは誤寫ならん。しかし百六十と記するは西藏Bhavyaの說にもあり。(Rockhill, p. 182) 猶年代に關しては附錄第三節參照。

【二〇】俱蘇摩城(梵 Kusuma-pura)譯して花宮城、王宮に花多きを以つて名づけらろ。西域記卷八によるに、此の名は人壽無量歲より數千歲迄の間の城名なり、後、名を改めて華氏城(梵Pāṭali-putra)とせり。そはその地 Pāṭali 樹神より生れし人間の居る所なるによりて、名づけられしなりと。然るに史傳を案するに、大般涅槃經巴利文及びその漢譯本によるに、阿闍世王此の地に

一大國有り、(二六)波吒梨弗多羅と名づく王を阿輸柯王と名づく。閻浮提に大白蓋有り、一天下を覆ふ。是の如き時中に大衆破散す。

【秦】佛滅後百一十六年、城を(二七)巴連弗と名づく。時に阿育王閻浮提に王たり。天下を匡す。爾の時に大衆、部を別ち法を異にす。

第二節　根本分派の原因―五事

城塞を築き、恆河對岸のリッチャビー族を防禦せりと。後Udayin（鬱陀耶）王の時此の地に宮城を營みしことプラーナ書に見ゆ。（附錄第五節註參照）。惟ふに Pāṭali-putra 又は Pāṭali-grāma なる名は古くよりあり、後鬱陀耶がその地に宮城を造りてよりその宮城の在る部分を俱蘇摩城といひその外邊の庶民の住地は依然 Pāṭali-putra といひしならんが、時日の經過と共に、その王城の在りし地は頽廢し、反之庶民の市は益々繁榮し、後には俱蘇摩城は名のみを存するに過ぎす、全勢力は凡て Pāṭaliputra に取られしなるべく、かくなりて後の傳說が西域記の說の如きものとなりしならんか。

【二一】無憂は梵 Aśoka（巴）Asoka）の意譯なり。陳の阿輸柯、秦の阿育はその音譯なり。此の王に關しては附錄第四、五兩節參照。

【二二】贍部。陳及び秦の閻浮提。梵の Jambudvipa の音譯、印度のことなり。須彌山の周圍に四洲あり。その內の南方に在るを贍部とす。Jambu と名づくる樹の多く生ぜる洲（dvīpa）の意。

【二三】一の白蓋を感ず。此の王卽位の始め、鐵輪寶空に飛び、一白雲の蓋贍部洲を覆ふを感ぜしといふを指す。蓋しこれ轉輪王の故事を應用したる傳說なり。輪寶に四あり金銀銅鐵なり。金は四洲を銀は三洲を銅は二洲を鐵は一洲を治する徵、卽ち此の王は贍部洲一洲を治すべき運命を示せるなり。白雲の蓋が洲を覆ふは王の惠が全洲を潤ほすこと白雲の全洲を潤ほすが如きを知らしむる徵なり。

【二四】化人神を洽ほすとは、此の王化、人間鬼神に洽ねく及ぶをいふ。

【二五】頞悉多山に隱る。頞悉多山は梵 Astam-gata の譯なり、卽ち日沒の意。日の沒する山を頞悉多山（Asta-giri）といひ、日沒の事を頞悉多山に入る（Astamgata）といふなり。

【二六】【二七】波吒梨弗多羅、巴連弗。共に Pāṭali-putra の音譯。陳譯に、一大國有りとして此の名を出せり。國とは都の意なり。

【二八】龍象衆。梵 Nāgās Nāga は龍の意もあり、象の意もあり、龍象とせしは兩意を合したる譯なり。さて龍象衆とは何を指すか、佛弟子中の俊英を Nāga と呼ぶことあれば、俊英の衆の意なるやも知れず、又印度西北方に住せし種

謂はく四衆の共に大天の五事を議すること不同なるに因つて分れて兩部となる。一には大衆部、二には上座部なり。四衆とは何ぞ。一に（二八）龍象衆、二に（二九）邊鄙衆、三に（三〇）多聞衆、四に（三一）大德衆なり。其の（三二）五事とは、彼の頌に言ふが如し。

餘に誘はると、無知と、猶豫と、他

族名に龍族なるものあるを以て、或はその族の徒の意なるやも知れず。述記には大天の徒の威勢當り難く慨恨伏し難きこと龍象の如き故に名づくとせるは曲解なるべし。西藏譯は Nāgāś に合す。秦譯の「能」は是れに當るならんも、如何にしてかく譯せしか明ならず。陳譯にて是れに當るは大國衆なるが、これは恐らく原文が Nāgara, Nāgarika（都人）とありしか、又はかく解したるに由る可く、その都を國として大國衆と譯したるなるべし。然も要するに目下の所此の龍象衆又は大國衆なるものは何を指すか明ならず。

【二九】邊鄙衆、及び陳譯の外邊衆の原語は Pratyantaka なるべきなり。若し然りとすれば此れに對するは Madhya-deśa（中國）なるが、Pratyanta の方のみを出だしその對方を出たさざるはやや片手落の觀あり。然しそれは許すとして、此の外邊なるものが何處を指すかは律によりて多少の差あるが、此の場合は如何が測り難し。又、西藏譯には東方衆 (Prācya) とあるが、何れが正しきか不明なり。若し東方衆としてもそは何處を指すか是れ亦その地方の慣用法によりて差異あれば定め難し。唐陳兩譯の原語も或は此の Prācya なりしを、その東方が、同時に邊鄙の地なるより意味を再轉して邊鄙衆或は外邊衆と譯せしやも知れず、秦の因緣といふのは原語を Pratītya（因緣）の意に解して譯したるなるべし。邊鄙衆といふに關し述記は、心、理外に行ずるが故に邊とし、德の稱すべきなきが故に鄙とすとなし、前の龍象衆に比して威勢弱く但名を列れて大天に隨順するのみなるが故に名づくと解し、眞諦の釋亦此れに近きが、何れも曲解に過ぎざるべし。

【三〇】多聞衆（梵 Bahuśrutīyās）は博聞廣學なる衆の意、述記及び眞諦の釋又大意合す、且つ眞諦の釋には此れを慶喜 Ānanda の學徒とす。

【三一】大德衆 (Sthavirās) 及び陳譯の長者衆は上座衆の意、即ち正系を繼げる衆也。述記及び眞諦の釋又大意合するが眞諦は進んで、此れを阿毘曇磨の諸大論師の意とし、滿慈 (Pūrṇa-maitreya) の學徒とすれども、それは過言なるべし。秦譯には是に當るものなし、これは脫語なるやも知れざれどその全體の文勢より見、及び西藏 Bhavya の記載より考ふるに必ずしも然らざるべし。

が入ら令むると、道は聲に因るが故に起ると、是れを眞の佛敎と名づく。

【陳】破散の大衆凡そ四種有り。一に大國衆、二に外邊衆、三に多聞衆、四に大德衆なり。此の四大衆共に外道所出の五處の因緣を說けり。五因緣とは、彼の偈に說くが如し。

餘人衣を染汚すると、無明と、疑と、他に度せらるると、聖道は言の顯はす所と、是れ諸佛の正敎なり。

此の五處を思擇して分れて兩部を成す、一には大衆部、二には上座弟子部なり。

【秦】時に比丘有り、一を能と名づけ、二を因緣と名づけ、三を多聞と名づく。說いて五處有り、以て衆生を敎ふ。所謂、

Bhavya によるに(Rockhill, p. 187)此の處は「Nāga(龍)、Sthiramati(堅意)、及び Bahuśrutiya (多聞) と名づくる (Sthaviras長老等)あり、云云」と。此の堅意は右漢譯の何れに當るかは知れざれど、此れと共に龍及び多聞は各一長老の個人名として擧げ、それ等を總括せる意味に於て Sthaviras(長老等)とあり。此の記載法は必ずしも正しとは云へざれども、兎に角かかる書き方をなせるものありしなるべく、秦譯の原本亦是れに類せしにより、特に大德衆なるものを擧げざりしならんかとも思はる。

【三】五事に關しては附錄第三篇參照。五事の中四事は三譯共に合し、第四は唐陳兩譯合せども秦譯のみ異り、卽ち「親衆に由る」とあるは恐らく原文が Parikṣaṇā とでもありしに因るか。藏譯は唐陳に合し、又南傳 Kathāvatthu, II, 1—5 に見ゆる五事(頌文とはなり居らず)は亦內容略合す。五事の一一についての解釋は諸傳差異あるが、今最も一般的に解せば「餘に誘はる」とは阿羅漢も他「天魔等」に誘惑せられて不淨漏を洩らすことありとの意。「無知」とは、阿羅漢も猶ほ知らざることありとの意。「猶豫」とは阿羅漢も猶ほ疑問を懷くことありとの意。「他が入ら令む」とは阿羅漢も自らは阿羅漢となりしを知らず、必ず他人が汝は阿羅漢に入れりと悟らしめて始めて自ら阿羅漢たるを知るなりとの意。「道は聲に因るが故に起る」とは聖道は苦哉と叫ぶところにより起るとの意。

他の饒益によると、無知と、疑と、觀察に出ると、言說が道を得るとなり。此れは是れ佛(教)なり。
是れより始めて二部を生ず、一には謂はく摩訶僧祇、二には謂はく他鞞羅(秦には上座部と言ふ)なり。

第二章　大衆部の分派(滅後百――二百年)

第一節　第一次分派

後に卽ち此の(三)第二百年に於て、大衆部の中に三部を流出す。一には一說部、二には說出世部、三には雞胤部なり。

【陳】第二百年中に至つて大衆部より又三部を出す。一には一說部、二には出世說部、三には灰山住部なり。

【秦】卽ち此の百餘年の中に摩訶僧祇部更に異部を生ず。一には一說と名づけ、二には出世間說と名づけ、三には窟居と名づく。

第二節　第二次分派

次に後此の第二百年に於て大衆部中に復一部を出だす、(四)多聞部と名づく。

【陳】此の第二百年中に於て大衆部より又一部を出たす、得多聞部と名づく。

【秦】(此の所缺く、恐らく脫文なるべく、後の總列の際には多聞部の名出づ。)

【三】第二百年といふは佛滅後百年より二百年に至る間、卽ち佛滅後第二世紀の意なり。以下亦之れに准ず。說出世部と雞胤部とは本來は同一部なりしなるべきこと、及びそれ等の名稱に關しては附錄第六節參照。

【四】附錄第六節三參照。

第三節　第三次分派

次に後此の第二百年に於て大衆部の中より更に一部を出だす、(三五)說假部と名づく。

【陳】此の第二百年中に大衆部より又一部を出だす、分別說部と名づく。

【秦】又一百餘年中に於て摩訶僧祇部中に復異部を生ず、施設論と名づく。

第四節　第四次分派

第二百年の滿つる時、一の出家の外道有り、邪を捨て、正に歸す、亦(三六)大天と名づく、大衆部の中に出家受具して多聞精進なり。制多山に居りて彼の部の僧と重ねて五事を詳にし、茲に因つて乖諍し、分れて(三七)三部となる、一には制多山部、二には西山住部、三には北山住部なり。

【陳】此の第二百年滿ちて、一外道あり名づけて大天といふ、大衆部中に於て出家して獨り山間に處し、大衆部を宣說す。五種の執異にして自ら分れて兩部を成す、一に支提山部、二に北山住部なり。(三八)

【秦】又二百年中に摩訶提婆外道、出家して支提山に住し、摩訶僧祇中に於て復三部を建立す、一には(三九)支提迦、二には

(三五) 附錄第六節四參照。

(三六) 大天の事に關しては附錄第五節參照。

(三七) 三部の事に關しては附錄第六節五—七參照。

(三八) 陳譯にては支提山部と北山住部との二部を擧げ、西山住部(Aparaśaila)又は東山住部(Pūrvaśaila)を缺く。此は原書に於て然りしならんか。尙上參照。

(三九) 支提加。梵 Caityika.

（四〇）佛婆羅、三には鬱多羅施羅なり。

第五節　大衆部總計

是の如く大衆部は四たび破れ或は（四一）五たび破れ、本末別に說けば合して九部を成ず。一には大衆部、二には一說部、三には說出世部、四には雞胤部、五には多聞部、六には說假部、七には制多山部、八には西山住部、九には北山住部なり。

【陳】（四二）是の如く大衆部は四破（又）五破し、合して七部を成ず。一には大衆部、二には一說部、三には出世說部、四には灰山住部、五には得多聞部、六には分別說部、七には支提山部、北山住部なり。

【秦】是の如く摩訶僧祇の中に分れて九部を成ず。一には摩訶僧祇と名づけ、二には一說と名づけ、三には出世間說と名づけ、四には窟居と名づけ、五には多聞と名づけ、六には施設と名づけ、七には（四三）遊迦と名づけ、八には（四四）阿羅說

【四〇】佛婆羅は Pūrvaśaila（佛婆施羅）か。然かすれば東山住部にして、唐譯になし。然るに後の總列の處には阿羅說とあり、此は阿波羅說（Aparaśaila）なるべく、然れば西山住部にて唐譯に合す。故に前の佛婆羅の佛は阿の誤寫、婆は波の誤寫ならんかとも思はる。ワシレーフは是れを Upara（低）に當つ。（Wassiljew, s. 251）

【四一】五たびといふは大衆部末派の分裂四回と、大衆部が上座部と分れ出でたる根本分派とを合していふなり。

【四二】陳譯は西山住部を缺くを以て八部となるべきに七部とせるは支提山住部と北山住部とを一に數ふるを以て也。然し何故に七部とせるか、若し是を誤寫なりとせば問題なけれど、そは然らざるべし、而して若し理由ありとせば、そは支提山部と北山住部とを同一部と見たるによるか、然しそは前文に合せず、されば分派全體を十八部とする定數に對して、次の上座部の十一部を取れば殘りは大衆部七部となるべきを以て、强ひて支提山と北山住部を一部と見て全體を七部とせるに非ざるか。（附錄第六節參照）

【四三】遊迦は原語何なるか明ならず、或は遊は逝の誤寫、その次に提を脫せるもの、卽ち逝提迦（Caityika）に非ざるか。

【四四】阿羅說は前にも述べし如く阿波羅說（Aparaśaila）の波を脫したるならんか。

と名づけ、九には鬱多羅施羅部と名づく。

第三章　上座部の分派

（滅後二百──四百年）

第一節　第一次分派

其の上座部は、(四五)爾所の時を經て〔猶〕一味和合せり。(四六)三百年の初めに(四七)少乖諍あり、分れて兩部となる。一には說一切有部、亦は說因部と名づけ、二には卽ち本上座部、轉じて雪山部と名づく。

【陳】上座弟子部は世に住して若干年、第三百年中に至りて小因緣有りて分れて兩部と成る。一には說一切有部、亦は說因部と名づけ、二には雪山住部、亦は上座弟子部と名づく。

【秦】三百年中に至りて上座部中に諍論事に因つて立ちて異部をなす。一は薩婆多と名づけ、亦は因論と名づく。先きの上座部

【四五】爾所の時とは述記は解して二百年間とす。然し大衆部は滿二百年間に凡て分派し、上座部は其の間に少しも分裂なかりしといふは信をおき難きこと附錄第六節の終りに說くが如し。

【四六】三百年といふは、上來の書き方によるも、又陳論に「第三百年中」とあるによるも、又西藏譯によるも、佛滅後二百年より三百年に至る間、卽ち佛滅後第三世紀の意とすべし。以下又之れに准ず。

【四七】小乘諍とは述記に解して本來上座部は經を主とし律論を從とせしが、此の時に至り迦多衍尼子(Kātyāyanīputra)出で上座部中に出家して、發智論を作り、論を主とし經律を從とせり、是れ上座部の說に反するを以て諍生じ別れて一派をなし說一切有部となると。又別解を擧げて曰はく、未だ必ずしも此の時迦多衍尼子生ぜざれども、上座にも大天の五事を許すもの出で來り、それを許さざるものと相諍ひて兩部となる、前者の方は雪山部、後者は有部なりとす。何れの解にも、その諍が大天の五事の時の如く大なるものならざりしを以て小乘諍といふなりとす。此れ等の說に關しての批評並に說一切有部・說因部に關しては、附錄第六說一五を見よ。又雪山部に關しては同一二を見よ。

は二に(四八)雪山部と名づく。

第二節　第二次分派

後に卽ち此の第三百年中に於て說一切有部より一部を流出す、(四九)犢子部と名づく。

【陳】此の第三百年中に於て說一切有部より又一部を出だす、可住子弟子部と名づく。

【秦】卽ち此の三百年中に薩婆多部中に於て更に異部を生ず、犢子と名づく。

第三節　第三次分派

次に後此の第三百年に於て、犢子部より(五〇)四部を流出す、一には法上部、二には賢冑部、三には正量部、四には密林山部なり。

【陳】此の第三百年中に於て可住子弟子部從り又四部を出だす、一には法上部、二には賢乘部、三には正量弟子部、四には密林住部なり。

【秦】卽ち此の三百年中に犢子部復異部を生ず、一は達摩鬱多梨と名づけ、二は跋陀羅耶尼と名づけ、三は彌離、亦は三彌底と名づけ、四は六城部と名づく。

【四八】此の文面によれば薩婆多亦は因論と、此の上座部亦は雪山部の異となり居り、此の上座部と雪山部とを同一と見ること、唐譯及び陳譯に同じけれど、後の總列の時には是れを分つ、その條參照。蓋し上座部は雪山部となりてはその說大に變化せるを以て此れを別に見るも亦理有り。附錄第六節一二參照。

【四九】犢子部（陳、可住子弟子部）に關しては附錄第六節一四參照。

【五〇】各部に關しては附錄第六節一六乃至一九を見よ。

第四節　第四次分派

次に後此の第三百年に於て、說一切有部より復一部を出だす、(五一)化地部と名づく。

【陳】此の第三百年中に於て說一切有部より又一部を出だす、正地部と名づく。

【秦】即ち此の三百年中薩婆多中に更に異部を生ず、(五二)彌沙部と名づく。

第五節　第五次分派

次に後此の第三百年に於て、化地部より一部を流出す、(五三)法藏部と名づく。自ら我れは(五四)采菽氏師に襲ると稱す。

【陳】此の第三百年中に於て正地部より又一部を出だす法護部と名づく、此の部自らは、勿伽羅は是れ我が大師なりと說く。

【秦】彌沙部中又異部を生ず、師主因執連に因つて曇無德と名づく。

【五一】化地部に關しては附錄第六節一三を見よ。

【五二】彌沙部は彌沙塞（Mahīśāsaka）の畧を訛したるなり。

【五三】法藏部に關しては附錄第六節二〇を見よ。

【五四】采菽氏。梵 Maudgalyāyana（巴 Moggallāyana）の意譯なり。mudga(豆) lā(採る)と解したるなり。音譯しては目犍連、又略して目連とも書す。陳の勿伽羅又同じ。秦の因執連は目犍連の誤寫か。此の人は釋尊の弟子にして釋尊入滅前に死せり。此の人の說が久しく祕せられ居りしを今顯はし出して傳ふるなりとして自らの說に權威を持たしめんとせるなり。

第六節　第六次分派

三百年末に至つて、說一切有部より復一部を出だす、(五五)飮光部と名づく、亦善歲部とも名づく。

【陳】此の三百年中に於て說一切有部より又一部を出だす。善歲部と名づく、亦飮光弟子部とも名づく。

【秦】卽ち此の三百年中に薩婆多部中に更に異部を生す、優梨沙と名づく、亦迦葉惟とも名づく。

第七節　第七次分派

(五六)第四百年の初めに至つて說一切有部從り復一部を出だす、經量部と名づく、亦說轉部と名づく、自ら我れは(五七)慶喜を以て師となすと稱す。

【陳】第四百年中に至つて說一切有部より又一部を出だす、說度部と名づく、亦說經部と名づく。

【秦】四百年中に於て薩婆多部中に更に異部を生す、大師鬱多羅に因つて僧迦蘭多と名づく、亦修多羅論と名づく。

【五五】飮光部亦は善歲部に關しては附錄第六節二一を見よ。秦の優梨沙はVarṣa の音譯にてSuvarṣa (善歲)の Su の略せられたるものなり。年代は唐譯のみ三百年末となり居り、他譯及び西藏譯は何れも末の字なし。

【五六】第四百年といふは第四世紀の意にとるべきこと前例の如し。經量部、陳の說經部、秦の修多羅論は梵Sautrāntika の譯なること、說轉部、陳の說度部、秦の僧迦蘭多は、梵Saṁkrāntika の譯なること、及び此の二者が同一なりや否やに關しては附錄第六節二二參照。

【五七】慶喜は卽ち Ānanda (阿難)の意譯にして、此の部は經を主とする所より經を主として說きし阿難を部師とするは有り得可きことなり。陳譯には此の名を擧げず。秦は鬱多羅 Uttara の名を出だす、西藏譯には Dharma-uttara 或は Uttara-dharma とす、此の名に關しても亦同上。

第八節　上座部總計

是の如く上座部は七破或は（五八）八破にして本末を別に說けば十一部と成る。一には說一切有部、二には雪山部、三には犢子部、四には法上部、五には賢胄部、六には正量部、七には密林山部、八には化地部、九には法藏部、十には飲光部、十一には經量部なり。

【陳】是の如く上座弟子部は合して十一部を分成す。一には說一切有部、二には雪山住部、三には可住子弟子部、四には法上部、五には賢乘部、六には正量弟子部、七には密林住部、八には正地部、九には法護部、十には善歲部、十一には說度部なり。

【秦】是の如く上座部中分れて十二部となる。一には上座部と名づけ、二には雪山と名づけ、三には薩婆多と名づけ、四には犢子と名づけ、五には達摩鬱多梨と名づけ、六には跋陀羅耶尼と名づけ、七には彌離底と名づけ、八には六城部と名づけ、九には彌沙塞と名づけ、十には曇無德と名づけ、十一には迦葉惟と名づけ、十二には修多羅論部と名づく。

【五八】八破といふは本上座が大衆と分るる時をも加ふるが故なり。總數は唐譯も陳譯も十一部とす。述記は根本上座と雪山部とを同一と見、十一は本末合しての數なりとす。秦論は根本上座と雪山とを各別部と見、本末合して十二とす。此等數の論に關しては附錄第六節の終りを見よ。

第二部　各派の教理

（五九）是の如き諸部の本宗末宗同義異義を我れ今當に説くべし。

【陳】此の諸部は是れ執義の本なり。執義に異有り、我れ今當に説くべし。

【秦】今當に根本及び中間義を説くべし。

第一章　大衆、一説、説出世、雞胤四部の本宗同義

此の中に大衆部と一説部と説出世部と雞胤部との本宗同義とは、謂はく、四部同じく説く。

【陳】是執義の本とは、大衆部、一説部、出世説部、灰山住部、此の四部の是執義の本は、此の諸部は説かく。

【秦】彼の摩訶僧祇、一説、出世間説、窟居、此の根本は皆説かく、

【五九】以下各部の宗義を叙す。本宗末宗同義異義とは、本宗同義（梵Mūla-samaya）、末宗異義（梵Antara-samaya）と配すべく、本宗同義とは、各部が分れし時に於けるそれ自らの宗義なり。有部に於ける三世實有法體恆有といふが如し。末宗異義とはその各部が分れて後に於て、各各その部内に於て又異論を立てたるその異義を指すにて、有部に於て、後に法救妙音世友等各自別別の異見を立てしが如きを指す。陳譯は意味不明なるが如きもかく解すべきものなり。秦譯は文字通りに譯したるなり。

第一節　(六〇)佛陀論

諸佛(六一)世尊は皆是れ出世なり。(六二)一切如來には有漏の法無し。

【陳】(意全合)

【秦】佛世尊は一切出世間なり。如來には是れ世間法有ること無し。

(六三)諸の如來の語は皆法輪を轉ず。

【陳】(意全合)　【秦】(同上)

佛は一音を以て一切法を說きたまふ。

【陳】(合す)

【秦】盡く一切事一切相を說きたまふ。

(六四)世尊の所說には不如義無し。

【陳】(合す)

【秦】一切義說なり。

【六〇】此の佛陀論(併せて次の菩薩論)は大衆部一般が上座部と異る根本主要點なり。

【六一】K. V. II, 10. "Buddhassa Bhagavato vohāra lokuttaro ti" (世尊の肉體それ自身出世間なり。)即ち南傳の方意味明瞭なり。

【六二】K. V. IV, 3 に同意のこと見ゆ。此の句は、佛身中の大種所造の根境も亦皆無漏法なり、一切煩惱、並に習氣永斷の故にと說くなり。有部等は反之、前十五界(五根五境五識)は如來と雖も有漏なり。何となれば佛身も他人に緣ぜられてその煩惱を隨增するが故なりと。

【六三】此の句 K. V. に見えず。此の句の意は、佛の發したる語はその何事たるを問はず、凡べて利益を爲すが故に皆指導法輪なりとす。有部等は反之唯八聖道のみが轉法輪にして他は然らずとす。婆沙論百八十卷に詳し。例へば、佛、阿難に問うて「今日雨降るや否や」といへるが如き、此は無記なれば法輪を轉ぜずとするが有部等なり。大衆部は然らず、此れ利益あり、佛は一切知なり、知らざることなし、然かも問ふは知らずして知れりとするものの增上慢を除かんが爲めなり。此の大衆部の說を取るものは以上の外、說假、制多山、西山、北山と上座部中の法藏、飲光の十部なり。有部の說を取るものは雪山、犢子、法上、賢冑、正量、密林山、化地、經量及び多聞なり。

【六四】世尊の所說は凡て實義に合するもののみなり。

(六五)如來の色身は實に邊際無し。

【陳】【秦】(共に合す)

(六六)如來の威力も亦邊際無し。

【陳】如來の威德勢力も無邊なり。

【秦】光明無量なり。

(六七)諸佛の壽量も亦邊際無し。

【陳】(合す)【秦】(合す)

(六八)佛は有情を化して淨信を生ぜ令めて厭足心無し。

【陳】如來衆生を敎化して樂信を生ぜ令めて厭足心無し

【秦】(六九)信樂を生ぜしめて厭足有ること無し。

(七〇)佛に睡夢無し。

【陳】如來には常に睡眠無し。

【秦】(陳に合す。)

(七一)如來は問に答ふるに思惟を待たず。

【六五】以下の三はセイロンの上座部にては後には認めしものなるか、K. V. の覺音の註にはその口吻を漏せり。(K. V. XXI, 5. comment.)ここに色身とは三祇多劫を經てその因に報酬して法界を修得せる身のことにして化身として丈六の身に非ず、丈六の身は應機出現せるものにて實の佛身に非ず、實の佛身なる報身は廣大無邊なりとす。有部等は反之、丈六身を實身とし從つて邊際有り、或は大身を現じ或は小身を現ずる等は化身なりとす。

【六六】佛は作意せざるも一刹那中に能くその威力十方一切世界に遍ずとす。他の部は反之、作意せざる時は但三千大千世界に遍ずるのみ、作意して始めて一切世界に遍ずるなりとす。

【六七】諸佛報身の壽量は有情界の存する限り無盡なりとす。反之、有部等は四神足により壽命を引いて一劫、若しくは一劫餘、延長せしむるを得るも、そは諸佛本來の壽命に非ずとす。

【六八】佛は有情を敎化し淨信樂を生ぜしめて毫も厭足することなし。從つて報身は有情の有らん限り涅槃に入ることなし、雙樹下に涅槃を示すが如きは機緣に從つて隨類の相を現ぜしのみと。有部等は反之、是れを以て如來永久に入滅せるなりとす、卽ち佛には厭足心あることとなる。

【六九】秦の原文に「念信樂生」とあるは、念は令の誤りか。

【七〇】睡夢は散心に在るもののみに有るものなれば、佛の如く常に定心に在るものには無しとす。睡夢の原語はSvapna

【陳】（合す）

【秦】 七二 問に答ふるに思無し。

（七三）佛は一切時に名等を說かず、常に定に在るが故なり。然るに諸の有情は名等を說くと謂ひて歡喜踊躍す。

【陳】如來出だす所の語は、皆衆生をして愛樂心を生ぜ令むるも、如來は心恆に觀に在つて、寂靜にして不動なり。

【秦】言說する所無く、常に其の心を一にす。群生は無種種無數に皆如來より說を聞きて解す。

（七四）一刹那の心に一切法を了ず。（七五）一刹那の心相應の般若は一切法を知る。

【陳】如來の一心は能く一切境界に通ず。如來一刹那相應の般若は能く一切法を解す。

【秦】如來一心に一切法を知る。一念相應の慧は一切法

なりしなるべく此語は一字にて睡とも夢ともなる、卽ち睡と夢との間に區別なき也。故に陳秦及西藏譯はただ睡眠と譯し夢の語を附せず。されど部によりては睡と夢とを分けて睡はあれども夢は無しといふあり（有部）、或は睡夢共に有りといふ有り。故に唐譯は睡と夢との二語を用ゐて兩方共無しとする大衆部の主張を明に知らしめんとせしなり。

【七二】思惟を待たずとは、問に答ふるに際し用意工夫をなさず、直に自然に答へて然かもそれが適當の答となり居るなりといふ意。

【七二】秦の原文は「無間思答」とあれど、文字の顚倒せしならん。

【七三】述記は此の句と、前の「思惟を待たず」とを連絡あるものと見て解せしが如く、卽ち曰く、「大衆部は佛は名句文等を思惟工夫して說かず、任運に出づる語は皆整然契理なりとす。反之、有部等は佛は工夫なけれども名句文等を思惟して說く、若し思惟せずんば、その語は無記にして善性に非ずとす」と。されど陳秦及西藏譯より判ずるに前句と此の句とは獨立なるべし。而して獨立として解する時は「如來は常に定に在るが故に分別心なし、從つて分別心より生ずる名等無し、故に名等を說かず云云」となるべし。

【七四】陳秦及西藏譯共に「一刹那」の語無く、ただ一心にとあり，原文亦然りしならん。一心に一切法を了すとは、一心能く一切外境を知り、又心の自體と、自體所具の差別とを知るなり。又、諸法は無我空なりとその共相を知ると共

を覺す。

諸佛世尊は（七六）盡智と無生智と恆常に隨轉して乃し般涅槃に至る。

【陳】【秦】（共に意合す）

第二節　菩薩論

（七七）一切菩薩は母胎の中に入りて皆羯刺藍、頞部曇、閉尸、鍵南を執受して自體と爲さず。

【陳】一切菩薩は胎中に入りて柯羅邏、頞浮陀、卑尸、伽訶那捨佉、波羅捨佉、雞捨盧摩那佉等有ること無し。

【秦】菩薩は母胎を受けず。

一切（七八）菩薩は母胎に入る時、白象の形となる。

【陳】（合す）

一切菩薩は母胎を出づる時皆（七九）右脇より生ず。

【秦】白象形にして神を母胎に降す。一切菩薩は右脇

に、又その差別と自性とを知るなり。法藏及び化地部は、心所と具有法とは之れを緣ずるを得れども、心の自體を知ることは能はずとし、有部は外境は之れを了知し、又共相は之を緣ずれども、その際心の自性、相應、共有を緣する能はずとす。唐譯はその一心を一刹那の一心と見るを以て猶問題は精細に進めり。

【七五】古來日本にては此の句を「一刹那の心、般若に相應して」と訓ずれど、陳秦及び西藏譯によるも、亦述記の釋によるも、その訓は誤りなり。「一刹那の心相應の般若は」とすべし。前句は一心（卽ち心王）が一切法を了するを說き、此の句は、心王に相應して起る心所法なる般若（卽ち智慧）が一切法を了するを說く。

【七六】盡智（Kṣaya-jñāna）とは、我れ已に現在の苦果を滅盡せりと自覺せる智をいふ。無生智（Anutpāda-jñāna）とは、我れにはもはや未來の苦果は生ぜずと自覺せる智をいふ。大衆部にては、此の二智は一體なる般若の二作用に過ぎず、故に一切時に於て此の一體二用恆に隨轉伴起すといふなり。有部は反之、二智は別體なりとし、二體同時に活動することは能はずとす。然るに大衆部は又解して、佛の漏盡身中に起る無漏智を盡智とし、後有不生身中に起る無漏智を無生智と稱すといふ。有部は又反之、佛身を漏盡身無生身と云ふことは許せども、其の智を無漏智といふは不可なり。佛智に無記あるを以てなりとす。乃し般涅槃に至るとは、佛は有情界の存する限り盡未來際入滅することなきも

より生ず。

(八〇)一切菩薩は欲想恚想害想を起さず。

【陳】【秦】(共に意合す)

(八一)菩薩は有情を饒益せんと欲するが爲めに、願つて惡趣に生じ、意に隨つて能く往く。

【陳】 若し菩薩願つて惡道に生ぜんと欲する有らば、願力を以ての故に卽ち往生を得、菩薩は衆生を敎化成就せんが爲めの故に惡道に入るなり。煩惱業の爲めに繫縛せらるるが故に此の生を受くるにあらず。

【秦】 衆生の爲めの故に願つて惡趣に生じ、一切煩惱の衆生を成就す。

第三節　其の他の法相論

(八二)一刹那の現觀邊の智を以て遍ねく四諦諸相の差別を知る。

のなるが、若し有情界盡き、從つて佛入滅することありとせば、その時迄といふ意にて、換言せば永久不斷にといふ意なり。

【七七】菩薩とは最後身の菩薩卽ち次は必ず佛となるべき菩薩の意。羯刺藍(梵Kalalam)は受胎後最初七日間、凝滑の狀態にある間をいふ。頞部曇(梵Arbudam)は譯して皰、二七日の狀態。閉尸(梵Peśi)は漸く肉團となりたる三七日の狀態。鍵南(梵Ghanam)は漸く堅厚となりたる四七日の狀態。第五七日を波羅捨佉(梵Paraśākha)と稱し、此の時に至りて、始めて身體の諸根具備するなり。以上は、古來印度にていふ胎兒生成の順序なり。大衆部にては最後身の菩薩は入胎する時は尋常人の如くならず、別に清淨なる造色大種を以て自體となし、右の内四位を經ず、直ちに第五位に在りといふなり。陳譯のみは第五位なる波羅捨佉と及び雞捨盧摩那佉(梵 Keśa-roma-nakha頭髮、身毛、爪の意)をも受けずとす。原文を異にせしものならん。

【七八】菩薩入胎の時白象の形となるとは、白象神話について二傳あり。瑞應經及び因果經は白象に乘りて來るとし、普曜經は白象の形を作して來るとす。大衆部は後者の說を取る。然しながらその白象の形を作すといふも、大衆部は中有(死有と生有との中間有)を認めざれば白象の形はただ入胎の相にして菩薩の中有が象なりといふに非ず。有部は白象は中有にもあらず、又白象の相を表はすにもあらず、ただ大妃夢中に見る吉祥相のみ

【陳】一心に正しく四聖諦を對觀し、一智にて四聖諦及び四聖諦の相に通ず。

【秦】一切聞知して生聖諦を觀ず。

(八三)眼等の五識身は染有り離染有り。

【陳】五識中に染淨色有り。

【秦】欲有り離有りと說く。

(八四)色無色界にも六識身を具す。

【陳】色無色界に亦

とす。

【七九】脇より出づることは必ずしも佛のみならず、古來印度の文學中に大偉人の出生を叙するに用ゐられあるを見る。されど、是れが佛傳特有のものとなりて後は、それに何等かの說明を要するなり。述記には卽ち四理由をあげ、一、中道を示さん爲め、二、母をして憂無からしめん爲め、三、剖腹の苦痛無き爲め、四、凡夫に超越する爲めとせり。一と四とは佛教者の說明として適當なれど、二と三とは何等意味をなさず。次に左右二脇ある內、特に右脇よりとせるは印度にては古來右を尙ぶ風あるによるとは正解なり。

【八〇】大衆部にては、菩薩は第二阿僧祇劫(Asaṃkhyeya-Kalpa)に於て已に聖位(Ārya)に入り見道以上なり、故に慾恚害の三想無し、況んや、最後身の菩薩に於てをやとす。他部は最後身の菩薩にも猶三想有りとす。

【八一】K. V. XXIII, 3. 參照。大衆部は第二阿僧祇劫に於て已に聖位に入るが故に、業感によりて惡趣に生ずることなし。されど、衆生敎化の爲めに自ら發願して惡趣に生ずることを得とす。有部等は、菩薩三阿僧祇劫中は猶惡趣に墮す、百劫位卽ち忍位(Kṣānti)に至りて以後は惡趣に生ずべき業種子を斷ずるが故に生じ得ずとす。

【八二】修行者が見道位に入るや、無漏の智によりて欲界の四諦と、上界のそれと卽ち上下八諦を如實に觀察して、所謂、見惑を斷ず、之れを聖諦現觀と名づく。是の現觀の仕方に關して頓漸二說あり。漸現觀說とは、有部等の主張する所、十六心にて之れを觀じ終るといふなり。頓觀とは大衆部の主張する所、一刹那の心によりて四諦の十六行相を觀察すといふなり。卽ち本文に揭ぐるは此の頓現觀說を述べしものなり。而かし此の文に從へば大衆部にても、初めはやはり漸次に觀察し行き、最後の十六心の後に於て勝れたる世俗知を起し、それに依つて一時に一心を以て四諦十六行相を觀ずといふ義なるが如し。是の漸頓の爭に就ては俱舍論廿三卷十一—十三を見よ。)

十六心とは、欲界の四諦(法)と無色界の四諦(欲界の法に比類して類と稱す)との八諦に各各、忍(忍許の義、眞理を信忍して惑を起さざる位にし

六識聚有り。
【秦】　欲色無色界に六識身を具す。

(八五)五種の色根は肉團を體と爲す。眼は色を見ず、耳は聲を聞かず、鼻は香を齅せず、舌は味を嘗めず、身は觸を覺せず。
【陳】【秦】(共に意合す)

(八六)等引の位に在つて語言を發すること有り、亦調伏心有り、亦諍作意有り。

て、斷道とす)と智(決定の義惑を離れ已つて正しく理を決定するを以て之れを證道とす)とあり、合せて十六心となる。卽ち、一、苦法智忍。二、苦法智。三、集法智忍。四、集法智。五、滅法智忍。六、滅法智。七、道法智忍。八、道法智。九、苦類智忍。十、苦類智。十一、集類智忍。十二、集類智。十三、滅類智忍。十四、滅類智。十五、道類智忍。十六、道類智なり。十六行相とは、苦諦を觀ずるに苦、空、非常、非我の行相を以てし、集諦を觀ずるに、因、集、生、緣の行相を以てし、滅諦を觀ずるに、滅、靜、妙、離、道諦を觀ずるに、道、如、行、出の行相を以てするをいふ。

【八三】　ここに五識身といふは、身は集團の意にして、肉身とか身體とかいふ意にあらず。有部は前十五界(五根、五境、五識)は有漏のみなりと說くを以て、五識は染有りて、離染無しといふ。犢子部は兩方共無しとし、大衆部、化地部は兩方有りとす。K. V. VIII, 4 參照。

【八四】　K. V. VIII, 7, 8 參照。有部は二禪以上には五識皆無しと說くに反し、大衆部は色無色界に於ても十八界を具すと主張す。無色界に色有りとするは矛盾の如けれど、大衆部は無色界の色は細色にして前二界の如き麤色に非ざるが故に不可なしと。

【八五】　感覺的認識が五根によるか、五識によるかについては諸派の間に異論あり。大衆部は所謂識見家にして、五根はただ肉團より成るものに外ならざれば、外界に對する窓の如きものにて、それ自身には認識力なしといふなり。有部にても之れに關しては諸說あれど、世友の根見說を正義とす。

【八六】　等引(梵Samāhita)とは禪定のこと。此の一文の意は、定に在るものは唯定境を緣ずるのみならず、一心多緣にして、散境たる語聲をも緣じて語を發するを得。然かも猶調伏心(定境を緣ずる心)有り。調伏心有れども語を發するは散境を緣ずる心卽ち諍作意有るが故なりとなり。有部は之れに反す。

【陳】若し心定に在るも亦語有るを得、拆伏心恆に有り、相壞心恆に有り、是の故に凡夫に上下有り。

【秦】禪定の中間に亦言說有り、亦調伏心有り、亦思惟を攝受す。

(八七)所作已辨すれば法を容受すること無し。

【陳】已に法を成就すれば所處無し。

【秦】一切作法に處所有ること無し。

(八八)諸の預流の心心所の法は能く自性を了ず。

【陳】須穏多阿半那の心及び心法は自性を知る。

【秦】須陀洹の心數心は其の自を知る。

(八九)阿羅漢にも餘の爲めに誘はるること有り、猶ほ無知有り、亦猶豫有り、他、悟入せしめ、道は聲に因つて起る。

【陳】阿羅漢多にも他が不淨を以て其の衣を染汙すること有り、阿羅漢多にも無知有り、疑惑有り、他に度せらるる有り、聖道は亦言の爲めに顯はさる。

【秦】阿羅漢にも他の饒益に從ふこと有り、無知(あり)、疑有り、他の觀察に由り、言說は道を得。

【八七】大衆部は、所作已辨して無學位に達せば、法の差別相に執著せず、直ちに因緣所生の理を覺るといふ。有部は所作已辨すとも猶習氣の不染汙無智あるが故に法に執著し、直ちに因緣所生の理を覺り得ずとす。

以上は述記の釋に從ひしなるが、陳譯及びその眞諦の釋に從へば、所處とは所著處と受生處との意に解せり。何れを正解とすべきか未だ判定し得ず。

【八八】預流(Srota-āpanna)とは聖者の流れに入りしといふこと、聲聞修業の第一果なり。諸有情及び他の三果(一來、不還、聖者)も亦心心所の法は自性を了ぜども特に預流の時に於て始めて明了となるを以てなり。自性を了知すといふに二義あり。一は預流なることを了知する意、他は心心所が自體心心所を了知すとする意なり。而して他部の說に對せば後者の義適切なり。他部は諸法非我を觀する時、能觀の自體を除き、第一念にあつて自體を觀すと。

【八九】此の文は卽ち五事を擧ぐ、五事に關して附錄第三節參照、南傳にては K. V. II, 1—5に見ゆ。

(九〇)苦は能く道を引く。

【陳】苦を說くは亦是れ道なり。

【秦】(此の句と次の句と無し)

(九一)苦の言は能く助く。

【陳】苦を說くは亦是れ因なり。

(九二)慧は加行となつて能く衆苦を滅し、亦能く樂を引く。

【陳】般若相應して苦を滅す。

【秦】智慧は方便となりて、生死を離るゝを得。亦安樂を得。

(九三)苦は亦是れ食なり。

【陳】苦受は亦是れ食なり。

(九四)第八地中に亦久住を得。乃至(九五)性地法は皆退有りと說く可し。

【陳】第八も亦久住す。乃至性地法は退す。

【九〇】苦受は厭怖心を起すが故に聖道を引生す。K. V. II, 6 參照。

【九一】五事中の第五と同意。K. V. XI, 4 參照。

【九二】述記の解によれば、三學の中、慧のみが衆苦を滅する力あり、戒と定とは然らずと。されど、此の解釋が果して正しきや否やは他の材料を得るに非ずば判定し難し。

【九三】此の一句は秦譯及び西藏譯に無し。句の意は、苦(樂捨は勿論なるが)も吾等の壽命を持する所以の要素なれば食なりといふなり。さて此は如何なる種類の食と見る可きか。倶舍論等には四種の食を擧ぐ、卽ち段食、觸食、思食、識食なり。苦を食とせば此の內の何れに入るべきか。惟ふに觸食の中へ入るを至當とせんも、由來苦を食とすることは大衆部特有のものなれば、他部にていふ範疇には適切には塡まらざるべし。

【九四】第八地とは預流向卽ち見道位なり。有部等は此の位は十五刹那のみにて、久住することなしとすれど、大衆部等は猶久住すとす。

【九五】性地法とは世第一法なり、卽ち世俗法中第一なり。初發心より世第一法に至る迄は退有り。有部等は世第一法は苦法忍得にして忍以後は退無き故此の法退無しとす。

【秦】第八より退す。乃至種性法も亦退有りと說く。

(九六)預流には退の義有り、阿羅漢には退の義無し。

【陳】毱多阿牛那には(九七)退法あり。阿羅漢多には退法あらず。

【秦】(九八)須陀洹には退法あり、阿羅漢には退法有らず。

(九九)世間の正見無く、世間の信根無し。

【陳】【秦】(合す)

(一〇〇)無記法無し。

【陳】(合す)

【秦】(原文に無有記法とあれど、有は無の誤りなるべし)

(一〇一)正性離生に入る時は一切の結を斷ずと說くべし。

【陳】若し人正定に入らば一切の結滅す。

【九六】四果の有退無退を部について表記すれば、
大衆化地——前三退、第四無退。有部——初果無退、後三退。經量——初後無退、中二退。阿羅漢有退無退に關しては K. V. I, 2 に正量、犢子、有部、及び大衆部中の或るものは、阿羅漢有退を說くとあり。

【九七】退法とは退の義といふと同意。

【九八】秦譯原文には阿羅漢亦有退法とあれど、亦は不の誤寫ならん。

【九九】世間のとは「世間的の」といふ意卽ち「有漏の」といふ意なり。有漏の正見、信根は無しといふなり。慧及び信の心所はあれど、その體に勝用なき故に根といはず、無漏の慧と無漏信根とのみ勝用ありとす。有部は之れに反す(倶舍論廿五、婆沙論二)。K. V. XX, 8 に此れに類したること說因及び化地部の說として出づ。

【一〇〇】有部等は凡て善惡無記の三性を立つるが、大衆部等は無しとし、如何なるものも善か惡か孰れかならざるべからずとす。

【一〇一】正性離生(Samyaktva-niyāma)とは見道のことなり。正性は文字の通り、離生は異生(凡夫)の生を離るといふ意に解し居れど、本來 Niyāma なる語にはかゝる意無く、ni-yām(制禦するといふ字)より來れるにて、心を調禦せる決定不動の狀態を指す。故に陳譯には正性離生の代りに正定とせり、是の方原語に當れり。本文の意は、正性決定位に入れるもの、卽ち見道に

【秦】離生に超昇すれば(一〇二)一に一切の結を斷ぜず。

(一〇三)諸の豫流者は一切の惡を造る。唯無間を除く。

【陳】逵多阿半那は能く一切の惡を造る、唯五逆を除く。

【秦】須陀洹は能く一切の惡行を作す唯無間罪を除く。

(一〇四)佛所説の經は皆是れ了義なり。

【陳】一切の諸經は不了義無し。

【秦】一切の修多羅は皆了義に依る。

(一〇五)無爲法に九種有り。一、擇滅。二、非擇滅。三、虚空。四、空無邊處。五、識無邊處。六、無所有處。七、非想非非想處。八、緣起支性。九、聖道支性なり。

【陳】無爲法に九種有り。一、思擇滅。二、非思擇滅。三、虚空。四、空處。五、識處。六、無所有處。七、非想非非想處。八、十二因緣生分。九、八聖道分なり。

入れるものは、一切の結(Saṁyojana 衆生を縛結するもの、即ち煩惱の別名)を斷すといふなり。K. V. IV, 10 にはアンダカ派の説として、一切の結を斷ぜしものは阿羅漢なりとあり、本論とやや相違あるが如し。有部は結に九種(愛、恚、慢、無明、見、取、疑、嫉、慳)を立て、見道に入りしものは見、取、疑の三結を斷ずるのみとなす。

【一〇二】秦の原文は不一斷一切結とあり、意味不明なり。恐らく誤字あるならん。西藏譯も「無漏諦に入れば一切結を斷ぜず」とあれど、誤字あるならん。

【一〇三】有部に預流者は十惡業(殺生、偸盗、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見)を作らずとす。大衆部にては預流者と雖も、一切惡業を作る、唯、無間業(間斷なく苦果を受くる業の意)、即ち五逆罪(殺父、殺母、殺阿羅漢、佛身より血を出すこと、僧團の和合を破ること)を除くとす。

【一〇四】了義(梵 Nītārtha)は究竟實義を顯了せる意。有部は經に不了義のものありとす。大衆部は然らず。

【一〇五】一般に一切法を區分して有爲(Saṁskṛta)無爲(a——)の二とす。有爲とは作用有るに名く、即ち普通世間のものは皆之なり。無爲とは作用なきなり。有部等は是れに三種を立つ擇滅非擇滅虚空なり。大衆部は無爲にも有作用を許し九種を立つ擇滅(Pratisaṁkhyānirodha)とは無漏慧の擇力によりて得たる滅なり即ち涅槃なり。非擇滅(a——)とは生ぜしむ可き緣の缺けたる爲

【秦】九種の無爲法あり、謂はく、數滅、非數滅、虛空、虛空處、識處、無所有處、非想非非想處、十二緣起支、道支なり。

(一〇六)心性は本淨なり、客塵たる隨煩惱の雜染する所を說いて不淨と爲す。

【陳】心は自性清淨にして客塵に汙さる。一には隨眠煩惱、二には倒起煩惱なり。

【秦】心性自ら(一〇七)淨佛なり、客たる煩惱の爲めに染めらる。

(一〇八)隨眠は心に非ず、心所法にも非ず、亦無所緣なり。

【陳】隨眠煩惱は心に非ず、心法に非ず、無所緣なり。

【秦】諸の使は心並びに心法に非ず、無緣なり。

隨眠は(一〇九)纏に異り、纏は隨眠に異り、隨眠と心とは相應せず、(一一〇)纏と心とは相應すと說く

生ぜず、卽ち自然に滅して居ろ狀態にあるを前と區別して非擇滅といふ。虛空(Ākāśa)とは他を障えず、又他に障られず、唯無礙を以て性とす。是の故に色法其中に於て行ずるを得。空無邊(Ākāśānantyāyatana)は色を厭ひ空無邊を觀じて解をなす。識無邊處(Vijñānānantyāyatana)は外空を厭ひ內識を觀じ識無邊の解をなす。無處有處(Ākiñcanyāyatana)は無邊の識を厭ひ無所有を觀じて解をなす。非想非非想處(Naivasaṁjñānāsaṁjñāyatana)とは非想(明勝の想無きを以て)にして非非想(劣昧の想あるを以て)なるに名づく。有部等は各處を所生の天の名とす。大衆部は無爲の體の名とし、滅諦の所攝とす。十二緣起支性(無明行等の性)は有部等は有爲法の性とすれど、大衆部等は緣起の相は有爲なれどもその奧に決定住の理性有り、是れ緣起支の性にして無爲法なりとす。道支性とは八聖道支の體なり。八聖道の差別は有爲法なれども、八道を修すれば必ず隨順に滅を得るはその奧に有する一常住の性の存するによる、是れが無爲法なり。K. V. VI, 1—6參照。

【一〇六】有情の心情は本來清淨なれども外界より來る(卽ち客たる)煩惱(卽ち塵)によりて雜染せられて不淨となるなり。此の說は後の大乘佛教に於て大に開展せられし重要なる宗義なり。唐譯に隨煩惱とあるは一切の煩惱に名づけたる(一切の煩惱皆心に隨逐して惱亂の事を爲す意)にて、根本煩惱に對する隨煩惱の意に非す。

べし。

【陳】隨眠煩惱は倒起煩惱と異り、隨眠煩惱は心と相離る、倒起煩惱は心と相應す。

【秦】使は纏に異り、纏は使に異り、(使は)心と想應せす。

(二一)過去未來は實有の體に非ず。

【陳】過去未來は是れ無、現在は是れ有なり。

【秦】過去未來世有ること無し。

(二二)一切法處は所起に非ず、所識に非ず、是れ通達する所なり。

【陳】法入は所知に非ず、所識に非ず。

【秦】法入は智と知とに非ず、治有る無きに非ず。

(二三)都べて中有無し。

【陳】中陰は是れ無し。【秦】(此の句缺く)

(二四)諸の豫流は亦靜慮を得。

【一〇七】秦譯の佛は清の誤字か。

【一〇八】大衆部にては隨眠(Anuśaya)は(秦には使と譯す)煩惱の種子なりとし、心に非ず、心所に非ず、所緣無しといふ。有部にては煩惱の異名とし、所相應とす。倶舍論十九にては六隨眠(貪、瞋、慢、無明、見、疑)、七隨眠(前の內、貪を開いて、欲界の貪と、上二界の貪とにす。)十隨眠(前の見を開いて、有身見、邊執見、邪見、見取見、戒禁取見の五見とす)等と數ふ。

【一〇九】纏(Paryavasthāna)。陳譯に倒起とせるは文字通りに譯せる也。纏は意味を取りて譯せるなり。煩惱が人の身心を纏うて自在ならしめざるに名づく。煩惱の通名なれど又特に八種を擧げて八纏とす。無慚、無愧、嫉、慳、悔、眠、掉擧、惛沈なり。猶、忿、覆の二を加へて十纏とすることあり。

【一一〇】此の一文と相似たる事はK. V. XIV. 5に見ゆ。

【一一一】有部が三世實有法體恆有といふに對す。

【一一二】法處(Dharma-āyatana)。又法入と譯す。十二處中の一、意識所緣の境なり。大衆部は此の法處は、凡夫の智の所知に非ず、また散識の所識に非ず、見道以上の聖者のみ通達する所とす。有部は、反之、此境を普通認識の及ぶ所となす。

【一一三】前揭菩薩觀の際の入胎の條參照。K. V. VIII. 2參照。

【一一四】有部は初二果は未離欲の故に未だ根本靜慮を得ずとすれど、大衆部は初二果も亦得とす。

【陳】須菴多阿牛部は定を得。

【秦】須陀洹は禪定を得。

是の如き等は是れ本宗同義なり。

【陳】此の四部は是れ執義の本なり。

【秦】是の如き等を根本所見と名づく。

第二章　大衆一說說出世雞胤四部の末宗異義

此の四部の末宗異義〔を述べん〕。

【陳】執義の異とは、大衆部の宗義は餘の三部に異り。

【秦】中間見〔を述べん〕。

(二五)如如の聖諦は諸相差別なれば、如是如是と別觀有るなり。

【陳】四聖諦は悉く眞實有なり。如如に對して讃行すべし。

【秦】其れに隨つて別觀察す。

(二六)少法の是れ自の所作なる有り、少法の是れ

【二五】如如の云云。前の本宗同義にて四諦を觀するに一刹那心を以てすといへるに對す。卽ち之れに從へば、四諦に十六行相あるを以て、之れを觀察するにも亦別別の心を以てせざる可からず。從つて漸觀說を眞なりと主張するものなり。

【二六】少法の云云。此句に對しては古來より種種の解釋ありたれど多くは的を失せり。慈恩の釋も亦然り。南傳の論事(Kathāvatthu)を見るに、こは業の作者と受者との一異を論じたる問題に關聯するものにして、陳譯が苦は是れといふ語にて暗示するが如く、現在の苦又は樂は、自己の作れるものなりや、他の作れるものなりやを論じたる題目と解せざるべからず。論事(I.I, 6.)(原典 P. 33)に從へば、上座部は、犢子部正量部等の有我論者に對して、(一)苦樂は自作か(二)他作か(三)共作か(四)自作にもあらず他作にもあらず、因緣生(adhiccasamuppanna)かとの四問を提出したるに、有我論者は、その何れをも否定したることとなり居れり。然るに今は大衆部派の末宗にありては右の四問を一部分づつ肯定したるは、卽ち本文の說となりて表はれたるなり。その深き意義は勿論能くは分らざれど、要するに現在の苦樂に一部分は自己の過去の業に酬いたるもの、一部分は他より受くるもの、一部分は自己と他人との共作の結果、一部分は言はば種種の事情によるといふ主張と解すべきなり。

他の所作なる有り、少法の是れ〔自他〕倶の所作なる有り、少法の衆緣に從り生ずる有り。

【陳】苦は是れ自の所作なる有り、苦は是れ他の所作なる有り、苦は是れ〔自他〕兩の所作なる有り、苦は兩の所作ならざる有り、苦は因緣に依り生ずる有り、因緣に因らずして生ずる有り。

【秦】少の自作有り、少の他作有り、少の因緣より起る有り。

(二七)一時に二心倶起することあり。

【陳】一時の中に多心和合有り。

【秦】一時に二心倶に生ずる有り。

(二八)道と煩惱と各、倶に現前す。業と異熟と倶時に轉ずること有り。

【陳】道と煩惱と並び起る。業と果と並び起る。

【秦】道即ち煩惱なり。業想(此の句誤脫あるならん。)

(二九)種は卽ち芽となる。

【二七】一時に云云。有部は勿論、大衆部にありてもその本計にては、同一時に意識內に注意の二焦點を結ぶことを許さざるに反し、大衆部の末計にては之を許すなり。

【二八】道と煩惱と云云。大衆部にては隨眠卽ち煩惱の種子を以て、心作用にあらずとしたるを受けて、更に一步を進めて、隨眠は最後に斷ずる迄は常に潛在し居るを以て、之と道と倶起し得べしと主張するなり。又、善惡業とその果たる苦樂の異熟果との關係は必ず時間的に先後すとは、有部は勿論、大衆部の本計にても主張する所なれど、今はその並起をも許す。蓋し業は、苟も果として實現せざる限りは恆存すれど、その果は次第に實現し行く故、或る場合には、兩者並行することありといふ理由に基く。

【二九】種は云云。是等の末宗にては、心法は刹那滅なれば、その生起はただ連續に過ぎざれど、色法は長時に相續するを以て、種子の芽となるは、種子がその體を持しながら變化して芽となるものにて、種子と芽との體には相違なしといふなり。反之、有部などにては、凡ては刹那滅なるを以て、芽の時は已に種なしと說く。

【陳】種子は是れ芽なり。
【秦】種子は即ち是れ取なり。
（二〇）色根の大種は轉變の義有り。心心所法は轉變の義無し。
【陳】六根の四大は轉異す。心心法は轉異せず。
【秦】諸根の四大は轉變相續す。心心法は然らず。
（二一）心は身に遍す。（二二）心は依と境とに隨つて卷舒し得可し。
【陳】心は身に遍滿す。心は增長す。
【秦】心は身中に滿つ。皆得可し。
諸の是の如き等の末宗の所執は展轉差別して無量の門あるなり。
【陳】應に知るべし、是の如き諸義有り、諸部の信樂不同にして各所執有り、是れを執義の異と名づく。
【秦】是の如く皆欲を攝受す。是れを中間見と名づく。

第三章　多聞部の本宗同義

其の多聞部の本宗同義は、謂はく、
【陳】多聞部の是執義の本は、

【二〇】色根とは眼耳鼻舌身の五根、大種は之れ等を造れる四大（地水火風）なり。此の一段は前段の説明となり得。陳譯に六根とあるは誤りなり、何となれば意根は四大所造に非らざればなり。
【二一】心とは細意識なり、此の細意識は全身に遍滿す。
【二二】有部は識と依（根）と境とは無始以來定屬あり、大根に依る識は小根に依るべからず、小根に依る識は大根に依るべからず、境亦然りとす。然るに此の部は根境識本來定屬あらず、隨時に互に卷舒伸縮すとす。この點は、可なり耆那教が我の伸縮を説くに似たるものありといふべし。

【秦】 彼の多聞の根本見は、

[一二三]佛の五音は是れ出世の教なり、一、無常、二、苦、三、空、四、無我、五、涅槃寂靜。此の五は能く出離の道を引くが故なり。如來の餘音は是れ世間の教なり。

【陳】 如來の五鳴は出世を說くべし。五鳴とは謂はく無常、苦、空、無我、寂靜涅槃なり。此の五鳴は是れ正しく出世道なり。如來の餘鳴は是れ世間道なり。

【秦】 佛は五種の出世間法を說く。無常、苦、空、無我、寂滅涅槃は[一二四]出世道なり。餘は世俗なり。

阿羅漢にも餘の爲めに誘はること有り、猶ほ無知有り、亦猶豫有り、他、悟入せしめ、道は聲に因つて起る。

【陳】【秦】 (前揭に準ず)

[一二五]餘の所執多くは說一切有部に同じ。

【陳】【秦】 (合す)

第四章 [一二六]說假部の本宗同義

其の說假部の本宗同義は、謂はく、

【一二三】大衆部の說と對照すべし。西藏パブヤが多聞部の說として揭ぐるものは本論のものと異るもの多し。(Rockhill, p. 189)

【一二四】秦譯に「出道」とあるは出世道のことなるべし。

【一二五】多聞部を有部の末派とする說(附錄第六節表六參照)あるは是れに起因するか。

【一二六】西藏パブヤの說は本論のものと殆ど全く合す。(Rockhill, p. 189)

【陳】分別說部の是執義の本は、

【秦】彼の施設の根本見とは、

（三七）苦は蘊に非ず。

【陳】苦は是れ蘊に非ず。

（三八）十二處は眞實に非ず。

【陳】一切の入は成就せず。

（三九）諸行相待して展轉和合して假に名づけて苦と爲す。（三〇）士夫の用無し。

【陳】一切有爲法は相待して假の故に立てて苦と名づく。人の功力無し。

【秦】（以上三段に當る秦の原文は、「若說諸陰卽非業、諸不成諸行、展轉施設者、無智士夫事」とあり、恐らく誤字衍字有るべきか、强ひて讀まば、「若し諸陰は卽ち業に非ず、諸（の處）は成ぜず、諸行は展轉して施設すと說かば、士夫の事無し」とすべきか）

（三一）非時の死無し。

【三七】苦は蘊に非ずとは、此の部は苦樂は本來決定性のものに非ず、諸行相待の上に假りに名づくるなり。故に有部の如く苦の體は有漏の五蘊なりとするに異れり

【三八】十二處は眞實に非ずとは此の部は三科の假實を判じて處と界とは假、蘊は實とす。その故は根も境も多微積聚して始めて成立し又識はそれ等を緣じて生ぜるものなるを以てなり。五蘊のみは字義は積聚の義なれどもそは積聚すべき法といふ意にてその自體は假にあらずとす。有部は三科皆實とす。

【三九】諸行相待……苦となす。此の句は西藏パブヤの說と異り、「パブヤは諸行和合す」。「苦は第一義なり」てふ二句に分ち、然かもその第二句は本論と正反對の意味なり。恐らく否定語を脫したるならん。本論の意は、現在の能苦所苦の二種の有爲法相待和合したる所を假りに名づけて苦となすといふなり。

【三〇】士夫（Puruṣa）の用無しとは、それを爲す人間ありて爲すに非ずとの意。

【三一】此の段は有部が非時の死を說く（婆沙二十、百五十一、俱舍五等）に反す。K. V. XVII, 2 には王山部、義成部の說として阿羅漢には非時の死無しとあり。

【陳】非時節の死無し。
【秦】横死無し。
先業の所得なり。
【陳】一切の所得は先業の造なり。
【秦】本業の所得に由る。
(一二二)業増長して因となり、異熟果轉ずることあり。
【陳】増長の因果能く業を生ず、一切の諸苦は業より生ず。
【秦】長養して業根生じ、一切の苦は業より生ず。
(一二三)福に由るが故に聖道を得。道は修す可からず、(一二四)道は壞す可からず。
【陳】聖道は福德に由つて得、聖道は修得に非ず。
【秦】福德は聖道を生ず、道は修せず、亦失はず、
餘義多くは大衆部の執に同じ。

【一二二】業力漸漸増長して感果の刹那に於て始めて異熟因となり、それより異熟果轉ずることあり。卽ち異熟業の間は長く、異熟因は一刹那なり。有部は異熟因といふ時は廣くして一切の善惡得四相等に通じ異熟業といふ時は、狭にして思の心所及び表無表業に限る。陳譯及び秦譯はやや異り、西藏譯は本文に合するが如く、卽ち、「果の熟するは業の増長による。」バブヤの傳には此れに當る句なし。次の句亦然り。

【一二三】加行位に在つて有漏慧を起すも無漏聖道を得る能はず、唯布施及戒等の福德を修するによつてのみ無漏智を起して因果を得。有部等は之れに正反對なり。
此の說は大乘に進み行く階梯として注意すべし。

【一二四】一度無漏道を得ば、性相常住にして刹那滅なし、故に壞す可からずとす。

【陳】【秦】（合す）

第五章　（二三五）制多山、西山住、北山住、三部の本宗同義

其の制多山部、西山住部、北山住部、是の如き三部の本宗同義は、謂はく、

【陳】支提山部、北山部、此の二部の是執義の本は、

【秦】彼の（二三六）支提羅阿婆、鬱多羅施羅の根本見とは、

（二三七）菩薩は惡趣を脱せず。

【陳】（合す）

【秦】菩薩は惡趣を離る。（離れずの誤りならん）

（二三八）窣堵波に於て供養の業を興すとも大果を得ず。

【陳】（二三九）斗藪波の中の恭敬の事に報を得ること少し。

【秦】偸婆を供養するも大果報無し。

阿羅漢有り、餘の爲めに誘はる、此れ等の五事及び餘の義門所執多くは大

【二三五】西藏譯には以下此の三部の說を擧ぐる所全く缺く。

【二三六】此の羅は、支提に附くものとせば支提施羅の施を略したるものと見る可く、然し又、提で切りて羅は次の阿婆の下に來る可きを轉倒せしものとも見らる、然かすれば阿婆羅(Ara a., Apara)なり。ワシリエーフが支提羅阿婆を一つに見たるは誤りなり、(Wassiljeu, s. 270. n. 1)

【二三七】菩薩は有情を利益せんが爲めに故意に忍位を得ず(忍位を得れば惡趣に墮し能はざること有部に合す)故に惡趣に在り。

【二三八】窣堵波(Stūpa)供養を輕んず。法藏部等は之れを重んず。

【二三九】斗藪は藪斗の轉倒。

衆部の說に同じ。

【陳】【秦】（意合す）

第六章　說一切有部の本宗同義

其の說一切有部の本宗同義とは、

【陳】說一切有部の是執義の本は、

【秦】彼の薩婆多の根本見とは、

謂はく一切有部の諸是有とは、皆(一四〇)二の所攝なり。一には名、二には色、過去未來の體も亦實有なり。

【陳】一切有なり、如なり。是の如き兩法有り。一切を攝す。過去現在未來も亦有なり。(一四一)一には正說に依り、二には二法に依り、三には有境界に依り、四には有果に依る。

【秦】一切有性を說いて二種に一切を攝す。法は謂く名と及び色となり。(一四二)過去未來世も有り。

(一四三)一切の法處は皆是れ所知なり、亦是れ所識なり、及び所通達なり。

【一四〇】**二の所攝**とは、一は空間的一切卽ち法一切、二は時間的一切なり。法一切は是れを名(Nāma精神界五蘊の中、受想行識の四)と色(Rūpa物質界、五蘊中の色蘊)とに分つ。時一切は過現未の三世なり。陳譯の「一切有なり」は法一切、「如なり」は時一切に當るか。「是の如き兩法」とはその一切有と如とを指すが如くも見ゆれど、又、如是は名色の誤寫に基きしやも知れず。さすれば、「名色兩法有り」となりて法一切を示すものとなるべし。要するに有部宗義の根本標徵は、空間的にも時間的にも一切有なりとするにて古來「三世實有法體恆有」と稱す。此の問題に關しては K. V. 1. 6—10にかなり詳し、參照すべし。

【一四一】以下の句他譯になし。

【一四二】原文には道共とあれど、過去の誤寫ならん。

【一四三】此の段は前の大衆部の說に對す。

【陳】法入に三有り、所識、所知、所通達なり。
【秦】法入には知法と識と明法と有り。
(一四四)生老住無常の相は心不相應にして行蘊の所攝なり。
【陳】生老住無常は是れ行、心と相應せざる行陰の所攝なり。
【秦】（生住滅(此の下脫字あるべし)
(一四五)有爲の事に三種有り、(一四六)無爲の事に亦三種有り、(一四七)三有爲相は別に實體有り、(一四八)三諦是れ有爲、(一四九)一諦は是れ無爲なり。
【陳】有爲の種類に三あり、無爲の種類にも三あり、有爲の相に三あり、無爲の相に三あり。四諦の中に三諦は有爲、一諦は無爲なり。
【秦】有爲相に三あり、無爲に三あり、(三)諦は有爲相、一諦は無爲相なり。
(一五〇)四聖諦は漸現觀なり。
【陳】四諦は次第觀なり。
【秦】四諦は次第無間等なり。
(一五一)空と無願との二の三摩地に依り、俱に正性離生に得入することを容す。(一五二)欲を思惟して

【一四四】生老住無常云云。これ卽ち十四不相應行中の四相と稱せらるるものなり。通例は生、住、異、滅と名くれど、品類足論には、生老住無常と名く。ここはかの名稱と一致する所注意の價値あり。
【一四五】三世。
【一四六】擇滅非擇滅虛空。
【一四七】生異滅。
【一四八】苦集道の三諦。
【一四九】滅諦。
【一五〇】大衆部の頓現觀に對す。下上兩界の各三諦を漸次に觀

正性離生に得入す。若し已に正性離生に得入する十五心の頃を說いて（一五三）行向と名づく。第十六心を說いて住果と名づく。

【陳】若し人正定に入らんと欲せば、必ず空解脫門無願解脫門に緣りて正定に入るを得。若し欲界相應の諸行を觀ずれば正定に入ることを得。若し人正定に入り、十五心の中に在らば、須氀多阿半那向と名づく。若し第十六心に至らば須氀多阿半那と名づく。

【秦】空無相無願によりて離生に超昇す。欲界繫を思惟して離生に超昇する十五心を向と爲す。第十六心を名づけて住果と爲す。

（一五四）世第一法は一心なり。（一五五）三品の世第一法あり。定んで（一五六）退す可からず。

【陳】世第一法は一刹那心なり。（一五七）三方便は退の義有り。世第一法には退の義無し。

【秦】世間第一法は一心なり。前三方便は退有り。世間

するをいふ。

【一五二】空三摩地とは一切諸法は因緣和合生にして本來自性空なりと觀ずるなり。無願三摩地とは一切生死法中に於て願求する念を離るるなり。右の外に、無相三摩地（差別の相狀無しと觀ずるなり）を加へて三三摩地と稱す。此の三三摩地は有漏無漏に通じ、無漏の時は三解脫門（解脫に入る門戶の意）と稱す。陳譯は卽ち解脫門とせり。有部は空無願の二三摩地によりて見道に得入すと說くなり。秦譯に三三摩地に依るとせるは誤りならん。

【一五三】欲とは欲界の苦諦なり。苦諦の四行相（無常・苦・空・無我）を觀ずれば見道に入るといふ意。

【一五三】行向とは果に趣向するをいふ、卽ち預流向（Śrota-āpatti-pra-tipaunaka）なり。ここ迄十五心を見道とす。次の第十六心に至り始めて修道位を得とす。そこを住果卽ち預流果（Śrotaā-panua）とす。大衆部にては十六心を凡て見道とすること、前記その條參照。十六心の名目もその條の註八二、參照。

【一五四】大衆部の多心とするに對す。

【一五五】三品とは之れに二義あり。一は佛種姓の所起の世第一法を上、緣覺種姓所起のそれを中、聲聞種姓所起のそれを下とす。二は聲聞中、退と思との二種姓を下、護と住と堪達との三を中、不動を上とす。

【一五六】大衆部の退ありとするに對す。

【一五七】三方便云云。無漏聖位に至るに、煖（Uṣmagata）、頂（Mūrdhāna）、忍（Kṣānti）及

第一は退せず。

(一五八)預流は退の義無し、阿羅漢は退の義有り。

【陳】【秦】(意合す)

(一五九)諸の阿羅漢は皆無生智を得るに非ず。

【陳】【秦】(意合す)

(一六〇)異生も能く貪欲瞋恚を斷ず。

【陳】凡夫も亦能く欲及び瞋を捨つるを得。

【秦】(陳に合す)

(一六一)諸の外道も能く五通を得ること有り。

【陳】【秦】(合す)

(一六二)亦天中に梵行に住する者有り。

【陳】天に亦夫嵐摩有り。

【秦】諸天亦梵行を修するを得。

(一六三)七等至の中にのみ覺支を得べし。餘の等至に非ず。(一六四)一切の靜慮は皆念住の攝なり。

び世第一法(Laukikāgradharma)の四善根を修す。此の善根を修する位を四方便法又は四加行位と稱す。ここに、前三方便即ち煖、頂、忍は退あり。後一即ち世第一法は退無しといふなり。煖とは聖火即ち無漏智の生ずる前相として煖氣を兆すに譬へて名づけらる、具さに四諦を觀じて十六行相を修する位なり。頂とは前に引續き生ずる善根にて、動善根(進退動搖する善根即ち煖頂)の内の頂なる故に名づく。前と同じく四諦を觀じ十六行相を修す。忍とは四諦の理を忍可するが故に名づく。世第一とは世間即ち有漏法中最勝善根なる故に名づく。唯苦諦下の一行相を修すること一刹那にして直ちに見道位に進入す。前三善根には各各に上中下の三品ありとすれど、第一法は一刹那心なるが故に三品の區別なしとす。故に本論に三品ありとせるは種姓の上の區別とせざるべからざるなり。此の一文、陳秦兩譯は唐譯と異るが如し。西藏譯は唐譯に近し。

【一五八】註九六參照。

【一五九】盡智無生智のことは、註七六參照。上根の阿羅漢は二智を得れど、鈍根の阿羅漢中には盡智を得れども無生智を得ざるものあり、退法の羅漢は即ち是れなり。

【一六〇】有部特有の説なり。

【一六一】是は有部と犢子部との共に説く所、神通(巴Iddhi 梵Riddhi)に五種あり、天眼、天耳、他心知、宿命知、如意なり。

【一六二】是は化地部、雪山部等に對す。天とは六欲天(次の註參照)。梵行(Brahmacarya)とは不婬行なり。

（一六五）靜慮に依らずして正性離生に入るを得、亦阿羅漢を得。

【秦】（意合す）【陳】（意合す）

（一六六）若し色界無色界の身に依りて能く阿羅漢果を證得すと雖も而も正性離生には入ること能はず。欲界の身に依つて但だ能く正性離生に入るのみに非ず、亦能く阿羅漢果を證得す。

【陳】色界無色界の心に依つて阿羅漢多を得るも正定に入るを得ず、欲界の中に正定に入るを得、亦阿羅漢多を得。

【秦】色界は阿羅漢果を得て離生に超昇するを得ず。

（一六七）北倶盧洲に離染の者無し。聖は彼れと及び無想天とに生ぜず。

【秦】鬱多羅鳩婁に離欲の人無し。聖人は彼の處に生ぜず。聖人は亦無想天に生ぜず。

【一六三】七等至とは四禪と下三無色となり。覺支（定慧を均等ならしむる法）とは七覺支（擇法、精進、喜、輕安、念、定、行捨）なり。他部が非想と欲界とにも覺支ありとするに對す。

三界の圖

- 欲界
  - 地居
  - 虛空居
  - 六欲天
    - 四天王天
    - 忉利天
    - 夜摩天
    - 兜率天
    - 化樂天
    - 他化自在天
- 色界
  - 初禪 ― 未至定、根本定
  - 中間定
  - 二禪 ― 近分定、根本定
  - 三禪 ― 近分定、根本定
  - 四禪 ― 近分定、根本定
- 無色界
  - 空無邊處
  - 識無邊處
  - 無所有處
  - 非想非非想處

【一六四】一切の靜慮云云。身、受、心、法の各各に對して、それぞれ、不淨、苦、無常、無我の觀をなして、常、樂、我、淨の四顚倒を治するを四念住（又念處と書す）といふ。（註一七〇參照）四靜慮も要するにこの範圍を出でずとなすなり。

【一六五】靜慮に依らずして云云。ここに靜慮とは、四禪の根本定を指す。本文の意は、必ずしも四根本定に依らず、未至・中間定によりても見道に入り得べく、又、阿羅漢は未至、中間、四根本、下三無色の九地によりて得らるべきが故に亦必ずしも靜慮に限らずとな

【秦】北鬱單越人に離欲を得るもの有ること無し。彼れ亦聖道を得す。無想天亦(然り)。

(一六八)四沙門果は定んで漸得に非ず。若し先に已に正性離生に入り世俗道に依らば、一來及び不還果を證すること有り。

【陳】必ず次第に定んで聖道四果を得るにあらず。若し人已に正定に入り世道に依らば、(一六九)婆凡里陀伽寐、阿那伽寐に至るを得。

【秦】必ず次第に四沙門果を得るにあらず。離生に超昇し、世俗を以て斯陀含、阿那含果を得。

(一七〇)四念住に能く一切法を攝すと説く可し。

【陳】四念處に一切法を説く可し。

【秦】四念處は一切法なり。

(一七一)一切の隨眠は皆是れ心所なり。心と相應す。有所縁境なり。

り。

【一六六】此の一段は見道に入り得るものはただ欲界身のみ也、得阿羅漢果は色界の身にても能ふと説くなり。秦譯は脱語あるか。

【一六七】北倶盧(Uttarakuru)と無想天とは何れも見佛聞法に障害ある八難處の一なり。八難處とは、一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、北倶盧、ここは樂報殊勝にして苦なきが故に厭離心を起すものなく、從つて離染道を修すものなし。五、長壽天卽ち無想天にて是れ亦長壽安穩の處なるより離染道を修すものなし。六、聾盲瘖瘂、七、世智辨聰、八、佛前佛後、卽ち佛法無き處。

【一六八】四沙門果は定んで漸得に非ず。超證するとを許す也。超證に二有り、一は、見道十五心の位を一來向と爲して、第十六心は直に第二果(一來果)を得するもの、二は前二果を超え、十五心の位を不還向とし、第十六心は直に第三果(不還果)を得とするなり。(前三果及び中二果を超ゆることは無し。)かく超證し得るは世俗道(有漏道)に於て已に欲の六品又は九品を斷ぜることあるによる。經部の世俗道の斷惑を許さざるに對す。

【一六九】婆凡里陀伽寐は娑九里陀伽寐(Sakṛdāgāmin)の誤寫にして、譯して一來となす。阿那伽寐(Anāgāmin)は不還。

【一七〇】四念住。又四念處と云ふ。觀慧を發せしむる修行法なり。四とは、一、身念住(身の不淨を觀ず)、二、受念住(受は苦なりと觀ず)、三、心念住(心は心識なり、心識の無常を觀ず)、四、法念住(法無我を觀ず)なり。慧を體とす、慧の

【陳】隨眠煩惱は是れ心法なり。心と相應す。（原文に
はせずとあれど誤りならん。）

【秦】諸の使は心と相應す。

（一七二）一切の纏は皆隨眠の攝に非ず。

【陳】一切の隨眠煩惱は倒起の名を立つべし。一切の倒起煩惱は倒起の名を立つ可く、隨眠の名を立つ可からず。

【秦】一切の使は是れ有纏なり。（纏は）使に非ず。

（一七三）緣起支性は定んで是れ有爲なり。

【陳】十二緣生は是れ有爲なり。

【秦】緣起支は是れ有爲なり。

（一七四）亦緣起支の阿羅漢に隨つて轉ずる有り。

【陳】（合す）【秦】阿羅漢に緣起支有り。

（一七五）阿羅漢に增長の福業有り。

【陳】【秦】（意合す）

（一七六）唯欲色界のみ定んで中有あり。

力能く念を起して所觀の處に住せしむる故に念住といひ、又、所觀の處を念ぜしむるが故に念處といふ。此の四念住に三種を立つ。一、自性念住、能觀の體なる慧、二、所緣念住、所觀の五蘊卽ち一切法、三、眷屬念住、又相雜念住といふ、慧相應の心所四相、入定位の隨轉無表なり。此の三念住に於て卽ち一切法を攝す。

【一七一】前の大衆部の說に對す。

【一七二】有部にては纏と隨眠とは性質同じく、範圍を異にすと說く。卽ち纏は廣く隨眠は狹し。

【一七三】大衆部、化地部の無爲とするに對す。

【一七四】亦緣起支云云。緣起支に轉廻の法則を明にせるものなり。羅漢は已に輪廻を脫したる者なれども、猶ほ不染無癡あるを以て何程か此の法則に支配せらるといふなり。但し十二支の中、何何に支配せらるるかについては異論あり。一は、無明、行、識、愛、有、生の六支にて、老死には支配せられずといふ。二は、受の一支のみによるといふ。

【一七五】化地部にて阿羅漢となれば最早福業もなしといふに對す。

【一七六】大衆部の凡て中有無しといふに對す。

【陳】【秦】（合す）

（一七七）眼等の五識身は染有り離染無し。（一七八）但だ自相を取る。（一七九）唯無分別なればなり。

【陳】（合す）

【秦】五識身は還つて自相應す。思惟に非ず。

（一八〇）心心所の法體は各實有なり。

【陳】心及び助心法有り。

【秦】心心數法あり。（原文には「非心數法」とあれど非は心の誤寫ならん）

（一八一）心及び心所は定んで有所緣なり。

【陳】（意合す）【秦】心心（數）は是れ緣なり。

（一八二）自性は自性と相應せず。心は心と相應せず。

【陳】（合す）【秦】自性と自性と相應せず。心と（心と）相應せず。

（一八三）世間の正見有り、世間の信根有り。

【一七七】眼等の云云。有部は前十五界は唯有漏と立つるを以て五識身もただ有漏なり。即ち染有り離染無しといふなり。即ち前の大衆部の說に對す。

【一七八】但だ自相云云。意識は無常無我等の共相を取れど、五識は色聲等の自相を見るのみなりとす。

【一七九】唯無分別云云。意識は自性、計度、隨念の三分別あり、五識は自性分別はあれど、他の二分別無きをいふ。自性分別とは、自性に對應する現前のもののみを識別す、即ち目が色を耳が音を識別するが如し。計度分別とは三世に亙り現見せざることを計量推度して識別するをいふ。隨念分別とは過去の事を追念して識別するをいふ。

【一八〇】經量部が心所法は別體無しとするに對す。

【一八一】大衆部に對す。

【一八二】有部にては心王が中心になりて之に種種の心所が相應して具體的心理活動を現出すといふ。今はその相應に關する法則を述べしものにて、例へば受と受と相應することなし、心と心と相應することなし、といふが如く、互に異る性のもののみが相應するといふなり。大衆部に對す。

【一八三】大衆部の說に對す。その條參照。

【陳】（合す）【秦】（合す）

(一八四)無記法有り。

【陳】無説法有り。

【秦】無願有り。

(一八五)諸の阿羅漢に亦非學非無學の法有り。

【陳】阿羅漢多に無有學の法あり。

【秦】（陳に合す）

(一八六)諸の阿羅漢は皆靜慮を得。皆能く靜慮を起して現前するに非ず。

【陳】一切の阿羅漢多は皆定を得れども、一切の阿羅漢多は皆定を證するにあらず。

【秦】一切阿羅漢は禪を得。而して必ず現前するにあらず。

(一八七)阿羅漢も猶ほ故業を受くること有り。

【陳】【秦】（合す）

(一八八)諸の異生も善心に住して死する有り。

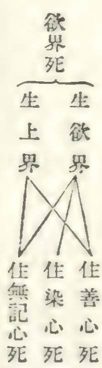
【一八四】同上。

【一八五】法藏部に對す。非學非無學とはこれに二種有り、一は無爲、二は有漏なり。ここには有漏の方を取る。

【一八六】諸阿羅漢は靜慮を得れども、これに現起と不現起とあり、凡て必ずしも現起に非ずとなり。

【一八七】大衆部が所作已辨すれば先業を受けずとするに對す。

【一八八】有部にては婆沙論百九十二に從へば死有は三性に通ずとす。即ち、



（羅漢 如來）無覆無記入滅

【陳】（合す）【秦】（合す、但し原文は「凡夫不善心命終」とあり、その不は有の誤寫なるべし。）

（一八九）等引の位に在つては必ず命終せず。

【陳】（合す）【秦】（合す、但し原文に正受とあるは正定の誤寫ならん。）

（一九〇）佛と二乘と解脱には異無きも。三乘の聖道には各差別あり。

【陳】如來と弟子と惑滅は異無し。

【秦】（一九一）（此の節缺く）

（一九二）佛の慈悲等は有情を縁せず。有情有りと執すれば解脱を得ず。

【陳】（合す、但し原文に「解脱意」とあるは解脱竟の誤寫か）

【秦】（此の節缺く）

（一九三）菩薩は猶は是れ異生にして諸結未だ斷せずと言ふべし。

【陳】一切菩薩は定んで是れ凡夫にして（一九四）九結を具す。

【秦】（唐に合す）

【一八九】命終するは必ず散心に於てすべく、定心に於てすること無し。

【一九〇】佛と二乘云云。惑を滅して是れ善。是れ常の涅槃を得る點に於ては、佛も獨覺も聲聞も異らざれど、その修業の道は三乘異るといふ。次の化地部に對す。

【一九一】此の段及び次の段西藏譯にも缺く。

【一九二】佛の慈悲等は五蘊の體性を縁するにて有情を縁するに非ず、蓋し有情は實有に非ず、若し有情を實有とすればそは無我に反し解脱を得ずとす。識身足論第三參照。

【一九三】大衆部が第二劫以後の菩薩は聖者なりとするに反し、最後身の菩薩も猶凡夫なりとす。異生は Pṛthagjana（通常の人の意）の直譯なり。

【一九四】九結、前註一〇一參照。

【一九五】若し未だ已に正性離生に入らずは、異生地に於て未だ超越すと名づけず。

【陳】若し菩薩已に正定に入らずば(原文には「入らば」とあり)、未だ凡夫地を度せず。

【秦】(唐に合す)

【一九六】有情は但、現に有執受の相續に依つて假立するのみ。

【陳】此の所取の相續するを假りに衆生と名づく。

【秦】受身の衆生數は施設なり。

【一九七】一切行は皆刹那滅なりと說く。

【陳】一切の行は刹尼柯なり。

【秦】一切行は磨滅なり。

【一九八】定んで少法の能く前世より轉じて後世に至るもの無し。但だ世俗の補特伽羅有りて移轉有りと說くは活時の行の攝のみ。【一九九】卽ち無餘滅

【一九五】若し未だ云云。たとへ凡夫地にて有漏の六行觀(三界を九地に分ち下地と上地とを對比して、下地は麤・苦・障、なりと觀じて厭ひ、上地は淨、妙、離なりと觀じて欣ぶ)によりて欲界の修惑の何品かを斷じ居るも、卽ち二果又は三果に超達し得る資格あるも、未だ見道位に入りて無學を發せざる限りは超越と名づけずとなり。

【一九六】有情とはただ感覺的要素の結合相續の上に假りに名づけたるにて、別に主體あるにあらずと。犢子部等に對す。

【一九七】是れは有部の宗義の主要なるものの一なり。刹那滅(K-ṣaṇika刹尼柯)とは、一切有爲法は一刹那一刹那の連續にして、前刹那の法と後刹那の法とは別物にして恰も蟻の行列の如きものなりといふ。

【一九八】定んで少法の云云。一切の有爲法は刹那滅なるが故にたとへ少法なりとも、其のまま引續き後世にまで及ぶものなし、故に無我なりとす。ただ世間でいふ我卽ち假我は諸蘊和合の上に生ぜる人格に名づけたるにて、それに於ては念念相續して後世にまで輪廻し行き、恰も移轉するが如く見ゆれど、要するにこれも生時にありて實我なくも、念念相續して一生涯を經過するも同理なりといふ義なり。此れ後の犢子部等に對する有部の特徵なり。

補特伽羅(Pudgala)は人の義。是の者數數趣を取るより數取趣と譯す。

【一九九】卽ち無餘滅には云云。前には我の移轉を排せしに對し

には轉變の諸蘊無し。

【陳】 法として此の世より後の世に至るもの有ること無し。世(俗)に依つて假りに名づけて弗加羅度人と說く。正法の時の行の聚なり。滅無餘には諸陰變異無し。

【秦】 法は此の世より他の世に至ること無し。世俗に數說いて曰く、此の世より他の世に至るありと。これ命未だ終らざる諸の行の取なり。已に盡くれば法の轉變有ること無し。

(二〇〇)出世の靜慮有り。

【陳】 出世の定有り。

【秦】 出世間の禪有り。

(二〇一)尋にも亦無漏あり。

【陳】 諸覺にも是れ無漏あり。

【秦】 有覺有觀にも無漏あり。

(二〇二)善は是れ有の因なる有り。

【陳】 (合す)

て、こは法の移轉を排したる說なり。卽ち無餘涅槃に入る時、五蘊が總て滅して轉變なきは、獨り我の轉變無きのみならず。假我を構成する五蘊も念念生滅するものにて同一物が轉變して相續するものに非ざる證なり。何となれば同一物の相續ならば無餘滅の位にも滅せざる智あるべければなり。蓋し是れ特別の實我無きも要素としての五蘊は實法なるべしと主張せんとする說を破する立論とす。

【二〇〇】四禪定は有漏のみなりや、特に無漏にも通ずるやとは諸派の間に異論あり。有部は未至中間四根本の六地を無漏にも通ずる定とす。化地部に對す。

【二〇一】尋(Vitarka)を舊譯には覺といふ。粗なる尋求作用にて南傳の解釋によれば外境を認識する作用なりといふ(之れに對して細なる伺察作用を伺(Vicāra)といひ、舊譯に觀といふ。認識したる外境を心內にて考察する作用なりと南傳は解す。)然るに此の尋の心所は、ただ有漏に限るか、無漏にも通ずるかに關しては異論あり。化地部の如きはただ有漏に限るといふに對し、有部は亦無漏にも通ずと主張するなり。これ有部は八正道中、正思惟は尋を體とし、又初禪の無漏定は尋と相應すと立つるが故なり。

【二〇二】此れも化地部に對す。化地部は三有(欲、色、無色)(有は又界ともいふ)の因はただ惡に限るといふ、有部は獨り惡のみならず、善業も亦三有の因となると說く。

【秦】　善は是れ(有の)因なる有り。

(二〇三)等引の位に語を發する者無し。

【陳】【秦】(合す)

(二〇四)八支聖道は是れ正法輪なり。如來の語を皆轉法輪と爲すに非ず。

【陳】【秦】(合す)

(二〇五)佛一音を以て能く一切法を説くに非ず。

【陳】(合す)【秦】　佛は一切事を説かず。

(二〇六)世尊にも亦不如義の言有り、佛所説の經は皆了義なるに非ず。佛の白説にも不了義經有り。

【陳】【秦】(意合す)

此れ等を皆本宗同義と爲す。末宗異義は其の類無邊なり。

【陳】【秦】(意合す)

第七章　雪山部の本宗同義

其の雪山部の本宗同義は、謂はく、

【二〇三】此は大衆部に對す。有部にては等引(Samahita)即ち禪定位には發語することなし、從つて發語する際には已に禪定を出でたるものと解す。

【二〇四】大衆部が如來の語は皆凡て轉法輪なりといふに對し、有部は如來の語と雖も悉く轉法輪なるに非ず、八聖道に關する限りのみ轉法輪なりと。

【二〇五】此れも大衆部に對す。

【二〇六】此れ大衆部に對す。即ち佛の説法中にもその場限りの方便説もあり。亦必ずしも徹底的究理を目的とせざる説法もあるを以て不如義の説もあれば未了義の説もあり。

【陳】【秦】（合す）

(二〇七)諸の菩薩は猶ほ是れ異生なり。

【陳】菩薩は是れ凡夫なり。

【秦】（陳に合す）

(二〇八)菩薩は入胎に貪愛を起さず。

【陳】貪有ること無く、受生に胎等の爲めに裹まれず。

【秦】無明を離れ、淨佛國土より母胎に降神す。

(二〇九)諸の外道は能く五通を得ること無し。

【陳】【秦】（意合す）

(二一〇)亦天中に梵行に住する者無し。

【陳】天に夫嵐摩無し。

【秦】諸天梵行を修するを得ず。

(二一一)阿羅漢有り、餘の爲めに引かる、猶ほ無知有り、亦猶豫有り、他が悟入せしめ、道は聲に因つて起る。餘の所執多くは說一切有部に同じ。

【陳】【秦】（前に准じて、合す）

【二〇七】諸の菩薩は云云。ここに菩薩といふは佛陀の成道以前三祇百劫間の修行位を指す。大衆部にては初祇以後は已に聖者なりと見るに反し、雪山部は有部と同じく猶ほ凡夫位と見るなり。

【二〇八】菩薩は入胎云云。普通の有情は入胎に際して父母に對して瞋と愛とを起す。有部に從へば菩薩も亦然りとすれど、雪山部は大衆部と同じく、菩薩は衆生の爲めに入胎するものなれば不染心を以て入胎すとなすなり。

【二〇九】諸の外道云云。有部に異り、化地、法藏に合す。有部の際の註參照。西藏バブヤは是れに反す。(Rockhill' p. 190)

【二一〇】亦天中云云。有部に異り、化地部に合す。卽ち此の部の意は、天中(六欲天)に生ぜば、天女の樂具悉く皆增勝なるを以て梵行(卽ち不淫)に住する能はずと。陳譯の夫嵐摩は梵Brahm(carya)の音譯。

【二一一】五事を認むる點に於て大衆部に合するを以て、大衆部の末派とせらるる說も出でしならん。(附錄第六節二・四・七參照。)

第八章　犢子部の本宗同義

其の犢子部の本宗同義は、謂はく、

【陳】【秦】（意合す）

（二二）補特伽羅は即蘊離蘊に非ず。蘊・處・界に於て假りに名を施設す。

【陳】五陰に即して是れ人に非ず、五陰に異にして是れ人に非ず。陰界入に攝するが故に人等の假名を立つ。

（二三）三種の假有り、一には攝一切假、二には攝一分假、三には攝滅度假なり。

【秦】「陰界に」即して是れ人に非ず、陰界に離れて「是れ人に」非ず。和合施設するが故に「人と名づく」。

（二四）諸行に暫住あり、亦刹那滅あり。

【陳】一切有爲法は刹那刹那滅なり。

【秦】一切陰は刹那住せず。

【二二】補特伽羅云云。此の部にては輪廻解脱の主體として一種の我體即ち補特伽羅（Pudgala）を立つることは論事（K. V. I, 1）も傳ふる所なり。而して今論に從へば、此の我は五蘊以外に別立するにもあらず、亦五蘊と即したるものにも非ざる點に於て之れを非即非離蘊と名づく。蓋し謂はば、數論や勝論の我觀と有部等の五蘊假和合我の觀念との中間にあるものなり。乍然かかる說は少くも概念的には極めて考へ難きものなるを以て、本宗にては亦之れを不可說藏とも名づく。從つて本宗に從へば、通例我が身體とか、我が心とかいふが如き我とは、五蘊十二處十八界の要素の下に假りに附したるものにして、眞の我に非ず。眞の我は不可說の非即非離蘊我なりと知らざる可からずと。此の說はかなりに所謂外道の有我說に似たるを以て、此の宗を附佛法の外道などと評したれど、業の生命的意義を認めたる點に於て、却つて唯識などに近きものあるを忘るべからず。

【二三】三種の假云云。は他譯になし。

【二四】諸行に暫住云云。是は有部が諸行刹那滅とするに對す。大地命根等は暫住、心法は刹那滅とす。

(三二五)諸法若し補特伽羅を離れては前世より轉じて後世に至るもの無し。補特伽羅に依つて移轉有りと說くべし。

【陳】色を離れて一法として此の世より後の世に至るもの有ること無し、人移有りと說くべし。

【秦】人を離れて法として此の世より他の世に至るもの有ること無し。當に人彼れに至ると說くべし。

(三二六)亦外道の能く五通を得るもの有り。

【陳】【秦】(合す)

(三二七)五識染無く、亦離染に非ず。

【陳】【秦】(意合す)

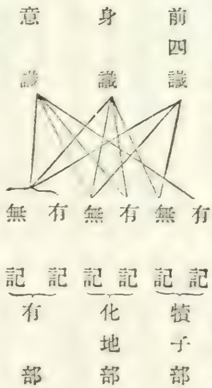
(三二八)若し欲界の修所斷の結を斷ずるを名づけて離欲と爲す。見所斷に非ず。

【陳】欲界相應の諸結は、修道の所破なり。若し人能く斷ずれば、則ち離欲を得。欲界見道所破は、則ち是の如

【三二五】諸法若し云云。前註によりて知るべし。陳譯の色とあるは人の誤りか。西藏パプヤの意は異る(Rockhill, p. 193)

【三二六】亦外道云云。有部に合し雪山法藏に異る。

【三二七】五識云云。此の部は有部又は大衆部等に異りて、前五識は無分別にして無記なれば、染にも離染にもあらず、染離染は善惡に渉る第六識に限りて論ずべしと說く。猶六識と有記無記との關係は、



【三二八】若し欲界の云云。此の部は、未だ欲界の見惑を斷ぜざるも有漏の六行觀を以て欲界の修惑を斷ずるを得、之れを離欲となす。然れども六行觀を以てしては道理に迷ふ見惑を斷ずる能はずといふ。蓋し六行觀による修斷は、次第に欲界に對する情意的執着を離るるをいふものにして無漏の智慧の如く道理を觀破し得ざればなり。こは有部宗が六行觀を以て有頂地のそれを除いては四諦(見)修道(修)の五部を合斷し得べしといふに對する說なり。

くならず。

【秦】欲界繫の結使修道に斷ずれば離欲を得、見諦斷に非ず。

（三二九）即ち忍と名と相と世第一法とを以て能く正性離生に趣入すと名づく。

【陳】（意合す）【秦】（意合す）

（三三〇）若し已に正性離生に入るを得ば、十二心の頃を說いて行向と名づく。第十三心を說いて住果と名づく。是の如き等の差別の義多し。

【陳】若し人已に正定に入り十二心中に在るを是れを須陀多阿半那向と名づく。第十三心に至つて須陀多阿半那と名づく。（三三一）一切衆生に二種の失有り、一、意失、二、事失なり。生死は二種の因を最上と爲す、一、煩惱、二、業なり。二種の法は是れ解脫の最上因なり、謂はく毘鉢舍那・奢摩他なり。若し自體に依らず增上緣正法を聽聞せば則ち此の人に屬せず。煩惱の根本に二種有り、恆に一切衆生に隨つて行ず。謂はく無明と有愛となり。七種の清淨處有り、佛智は皆等に於て諸境に相應せず。依正を以て了遜する所、悉く能く一切法に通達す。若し滅を以て之れを攝せば凡そ六種有り。色無色界は正定に入ること無し。菩薩は中に於て

【三二九】即ち忍云云。有部等にては、煖、頂、忍、世第一法を以て四善根となすに對し（註一五七參照）此の派にては忍、名、相、世第一法を四善根とす。忍とは總じて四諦の道理を忍許する也、名とは四諦各別の敎を觀するをいひ、相とは進んで四諦の理を觀するをいひ、世第一法とはそれ等の究竟するをいふ。是れ等手段によつて初めて見道に入り得るものにして他に手段なきなりと。

【三三〇】是れ亦有部に對す。上下四諦を分けて各別に忍智を分つに非ず、上下諦に於て三心を立てて十二心とす。三心とは苦法智、苦法忍、苦類智なり。第十三心は總じて四諦を觀する心なり次第證の人は十二心を初果向とし第十三心を初果とす。超越證の人は六品斷なれば第十三心に第二果を、九品斷なれば第三果を得可し。有部の際の註參照。

【三三一】以下の陳譯の文は唐・秦及び西藏譯何れにも無し。

恆に生ず。若し已に盡智無生智を生ぜば名づけて佛となすを得。如來經を說くに三義有り、一には生死の過失を顯はし、二には解脫の功德を顯はし、三には所顯無し。可住子部の是執義の本なり。

【秦】（唐譯に合す）

第九章　法上、賢冑、正量、密林山四部の宗義

（三二）一頌を釋するに執義同じからざるに因つて此の部の中より四部を流出す。謂はく法上部、賢冑部、正量部、密林山部なり。所釋の頌に曰はく、

（三三）已に解脫し、更に墮し、墮は貪に由り、復還り、安喜の所を得て樂しみ、樂に隨つて至樂を行ず。

【陳】本從り一偈に因つての故に此の部は分れて四部と成る、謂はく、法上部、賢乘部、正量弟子部、密林住部なり。偈に言

【三二】此の文は前文より續く從つて、此の部とは犢子部のこと。犢子部中に於て、次の一頌を釋するに當り、その釋の仕方の差異によりて法上、賢冑、正量、密林山の四部分出せりといふなり。

【三三】述記引用する部執疏の解によれば、法上部は、阿羅漢に退と住と進と有り。初二句「已に……還へり」は退を、次の一句は住を、最後の句は進を釋すと。賢冑部は、此の偈は三乘の無學を示す、初二句は阿羅漢を、次の一は獨覺を、最後句は佛を釋すと。正量部は此の偈は四果に六種の人あるを示す、「已に解脫し」は預流なり、「更に墮し」は家家の人卽ち一來向の人なり、「墮は貪に由る」は一間の人（一品の惑の爲めに間隔せられて涅槃を得ざるなり。）「復還る」は一來果の人、第三句は不還果の人、第四句は羅漢なりとす。密林山部は曰く、六種の無學あり、退と思と護と住と、堪達と不動となり、「已に解脫し」は第一人、「更に墮し」は第二人、「墮は貪に由る」は第三人、「復還へる」は第四人、第三句は第五人、第四句は第六人なりと。

はく、

已に涅槃を得て、更に退墮し、墮は貪著に由り、而して復還り、已に安處に至つて遊んで愛すべし、業に隨つて行ずるが故に業處に至る。

【秦】 (二二四)見を與にする者、多梨、羅耶尼、三彌底、六城。所有の別に偈を說いて分別する有り。

處を得て復墮し、墮し已つて深く貪著し、業に隨つて業を得。

第十章 (二二五)化地部の宗義

第一節 本宗同義

其の化地部の本宗同義は、謂はく、

【陳】【秦】(合す)

(二二六)過去未來は是れ無なり。現在と無爲とは是れ有なり。

【陳】【秦】(合す)

(二二七)四聖諦に於て一時に現觀す。苦諦を見る時能く諸諦を見る。要ず已に見る者は能く是の如く見る。

【陳】 四聖諦一時に觀す。若し苦諦を見ば卽ち一切諦を見る。見已れば曾(?)諸諦を見る。

【二二四】秦譯の多梨は達摩鬱多梨(Dharmottara)の略。羅耶尼は跋陀羅耶尼(Bhadrāyaniya)の略。偈文の業は衆の誤寫なるべく、第三句缺けたるが如し。

【二二五】化地部の本宗同義に關しては、西藏バヴヤの說殆ど合す。(Rockhill, p. 191—192)

【二二六】過去未來云云。大衆部に同じく有部に異り。

【二二七】四聖諦云云。是れ亦有部に異り、大衆の邊智に似たり。最後の句は何れの譯によるも意味不分明なり、蓋し、苦諦を一時に觀察し得るならば、如實に(Yathā tathā or Yathā bhūtam)諸諦を見得との意を强めて言へるものならんか。

【秦】四眞諦に於て一無間に等しく〔見る〕。苦を見るを卽ち見諦と名づく、苦は卽ち明に眞諦を見る。

(二二八)隨眠は心に非ず、亦心所に非ず。一無所緣なり。纏と異れり。隨眠の自性は心不相應なり。纏の自性は心相應なり。

【陳】（意合す、譯語の差は前に准ず）

【秦】（同上）

(二二九)異生は欲貪瞋恚を斷ぜず。

【陳】凡夫は欲界の欲及び瞋を捨てず。

【秦】凡夫は欲瞋恚を〔捨て〕ず。

(二三〇)諸の外道は能く五通を得ること無し。

【陳】【秦】（意合す）

(二三一)亦天中に梵行に住する者無し。

【陳】【秦】（譯の差前來に准ず）

(二三二)定んで中有無し。

【陳】【秦】（意合す）

(二三三)阿羅漢に增長の福業無し。

【二二八】隨眠云云。是れ亦有部に異り、大衆部に同じ。

【二二九】異生は云云。此の部の說は經部に似て、六行觀を以て修惑を伏すを得るも惑種を斷ずる能はず、又見惑を斷ずる能はず。（光記第十九）。西藏バブヤは捨つとなす。(Rockhill, p. 192)

【二三〇】諸の外道云云、有部犢子部に異り、雪山法藏部に同じ。

【二三一】有部には異り、雪山に同。バブヤは有りとす。(Rockhill, p. 191)

【二三二】有部に異り、大衆部に同じ。

【二三三】有部に對す。バブヤは有りとす。(Rockhill, p. 192)

【陳】【陳】（意合す）

（二三四）五識に染有り、亦離染有り。

【陳】五識聚に染と離と有り。

【秦】五識身に有欲と亦離欲とあり。

（二三五）六識皆尋伺と相應す。

【陳】六識聚は覺觀と相應す。

【秦】（陳に同じ）

（二三六）亦齊首補特伽羅有り。

【陳】時頭聚生有り。

【秦】（此の句缺く）

（二三七）世間の正見有り、世間の信根無し。

【陳】世間の正見無し、世間の信根無し。

【秦】（陳に合す）

（二三八）出世の靜慮無し、亦無漏の尋無し。

【陳】出世の定無し、覺觀に無漏無し。

【二三四】有部犢子部に異り、大衆部に同じ、その條參照。

【二三五】六識は云云。尋と伺（Vitarka vicāra）とは相似たるものなるが、尋は尋求にして粗なり、伺は伺察にして細なり。有部は尋伺は六識と相應し、且つ尋伺二法俱起を許す、此の部は六識と相應を許せども尋伺俱起を許さず、經部は尋伺は唯意識にあり、而して二法俱起を許さず。化地部の末計は有部と全合。

尋伺
- 唯意識 ― 大衆、經量、倶舍師、大乘
- 六識 ― 有部、化地本末
- 倶起 ― 有部、化地末計
- 不倶起 ― 化地本計、經部

【二三六】齊首補特伽羅有りとは、述記によるに不還者有頂地に生じ、下の無漏聖道を起して無學果を取る能はざれども、命終に至つてその結自ら盡き阿羅漢を得て般涅槃するを齊首の補特伽羅といふ。齊は際に通じ邊際の意、首は頂の意とす。又發軫には「又一說に齊首は根本の義とし、婆沙百六十二に擧ぐる所の、欲界と有頂とは、是れ有の根本と

【秦】出世間の禪有ること無し。覺の出世間法無し。

（三三九）善は有の因に非ず。

【陳】有の因に善無し。

【秦】有は善を因と爲すこと無し。

（三四〇）預流は退有り。諸の阿羅漢は定んで退する者無し。

【陳】（合す）

【秦】須陀洹は退法有り。阿羅漢亦退法有り。

（三四一）道支は皆是れ念住の所攝なり。

【陳】道分は是れ四念處の所攝なり。

【秦】道支は是れ念處の攝なり。

（三四二）無爲法に九種有り。一、擇滅、二、非擇滅、三、虛空、四、不動、五、善法眞如、六、不善法眞如、七、無記法眞如、八、道支眞如、九、緣起眞如なり。

なすが故にとあり、生死の首に至るが故に齊首といふ。」と而して婆沙百八十五の「分別論者は說く齊頂羅漢有り云云、」と例を擧ぐ。何れにしても此等の意によれば、齊首補特伽羅有りとは最頂我有りの意となるべし。然るに西藏譯によれば「補特伽羅は首に齊し」とあり（Wassiljew, s. 28）又パブヤによれば「補特伽羅は首及び身體の他の部全體に等し」即ち「我は全身に遍滿す」の意なり。（Rockhill, p. 192）。是は大衆部の意に合す、此の方が意味取り易し。然し漢蕃何れが正しきやパブヤはその後の所に、「我を認むべきが如き何物もなし」とせるより見れば撞著せる如し。陳譯も解し難し。秦には此の句缺く。

【三三七】「世間の正見有り、世間の信根無し。」此の句陳秦兩譯に異り、西藏譯には合す。

【三三八】出世の靜慮云々、有部に異る。

【三三九】善は有の因云云。是れ亦有部に異る。

【三四〇】預流は云云。有部に異り、大衆部に合す。秦譯の亦は不の誤字か。

【三四一】此の部は慧相應の心所を皆念住とするが故に八道支は總べて念住なり。

【三四二】無爲法に九種を立つることと大衆部に同じけれどもその種中、四、五、六、七は大衆部のそれと異る。四の不動とは定の障（苦樂受）を斷じて散動を離れて無爲を得たるをいふ。次に眞如（Tathatā）とは如實常住にして生滅に涉らざる理法をいふ。これを善惡無記の三性に當てて各を一無爲とす。不動は陳譯には無我と

【陳】無爲法に九種有り、一、思擇滅、二、非思擇滅、三、虛空、四、無我、五、善如、六、惡如、七、無記如、八、道如、九、緣生如なり。

【秦】九無爲事有り、謂はく數滅、非數滅、虛空、善法也、不善法如、無記法如、道、緣起如なり。

(二三)入胎を始めと爲し命終を後と爲し、色根の大種は皆轉變有り。心心所法も亦轉變有り。

【陳】受生を是れ始めとし死墮を終りとし、四大、五根、心及び助心法は皆變異有り。

【秦】胎從り乃至死に、諸根四大轉變自滅す。心心數法も亦轉變自滅す。

(二四)僧中に佛有るが故に僧に施す者便ち大果を獲。別に佛に施すに非ず。

【陳】大衆中に佛有り、若し大衆に施さば報を得ること則ち大なり、若し別に佛に施すも功德則ち及ばす。

なり居り、秦譯には缺く、西藏の譯は唐譯に合す。秦譯の善法の次の也は如の誤字なるべし。パブヤは無爲九種のことを擧げず。

【二三】入胎を云云。こは甚だ解し難き說なり。一見すれば、この派は有部などに反し、轉變說をとり、生れてより死するまでは、肉體も精神もその體は同一にしてただ變化によりて種種相を呈すと主張せんとするが如くなれど、これにては後に「一切の行は皆刹那滅なり、」と說く處と相應せす。何んとなれば刹那相續說と轉變說とは調和し難き考なればなり。述記には二釋を擧げ第一釋にては、一切行は刹那滅といふも、必ずしも殘らずと解すべきにあらず、身心を組成する要素だけは轉變するものなりといふ義に解すべしと。第二釋は刹那滅なれど、有部の如く未來より別法生じて相續するにあらず前法が因となりて後法を引生する點に於て後法は前法の轉變なるが故に、轉變說成立すと。然れども何れにも無理あり、倘ほ攷究を要す。

【二四】僧中に云云、現在の僧伽に於て佛を見得るを以て僧伽に供養することは、別に歷史的の佛一人に供養するよりも大利益ありといふ主張なり。蓋し僧伽中心の主張なりとす。次ぎの法藏部の佛中心に對す。

【秦】佛は僧中に得可し、僧に施さば大果報を得。佛に非ず。

(二四五)佛と二乘と皆同一道、同一解脱なり。

【陳】【秦】(合す)

一切の行は皆刹那滅と說く。

【陳】【秦】(意合す)

定んで少法の能く前世より轉じて後世に至るもの無し。

【陳】【秦】(意合す)

此れ等は是れ本宗同義なり。

【陳】【秦】(意合す)

第二節　(二四六)末宗異義

其の末宗異義は、謂はく、

【陳】此の部復異義を執す。

【秦】此れ等の諸の中間見とは。

(二四七)實に過去未來有りと說く。

【二四五】佛と二乘と云云。佛と二乘とは全然異れる種類のものか、唯だ同種類のものの位や力用やの上下に過ぎざるものかに關して異論あり。本宗は同種類說をとるものにして、一切智、一切種智を道とし、擇滅無爲を得するを解脱とする點に於て三乘共に同じと主張するなり、有部や法藏部に對するものとす。

【二四六】化地部の末宗異義は有部に近きもの多し。

【二四七】實に過去云云。有部に全合。

【二四八】亦中有有り。同上。

(二四八)亦中有有り。

(二四九)一切法處は皆是れ所知、亦是れ所識なり。

(二五〇)業は實に是れ思なり、身語の業無し。

(二五一)尋と伺と相應す。

(二五二)大地は劫住なり。

(二五三)窣堵波に於て供養業を興すとも獲る所の果は少なり。

【陳】【秦】(以上諸段意合す)

(二五四)隨眠の自性は恆に現在に居す。

【陳】(合す)

【秦】法現在前なるを使と名づく。

(二五五)諸の蘊・處・界も亦恆に現在なり。

【陳】(合す)

【秦】陰界入は現在前し、已れば法の種子なり。

此の部の末宗、一頌を釋するに因つて執義の異あり。彼の頌に言ふが如し。

【二四九】一切法處云云。同上、

【二五〇】業云云。有部が身語意三業各別體とするに對し、思(意志)の心所を業の體とする點に於て經部に類す。

【二五一】尋と伺と云云。化地部の本計に異り有部に合す。

【二五二】大地云云。ここに劫といふは成住壞空の四劫の中の前三劫なり。大地は三劫間住し、刹那滅にあらずと說く。

【二五三】窣堵波云云。有部法藏部に異り、大衆部に合す。

【二五四】隨眠云云。本計は隨眠は惑種にして不相應なりとしたれども、未だ恆に現在に在りとまではいはざりしが、末計にては苟も惑の斷ぜざる限りはその現不現に關せず恆に現在すと說くなり。

【二五五】諸の蘊處界云云。此は種子の蘊處界を指す、現行のそれにはあらず。現行の蘊處界は時に間斷あるが故に現在前といふべからず。種子は前念後念相續し、恆に現在して現行の蘊處界を生ず。

(二五六)五法は定んで能く縛す、諸苦、是れより生ず。謂はく無明と貪と愛と五見と及び諸業となり。

【陳】離法の偈に言はく、

五法是れ決定して諸苦之れより生ず。無明心と貪と愛と五見と及び諸業となり。

諸部の義の本は皆同じ、執異有るが爲めの故に別部を成ぜり。

【秦】能く諸苦を生ずるもの、謂はく、無明と渇と愛と見と業と、是れを中間見法と名づく。

第十一章　法藏部の本宗同義

其の法藏部の本宗同義は、謂はく、

【陳】法護部の是執義の本は、

【秦】彼の曇無德の根本見とは、

(二五七)佛は僧中の所攝に在りと雖も、然れども別

【二五六】無明(Avidyā無知)は三界の無明。貪(Rāga)は欲界の貪欲なり。愛(Kāma)とはここには特に色無色界の愛欲を指す。五見(Pañca-dṛṣṭi)とは有身見(Satkāya-dṛṣṭi)、邊執見(Anta-parigraha-d 或は斷、或は常と一方に偏したる見を立るなり)、邪見(Mithyā-d因果無しとするなり)、見取見(Dṛṣṭi-parāmarśa-d 自已の見を勝なりとす)、戒禁取見(Śīla-vrata-parāmarśa-d 戒禁を守ることのみを以て解脱の眞因とす)なり。業は身語意あるが、然し有の因となるものは唯不善業のみなり。さて以上を釋するに二あり、一は作用の勝れたる點に配し、二は十二緣起支に配す、先つ初釋は、無明は見修二道に通じて障道の力用最勝根本なり。貪愛は修道に於て障道最勝なり。內に愛は上二界、貪は欲界に屬すとす。五見は見道に於て、障道最勝なりと。後釋は、無明は十二緣起支の第一、貪と愛とはその愛(Tṛṣṇā巴 Taṇhā)支、五見はその取(Upādāna)支、業はその行(Saṁskāra)と有(Bhava)との兩支とす。

【二五七】佛は僧中の云云。化地部と異り、佛は僧中に有りとするは同じなれど佛は特別の功德田なる故に別に佛に施すは大果を得とす。西藏バブヤは佛は僧中にあらずとす、(Rockhill, p. 192) 卽ち秦譯に合す。

に佛に施せば果大にして、僧には然らず。(二五八)窣堵波に於て供養業を興さば廣大果を獲。

【陳】僧中に佛世尊有り、斗籔波に依つて恭敬を起さば勝報有り、大衆に恭敬するも則ち及ばず。

【秦】佛は僧中に得可きに非ず。佛に施さば大果報を得。僧には然らず。

(二五九)佛と二乘と解脱は一なりと雖も、聖道は異る。

【陳】佛道と聲聞道と異る。

【秦】(陳に合す)

(二六〇)諸の外道は能く五通を得ること無し。

【陳】【秦】(合す)

(二六一)阿羅漢身は皆是れ無漏なり。

【陳】【秦】(合す)

餘の義多く大衆部の執に同じ。

【陳】【秦】(合す)

第十二章　飲光部の本宗同義

【二五八】窣堵波云云。此れも化地部に反す。秦譯には此の句無し。陳譯の斗籔波は籔斗波(Stūpa)の轉倒せるなり。而して此の句は最後に來る可く、大衆に云云の句は「佛世尊有り」の句の次に來るべし。

【二五九】佛と二乘と云云。化地部に異り、有部に合す。

【二六〇】諸の外道云云。有部犢子部に異り、雪山、化地部に合す。

【二六一】阿羅漢身云云。述記に二義を擧げて之れを釋す、第一は阿羅漢身は漏の依に非ざるが故に、卽ち無學身中の蘊は漏を起さざるが故にとす。第二は、漏の境に非ざるが故に、卽ち無學身は境となりて他人の煩惱を生じ隨増せしむること無きが故にとす。

其の飲光部の本宗同義は、謂はく、

【陳】善歳部の是執義の本は、

【秦】彼の迦葉惟部の根本見は、

(二六二)若し法を已に斷じ已に遍知すれば、則ち無し。未だ斷ぜず、未だ遍知せずば、則ち有り。

【陳】法已に是れ所滅し是れ所離すれば、則ち無し。未だ滅せず未だ離れずば則ち有り。

【秦】(有斷法斷知無有不斷法而斷知とあれど讀み難し、錯誤あるならん。)

(二六三)若し業の果已に熟すれば則ち無し。未熟ならば則ち有り。

【陳】(合す)

【秦】業熟すれば報を受く。熟せずんば報を受けず。

(二六四)諸行は過去を以て因と爲すこと有り、諸行は未來を以て因と爲すこと無し。

【陳】有爲法は過去法を以て因と爲さず、現在及び未來法を以て用となす。

【二六二】ここに法とは惑法即ち煩惱なり。已斷とは世間道に於て煩惱を斷するをいひ、已遍知とは解脱道に於て無爲を證するをいふ。已斷已遍知なれば惑法無し。若し未斷未遍知なれば、惑法は過去に落謝すとも猶その體有り、有部は法は斷すと雖もその體有りとする卽ち三世實有とするに異る言はゞ半實有論なり。而もその實有も未斷未知といふ條件附なるを以て、又之を分別說ともいふ。

【二六三】若し業の果云云。前と同理にして、果を實現し終れば、業は無に歸するも、實現せざる限り過去に存在して、遂にその實現を見るとなり。倶舍論廿卷三丁に之を分別說と評せり、論事にも飲光部の說として之を傳ふ。

【二六四】諸行は云云。有部が現在法は未來法を以て能作因とするに對す。この派は未來の實有を認めず尚ほ陳譯の始めの爲さずは爲すの誤り、後の爲すは爲さずの誤り、終りの用字は因の誤りなるべし。西藏譯は唐譯に合す。(Wassiljew, s. 284)

【秦】過去の因果有り、未來の因果有ること無し。

(二六五)一切行は皆刹那滅なり。

【陳】(合す)

【秦】一切法刹那有り。

(二六六)諸の有學の法は異熟果有り。

【陳】【秦】(意合す)

餘の義多くは法藏部の執に同じ。

【陳】【秦】(合す)

第十三章　經量部の本宗同義

其の經量部の本宗同義は、謂はく。

【陳】說度部の是執義の本は、

【秦】彼の相續部の根本見は、

(二六七)諸蘊は前世より轉じて後世に至ること有りと說き、說轉の名を立つ。

【二六五】有部に合す、犢子部に對す。

【二六六】諸の有學の法云云。有部に對す、是れに述記には二釋を擧ぐ、一は、異熟果とは無漏果をいふ。無漏法は三有を滅せしむるが故に有漏の異熟果を招くこと無し。然るに異熟と名づくるは前念の無漏後念の無漏を引起し前の因力に因り成熟するが故に假りに異熟果と名づくるも、其の實は等流果なり。故に此の果は無漏に屬すと。二は、無漏法も亦有の果を感ず、初二果は猶欲惑あるが故に無漏法は界に墮せずとも欲界の異熟果を感ず、第三果は上界の惑あるが故に無漏法と雖も上界の異熟果を感ず、即ち煩惱未だ盡きざれば無漏圓滿ならず、故に異熟果を感ずと。

【二六七】諸蘊は云云。經部を一名、說轉部(Saṅkrāntika)といへる理由を明したるものなり。有部は刹那相續を說き、少法なりとも今世より後世に轉ずるものなしといへるに對し、經部は、有情組成の諸蘊は未來世まで轉移すといふ處より、說轉の異名を得たるなり。勿論、その轉ずる諸蘊とは何を意味すかに就ては異論あり、或は種子の謂なりと云ひ或は勝義我の謂なりと一定の解釋なきも要するに次ぎに述ぶる四蘊の屬性とする一味蘊の義と見るを至當とす。

【陳】陰は前世より後世に至る。

【秦】陰は此の世より他の世に至る。

(二六八)聖道を離れて蘊永く滅すること有るに非ず。

【陳】若し聖道を離れて本陰滅せず。

【秦】聖道を離れて陰を滅するを得るに非ず。

(二六九)根邊の蘊有り、一味蘊有り。

【陳】陰に本末有り。

【秦】陰に約根本有り(脱字有るならん)

(二七〇)異生位の中に亦聖法有り。

【陳】凡夫位の中に聖法有り。

【秦】(此の句缺く)

(二七一)勝義補特伽羅有りと執す。

【陳】眞實人有り。

【秦】第一人有り。

餘の所執は多く説一切有部に同じ。

【二六八】聖道を離れて云云。有部などにては有漏の六行觀にても煩惱を斷じ得と説くに對して、本宗にては、有漏觀はただ伏するのみにて斷じ得ず、斷は無漏聖道に限ると。

【二六九】根邊の蘊云云。蘊に二種あり、一は根本蘊(一味)にて他は始末蘊(根邊蘊)なり。一味蘊とは受想行識の四を屬性とするものにして亦之を細の意識ともいひ、生死解脱の主體なり。他の五蘊はこの根本より生じたる始末蘊なるを以て之を根邊の蘊といふなり。

【二七〇】異生位云云。異生にも無漏種子ありといふ。卽ち本有佛性説に近くなり居れり。

【二七一】勝義補特伽羅 (Paramārtha-pudgala)。蓋し一味蘊を我的に命名したる語ならん。

【陳】（合す）

【秦】 餘の一切は薩婆多部の見と同じ。是れ略して一切部見を說けり。

(二七二)三藏法師此の論を飜じ竟つて重譯の意を述ぶ、乃ち頌を說いて言はく、
備に衆梵本を詳にし、再び宗輪論を譯す。
文は義に愜ひ謬り無からしむ。智者勤めて
學ぶべし。

(陳譯には有つ有部の所執と相似たり。この次に續いて左の附記あり。)

(若目出し)部執論中に亦十八部の名有り、但音多くは訛異にして復本の如くならず。今謹んで別に天竺本名を存し、仍つて以て初めの大衆等の名を論じ、次第に相對して之れを翻せん。翻譯にして具にし難し、義は中に譯するが如し。初めに分れて兩部(天竺には部を呼んで(二七三)尼柯與と爲す)と成る、一には(二七四)摩訶僧耆柯部、二には他鞞羅與部なり。次に摩訶僧耆柯部より又三部を出だす、一には猗柯毗與婆訶利柯部、

【二七二】此は跋文にして、玄奘が、重譯をなせし意を示す。即ち同本の異譯が已に秦代に於て十八部論として、陳代に眞諦譯の部執異論として存在せしが、その誤謬あるを以て重ねて衆梵本を校合して譯せる意を示す。

【二七三】尼柯與。Nikāya

【二七四】以下順次に Mahāsaṅghika, Sthaviriya, Ekavyavahārika, Lokottaravāda, Kaukkulika. (Kaukkuṭika); Bahuśrutika; Prajñaptivāda; Caityaśaila, Uttara śaila Sarvāstivāda, (Hetuvāda), Hemavata, (Sthaviriya); Vātsīputrīya; Dharmo ttariya, Bhadrāyaniya, Sammitiya, Ṣaṇṇāgarika; Mahīśāsaka; Dharma-gupta; Suvarṣaka (Kāśyapīya; Saṅkrāntivāda (Sautrāntivāda).

二には盧俱多羅婆拖部、三には高俱梨柯部、亦は高俱胝柯部と言ふ。次に摩柯僧耆部より又一部を出だす、婆吼輸底柯部と名づく。次に摩訶僧耆柯部より又一部を出だす、波羅若底婆拖部と名づく、次に外道有り、摩訶提婆と名づく、摩訶陀耆柯部中に出家して自ら分れて兩部を成す、一には支底與世羅部、二には鬱多羅世羅部なり。他毗梨與部又分れて二部と成る、一には薩婆阿私底婆拖部、亦の名は醯兜婆拖部、二には醯摩跋多部亦の名は他毗梨與部なり。次に薩婆阿私底婆拖部より又一部を出だす、跋私弗底梨與部なり。次に跋私弗底梨與部より又四部を出だす、一には達漢多梨與部、二には跋陀羅與尼與部、三には三眉底與部、四には山拖伽梨柯部なり。次に薩婆阿私底婆拖部より又一部を出だす、彌嬉捨【二七五】婆柯部と名づく。次に彌嬉捨婆柯部より又一部を出だす、達摩及多部と名づく。次に薩婆阿私底婆拖部より又一部を出だす、蘇跋梨沙柯部、亦の名は柯尸悲與部なり。次に薩婆阿私底婆拖部より又一部を出だす、僧【二七六】千闍底婆拖部と名づけ、亦は修丹闍多婆拖部と名づく。

【二七五】婆は娑の誤寫。
【二七六】千は干の誤寫。

國譯異部宗輪論　終

國譯異部宗輪論附錄

結集史分派史考（未定稿）

木村泰賢
干潟龍祥

第一節 第一結集について

第一結集(一)の根本史料として南傳にては律の小品(二)第十一、セイロン島史(三)、大史(四)、北傳にては彌沙塞部五分律第三十(五)、(六)摩訶僧祇律第三十二、(七)四分律第五十四、(八)阿育王傳、(九)大事、(一〇)Dulva、異部宗輪論述記、部執異論疏(一一)等を擧ぐべし。(一二)南傳律文小品にては、(C. V. XI)

大迦葉比丘衆に語りて曰く、「嘗て余(一三)パーパより(一四)クシナーラーに趣く途中、曼荼羅華を持てる一(一五)邪命外道のクシナーラーより來れるに會ひ世尊を見たりや否やを問ひしに彼れ答へて、沙門瞿曇は入滅して已に七日を經たり、我れ彼處にて此の華を得たるなりと。此の語を聞きて比丘衆中煩惱未斷の者は號泣悲哭せり。余は世尊の(一六)教を說きて彼れ等を慰撫せり。然るにその時、晩年出家せる須跋

【一】結集、梵 Saṁgīti 等誦、卽ち誦み合せること、結集はその意譯。

【二】Cullavagga(S. B. E. vol. XX 以下略號 C. V.)

【三】Dīpavaṁsa(Oldenberg 出版且譯，以下略號 D. V.)

【四】Mahāvaṁsa(Geiger 譯，以下略號 M. V.)

【五】張二、六十八右以下。

【六】列十、三十二左以下。

【七】列六、四十九左以下。

【八】蔵十、十三右以下。

【九】Mahāvastu, Ed. Senart, 1, p. 69 foll.

【10】Rockhill : Life of Buddha, p. 148 foll.

【一一】義林章三六玄義檢幽鈔等所引。

【一二】巴利現存律は現存せる南北兩傳の諸律中、最も古き形を存するものなること、その

陀(Subhadda)なる者、衆に曰く、『彼の師在世中は吾等に對し是れは爲す當し、是れは爲す當からずとて、吾等を拘束せり、今彼れ死し、吾等自由に行動するを得、何ぞ嘆くを要せんや』と(一七)。諸君よ法及び律を結集せん、非法及び非律が世に蔓り、法及び律が世より捨てられざる前に」と。かくて四百九十九阿羅漢を選べり。而して阿難(Ānanda)は猶有漏なりしも世尊に近侍し法律を記憶せるを以て彼れをも加ふ。かくして王舍城に於て雨季中に結集すべきを決議し彼の地に行けり。結集の始まる前夜に於て阿難は無漏に達せり。結集は、律は優波離(Upāli)が法は阿難が之れに當れり(一八)。結集終りて阿難曰はく、「世尊入滅前、余に、小戒は欲するならば捨つるも可なりと宣へり」と。然れども阿難は如何なるが小戒なるかを知らず、衆此の事に關し論議決せず、大迦葉乃ち宣言して、「如何なる戒をも凡べて捨つ可からず、然らずんば外道より侮蔑を受けん」と。衆皆同意せり(一九)。次に、尊者プラーナ(Purāṇa 補剌拏、又は富樓那)、五百比丘と共に(二〇)南山に遊行せしが、迦葉等の法律を結集せしを聞き、王舍城に來る。比丘等彼れに曰はく、「吾等法及び律を結集せり、汝亦從ふべし。」と。プラーナ答へて、「法及び律の長老等によりて結集せられしは結構な

原形は恐らく佛滅百年以前の遠からざる時に於て篇せられしものなるべきは、オルデンベルグ氏の說の如し。以て此の律文記事の權威あるを知るべし。(Oldenberg: Vinaya Piṭakaṁ, vol. 1. Introd.

【一三】 Pāvā 波婆。

【一四】 Kusinārā 拘尸那羅、佛入滅の地。

【一五】 邪命外道、梵 Ājīvaka

【一六】 生者必滅等。

【一七】 以上の話は長阿含大般涅槃經 (DN. XVI. Mahāparinibbāna-suttanta) に出づ、但しその場合迦葉が慰撫語と須跋陀の語とは順序轉倒せり。

【一八】 律と法。律(Vinaya)とは日常生活の規定なり。法(巴 Dhamma 華 Dharma)とは教理なり。法は後にその中よりその要項を諳記に便ならしむべく簡單に集められたるもの生じ、是れを Mātṛkā (智母) と稱し、說法をそのまま編せるものとしての經より次第に獨立するに至りしが、又佛弟子が佛說を解釋せるものも多く出で、それ等は皆 Mātṛkā の中に入れられ、ついでその中にやや大部のもの、一篇の書として認めらる可きものの出づるに至りて、そは Abhidhamma (法に關するもの、法に對する解釋の意、華 Abhidharma) 即ち論と稱せられ、從來の Mātṛkā もその中に入れられてここに律藏經藏の外に論藏なるものを出だして三藏 (Tipiṭaka 華 Tripiṭaka) となる。

【一九】 此の次に、比丘衆が阿難の五失を責むることあれど略す。

【二〇】 南山 (Dakkhiṇagiri) は王舍城南の山、西域記によれ

り。されど吾等は又吾等が世尊よりまのあたり聞きしままに持たん」と。

次に（二一）島史にては（D. V. V.）右の内、始めの迦葉が比丘衆に語る語は凡べて缺き、從つて迦葉が結集を結心する動機と見らるべき須跋陀の語に關しては是れを缺く。大史亦然り。處は兩史共王舍城七葉窟（二二）（Saṭṭapaṇṇi-guha-dvāra）、時は律文にては單に雨季中にとあるが、島史にては佛滅第四月、卽ち雨季の第二月（Sâvaṇa）、歲の第五月に始むとあり。大史は猶詳し（二三）。

北傳の（二四）五分律亦大體巴利律文に合するが、今その差異點を擧ぐれば、

須跋陀の代りに跋難陀とあり、法の代りに修多羅（Sutra經）とし、且つ是れを分ちて五藏（長、中、雜、增一の四阿含、及び雜藏）とす。結集後富蘭那（Purâṇa前記補刺拏）との諍は一層詳細なり（二五）

（二六）四分律の記事は殆ど五分律に合す、ただ、經律の外に加ふるに阿毘曇藏を以てす、卽ち三藏成れりとす。（二七）摩訶僧祇律は、南傳の一邪命外道と、須跋陀との二人の代りに一摩訶羅（Makala愚人の意）比丘を以てせり。處は王舍城刹帝山窟、人數千人、（二八）法藏に五あること五分律に同じ、且つ律藏にも

ば、その北麓の大竹林中の石窟にて第一結集行はれたりと（卷九）

【二一】島史及び大史の製作年代に關しては Oldenberg : Dîpavaṁsa Introduction p. 4 foll. Geiger : Mahâvaṁsa, Introduction p. IX foll. 參照すべし、今その詳細に入ることを避け、但前者は西紀第四世紀の終りに於てその頃迄にセイロンに存在せし史傳の一種なる Atthakatha-Mahâvaṁsa を基礎として成りしもの、後者は第六世紀の始めに於て、前者の簡素なるを敷衍して作りしものなりといふに止めん。

【二二】大史の方は王舍城毘婆羅巖（Vebhâra）の七葉窟とあり。

【二三】卽ち前月より準備にかかり、愈愈始めしは歲の第五月と。

【二四】五分律は彌沙塞部所依の律にして法顯三藏がセイロン島より將來せるものなるが、その內容は現存漢譯律文中最も巴利律文によく合するものなり。（佛陀什譯、西紀四二五頃）

【二五】富蘭那は七條（內宿、內熟、自熟、自持食從人受、自取果食、就池水受、無淨人淨果除核食之）を擧げて此は世尊より聞きし所、他事は忍べども此の七條のみは讓步し得ずとす。四分律にては八條となり居れど內容殆ど合す。

【二六】四分律は法藏部所依とせらる、その組織內容共に巴利律文とは遙に差を生ぜり。

【二七】摩訶僧祇律は法顯入竺して摩竭提國巴連弗城附近より寫し得て持歸り、晉義熙十四年譯出せらる。大衆部の所依とせらる。

【二八】舊は法藏とあれど、その

(二九)五を分つ。西藏の Dulva には、阿難は經を、優波離は律を、大迦葉自らは Matrka(論の原始的のもの)を結集すと。而して結集の動機としては須跋陀(又はそれに類する)の事を擧げず、ただ世尊及び舍利弗・目蓮の死と共に、多數の比丘死し、佛法煙の如く消えぬといふ世人の語を聞きて結集の決心を起せりと。富蘭那の話無し(三〇)。述記には、阿難(慶喜)は經を優波離(近執)は律を布刺拏梅怛利曳尼子(Purṇamaitreyaṇi-Putra滿慈子)は論を集む。此れを界內結集とし、猶界外に萬數の無學あり、別に標首無く、但大衆と言ふ、別に結集せりと。

其の他猶種種の傳說あれど、以上を以て代表的のものとすべく、吾人は是等諸傳を如何に解釋すべきか、以下余の私考を述べん。

一、諸傳相一致し、從つて最も骨子的の部と見らる可きは、「佛入滅して若干――多からざる――日數の後、迦葉等の發起によりて、阿難優波離等を始めとして諸比丘相集り、王舍城の一地に於て、若干日數を費して彼等が記憶せる佛の說法を誦み合せたり。」といふに止まる。而して吾人はただ此の程度に於てのみ第一結集なるものを史實として認む。第一結集を「ただの發明に過ぎず」(But pure invension)なりとし、全然之れを否定せんとするオルデンベルグ氏(三一)及びそれに賛するスミス氏(三二)の說には同意し難し。されど又第一結集に於て已に三藏を結集せりといふが如きは(三三)全然採るに足らざるは勿論、その經と律と(三四)といふも、現今存するが如きものの意とせば、そは信ず可からず。況んやその經律の種類を明記せるが如きに至つては全く後世の構述と言はざるを得ず。その最も古傳なる法と律ととせるが如きものに(三五)於ても、その二者の間に現今見るが如き確然たる區別の其の時に存せしものとは見るべからず。從つて阿難が經を優波離が律をといふも、然かく確然と區別さるべきものに非ず。要は、佛の說法中後世の經及び論の一部(Matṛka)となるべきものの原始的種子ともいふべきものに關しては阿難がその多くを誦し、後世の律となるべきもののそれに關しては優波離がその多くを誦せりといふ程度のものとしてのみ信じ得可きが如し。それは兎に角、佛滅後教徒相集まり佛の

意は經藏のことなり。

【二九】制限淨、方法淨、戒行淨、長老淨、風俗淨。

【三〇】阿育王傳の所說は以上 Dulva のものと殆ど合す。

【三一】Oldenberg: Vinaya-Piṭakam, vol. 1. Introd. XXV—XXVIII.

【三二】J. R. A. S. 1901, p. 842 foll.

【三三】前記四分律、Dulva、阿育王傳、述記、及び西域記卷九、部執異論疏(義林章二本十所引)

【三四】前記五分律、僧祇律。

【三五】前記巴利律文及び島史、大史。

說法をそが離散誤傳せられざる爲に、一應誦み合せおく必要のありしは當然にて、特に保守主義の傾向を帶びたる迦葉一派の教徒等が特にそれを感ぜしは、當然なり。而して此の事件は滅後久しからざる後に於て起るべく、又多くの比丘が集まり住する爲めには、衣食住に便宜なる地を要すべく、それが爲めに王舍城の一地が選ばれしこと亦信じ得。ただその地が王舍城の何處なりしかについては異說あれど、今それに關し立入りて論ずるの要なからん。次に費せし日數について、確然と月日を明記せるものは是れをそのまま信ずる能はずと雖も、兎に角一ヶ月乃至二三ヶ月を要せしなる可く、又それが雨季に際し居り、從つて之れを利用せしなるべきことも信じ得べし。

二、迦葉をして結集の決心をなさしむるに至りたる動機として巴利律文に入れられたる須跋陀の話は[三六]、[三七]長阿含・般涅槃經に見ゆると同一なるが、そこには是れを結集の動機とせず、卽ちその次に結集のことを記せず。ホルデンベルグ氏は第一結集を否定する一つの理由として此れを擧ぐ[三八]。されど大般涅槃經は、その性質上、必ずしも結集に觸るるの要なく、從つてそこに結集を記せざればとて、直ちに以て第一結集を否定せんとするは失當なり。而して、須跋陀の話は、それが史實なりや否やは明ならざれども[三九]、大般涅槃經の此の部が成る頃、及び律文の此の部が成る頃迄には傳說として存せしものなるべく、經はそのまま記載せしに止まり、律文の編者は結集の動機として何か目に立つものを求めて、會々此の傳說に想到

【三六】北傳五分律四分律の跋難陀、僧祇律の一摩訶羅比丘の話は此れに同じ。

【三七】D. N. XVI. Mahāparinibbāna-suttanta. 漢譯にては長阿、遊行經(昃九、廿四、右)には比丘の名は「跋難陀、釋種子」とあり。佛般泥洹經(昃十、廿、左)にては比丘の名を擧げず、ただ、「年耆闇昧」とあり。般泥洹經(昃十、四十六、右)にては比丘の名は「檀頭」とあり。大般涅槃經(昃十、卅四、左)にては比丘の名を擧げず、「曉暮出家愚癡無智、共相謂言云云」とあり。

【三八】卽ち若し實際結集ありしとせば長阿含の此の處にもそれに關し何等か觸れあるべきに是の事なきは卽ち第一結集の史實ならざるを證すと。(Oldenberg: Vinaya Pitakam, Introd. XXVI foll.)

【三九】何となれば、此の話の内容諸傳區區にして、その人物も或は須跋陀といひ、或は跋難陀、又は單に一摩訶羅比丘といひ、話の筋に於ても諸傳差あり。故に如是話題が事實全然無根なりや否やは未だ明ならずとするも、少くもその内容に於ては信を置き得可き範圍極めて少しといふべし。

して是れを取入れしなるべし(四〇)。然かも事實はかかる話題を强ひて取入るる必要無く、佛滅後結集の起るべきは自然の勢なるべきこと前述の如し。むしろ結集の動機に關して何等取立てて述べざる島史、並びに述記等の說は眞に近きか(四一)。阿育王傳の說亦之れに次ぎ(四二)、Dulva の說はそを一層誇大具體化して記したるものなるべく、是等凡て須跋陀の話を結集の動機と見ず。是れ吾人の說を反證するものに非ざるか。

三、プラーナ(Purāṇa)尊者に關する巴利律文の記事は大意史實なる可く(四三)、此事は又第一結集の史實なることを反證するものとしても有力なり。而して界外(又は窟外)の大衆結集云云の(四四)記事は、プラーナの傳說が誇張せられたるに過ぎずして、之れを以て直ちに後の所謂大衆部の結集なりと見るは誤れり。されど同時に注意しおくべきは、第一結集は要するに迦葉一派の結集にして、從つて彼等と相合はざるの徒も亦少からざりしは見易き事にしてプラーナ尊者一派はその一例に過ぎざりしなる可く、從つてそれ等反迦葉派の諸黨が各自その當時結集せりとは思へざるも、その思想傾向は後世迄次第に存續せしなる可く、やが

【四〇】　此の點に關しては、Geiger, Mahāvaṁsa, Introd. p. LVIII—LIX ; Rhys Davids, Dialogues, II. p. p.76—77. 參照。

【四一】　部執異論疏亦然り、(義林章二本所引)

【四二】　迦葉が諸阿羅漢の佛に隨つて入滅するもの多きを見て卽ち制して曰はく、未だ法藏を結集せざる間は比丘は涅槃すべからずと、かくて五百人を集む云云。(藏十、十三右以下)

【四三】　五分律四分律の記事はそをやや誇大せるに過ぎず。

【四四】　前記述記の外に、西域記卷九に、「阿難證悟の地より西廿餘里、一窣堵波有り、無憂王の建つる所、大衆部結集の處なり。諸學無學數百千人、大迦葉結集の衆に預らず、來つて此こに至り、更に相謂つて曰く、如來世に在り同一師學、法王寂滅し吾が曹を簡異す、佛恩を報ぜんと欲せば當に法藏を集むべしと。ここに於て凡聖みな會し、愚智悉集り、復素怛纜藏、(Sūtra)毘奈耶藏、(Vinaya)阿毘曇藏（Abhidharma）雜集藏、禁咒藏を集め、別に五藏をなす。凡聖同會、因つて大衆部といふ」三論玄義、四十八枚右、部執疏に依つていはく、「界外の大衆萬數有り、婆師波羅漢を主となす、婆師波は此れには淚出といふ云云」と、義林章二本十に、「此の時乃ち無量の比丘あり、來りて法を聽かんと欲す、迦葉許さず、界外に往かしむ、各自法の如く三藏を誦出せり。阿羅漢有り、佛法恩を念じ、衆生苦を念じ、自ら恆に淚を垂る、故に婆師婆と名づく、大衆の主と爲る云云」と。

ては大衆部等の起立をも見るに至りしならん。

第二節　第二結集について

第二結集の根本史料は南傳にては律文小品第十二章、島史、大史、北傳にては五分律第三十(一)、僧祇律第三十三(二)、四分律第五十四(三)、西藏の Dulva 等なり(四)。巴利律文の記事は極めて精細なるが、今その大略を記せば(C. V. XII)、

佛滅百年に於て、(五)バッジー族なる(六)ベイサーリーの比丘等が(七)十事を唱へり。十事とは、(一)角鹽淨(Kappati-singilona-kappo鹽を角器に蓄ふるは可)、(二)二指淨(K. Dvaṅgula-k. 正午を過ぐること太陽の影が二指を横に布ける丈に至りても猶食し得)、(三)他聚落淨(K. Gāmantara-k. 一度食しても他聚落に行きては更に食し得)、(四)住處淨(K. Āvāsa-k. 同一敎區に住するも隨意の處にて布薩するを得)、(五)贊同淨(K. Anumati-k. 衆議にて決する時、議員未だ定數に滿たざるも、後に至つて贊成さるるを豫想して可決するは可)、(六)所習淨(K. Acinna-k. 先例に順へば正と認む)(七)不攢搖淨(K. Amathita-k. 未だ攢搖せざる乳は飮むことを得)、(八)飮闍樓凝淨(K. Jalogipātum 闍樓凝卽ち未醸酵又は半醸酵の椰子汁を飮むも可)、(九)無緣座具淨(K. Adasakam nisīdanam 座具を造るに周緣無き、大きさの規定以上のもの

【一】張二、六十九左以下。
【二】列十、三十五右以下。
【三】列六、五十一左以下。
【四】Rockhill, Life of Buddha, p. p. 171—180.
【五】巴 Vajji 跋耆、梵 Vṛji
【六】巴 Vesāli 梵 Vaiśāli 毘舍離。
【七】十事(Dasa-Vatthūni)南傳なる善見律毘婆沙には、(寒八、四右)鹽淨、二指淨、聚落間淨、住處淨、隨意淨、久住淨、生和合淨、水淨、不益樓尼師壇淨、金銀淨。北傳 五分律(張、二、六十九左以下)には、一、鹽薑合共宿淨、二、兩指抄食食淨、三、復坐食淨、四、趣聚落食淨、五、酥油蜜石蜜和酪淨、六、飮闍樓伽酒淨、七、作坐具隨意大小淨、八、習先所習淨、九、求聽淨、十、受畜金銀淨。四分律(列六、五十一左以下)には、兩指抄食、得聚落間、得寺內、後聽可、得常法、得和、得與鹽共宿、得飮闍樓羅酒、得畜不截坐具、得受金銀。西藏 Dulva の十事は以上と甚だ異り、(一)アララ(Alala)と叫ふも可、(二)伎樂をなすも可、(三)井を掘り又は掘らしむるも可、(四)一生涯鹽を蓄ふるは可、(五)旅行中は一由旬又は半由旬に食し得、(六)二指を以て食するは可、(七)飮酒も可、(八)牛乳牛酪の混合を飮むを得、(九)無緣の座具も可、(十)受蓄金銀も可。

を造るも可)、(十)金銀淨(K. Jātarūparajataṁ 金銀錢を蓄ふるを得)(八)なり。時に尊者耶舍迦乾陀子(Yasa Kākaṇḍa-putta)ベーサーリーの重閣講堂(九)に在りき。バッジー族比丘等は布薩の日に銅鉢に水を盛り、優婆塞の參詣者に向ひ曰く、「僧伽に一錢を(10)與へよ、或は半錢を、或は四分の一錢(一一)を、或は一厘を(一二)與へよ、僧伽はそれによりて種種の用具を購ふべし。」と。耶舍之れを聞き優婆塞等に曰く、「止めよ、金銀を用ふることは釋子沙門に許されず、その布施を受くることも、亦それを分配することも許されず、釋子沙門は凡て貴金寶珠を捨て、金銀を蓄ふべからず」と。優婆塞等從はずして與へたり。比丘等之れを受け、一分を別にし、餘を各自に配當し、別にせる一分を耶舍に與へんとせり。耶舍受けず。仍て比丘議して「此の耶舍は篤信の者を誹謗し、瞋らしめたり、彼れに謝罪課(一三)を課せん」と。耶舍因つて、一比丘を伴ひ(一四)優婆塞衆の所に行き曰く、「余は法を法とし律を律とし非法を非法とし非律を非律と宣せることによりて諸君の瞋りを蒙れりと。されど世尊の教は如是なりき云云」と一一例を擧げて非法を指摘せり(一五)。優婆塞等曰く、「耶舍こそは眞の唯一の釋子沙門なり。吾等は彼れに必需品を布施せん」と。かくて耶舍は伴比丘と共に歸り來れり。比丘等その伴比丘に結果を問ふ。伴比丘如實に答ふ。比丘等大に瞋り遂に耶舍を破門(一六)せんとす。耶舍乃ち空中を飛んでコーサンビー(Kosambi拘睒彌)に行き、使を西方及び南方に派し、此の問題の解決を訴ふ(一七)。時に尊者三浮多商那和修(Sambhūta Sānavāsī)

【八】以上各各についての解釋は小品第一章第十節の解釋に隨つて略記せるなり。

【九】巴 Kūṭāgāra-sālā 鳩吃伽羅沙羅。

【10】巴、Kahāpaṇa 華 Kārṣāpaṇa 罽利沙槃、貨幣の名にて吾が國でいへば先づ一錢とでもいふべき所なり。

【一一】四分の一錢とは原語は Pāda なり。

【一二】一厘とは原語は Māsaka 最下の貨幣の意。由つて一厘と譯せり。

【一三】巴 Paṭisāraniya-kamma 是れは比丘が故なくして俗人を誹謗せし時、その俗人の前に行きて謝罪をなすべき一軌則なり(C. V. 1.18—26參照)

【一四】謝罪をなす時には證人として他に一比丘を伴ふを規則とせり。

【一五】此の處一一世尊の說法の例を擧ぐ、頗る詳細なり。

【一六】巴 Ukkhepaniya-kamma (僧祇律は擧羯磨、四分律も擧と釋す)、比丘が自らの過失を證認せざる時、一時的破門を宣告するなり。五分律は不見罪羯磨と譯す。

【一七】此の時の語調は第一回の迦葉の語調と全く同じ。

は阿呼恆河山(Ahogaṅga)に在りき、耶舍行きて賛成を求む。かくして西方諸國より約六十人の比丘、阿槃提(Avanti)及び南方諸國より八十八人〔一八〕の比丘何れも阿呼恆河山に集まれり。時にソーレーヤ(Soreyya)〔一九〕に長老離婆多(Revata)あり、阿含・論・律に通ず。彼等は彼れを自黨に入れんとせり。然るに彼れはバッジー族比丘が彼れの所に來るべきを憂ひ、そを避けんとして諸所に轉ぜり。耶舍の徒は遂に沙訶闍底(Sahajāti)に於て彼れに會し、賛成を得たり。バッジー比丘等は耶舍が徒黨を集めつつあるを知りて驚きて離婆多を自黨に入れんとして舟にて沙訶闍底に行けり。尊者沙蘭(Sāḷha)は定にありて、何れの徒が合法なるかを考へ、法及び律に照して西方(耶舍黨)の比丘は正しとせり〔二〇〕。バッジー比丘等は離婆多の所に行き贈賄をなさんとす。離婆多受けず。由つてその弟子ウッタラ(Uttara)〔二一〕を説伏し贈賄して彼れの師に東方比丘の黨に入るべく請はしむ。ウッタラ乃ち師に告ぐ、離婆多怒りウッタラを追放せり。かくて離婆多の發議によりて、事件の起りし地なるベーサーリーに於て會議を開きて決せんとし、彼れ等彼の地に行く。時に長老薩婆加摩(Sabbakāma)、ベーサーリーに在り、法臘百廿、阿難の弟子なり。彼れ亦十事を非法とすれど、「自らの意見は問はるるに非ずば宜べず」とせり。かくて雙方の比丘等相議せども衆議紛紛として決すべくもあらず。離婆多乃ち發議して兩方より委員を出すこととし、東方よりは〔二二〕薩婆迦摩、沙蘭、クツジ

【一八】 大史にはパーバ(Pāvā)より六十人、阿槃提より八十人とあり、(M. V. IV. 19)大史は西方といふ代りに常にパーバとせり。

【一九】 タクシャシラー(Takṣaśilā)の附近なり、(Kern, Manual, p. 36)

【二〇】 此の時淨居天の諸神の一人下り來り沙蘭に賛せり。沙蘭、その神に曰く、「余は合法の徒に黨せん、されど余の意見はそが問はるるに非ずば宜べず」と。

【二一】 五分律には此の名達摩(Dharma)となり居る。

【二二】 以下八人の長老に關し、島史(D. V. IV, 47—53, V, 16—31)には、薩婆迦摩、沙蘭、三浮多、離婆多、不闍宗、耶舍の六人は阿難の弟子、他の二人はアヌルダ(Anuruddha)の弟子なり、何れも世尊を見たり云云と。北傳五分律は、跋者比丘方は一切去、離婆多、不闍宗、修摩那。波利邑(Pratīci西方)比丘方は三浮陀、沙蘭、長髮、婆沙藍を選ぶ。一切去は百三十六臘、離婆多は百廿臘、三浮多及び耶舍は百十臘と。四分律は、波梨比丘方よりは一切去、離婆多、耶舍、蘇曼那。波夷那(Prācīna東方)比丘方よりは三浮陀、婆搜村、沙留、不闍蘇摩を選ぶと。

意すべきは、何れの傳にも跋耆族比丘等十事非法を提言せりとせるが、摩訶僧祇律のみは之れを記せず、ただ當時の比丘が金錢の布施に戀戀たるを記するのみなることなり。且つ又諸傳にては阿難及びアヌルダ系統の八長老を擧ぐれど(三二)、此れにては耶舍以外に他の一人をも擧げず、却つて自ら優波離系統とせる陀娑婆羅を擧げ、陀娑婆羅が律を結集することとなり居れり。こは惟ふに、この摩訶僧祇律は大衆部の律にして(三三)、大衆部は自由進歩思想の徒によつて生れしものにして、その中には十事を唱へしバッジー族の後繼者も入り居りしなる可く、從つて十事の如き些細事の非法問題は此れを介意せず、却つて之れを記しおくは自派の名譽にも關するものとして自派の律を作る時に此の點を除去せしに非らざるか。十事を除去せるよりして、それと關係ある八人の長老の事等皆之れを記せざるものなるべく、ただ取蓄金錢の事は大衆部に於ても非法と認めしものなるべく、從つて此れを排斥したる耶舍の名を擧げ、耶舍の發起によりて律を結集せしことを記載せるに非ずや、而して律としては優波離系統を以て正系とせらるるより、自派の律も亦然るを主張せんとして律の結集者は優波離系統の陀娑婆羅を以てし、阿難阿㝹樓陀系統の者を擧げざりしならんか。

三、八人の長老は實在の人物なるべく、但その行動の往往神祕的なる、その信ず可からざる程度に高齡にして、且つ親しく世尊を見たりといふが如きは、十事非法を排拒せしものに權威あらしめ、彼等の宣言は佛口よりの宣言に等しき價値あるものと信ぜしめんとしての揑造に過ぎざるべし。吾人はただそれ等を差引しての人物を實在として認め得るのみ。

人の諳誦記憶によりてのみ傳へられしものにて、從つて異說を挿入せる場合、その正邪を決するは全く記憶に訴へ、多數決によるより外なかりしなり。故に大會議を開くの要ありしなり。

【三二】 僧祇律、列十、三十五右。

【三三】 その傳統說が優波離―陀娑婆羅―とありて、普通大衆部傳統とせらるる羅睺羅系統に非ざるよりして此は大衆部のものに非ずとする說もあれど、此等傳統說は必しも確定せるものに非ざれば然かく重んずべきに非るべし。此の律の私記には、(列十、八二左)「時に天竺に五部有り、曇摩崛多、彌沙塞、加葉維、薩婆多なり。各自義を以て是となす、阿育王乃ちその是非を測らんとし多數決による、此れに贊する者多數なりしかば摩訶僧祇と名づく。云云」と、又法顯傳には、「佛在世の時に、最初大衆の行する所也」とあり、此等傳說はそのまま是れを信ずる能はず。

四、十事非法を排斥して後、彼等七百比丘は更めて律藏を結集せりといふことは島史大史等諸傳（三四）の說く所なるが、巴利律文には此の事を明記せず、ただ卷末に頗る出し拔けに「此律の結集に於て七百比丘あり、故に七百結集といふ。」とあるのみ。五分律四分律の記事亦是れに類す（三五）。是れによつて此れを觀るに、十事非法排斥の後、直ちに律の結集なるものありしや否やは甚だ疑はし。若し右の律文の此の句に何等かの意義あるものとせば、そはその結集なる語は、嚴密なる意の所謂結集にあらずして、ただ七百比丘が會議して、彼等が記憶せる律に照らし、十事の正非を判じ、以て從來の律を一層强固にせりといふことを指すに過ぎざるべし。果して更に律藏を結集せしや否やは——大史に於てはその記事やや精細なりと雖も——甚だ疑はし。

五、七百結集後それに服せざる徒が別に大結集をなせり（三六）、これにより大衆部起れりとは、島史大史の傳ふる所なるが、此の大結集なるものが十事非法後に直ちに行はれしや疑はし。否或は何等か結集をなししやも知れざれど、それがそのまま大衆部を起すものとなりしとは思はれず、又その結集ありとしても內容が如何なるものなりしやは明にし難し。南傳が傳ふるが如きは（三七）無論後世の竄入なるべし。

六、以上を要約して、吾人は所謂第二結集なるものに就いて唯次の事をのみなし得。即ち、『佛滅後百年、ベーサーリーのバッジー族比丘等、十事を唱ふ。長老耶舍迦乾陀子は是れを制せんとして能はず。由つて諸方に同志を募れり。かくて離婆多を首めとして諸長老諸比丘ベーサーリーに集まり、會議を開き、自らの記憶せる律文によつて十事の非法なることを確め、是れを衆に宣言し、以て律の廢亂を防守せり。』

【三四】 善見律毘婆沙（寒八、四）部執異論疏（三論玄義檢幽鈔所引）、異部宗輪論述記、法顯傳等。

【三五】 五分律には「合して七百阿羅漢有り、不多不少、是れを七百集法となす。」と。四分律には「毘舍離に在つて七百阿羅漢法毘尼を集論す。故に七百集法毘尼と名づく。」とあり、何れも前段との關係頗る出拔的なり。西藏Dulvaには此の句すら缺く。オルデンベルグ氏は巴利律文の此の場合の句と、第一結集の際のと甚だ相似たるを以て、第一結集は第二結集の反影に過ぎずと論す。（Vinaya Piṭakaṁ I. Introd.）されど余は、句の筆法は兩者同じと雖も、事實は第一結集はそれとして存在せしものなりと思ふ。

【三六】 大史には七百結集の記事の所には記せざれど、次章（M. V. V. 3—4）には之れを記す。

【三七】 D.V. V. 32—38に詳述す。

第三節　根本分派について

ここに根本分派と呼ぶは、從來一味和合せし佛教教會が分れて大衆部上座部の二部となりしを指す。是れに關し南北兩傳異れり。南傳島史大史は十事非法事件を以て分派の起因と爲し、從つて所謂第二結集の後に於て大結集ありとし、それより大衆部上座部の二部起るとなすこと前節に述べしが如し。北傳は是れと大に趣きを異にし、異部宗輪論、婆沙論九十九(一)、西藏バブヤ、ターラナータ佛教史等(二)その相互間には差異少からざれども何れも十事非法を以て根本分派の起因とせざる點に於ては一致す。異部宗輪論所説は本文によりて見るべく(三)、是れを除きたる北傳の代表として婆沙論(四)の説を概記せば、

昔、摩土羅(Mathurā)國に一商主の子あり大天(Mahādeva)と號す、長じて母に通じ父を殺し、その發顯を恐れ母と共に巴連弗城に逃げ、そこにて曾て供養せしことある羅漢に遇ひ、彼れに因つて事の發覺せんを恐れてその羅漢を殺し、後に母が他人と通ぜしを怒り母を殺す、彼れ三逆罪を犯し深く悔い、沙門釋子に滅罪の法有りと聞き、鷄園(Kukkuṭārāma)寺(五)にて出家す。彼れ聰敏、久しからずして三藏に通じ、國王の歸依を受く。彼れ一時夢に不淨を泄し汚れたる衣を弟子に洗はしむ、弟子卽ち阿羅漢に此の事有るを怪みて彼れに問ふ。大天曰く、漏に二種あり、煩惱漏と不淨漏となり、前者は阿羅漢に無し、後者は阿羅漢にも猶有り(六)と。次に彼れは弟子をして歡喜せしめんと欲し次第して四

【一】收四、九十六左以下。

【二】Bhavya, Kāyabhetro-vibhaṅga (Lockhill, Life of Buddha p. 181 foll.) Schiefner 譯五十一頁以下。

【三】此れと共にその別譯なる部執異論、十八部論、及び西藏譯を併照すべし。

【四】婆沙論には時代を明記せず。

【五】阿育の建つる所、南傳に阿育園(Asokārāma)、是れによつて時の王は阿育なるべきは明なり。

【六】五事の第一、南傳 Kathāvatthu II, 1. に、Atthi arahato parūpahāro(阿羅漢は他に誘はるることあり)といひ、而して猶解釋して、魔の諸神が阿羅漢に不淨漏を起さしむとす。眞諦は部執異論疏に釋して、魔王天女が不淨を以て羅漢の衣を染むとす、されど此の解釋は誤れるならん。發智論第七(秋五、三十四右)等に出づるものも皆阿羅漢が天魔に嬈はれて不淨を失すとせり。

【七】五事の第二、南傳 Kathāvatthu II, 2 に

沙門果を知らしむ、諸弟子卽ち問うて曰はく、阿羅漢は自ら證智あるべし、如何ぞ吾等知らしめらるべきやと。大天曰はく、無智に二あり、染汙無知と不染汙無知となり、前者は阿羅漢に無けれども、後者は猶ほ有り。故に知らしめられざるべからずと(七)。次に又弟子曰はく、阿羅漢は疑惑を離ると、我等諦實の中に於て猶ほ疑惑を懷くことあるは何故かと。大天答へて、疑に二種あり、隨眠生と處非處となり、前者は阿羅漢に無し、後者は猶有り(八)。次に又弟子等經を讀むに、阿羅漢は聖慧眼あり、自の解脫に於て能く自ら證智すとあり、乃ち弟子問うて曰はく、我等已に阿羅漢なれば自ら阿羅漢たることを證知すべし、何故に師によつて入らしめらるるやと。大天答へて、阿羅漢は但他入らしむるに由る、自ら知る能はずと(九)。又大天夜中に舊惡の罪深きを惟ひ「苦哉」と叫べり。弟子驚き明朝その故を問ふ。彼れ答へて、聖道は至誠に「苦哉」を稱し召命せずんば遂に起らず、故に我れ「苦哉」と叫びしなり(一〇)と。大天後布薩の時に上座に著き、戒條を誦し、その終りに右五事を頌文として誦し(一一)且つ曰はく、佛滅度の後と雖も聽聞のものは經を造ることを得、汝等經を造らんと欲せば隨意に是れを造れと。その時座中の長者等は大に驚き大天誦文の最後の句

Atthi arahato aññam ti (阿羅漢に無知あり)といふに當る。發智論第七には、「阿羅漢有り自らの解脫に於て猶無知有り」と。眞諦の部執異論疏には、「羅漢は習氣を斷ぜず、一切智を具せず、卽ち無明の爲めに覆はる」と。

【八】 五事の第三、Kathāvatthu II, 3 Atthi arahato vimati ti といふに當る。Vimati は又 Kaṅkhā ともいふ。發智論第七には、阿羅漢有り自らの解脫に於て猶疑惑有り」と。眞諦部執異論疏の釋は此れを阿羅漢の事とせず、須陀洹人の事とす卽ち「須陀洹人三解脫門に於て自ら證せざる無し、乃ち復た無し、餘事中に於て猶疑惑有り」

【九】 五事の第四、Kathāvatthu II, 4. の Atthi arahato parivitāranā ti. (阿羅漢には他が度せしむることあり)に當る。發智論第七に、「阿羅漢有り他に由りて度せらる」と。眞諦の部執異論疏には、此れを以て阿羅漢の事とせず、鈍根初果の事とす。

【一〇】 五事の第五、Kathāvatthu II, 5 の Yekeci dukkham ti vācam bhāsanti maggam bhaventi (何人たりとも苦哉と言ふものは道現前す。)に當る。發智論第七「道及び道支は苦の言の召す所なり」と。眞諦の部執異論疏の釋には、「聖道は亦言に因つて顯はる者有り舍利弗等の如きは口に偈を誦する時に當つて卽ち聖道を得云云」と

【一一】 五事の頌文は本文參照。

を「汝の言は非佛教なり」とし諍鬪甚し。時の王雞園に至り是れを鎮撫せんとして能はず、大天の言に隨ひ多數決による、大天の朋多數なりしかば王は此れに黨す、かくて上座、大衆の二部となる(一二)。

根本分派は果して何時如何にして生ぜしやは明確なる定言をなす能はず。而してその事はその時代が佛教史並に一般印度史の暗黒時代なりしが爲めといふのみに非ざるべし。余の考へを以てしてはこは大衆部の起立なる事柄それ自身が確然と何時如何にしてと明に定まれる性質のものにあらざるにも因るべしと思ふ。

一、起因の問題、南傳が十事非法事件を以て根本分派の起因とせるは、該事件を以て根本分派に關係せしむること餘りに過大に失せずや。勿論戒律思想の最も盛なりし當時に於ては十事非法事件はかなりに重大なる問題なりしには相違なきも、大衆部の起因を唯是れのみには歸し難かるべし。彼等バッジー比丘等は十事が非法なりと宣せられたりとてそのまま屈伏し再び立つ能はざるに至りしとは信ぜられざるも、さればとて彼等が直ちに一派を立て得るの勢力を有し得しやは疑はし。否進んで後の大衆部の教理とせらるるものと(一三)十事とを見るに其の間何等の關係を有せず、十事は全く律に關する問題なるが大衆部の說はもつと根本問題について上座部と意見を異にせるにて、律に於ける差異の如きは餘りに問題となし居らざるが如し。吾人はただ彼等バッジー族の十事非法事件を以て、後に大衆部を起すに至りし自由進步思想の發現の一例として見んとす。

次に北傳は何れも五事を以て根本分派の起因とす。されど此れ亦そのままにては認容し得ざるべし。五事は大衆部成立後次第にその教理が整頓せられて後に於て始めて確然と定まりしものにて、分派の初めに於て已に存せしものにはあらざるべし(一四)。その事は五事の內容が諸傳區區なるによりても知らるべし(一五)。殊に西藏の諸傳の中には殆ど何を意味するや不可解なるものもありて、そのままにては到底分派の係爭

【一二】五事の解釋については、婆沙論のは發智論及びそれと同系なる八犍度論に等しく、眞諦の解釋のみ此等に合せず、眞諦は如何なる根據によりしか明ならず。

【一三】異部宗輪論等に傳ふる大衆部の教理は非常に發達せる後のものにして、その始めに於て已にかくの如きものなりしとは信じ難きも、少くもかくなるべき種子の存せしは疑ふべからず。

【一四】南傳 Kathāvatthu II, 1—5及びそれに對する覺音の註には五事を以てアンダカ(Andhaka)派の說とせるは蓋し眞に近きか。

【一五】バブヤ(Rockhill, p. 186)は、「龍象(Nāga)堅意(Sthir-

問題たりしとは見られざるあり。此等は五事によりて分派せりといふ傳說を傳へて、然かもその五事が如何なるものなるかを明に知らざりしが爲めに生ぜる誤傳誤寫によるべきか。次に眞諦の部執異論疏の說は、その根據明ならざる以上その正否も不明なり。然るに發智論の五事は南傳カターバッツのものと全合するより見れば、此の五事は最も信ずべきが如し、されど其の場合兩方共之れを以て大衆部分起の起因となさず、一方は當時行はれ居りし一類の五見とし、一方はアンダカ派等の說として擧ぐ、蓋し是れ何れか正しきか。次に婆沙論の說は發知論等のものに、大天と、大衆部分起とを結び付けて作り出せるものの如し。之れを要するに五事は大衆部分起の時に已に定在せしものに非ざるべく、大衆部が次第に發達して後に定まりしものにて、婆沙論が之れを大天に結びつけしは阿育王代にアンダカ地方に布教し後のアンダカ派の祖となりし大天をここへ持ち來り、從つてそれと共に五事を持ち來り、以て根本分派の起因とせるものならん。乍然北傳の說も必ずしもその全部を非り去るべきにはあらざるべし。五事の內西藏の諸傳のものは殆ど不可解なるが、發智論婆沙論異部宗輪論等のもの及び眞諦の說の或る部分は全く阿羅漢觀從つて佛身觀に於ける上座衆に對しての異說なり。而して由來大衆部敎理の根本特色は此の阿羅漢從つて佛身觀に於ける新說なり。故に大衆部は其の分起の初めに於て所謂五事なるものを唱へしとは思へずとするも何等かかくの如き說を成すに至る可き素質を有せしならんとは想像に難からず。卽ち大衆部分起の一主要因として後の五事ともなる可き

annati)多聞(Bahuśrutiya)の諸長老等五事を贊し之れを說けり。卽ち、『他に答ふること、無知、猶豫、全き發語、自我の再還は道なり、此は佛の敎なり』と。かくて二部に分れ上座と大衆とになり六十三年間頑强に爭へり。」ターラナータ佛教史には、(五十一—五十二)『ビガタ阿育(Vigatāśoka離憂)の子ビラセナ(Vīrasena勇軍)の時、マルタ國に一商主子大天あり。三逆罪を犯し、カシユミーラに行き出家し三藏に通ず。布薩の日に誦して曰く、『諸天は無知によつて誘惑さる。道は發語によつて起る。疑惑せる者は他によつて導かる。是は佛敎なり』と。ここに於て長老者宿等は是は經に反すとなし、若き比丘等は大天に從ふ。ここに分裂生ず。大天死後バドラ(Bhadra 惡魔の化身といはると)は右大天の語を會通して五事となす。卽ち『答へと、無知と、猶豫と、證知と、自我の再還と、是れ師の敎なり。』とす。

部執異論には提唱者の名を擧げず、その疏には大天とす。(検幽鈔五、五十八右)。十八部論及西藏譯には贊成者の名を擧ぐれども五事創唱者の名を示さず。(本文參照)

佛陀觀阿羅漢に於ける新思想の存せしは否むべからざるべし。之れを要するに大衆部分起は必ずしも一特定事件に因るものとは云はれざるならん。已に佛在世時に於てその弟子間に相互に異なる性向の者の有せしは否むべからず。それが佛の大人格の下に統一せられしも、佛滅と同時に迦葉一派の保守主義の結集に對して異說を持するもの存せしは第一結集の際に（一六）說けるが如し。かくして爾後約百年の間は一方保守主義なる迦葉系統は連綿として法燈絕えざりしと共に、他方進步自由主義なる反迦葉派（その中にも種種の系統は存せしなるべし）も陰然存せしなるべきも未だ顯著なる事件を惹起せしことはなかりしならん。かかる進步自由主義の徒が先づ律に關してその鋒鋩を表はししが卽ちバッジー比丘の十事非法事件なり。又一方佛滅と共に起り次第に發展し行きし佛身論に就いて（一七）上座衆と意見を異にせるものが、佛滅百年以後の頃となりては相當の勢力を有するに至りしならん。此等の徒が主となりて、及び前のバッジー族比丘の後繼者其の他一般に反保守派の徒が相會してここに反上座の氣勢を揚げ、遂に一派を成すに至りしならん。而してその徒多衆なりしかば大衆部と名づけられしなるべし（一八）。

二、年代に關しては、南傳には明記せず、ただ七百結集後とするのみなるが、こは十事非法事件を分派の起因と見るより生ぜるものにて他に根據あるにはあらざるべし。北傳に於ては是れ亦區區にして、異部宗輪論及びその西藏譯は佛滅百有餘年阿育王の時とし、その別譯なる部執異論十八部論は共に佛滅百十六年阿育王の時とし（一九）、バブヤは法阿育王代佛滅百六十年（二〇）とし、又は佛滅百三十七年ナンダ、マハーパドマ王代とし（二一）、ターラナータは勇軍王の時とし年數を擧げず、婆沙論は年數及び王名を擧

【一六】附錄第一節の終り。

【一七】上座部の佛身觀は大體に於て阿羅漢卽佛なり、我我の修業によりて達せる阿羅漢は卽ち佛と等しとす。大衆部の徒は、佛を超越的人格として崇敬し、佛の肉身それ自身も我我人間と異り、我我人間は如何に修業して阿羅漢位に達したりとも到底現世に於て佛と同一とは成る能はず、佛と阿羅漢とは不可越の間隔ありとす。

【一八】北傳の多くが、集まりしものの名を擧げて四衆とせるが如きは（本文第一部第一章第二說參照）、四衆の何たるかは明ならざれど要するに諸方より反保守派の諸黨が集まりしを彷彿せしむるものに非ざるか。その徒多數なりしといふことは諸傳の殆ど相一致する所なり。

【一九】部執異論の元明兩書は百六十年となり居ること本文の註の如し。

【二〇】Rockhill, p. 182

【二一】同上、一八六頁。

げざれども王は阿育王なるべき事は前に註せしが如し。阿育を以て佛滅百年代におく事は印度に於て普通の傳説なりしが如く(三三)、佛滅百年代に起りし事件を阿育王に結びつくることも亦不思議に非ず。諸傳に於て根本分派の年代を王と離して見る時は、百有餘年より百六十年の間を往來す、而して事實は亦此の間に存するなるべく、その間の果して何年に存するかは決し難し、思ふに分派はその間の何年かに起りしものなるべし。阿育王代とせしは阿育王を佛滅百年代におく傳説に感化せられて此の事件に阿育王を配せしなるべく。それに附隨して鷄園寺の名等も出でしなるべく、大天を此れに關聯せしむるは、一には阿育王と附隨し、又一に獨立に大衆部の名僧として南印の大衆部各派の祖たりし點よりしてなるべし。王が現場へ裁判に趣きしといふことは或はその事實ありしやも知れざれど、余惟ふにむしろそは第三結集の際、阿育王が或は使臣を遣はし或は親しく臨場して賊住比丘を排斥せりといふことをここに混じ來りしものなるべく、時の王が始め多數黨に賛し後大に悔いしといふことは南傳の大史及び北傳の婆沙論に見ゆる所なるが此は上座部系統のものが自派の神聖と威力とを示さんが爲め特に揑造せしものにあらざるか。

【三三】阿育王經(及び傳)、西域記等然り。阿育アバダーナは王師ウパグプタ(Upagupta)を以て佛滅百年出世とするを以て、阿育を少くも佛滅百四五十年以後と見るものと解すべし。ターラーナータは明記せざれども佛滅百年頃又はその以前における如し、諸プラーナの年代記によれば阿闍世王即位より阿育王即位迄に約三百年あり。

三、以上を總括して根本分派に關して吾人は唯次の事をのみ云ひ得。「佛在世時代に於て已にその弟子間に性向の異るもの存せしが佛在世間は兎も角も佛の大人格によりて統一され居りしも、佛滅と同時に互に相分離するの傾向を存せしなるべく、その最初の例は迦葉一派の第一結集に對し、他に異見を有するものの存せしことなり。かくて其の後も陰に異説を持するもの存し、殊に迦葉系統の徐徐保守的に固まり行くに從ひ次第に之れに反抗して進歩自由的主義の者增し行きしならんが、然かも滿百年間は猶表面には何等の波瀾無くして經過せり、滿百年の後に於て、律に關する新解釋より保守的上座衆に先づ反旗を飜せしはバッジー族比丘なり。彼等は其際遂に上座衆の爲めに一蹴され律の爭に於ては敗れしも、然かも彼等の自由進步思想の傾向はかくても止むべきにあらざりき、然るに一方律の問題よりも一層深き根本問題に關して即ち佛身觀に關して上座衆と異見を異にするもの次第に生じ來り、此れ等を中心として、其の他一般反上座衆即ち自由進步思想者――其の中には前のバッジー族比

丘の後繼者も在りしならん――が佛滅第二世紀の前半の或る時に於て(三)相會し、玆に反上座の一派を立つるに至りしならん。その衆多數なりしかば大衆部(Mahā-saṅghika)と稱せられ、是れに對する耆宿上座衆より成る保守派を上座部(Sthavira)と稱せしならん。」

第四節　第三結集

第三結集の根本史料は島史、大史及び(一)善見律毘婆沙(二)なり。島史の記事は最簡單にして、七の三四――四一には、

佛滅二百三十六年を經て、阿育園に於て六萬の比丘有り、中に賊住外道ありて正法を亂す。Moggaliputta-tissa是れを破し、第三結集をなす。彼れ諸異端を破して Kathāvatthu(論事)を造る。

又その四四――五九には、

佛滅二百三十六年に於て復上座內に大諍亂起れり、巴連弗城に法阿育君臨し佛教を篤信し僧伽に大に供養す。それが爲めに六萬の賊住生じ、阿育園寺の布薩行はれず。王の大臣、寺に行きて布薩を行はしめんとして拒みし者を殺す。王はその殺人の罪の所歸處を長老 Moggaliputta-tissa に問ふ、彼れは王に奇蹟を示して滿足を與ふ。長老の敎に從つて王は異端比丘を排除せり。長老は彼れ等を撲滅し自己の說を顯揚せんが爲め、Kathāvatthu と名づくる論を造り始めぬ。彼れ論を造り終りて後、自身の說を淨め且つ佛法を久住せしめん爲め、千比丘を選び、阿育園寺に於て結集をなせり。此の結集は九ヶ月を要せり。

大史及び善見律の記事は大體共通にして何れも島史よりは詳しく(三)、幾分は誇張あるならんも骨子は右島史を出でず。Kathāvatthu を造り始めしは結集の最中とあり。

【三】彼れ等が會せし處は巴連弗城なりとは異部宗輪論、パブヤの說等一致する所なるが果して然るや否やは明ならざるを以て、ここには何處といふことを明言せず。

【一】M. V. V. 228 foll.

【二】寒八、四、左以下。

【三】王が Moggaliputta-tissa を Ahogaṅga 山より恆河を舟にて迎へ來る所頗る詳しく、又、王が阿育園寺に行き諸比丘を集め一一その說を問ひ、その非なる者を悉く破門し、最後に正法奉持者に問ひしに、彼等答へて佛教は Vibhajjavādin なりといひ、王は之れを Moggaliputta に質し、その確答を得たる點、島史に無き所なり。

北傳にては此の結集なるものを全然記せず(四)。但し結集は之れを知らざるも、それに至る迄の事件としては南傳と相似たるもの散見す(五)。余はそれ等及び阿育王の小柱勅令に據りて所謂第三結集なるものを左の如く批判せん。

一、南傳の年代は甚だ疑はし。何となれば其記事の如く佛滅二百三十六年(西紀前二四七)に起りしものとせば、阿育王即位後廿八年(佛滅二四七)迄に完成せる七ケ條の柱勅令(六)に何等か言說す可きに、他のそれ迄に起りし事件の殆ど凡てを概記せるに係はらず是の事に關し何等記せず、却つて即位式後三十年のものと見る可き小柱勅令(七)に始めて是れを說くは、即ち南傳の記事の誤れるものに非ざるか(八)。惟ふに此の事件は王即位後廿九年又は卅年に於て起りしものならん(九)。

二、阿育園寺に於て賊住異端比丘多く、爲に教會内に不和合生じ、王は此等異分子を剪除せりといふことは、北傳に似たる記事あることよりしても、亦小柱勅令(一〇)に徵しても事實なるべし(一一)。

三、右事件の後、長老 Moggaliputta-tissa が千比丘を選びて結集をなせりといふことは、他に確なる證據なき限り肯否何れとも決し得ず。されどそれと同時に北傳に全然その記事無ければとて直ちにそれを以て否定の證據とはなすべからず。

【四】 部執異論疏、龍頭三論玄義五十丁所引)には、「大天五事提言後、彼等經を變改せし爲め、上座衆は自らのものを重ねて三度結集す」とあれど、此は南傳にいふ第三結集とは異り。又北傳にて普通第三結集といへば迦濕彌羅に於ける此婆沙論編纂のことを指し、南傳にいふ結集とは全く別物なり。

【五】 述記發軔に、「滿二百年、出家外道大天によつて大衆部内分派起るを說きて、眞諦の釋を引き、「摩揭陀國に好雲王あり、大いに佛法を弘め、諸大聖に供養す。外道等衣食の爲めに賊住出家するもの多く、其の中には聰明にして三藏を受持するものもあれど、凡聖別ち難し、王即ち凡聖を沙汰し、外道賊住多くその宗に歸りしも、聖明博達なるもの猶數百有り、共に佛法の深義に通達し、勢盛なり、若し彼等をも剪除せば佛法を破壞せんの恐れあり。王遂に別に迦藍を造つて彼れ等を安置す。大天即ちその衆の頭首にして多聞博學なり。」又、龍頭三論玄義五十三には、「佛滅滿二百年、摩揭陀國に優婆塞有り、大に佛法を弘む。諸外道利養の爲めに出家す。大天その一人にしてその首領なり。その時受戒の事につき諍有り、爲めに大天の徒は山間に行き住す。此の山間に於て又執義異有り、支提山部と北山部とに分る。佛得道及び轉法輪の處なり。」

【六】 V. A. Smith, "Asoka" P. p. 182—195.

【七】 サーラナート、コーサン

何となれば、結集ありしとするも、そはその部の結集にして、佛教全般の結集にあらざることあるべければ、その部のものに知らるるも他の部のものには知られざること有り得べきを以てなり。

四、Moggaliputta-tissa なる者は南傳に於ては阿育王の王師として第三結集の首座として及び Kathāvatthu の作者として重要なる位地に在るが、然かも北傳にては此の名の人を全く知らず。北傳にて此れに代る可きものは、同じく王師として重要なる位地に在る〔一二〕優波屈多（Upagupta）なり。然かも南傳は此の名の人を全く知らず。南傳の Moggaliputta-tissa 北傳の優波屈多は何れも一部分のものによりてのみ重んぜらるるものにして、從つて何れも兩傳に同樣に知らるること無きこと有り得べしといふオルデンベルグ氏の說〔一三〕を承認し得可きや。否余惟ふに、何れも然かく部分的の人物に非ず、阿育王の名聲と共に當時の世界的人物なりしと見ざるべからず、故に何れの傳に於ても知らるべき筈なり。然かもその然らざるは如何。是に於て余はその兩方共王師として重要なる位地にあること、及び王に迎へられて恆河を下り王城に來りしといふ點の頗る相似〔一四〕たる所より、兩者を以て同一人ならんかと推定す。その名は本名優波屈多にして、その稱號として佛弟子目連の姓と舍利弗の名とを合して作出せる Moggalāyana-upatissa が與へられ、轉じて Moggaliputta-tissa となり、それが本名の如くに一部のものには

ピー、サンチーに在り、銘文の英譯は V. A. Smith, "Aśoka," p. p. 195—197.

【八】 同上書五五頁參照。

【九】 北傳が滿二百年といふは概數を擧げしに過ぎざれば詳論するの要なし。

【一〇】 小柱勅令に、「何人たりとも、そが比丘なりとも比丘尼なりとも、教會內に分裂不和合を起せし者は直ちに白衣を著せて僧院外に放逐すべし」とあり。

【一一】 北傳が根本分派の際に阿育王によつて諍を決せられしとするは、此の事實を傳へて根本分派に結びつけしものか。

【一二】 北傳 Aśokāvadāna 及び阿育王傳（並に經）には、優波屈多が末突羅（Mathurā）國より阿育王に迎へられ舟にて恆河を下り巴連弗に來り、王の尊信を得、以後王の佛跡巡禮を先導せり。王は各佛跡に碑塔を建立せりと。此の王の佛跡巡禮、碑塔建立の事は現存遺物によつて史實として證認し得、（第五節參照）

【一三】 Oldenberg, Vinayapitakaṁ, Introd. XXXII—XXXIII.

【一四】 舍利弗出家前の名を Upatissa といひしことは律によつて知り得。（Oldenberg, Vinayapitakaṁ 1, p. 42, 五分律、張二、三右等）

呼ばれしに非ずや（二五）。而して南北兩傳、その傳の異るにつれ、その內容も次第に隔たり行き、遂に現今見るが如き差異を生ぜしに非ざるか。而して實際の人物は、阿育王の王師としてその巡禮及び碑塔建立を勸め、及び教會內の波瀾を防守するに當り王を助けたりといふにあらんか（二六）。

五、Kathāvatthu は巴利七論藏中第五に置かる（二七）、島史及び大史の傳說を總合するに、Moggalīputta-tissa が第三結集をなし居る最中に書き起し結集の終ると共に書き終りしが如し。兎に角第三結集と共に成りしものとせらる。而してその內容に於ては論藏中 Dhammasaṅgaṇi, Vibhaṅga, Paṭṭhāna を引用し、經及び律中よりも少からず引用せり。又その論點に於ては後世發達せる部の宗義と思はるるものを入れ居ること少からず。種種の點より考ふるに現存の Kathāvatthu は最初極簡單なりしものに、次第に時代と共に後の傳家によりて附綴せられ行きて、遂に現今のものとなりしならん。而してその附綴が何時頃迄續きしや明ならざれども恐らく覺音が註をなす頃迄及びしか（二八）。而して若し Moggalīputta-tissa が Kathāvatthu を書きしとせば、そはその最初の極めて簡單なるものを書きおきしに過ぎざるべし。

【二五】此の事に關し詳くは第六節20參照すべし。

【二六】傳統說が南北兩傳共、實際に合せざるが如きも、由來傳統說なるものは、然かく信ずべからざるものなり。

【二七】覺音は第五に置けど、Mahābodhivaṃsa は第三位に置く、即ち Dhammasaṅgaṇi. Vibhaṅga, Kathāvatthu, Puggalapaññatti, Dhātukathā, Yamaka, Paṭṭhāna.

【二八】Oldenberg, Buddhistische Studien (Z. D. M. G. 52, p. 634) 參照。

【一】本名 Aśoka-vardhana 略して Aśoka 漢譯には意譯して無憂、音譯しては阿輸柯、阿恕伽、阿育等書す。

【二】佛滅の年代を B. C. 483 とする說と、B. C. 487（又は B. C. 486）とする說とあり。余は B. C. 483 說に從ひおく。

【三】孔雀王朝（Maurya）は彼れの祖父月護（Candragupta）王に始まる。その母名 Murā に因みて以後を Maurya と稱せるなり。

第五節　阿育王とその事蹟附大天

阿育王（一）は佛滅二百十四年（二）（西紀前二六九）頃摩揭陀國王として孔雀王朝（三）第三世として即位す。即位式（Abhiṣeka 灌頂）は四

年後(卽ち西紀前二六五)なり。卽位式の遲れしは恐らく一族官に爭鬪有りしが爲めならん(四)。彼れ未だ太子の時、北方タキシーラ(Taxisilā)及びウジャイン(Ujjain)の統治に功を奏せり。卽位式後第九年(B. C. 257)カリンガ(Kalinga)を征服せり。その際多くの人命を失ひしこと、及びそれに對する王の深き後悔、並びに以後戰爭の征服を廢し、法(Dhamma)に從つて統治すべきを確信し、之れを宣言せしことは崖刻銘第十三(五)によりて明なり。又此の頃より佛教の優婆塞となりしことも認め得。卽位式後第十一年遂に出家して僧伽に入り、(但し王たることは依然)及び諸方に王使(Rājuke)、地方官(Pradiseke)屬官(Yutā)等を派し、それ等の常務と共に法の宣傳をなさしめしことは崖刻銘第三、小崖刻銘及び石柱刻銘第七等によりて明なり(六)。又第十三年以後には法大臣(Dhamma-mahāmatā)及びその屬官(Dhamma-yutā)を領內の諸地方及び進んで領外國迄も派遣し、以て佛教を宣傳し、それ等國人をして佛教者たるの幸福を味はしめんとせしことは、崖刻銘第五、同第十三によりて知らる(七)。かくして又王自身は佛跡を巡禮し諸所に造塔刻銘せしことは(八)ネパールのタライ(Tarai)に在る二石柱によりて知らる。第三十年後の小柱勅令に於て佛教內分裂不和を誡めしこと見ゆ。第三十七年(B. C. 238)阿育死す。以上は確實と認む可き阿育王の事蹟中、特に佛教史と關係あるものを列擧せしなり。

北傳は大體阿育王を佛滅百年代と見るもの多きが如し(九)。而して Aśokāvadāna 阿育王傳、(並に經)、雜阿含第二十三等によるに、王は卽位後或は五百の宮人を殺し、或は生地獄を造り、など殘虐無道の行を樂しめり。故に人呼んで惡阿恕伽(10)(旃陀阿輸柯 Caṇḍa-

【四】セイロン島史及び大史によるに、彼れは卽位式前九十九人兄弟を殺せりと傳へ、又北傳の Aśokāvadāna 阿育王傳(並に經)等が、卽位式前王兄修私摩(Susīma)を大臣等と協同して殺せしことを傳ふるは、是れをそのまま信ずべからずと雖も、以て何等か一族間の爭鬪の存せしなる可きを傳ふるものに非ざるか。

【五】V. A. Smith, "Asoka" p. 172 foll.

【六】V. A. Smith, "Asoka" p. p. 157—158; p. p. 149—152; P. P. 190—195.

【七】同上書 p. p. 161—162; P. p. 171—175.

【八】同上書一九九頁以下。その一は佛誕生地ルンビニ巡拜、他はカピラバスツ附近の過去佛 Konākamana の塔に參拜せしことを記す。

【九】第三節註二三參照。

【10】Caṇḍa とは人をして畏怖せしむる程强力なる意の字なり。故に善意にはただ强力、惡意にては强暴の意となるべし。而して阿育の場合には後者の意として用ゐられしなるべく、然らずんば阿育王傳の譯者が、經の旃陀を惡と譯する筈なきなり。

aśoka）と稱せり。然るに一比丘の奇蹟に感じて從來の非を悔い、發心して佛道に入り、上座夜舍(一一)の慫慂によりて、八萬四千の塔をなせり。かくて人民呼んで法阿育(一二)(Dharm a-asoka)と稱す。次いで優波屈多を摩突羅より迎へて共に佛跡を巡禮せり。その模樣は阿育王傳に詳し(一三)。

南傳(一四)には佛滅百年代(90—118)に黑阿育(Kalāsoka)を置き、佛滅二百年代(214—256)には史實の阿育(前と區別しては法阿育)ありとす。即ち二人の阿育を認む。大にしては全佛教史上、小にしては直接分派史上最も重要なる位地を占むる阿育王に關し、かく南北兩傳に相違あるは學者の常に惑とする所なり。余必しも此の問題に解決を與へたりとするにあらざれど、聊か私見を述べて以て參考に資せん。

一、北傳に阿育王を佛滅百年代とするは誤りなり。

二、北傳が歸佛以前の阿育を殘虐非道の者として惡阿育と呼びしといふは、歸佛後と歸佛前との對照を誇張せしものにして、その實はカリンガ征役等に於ける人命の損傷等を彷彿せるに過ぎざるか(一五)。又、歸佛以後の北傳の記事は誇張附加少からざるべきも、その骨子は史實と合すべし。

三、南傳の佛滅百年代の黑阿育は假作の人なるべし。こは恐らく佛滅百年代に阿育王ありしといふ傳說がかなり廣く傳はり居り、然かもセイロン王統の史實と對して阿育王を是非佛滅二百年代とせざる可からざる所より、而して又阿育王に二つの名あり、一は黑阿育(一六)、他は法阿育なる所より、その二つの名を二人の名として、以て一を百年代におき佛滅百年說に合せしめ、他を二百年代におき、史實の阿育に合せしめんとして作出せる傳に非ざるか。ヤコービ氏(一七)(Jacobi)は

【一一】此の耶舍は第二結集の際のそれと異り、第三結集の際のは特にYasa-kākaṇḍa-puitta とあり。

【一二】藏十、四右。

【一三】藏十、四右以下。

【一四】島史、大史等。

【一五】玄奘西域記卷八には巴連弗城王宮舊址の北に阿育王の地獄を作りし地ありと記するが、その地獄の地と稱するものも傳說の產み出せるものに非ざるか。

【一六】黑はその容貌の黑惡なりしより名づけられしやも知れず、然しむしろ黑は白に對して惡の意あるより、阿育王傳等の惡(旃陀 Caṇḍa)と同意として用ゐられ、從って一種の者には惡阿育の代りに黑阿育と呼ばれしに非ずや。

【一七】Jacobi: The Kalpasūtra. Introd; Z. D. M. G. 34, p. p. 185—186.

Kālāsoka＝Kākavarṇin＝Udayin なりとして、南傳、Aśokāvadāna 及び Purāṇa 傳が一人の Udayin を二人に分けて作出せるは非なりとし、又、ガイゲル氏〔一八〕は Kālāsoka＝Kākavarṇin は承認すれど、是れを Udayin と同一視することにはオルデンベルグ氏と共に反對し兩王を別人として各各實在と認めんとせり。されど余はそれ等の何れをも採らず。先づ Kālāsoka＝Kākavarnin は非なり〔一九〕。次に Kālāsoka＝Udayin も亦非なり〔二〇〕。從つて Kākavarṇdn＝Udayin なりや否やは不明。而して要するに黑阿育の實在は信ず可からずといふことに歸す。

四、阿育王の佛敎宣傳は單に國家統治の爲にせるに非ざる可きは、その國内の施設は勿論、その國外に至る迄も、法大臣等を派し佛敎を宣傳せしめ諸の慈善事業を爲せしに見ても明にして、要するに全世界の人類に對し佛敎者たるの幸福を味はしめんとの佛敎的大慈悲心の發露に外ならず。而して此の佛敎宣傳の事業の分掌者として主なるもの三有り、王使と地方官と法大臣となり、何れにもその屬官(Yuta)ありしが如し。而して彼等が佛敎的精神を普及するといふ點に於ては皆同一なるも、又前二者(王使と地方官)と法大臣との間にはその名の異る如く又その主務も自ら區別ありしが如し。卽

Kākavarṇin 又は Kākavarṇa (烏色)は阿育王傳の烏耳(Kākakarṇa)に當る。プラーナ傳にては Śiśunāga 王の次におく、而して南傳の Kālāsoka も Susunāga の次にあるにより、及び名の相似たるより兩者を同一と見るなり。又 Udayin(Ujāyin, Udayibhadda)はジャイナ傳及びプラーナ傳には巴連弗城の建設者とせらる、然るに南傳にては Kālāsoka が巴連弗城の建設者とせらるるより、兩者は同一人なりとし、從つて Udayin と Kālāsoka 或は Kākavarṇin とを別人として出すは誤れりとす。

〔一八〕 Geiger: M. V. Introd. p. p. XLII—XLIII; Z. D. M. G. 34, p. 751 foll. 氏は南傳を重んずるが故に、南傳の王系圖に從ひ Udayin と Kālāsoka とは別人と見、Udayin＝Kālā-soka とすることを否定す。

〔一九〕 黑阿育は阿育なる名が主體となれるにて黑の方を主とするものにはあらざるべく、烏色なる人が實在せりとするも或は假作なりとするも、そはそれ自身の因緣ありて然るにて、阿育なる名とは關係なきものなるべし。而して兩者が何れも Śiśunāga(Susunāga)の次におかるればとて、そは偶然の附合に過ぎざるべし。

〔二〇〕 Udayin が巴連弗城の建設者なりといふことはジャイナ傳及びプラーナの一致する所なるを以てやや信じ得可きも、黑阿育なりとするビルマの傳は恐らくセイロンを經て來れるものなるべく甚だ疑はし。玄奘の西域記卷八には、阿育王が都を巴連弗城に遷せ

ち前者は彼等の常務と共に此の特別の任務を盡すべきを示し(二一)、(二二)法大臣は專ら法の宣傳普及に盡すべきものなりしが如し。而してその何れも實務を取りしは主としてその屬官なりしが如し。是れによりて觀るに、王使及び地方官は普通の俗人官吏なりしが如く、法大臣の方は主として佛教の高僧が此れに當りしものの如し。若し然りとすれば、此の法大臣若しくはその屬官(Dhamma-yutā)は同時に傳導師(Ācārya)なりしなるべし。然るに南傳島史及び大史には Moggaliputta-tissa が第三結集後傳導師を諸地方に派遣せりとす(二三)。その地方を考ふるに名稱の異るものあれど阿育王が法大臣派遣の地と大體合す(二四)。南傳の記事は恐らく Moggaliputta-tissa を偉大ならしめんとして、阿育王の行績を借り來り、そが Moggaliputta によりて行はれたるものとせしものなるべく、然かもそれとしても年代を誤れるは勿論なり。南傳の揭ぐる傳導師の名は必ずしも阿育王の派遣せし法大臣の名なりとはいへず。中にはそれもあらんも、大體その當時各地方に於て有名なりし高僧の名を列擧せるに過ぎざるべし(二五)。

五、大天(Mahādeva)について、

北傳には大天と名づくるもの二人あり、一は根本分派の際の五事の提唱者なる商主子大天(二六)、二は佛滅二百年、制多山

りとあるが、是れ亦誤傳なるべし。何となれば巴連弗はその祖父、月護王の時已に首府なりし事は希臘使節メガステネスの報ずる所によりて明なり。ガイゲル氏は辯じて、玄奘は二人の阿育を一人に混じ、然かも年代は佛滅百年代とせるが、此の記事は事實佛滅百年代黑阿育の時の事蹟として傳へらるるものを、一人とせる法阿育の事蹟と見たるものなりと。然し余は玄奘のいふ阿育は年代こそ百年代とすれ、史實の阿育を指すものにして、それに遷都を歸せしは誤傳をそのまま傳へ居るに過ぎずと思ふ。

【二一】崖刻銘第三による。

【二二】同第五による。

【二三】D. V. VIII: M. V. XII.

地方	人名
1. Kaśmīr, Gandhāra	—Majjhantika.
2. Mahisamaṇḍala(Mysore)	—Mahādeva.
3. Vanavāsi(北Kannara)	—Rakkhita.
4. Aparantaka(Bombay北岸)	—Yona-Dhammarakkhita.
5. Mahāraṭṭha(西印)	—Mahā-Dhammarakkhita.
6. Yona(北境邊)	—Māhārakkhita.
7. Hemavanta	—Majjhima, Kassapa.
8. Suvaṇṇabhūmi(?)	—Sona, Uttara.
9. Lankā(Ceylon)	—Mahinda.

【二四】

2. Mahisamaṇḍala = Andhra. } 4. Aparantaka = Bhojas.
5. Mahāraṭṭha = Pitinika.

部を起せし賊住大天なり（二七）。その第一の者は第二の者の反影なるべきは既述せしが如し（二八）。南傳には此等と全く異りて、島史によるに、阿育王第六年、Mahinda を剃髪せし人として、Moggallputta 等と共に Mahinba を特に愛育せし人として（二九）、又 Moggallputta によりて Mahisamaṇḍala の布教に派遣されし人としてあり（三〇）。又、セイロン王 Dhaṭṭhagāmani の大塔供養に諸高僧と共に招かれ來り（三一）。セイロン布教に關する四人の大導師の一に數へらる（三二）。而して大衆部の人なりとか、敎會内に波瀾を起せし人なりとか、賊住なりとかいふことには一言もせず。要するに Moggaliptta に次いで當時の高僧とせり。かく南北兩傳がその人物を描くに甚だ異にして、恰も二人有りしが如く見ゆ。されど深く觀察すれば、その間に共通點を見出し得て、以て同一人の異描寫なるを推定するに難からず。北傳が賊住比丘として惡しざまにいふは、その實、始め外道にして後歸佛せりといふ事實を、當時賊住比丘の敎會を亂すもの多かりしに結びつけ、特に彼れが大衆部なりしより有部の徒によりてかく誣言されしものならん。又北傳が彼等の徒を別に伽藍を建てて安置せりとか、或は山間に行けりとかいふは、實は彼れが Mahisamaṇḍala に行きし事實を種種誤傳せしものならん（三三）。而して北傳が彼

7. Hemavanta = Kāmboja.
8. Vanavāsi = ?
1. 6. 9 は同名。Suvaṇṇabhūmi は現今の Pegu & Moulmin なりとせらるるが、若し然りとせば、此の地方に佛敎の入りしは猶後世にて、南傳の記事は誤れりといふべし。猶王の銘文には此の外 Ptolemy, Antigonos, Magas, Alexander 等ギリシヤエジプト等の諸國王名を擧ぐるが、南傳に此等を出ださざるは、南傳史家が此れを草する頃には此等國名が已に忘れられ居りし爲めならん。又、タミル地方（Chola, Pāṇḍya等）の名の見えざるは、セイロンと其等地方との間には不斷爭鬪あり敵意を持ち居りし爲め、それ等の國と自國との佛敎の關係を認むるを好まず、自國の佛敎は直接中心地摩揭陀より來れるものなるを主張せんが爲め消去せしものならんか。(V. A. Smith "Asoka" p. p. 45—46.)

【二五】その多くは史實の人なるべく、その現在證明されしものもあり、例へば、Bhilsa-stūpa にて發見されし一龕に、全雪山の傳導師（Ācariya）として Kassapa-Gota 及び Majjhima の名のあるが如し。

【二六】第三節參照。

【二七】第四節參照。

【二八】第三節參照。

【二九】D. V. VII, 24 foll.

【三〇】D. V. VIII, 5.

【三一】D. V. XIX, 6.

【三二】D. V. XVII, 25,

【三三】三論玄義に、彼れの行きし支提山を以て、佛得道の地とせるも事實を誤れるものか。

れを以て外道出家者なるにもかかはらず博學多聞にして一方の黨首たりしを記するは、即ち彼れが高僧なりしを示すに非ずや。南傳が彼れの大衆部なるを明記せざるは、セイロン傳導の始めに於ては派の別等はさまで介意せられざりしが爲めに、何人たりとも當時の名僧は之れを稱揚せし傳に因りしなるべく、然かも Mahisamaṇḍala に布教せりといふは會〻彼れが大衆部なるべきを證明するものに非ずや(三四)。以上を總括するに、大天は一人にて、阿育王時代の人、元來は外道なりしが後歸佛し、大衆部の高僧となり、南印に布教し、そこに土著して自己の派支提山部を起し、並に後に起りしアンダカ派の祖となりし人といふに歸す。

【三四】 Mahisamaṇḍala は今の Myore なるべきは現今諸學者の認むる所、(第六節、五參照)、此の地方は後に大衆部アンダカ派の起りし地にて、そが大天の布教に因りしは推定し得可く、特に大天の起せりといふ支提山部に緣ある支提山(Cetiyagiri)なる山名及び、その附近に東山西山部等の遺跡と思はるる地の存するによりて知るべし。(第六節五—一一參照)

第六節　枝末分派

根本分派ありて以後何年かの後よりその各各に於て亦枝派生ぜり。其の分裂の仕方、數、名等に於て諸傳區區にして眞相を捕ふること甚だ難し、ここに先づ主なる諸傳の系圖を掲げ後に聊か私考を述べん。

(一) 異部宗輪論、(梵語は Wassiljew : Buddhims による、(陳)は陳譯即ち眞諦三藏譯部執異論、(秦)は秦譯即ち羅什譯と稱せらるる十八部論)

大衆
- A.B.2ct. 1
  - 一說 Ekavyavahārika (陳)同、(秦)同)
  - 說出世 (Lokottaravādin (陳)出世說、(秦)出世間說)
  - 雞胤 Kukkuṭika, Kukkuṭika (陳)灰山住、(秦)窟居)
- A.B 2ct. 2 多聞 (Bahuśrutīya (陳)得多聞、(秦)多聞)
- A.B.2ct. 3 說假、Prajñaptivādin (陳)分別說、(秦)施設論)

200 A.B. 4
— 制多山(Caitika, Caityaśaila 〔陳〕支提山、〔秦〕支提加)
— 西山住(Aparaśaila 〔陳〕ナシ、〔秦〕(一)佛婆羅)
— 北山住 Uttaraśaila 〔陳〕北山、〔秦〕鬱多羅施羅)

(以上大衆部本末合せて九、陳譯のみ八、)

上座 A.B. 3ct. 1
— 本上座、又、雪山(Haimavata 〔陳〕雪山住、又、上座弟子、〔秦〕先上座、又、雪山)
— 說一切有、又、說因 —(Sarvāstivādin, Hetuvādin 〔陳〕同、〔秦〕薩婆多、又、因論)

A.B. 3ct, 2 犢子 —(Vatsīputrīya 〔陳〕可住子弟子、〔秦〕犢子)

A.B. 3ct. 3
— 法上(Dharmottarīya 〔陳〕同、〔秦〕達摩鬱多梨)
— 賢胄(Bhadrayānīya 〔陳〕賢乘、〔秦〕跋陀羅耶尼)
— 正量(Sammitīya 〔陳〕正量弟子、〔秦〕彌離)
— 密林山住(Saṇṇagarika 〔陳〕密林住、〔秦〕六城)

說一切有 —
A.B. 3ct. 4 化他 —(Mahīśāsaka 〔陳〕正地、〔秦〕彌沙)
A.B 3.ct, 5 法藏(Dharmagupta 〔陳〕法護、〔秦〕曇無德)
A.B. 3ct. 末[b] 6 飲光、又、善歲[a](Suvarṣa[a], Kāśyapīya[b] 〔陳〕善歲、又、飲光弟子〔秦〕優梨沙、又、迦葉惟)
4ct.[b] 7 經量、又、說轉[a](Saṅkrānti[a], Sautrāntika[b] 〔陳〕說度、又、說經、〔秦〕僧伽蘭多、又、修多羅論)

(以上上座本末十一、秦譯のみは雪山を本上座と別にして十二とす、)

(二) 南傳島史(D. V. V. 39 foll.)(大史第五章又大體合す)

—(Vajjiputtaka(II))Mahāsaṁgītika —
— Gokulika —
— Bahusuttaka
— Paññatti
— Ekavyohāra

【一】 佛婆羅は後の句には阿羅とあり、阿羅は阿婆羅(Avara 西の意)、佛婆羅は阿婆羅の誤寫か。

【二】 大史にはここに見れを記せず、Mahāsaṁgītika は Mahāsaṁghika となり居る。

- Cetiya（三）
- Thera
  - Mahiṁsāsaka
    - Sabbatthivāda—Kassapika—Saṁkantika—Suttavāda
    - Dhammagutta
  - Vajjiputtaka
    - Dhammuttarika
    - Bhaddayānika
    - （四）Channāgarika
    - （五）Sammiti

以上本末合せて大衆六、上座十二、計十八部は佛滅百年より佛滅二百年に至る間に分派す。此の後、次の六部出づ、（何部に屬するやを記せず、）Hemavatika（雪山）、Rājagirika（王山）、Siddhattha（義成）、Pubbaselika（東山）、Aparaselika（西山）、（六）Aparārājagirika（西王山）、大史には猶曰はく、以上六部は閻浮提（Jambudīpa）に、Dhammaruci, Sāgaliya はセイロンに起れりと。

（三） バブヤの第一說（七）、（ターラナタが上座部の傳として擧ぐるもの亦是れと合す。二七〇頁）

- Mahāsaṅghika
  - Mūla-mahāsaṅghika
  - Ekavyavahārika
  - （八）Lokottaravādin
  - Bahuśrutīya
  - Prajñaptivādin
  - Caityika
  - Pūrvaśaila

【三】 Cetiya の傳統は明かならず、D. V. はかく解し得可く又 Gokulika より出でしものとも解し得ざるに非ず、大史は Bahulika より出でしものと解し得。
【四】 大史には Chandāgārika
【五】 大史には是れと並び第五に Vajjiputtiya あり。
【六】 大史には Vajiriya
【七】 Rockhill, p. 182.
【八】 Kukkuṭika 或は南傳の Gokulika に當るべし。

- Avara śaila

- Sthavira 十二
  - Mūla-sthavira
  - Sarvāstivādin
  - (九)Vaibhadjavādin
  - Hetuvādin (Muduntaka, Murantaka)
  - Vātsiputriya
  - Dharmottariya
  - Bhadrayāniya
  - Sammatiya (Avantaka, Kurukullaka)
  - Mahīsāsaka
  - Dharmaguptaka
  - Saddharmavarṣaka (Suvarṣaka, Kāśyapiya)
  - Uttariya (Saṁkrāntivādin)

(四) バブヤ第二説（10）（ターラナータは是れと全く同じきものを大衆部の傳とす）

- Sthavira
  - Sarvāstivādin
    - Mūla-Sarvāstivādin
    - Sautrāntika
  - Vātsiputriya
    - Sammatiya
    - Dharmotariya
    - Bhadrayānika
    - Saṇṇagarika

【九】ターラナータには、是れと次のものとを缺く。

【10】Rockhill, p. 186; Tāranātha S. 271.

- —Mahāsaṁghika———
  - —Mūlamahāsaṁghika
  - —Pūrvaśaila
  - —Avaraśaila
  - —Rājagiriya
  - —Haimavata
  - —Caityika
  - —Saṁkrāntivādin
  - —Gokulika
- —(11)Vaiba lyāvadin——
  - —Mahīśāsaka
  - —Kāśyapīya
  - —Dharmaguptaka
  - —Tāmraśātiya

【11】 ターラナータはVaibhājyavā lin と書す。

(五) バブヤ第三說(Rockhill, p, 187 foll.)

「大衆上座分れてより六十三年間頑強に諍へり、百二年の後に於て(即ち佛滅二百三十五年を經て)、上座とVātsiputriyaとは正しく法を結集せり、彼等が正しく法を結集して後大衆部に分派生ぜり」として以下分裂を說く、即ち。

- Mahāsaṁghika———
  - —Ekavyavaharika
  - —Gokulika———
    - —Bahuśrutīya
    - —Prajñaptivādin
    - —Caityika

- Sthavira
  - Mūlasthavira
    - Sarvāstivādin
      - Vaibādhyavādin
        - Mahīṣasaka
        - Dharmagupta
        - Tamrasatīya
        - Kāśyapīya
      - Sankrāntivadin
    - Vātsiputrīya
      - Mahāgiriya
        - Bhadrayānīya
        - Dharmottara
      - Sammatiya
  - Haimavata

此の後に(百九十四頁)曰はく、「或る者は「śaññagarika は Mahāgiriya の1派なりと、又或者はそは Sammitīya の1派なりと、かくして Vātsiputrīya の四派となす」と。

(六)　ターラナータ正量部の傳、(S. 271—272)

- Mahāsaṁghika
  - Mahāsaṁghika
  - Ekavyavahārika
  - Gokulika
  - Bahuśrutiya
  - Prajñaptivādin
  - Caityika
  - Mūlasarvāstivādin
  - Vaibhajyavādin

- Sarvāstivādin
  - Bahuśrutīya
  - Dharmaguptaka
  - Tamraṣātya
  - Kāśyapīya
  - Saṅkrānti
- Vatsīputrīya
  - Mūlavatsīputrīya
  - Dharmottarīya
  - Bhadrayānīya
  - Sammitīya

（七）ターラナータ有部の傳（三）

- Mahāsaṅghika
  - Pūrva
  - Avara
  - Haimavata
  - Lokottariya
  - Prajñaptivādin
- Sarvāstivādin
  - Mūlasarvāstivādin
  - Kāśyapīya
  - Mahīśāsaka
  - Dharmagupta
  - Bahuśrutīya

【三】 Tāranātha, S. 272. 根本部を四部とする事はBhikṣuvarṣāgrapṛccha に於ても見ゆと。

- —Tamrasatiya
- —Vibhajyavādin
- —Sthavira
  - —Jetavaniya
  - —Abhayagiri
  - —Mahāvihāravāsin
- —Sammitiya
  - —Kaurukullaka
  - —Avantaka
  - —Vatsiputriya

（八）舍利弗問經（寒十、十八左—十九右）〔三〕

- 上座 —A.B.300—
  - 薩婆多
    - 彌沙塞（Mahisāsaka）
    - 曇無屈多迦（Dharmaguptaka）
    - 蘇婆利師（Suvarṣa）
  - 犢子
    - 曇摩尉多別迦〔四〕（Dharmottarika）
    - 跋陀羅耶尼（Bhadrayaniya）
    - 沙摩帝（Sammaitgaya）
    - 沙那利迦（saṇṇagarika）
  - 迦葉雜（Kāśyapiya）
  - 修多蘭婆提那（Sautravādin）
  - A.B. 400 — 僧伽蘭提迦（Saṅkrantika）

〔三〕此の經は大衆部を最も純正のものと見居る點よりすれば大衆部のものの手になりしものと見るべし。（寒十、十八左、及び十九右參照）

〔四〕別は利の誤寫ならん。

```
　　　　　　　　┌鞞婆訶羅(Vyavahāra)
　　　　　　　　├盧迦尉多羅(Lokottara)
摩訶僧祇─200 A.B.─┼拘　拘　羅(Kukkula)
　　　　　　　　├婆收婁多柯(Bahuśrutaka)
　　　　　　　　└鉢蠟若帝婆耶那(Prajñaptivādin)
　　　　　　　　　　┌摩訶提婆(Mahādeva)
　　　　　A.B. 300─┼質　多　羅
　　　　　　　　　　└末　多　利
```

以上を主なる傳として、以下各部の一一についてその分出狀態を考察せん。

1、一說部(Ekavyavahārika)＝巴 Ekavyohārika. 大衆部の一派なり。ターラナータ(二七三頁)は是れを以て大衆部の一般名なりとすれど、已に一說部と名づけらるる以上大衆部と共通の說多かりしにせよ[一五]、又此の派特有のものも存せしなるべし[一六]。

2a、雞胤部(Kukkuṭika)＝巴 Gokulika(牛家部)、Gokulika といふは部主の名に依りしやも知れざれど或は Gokula なる地名に起因するやも知れず[一七]。その部の說が「一切世界は苦の熱灰(Kukkula)に過ぎず[一八]」といふより又 Kukkulika と呼ばれ、Kukkula は華文にては Kukkuṭa にて、Kukkuṭa は右と同意なると同時に、又雞の意あり。そこより Kukkuṭika を譯して、述記にいふが如き「昔仙有り一雞に染し云云」の傳起れるなるべく、玄奘は譯して雞胤部とせしなり。眞諦は前の意に近かく、但し山名と解して灰山住部とせしなり[一九]。前表中(三)(七)のみに缺く[二〇]。

【一五】 本論第二部第一章參照。

【一六】 本論第一部第二章第一節の所參照。

【一七】 印度の地名にゴークラなる名少からざるが、有名なるは閻牟那河畔のゴークラなり。即ち此の地方に在りし部なる故名づけられしに非ざるか。

【一八】 Kathāvatthu II.8.

【一九】 三論玄義檢幽鈔五、六九所引、「灰山住部は處に從って名を作す。此の山石灰を作すに堪へたり、此の部は灰山に住すとあれど、恐らくは傳說に過ぎざるべし。部執異論附

2、說出世部(Lokottaravādin)は前表中(二)(四)(五)(六)に缺き他に存す。雞胤と是れと兩方を有するは(一)と(八)とのみなり。他は雞胤の有る表には說出世無く、說出世の有る所には鷄胤無し。是れによつて考ふるに2a と2b とは元來同一のものなりしにて、始め Gokulika 又は Kukkulika と稱せられしものが、その說が一切世間は苦の熱灰に過ぎざると同時に佛は Lokottara(出世)なりといふことをも強く說きし所より遂に一部の者よりは Lokottaravādin(說出世部)とも稱せらるるに至り〔三〇〕、ここに二つの名稱存在するに至りしなる可く、(一)及び(八)はそれを各別の派と見て兩方を並べ、(二)(四)(五)(六)は前者の各を擧げ、(三)(七)は後者の各を擧げしなるべし。尤も Lokottara-vādin と稱せらるるに至りては、次第にその或る者によりて、その說も變化され說の上に於ても一別派を立つるに至りしやも知れず、從つてそのかくなりしものを補へて(一)及び(八)は傳へしならんかとも思はる。ただ吾人は本來は、而して少くも比較的長き間は、此の二者は同一部の別名として存せしものなるべしといふにあり。ターラナータ(二七三)亦兩者を同一と見る。

3、多聞部(Bahuśrutīya)=巴 Bahussuttaka 又は Bahulika, 大衆部の一派なり。その分出は大衆部より直接とするもあり、又は牛家部よりとするもあれど〔三二〕別に問題とする要なからん。部名はその部主が他に比して博學多聞なりしによるならんが、その博學多聞といふは、單に佛教教理のみに限らず、一般外道思想をも含むやも知れず〔三三〕。又根本分派

錄には、「高倶梨柯部亦は高倶胝柯部と言ふ」とあり。此は Kaukkulika と Kaukkuṭika と兩方を出だせるなり。秦譯の窟居部は、音譯なるやも知れざれど、或は Gokulika の Go を地の意とし、Kuli を居家の意として地に居家する者の意とし窟居部と譯せしに非ざるか。

【三〇】此の部の宗義に關しては部執疏に詳し、(三論玄義檢幽鈔五、六九所引)それによれば、論を重んじ經律を以て方便教なりとして輕んず。律については頗る自由主義なり。

【三一】述記參照。

【三二】前表參照。

【三三】部執疏の記事は此れを示すものに非ざるか、卽ち三論玄義檢幽鈔五、七三に「佛在世時一阿羅漢有り、祠皮衣と名づく。昔仙人と作り、樹皮衣を被、以て天を祠る故なり。後に出家して佛說法に隨つて皆能く誦持す。佛未だ涅槃せざるに、雪山に住し、坐禪して佛の滅度を覺らず。滅後二百年中に至つて雪山從り出でて央崛多羅國に至り、同行人

の際の四衆の中の多聞衆なるものと、この部とは關係ありや否やは不明なり。

4、說假部(Prajñaptivādin)＝巴 Paññatti は亦大衆部の一派、教理については本論及び Rockhill, p. 189 參照〔二四〕。婆沙論等に分別論者曰として屢〻出づるは、此の部の說を指すこともあれど、又他の種種なる說をも指す。思ふに婆沙論にて分別論者といふは、一般に自派の說と相反する說をいふ時に用ゐし語にて、必ずしも特定の一部一派を指すものに非ざるべし。又此れを Vibhajjavādin と關係せしめんとせば、そは全然非なり。

5、制多山部(Caitika, Caityika, Caityaśaila)＝巴 Cetiya は(七)に存せず、(八)の摩訶提婆部は是れに當る。蓋し阿育王の時、傳導師大天が Mahisamaṇḍala に行きて開きし大衆部の一派なり。今のキストナ河畔ベヅヴワダ(Bexvada)市の對岸なる支提山は卽ち此の部の根據地なりしなるべく〔二五〕、部名は此の山名に因りしなるべし〔二六〕。

6、西山住部(Aparaśaila 又は Avaraśaila)＝巴 Aparaselika は(五)(六)及び(八)に缺く、〔二七〕、又異部宗輪論の陳譯にも缺く、恐らく此の部は前のより分出せし一派なるべく、前記支提山の西北方なる山に大衆部の遺跡存するより見れば、此の山は卽ち是の部の根據地なりしなる可く、支提山より指して西(北)方に當るより西山住部と稱せられしものか、此の部は次の二部と共

な尋ね覓む。云云」とあり。祠皮衣仙人とは卽ち Yajñavalkya 仙のことならん。此の人はウパニシヤドに屢〻出て來る有名なる哲學者なり。多聞部の部祖を此の人と關係せしめんとせしものの如く、若し然りとせば、卽ち此の部が佛教のみならずウパニシヤド哲學等にも通ぜるを示せるに非ずや。而して Yajñavalkya を祠皮衣とせるは文字通りに譯せるなるがそれを樹皮を被て天を祠るものと解するはやや無理あり。むしろ此の語の意味は、Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad 1, 4 の際に於けるシヤンカラ阿闍梨の註に從ひ、祭祠を說く者の意とし、そが始め職掌の名なりしが後にその家系の名となりしものならんか。

〔二四〕 Kathāvatthu の覺音の註には此の部に關し何等說かず。

〔二五〕 支提山(Caitya-giri)なる山は印度には他にもあり、例へば、サンチ附近にあるものの如し。されどここにいふ支提山はそれ等他のものの何れにもあらざるべし。

〔二六〕 此の山名 Caitya(殿堂、又は個人の靈の意)は大天の行きし以前に存せしものか、或は大天行きし後に名づけられしものか明ならず。

〔二七〕 (六)には此れに當るものあるやも知れざれど、質多羅と末多羅との何れを當つべきや不明。

に比較的後世の分出なるより(五)(六)及び(陳)に記載せられざりしなる可し。

7、北山住部(Uttarasaila)は(一)に有るのみにて他の諸傳になし。されど此れに當る一部の存せしは認めざるべからざるべし(二八)。

8、Pubbaselika(東山)=華 Purvasaila)はやはり前二者と同じく制多山部より分出せしものなるべし(二九)。

9、Rājagiriya(王山)は南傳と(四)とにあるのみ。

10、Aparājagiriya(西王山)は南傳にあるのみ。

以上の二派は北傳の多くに見られざる所なるが、恐らく此等は南方に於て、然かも比較的後世に起りしものなるを以て、北傳に知られざりしならん。又或は前に記せし如く、(一)の北山部に當るやも知れず。

11、Siddhattha(義成)も南傳のみ此れを知る。北傳是れを記せずと雖も部が存せざりしにはあらざる可く恐らく前二部と同意味に於て北方に知られざりしならん。

以上東山、西山、王山、西王山、義成、を總稱して南傳にてはアンダカ派(Andhaka)とす、蓋し是れ等は皆アンダカ地方に起りしものなるを以て、地方名より名づけられしものなり。

12、雪山部(Haimavata)=巴 Hemavata は(一)は本上座部が雪山に行きしより名づけられしものとし本上座部と同一と見るか若しくはその一派と見る(秦譯)。(五)も亦上座部の一派と見れど、(四)、(七)は大衆部の一派とし、南傳は何れに屬すや明ならず。恐らく此の部は早く雪山地方に行き居りし上座部の徒を地方名によりてかく名づけしなるべく、其の敎理は元來特殊なるものなかりしならんが、後に大衆部に影響されし點少からざるに至り(三〇)一部の者よりは大衆部と目せられしならんも本來はやはり上座部なるべし。從つて部名の起源は比較的古きもその特別の説を立つるに至れるは比較的後世なるべし。

【二八】或は(二)の Rājagiriya 又は Aparārājagiriya (四)の Rājagiriya は是れを指すやも知れず。現存アマラバチーの遺蹟は或は此の部のものならんか。何となればその地は支提山の遙か北西方に當るを以てなり。

【二九】(二)(三)(四)にあり、(一)(五)(六)(八)に缺く。(一)は其の名を知らざりしなるべく、(五)(六)は前二者を舉げざるを以て此れも准じたるべく、(八)は不明。現今ベッヅダ東方山より遺物出でしといへば、そは卽ち此の部のものならんか。

【三〇】本論第二部第七章參照。

13、化地部(Mahiśāsaka)＝巴 Mahiṃsāsaka は(一)(七)(八)は有部の一派とすれど、南傳は上座よりの直接第一分派として Vajjiputtaka と並べ、(四)、(五)、は Vaibadya-vādin の一派とせるより見、及びその律たる五分律が最古律とせらるる巴利律文に最も近き點よりして、此の部の分出は最も早き時代に屬するものなるべく、有部より出づとせるは有部の徒が自派を古からしめんとせしによるものならん。又異部宗輪論に見ゆるが如き教理は無論後世のものなるべし。部名の起因については述記に或る國王(土地を化する者)が出家して開きしによるとす。されど Mahiśāsa を人名とするは信じ難く、さればとて述記の說も亦甚だ漠然たり。眞諦三藏は部執疏に、(三一)國師正地なる人出家して開きしによるとす。或は西印莫醯河(Mahī)一帶を敎化せし部といふ意に非ざるかとも思はる。(三二)バブヤは又奇異なる說を擧げ居れり。

14、犢子部 (三三)(Vatsiputriya)＝巴 Vajjiputtaka、是の部は上座部より直接に、且つ最も早き時代に於て分出せしものなることは(一)及び(七)を除きたる諸傳の一致する所なり。(三四)而して本文に揭げらるるが如き宗義は比較的發達せる後のものなるべし。さて此の原名は梵にては Vatsiputriya 巴は Vajjiputtaka なるが、Vatsi は巴にては普通 Vacchi となる、その Vacchi が再び轉じて Vajji となること或は無きにしもあらざるべきも、そは極めて異例なるべし。若し假りにその事ありとするも、かくして生ぜる Vajjiputtaka は梵 Vrjiputriya より轉ぜるものとは異る。そこで此の原名が Vatsi の方なりしか Vrji の方なしかを定めざる可からず。Vrji の方とする時は前の十事非法提唱者と同一族となるが、此の方を認めしむる根據は甚だ薄弱なり。人あり曰はく、彼の摩訶僧祇律は犢子部のものなり、犢子部のものとして見る時は七百結集の所にバッジー族の十事非法の事を記せざるは、卽ち後の同族より出でしバッジー族部が自己の祖先にかかる非法を行ぜし者あるを恥ぢて故に其の點を消去せしに由ると併せられ、從つて犢子部なるものはバッジー族(梵 Vrji—)より出でしものなることの反證なりと。されどその摩訶僧祇律を犢子部のものとすることは種種の點より考察するに信じ難し、從つて余は右の說を認め得ず。況んや第二節に於ても述べし如く、此の律にバッジー族の十事非法を記せざるは、そが大衆部の律なることよりしても認め得るに於てをや(三五)。次に、若し時の者有上座

【三一】三論玄義検幽鈔六ノ七。
【三二】Rockhill, p. 185.
【三三】又は Vātsīputrīya
【三四】(一)は有部の末派とす、(七)は正量部の末派とす。何れも偏見なるべし。
【三五】附錄第二節參照。

に對して反抗したる Vajji 族の比丘の族系より後に至り一部を生じ、然かもそれが上座部系統なりといふことは、何等かの理由なくしては有り得ざることなり。然るに南傳にて同じく兩方共 Vajjiputtaka とすれど後のものが何故に上座部に屬するかにつき、何等の說明をなし居らず。是れ理由を知らざりしが爲めに非ずして、むしろ本來別系統なるが爲めに特に說明すべき理由の存せざりしに由るなるべし。而して北傳にては常に Vajjiputra とは區別して用ひ居り(三六)、Vatsiputra は部主の名とせり。以上により惟ふに、南傳の Vajjiputtaka といふは音が相似たる所より誤りて傳へしものか、或は Vatsi が Vacchi となり次に轉じて Vajji となり Vajjiputtaka となりしものか、但し後者の場合は殆ど有り得可からずと思はるるを以て前者と見るを至當とせん。次に漢譯にては秦唐共に犢子部とし、陳は可住子弟子部とし、藏譯亦陳譯に近し。Vatsi は雌犢の義なれば Vatsiputtaka を犢子部と譯すには當れり。然るに可住子弟子部とせるは Vas(住す)の未來語基 Vatsya に關係あるものとし、Vatsiputra を Vatsyāyana と同義と見て可住子とし、從つて Vatsiputra を可住子弟子部とせるに非ざるか。然し犢子と解する方穩當なる可きは言を俟たず。されどその犢子とは何人を意味するやは殆ど不明なり。述記の說は捏造せられたる俗傳に過ぎざる可く(三七)、眞諦の說やや信ず可きが如しと雖も猶詳ならず(三八)。或はヤムナー河畔 Kosambi 市を中心とする跋蹉(Vatsā 巴 Vacchā)國の徒の意か。或は母がその族より出でしものの意か。或は佛在世時佛門に歸依せし犢子外道を指すか(三九)。或はその他か何れとも判定未だつかず。

15a 、說因部(Hetuvādin)、(一)は說一切有部の原名、南傳兩史には是の名無く、論事の註には有部と別の一派とし、(三)には別出すれども(四〇)、ターラナータの是れに當る表には缺き(四一)、其の他の諸傳に皆缺く。蓋し根本分派以後論藏次第に興り、その氣運に於て從來上座が經を重んぜしに反し論を重んじ、凡ての說明に必ずその因由を示さざれば止まざるもの等一派をなし、說因部となりしものか。而してその說が一切有なりと說くより又說一切

【三六】述記部執疏共。
【三七】述記には、「昔仙人有り、母牛に染し子を産む云云」と。
【三八】三論玄義檢幽鈔六ノ五所引、先づ傳統を擧げ、舍利子—羅睺羅—可住子とし、且つ、「上古仙有り、可住と名づく、今此の律主の母是れ彼の種なり、母に從つて姓となす云云」と。
【三九】ターラナータ佛教史四四に、提地迦(Dhītika)と同時代に我論外道より歸化せし Vatsiputra なる者あり、或は之れを祖とするやも知れず。
【四〇】且つ是れを又 Muduntaka, Muruntaka と稱すと。
【四一】Schiefner, S. 271.

有部の名を得たるものか。後には後者の名のみ知られ前者の名は忘れられしなるべし。分出年代はかなりに古く、阿育王以前なるべきも、論義の相當興りし後なる可きを以て前三部よりは後なるべし。現今異部宗輪論に於て見る有部の教理は無論後世次第に發達して成れるものなるが、その基礎を固めしは迦旃延子が發智論を作りしによる。此の迦旃延子の年代は明ならざれども、(四二)先づ佛滅三百年後と見るを穩當とすべきか。然れば此の部は阿育王前即ち佛滅滿二百年頃迄に分出し、佛滅三百年後の發智論の出づるに及び益益基礎固くなり。遂に西北印度に興隆するに至りしものならん(四三)。

15b、說一切有部(Sarvāstivādin)=巴 Sabbatthivāda(前說)

16、法上部(Dharmottarīya)=巴 Dhammuttarika は以下の三部と共に犢子部より分出せしものなることは諸傳の一致する所にして信じ得。部名は部主の名を法上(Dharmottara 法尚)と稱せしによるとは述記及びバブヤの一致する所、亦かく信じ得。されどその法上なる人は如何なる人なりしかは明ならず。

17、賢胄部(Bhadrayānīya)=巴 Bhaddayānika 此れ亦部主の名に依りしなるべく、賢胄とせしは賢(Bhadra)の苗裔(Ayana)の意とせるにて、賢乘とせしはその原文が Bhadrayānīya なりしなるべく、そは巴利文にも合す。何れを正しとすべきや不明なり。

18a、正量部(Sāṃmatīya, Sammitīya)=巴 Sammiti は述記所說の如く、所立の法正量なるが故に名づけしなる可きか、その原音は(四四)Sammitiの方なるべし。文殊問經に一切所貴部とせるはSammatiの方なるべし(四五)。バブヤが部主の名 Sammataなるによるとせしは疑はし。

18b、Avantaka 此の名は他の傳に存せざれども(一)に正量部の別名として、(七)には正量部の本説として出だす。又、文殊問經に高山部(雲林山部の事)より出でたるものとして大不可棄部なるものあり、是れ Avantaka を Ava-na-ka(棄てられざるもの)と分析して譯したるならんか。而して正量部と此の部とは本來同一部にして、正量部はAvanti(即ちUjj-

【四二】婆藪槃頭傳に佛滅五百年とあるは「義疏」によるに五は三の誤寫ならんか。倶舍光記は佛滅三百年末とし、述記は三百年初とすれど、そは第三世紀初の意か、又は三百年後の意か明ならず。然し佛滅第三世紀に在りしや否やは甚だ疑はし。

【四三】南方にては此の部最も有力なりしなるべきは覺音の論事の註により知り得べし。

【四四】Sammiti, Sammita は「量」又は「量られたる」の意。

【四五】Sammata は「許容せられたる」又は「尊敬せられたる」の意。

ain)を中心としてナルマダ河(Narmada)以北に盛なりしにより(四六)、其の地方名によりて Avantaka と稱せられしなるべく、そが後に至り別部と目せらるるに至りしものならん。(Wassiljew. S. 75 參照)

18、Kurukullaka, Kaurukullaka は亦同樣、而してターラナータは是れを正量部と同一と見居ることは正量部のあるべき所に是れを置き居ることによりて知るべし(四七)。部名は地名Kurukullā より出でしなるべし。

19、密林山住部は巴 大史の Chandāgārika に近く、梵 Ṣaṇṇagarika 巴 島史 Channāgārika は六城部と譯すべし(四八)。何れが原名なりしや明ならざるが、現存の梵文には六城といふ方多數なれども、眞諦は明に部執異論附記に山陀伽梨訶とし、文殊問經には 芿山部と譯せり。唐陳兩譯の原文亦 Saṇḍāgārika なりしこと疑なし。六城といふは一所に六城有りし意か、或は諸所に散在せし大城の内の六の意か。若し一所にありしとせば何處なりしか明ならず、若し又諸所にありし六城なりしとせば、相隔てて存在する六城より一部の部名を生ずるは甚だ奇怪といふ可く、從つて六城部とせるは原文の誤ならんかと思はる。次に密林山住部の方を取るとして、そは何處なるか、私考するに、此は阿育王の時の傳導師 Rakkhita の行きし Vanavāsi(林住の意)地方に非ざるか。

20、法藏部(Dharmagupta)=巴 Dhammagutta, (一)(二)は化地部より、(三)は上座 より、(四)(五)は Vaibādyavādin より、(六)(七)(八)は有部より分出すとす。部主は 恐らく 阿育王の時今のボンベーの 北方アパランタカ(Aparantaka)地方に於ける 傳導師たりし臾那人(Yona)Dhammarakkhita(Rakkhita は Gupta と同じ意なり)なるべし(四九)。舍利弗問經には目犍羅優波提舍が此の部と(五〇)蘇婆利師部とを起すとあり(五一)。此の目犍羅優波提舍(Moggalla-upatissa. Moggallāyana-upatissa)なる名は佛弟子の目連と(五二)舍利弗とを組合せて作出せるものなることは見易き所なるが、そは果して 何

【四六】 西域記卷十一參照。

【四七】 Wassiljew, S. 254, n. 參照。

【四八】 (五)には此等の代りに Mahāgiriya (大林)を擧ぐ。これ密林山住部に當るやも知れず。而してその次に或曰として六城部は此の一派なりとあり。

【四九】 現存ソーパラ(Sopāra)の崖刻銘は彼れの布敎地を示すものならん。

【五〇】 蘇婆利師(Suvarṣa)は迦葉惟部の別名なること後に說くが如し。

【五一】 寒十、十八右。

【五二】 舍利弗の字名を Upatissa と稱せしこと前記第四節註一四參照。

人を指すか。此の名に最も相近きは南傳の阿育王師とせらるる Moggaliputta-tissa なり。即ち余思ふ Moggaliputta-tissa は Moggallāyana-upatissa の轉ぜしものなりと。是れよりして南傳の Moggaliputta-tissa は元來一固有名詞にあらずして稱號として假作せられたるものにして、その(五三)原形は Moggallāyana-upatissa なりしを知る。舍利弗問經は全體としては信を置き難き點少からざれども、或は法藏部の部主 Dhammarakkhita は所謂 Moggaliputta-tissa に師事せしことあるやも知れず(五四)。若し然りとせば、Moggaliputta-tissa は上座部なるを以て(三)は正しく(五五)、又 Vaibādyavādin は後に述ぶる如く、元來上座部と別物に非ざれば、(四)(五)は要するに(三)と同一となる。其の(六)(七)(八)が有部よりとせるは偏見によりしなるべく、こは容易に上座部に變へ得。その化地部より分出せりとなすは教理上より判定したるに由るか(五六)。要するに此の部は臾那人なる法藏が西印地方に布教し、その地方的感化を受けて(五七)呪文等をも他派よりは特に重んずるに至りて遂に一派をなししものにて、從つて特に何部より分出せりといふが如き傳統は明ならざるが當然にして、宗輪論等が目連を祖とせるが如きも此の間の消息を示すものに非ずや。其の教理に於ては大衆部に影響されしと見る可きもの多し。

【五三】 此れが阿育王師 Upagupta を指すものなることにつきては附錄第四節ノ三、參照。

【五四】 善歲部の部主は迦葉の弟子とす、然し是れ又直接には所謂 Moggaliputta-tissa に師事せしものによるやも知れず。

【五五】 二三參照。

【五六】 述記には、此の部師は經、律、論、呪、菩薩の五藏を説き、化地に背きて一部を立つ、他人信ぜざるが故に目連を引いて證となすと。而して、宗輪論がその教理を説く點に於て化地部との關係を見るに、化地部が僧中有佛、施僧獲大果、といふを、僧中有佛、然別施佛果大、非僧、とし、又化地部が佛與二乘同一道同一解脫といふを、佛與二乘同一解脫異聖道とせり。

【五七】 呪文を重んずるといふ點に於て後の密教と關係あるが如し。後世善無畏三藏が那爛陀寺に於て會せりといふ達磨掬多は此の部名を代表する高僧の一人なりしか、密教にては此れを印度にては龍智セイロンにては普賢阿闍梨といふと傳ふ。

21a 、善歲部(Suvarṣa)、南傳には此の名無けれども、部は飲光部(Kāśyapīya)と同一なればあるなり。その傳統も有部より出づとせる點

北傳(一)(六)(七)に合す。(三)は上座部より、(四)(五)は Vaibadyavādin よりとす【五八】。要するに此の部も確に何部より分出せりといふことなき爲め、是れを上座部に歸し、有部の徒によりては有部に歸せしめられしなるべし。部名 Suvarṣa は善歳の意とするよりも善雨の意とする方よろしからん【五九】。此の部は又部主の姓によりて迦葉惟(Kāśyapīya=巴 Kassapika、意譯して飲光)部と稱す【六〇】。恐らく此の部は阿育王の時雪山地方に布教せし迦葉惟によりてその地方に起されしものならん【六一】。彼れは所謂 Moggaliputtatissa に師事せしことあるやも知れず、法藏部主亦然りとせば【六二】、法藏部と此の部との教理上の聯關は即ちその師を通じて生ぜるものに非ずや。

21b 、飲光部(Kāśyapīya)=巴 Kassapika(前說せり)

22a 、說轉部(Saṅkrāntika, Saṅkrāntivādin)=巴 Saṅkrāntika。此の部は述記によるに、一種子現在相續して轉じて後世に至ると說くより說轉部と稱し、又、當時有部等があまりに論を偏重せしに反し、經を重んじ經に依つて正量と爲すより經量部(Sautrāntika=巴 Suttavādin)と稱すと【六三】。又バブヤによるに、その部主を Uttara と名づけしより Uttarīya と稱すと。又ターラナータによればその部の長老に銅色衣の者ありしより Tāmraśāṭīya (Tāmra は銅の、Śāṭa は衣)と稱すと【六四】。又述記によるに此の部は經を重んずるより經の結集者なる慶喜(Ānanda 阿難)を祖とすと【六五】。之れを要するに說轉部と經量部とは同一部の如く又異部の如く見ゆるが兩者の關係如何。兩方を明に同一と見居るは(一)のみにして、(三)(七)(五)は說轉若しくはそれの別名を擧げたれど

【五八】 (四)(五)の Vaibadyavādin は前に準じ上座部となし得。(八)は有部の下には蘇婆利師部とし、上座部直系として又迦葉惟部を出せるが、此は同一異名を各別の派と見て、又その傳統にも兩說ある所より起れる誤謬ならん。

【五九】 述記には、此の部主少歳より性賢、德有りしかば善歳と名づけられしによるとすれど、バブヤは(Rockhill, p. 18)此の部の徒は法の慈雨を降らししによるとし、(三)に、Saddharmavarṣaka(正法雨)を此の部名とせるより見れば善雨の意に解する方よし。

【六〇】 Kāśya を「光」、Pa を「飲む」と解して飲光と譯したるものなるが、本來 Kāśyapa は Kāśyapa 仙人を祖とする姓の事にて、飲光と解するは失當なり。而して Kāśyapa は古來印度の語源學によれば Kāśya(酒)を飲む意とせる。

【六一】 前節參照。

【六二】 前記法藏部の條參照。

【六三】 南傳には別部とし、說轉部より分出せるものとす。(八)は兩部を併出す。

【六四】 Uttara と此の銅色衣長

も經量の名を出ださざるが、そは經量と同一なりとして出ださざりしか、或は經量の名を知らざりしによるか明ならず。他の表は皆別出す。思ふに本來一つのものなりしならんが、次第に經量を特に主張するもの一派をなして經量部と稱せらるるに至りしものに非ずや。此の點に於て(二)は最も眞に近かるべく、(四)は經量部の置き場に窮して大衆部下に附したるものならん。次に Saṅkrānti と Tāmraśāṭiya とは本來同一異名なりしならんが後に別部と見られ(五)(六)の如き表を出だすに至れるならん。

22b、經量部(Sautrāntika)＝巴 Suttavāda(前說せり。)

22c、Uttariya (三)にのみ見ゆ。(前說)。

22d、Tāmraśāṭiya(前說)。

23、Vibhajjavādin (六六)は南傳には部名としては存せざれども Vibhajjavādin なる語は Moggaliputtatissa が自らの奉ずる佛敎を指す時に用ゐられ居る(六七)。即ち Vibhajjavādin とは元來部の名に非ずして、諸外道に對して正系佛敎を簡別していへるものに過ぎず。而してそが曾て Moggaliputta が奉ずる上座部を指すこととなりしなり。故にその上座部と Vibhajjavādin とは同一物なるも、Vibhajjavādin は決して上座部の別名として用ゐられしに非ず。元來 Vib-

---

老と同一人なるや否や明ならず、(Wassiljew, S. 256 參照)

(四)(五)(六)(七)は即ち Tāmraśāṭiya とす。但し(六)は同時に Saṅkrānti をも擧げ、(四)は Saṅkrāntivādin を大衆部の末派中に出だし、(五)は之れを有部より直接に出だし、Tāmraśāṭiya を Vaibadyavādin より出だす。

【六五】 Wassiljew, S. 256 には阿難の代りに Dharmottara 又は Uttaradharma とす。こはバブヤの云ふ Uttara のことなるべく、而して法上部の部主 Dharmottara とは別人なるべし。或は尊稱語としての上人又は法上人の意にして、阿難をかく呼びしによるやも知れざれど、それとすれば Uttariya なる部名の生ぜしは甚だ解し難し。又述記發軔によるに、經部に三種有り、一、根本即ち鳩摩羅多を祖とすると、二、質利羅多を祖とすると、三、唯汎く經部と稱するとなりと。今此等に關し立入りて論ずるの暇なし。

【六六】 北方文には Vaibhajjavādin, Vaibādhyavādin, Vaibadyavādin 等書す。

【六七】 第三結集の前、阿育王寺に賊住異端比丘多く、佛敎を亂す。王は Moggaliputtatissa を招き、此等異端比丘を排除す。その時諸異端比丘に各自の奉ずる說を唱へしめし後、王は Tissa に佛敎は何なるかを問ひしに對し、答へて、Vibhajjavādin なりと。

hajjavād、といふ語は、巴利文の中阿含九九等(六八)に見ゆるが如く、外道等の總體論者（Ekaṁsavādo）に對して、釋尊が自らは分別論者（Vibhajjavādo）なりと說かれたるに基き、Moggaliputtatissa は是の語を借り來りて諸外道異端に對して正系佛教は Vibhajjavādin なりといひしものなるべし。然し後に至り、上座部特に Moggaliputtatissa の系統の上座部は他派の者によりて Vibhajjavādin なりといはれしことあるやも知れず。然かもそれ自身には別に部としての特徵は存せざりしなるべし。西藏の史家がその名を聞き傳へて、一部派の存するものと思ひ、然かもその特徵の明ならざるより、その所屬に迷ひ、或は上座大衆と並立するものとし、(四)、或は有部の一派とし((五)(六)(七))、或は上座直系とし((三))、然かも何れの場合もその宗義を明記せざるは(六九)全く右の事情に因るものならん。而して元來上座部と別物に非ざることは(四)(五)に於て、是れより分出せる化地法藏飲光說轉が(一)及び(二)(八)に於て直接若しくは唯有部を通じて上座部より分出せるものとせるによりて知らるべく、又此の部を有部より出でしとせるは有部の勢力の盛なるに影響されしによるべし(七〇)。

24、Dhammaruci は南傳にのみ存し。セイロンに起りしものといふ外何等記載無し。

25、Sāgaliya 亦然り。

26、Jetavanīya は(七)に上座部の一派としてあるのみ、こは亦セイロンに起りしものならんか。

【六八】 M. N. 99. に、一般に家居者が解脫を得るや、出家者が解脫を得るやの問ひに對し、釋尊答へて、「余は Vibhajjavādo（分別論者）なり。Ekaṁsavādo（總體論者）に非ず」と云ひて、出家なりとも如法に修行する時は解脫し、若し然らざる時は解脫せず。出家なれば總べて解脫せずとか、在家なれば總て解脫すとかいふにあらずと。又、A. N. 1. 197 にも四答法の第二として、徴細に分折して答ふる法を說けり。

【六九】 パブヤの第一說のみやゝ是れを記せども、そは要するに想像によつて作りしものならん。

【七〇】 猶 Vibhajjavādin の事に關しては The Kathāvatthu, Introduction Mrs. Rhys Davids, XL—XLI ; Oldenberg, Vinaya-Pitakam, Intnrod., XLI—XLII ; Kern, Manual of Buddhism, p. p. 110—111 ; Geiger, The Mahāvaṁsa, p. 281 參照。

27、Abhayagiri 亦然り。而して此の部はセイロンに於て次の部と大に相爭ひし時代あり。

28、Mahāvihārā こは亦(七)にのみ存す、セイロンの上座部を指すものにして、一時前の部と爭ひしが後遂に之れに勝ちしが如し、かの覺音は此の部の者ならん。

以上によりて余の揭げし表中の各部について說明を終りしが、猶右表の何れにもなく、Kathāvatthu の覺音の註にのみ存するものとして二あり。

29、Uttarāpathaka(北方地方者)、是れの宗義として覺音は相當詳しく出せども右廿八部中には是れに相當するもの無く、恐らくこは後世に於て上座部が大衆部及び初期大乘の影響を受けて生ぜしものなる可く、然かもセイロンの教徒によりてのみ知らるるものならんか、或は是れが Andhaka と共通する點少からざるより、及びその名の上よりして(一)の北山住部に當るやも知れず。

30、Vetulyaka 是れは大空宗(Mahā-suññavādin)の一部として擧げ居る以上已に初期大乘、或は小乘と大乘との過渡期のものと見る可く、從つて右諸傳に無きは當然なり。

以上記載及び論述せし結果を左に概括すれば、

一、右卅有餘の部名中、諸傳殆ど一致して小乘分派として認めらるは、大衆部中、1、2^{ab}、3、4、5、の五部、上座部中、13、14^{ab}、15、16、17^{abc}、18、19、20、21^{ab}、22^{abcd}、の十部なり。是れに根本上座大衆を加へて計十七部なり。南傳は22の a と b とを別けて十八部とし、世友の論の秦譯は2を a b に分け6、7、12、を加へて廿一部を數ふるも名は十八部論とし、陳譯は2を a b に分け7を加へて十九を擧げ然かも總數を數ふる場合には7を5に含ましめて十八とす[七二]。唐譯は2を a、b に分け、6、7を加へて廿部とす[七三]。文殊問經には2を a b に分ち4を缺き、8 12を加へ、本末合せて廿部と稱す。右の外(三)及び(六)も本末合せて廿部とす。右を案ずるに古來分派を論ずる者多くは十八若しくは根本を加へて廿部とす。古來印度にては分派といへば何敎によらず十八

[七二] 或は眞諦の意は根本大衆を除去し7を數へしなるやも知れず、述記及び義林纂註はかく解す、余は譯文に從ひしのみ。眞諦の意にては十二を本上座より別出せしめ上座部の末派十一、大衆部の末派七として十八の數を出せしならんか。

[七三] 總列を擧げる場合には上座部を數へずして雪山部を數ふ。

といふ定數を唱へしものの如く（七三）、而してそれには何等か理由有りしならんも余は未だそを求め得ず、又その十八といふ數は何故に於て創唱せしやも明ならずと雖も、兎に角分派といへば直ちに十八といふ數を持ち出せし習慣ありし如し。佛教の右諸傳の凡てが必しもその習慣によりしものとは云はれざるも、少くもその主なるものは此の定數を顧慮せしには非ざるか。而して正しく十八の數を得ざる場合には强ひて十八とせんとする傾向の存するを見るべし。十八部論といふ名稱、眞諦が總數を擧ぐる時に十八部とすること、南傳が本末を合せて十八とせること等は皆是の定數に從ひしものにして、述記に於てその定數のことに氣づかずして廿部ならざる可からずとして烈しく眞諦及び文殊問經を攻擊せるはむしろ愚論といふべし。

右十七部以外のものは或は同一異名、或は時代の推移と地方的分布との爲めに次第に加はり行きしものにて從つて諸傳區區なる所以なり。而して後世玄奘渡天の頃に至る迄も相當の勢力を有し居りしは正量部、有部、上座部、大衆部なることその記事によりて明なり（七四）。

二、分派の年代について、異部宗輪論は大衆部は凡て佛滅滿二百年以前、上座部は凡て以後とし、南傳は十八部は佛滅滿二百年以前とし他は以後とす、舍利弗問經の何百年中といふを何世紀の意と解すれば異部宗輪論に大體合す。バブヤ第三說は如何なる根據によりしか明ならず。其他は年代を明記せず。思ふに異部宗輪論等が、大衆部は全部滿二百年以前、上座は全部それ以後とするは偏見なる可く、又南傳が十八部全體二百年以前とするも亦やや誤れるか。余の意見を以てすれば阿育王以後――詳しくは彼れが地方に佛教を宣傳せしめし以後――と以前とに於て大體區別さる可しと思ふ。即ち大衆部中1、2、3、4、上座部中（七五）13、14、

【七三】勝論、數論等皆然り。

【七四】義淨は南海寄歸傳に於て當時印度に於ける小乘諸部は、上座部三、有部四、正量部四、大衆部七計十八部とし、玄奘の西域記に於て、小乘部中行はれ居るは、正量部十四國、有部十二國、上座部六國、大衆部二國、說出世部一國なり、（堀氏、解說西域記一〇七九頁）Kathāvatthu の覺音の註によれば、最も詳しく出せるは正量、大衆、アンダカ、【Uttarapathaka】なり。而して上座部は自宗なるを以て常に顯揚せるは勿論なり。大乘玄論等には五種の律に配せる五部（法藏、有部、化地、迦葉惟、大衆又は犢子）を以て十八部中の最も盛に行はれしものとすれど、事實然りしや否や疑はし。

【七五】13、14、は最も古く、15はやや後れて出でしものなるべし。

18、並びに上座部の一派とせらるる12はそれ以前に於て分出せしものなるべく、大衆部中5、上座部中16、以下22迄は阿育王の弘法後久しからざる後に於てその傳導師の說と及び地方的色彩の感化とによりて起りしものなる可く、大衆部中6、(7)、8等はそれと間もなく5より分出せしものならんか。而して他の諸部は猶遥に後れて分出せしものか然らずんば單に一地方のみに知られしものならん。

國譯異部宗輪論附錄 終

大正十年四月九日印刷
大正十年四月十二日發行
昭和三年三月十五日再版發行
昭和四年五月十五日三版發行

國譯大藏經 論部第十三卷

【非賣品】

（岡山製本）

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五五番）（八三三八番）
振替東京一八五七二番

